

*Stone Kingdom*

# 石人の物語



三界の扉



## 序章

暦の上ではやがて春を迎えるとはいえ、城の中庭は冬の名残にひっそりと打ち沈んだままだ。空は青く澄み渡り、白く冷たい太陽の光が、レンガ壁を這う枯れた蔦と丸裸の貧相な木々のうらぶれた様子を照らし出している。

国王は二人の兵士を従えてそんな庭を通り過ぎ、会議室へ向かっていた。二人の兵士はそれぞれに軍旗を持っている。

冷たい風が吹いた。わずかになびいた旗は、血と焼け焦げでぼろぼろだった。

「もはや、この国が滅びるのは時間の問題だ」

ディクレス国王は集まった家臣達を前に、そう告げる。王の声は老いてなお、力強い響きを保っていた。旗がもたらした知らせにうつむき加減だった家臣達は、顔を上げる。たとえ耳にする言葉がこれ以上ないほど絶望的な状況を告げるものだったとしても、王の声は耳を傾ける勇気を呼び覚ます。壁にかけられた無残な旗と、その前に座る王の姿が、彼らの目に入った。

会議机の上には、この国の地図が広げられていた。それは、このような小さな国には不釣り合いなほど、高度な技術で精密に作られたものだ。窓からの光にわずかな紫を照り返す真新しい漆黒の線が、アークラント王国の川や森、山々をもらすことなく描き出している。王の右手が地図の上をよぎり、家臣達の視線がそれを追う。

「南は険しいオロ山脈。そして北東のエカ帝国、北西のハイディーン王国。我が国はいずれの大国によって、手を下されるのであろうか。この旗を見よ。すでに精鋭であった第二、第四軍団はない。残された兵力で国を守るのは不可能だ。我らはこの旗と同じ運命をたどることになるだろう」

王は胸を痛めて言葉を切り、地図に目を移した。このアークラントの南、オロ山脈の先には「人間世界の果て」と書かれた境界線があり、その先はまったくの白紙になっている。

王の隣に立っていた長いひげの老人が、杖の先を地図の真っ白な部分に置いた。彼は王室付きの魔法使いだ。

「この先は石人<sup>いしびと</sup>らの土地です。七百年前の誓い以来、我ら人間は彼らの許しなしに立ち入れないことになっております。それはともかくとして、さて、いかがなものでしょう？」

魔法使いの老人は王に頷くと、一同を見渡す。

「石人の話は、聞いたことがあります。七百年前の誓いとやらも」

会議の行方をはかりかねて、大臣の一人が頼りなげに漏らした。魔法使いは頷いた。

「石人どもは魔法の力溢れる土地に住んでおり、そのような土地は人間が暮らすには不向き。互いに住み分け、また相容れることも無く、七百年が過ぎました。人間が彼らのことを忘れてしまったのは、当然です」

王子が頭痛でもするように眉間に皺を寄せ、目を閉じたまま発言する。

「私は幼い頃のおとぎ話に、石人という言葉があったのを記憶している。乳母の曾祖母が、その昔、市場で行商人から仕入れた話だと言っていたが、で、その石人とやらと、我が国の存亡と

、どういう関係があるのでしょうか。まさか陛下は、奴らの土地に『希望』を見出そうとお考えか」

「うむ」

国王の返事に、会議室は騒然となった。しかし王は強い調子で片手を上げ、ひと時のもとに皆を黙らせる。

「先月、我が城の書庫から、最も古い古文書が見つかった。そこには、七百年前に人間と石人とが戦いで争い、戦の終結とともに互いの土地を分かち境界線を定め、永遠に関わりあわぬ誓いを立てたとあった。戦は、人間がある宝を求めたゆえに起こった。それは石人が長い歴史の間に溜め込んできた魔法の宝であり、強力な力を持っていたという」

「陛下」

王子が、怒りを抑えた口調で割って入った。

「国を救う、もう少しまともな案をお聞きしたい。たからもの。ははっ！ 子どものおとぎ話をする以外、我々にできることはないとでも？」

「まともな案については、もう話し尽くしたはずだ」

王はうめくように答える。

「どんなに優秀な知力を持つ者だとて、もはやこの国を救えまい。いや、優秀な家臣達がいてこそ、我が国は今まで持ってきたのだ。これだけでも奇跡だったのだ」

王は二枚の汚れた旗を目の端にとらえ、指を組んで頭を落とした。

「それでは陛下は、石人の土地に奇跡以上のものを見出そうとお考えですか」

大臣の一人が尋ねる。王はそれにゆっくりと頷いた。

「あーあ……」

王子がうめき声とともに頭を抱えて、机の上に突っ伏す。隣に座っていた若い將軍の耳に、親父が変になった、という呟きが聞こえてきた。逆に国王は落としていた頭を上げる。

「あの夢見<sup>ゆめみ</sup>も、『石人の地に光あり。英雄が現れる』と予言した。絶望の闇に落ち行く今、我らはたとえ一筋の蜘蛛の糸でもつかまねば。いや、絶望の底を突き破り、その先を進まねばならないのだ」

「他によりよい案をお持ちであれば、喜んでお聞きいたしましょう」

王と魔法使いは会議室を見渡してみるが、誰一人口を開こうとしない。

「トゥリーバ……たかだか一年前にふらりとやって来た、流れ者の予言者ではないか。秋の大雨に次ぐ洪水や地滑り、はては敵の伏兵の位置を予言しただけで、一躍国の救世主扱いだ。その上、夢で見ただけのいい加減な言葉で国民や王までたぶらかす。英雄だって？ 誰のための英雄だ？」

王子のぶつぶつ言う声が聞こえてくる。もっとも、それを気にする者はいなかった。王子は魔法や予言の類を非常に嫌っていて、文句をつけなくては気がすまないのを知っていたからだ。

「かの地には、恐ろしい魔物が棲むと言われております。ある程度の武具は必要でしょう」

將軍の一人が、まだ納得しかねる様子であったものの、提案する。すると隣の將軍も口を開いた。

「人数もいりますな。さて、どう調達したものか」

「ところで魔術師殿、宝はどこにあるか見当はついているのですか？」

「おおよそは。ただし、トゥリーバを同行させるつもりであります。彼は先を見通す力を持ちますゆえ」

「やれやれ。予言者に、サイコロの目を当てさせるようなものですな。ははは、この際何だって利用してやりましょう」

他の家臣達も活気づいてくる。今までずっと、国王を信じてついてきたのだ。万策は尽きた。この先も王を信じ、共に賭けに出る以外にないのだ。

王子もついに、苦笑いを浮かべて体を起こした。

「もう、これは迷走だな。陛下、宝探しはようございしますが、王位はここに置いて行かれるよう。国王がこの時期、国外へ出ることはなりません。国民は、見捨てられたと思います」

「自ら今の国を背負うと申し出るとは、物好きな男だ」

王は無造作に、かぶっていた王冠を息子に手渡す。大臣らはオロオロとして、即位式は後ほどに、と言い添えた。

軍師の長が静かに、最後の意見を述べる。

「石人に襲われることでもあります。彼らに見つかることなく移動するため、かの地を熟知した者か、それとも手早くしかも正確に地勢を把握できる者を、連れて行かねばなりません。それから、魔法使いをできるだけ多く。石人は、大変よく魔法を扱えるそうですから、襲われればひとたまりもありません。しかし、わが軍の魔術兵は出せません。……雇うしかないでしょうな」

前国王ディクレスは、すばらしい地図に視線を落とした。

「土地については問題ない。この地図を描いた者達、地読み<sup>ちよ</sup>の民を使えばよい」

## 一章 黄緑の少女

---

まったく突然のことだった。

今年十三になる、ぼんやりしていていつも一つ上の兄に馬鹿にされ、要領が悪くてしょっちゅう損な役回りを引き受けるはめになり、失敗してまた叱られる、得意なものといえばせいぜい木登りという少年にとって、この状況で取れる最も良い方法が、逃げる以外にあったらどうか。キゲイはできる限りの速度で走りながら、何度も何度も空しく助かる方法を考えようとしていた。

「だーれーかー！ 助けてー！」

結局他の誰かに助けを呼ぶ以外にない。問題は助けが来るまでどう生き残るかだ。これも結局は、全速力で走り続ける以外にないのだが。

深い茂みの中に飛び込み、枝が体を引っ掻くのも構わず突き進む。深い森は夜に飲まれて闇に溶け、わずかな月明かりだけがキゲイの頼りだった。暗がりに潜む木の根っこに、足をとられて転べばすべて終わり。

キゲイが抜け出した後ろで、茂みが大きな音をたててペしゃんこになった。巨大な獣の脚が、ひとまとめに踏みじったのだ。その脚は力強く地面を蹴り、脚に絡まった茂みの木が幾本か根っこから抜けた。黒い大きな影が、無残な茂みの上を滑るように駆け抜ける。

こんな生き物、目にするまでは想像もつかなかった。鷹の頭に狐の体を持つ、巨大な化け物。最初にキゲイを見下ろした頭は、ゆうに大人の背丈二人分の高さにあっただろう。体長はゆっくり観察していないから分からないが、とにかく人間の子どもを頭から丸かじりに出来るくらい大きいのは確かだ。それが月明かりに目を光らせながら、キゲイを追い続けていた。悪いのはキゲイの方なんだろう。あれが気持ちよく眠っていた巣の上へ、転んで落ちたのは他でもない自分だ。

キゲイは倒木をひとつ飛びに飛び越え、低い崖の上から身を躍らせた。地面に着地しようというとき、突然膝の力が抜け、思い切り手を前についてすりむいてしまう。足はガクガクと震え、すぐには立ち上がることができなかった。

――だめだ！ もうダメだよ！

キゲイはぐっと目をつむり、冷え切った肺の中に大きく息を吸い込む。そして息を止め、力いっぱい立ち上がろうと目を開けた。と同時に、重たい気配が頭の上を横切った。次の瞬間、巨大な黒い影が目の前に踊り、キゲイは黄色く光る二つの目玉に、真正面から見据えられる。キゲイは息を呑んだ。よろけた体が、後ろの崖に当たった。逃げ場がない。

目の前の化け物は獲物を狙う獣さながらに、頭を低くし前足で土をかく。今にも飛び掛ろうという姿勢だ。キゲイは恐怖のあまり、体を縮めて力いっぱい目をつぶった。いっそのまま、気を失ってしまいたい。

キゲイは硬く目をつむり、やがて来るだろう巨大なくちばしのひと突きを待った。ジーンとまぶたが熱くなる。動くにも動けない。どんなわずかな動きが、敵に跳びかかるきっかけを与えるか分からないのだ。

ところが不意に、辺りの空気がキーンと張りつめた。耳が痛い。最初は、恐怖のせいで耳がお

かしくなったと思った。けれども違うようだ。夜の生き物達の声も、ぴたりとやんでいる。キゲイは恐る恐る目を開けた。

月明かりの下に、化け物の姿がある。それは鳥の頭を高くもたげて、せわしなく右に左にと辺りを窺っていた。明らかに、何かを警戒する動物の仕草だ。キゲイもつられてあたりを見回してみる。暗い森が広がっているだけだ。しかしどこかに、この大きな鳥頭の化け物を怯えさせている何かがいる。

突然、鈍い音がキゲイの耳を打った。それはあまりに低い音で、聞いたか聞かなかったか分からない音だった。それでも、その音と同時に、鳥頭の化け物の胸元が大きくへこみ、ぱっと羽根が飛び散った。化け物の両前足が宙に浮くほどの衝撃が襲ったのだ。化け物はギョッと一声鳴いて白目をむく。そしてそのまま、横様に倒れた。化け物の巨体に潰されて、木々の茂みがばきばきともものすごい音をたてた。しばらくして、森は再び静かになる。

キゲイは倒れたままの化け物の姿を、呆然と眺めていた。何が起こったのやら、まったく分からない。化け物のくちばしの端に、泡が浮いている。

木の枝を揺らして、鳥が飛び立つ。静寂を破る音で、キゲイは我に返った。何が起こったにせよ、化け物は気を失っている。逃げるなら今しかない。キゲイはもう一度、辺りを見回した。もしかしたら、鳥頭の化け物をやっつけた何か、まだ近くにいるかもしれない。それが自分の味方だとは限らないのだ。キゲイは震える足でよろよろと、崖肌に手をつきながら歩き出す。

「よお、坊主。大丈夫かぁ」

突然そんな声が聞こえて、キゲイは悲鳴もあげる間もなく、その場に腰を抜かしてしまった。森の奥からひとときわ黒い影が現れて、ぬーと近づいてくる。そしてせり出した小枝や腐りかけの落ち葉を乱暴に蹴散らしながら、月明かりの下に出てきた。その姿を見て、キゲイは口を開けた。喉から声は出なかった。

見たことのない大人の男の人だ。少なくともアークラント人には見えない顔立ちをしている。どちらかといえば強面だ。それからキゲイは何度も目をしばたたかせる。おかしい。目の前に立っている人の髪の色が、なんだか青みがかって見える。月夜にはなんでも青みがかって見えるときがあるが、それにしても青すぎる。あんな髪の色の人間なんて、見たことも聞いたこともない。

「なんで人間の子どもが、こんな夜に。しかも一人でうろついてるんだか」

そのおかしい髪の色は男はぶつぶつ言いながら、キゲイに近づいてきた。その言葉は、やや奇妙な発音の癖があるものの、「言の葉」だ。明らかにこの人は、キゲイにも分かるように独り言を言っている。

キゲイは男の髪から注意を解き、身なりに視線をさまよわせる。腰帯に、剣が下がっているのが見えた。キゲイの顔から、血の気が静かに引いていく。

「おら、立ちな。お前どこから来た？　ここで何をしていた？」

木の根をまたいで来ながら、乱暴な口調で男が言う。キゲイはあわあわと足を滑らせながら、どうにか立ち上がった。

そして。

一目散に逃げ出した。なぜなら目の前の人物は、人間じゃなかったからだ。そして武器も持っていた。せっかく鳥頭の化け物から助かったのに、今度は得体の知れない人物に剣で斬られるようなことがあっては、たまったものではない。

「キゲイ！ 心配したじゃないの！」

キゲイの姿をようやく見つけたとき、東の<sup>さとおさ</sup>里長は思わず叫んでしまった。キゲイの姉と兄が、弟とはぐれたと騒ぎ出してもう随分時間がたっていたのだから、無理もない。しかもここは異郷の森だ。暮らし慣れた里の森ではない。狼や熊よりも恐ろしい魔物だっているというのではないか。

里長は興奮して震えるキゲイを促して、森に張ったテントへと帰った。そこへちょうど、同じようにキゲイを探していた里の者達も帰ってきて、キゲイの搜索はめでたく終了となった。もっとも、そのほっとした雰囲気も、キゲイの話で吹き飛んでしまう。

「化け物ですって？」

里長のかすれた低い声は、素っ頓狂に高くなった。キゲイはおずおずと里長を見上げる。里長はずんぐりした体格の中年の女性で、怒るとキゲイの母親よりも怖い。腕だって、キゲイの父親に負けにくいくらい太くて逞しい。

「きっとそれは、魔物だね。石人の世界には、うようよいるという話だわ」

里長はいったん考える仕草をしたものの、すぐさまキゲイに向き直って、眉を吊り上げる。キゲイは首をすくめた。

「だから言ったでしょう！ ちゃんと気を引き締めて作業に当たれって！ 大体あんたは、自覚が足りない。私達がディクレス様からおおせつかった役目は、分かっているでしょ！」

キゲイ達は、地読みの民と呼ばれる、アークラントに古くから住む民族だった。地読みの民はその名の通り、地勢を把握することにかけては他に秀でることのない人々だ。彼らは見も知らない土地でも、正確な地図を描くことができた。なぜそこまでの技を持っているのかは彼ら自身も知らなかったが、広大な樹海に暮らす彼らには古くから当たり前に必要なものだったのかもしれない。地図自体が珍しいこの時代において、彼らの存在はアークラントにとって大変貴重だった。そして今も、石人の世界に忍び込むのに、地図は必要不可欠とされた。その地図を作る役目を、キゲイ達はアークラント先王ディクレスから言いつかっていたのだ。しかもできる限りの人手が必要だと言うことで、十三才以上の子どもからこの仕事に参加することになった。キゲイにとっては、生まれて初めて故郷から遠く離れる旅だった。挙句の果てには、魔物とかいう恐ろしい化け物にまで追いかけられた。

「なんにしても、無事でよかったよ。ちょっと騒ぎすぎてしまったのは、気になるけどね」

「え？」

キゲイはきょとんと里長を見上げた。立ち去りかけていた里長は、半身ほど振り返ってまた眉を吊り上げる。

「石人に私達の侵入が知れたら、全ての計画がおじゃんになりかねない。なんせ、石人が私達に味方をしてくれるとは限らないからね。いや、誓いを破った私達に、絶対に味方なんかしてくれ

ない。万が一気づかれて、私達の邪魔をしようとしてきたら、アークラントは終わりだよ！」

キゲイは胸の下で、ぎゅっと両手を組み合わせた。あの妙な髪色の男が、思い出されたのだ。「あのう」

キゲイは里長を追いかけ、おずおずとその袖を引っ張った。里長が怪訝そうに、キゲイの顔を見返す。

「僕、もしかしたら、石人に見つかったかもしれない……」

里長が目をむいた。周りの大人や子ども達も、互いの顔を見合わせる。気まずい雰囲気、辺りに満ちた。

事の成り行きは、どうやら深刻になりそうだった。

人間と石人の世界の境には、「大空白平原」という地帯があった。これはどちらの世界にも属さない場所で、国を建てたり住んだりすることは、七百年前の両者の取り決めで禁止されていた。しかし今では、人間の国から何らかの理由で追放されたり、居辛くなったりした者達が寄り集まってできた町が点在し、怪しげな商取引で栄えていた。

平原と呼ばれてはいるものの、実際の風景は人間世界の果てと呼ぶにふさわしいかもしれない。ヒースの茂みが点在する荒れ地のほかは泥炭混じりの湿地が多かった。そのため起伏がなくて見通しがいい割には、荷車が通れるほどしっかりした地面は限られている。場所によっては泥炭地の下で火がくすぶり、煙がたえずもくもくと上がっている。

ディクレス先王率いるアークラントの軍隊は、オロ山脈を越えてこの大空白平原に入り、平原の町のひとつタバッサ近郊に天幕を建てて滞在していた。旅人のうわさでしかこの平原の存在を知らなかった先王は、すぐさま必要な情報を収集し、武装隊商の振りをするのが一番いいと考えた。平原の人間達は、国や軍隊というものを目の敵にしていたからだ。そして先王は、タバッサで石人達の領内に入るための準備を整えようとしていた。タバッサの南に広がる森のすぐ向こうが、もう石人の領内だったのである。

キゲイは眠い目をこすりこすり、ディクレス様のいる天幕から、町の安宿へ戻って行くところだった。朝一番に、大人達が描き上げた森の地図を届けにやらされていたのだ。

昨日の夜、森でキゲイが石人に出会ってしまったことは、大きな問題になっていた。ディクレスは計画を早め、明日にでも石人の領内へもぐりこんだ方がよいと考えた。そこで人々は休む間もなく、その準備に走り回らなくてはいけなくなっていた。

明け方の小雨でぬかるんだ地面に、大小いくつもの足跡が残っている。天幕を張るには最悪の場所だが、タバッサの町議会は先王の素性を疑って、ここでの野営しか許してくれなかったらしい。キゲイはぐちゃぐちゃと新しい足跡をつけながら、忙しくしているアークラントの兵士達の間を縫って、タバッサの街中へと歩いていった。地読みの皆は、地図を書くために大きなテーブルを必要としていたので、町の宿に泊まっていた。地形を測る器具にとっても、湿気は大敵だ。

このタバッサの町もまた、空白平原のほかの町と同様、人間の世界から追われた者、つまりは追放者や賞金首などならず者が建てた町らしかった。七百年前の戦で人間が建てた要塞跡を利用



して、百年以上も前にできたらしい。しかしキゲイの見る限り、町の様子はアークラントの城下と大して変わった様子はない。通りに面する店先で働く人も、そこで買い物をする人も、ちっとも悪人には見えない。それどころか、アークラントよりも町には活気があって、人々も楽しそうだ。国が存在しないこの平原では、少なくとも戦争に襲われる心配がないのだ。

キゲイは物珍しく通りをきよろきよろ見回しながら、帰りの道をたどっていた。彼も地読みの民の端くれだから、宿の方向が分からなくて迷子になるようなことはない。ただ、道が入り組んでいて、一つ曲がり角を間違えばなかなか思う方向へ帰れないことが、ちょっと面倒だった。

キゲイはやがて広い通りに出た。朝早い通りは、朝ごはんの材料を買う人や、出発の早い旅人達でかなり賑わっていた。通りの両側に並ぶ店は、階段で十数段高いところにあった。階段の蹴上げの部分には、数段に渡って野菜や肉の絵が描かれている。どうやら店の看板代わりらしい。絵を見ているだけでも、結構面白い。キゲイは、親豚と子豚達が手をつなぎ、ハムの周りで踊っている絵を不思議に思いながら、通りを進んでいこうとした。

よそ見をしていたのがいけなかったようだ。前からぶつかって来た大人に押されて通りの真ん中によるめき、キゲイは危うく突っ込んで来た馬車にひかれそうになった。

「馬鹿野郎！ パン種みてえに、まったいらにのされてえのか！」

恐ろしい怒鳴り声が、キゲイの頭の上に降ってくる。キゲイは慌てて通りの真ん中から脇にどいた。見上げると、口から顎まで棘の様な黒い髭を生やした、ぎよろ目の男がこちらを見ている。キゲイはすくみあがった。

「チビが！」

男はもう一言吐き捨てて、後ろを振り返った。

「何してやがる！ 早く出さねえか！」

「へえ！」

返事がして、馬車が動き出した。キゲイの目の前を馬車が横切って行く。その荷台には、大きな檻が乗っていた。中に、なにか白と黄緑の色鮮やかなものが見えた。キゲイは通り過ぎて行く檻を、背伸びして覗く。

檻の中に横になってうずくまる、小さな背中が見えた。長い髪は、透き通るような黄緑色をしている。

「石人だ！」

キゲイは思わず口の中で呟いた。彼が昨晚森の中で出会った男も、青色という普通の人間ではありえない髪の色をしていた。

檻の中に入っているのは、キゲイと同じくらいの子どものようだった。なぜ、あんなところに入れられていたのだろう。もしかしたら、この男達は人さらいというものかもしれない。身震いが走る。キゲイはその場から逃げるようにして、足早に立ち去った。

宿に帰りついたときには、日は高くなっていた。キゲイが一人でもそもそも早めの昼ご飯を食べていると、里長がせかせかと彼に近づいてきた。

「キゲイ、悪いけどもう一回、天幕に行ってきてくれる？ お医者様の所。具合の悪い子がいるのよ。解熱用の薬を、貰ってきて欲しいの」

キゲイは頷いた。昨日の夜からほとんど寝ていないからいい加減休みたかったのだが、そうも言っていない。皆それぞれに忙しいのだ。

天幕に戻ると、隊商の振りをしている兵士達がそれぞれに自分達の食事を作っていた。

その兵士のほとんどは、十六、七歳の少年か老人かのどちらかだ。それもそのはずで、その真ん中の年代の者は国を守るため、アークラントに残っていた。ディクレス先王は「宝探しが目的だから現役の兵は必要ないし、国のためにも連れて行くことはできない」と、すでに退役していた老兵を募ったのだ。さらに徴兵することのできない十八才未満の少年達を人夫として集め、また、魔物の対策として命知らずな傭兵達を伴わせたのだった。

さて、医者から解熱用の乾燥果実を貰い、もと来た道を引き返す。人々は慌しく荷物を持って天幕の間を走りぬげ、伝令役の少年が大声で何か言っていた。出発がどうのと言っていたことから察するに、どうやら今夜、隊の一部が石人の領内へ移動するようだ。

「おい、そこの地読みの奴！」

突然声をかけられて、キゲイは立ち止まった。数人の少年達が天幕の前に座り、手にスープ鉢を持ってこちらに顔を向けている。そのうちの一人が、キゲイを指差して言った。

「お前らのうちの誰かだろ。昨日の夜、森で石人に見つかった馬鹿な奴」

キゲイの心臓が飛び上がる。それはまさに自分自身のことだ。その少年は眉間と鼻先に皺を寄せ、キゲイを睨みつける。

「お前らのせいでこの宝探しがみんなだめになったら、もう俺達の国を救う方法はなくなるんだ。お前らは故郷の険しい山と森の中に逃げられるからいいけどよ、俺達は敵が攻めてきたら死ぬまで抵抗する以外ないんだ。あいつら、自分の国以外の人間は、人の形をした虫けらくらいにしかなってないんだからなっ」

その少年の言葉に、周りの少年達も一様に頷いた。彼らの顔には不安と疲労、そして苛立ちがはっきりと現われている。キゲイはたくさんの年上の少年達に睨まれてすっかり恐くなり、体がたがた震えだす。少年は乱暴に舌打ちをした。

「なんて臆病な奴だ。さっさと行っちまえ！」

その言葉で、弾かれたようにキゲイは駆け出した。すっかり動転して、帰る方向を間違えてしまったのだが、構わずそのまま走り続けた。やがて小屋がたくさん立ち並ぶ場所に出してしまう。周りは見たこともない景色で、当然、もと来た宿など影も形もない。しかしキゲイは脅かされた恐怖が覚めやらず、そのまま突き進んで、やっと一つの小屋の裏手に隠れて座り込んだ。道中ずっと追いかけているような気がして、何も考えられなかった。

息を整えながら耳をそばだてる。辺りはしいんとして、自分の心臓と息の音しか聞こえない。

落ち着いてくると、今度はひどく悔しくなった。追いかけてくるはずもないのに、あんなに怯えた自分が腹立たしくなったのだ。キゲイは右手の拳を地面に叩きつけた。情けない気持ちに、うっすらと涙がにじむ。

周りを見渡すと、キゲイのそばの小屋が一番古くて汚れている。動物くさくて、馬のヒヒンと言う嘶きが聞こえた。両手の砂を払い、宿に戻ろうと腰を上げたとき、その古ぼけた小屋から馬の声とは別に、なにやらガチャガチャという金属音がした。

馬の声は何か怯えた感じだ。キゲイは滲んだ涙をぬぐい、でたらめに打ち付けられている壁板の隙間から覗き込んでみる。中は暗くてよく見えない。すると唐突に、

「誰かそこにいるの？ ちょっと手を貸して」

という高い子どもの声が聞こえてきた。

キゲイはハツとして壁から離れた。キゲイの体で、小屋の中に差し込む日の光が不自然に遮られてしまったのだ。人がいるかなど思いもかけず、キゲイは一瞬ひるんだ。しかし子どもの声だったので少し安心もし、とりあえず小屋の扉の方に回ってみる。幸い、扉に鍵はかかっている。

薄暗い小屋の中で、まず馬の荒い息が横から吹きかかった。馬は柵の中で落ち着きなく足踏みを繰り返している。貧相な年寄り驃馬だった。そして小屋の奥、幾筋もの射し込む光の中に、特大の鳥かごに似た錆だらけの檻が置かれていた。その中に入っているものに、キゲイは見覚えがあった。

明るい透き通るような黄緑色の長い髪。今朝、荷馬車で運ばれていたあの石人だ。その石人は、十一か十二才くらいの女の子に見えた。肌は異様なまでに真っ白で、血の気というものがまったく感じられない。大きな金色の瞳が、外からのわずかな光で不思議な輝きを放っている。まるで、彫刻が生きて動いているような不気味さだ。キゲイは顔を背けた。大理石みたいな肌も宝石みたいな瞳も、本当に石人間としか言いようのない女の子だ。

女の子はキゲイの驚きをよそに、よく通る高い声で言う。

「ちょうどよかったわ。君、こっちに来て鍵を壊してちょうだい」

それから呑気にも、片腕を頭の上に伸ばし、もう片方の手を口に当てて、気持ちよさそうに大あくびをした。

キゲイは手招きされるまま、恐る恐る檻に近づいて扉の錠前を調べてみた。ひどく錆びついていて、大きく重たいものだ。キゲイはなるべく女の子が目に入らないようにしていたが、女の子の方が狭い檻の中で器用に体を曲げて、キゲイの目の前に頭をもたげた。薄暗い小屋の中でも、女の子の唇までが真っ白なのが分かる。キゲイは女の子を視界に入れよう、さらに頭を下げる。造り物みたいな女の子が、生きて動いていることが、どうにも受け入れられない。いっそ彫刻が動き出したという方が、まだ分かりやすい。

「ああ、よかった。誰も通りかからなかったら、どうしようと思ってたんだ。ね、君は人間なんだよね。髪色、黒曜みたいね」

女の子は無邪気に話しかけてきたが、キゲイの方はそれどころではない。石人に対する嫌悪感を紛らわそうと、ますます錠前に集中した。

「ねえ、鍵開きそう？」

女の子は首をかしげる。彼女が話す「言の葉」は古風な感じがして、独特の優しい響きがある。

「……壊さないと無理だと思う」

キゲイはすぐさま立ち上がって、檻から離れた。小屋を見回しながら深呼吸をする。馬は相変わらず落ち着きがない。きっとこの馬も、石人が初めてなのだ。

なんにしても、この女の子を檻から出してあげた方がいい。キゲイはそう思った。理由は分からないが、あの恐ろしい髭面の男がいない今がチャンスだ。小屋の隅にごちゃごちゃと積み上げられているガラクタを漁ってみると、何かの柄だったらしい木の棒が見つかる。キゲイはそれを拾い上げ、いったん小屋の外に出て辺りに人がいないのを確かめた。

「これで叩き壊してみる」

戻ってきて女の子に言うと、彼女はこっくりと頷いた。顔立ちはとてもきれいな子だった。それがさらに彼女を造り物みたいにしているのかもしれないのだが。

キゲイは檻に片足をかけると、錠めがけて思い切り柄を振り下ろした。がきんと鈍い音を立てて、錠がゆれる。一撃では全然だめだ。もう一度錠前を調べ、効果があるのを確かめながら、何度も力いっぱい柄をぶつけた。女の子もぐらぐら揺れる檻の中で、鉄格子につかまり窮屈な体勢で頑張っている。

出し抜けに、鈍い音とともに錠前の腕が壊れた。それと同時に檻はバランスを失って、女の子もろとも後ろに倒れる。

「いたっ！」

「あ、ごめん！」

キゲイは柄を投げ出すと、すぐさま錠前を取り外して檻の扉を開けてあげる。女の子は頭の後ろをさすり、涙目で這い出てきた。

「びっくりしたけど、ありがとう……。ああ、よく寝たなあ」

女の子はあくびを噛み殺しながら、お尻をはたく。何とも呑気な様子にキゲイは少しむっとする。ところがあらためて女の子の格好を見て、首をかしげた。

女の子は濃い黄緑の服を着ていて、それが彼女のかかとまで届く明るい黄緑の髪に、とてもよく似合っている。しかしその服は絹みたいに柔らかで光沢があり、美しい銀の刺繍が襟と裾を縁取って、とても高価そうだった。シャラシャラと涼しげな音を立てる腰の銀飾りは、服よりもっと手の込んだ透かし細工の花びらだ。

「君、もしかして、どこからかさらわれてきたの。ひょっとして、お金持ちの家の子なの？」

女の子はきょとんとしたただけだ。

「お金は持ってないよ。私、森の中で道に迷ってたの。ものすごくお腹が空いてて。そうしたら、変な鎧を着た汚い格好のおじさん達が、パンと水をくれたんだ。後は良く覚えていない。目が覚めたら、この檻の中にいたの」

女の子は檻を振り返る。

「これってさらわれたっていうのかなあ？ 私、人間の町に行きたかったし、今目的の場所にいるわけだから、まるっきり失敗ってわけでもないと思うけど」

膨らませたほっぺたに指を当て、女の子はキゲイに向き直った。彼女はひゅっと息を吐いて頬を戻す。

「ねえ、どうしたの？ さっきからすっかり黙っちゃって」

「だって……」

「だって？」



「だって、いくらなんでも、鈍すぎ……」

キゲイの言葉が分かったのか分からなかったのか、女の子は楽しそうにクスクス笑った。少し変わった子であるのは間違いなさそうだ。

ところが女の子はすぐに笑うのをやめ、小屋の扉を横目にわずかに顎をあげる。キゲイがどうしたのと尋ねようとすると、彼女は素早く口の前に拳を当てて見せた。遠くから、人の声がしてくる。

キゲイは板の隙間に駆け寄って、外を窺う。やはり、あのひげ面の男達だ。お酒が入っているのか、皆やけに賑やかだ。あまりに大声なので、遠くにいても何を言っているのかよく分かる。

「石人ってえのはあれだろ？ 牛や羊みてえに無駄がねえって！」

「髪や骨は魔法使いに売れるし、血肉も錬金術の材料になるってえ、裏じゃ取引されてるらしいぜ！」

「髪と言えば、あの石像みたいなガキ。あの髪は結構な値段にならねえか？ きれえーな長い髪してたぜ」

「小指ほどの一束で、銀貨十枚ってとこかね。しかも髪はまた伸びるべえ」

「こりゃすげえ！ じゃあ、歳を食うまであの檻に閉じ込めて髪売って、んで、見世物にでもして、いよいよとなりゃ潰せばいいわけだ！ ひゃひゃっ！」

キゲイはぞっとして振り返る。女の子は、小屋の窓枠に片足をかけているところだった。

「逃げたほうがいいのかもね」

彼女も傭兵達の言葉を聞いた筈だが、気にしている風にはまったく見えない。少しどころかずいぶん変わった子だ。

二人がそっと窓から抜け出した直後、傭兵達は扉の前に着いた。

傭兵達が扉を開けたと同時に、キゲイ達は何とか窓から飛び降りる。しかし、逃げるのが遅すぎた。

「あっ！ なんだ、なんだ！」

男の怒鳴り声が背中にかかる。キゲイは女の子の背をついた。

「走ろう！」

女の子は頷いて、踊るようにくるっと身をひるがえす。長い髪が光に透け、宙をうねった。走り出した女の子の足は、思いがけず速い。

キゲイは慌ててそれを追う。もちろん、あのひげ面の男達も、凄まじい怒鳴り声とともに土煙を上げながら追いかけてきた。

## 二章 赤の魔法使い

---

キゲイは女の子の背中を追って走る。人のいる所へ出れば、誰かが助けてくれるかもしれない。一番良いのは、ディクレス様達のいる天幕だ。老兵がいる。彼らなら、あんな悪漢、怖くもないはずだ。

――でも、だめだ。

キゲイはすぐにその考えを打ち消す。この女の子は、石人だ。石人を天幕へ連れて行って、果たして良いものだろうか。

「見つけたぞう！」

大きなどら声に、驚いた女の子がつんのめって転ぶ。速度が出ていたため、彼女は勢いづいたまま、地面に頭から突っ込んだ。後から走っていたキゲイも急には止まれず、女の子に蹴つまずいてしまう。

「ぎゃっ！」

「ご、ごめん！」

キゲイは女の子をまたいで二、三步たたらを踏んだ。どうにか立ち止まると、彼女が立ち上がるのを助ける。女の子は、両手と両膝をひどく擦りむいていた。真っ白な肌のせいか、赤い血がひどく目立つ。

やむを得ないとはいえ、立ち止まったのが悪かった。二人はあっという間に、十人ほどの男達に囲まれる。中には数人、よく見れば女らしい人もいたが、いかつい体と悪党面という点では他の男達と同じだ。皆、ガラクタの銅屑や革の端切れを寄せ集めたような鎧を身に付け、思い思いの武器を革ベルトから下げている。剣やナタ、鋏を打った棍棒や、弓矢などだ。自分の武器を、これ見よがしにがちゃつかせている者もいる。

キゲイは辺りを窺った。閑散とした路地裏で、人通りもない。大通りの雑踏は、ここからでは遠すぎた。近くの家を開け放しの窓がひとつあったが、キゲイのしている前で窓はそろそろと閉まってしまう。

「おやおや、よく見りゃ小僧。その格好、地読みのガキじゃないか」

にやにや笑いを浮かべ、棘のように鋭い髭を生やした大男が、大きな手をキゲイの方へ伸ばしてくる。なぜ彼は、キゲイのことを知っているのだろうか。

――そうか、傭兵だ！

キゲイはようやく、男達の素性に思い当たる。ディクレス様が雇った荒くれ達だ。東の里長も言っていた。傭兵はたちの悪い連中だから、近づくなと。しかし、向こうから近づいてきた場合、どうすればいいのだろう。

キゲイは身を引いて傭兵の手を避ける。そしてとにかく誰かに助けを呼ぼうと、大きく息を吸う。その瞬間、大男の手が素早く動いてキゲイの胸を強く殴りつける。キゲイの意識が、一瞬遠くなった。ふらついた体を、後ろに立っていた女の子が支えてくれた。

「まあ！ 大人の癖に、子どもに暴力を振るうなんて！ 私、こんな悪人、生まれて初めて見た」

女の子の憤慨する声が聞こえたが、キゲイには彼女の反応がどうもずれている気がして、仕方がなかった。この子は、今がどれだけ危険な状況か、いまさら気づいたらしい。

傭兵達が輪を狭めて、じりじりと迫ってくる。彼らはキゲイ達を怖がらせて、楽しんでいるのだ。キゲイ達はとうとう、壁際に追い詰められてしまった。ひげ面の大男が再び腕を伸ばして、キゲイをいとも簡単に脇へ突き飛ばす。地面へ転がったところへ、別の傭兵が背中を蹴りつけてきた。キゲイは呻いて、傭兵達の輪から外へ転がり出る。地面に伏したまま振り返ると、女の子が傭兵に取り囲まれているのが見えた。ひげ面が、逃げようとした女の子の襟首を掴んで、子猫のように吊り上げる――。

「お前、エツ族か」

キゲイの耳にそんな声が入ってきた。顔を上げると、いつの間に現れたのか、こちらを見下ろしている淡褐色の肌をした少年と目があう。少年の瞳の色に、キゲイはびくりと肩を震わせた。炎の色だ。フードからこぼれ落ちる不揃いの前髪が頬にかかっているが、その髪の色も何か奇妙だ。暗い色をしているものの、黒髪などではない。それにしても、少年の視線は相手を射すくめるほどに鋭い。

キゲイが言葉を失っていると、少年はかがめていた上体を起こす。建物の隙間から覗く青空が、フードからはみ出ていた少年の長髪に重なった。髪は、深い紅に透ける。大人びた顔立ちだが、年はキゲイより一つか二つ上といった程度のようなようだった。

少年はフードを跳ね上げ、マントの下から金属の短い杖を持った左手を覗かせる。そしてすぐ脇に背を向けて立っていた傭兵の背を、杖で突ついた。傭兵がげげんな様子で振り返り、目を剥いた。

「や！　なんだ、お前は。いつの間に現われた！」

その声で他の傭兵達も振り返り、赤髪の少年に注目する。防寒マントに身を包んだ粗末な身なりの石人は、彼らにはもう一人の獲物と映ったらしい。ただし何人かは少年の手にある杖を、気味悪そうにちらちらと見ていた。

キゲイはその隙に、傭兵達から這って離れた。蹴られた背中が痛くて、立ち上がるのが難しい。女の子は相変わらずひげ面にぶら下げられたままだったが、やはり驚いた様子で赤髪の少年へ視線を向けていた。

「その子を離してあげてくれませんか。同族がそんな目にあっているのは、見逃せません」

赤髪の少年は、非常に真面目な口ぶりでひげ面に話しかける。もっともその左手には金属の杖を軽く握ったままだ。おまけにさりげなく、しかし脅しつけるように、杖の先を傭兵達へと向けている。キゲイを含め、その場にいる者達は皆、この少年が魔法使いであることを知る。

それにしても、子どもというものは不便だ。若すぎるというだけで、侮られる立場にある。ひげ面が、地面を震わすほどの大きな低い声で少年を笑い飛ばした。

「幸運の女神よ！　今日はなんて気前がいいんだ！　石人の子どもが、二人も捕まえられるなんてよう」

「.....痛い目にあうまで、分からないんだな」

少年は呟いて、数歩身を引く。それに呼応して、他の傭兵達が杖を取り上げようと襲い掛か

った。魔法使いは、杖で魔法をかけるものだと知られていたからだ。

少年は思いがけない素早さで、杖をヒョイと横様に放り投げる。まるで犬に棒切れを投げて、取ってこさせるかのように。傭兵達は一瞬、その行動に戸惑った。結局半分が杖を追い、半分が少年を取り押さえようとする。

杖を拾った傭兵が、ぎゃっと悲鳴をあげてひっくり返った。傭兵は白目を剥き、仰向けになって動けなくなる。小刻みに痙攣する傭兵の手には、杖がしっかりと握られたままだ。驚いた仲間が彼の手から杖を取り上げようとする。すると彼もまた、悲鳴をあげて隣に倒れこんだ。杖を追った他の傭兵達は、倒れた二人の仲間を遠巻きに囲い込み、少年の方へ目を向ける。

少年はひとり悠然と立っていた。周りには数人の傭兵達が、杖に触れた傭兵同様手足を縮こめて地面に倒れている。彼らは少年を捕まえようと、彼の体に触れたのだ。他の傭兵達は戸惑った表情で、少年を遠巻きにした。

杖を握ったままの傭兵が、苦しげなうめき声を上げた。彼の体はまだ、ぴりぴりと震えていた。少年はそちらに一瞥を投げただけで、女の子をぶら下げたままのひげ面に近づく。

「その子を離してくれますね」

言葉は丁寧だが、有無を言わせない口調だ。ひげ面は、女の子を盾にでもするかのよう、少年の方へ突き出した。

「仲間に何をしたんだ！」

「今はまだ、痺れさせているだけです。あなたにも触りましょうか」

「危ない！」

キゲイは叫んだ。傭兵達の数人が、ごつい革ベルトを鞭代わりにして少年に殴りかかってきたのだ。ベルトの留金は当たれば相当痛いだろう。少年は腰をかがめ、右腕を上げて頭を守ろうとした。彼は奇妙なことに、右腕だけに籠手こてをはめていた。ベルトの留め金は籠手に当たって跳ね返る。ところが別の革ベルトが彼の横腹を打ち、少年は少しよろめいた。その隙にひげ面は、女の子を脇に抱えその場から立ち去ろうとする。女の子は両手でひげ面の腕をつかみ、両足をばたつかせて暴れる。

キゲイはすかさずひげ面の大きな革靴へすがりついた。ひげ面はバランスを崩して、キゲイの隣に転んだ。当然女の子も巻き添えになる。ひげ面はキゲイの頭を蹴りつけ、女の子はひげ面の下敷きになって、悲鳴をあげる。

道端には痙攣する傭兵数人と子ども二人が転がり、事態がどうにも收拾がつかなくなったそのときだ。

「貴様ら！ 観念せい！」

怒った男の声が、路地裏に響き渡った。鞘走りのかすかな音も。背の高い二人の男が、こちらへ大股に近づいてくる。初老の方は、白髪まじりの黄緑色の髪。もう一人の比較的若い男は、灰色の髪をしていた。特に黄緑色の方は、真っ赤な顔をして怒り心頭だ。剣を抜いていたのも彼だ。傭兵達はその剣幕にたじろいだ。

「ま、待てよ！ 俺達だって、まだ抜いてねえんだぞ！」

「ならば、抜け。ここはならず者の町だ。いさかいは当事者同士で解決する。それがこの法だ



。だが、抜いた以上は容赦せん。これ以上その方を手荒に扱えば、わしが貴様らをまとめて成敗してくれるわ！」

黄緑色はそうまくし立てて、ずんずん傭兵達の真っ只中へ入ってくる。彼の持つ剣は見るからに上等で切れ味も鋭そうだった。当然本人も老練の剣士といった風情で、半端なく強そうだ。灰色の方は不気味に黙ったまま、いつでも腰の剣を引き抜けるよう、柄に手を添えて様子を見守っている。

「ううっ」

場の緊張を裂いて、傭兵の一人が呻いた。金属の杖を握ったまま倒れていた傭兵だ。彼は毒蛇を捨てるように杖を放り投げ、よろめきながら体を起こす。それと共に、痺れて倒れていたほかの傭兵達も、体を起こし始めた。皆、油汗で額をてからせ、足元はふらふらだ。

黄緑色は凄まじい形相のまま、ひげ面の元へ歩み寄る。ひげ面は男に睨まれ、後ずさる。女の子が走り寄ると、彼は空いている方の腕で彼女を抱き上げた。そのまま剣を傭兵達に突きつけながら、灰色の隣まで戻る。彼は灰色の方へ何事か告げたかと思うと、剣を収め、その場から走り去った。

――ちょっと待って。僕達はどうなるの！

キゲイは痛みに堪えながら、慌てて立ち上がる。赤髪の少年の様子を窺おうと顔を向け、キゲイは驚いた。

少年の髪の色が、いつの間にか濃い栗色に変わっていたのだ。瞳の色も、ただの平凡な薄茶だ。そこら辺の人間の姿と変わらない。少年は目深にフードをかぶり、じっと事の成り行きを見守っていた。彼の周りには、革ベルトを手にした傭兵が数人立っていたが、彼らは少年の姿が微妙に変わったことには気づかず、灰色の髪の石人の方に注目していた。

「さて」

一人残された灰色が、はじめて口を開く。

「その子ども達も解放してもらおうか。それとも、石人の魔法を見てみたいか？」

灰色が、剣の鞘に置いた手に力を込める。

「もう魔法はたくさんだ！」

赤髪の少年に痺れさせられた傭兵達が、吐き捨てるように叫んで真っ先に逃げ出した。それにつられて、他の傭兵達も我先に走り出す。

「……小僧、後で覚えてろよ」

キゲイの耳元で、ひげ面が囁く。キゲイは凍りつく。ひげ面はそんなキゲイを置いて、最後に走り去る。後には、二人の少年と灰色の髪の男が残された。

「二人とも、怪我はないか」

男は地面に落ちていた杖を拾い上げながら、二人に近づいてきた。少年はありがとうと言って、男から杖を受け取り懐にしまいこむ。体中打ち身だらけのキゲイは、ひげ面の捨て台詞に、いまだすくみ上がっていた。

「一体何があったのか、話してくれないか？」

男の言葉に、少年はキゲイを振り返る。しかしキゲイが何も言わないと見ると、口を開いた。

「師匠に頼まれて買い物をしていたら、この子と、さっきの女の子が悪者に囲まれていたのが見えました。魔法を使って、助けようとしていたんです」

それから男と少年は、再びキゲイに注目した。キゲイは記憶をたどる。傭兵達と色々ありすぎて、すぐには思い出せなかった。

「そのう、ええっと……。女の子が、あいつらのせいで檻に入れられていたから、出してあげたら、追いかけて、あの子が転んじゃって……」

思い返してみれば、自分はいくらも口なことをしていない。転んだ女の子を避け切れずに蹴ってしまったし、ひげ面を転ばせたときには、彼女を巻き添えにしてしまった。あとは地面に倒れたまま、成り行きを見ていただけだ。自己嫌悪に言葉は最後まで続かない。

男は少年とキゲイに丁寧な礼を述べた。

「できれば君達にお礼ができればいいんだが」

キゲイはびっくりして首を振る。

「ぼ、僕は、いいんです。あの女の子が助かったんなら、それだけで。それより、こっちの人に」

キゲイは、隣の少年を見上げる。少年はフードの両端を引っ張って、ほとんど顔を隠してしまう。

「お気になさらずに。私達もあなた方に助けられましたから」

「二人とも、本当に立派だな」

男は素直に感心してみせる。そんな彼を、キゲイと少年はそれぞれの胸の内を隠したまま窺う。

男は懐を探り、二人の少年の手にそれぞれ一枚の硬貨を置いた。中央部は透明な紋模様の入った淡い黄緑色の石、外周部を銀が囲んでいる。石には魚のような彫刻、銀には鳶の彫刻がある。

「それは、私達石人の世界で使われる硬貨の一つだ。今日の記念になるだろう」

二人が礼を言うと、男も再び礼を述べ、大通りの方へと立ち去って行く。キゲイはほっと胸をなでおろす。ところが男の後姿が見えなくなったとたん、キゲイは隣の少年に腕を捕まれ、民家の影に引っ張り込まれた。

「で、お前、エツ族なんだろう。アークラントの」

少年の髪と瞳は、再びもとの不思議な色に戻っていた。どうも厄介事はまだ終わっていないらしい。キゲイの着ている服は、地読みの民、エツ族の衣装だ。相手がそれと知っているなら、身分を偽るのは難しそうだった。アークラント人からは地読みだの地読み士だのと呼ばれていたから、何だか自分の正体を見破られた気もする。キゲイは自然と身構えた。

「……なんで、僕達のことを知ってるのさ」

「ディクレス殿に、魔法使いとして雇われた。私は石人だが、お前達の味方だ」

「えっ？」

キゲイは思いがけない言葉に、思わず聞き返す。

「味方って？」

「さっきの石人達の前で、人間に化けて見せただろう？ あの少女には私が石人だとばれたが、

まあいい。傭兵達の前で、身分を偽るわけにはいかなかった。天幕でまた顔を合わすことになるのだから。私はレイゼルトという」

少年は無表情だった顔を少し緩めてみせた。キゲイと大して歳は変わらないのに、彼の方が何倍も大人っぽい。キゲイに向けられた炎色の瞳は相変わらず鋭いままだったが、今はどこか温かみも感じさせる。

「僕は、キゲイっていうんだ」

相手の雰囲気ですっかり飲まれながら、キゲイは恐る恐る答える。

「その、ディクレス様に雇われたって、本当？」

「私は師匠にくっついてここまで来ただけさ。ようやく先王の本隊に追いついたから、会いに行こうとしていた」

「……もし分からなかったら、案内するけど」

「いいや。先王がどこにいらっしゃるかは知っている。ただ、会う前に、すませなくてはいけない用がある。悪いが、しばらく引き受けてくれるか？ それほど難しいことじゃない」

レイゼルトは懐に左手を突っ込み、銀色の薄い板を取り出した。キゲイはそれを受け取る。掌より少し大きめの長方形の板で、片面には驚くほど細かい植物の装飾があり、もう片方はつるつるに磨き上げられている。後ろの景色が歪み一つなく映り、手前に見える埃だらけの自分の顔も、ここまではっきりと見たのは生まれて初めてかもしれない。

「これもしかして、鏡っていうやつ？」

「魔法の、な」

レイゼルトが短く付け加える。キゲイは鏡を表裏よくよく観察するが、魔法がかかっている気配はない。

「それ、預かっててくれないか」

「どうして？ 大事な物なんじゃないの？ それに随分高そうだよ。もし失くしたら」

「先王にお会いするとき、魔法使いが杖以外の魔法の品を持っていたら、取り上げられてしまう。だから、暫く預かって欲しい」

レイゼルトは簡単に答える。

「構わないか？ その鏡には魔法をかけておいたから、失くす心配はない」

レイゼルトが強い視線をじっと据えたので、キゲイはたじたじとなった。レイゼルトの瞳はその燃えるような色のせいも、鮮烈な印象を相手に焼き付ける。この目はどうにも苦手だ。キゲイは相手の言葉に納得したというより、視線から逃れたくなくて、もぞもぞと答える。

「ディクレス様は、人が大事にしているものを勝手に取り上げたりはしないと思うけど……、でも、ちょっとの間くらいなら、預かってもいいよ」

「ありがたい。頼んだぞ」

レイゼルトは答えて、ぐらついていた右腕の籠手のベルトを左手で器用に締め直す。キゲイは首をかしげた。

「どうしてそっちの手にだけ籠手なんかはめてるの」

「小さい頃に間違いをして、右手を失くしてしまった。義手の代わりだ。お前も石人世界に入っ

たら、得体の知れないものに、むやみやたらと触れたりしない方がいいぞ。こんなになるからな」

キゲイは身震いをした。石人の世界は、考えている以上に怖い世界なのかもしれない。

「その鏡、誰にも見せないようにしておいてくれよ。高価なのは確かだから。私は、ディクレス殿に会いに行く。また後で会おう」

レイゼルトはキゲイに頷くと、大股で町外れへ歩き出す。傭兵に革ベルトで殴られた所が痛むのか、脇腹をさすりながら。

キゲイはようやく、地読み士の皆がいる宿へと戻ってきた。色々あり過ぎて、まるで二日ぶりにでも帰ってきた気分だ。実際にはまだ夕暮れに程遠いから、思っていたより時間は経っていない。もっともそれはキゲイにとっての感想で、待っていた人にとっては必要以上に時間が過ぎていたらしい。

「遅かったじゃない！ 何をしていたの！」

東の里長は、もうカンカンだった。荒れる里長を前に、キゲイは事情を説明していいものかどうか悩む。レイゼルトのことはともかく、あの女の子や二人の石人の男達と関わりあいになったことは、話さないほうがいように思われた。彼は既に人間世界と石人世界の境の森で、石人相手に大失敗をおかしているのだ。

「ええと、傭兵のおじさん達に絡まれちゃって」

やっとのことでそれだけ告げると、里長はあきれ返る。

「だから、近づいちゃダメって言ったでしょ！」

「ち、違います」

キゲイはムツとして言い返す。里長はますます怖い顔になった。

「どう違うのっ」

「あいつらから、近づいてきたんだ！」

キゲイはお使いの薬草をテーブルに叩きつけると、逃げるように宿の二階へ駆け上がる。どうしてこう、何でもかんでも失敗の原因を自分のせいになってしまうのだろう。里長が階下から何か叫んだが、キゲイは聞こえなかったふりをして大部屋の一つに飛び込んだ。そこでは、昨晚境の森で徹夜の作業をしていた地読み士達が、既に横になって休んでいた。キゲイは姉と兄の姿を探して、二人の間の寝床に潜りこむ。

もう、くたくただった。キゲイは掛布の下で靴の紐を緩める。ぐっすり寝て、何もかも忘れてしまいたい。

「キゲイ、里長と喧嘩したの？」

隣の姉が、寝返りを打って仰向けになった。起こしてしまったらしい。

「里長も色々大変なんだから、あんまり困らせないでね」

「僕だって、ものすごく大変だったのに……」

キゲイは脱いだ靴を掛布から出し、深々と溜息をつく。傭兵に蹴られた背中と頭がひどく痛む。目を閉じると、すぐに前後不覚の眠りに落ちていった。



次にキゲイが目を覚ましたとき、辺りは真っ暗だった。眠る前はよろい戸の隙間から、午後の陽射しが室内に差し込んでいた。周りで眠っている地読み士達の姿も、ほとんどなくなっている。子どもが何人か寝ているだけだ。キゲイのお腹が鳴った。もうとっくに夜になっているのかもしれない。

慌しい足音が階段を駆け上がり、室内へ飛び込んできた。

「キゲイ、起きなさい！ 大変なことになったわ」

キゲイの姉が、目をまん丸にして戸口に立っていた。キゲイが寝ぼけ眼のままぼんやりしていると、姉は彼の側に駆け寄り両肩を掴む。

「ディクレス様の所から、兵士の人 came の！ 石人と内通しているらしいから、取り調べて。あんた、境の森で石人と会ったでしょ。それに今日のお昼だって、石人と会っていたって！」

キゲイの目がいっぺんに覚める。

「誰がそんなこと言ったの！」

「ねえ、あんた大丈夫なの？」

姉はキゲイの言っていることに取り合ってくれなかった。

「石人に、変な魔法をかけられて、操られているんじゃない？」

「僕は、普通だよ！」

キゲイは叫び返す。徐々に暗闇に目が慣れてくる。再び、階段を駆け上がる足音が響いた。安宿全体が、その振動でミシミシと唸る。姉がキゲイを後ろに庇い、素早く振り返る。キゲイは姉の背中越しから、新しく現われた人影を認めた。

「あっ！」

「おお！」

キゲイの声に、相手が嬉しそうな声を返した。忘れもしない。あのひげ面の傭兵だ。彼は部屋の外に向かって、轟くような大声を張り上げた。

「兵士さん！ こっちですぜ！ こっちにいましたぜ！」

「いくらなんでも横暴よ！ まず東の里長と西の里長に、事情を説明すべきだわ」

姉がひげ面に食って掛かる。眠っていた他の地読みの子も達も、何かと目を覚ました。キゲイは脱いでいた靴を腰帯に挟むと、よろめきながら部屋のよろい戸へ駆け寄り窓を開ける。日暮れの冷たい風が吹き込んでくる。きっとこれは、傭兵達の仕返しに違いない。

「ディクレス様は、お忙しいんだよ。お、小僧、逃げるつもりか？ やっぱり、怪しいぞ！」

「違う！ 自分でディクレス様の所に行くんだ！」

キゲイは怒鳴り返して、窓枠へ身を乗り出す。階下から、東の里長の怒鳴り声が響いてきた。あっちもあっちで、それなりに厄介なことになっているらしい。キゲイは二階の窓から、一階のひさし庇へ逃れ、地面まで飛び降りる。ひげ面の怒鳴り声を背に、町外れへ向かって走り出した。

ところがキゲイが一人で逃げ出すことなど、傭兵達にとっては想定内のことだったらしい。キゲイの走る道へ、三つの影が躍り出る。

「来たな、このチビ！ 貴様は俺達に、想像を絶する大損をさせたんだ！」

「手足を、引っこ抜いてやる！」

「口から手え突っ込んで、靴下みたいに裏返しにしてやる！」

「うわああ！」

キゲイは悲鳴をあげて、町の中心部へと走り出した。他に逃げる場所など、思いつかなかった。

人通りのある場所へ出ると、キゲイはほっとした。そして、ぎょっともした。昼とはうって変わり、まさにならず者の町に相応しい光景が目の前にあった。筋骨隆々の大男、用心棒を連れた金持ちの商人、目つきの危ないまじない師、前後不覚の酔っ払い、拳動不審の優男、怪しい品物売る出店の怪しい店主。そんな連中が、通りにひしめいている。しかし、恐がってはられない。すぐ後ろに傭兵達が迫っているのだ。キゲイは思い切って、通りへと踏み出す。

新しい災難が、間髪いれずキゲイを襲った。変に黄色い顔をした痩せっぽちの小男が、揉み手をしながらキゲイの前に立ちはだかったのだ。

「あれえ？ 僕、ひとりなのお？ この辺りじゃ、あんまり見かけない格好だねえ？」

ねちとした猫なで声を出し、まばらな前歯をむき出して笑いかけてくるが、目は明らかに笑っていない。

「そうだ、おじさんが売ってる物を、見て行かなあい？ 面白いよお……」

キゲイは何も答えられずに、じりじりと後ずさる。この痩せっぽちより、まだ傭兵達の方がましかもしれない。だがしかし、これはあんまりな二択だ。

「断る」

不意にきっぱりとした声が、キゲイの肩越しに響く。後ろに、昼間会った灰色の髪の人石人が立っていた。彼はキゲイの肩に手をかけ、そのまま通りの先を歩くよう促した。痩せっぽちは顔を歪めて腕を上げ、石人に向かって魔除けの仕草をする。キゲイは後ろを振り返った。五人の傭兵達がとうの昔に追いついていて、恐い顔で数歩後からついて来ている。

「すまなかった。我々に関わってしまったせいだな。心配したとおりでっ」

石人が呟く。キゲイは黙っていた。状況が好転しているのかいないのか、まったく判断がつかない。色々ありすぎて頭は混乱し、もう何一つまともに考えられなかった。

石人は、歩きながら低い声で続ける。

「傭兵達の素性を、知っているか」

キゲイは首を振った。

「アークラントは兵が不足している。数少ない兵は国境の守りについていて、国内の治安が維持できていない状況だ。それにつけ込んで町や村を襲い、盗みを繰り返していたのが彼らだ。ディクレス先王は、国の南端から大空白平原へ抜ける秘密の峡谷を通り、共に石人の国の宝を探すことを条件に、どうにか彼らを国外へ出すことに成功したんだ」

石人は、横目でキゲイを見下ろす。石人が背中を押さなければ、キゲイは危うく立ち止まってしまうところだった。

「あの、待ってください。なんで、なんで、そんなこと、知ってるんですか」

石人に気づかれないよう行動してきた、今までの自分達の努力は一体なんだったのか。

「石人は、人間の世界に興味はない。だが人間が我々の世界に侵入してくるとなると、話は別だ。誤解はしないで欲しい。我々は、人間に危害を加えるつもりはない」

石人は短く溜息をつき、ちらりと後ろを窺う。相変わらず、傭兵達がついている。

「今は、君の身の安全が先だ。先王には、傭兵達をどうにかできる余裕はないんだろう。傭兵達が野放しになっている以上、彼らも君を諦めない。あの魔法使いの少年はただの通りすがりだったようだし、彼に仕返しできない分、君に二倍返しするつもりかもしれない」

「じゃあ、僕はどうなっちゃうんですか……」

キゲイは泣きそうになった。ディクレス様が傭兵達の言葉を信じて、宿へ兵士をよこしてきたことはショックだった。それが石人の言葉を聞いて、さらに心に響いてくる。キゲイは何度も、手の甲で目元を拭う。

石人はキゲイを連れて、店の階段を登る。階段の絵を見ると、そこは古着屋のようだった。店の扉の前で二人は立ち止まる。傭兵達は腕組みをして、階段の下からこちらを見上げている。

「境の森を抜け、さらに一行程南へ向かった先に、石人の城がある」

石人は、油断なく傭兵達を見据えながら言った。

「我々が<sup>はくじょう</sup>白城と呼ぶ場所だ。そこへ行けば、かくまってもらえる。恐らくディクレス先王も、石人の世界に入ればそこを目指すことになるはずだ」

「おじさんが人間に化けて、一緒にディクレス様の所に行ってくれませんか。そしたら、傭兵達の誤解が解けるし……」

キゲイが涙声で訴えると、石人は申し訳なさそうに首を振った。

「できない。万一石人だとばれれば、取り返しがつかなくなる。……本当に、すまない」

とうとうキゲイは、ガックリとうな垂れてしまった。絶望とは、このようなことを言うんだらうか。

「行きます。その白城とかいう所に……」

「では、今すぐ発とう」

石人が店の扉を開け、キゲイを促す。キゲイが中に入ると、外の傭兵達が人さらいと騒ぎ出す。石人はそれを無視して、後ろ手に扉を閉めた。通りの喧騒が遠ざかる。

「主人、扉に鍵を」

石人は店の主に告げると、陰気なランプの明かりの下で、古着の山を漁りだす。店主は、こういった厄介事は慣れっこらしい。繕い物を放りだすとすばやく扉へ駆け寄り、差し木を通す。直後、木板を砕かんばかりの激しいノックが扉を襲っていた。

「夜は冷える。石人の世界は、まだ冬の中だ」

キゲイは、石人の差し出す羊毛のマントを受け取った。羽織ってみると、手頃なサイズだ。

店主がきしむ扉を背に、むっつりと口を開く。

「そいつは銅貨八〇枚。扉の修理代をあわせて……、締めて銀貨八枚。それと、裏口はその奥」

石人は銀貨八枚を次々と店主に投げ、キゲイを奥へと促す。

「今夜、君の仲間の一部も、境の森に入るようだ。かち合わないよう、少し遠回りする。強行軍

になるから、覚悟して欲しい」

その言葉を聞いて、キゲイは心の中で情けない溜息をつく。まったく、一体どこから大切な情報が石人達へだだ漏れしているのだろう。ふっと頭に、レイゼルトのことが思い浮かぶ。彼が原因ということは、ないだろうか。それからキゲイは、レイゼルトに託された物があったのを思い出した。服の上から触ってみると、あの銀の鏡は、キゲイの胸の内ポケットに、重みを持って静かにひそんでいた。

境の森では、ディクレスに率いられた五十名ばかりの者達が、夜影に紛れて南を目指していた。有能な地読み士数名を先頭に、行軍に慣れた老兵達と雇われた魔法使い達が続く。徒歩の一行を照らす魔法の明かりは、星明りを模したかすかなものだった。

やがて一行の行く手に、巨大な石柱が現われる。それは片面が人の形に掘り込まれてあり、その背面は一枚岩となっていて、びっしりと文字が刻まれている。彫像の顔は、長い年月と風雨に洗われて、なだらかな凹凸だけとなり果てていた。背面の文字は、アークラントの者達には読めなかった。石人達の言語と思われた。

「これが、人間世界と石人世界の境界という話です」

地読み士がディクレスに説明する。

「あそこと向こうにも、石柱の影がご覧になれます。七百年前の両者の大戦の後、再び互いが出会い争うことのないよう、このような柱を平原の端から端まで並べて、境界としたそうです」

「では、この石柱の南側が、石人の世界になるということか。それにしても七百年といえ、石柱の風化が激しいように見える」

ディクレスは彫像を眺め、風化を確かめるようにそっと手で触れた。ディクレスの後ろを歩いてきたローブ姿の若い男が、王の言葉に答える。

「石人の世界は魔法に満ちております。魔法の風もまた、石に影響を与えるのやも知れません」

彼が予言者トゥリーバだった。自らの予言が成就するのをその目で確かめるため、また老いた王宮魔術師の代わりを務めるために、ディクレスと行動を共にしていたのだ。彼は身なりこそアークラントの魔術師風だが、真っ直ぐな黒髪や黄褐色の肌は、アークラントに古くから住む民族とよく似ている。

トゥリーバは、石柱の傍に生えた木々の枝を縄で寄り合わせ、門の形にするよう地読み士達に指示する。人間が石人世界へ立ち入る際は、守りの魔法をかけた門をくぐって入るほうがよいと思ったのだ。

一行は緊張の面持ちで門をくぐり、石柱を南へ横切る。最後の一人がくぐり終えたところで門を形作る縄を解き、元通りに木々の枝を開放する。

石人の世界に入った実感は特になかった。周りの森も、今までと変わった様子はない。森の獣達が息を潜めて、これら一行を窺っているだけだった。

「ディクレス様、困ったことが起きました。嫌な予感がします」

先行していた地読み士の数人が、色を失って本隊と合流してきた。彼らの報告を聞くと、トゥリーバは細い眉を吊り上げた。

「愚か者が。昨日木がなかった所に、今日木が生えているだと？ 無視して進め。不吉なことを申してはならん」

「ですが、しかし。せっかく作った地図が、役に立たなくなっていました」

「まずは、そこまで行ってみようではないか」

ディクレスはそう言って部下達をとりなす。地読み士達が、再び先へ行ってしまったのを見届けると、彼はトゥリーバを振り返る。

「地読みの少年がひとり、行方をくらませたと聞いたが……」

「少年と石人に、関係があるかどうかは分かりませぬ。傭兵達が何か申ししておりましたが、どうにも信用がおけません。それよりも、石人達が我々の行動に気付いていなければよいのですが」

トゥリーバは声を潜めた。

「いずれにせよ、私の夢見では、あの少年が何か憂慮すべき要素になることは考えられません。少年の件はラダム老将軍にお任せしましたので、先王がお気になさる必要はありません。老将軍は、兵を数名調査に当たらせると仰っていました」

「そうか」

トゥリーバはそれから、森を見渡す。同行している魔法使い達も、なにやら落ち着かない様子に変わっていた。

「魔法の匂いが、森の奥からいたします」

有能な魔法使いでもある予言者の言葉に、ディクレスも暗い森に険しい表情を向ける。

一行の行く手に、密に生えた針葉樹の黒い影と冬枯れの茂みが立ちはだかった。少年と老人の二人が、ディクレス達を待っていた。少年の髪は、木々の枝から差し込む星明りに、深い緋色をかえしている。隣に立つ人間の老人は、少年同様粗末なローブをまとい、身長ほどの長い杖を持っている。少年はレイゼルトであり、老人はレイゼルトの師を名乗っていた。

老人はディクレスの姿を認めると、恭しく礼をする。一方レイゼルトは師の後ろで、体裁程度に頭を下げただけだった。レイゼルトは一本の木を手で示しながら、ディクレスとトゥリーバに報告する。

「ご覧ください。この木はまやかしです。この棘だらけの茂みも幻に過ぎません。同じく、幻の丘や崖も出現しております」

「昨日調べたときには、これらは一切なかったんですよ」

地読み士が地図を片手に、情けない声で付け加えた。

ディクレスはレイゼルトの示した木に手を伸ばす。先王の手が、木の中にふんわりとめり込んだ。そっと手を引き出すと、明るい色の薄い霧が手にまとわり付き、やがて霧散する。木の像は、変わらずそこにあった。

「これは石人の魔法か」

「はい」

ディクレスの言葉に、レイゼルトは答える。トゥリーバも鋭い視線で辺りを窺う。

「かなり広い範囲に、魔法がかけられているようだが」

レイゼルトはその言葉に頷く。

「地読み士達が把握しているよりも広範囲にわたって、このように術がかかっています。奥行きは、恐らく森を抜けるまで。ただひとりの術者がこれを成したようです。これだけの範囲に術をかける以上、よほどの魔力の持ち主。人間の魔法使いでは、とても太刀打ちできません」

レイゼルトの最後の言葉に、トゥリーバはあまり良い顔はしなかった。

「では、お前は解けるのか」

「解く必要があるのでしょうか」

トゥリーバはディクレスに向き直る。

「彼が申すように、所詮は幻に過ぎません。幻術をほどくにも、雇い入れた魔法使い達だけでは荷が重く、消耗が激しいでしょう。ディクレス様、いかがいたしましょう。この先にまだ何か罠があるやもしれませぬ」

「害がないなら、幻術はこのままで良い。存在しないものが見えるのは厄介だが……。このまやかしは、穏当な警告ということか。魔法の力を誇示し、我らを引き返させたいならば、他にもっと効果的な方法があったろう」

ディクレスは答え、考えごとをするように、顎に片手を添える。幻自体に害はないとはいえ、実際の地形が見えない場所を歩くのは、時間が余計にかかるだけでなく、危険でもある。

レイゼルトが、ディクレスに向かって一歩前が出る。

「この魔法をかけた者を探し、その実力の程を確かめに行っても良いでしょうか。この幻術がかけられたのは、今朝以降でしょうから、術者はそれほど遠くへ行っていないと思うのです」

「ならん」

厳しく答えたのは、トゥリーバだった。

「我々はまだ、お前を信用しておらぬ。勝手な行動は、慎むのだ」

「だからこうして、先王にお伺いをたてているのです」

レイゼルトはぴしゃりと言い返し、ディクレスの方をまっすぐ見つめる。先王は苦笑した。レイゼルトを雇ったのは自分だし、そのレイゼルトがお抱え魔術師に喧嘩腰では、彼も立つ瀬がない。

「行け。しかし何かあれば、我々の所に戻ってきてはならんぞ」

先王の言葉を受け、レイゼルトは初めて丁寧なお辞儀をする。そして一目散に森の奥へと駆け出す。幻の中へ身を躍らせ、彼の通った場所だけしばらくの間、像が乱れていた。彼には森の実体が見えているらしかった。

「申し訳ありません。礼儀のしつけが、まだ十分ではなかったようで」

レイゼルトの師である老人が、先王と予言者に詫びる。ディクレスは笑って答えた。

「それは構わんが、あの子に袋いっぱいのパン屑でも持たせておくべきだったかもしれん。さて、出発することにしよう。地読み士達よ、森の姿が偽られた今、お前達の地図だけが頼りだ。我々を、石人の縄張り奥深くへ導いてくれ」

荒野を縁取る遠く青い山並みの向こう。丸く白い月がかすかに泡立つ光を放って、星々と共に沈もうとしている。向かいあう東は茜色の雲を二筋引いて、金の光に大地の稜線をにじませる。空半分、夜は西の彼方へ追いやられようとしていた。

レイゼルトは、境の森の外れに立っていた。天を貫いて朝と夜の狭間に立つ、巨大な白い山の全景を見据える。朝焼けの空気の向こうに霞むその山こそが、石人世界において白城と呼ばれる場所だった。

目を凝らせば、この距離からでもその山肌に、人工的な造形物が構成されているのが分かる。レース編みにも見えるアーチの連続、それが支える巨大な橋、幾重にも重なる長い回廊、階段状の屋根を持った家々、雲を突く六角の塔、高くそびえるのは崖ではなく、山肌に穿たれた高層の館だ。それら全てが、白色の石材で構成されている。

山は人工物だけで覆われているわけではない。橋の下には、黒い森があった。森からは同じく黒々とした蔦が伸び、橋脚を覆っている。高層の館の前には、かつては豊かだった耕地があった。今は茶色の荒れ野となり、崩れさった北側の塔が大きな残がいとなって横たわっている。

レイゼルトは知っていた。その城が滅び、眠りについたのは七百年前。しかし無人ではない。王族の末裔が、今もそこで暮らしている。そしてその者こそが、森に幻術をかけた張本人と思われた。問題はその人物が城のどこに住んでいるかだ。レイゼルトもさすがにそこまでは知らない。探すにしても、城はあまりに大すぎる。時間を無駄にはできなかった。

そのときレイゼルトの感覚は、かすかな魔力の軌跡を捉えた。あの銀の鏡が発する、ある種の気配だ。気配は、真の持ち主であるレイゼルトだけが嗅ぎ取れる。それは、白城へ向かって消えていた。

——大半の地読み士は、まだタバッサにいるはずなんだが。あの少年に、何があったんだろうか。鏡の軌跡に誰かが通った痕跡すらない所を見ると、あいつは一人ではないな。随分巧みに、足跡を消したものだ。……彼を石人の世界へ連れ込んだのは、誰だ。何のために。

レイゼルトはしばし思いをめぐらせる。

——まあいい。おかげで、幻術をかけた者を見つけやすくなったかもしれない。

それから彼はおもむろに森へと引き返す。一本の木に登り、太い幹の上で楽な姿勢になる。

——見立てによっては、再起不能にしておく必要もあるだろうな。アークラントには邪魔な存在になるかもしれない。

彼は幻の魔法を編み、自分の姿を枝の一本に偽った。たとえ石人の魔法使いが見ても見破られないよう、念入りに。彼はマントにくるまって、しばし休息することにする。長い間人間世界にいた彼に、石人世界の空気がはらむ魔力は刺激が強すぎた。石人ゆえに彼は土地の持つ魔法の力に敏感だった。ここにじっとして故郷に体がなじむまで、奥地から届く魔法の風に身を慣らさなくてはならない。

夢うつつに、キゲイは迷っていた。



自分が柔らかな布団の中にいることは感じていた。布団はかぎ慣れない匂いだが、なんとも居心地がいいのだ。一方で、胃のよじれるような激しい空腹感と、寝返りをうつのもおっくうな疲労感が、体中を支配している。起きて何か食べ物を探るか、このままもう少し、いつものように姉が叩き起こしに来るまで寝ていようか。頭の中でぐるぐる考える。

——ん？

キゲイはふと気がついて、目を開ける。茜色に染まる古びた石壁が、目の前にあった。記憶にない光景。そういえば、こんなふかふかの布団に寝たのも生まれて初めてだ。重たい体を何とかひき起こす。

彼は、簡単な作りのベッドの上にいる。部屋は石造りで広くはない。壁に造り付けられた暖炉と、小さなテーブルに椅子が一脚。開け放たれている縦長の窓からの光で、全てが茜色と橙色に染まっている。部屋の壁は歯抜けとなった色タイルの列と、模様の描かれた剥がれかけの漆喰でまだらだ。ゆるい山形の曲線をした天井にも、壁からの模様が続いて描かれている。こちらにも剥落がひどい。きっと以前は部屋中美しい模様で飾られていたのだろう。暖炉でぱちんと火花がはじけた。

キゲイはようやく、今までのことを思い出す。灰色の髪をした石人と、境の森を抜けた。森を抜けて彼が最後に見たのは、起伏の激しい荒野と、星空の下にそそり立つ高い山だ。たしか石人は、あの山を指差して白城だと言った。山が城なのか、城が山なのか。しかし彼の方は眠たくて眠たくて、まっすぐ立っているのも難しかった。

その後の記憶がない。眠たいなりに、歩き続けたのだろうか。それともあの石人が、自分を担いでここまで運んでくれたのだろうか。いずれにせよ、白城の中に居ることは間違いないようだ。

キゲイは用心深く辺りをうかがうと、靴をはき、椅子の背にかけられていた上着をはおる。そして窓にそっと忍び寄って、外を覗いた。

「うわぁ……」

キゲイは思わず身を乗り出した。窓の外は、小さな庭だった。ところが周りを囲んでいるのは、信じられない高さの建物だ。空がひどく遠く見える。建物同士の隙間から日の光が差し込み、そのおかげでこの奥深い庭も真っ暗ではない。それにしても、周りの建物に人の気配が一切ない。庭も荒れ放題だ。辺りは重苦しいほどに静まり返っている。

キゲイは、ひどく心細くなった。まるでこの世に、ひとりぼっちにされたみたいだ。いてもたってもいられなくなって、部屋の扉を開けて外へ出てみる。

「ええ……？」

部屋の外は、広い庭に面して柱が建ち並ぶ、吹きさらしの廊下だった。しかも、馬鹿みたいに長い。右を向いても左を向いても、どこまでもまっすぐに伸びている。そして廊下の壁も複雑な装飾の入った多角形の柱も、薄汚れてヒビだらけだった。今にも崩れてきそうだ。

——なんだか、寂しいところだなぁ……。

辺りは徐々に、暗くなり始めている。

——夕方だったんだ。

キゲイが途方にくれてあたりを見回していると、廊下の先にぼんやりと明るい場所があることに気づいた。不思議な感じのする白っぽい光だ。恐る恐る近づいて行ってみる。その間に、夜が駆け足で迫ってくる。明かりは廊下を途中で曲がった先の、半開きの扉の向こうから漏れていた。

特徴のある高い澄んだ声が、キゲイの耳に入る。半開きの扉の向こうからだ。隙間から遠目に覗いてみると、キゲイの知っている姿がそこにあった。

あの、黄緑色の長い髪をした女の子だ。側には、扉の隙間から見切れるものの、傭兵から彼女を助けた黄緑色の髪をした石人が、大きな体を曲げてひざまずいているのが分かる。彼は手に木のコップを持って、女の子に渡そうとしている。しかし女の子の方は偉そうに両腕を組んで、そっぽを向いている。彼女は再び何か言ったが、その言葉はキゲイには分からなかった。多分、石人語だ。

「トエトリア」

今度は、穏やかな若者の声が聞こえてくる。

「あの傭兵達が君に飲ませた眠り薬は、質が悪くて、一つ間違えば大変なことになっていたんだよ。それを飲んで、少しずつ体から毒を洗い出さないよ」

若者の言葉は「言の葉」で、キゲイにも何を言っているのか理解することができる。

女の子は若者の言葉に納得したのか、ようやくコップを受け取り、一気に飲み干した。

「それで良うございますよ、姫様」

隣の石人も「言の葉」で答え、そして、キゲイの方へと顔を向けた。目が合う。戸口にいたキゲイは、息を呑んで身を引いた。その背中に、何かが当たった。キゲイは驚いて扉の取っ手に飛びついた。かろうじて扉にすがりつきながら後ろを向くと、大人の男がひとり立っている。部屋から漏れる明かりでぼんやりと照らされた男の頭髪は、青色だ。顔立ちにも見覚えがある。他にもない。彼は境の森で、キゲイが生まれて初めて会った石人だった。

相手は無表情のまま、顎を上げ気味にじっとキゲイを見下ろす。キゲイは目をまん丸にしたまま、見返すのが精一杯だ。

「誰かな、そこにいるのは。入っただい」

この奇妙な睨み合いを中断させたのは、再び部屋の向こうから聞こえてきた、先ほどの若者の声だった。

青髪の男が扉に手をかけ、半ば力づくでキゲイを部屋の中へと押しやる。

部屋は広く、昼のように明るかった。光は、天井からぶら下がっている複数の青銅の皿からくる。皿には幾本も水晶の柱が蝋燭のように立っていて、それが白っぽい光を放っている。部屋の中央には五十人用くらいの大きな長い食卓がある。さらにその向こうは壁で、床より一段高いところに広い窪みが彫り抜かれていた。そこには小さいながらも立派な座卓と、植物の彫刻に縁取られた美しい背もたれ付きの座椅子が、しつらえられている。

その壁の掘り込みのふちに、年の頃は十七、八といった感じの石人の若者が座っていた。顔立ちには、鋭いところがまったくない。少しくせのある短髪は、恐らく純白だ。肌色はアークラント人よりは色白かもしれない。机や座椅子が立派な割には、身につけている物はそれほど高級そ

うには見えなかった。暗緑色の厚手のチュニックに、膝丈の渋茶の上着を羽織り、藤色をした幅広の帯で締めている。下には、ゆったりした生成りのズボン。非常に簡素だ。

青髪の石人が、キゲイの後ろで扉を閉めた。彼は部屋の右手に開いたアーチをくぐって、隣室へ消える。彼の衣装も、外形は白髪の若者とほぼ同じだった。しかし袖や襟元には凝った刺繍が入り、房のついた薄布を金の鎖とともに腰に巻いて、非常に見栄えがする。

「ええっと、名前はキゲイでよかったかな。こちらへ」

白髪の若者はふちを登って座椅子におさまり、キゲイに手招きする。キゲイは促されるまま、長テーブルでも一番若者に近い席に歩み寄る。

「白城へようこそ。僕はここの城主、ブレイヤールだ」

キゲイが椅子に浅く腰掛けると、彼はそう言った。人の良さそうな、優しい笑顔だ。

「事情は、トエトリア王女とシェド……君をここまで連れてきてくれた、灰色の髪の人だよ。その二人から聞いた。必要なだけここに居るといい。歓迎するよ」

「あ、ありがとうございます……」

キゲイは中途半端に頭を下げる。空腹のせいかもしれないが、頭が全然働かない。自分が石人の城にいることも、まだ信じられなかった。今は、何も考えない方がいいかもしれない。

パタパタと軽い足音を響かせて、黄緑の髪の女の子がやってくる。彼女はキゲイの向かいの席に片膝を乗せて、机に身を乗り出した。

「ごめんね。君を巻き添えにしちゃって、まさかここまで大騒ぎになるなんて、思わなかったの」

同じく、黄緑色の髪をした初老の石人もトエトリアの後ろにやってきて、申し訳なさそうな顔をキゲイに向ける。

「我々は、この白城からさらに南方にある、黄緑の城の者です。こちらは、黄緑の城の王女。今回は本当に、ご迷惑をおかけいたしました」

初老の石人があまりに深々と頭を下げたので、キゲイは戸惑ってしまう。

「このおじいさんは、黄緑の城の王室騎士団長」

ブレイヤールが簡単に紹介する。

「あのう、その、お姫様って……」

キゲイはブレイヤールの方を向いて、言葉を詰まらせる。

「君は王女様を、悪者から助ける手伝いをしてくれたんだ。すごいじゃないか」

ブレイヤールは快活に答えた。

「僕も一応はこの城の王族だけれど、そうかしこまることはないよ。僕らは、石人にとっての王族に過ぎないんだから。それより、腹が空いているだろう？ 仕度ができたようだ。夕食にしよう。キゲイ、食べられない物はある？」

「ええっと、大丈夫です。キノコは嫌いだけど……」

「そうか。人間も石人も、似たようなものを食べるってことだね」

キゲイの返事に頷くと、ブレイヤールは卓上のベルを取って、カランカランと鳴らす。するとまもなく、廊下の扉や隣室からの扉が開き、次々と石人達が部屋に入ってきた。奇妙なことにそ

の全てが、ものすごいお年寄りだ。皆髪は白かったが、ブレイヤールのようにはじめから白かったのか、歳をとって白くなったのか、分からない。ただ彼らの髪はブレイヤールと違い、暖炉の火や天井の照明に透けて、きらきらと輝いていた。そしてやっぱり皆、それぞれに凝った服装をしていた。最後にあの灰色の髪の石人が戸口に現われて、キゲイに気がつき会釈した。彼もトエトリアの家来の一人だったわけだ。

「これはこれは、はじめてお目にかかる」

キゲイの向かいの席に、バター色の髪と髭の、厳格そうな老人が座る。他の老人達より少し若くて、六十代くらいだろうか。白地に細かい金紋様の入った衣装は、一際目をひいた。

「主君が適当な服を着ておっても、家臣の方は常に身だしなみに気をつけねばならん。わしはこの白城の大臣、ルガデル口と申す」

キゲイは大臣に頭を下げる。石人の名前は、キゲイにはまだなじみが薄い。頭を上げたときには、大臣の名前など、すっかり忘れ去っていた。

「白城は滅びて国民もいないのに、大臣だなんて」

機嫌の悪い声が聞こえたと思ったら、青髪の石人が、鉄の鍋を片手にキゲイの後ろに立っている。彼は鍋の中の食べ物をおたまですくい、キゲイの前に置かれた椀に、べたり、ぼたり、とよそう。

「白の王子はともかく、家来の役職なんか意味ないじゃないですか。俺達全員、失業状態ですよ、大臣殿。あ、キゲイ、俺はグルザリオだ。王子の目付けをやっている。その他の雑用が多いがな」

彼は仏頂面のまま、おたまを鍋の中に突っ込み、キゲイに尋ねる。

「昨日の夜から、大して食ってないんだろ？ これ、もっと沢山ほしいか？」

キゲイは慌てて首を振った。彼の前にはすでに、全体的に灰色の粥状のものが、椀から零れ落ちるまでに取り分けられている。グルザリオは、鍋を持って別の石人の所へ移って行った。キゲイは怪しいものでも見るように、椀に盛られた食べ物をじっと観察する。

それは、灰色の穀物をどろどろになるまで煮た物らしく、赤イモや大根などの根菜、その他緑や紫の葉っ葉、黒い豆が混ざっている。なんともいえない色彩の取り合わせだ。死ぬほどお腹が空いていたのに、胸が一杯になってくる。その間にグルザリオは粥を配り終え、長テーブルの数か所に、薄切りの肉らしきものが乗った大皿を置いて行った。

壁の掘り込みを見上げると、ブレイヤールとトエトリアが座卓に向かっていた。卓上にはやはり灰色の粥が載っていたが、二人は王族であるためか、料理が一品多い。

ブレイヤールのは、杏色をした正体不明の<sup>みずみず</sup>瑞々しい団子。トエトリアの方は、薄切りの<sup>くんせい</sup>燻製肉。

夕食は、ブレイヤールが自分の料理に手をつけるのを合図に始まった。キゲイは心の中で、溜息をつく。地読み士の里での食事の方が、まだましかもしれない。木さじで粥をすくい、一口食べてみる。大地の香りが喉の奥から鼻先をかすめた。端的に言えば、土臭い。薬草の味が強く、おいしくもなければ、意外とまずくもない。大皿の薄切り肉は、ほとんど油と塩の塊だった。粥に溶かして、塩味を足すだけのものらしい。

周りの老人達は食事より会話に夢中で、合間合間、灰色の粥を無感動に口へ運んでいる。もしかしたらこれは、彼らの体に合わせた薬膳料理なのかもしれない。一方、二人の王族は、黙々と食べていた。トエトリアは難しい顔をして、灰色の粥をもぐもぐとしている。彼女にとっても、この粥はおいしくないらしい。ブレイヤールの方は食事をしながら、何か考え事をしているようだった。

慣れない場所で、まわりは石人ばかり。理解できるのは周りの石人達が話す「言の葉」だけだ。天気と腰痛と今年生まれる子羊の話題が、大半を占めている。つる心細さを振り払うように、キゲイは粥に集中した。幸い一口食べるごとにお腹が落ち着いてきて、重たい疲労感も薄れていく。

「キゲイ」

いつのまにか、ブレイヤールが褐色の瞳をこちらへ向けている。彼はまだ何かを考えている風だった。

「後で、僕の部屋に来てくれないか？ この城で過ごすのに、知っておかなくちゃいけないことが、幾つかあるし、君が仲間達の所へ戻る時期についても、少し話しておきたいし……」

キゲイはその言葉に、ほっとして頷いた。城に泊めてくれるだけではなく、キゲイが帰るときのこと、ちゃんと考えてくれているようだ。

「キゲイ！ タご飯、それだけじゃ、足りないでしょ」

トエトリアが、すかさず口を出してきた。

「このお肉、あげる。香ばしくて、おいしいよ。こっちは、なんて名前だったっけ。ミルクの膜と何かのスパイスを混ぜてつくった、水煮のお団子らしいわ」

トエトリアが燻製肉の皿に杏色の食べ物を添えて、キゲイに差し出す。ミルク団子はともかく鹿肉はありがたかったので、キゲイは少し上ずった声で礼を言い、素直に受け取った。団子は香料が効きすぎて個性的な味だったが、鹿肉は本当においしかった。

食事がすむと、淡紅色の髪をした老婦人がつと寄ってきて、お風呂に入るように言った。

「みそぎの意味もあるのだけど、それより、旅で埃だらけですからね。お湯に浸かれば、疲れも溶け出しますよ。服も洗濯します。代わりにこれを着ていらっしやいな」

差し出された着替えを受け取り、優しげな老婦人に続く。「みそぎ」と言う言葉には、おそらくキゲイの体にくっついている、人間世界の埃や匂いを拭うという意味があるのだろう。あまり体を洗うのが好きでないキゲイも、ここは素直に従った方がいいと考える。

日は既に落ちて、部屋の外は暗闇に包まれている。老婦人が手にした輝く水晶の明かりを頼りに、終わりのないような廊下を進む。いくつもの角を曲がったために、キゲイはもとの部屋が分からなくなってしまった。大迷宮のような城だ。

「後でまた、迎えがお越しになりますよ」

老婦人は浴室の前で、そう言ってくれた。彼女の言葉遣いにキゲイは首をかしげたが、何も言わなかった。

キゲイはひとり、脱衣室に入る。部屋は相変わらず古びた様相だ。浴室への入り口から白い明かりが差し込んで、脱衣室をぼんやりと照らしている。

浴室は、キゲイがこの城ではじめて見た豪華さだった。床一面に、幾何学模様が砕いた白タイルで描かれている。所々タイルが剥がれているものの、白の曲線が様々な淡い色合いをした石床の上で踊っているさまは、見事だ。すぐ脇の壁際からは、暖かい湯が小さな滝になって注いでいる。お湯は床を一段掘り下げた水路を流れて、薄暗い部屋の奥へ消えていた。浴室の中ほどには四角い穴が三つあり、湯気の立つ湯が溜まっている。人の姿はない。

キゲイはお湯の滝に当たって、頭からつま先まで汚れを落とす。きれいになるだけなら、これで十分だ。しかし「みそぎ」のために、慣れない湯船の一つへそろそろと身を浸した。思っていたより気持ちがいい。体が温まるとともに、今まで張り詰めていたものが、ゆるくほどけていくようだ。

一人きりになれてよかった。湯船から石床の上に片腕を出し、その上にあごを乗つけた。そして、肺が空っぽになるまで、心底深い息を吐く。

これから、自分はどうなるのだろうか。そして、いつまでこの城にいればいいのだろうか。さっぱり見当もつかない。おまけに突然いなくなったから、里長や姉や兄は、ひどく心配しているだろう。傭兵の言いがかりで、地読みの皆に迷惑が掛かっていないといいのだが。

しかし今回のことは、石人を知る良い機会ではないのだろうか。ここで知ったことをアークラントの皆に話せば、役に立つかもしれない。

すぐにキゲイは、いやいや、と首を振った。レイゼルトの存在を思い出したのだ。石人のことは、彼が皆に説明できるだろう。そうなのだ。キゲイの力を必要としている人なんか、どこにもいない。

——僕、また失敗して、ここにいるだけなのかあ……。

鼻の奥がつーんと痛くなる。キゲイは鼻をこすって、別のことを考えることにした。白城のことだ。

夕食に現われた石人達は、四十人くらいだった。それがこの城の全住人なのだろうか。しかもよぼよぼの人達ばかり。そういえば、青髪の石人が言っていた。白城は滅びたと。人も建物もよぼよぼボロボロなのは、そのせいだ。

——この城で僕ができるのは、これ以上ヘマをしないってことだ。

もしあの白髪の王子にアークラントのことを聞かれたとしても、絶対に黙っていよう。そう決心する。

キゲイは風呂から上がり、新しい服を身につける。汚れた服の内ポケットからは、銀の鏡を取り出した。レイゼルトに預かってくれといわれた品物だ。鏡は、浴室からの明かりで、ぼんやりとにぶく輝いている。

——こんなところまで持ってきちゃったけど、よかったのかなあ……。持ち逃げしたなんて、思われてなきやいいけど。困ったな。

キゲイは銀の鏡を、服の前合わせの隙間から懐にそっとおさめた。

「冬の尻尾を踏んづけろ！」

廊下へ出るなり、キゲイの目の前にトエトリアが躍り出た。もちろんキゲイは驚いて飛びのく。トエトリアは輝く水晶を片手に、ニコニコしながら立っていた。彼女の姿に、キゲイはひやり

とする。トエトリアの色味のない純白の肌は、人間の彼にとっては不気味の一言だった。特に、こんな暗い場所では。トエトリアの方は、キゲイのことなどお構いなしにマイペースだ。

「びっくりした？ 私、春迎えのお祭りが待ち遠しいの。ほら、これ。体冷やさないでって」

彼女は相変わらずのんびり上機嫌で、厚手の上着をキゲイに差し出す。詰め物が入って、少し重いが暖かそうだ。

「ブレイヤールの部屋に案内するね。ついて来て」

そう言うと、先に立ってさっさと歩き出す。キゲイは上着に袖を通しながら、おいて行かれないよう急いで追いかけた。

トエトリアの歩調に合わせて、彼女の腰に下がった銀の飾りが、しゃらしゃらと音をたてる。それは暗い廊下にどこまでも響いた。城はあまりに広く複雑で、その多くの場所が闇の中にある

。

「あの……」

キゲイは廊下に声が響かないよう、小声でトエトリアの背中に声をかける。

「何？」

彼女は振り返らずに返事した。彼女の声は、腰飾りよりも鋭く闇に響く。

「あの、きみ……じゃなくて、あなた様は黄緑の城の王女様なんですか？ でも、黄緑って……？」

「石人の世界には、十二個の城があるの」

トエトリアは歩調を緩めてキゲイの隣に並ぶ。彼女は自分の長い髪をつまんで、キゲイに見せた。

「それぞれの城は、王族の髪の色にちなんで、黄緑の城とか灰の城とか呼ばれてるの。どの城も山みたいに巨大で、そこに王族も貴族も国民も、全ての人が住んでる。城には、畑も森も川もある。だから石人にとっては、城がひとつの国でもあるの。人間達は『領地』が、国なんでしょ？」

「うん、多分……。石人の人達は、城以外の場所には住まないんですか？」

「他の場所は、魔物とか恐い精霊とかで一杯だもの。他のもので溢れていて、私達のいる隙間がない。無理よ。ところで、私のことは、トエトリアと呼んでね。ブレイヤールが言ってたけど、私は人間の前じゃ王族じゃないもん。でもね、本当は名前の呼び方ってちゃんとしてないと、大人達がうるさいの。白城の大臣さんとか、うちの王室騎士団長とか……。人間でも石人でも、私のことはトエトと呼ばないといけないらしいの」

「で、でも……。『トエト』は呼び捨てじゃ……」

「尊称だから、『様』はつけなくていいんだよ。石人の名前は、二つに分けられるの。私の場合は、トエトとエトリア。最初の名前は、神様の名前を表していて、尊いの。だから、ものすごく目上の人なんかは、こっちの名前でしか呼んじゃいけない。後ろの名前は、家族とか親友とか、特別親しい人達の間でしか使わないよ。両方の名前をあわせて呼ぶのが、一番普通」

「それじゃあ、この城の王子様のことは？」

「ブレイ。でも本人は、『音感が悪い』って、気に食わないみたい。私は彼のこと、時々、はくおう白王



って呼ぶことがあるわ。ブレイヤールってちょっと長くて言い難いから、あなたもそうするといいかも」

二人は大広間ほどの幅を持つ廊下を横切り、大きな木の扉の前までやってきた。扉には曲線を主体とした幾何学模様が彫刻されている。線はうねって、水の波にも鳶にも見える。

「ここがブレイヤールの部屋」

トエトリアは、扉についた輪っかを握り、扉をこつこつ叩く。

「キゲイ、押して開けて」

キゲイは扉の取っ手に手をかけて、押してみる。かなり重い扉だ。両手を突いて体重をかけると、ようやく一人が通り抜けられそうな隙間が開く。キゲイの期待に反して、扉の向こうは真っ暗だった。トエトリアが真っ先に扉の間をすり抜ける。

「ここは？」

キゲイは周りを見回しながら、トエトリアにそっと尋ねる。扉の向こうで、二人は水晶の明かりの中に取り残されていた。周りは一切の真っ暗闇で、明かりを照り返すのは足元の床だけ。かなり広い空間が二人の周りに広がっているらしい。声も足音もよく響く。空気はよどんでいて、かび臭い古い匂いがする。

「白城の大図書館よ」

トエトリアは何の目印もない真っ暗闇を、水晶を掲げて迷いなく進んでいく。

「彼はとっても本が好きだから、ここに住んでるの。暇があれば本棚のどれかによじ登ってるみたい。えーと、そろそろ右に曲がらなくっちゃ」

二人の行く手に、暖かい色合いの光が現われる。それは一つの部屋から漏れている。部屋の入り口には厚手の織物が下がっていた。二人は織物をくぐって、中へと入る。

「いらっしゃい」

ブレイヤールが書き物から顔をあげた。

部屋はそれほど広くはなかった。部屋の壁数カ所の窪みに、それぞれ蝋燭が燃えている。蜜蝋のろうそくらしく、室内にはほのかなよい香りが漂っていた。素朴な造りの書見台とスツールが窓際に、そして小さな暖炉に火が灯っている。暖炉の赤い照り返しは天井へも伸びていて、天井の輪っかからつるされた糸束を照らし出していた。糸束は部屋の隅に置かれた簡素な織り機につながっている。その脇にはベッドがあり、毛布が数枚、きちんと畳んで重ねてある。小ぢんまりとした、居心地の良さそうな部屋だ。だが、とても王族の住む場所には見えない。

ブレイヤールは、部屋の真ん中にある小さな丸テーブルにいた。彼は手元の紙を脇にやり、素焼きのランプの灯りをテーブルの中央に戻した。

トエトリアは水晶の明かりを消し、テーブルの椅子にちょこんと腰掛ける。キゲイも促されて、椅子に座った。水晶の明かりがなくなると、この部屋には魔法らしいものは何もなくなる。キゲイにはそれが少し不思議な気がした。

「それじゃあ、ちょっと話そうか。トエトリア、まずは君から」

ブレイヤールは左の袖を探る。中から紐の束を取り出すと、それをトエトリアへ渡す。受け取ったトエトリアはあらためて、紐をキゲイに差し出した。

「あの、これは？」

「お守り。私の髪でできているの。魔術をからめて編んだのは、ブレイヤールだけだ」

確かにそれは彼女の髪を一房、三つ編みにしたものだ。両端は髪がばらばらにならないよう、溶かした黄金でしっかりと留められ、表面には何かの模様が型押しされている。ただこの紐、やたらと長い。どうやらトエトリアは、ほとんど根元から髪を切ったようだ。

キゲイはお守りを受け取った。

「それを持っていれば魔物はあえて近づいてこないし、たちの悪い妖精にちょっかいを出されることもない。白城あたりはまだ大空白平原に近くて、土地の魔力も薄いから、魔物も邪精もたいしていないんだけど……」

ブレイヤールは話しながら、暖炉にかけられていた<sup>しんちゅう</sup>真鍮の茶瓶を引き出す。

「夜はやっぱり、彼らの力が増すからね。魔よけとして、持っておいた方がいい。いや、石人世界じゃ持ってないと、むしろ危険だ」

彼はテーブルに戻ってくると、三つの小さな湯飲みの中身を注ぐ。キゲイはトエトリアにお礼を言った。

「ありがとう……。えっと、王女様の髪も三つ編みが何本かあるけど、もしかして、それにも全部おまじないがかかっているの？」

「え、まさか。もしそうなら、髪結いの人が大変よ。そっちの三つ編みが特別なの。それは迷惑かけちゃった、せめてもの償い」

トエトリアはしおらしげにうな垂れて見せ、早速湯飲みで口をつけた。ブレイヤールも湯飲みを包むように持って、両手を暖める。石造りの城は底冷えがする。

「キゲイ、この城、ものすごく広いだろ？」

キゲイはお守りを懐に収め、ブレイヤールの言葉にうなずいた。

「僕一人だったら、絶対迷子になると思います」

「だろうね。僕だって、時々迷うことがあるんだから」

ブレイヤールは苦笑いを浮かべた。

「この城は、七百年前に滅びてしまったんだ。戦争で王が亡くなり、家来も国民も、城からみんな逃げ出してしまった。王族とわずかな側近だけが残ったんだけど、城はあまりにも大きすぎた。管理が行き届かなくなったうえに、時が流れるにつれ、城に関する知識や情報が失われてしまったんだ。側近の末裔達もどんどん数が少なくなって、もう年寄りばかり。今では僕自身にも、城のどこに何があるか、ほとんど分からない状態になってる。おまけに城が滅んだ後、なぜかうわさだけが空白平原の人間達に伝わった。以来数百年間にわたってこの城は、遺跡と勘違いした人間達に、遺された財宝を盗まれ続けてきたんだ」

「宝物がこの城にあるんですか！」

キゲイの胸が高鳴る。それは、アークラントの人々が探し求めている魔法の宝なのだろうか。

「数百年間も盗まれ続けている割には、この城に隠されている宝は減っていないようだね。この間も、探検家を名乗る人間が勝手に城内をうろついていたから、追い払ったところだ。追い払っても何度も来る奴はいるけどね。変に顔馴染みになった連中もいるし」

ブレイヤールは、短い溜息をつく。

「この城は本当に広いんだ。深入りすれば、出られなくなることもある。城内で遭難して、飢え死にする人間もいるくらいなんだ」

それを聞いて、キゲイは不安になった。どうやら本当に手に負えないくらい、広い城らしい。ディクレス様達は、この城に入って大丈夫なのだろうか。うっすらと心配にもなる。

「アークラントの人達も、多分この城にやってくると思う」

ブレイヤールが、キゲイの心を見透かすようにこう言ったので、キゲイは思わず湯飲みを取り落とすところだった。もっともブレイヤールは、自分の湯飲みに視線を落としたまま考えにふけていて、キゲイの様子には気がついていないようだ。

「問題の傭兵達も、城に来れば財宝に目がくらんで、君のことは忘れてしまうだろう。その際に、こっそり戻っちゃえばいいんじゃないかな……。地読み士の皆は、君の味方なんだろう？ ならきつと、かくまってくれるはずだ」

キゲイは、ブレイヤールの言ったことを、頭の中で繰り返してみる。本当にうまくいくだろうか。楽観的すぎるような気もするが、確かにそのタイミングで仲間の所に戻れなければ、いつ戻れるのかという気もする。

「じゃあ、僕、皆がこの城に来るまで、ここにいることにします……」

「そうしてくれ」

ブレイヤールは心細そうなキゲイに、穏やかな表情を向けた。

「さて、そろそろ二人ともお休み。キゲイはまだ疲れているだろうし、トエトリアは明日の朝早く、黄緑の城に帰らなきゃいけないんだからね」

トエトリアは、はあいと返事して、椅子から飛び降りる。キゲイも湯を飲み干し、立ち上がった。軽い甘みとしょうがの味の湯だった。

「あの王様、ありがとうございます」

白王と呼ぶのもなんだが堅苦しい気もしたので、キゲイはブレイヤールのことを、王様と呼ぶことにした。ブレイヤールはキゲイの言葉にうなずいてみせる。彼はその呼び方を受け入れたようだ。結局白王は、キゲイにアークラントのことなど一つも尋ねなかった。

トエトリアがキゲイを連れて部屋を出て行くのを見送った後、ブレイヤールはひどく陰うつな気持ちに戻って、ベッドの端に腰掛ける。彼は知っていた。この先、アークラントに何が起こるかということ。しかしそれは、それと認めたがらない者以外ならば、誰にでもすぐ分かる事実には過ぎない。

滅ぶのだ。あの国は。

そもそも石人達にとって、大空白平原の人間達は疎ましい存在だった。七百年前の誓いで、互いの世界を分かち境界を侵さないこと、大空白平原には誰も住まないことを決めたはずだ。なのに人間達はその誓いをたった三百年で忘れてしまったらしい。平原に住みはじめた人間に石人が気付いたときには、彼らの数は簡単に追い返せるほどではなくなっていた。それでも多くの人間達は本能的に境界石群を超えるのを恐れ、誓いの最後の一つは守られていたために、石人達も平

原の人間に手を出すことは差し控えていた。少なくとも平原の人間はかつて争った人間達と異なり、平原を東西に行き来することだけにしか興味を持っていなかったからである。確かにこの平原は、大陸の東西をなだらかな地形でつなぐ唯一の道らしかった。

ところが今、忘れ去られたはずの峡谷を抜けて、新しい人間達が平原にやって来た。しかも彼らは躊躇なく境界石を越えようとしている。石人達はすぐに気が付いた。アークラントの人間達は不吉な運命を負って峡谷を通り、戦の匂いを運んできたのだ。平原の人間だけでも厄介に感じていた石人達が、新たに現れた人間達の素性を確かめるのに、大した時間はいらなかった。

「なんでこんなことをしてしまったんだろう……」

ブレイヤールは独り呟く。

キゲイはトエトリアを助けてくれた。それで困った事態になったのだから、今度はこちらがキゲイを助けるのは、当然だ。お互いの立場や生まれを気にすることなく、親切に親切で応じるだけですんだなら、どんなによかっただろう。

ブレイヤールを悩ますのは、キゲイが滅びる国の人間だったこと。このまま仲間の元に帰せば、いつかはアークラントを巡る戦争に巻き込まれて、ひどい目にあうか死ぬかのどちらかだ。かといって、彼をこのままずっと、城に引き止めておくわけにもいかない。一方では助けていても、一方では見殺しにしようとしている。トエトリアが人間の町に行くなどという、浅はかな行動をしでかさなければ、彼もこんな割り切れない嫌な気持ちにならずにすんだろう。そう考えると、彼女のことを恨めしく感じる。

彼を落ち着かなくさせているものは、他にもあった。アークラントの人間達が石人世界に入ろうとしている、事実そのものだ。石人達はアークラントの人間達を、それほど危険だとは思っていない。魔物が闊歩するこの石人世界で、人間はすぐに引き返す道を選ぶと考えている。人間達が峡谷の向こうに帰れば、峡谷を魔法で突き崩し、二度と通れなくしてしまえばよいと。しかし本当にアークラントの人間達の侵入を、そんな程度に捉えていていいのだろうか。

ブレイヤールは立ち上がり、織り機の前に行く。織り機には作りかけのタペストリーが張ってある。彼はこのタペストリーで、森に広大な幻を織り込んだ。布に縫い取られた森の姿は、いまだどの場所も、ほつれたり穴が開いたりはしていない。幻術は破られていないようだった。なのにどうも嫌な予感がする。

彼は虚空を見上げる。魔法使いとしての鋭い感覚が、アークラント人達が平原に持ち込んだ戦の匂いとは別のものを嗅ぎ取っていた。

「人間の心配だけなら、いいんだけど……」

ブレイヤールは呟いて、すぐに口をつぐむ。アークラントが石人の宝を求めて平原に現れたのは、石人達に否が応でも七百年前のことを思い起こさせる。七百年前には、人間との戦以上に、振り返りたくない過去があったのだ。

日が昇り、朝食の時間も過ぎた頃。白城の年取った住民達は、それぞれの仕事につき始めていた。家事に精を出す者、三頭の羊の世話をする者、城内から発掘された骨董品を調べる者、薬草を調合する者——。トエトリアとその二人の家来は、早朝に白城を発っていた。

キゲイは、手持ち無沙汰この上なかった。城には興味があったが、一人で探検するのは怖い。迷子になりそうだったし、なにより城の巨大さと古さは、キゲイにとって常識はずれだ。何十階建ての建物を見上げていると、今にもこちらへ向かって倒れてくるような錯覚を覚えたし、廊下の亀裂だらけの柱や天井も、いつ崩れてきてもおかしくない気がした。

それでキゲイは朝食の後、食堂の前に広がる荒れ果てた中庭を、所在無くうろうろしていた。中庭の一角には、料理に使うらしい野菜や香草が植わっている。庭の中央には、白い石で縁取られた大きな楕円の池。藻の間に、ブチ模様をした細身の魚の背が見え隠れしている。

「キゲイ」

呼ばれて池から顔を上げると、回廊からブレイヤールが手招きしている。その隣には、彼の目付け役である青髪の石人が立っていた。

「これから、城の見回りに行くんだけど、一緒に来るかい」

キゲイが駆け寄ると、ブレイヤールは言葉を付け足した。

「日課にしているんだ。それと、アークラントの人達が本当にこの城に来るかどうかも気になってる。だから今日は城の下層、外周部の北側を回るつもり」

そういうことならば、キゲイもついて行かないわけにはいかない。

ブレイヤールを先頭に、三人は歩き出す。廊下は相変わらず古びていて、辺りはひっそりとしている。各部屋には木戸がついていたが、廊下を進むに連れて、木戸のない部屋が増えてきた。部屋の中は空っぽで、物置にすら使われていないようだった。

キゲイの後ろからは、グルザリオが大股のゆっくりとした足取りでついて来ている。彼はいつかの夜のように、腰に剣を下げていた。剣帯の留め金が、彼の歩調に合わせて鳴っていた。腰帯には、魔法の杖らしい細長い銀の棒を挟んでいる。キゲイの前に行くブレイヤールも、よく見れば、帯に似たような木の棒を差していた。

「皆、まだこの城へはたどり着いてないのかなあ」

相変わらず人の気配がない城内に、キゲイが呟く。

「城は広いから、この辺りを見ただけじゃ、なんとも言えないな。でも、まだだと思う。城主の勤ではね」

ブレイヤールは辺りを見回しながら答えた。

三人が歩いているのは、城内都市跡のひとつだった。石畳の大通りの両側には、十数階建ての館が立ち並んでいる。館は数階ごとに奥へずれ込む、階段状の層構造をしていた。各層の館前は、下階の天井が大通りの並走路となっており、大通りを隔てて対岸に建つ館の並走路と、橋でつながっていた。振り上げば、さらに城の上部から伸びている巨大な空中回廊が、都市の上空を大胆に横切っている。空は淡い銀色だった。

館を貫くトンネルへ入る。出口に近づくにつれ、三人の足音以外の物音が混じってくる。キゲイは耳を澄ませる。水の音だ。

一行は朝の光が存分に降り注ぐ、気持ちの良い庭園へと出た。三方は背の高い建物に囲まれ、前方の石垣に半円の小さな池が築かれている。石垣の後方は段々になった土の地面で、水路が上の方から流れ、水のベールを落とす滝となって水面に注いでいる。池の中央の島には、大樹をか

たどった壊れかけの彫刻がひとつ。白い大理石の枝には、黒曜石の葉が埋め込まれていた。

キゲイは寒風に身をさらしながら、辺りを見渡しそっと溜息をつく。城を形作る石の建造物は何から何まで、人の手によるとは思えないほどに巨大で美しい。なのにどれひとつとして、壊れていないものは無かった。滅ぶとは、こういうことを言うのだろうか。

ブレイヤールは池の縁石に手をついて、片手で水をすくっていた。水は清らからしかった。「頂上から麓まで、この城で水の循環が絶えたことはない。不思議なもんだよなあ。城は滅んでるのに」

キゲイの隣で、グルザリオが両腕を組む。

「この池の水、雨水とは違うの？」

キゲイはグルザリオに尋ねる。

「この城は山みただけで、あくまで城だからな。山みたいに、降った雨を自然に貯めることできん。溜池はあるが、城の上の方はどうなってることやら。うちの曾爺さんの代に一回見たきりだったかもなあ」

そのとき、何かのとどろきが二人の耳に入った。ブレイヤールも水面から顔を上げる。三人は息を潜めて静かな庭園に耳を澄ませ、視線をめぐらせる。先ほどの静けさとは、何かが変わっていた。

張り詰めた静寂の中で、グルザリオが真っ先に我に返り、キゲイの背を突いてブレイヤールの側へ共に駆け寄る。

「ちょっと違やしませんか、王子。時々聞く、古くなった石壁が崩れた音と」

「うん。何か、来てるみたいだ。あっち」

ブレイヤールが指を差し、グルザリオも腰帯から杖を引き抜く。二人はキゲイを間に挟み、池を背にして右手の館に注意を向ける。

右手の館は三階分の高さの奥深い大柱廊が、庭に向かって開いていた。その奥まった暗がりの中から、石畳をカチカチと鳴らして歩み出る。それは王者のように、悠々と姿を現した。不思議な姿に、キゲイは目をこする。

はじめは、館の奥に広がる暗闇が突然切り取られ、うごめいてこちらに歩き出したように見えた。しかしやがて、その姿ははっきりとしてくる。しなやかな獣の歩み。明り取りの窓から斜めに差し込む弱々しい光のすじを、獣は何度か横切った。その度ごとに、獣の丸い明るい色の瞳が浮かび上がる。獣の周りで舞い上がった砂埃は、光を受けて白く輝く霞になる。それなのに、獣の体はずっと真っ黒なままだった。光を浴びても影に入っても。庭園に頭を突き出すまでに、近づいてきても。

キゲイは息を呑んで見上げる。なんと大きな闇の塊なのだろうか。

「魔物じゃないか」

ブレイヤールの、上ずったささやきが聞こえる。彼の構える杖の先が、小刻みに震えていた。

魔物の目は、傷ひとつない水色の水晶玉のようだ。瞳孔すらない。それはキゲイ達三人に向けられ、闇色の顔の中で鈍く光る。そして一對の目は、三人へ向けられたままゆっくりと下降し、細められた。キゲイは、はっとした。魔物の姿が黒すぎて体勢は良くつかめないが、あれはこち

らに飛びかかろうとしているのではないだろうか。

キゲイの予想したとおり、闇の四肢が地面を蹴った。キゲイは思わず片足を後ろへ引く。

「動くな！」

抑えた怒鳴り声とともに、キゲイの肩を誰かが強くつかむ。キゲイの視界を闇が覆い、息を詰まらせるほどの密度を持った風が、たたきつけられる。これではまるで、境の森での晩と同じだ。しかも今度の魔物とやらは、あの晩に出会った奴の比ではない。

肩をつかんでいた手が、キゲイを後ろに振り向かせる。石垣の上に闇色の魔物が立って、見下ろしていた。日の下に出ても、魔物はシルエットそのものだった。ただ、背骨とわき腹にかけて銀色の鱗状の筋がついており、それが黒い体の姿勢を唯一示すものとなっている。頭部は鼻面が存在せずのっぺりとしていた。それにしても、妙な毛並みだ。毛先が炎のようにたぎり、揺れるたびに暗い虹色の残像が重なる。特に長いたてがみがこの上もなく見事だった。まるで幻のような姿なのに、圧倒的なまでの存在感を誇って悠然と立っている。

キゲイはよろよろと後ずさり、その場に崩れるようにして尻もちをついてしまった。ブレイヤールとグルザリオが、魔物に杖を構えながらこちらへ後退してくる。

「ど、どうしよう」

「殺すしかありません。ほっとくと人を食っちまう。もうすぐたくさん人間が、この城にやってくるかもしれないですよ。この城を血で染めるおつもりで？ うっ！」

キゲイが声をかけるより先に、グルザリオがキゲイにつまずいて、息を呑んだまま彼の隣に片手をついて倒れこむ。

その瞬間、魔物は二人の石人へ狙いを定め、宙へ身を躍らせた。

「来るな！」

ブレイヤールがかざした杖を、すばやく横へ振る。その動きにあわせて、どこからともなく飛んできた石の塊が魔物の体を横様に直撃し、魔物を吹き飛ばした。重たい音を立てて地面に落ちた石の塊は、どうやら館を飾っていた柱頭らしかった。

その隙に、グルザリオはキゲイの襟首と帯を両手につかんで走り出す。そして城内都市へと続くトンネルへ駆け戻り、キゲイを床に投げ出した。彼はそのままトンネルの出口の壁に、ぴったりと背を押し付けた。

「ちょ、ちょっと！」

キゲイはグルザリオに這い寄り、服のすそを引っ張る。

「こんなところに隠れてたら、王様がやられちゃうよ！ どうするつもり！ 剣は使わないの！」

「こんなものが役に立つか！ だいたいあいつは、石人世界の奥深くにしかいないんだ。なんだってこんな所に……」

グルザリオは庭園の方をうかがったまま、動こうとしない。

ブレイヤールと魔物は、池を挟んで向き合っていた。柱頭の重い一撃を受けたというのに、魔物は弱った様子もない。ブレイヤールは何かの言葉を声高に繰り返しては杖を何度か突きつけていたが、魔物は彼を見つめ返しているだけだ。尾をゆっくりと左右に振り、頭部をかすかにゆす



っている。

——あれは、自分が魔物であることを知っている。

ふいに、キゲイの左耳の側で、風のようにかすかな声が聞こえた。キゲイは戸惑う。彼の左側には、誰もいない。

——そんな魔物は、存在自体がすでにして魔法。ゆえにあれは直接、魔法にかけることができない。例えば、こんな風に。

そのささやきが途切れると同時に、グルザリオが胸を押さえてうめき声を上げた。グルザリオの体が重心を失い、目を丸くしたキゲイの上へ倒れてくる。キゲイはあえなく下敷きとなった。何とか這い出てグルザリオの肩をゆするが、顔が真っ青になっている。彼はかたく目を閉じ、杖を胸元で強く握り締めていた。

——あれに唯一効く魔法は、あれを構成する魔法をほどくものだ。かなり難しい魔術なんだが、あの人はさっきから五回も唱えているな。……いい加減気づいてもよさそうなのに。

キゲイは左手で左耳をふさいでみた。

「あれは、獣の姿ながら言葉を理解するという。しかし、自身は言葉を語る喉を持たない」

いまや声は、キゲイの耳元ではなく、トンネルの奥から足音と共に響いてきた。はたして暗がりから現れたのは、レイゼルトである。キゲイは困惑とあっけにとられて、相手を注視する。レイゼルトは炎色の瞳を、遠くのブレイヤールの姿へ据えていた。

「口にするのは、言葉に至らぬ言葉。あるいは、言葉を超えた言葉。すなわち……」

レイゼルトは、左手の人差し指をゆっくりと魔物へ向ける。キゲイの後ろから、巨石のきしむような唸りが聞こえた。そしてそれに続くのは、大地を揺るがす咆哮。

キゲイは両耳をふさぎ、床にうずくまった。あまりの大音響に、心も魂も何もかも、持っていかれそうだ。魔物の叫びは、館の石積みすら緩ませる。空っぽの館の廊下を満たし、部屋を満たし、人の体の中まで満たして、どこまでも反響していく。

「しょせん、すべて幻だがな」

脇を通り過ぎていくレイゼルトの気配と声が聞こえ、キゲイは辺りが静けさを取り戻したことに気がついた。それでもまだ耳鳴りは残っていて、頭がぐらぐらする。

「ま、待ってよ！ 何でここに？」

「あそこの魔法使いに、会いに来ただけだ。向こうもようやく、あれが幻術だったことに気づいてくれたらしい」

レイゼルトは半身だけ振り返り、あごでしゃくってみせる。その先にはブレイヤールが立っていた。そして、彼を見下ろすようにして魔物もまた。

しかしブレイヤールはすでに、魔物の方へは向いてなかった。彼はレイゼルトへ顔を向けたまま、魔物へ杖を突き出す。魔物の姿が揺らぎ、見る間に杖の先へと吸い込まれていく。すべてを杖に吸い込ませると、ブレイヤールは右手で杖をしごき、その手を開く。手から薄青い影が立ち昇り、日の光に溶け消えた。

「誰だ」

ブレイヤールはレイゼルトに尋ねる。幻で騙されたことを知って、苦々しく不機嫌で、厳しい

顔つきだ。

「境の森に幻術をかけたのは、あなたか」

レイゼルトは相手の問いを無視し、トンネルから庭園へと踏み出る。キゲイはレイゼルトを止めるべきか迷いつつ、後を追った。

「境の森に魔法をかけたのは、確かに僕だ。人間が七百年前の禁を犯し、軍を率いて石人の領内へ踏み入ろうとしている。その試みをくじこうとするのは、当たり前だろう」

「それにしても、ずいぶん気のない幻術だった。あなたは人間を馬鹿にしているのか」

「幻の魔物みたいな、本格的な罠を仕掛けるわけにもいかないだろう。それより君はいったい何者だ。石人なのに、人間の味方をしているような口ぶりだ」

その言葉にどきりとしたのは、むしろキゲイの方だった。

レイゼルトは懐から、金属の杖を取り出す。ブレイヤールもレイゼルトへ杖の先を向けたが、気が進まなそうだった。

「確かに」

レイゼルトは、杖を緩やかに掲げた。

「彼らは人数を削られるような危険な魔法より、限られた時間を削られる方が痛手かもしれない。だが、これ以上の邪魔立ては困る」

彼は掲げた杖を振り下ろす。見る間に三方を囲う館の輪郭が、淡くなった。そして館の前面が最上階からすべて白砂と変わり、流れ落ちてくる。

キゲイは頭上から降り注ぐ砂から逃れようと、池へ走る。振り返ると、砂は館の一階部分を埋めるまでに積もっていた。ブレイヤールは杖を構えたまま、歯を食いしばっている。なぜ彼は、むざむざレイゼルトに館を壊させてしまったのだろうか。

「王子、術士を狙え！」

突然レイゼルトの背後で積もった砂が吹き上がり、レイゼルトに向かって飛ぶ。半分埋まっていた館のトンネルから、グルザリオが走り出てきた。顔色はまだ随分悪い。

レイゼルトは杖を上げ、難なく飛んできた砂を杖に巻き取る。それはそのまま、杖の先を起点とした砂の竜巻になる。竜巻はやがて周りの砂も巻き上げ、空高く伸びていく。グルザリオはレイゼルトに向かい、杖の先から白い閃光を放った。閃光はレイゼルトの周りに立ち込める砂煙の中で、微塵にはじけて消えてしまった。

キゲイはどうしていいか分からなかった。レイゼルトはあの砂で、何をするつもりなのだろうか。気がつけば、彼は足元の石をつかみ、レイゼルトに投げつけていた。意外にも石は砂煙を裂いて、レイゼルトの足元に落ちる。キゲイの腕力がもう少しあれば、確実に当たっていたはずだった。レイゼルトはキゲイに炎色の瞳を向ける。

「お前こそ、人間と石人、どちらの味方なんだ」

瞳に怒りはないが、問いかけは辛らつだった。キゲイは言葉につまる。

「今はそんなこと、関係ないと思うな」

ブレイヤールがキゲイの代わりに答え、杖を振る。彼の背後で池の水が大きく跳ねたかと思うと、レイゼルトへ向かって襲いかかる。レイゼルトは砂の竜巻で水流を受けた。くすんだ灰色

の竜巻は、水を含んで真っ白に変わる。しかしブレイヤールが放った水は、決してレイゼルトの砂竜巻に飲み込まれることはなかった。竜巻の上から沸き立つと同時に、再びレイゼルトめがけて降り注ぐ。

それから先は、わずかな間に起こった。レイゼルトは頭上を見上げ、杖を振り下ろす。砂竜巻が首をもたげて水を追う。庭園を、すさまじい突風が襲った。水を吸い上げた竜巻が、すそから広がってきたのだ。湿った砂嵐はレイゼルトの姿を呑み、こちらへ迫る。キゲイは全身に叩きつけられる砂に体を縮め、いつの間にか気を失っていた。

「何で池の水なんか！ 向こうの砂の方が、ずっと量でまさっていたのに！ 何であんたも館くずして、対抗しなかったんですか！」

「城主が自分の城壊して、どうする！」

のどかな水音に混じって、そんな口論が聞こえてくる。キゲイは体を起こした。彼は砂の上において、すぐ側には彼を掘り起こしたらしい砂の穴が開いていた。体中、湿った砂がこびりついてごわごわだ。

「そんな場合じゃ、なかったでしょうが！ 俺なんか、血中に大量の気泡を入れられて、死ぬところだったんすよ！」

「こっちだって、<sup>のうずい</sup>脳髄に水銀入れようとしてた！ おかげで、あいつが館を砂に変えるのを、止め損ねた。あいつ、僕らを殺すつもりだったんだらうか」

「もしそうならば、チャンスはいくらでもありました。俺達が、幻術にだまされている間に！ しかし、どんだけ悪趣味な魔法を使うんだ、あのクソガキ！ 脅しにしても本気すぎる」

グルザリオが腹立たしげにブレイヤールへ背を向け、見る影もない三方の館を仰ぐ。ブレイヤールは、池の縁石にうなだれて腰掛けていた。池の大理石の木は、なぜか黒曜石の葉をすべて落としている。

「こわかった」

ブレイヤールは呟くと、目をこすった。

「あの……」

キゲイは二人に声をかける。キゲイだって、レイゼルトが何者なのか、分かりはしない。でも、目の前の二人よりかは知っている。

「あいつ、レイゼルトって言うんです……。石人だけど人間の味方をするって、言っていました」

ブレイヤールは目を丸くした。

「知っているのか？」

キゲイはうなずく。服の上から、懐の銀の鏡をぎゅっと握る。

「レイゼルト……。はて、どこかで聞いた名だな」

グルザリオが腰に手を当て、考える仕草をする。キゲイは次に言うべき言葉を探し、口の中で舌をかむ。しかし二人の思考は、ブレイヤールのくしゃみで中断させられた。ブレイヤールは池に注ぐ水の下で、体についた砂を洗い落としていた。

「いったん引き上げよう。二人とも、砂は完全に流して。この辺りの廊下に、砂で足跡を残すの

はずい。……水は冷たいけどね」

「洗った後は、ちゃんと乾かす必要もありますよ。凍え死にたくなけりゃ」

グルザリオが主の言葉に付け加える。それから二人の石人は、再び無残な姿の館を見上げ、大きな溜息をついたのだった。

## 四章 石人の物語

---

池の水で砂だらけの体を洗い、その後グルザリオが魔法で乾かしてくれた。しかし完全には乾かない上に冷え切った体も温めることはできず、三人は震えながら帰ることになった。その間、ブレイヤールとグルザリオは難しい顔で黙りこくったままだった。

「人間に協力する石人がいたですと？」

食堂に帰り着き、ブレイヤールが大臣のルガデル口に事の次第を話す。厳格な大臣の顔は、ますます険しくなった。

「それで王子は、相手の石人をどう見立てました？」

「かなりの術士だった。あっという間に、館を砂にしてしまった。館の石には、形を保つ魔法が埋め込まれていたはずなのに」

「それで、あなた様はどうされました。城主として、魔法使いとして、その者にどう対されましたか」

「どうって……」

大臣の厳しい追及に、ブレイヤールは思わず口ごもる。そして、グルザリオと目を合わせた。グルザリオは溜息をついて助け舟を出す。

「子どもの癖に、たいした手練れでしたよ。使う魔術の趣味は最悪でしたが」

「どう巧みだったかは、もう少しお聞かせ頂かなければ、分かりませんな」

大臣はいかめしい顔つきのまま、食卓の椅子をブレイヤールに示す。ブレイヤールは溜息をついて、椅子に座る。大臣は向かいの椅子に座って構えた。グルザリオの助け舟も、大して役には立たなかったようだ。

一方のキゲイは暖炉の側で、昨晚の優しい老婦人に温かいお茶を入れてもらっていた。ブレイヤールが大臣に話し始める。耳を傾けると、どうやらキゲイが気を失った後が本番だったらしい。

レイゼルトの砂竜巻が庭園を吹き荒れたとき、遅れてブレイヤールは逆向きの力を竜巻に与えようとした。それは成功した。砂の渦は止まらなかったが、風は止まった。二人の魔法使いが風に力を加えたため、庭園の気は不自然に停滞した。竜巻に飲まれた水は砂竜巻の中で霧になるまで細かく砕かれており、庭園に霧雨を降らした。

そこへレイゼルトは砂を、ブレイヤールめがけて叩きつけてきた。ブレイヤールの周りで砂を硬め戻し、石の中に閉じ込めてしまおうとしたらしかった。もちろんのこと、物を壊す魔法より、物を作り出す魔法の方がずっと難しい。レイゼルトはこの魔法だけでも、十分な才能を見せていると言える。

ブレイヤールは自分の周りに集まった砂へ、霧雨を集めて染み込ませた。水は砂を包み、ブレイヤールの魔法の支配下にあった水は、砂のほとんどを制した。しかし彼は、水をまとって重たくなった砂粒を持て余した。どう使えばいいのか、分からなかったのだ。

これら一連のやり取りで何よりもまずかったのは、ブレイヤールが防戦一方だったことらしい。レイゼルトが常に先手で、うわ手だった。

ブレイヤールが迷っている隙に、レイゼルトは、ブレイヤールに奪われた砂も自分が操っている砂も、あっさり手放してしまった。代わりに、池の中央に立っていた大理石の木に魔法を当て、鋭く尖った黒曜石の葉すべてを飛び散らせた。

ブレイヤールは本格的に命の危険を感じた。恐怖に駆られ、彼は黒曜石の葉に全意識を集中させた。レイゼルトの魔力を一瞬にして葉から払い、黒曜石を木っ端微塵に砕いたのだ。反対に彼の魔法による支配は、停止した大気からも、湿った砂からも逸れた。ずっと自身を守っていた、魔法の守りも崩れてしまった。

留められていた庭園の大気が、再び激しく渦を巻いた。ブレイヤールは完全に虚をつかれて転倒し、石畳の上をなすすべもなく吹き転がされる。彼は館の基礎に頭をぶつけ、気を失った。そして黒曜石を打ち砕いたときの魔力の余波もまた、レイゼルトを襲っていた。

「結果的には、王子が奴を追い払ったことになるんでしょう。あの赤い髪をしたガキ、ふらふらになって逃げていきましたから」

グルザリオが、ブレイヤールが気絶した後の短い顛末を付け足し、話を締めくくる。大臣は、グルザリオをじろりと睨みつけた。

「おぬしは何もせんで、見とっただけか」

「俺ごときが、下手に手出しできませんよ。王子やキゲイを置いて、あいつを追いかけるわけにはいかんでしょう」

グルザリオは悪びれる風もなく、さらりと答える。

キゲイはお茶のコップを静かに置き、三人の近くに行って立ち止まった。ブレイヤールがキゲイに気が付いて顔を向ける。大臣達もキゲイを振り返る。キゲイはブレイヤールが頭に血のにじんだ包帯を巻き、顔にもひどい打撲と擦り傷を負っているのを見た。三人の石人が見つめる中で、キゲイは自分の顔が熱くなるのを感じる。涙で視界が歪む。

「あいつ、レイゼルトは、ディクレス様に雇ってもらおうと言っていました。お姫様が傭兵達に捕まったときに、助けようとしてくれたんです。人間に味方するって言ってたし、それに、妙な銀の鏡を僕に預けたんです」

キゲイは涙をこぼすまいと歯を食いしばりながら、そう言った。もう、レイゼルトに関してだけは、知ってることを何でも話すつもりになっていた。レイゼルトはブレイヤールを殺しかけたのだ。いくら人間の味方でも、そのために平和に暮らしている罪もない人達を傷つけるなんて、ひどすぎる。

石人達はきょとんとしてキゲイの言葉に聞き入ったが、あまりに唐突すぎる告白に、内容を理解するのに少し時間がかかった。

「レイゼルトとな？」

しばらくして、大臣が最初にキゲイへ問い返す。口調は柔らかかった。

「殿下をひどい目に合わせた術士が、確かに、そう名乗ったのかの？」

キゲイはうなづく。それに対する石人達の反応は、妙だった。三人とも考え込む様子を見せたのだ。その表情は、一様に苦々しい。

「あいつの名前が、何か変なの……？」

キゲイがブレイヤールに尋ねると、彼は何度か首を縦に振った。自分自身でもその返事を確かめるような、用心深い頷き方だ。

「石人の名前は、生まれたときちょうど頭上に輝いている星の名から、付けられるんだ。星読みの神官が魔法の天球儀を使って、その光が僕達の目に届かない小さな星まで、見逃さずに名付けるんだ。星の名はどれひとつとして同じものはないから、石人の名前も二つとして同じものはない。レイゼルトの名を持つ者は、すでにいた。七百年ほど前の、歴史上の人物だ」

「たいそうな名前を名乗って、いきがってるもんだ。石人に恐怖を与える名前かもしれないが、同時に魔法使いとして恥っさらしな名前さな」

ブレイヤールの言葉に、グルザリオが嫌悪に顔をゆがめて呟く。

キゲイは内心首をかしげた。七百年前といえば、ちょうど人間と石人が争っていた時代ではないだろうか。ディクレス先王について石人の世界へ行くことが決まったとき、里長が地読み士達を集めて、簡単に話してくれた。

「七百年前の大戦……」

「そう。石人と人間が、争っていた時期だ。終結したのは七百と十八年前になる」

キゲイの呟きに、ブレイヤールが答える。

「人間達が、石人の持つ魔法の宝を求めて侵攻してきたんだ。でもこの戦は、三十年ばかりで終わった。人間達は石人の世界から追い返された。石人も人間も、多くを失った。戒めのために、平原の端から端まで境界石群を建てて、石人と人間の世界をはっきりと線引きしたんだよ。お互い二度と、相手の世界を侵さないと約束して。キゲイはこの先の話を、聞いておいてもいいかもしれないな」

ブレイヤールは右頬の擦り傷へ、薬湯に浸した布を当てる。レイゼルトとの争いで、彼は右半身を強く地面に打ち付けていた。特に右の頬骨は赤黒く血が滲み、ひどいありさまだ。

「長い話だから、俺がしましょう」

主の痛々しい姿に溜息をつきながら、グルザリオは大臣の隣の席に座る。実際彼の方が、ブレイヤールより話し慣れていたようだ。

「戦の原因となっていた魔法の宝というのは、禁呪だった。禁呪ってのは、人が使うにはあまりに魔力的すぎるものだ。魔法なのに魔力的すぎるって表現はおかしいかもしれないが、人が使うにはあまりに多くの犠牲を必要とする、強大な力を持つ魔法と考える方が分かりやすいかもな。人間達が狙っていたのは、とどのつまりこの魔法が記された魔術書だったわけだ」

人間と石人の戦は長く続き、先に疲労の色を見せ始めたのは石人達だった。石人は魔物との戦いは慣れていても、大勢の軍隊を相手に戦ったことなど滅多になかったからだ。味方の犠牲が大きくなるにつれ、石人の中には禁呪を用いて人間を追い払うべきだと考える者達も現れ始めた。人間が求める禁呪を人間に向けて使い、その力の恐ろしさと扱いの難しさを身を持って知らしめるのは、有効な手立てかもしれなかった。

しかし禁呪が使われることはなかった。人間との戦にうんざりしていたのは確かだが、それが禁呪を用いる正当な理由になりはしない。石人にとっても、禁呪は難しく危険な魔法だったのだ



。 やがて戦は、人間達の敗走によって終わった。境界石群を建てるのが決まったとき、人間と石人、それぞれの思惑はどうだったのだろうか。人間は、境界石群の向こうから、石人が復讐のために追いかけてこないことを願ったかもしれない。石人もまた、魔法もろくろく知らないような荒っぽい種族と、きっぱり縁が切れることを喜んだかもしれない。

境界石群は、大空白平原を端から端まで途切れることなく分断する長大なものだった。始端である最西端の海岸から終端である東の竜骨山脈までを、通して歩いた者はいないはずだ。人間が平原から石を切り出して運び、石人が石を地面に立てた。その石に人間は自らの神々を掘り込み、石人は星の名を刻んだ。互いに顔を合わせないよう、人間は昼に作業し、石人は夜に作業した。

石人が人間に興味を持ち始めた理由は、この時期にあるのだろう。作業場におかれた巨大な石柱を、魔法も使えない人間がどうやって切り出して運んだのか。人間の忘れ物らしい小さな楽器は、華やかな音階を奏でた。戦場では目にしたことのない人間の持ち物を、石人は初めて目にした。

境界石での共同作業によって、石人は人間達の存在をまじめに考えるようになった。人間世界は土地の持つ魔力は乏しいが、それ故に魔物も精霊もほとんどいないことを知った。石人世界に比べ、種をまけばそれ以上の実りで応える豊かな土地がそこかしこにあることも。時間を分けて境界石での作業をしていたとはいえ、決まりを破って互いに会う者達もいたようだ。それまで石人達は、人間世界にも人間にも興味はなかった。魔力を持たない土地に行けば、石人は三日で干からびてしまう。だからそこに住む人間と、交流を結ぶ必要もないはずだった。

境界石群を立て始めて数年後。すでに、石人達の当初の思惑は大きく変わっていた。

人間は不可侵の誓いを疑うことなく、境界石群での作業を続けていた。石人も変わらず境界石を立て続けてはいた。ところがその裏で、石人の国の幾つかが、人間世界を手に入れようと言い出したのだ。人間にとってはとんでもない話だ。境界石の誓いは、なんだったのか。ところが石人達にとって、人間との約束など、必要がなくなれば守る義務もないものに過ぎなかった。先の戦に勝ったのは、自分達の方なのだ。

当然、人間を支配することに反対する石人の国もあった。人間世界へ侵攻したがっている国は、禁呪によってそれをなそうと主張していたからだ。まともに戦えば手ごわかった相手でも、禁呪なら簡単に勝てるという算段だったのだろう。彼らは人間世界の富に目が眩んでいた。

もっともこれに反対する石人の国も、あまり関心な本音を持っていなかった。これを機会に相手の国から禁呪を取り上げ、自分達のものにしようと考えた。禁呪はそこに存在するだけで、大きな魔力を城に与えてくれる。魔力は石人の城を豊かにするのだ。

人間界への侵攻を主張する国々も、それに反対する国々も、その愚かさではもはやどちらも救いようがない。

やがて石人の国々は二つの陣営に分かれ、武力で争うこととなる。その間、侵攻派の国々は人間に対する禁呪の使用を唱えていたとはいえ、石人の国々に対して、禁呪を使うことはなかった。同族にそのような恐ろしい力を振るうのは、ためらいがあったからだ。

この状況に、石人世界の中心である「星の神殿」の大巫女は、ひどくお怒りになった。ところが大巫女は俗世にかかわる権限をもたない。彼女は唯一の抗議手段として、次代の大巫女を指名なされると、神殿の中核にお籠りになった。石人世界全十二国が考えを改めない限り、一切の食事をとらず言葉も発しないと申されて。

大巫女の静かな抗議は、誰の耳にも届かなかった。石人世界は騒がしくなりすぎていたのだ。尊い大巫女は空しく亡くなり、次代の大巫女は幼すぎたため、石人達を止めることのできる者はいなくなった。

やがてこの戦は、石人達に取り返しのつかない代償を求めることとなる。

広大な湖の中にそびえ立つ赤の城は、人間界へ攻め込むことに反対していた国のひとつだった。しかし戦に負け続け、いまや目前に敵の連合軍が迫っていた。味方の国々もそれぞれに押され気味で、援軍を望める状況にない。

湖岸には、敵の軍勢が何千と布陣していた。その様は、色とりどりの花が咲き乱れているようだった。石人は自分の髪の色彩を誇りに思っており、決して頭すべてを覆う兜をかぶらない。また兵士達は、それぞれが所属する国の色を身に付けている。

赤の兵士達は圧倒的な数の敵を前に、城に籠る以外なかった。出て行けば、赤は敵の色彩の渦に巻き込まれて、消え行くしかない。兵士達は迫る運命に重苦しい夜をじっと耐えて、決戦がおとずれる夜明けを待った。

空が白む。赤の兵士達は見張りの高台から湖岸を確認する。驚いたことに、敵の姿がひとつも見当たらない。それどころか、様子が妙だ。兵士達は赤王<sup>せきおう</sup>の命により、湖岸へおもむく。

それは言いようのない、恐ろしい光景であった。敵の陣はそのままだった。いたる所に、敵の武具と鮮やかなマントが砂にまみれて落ちている。天幕の中も、砂だらけで無人だった。敵達はすべて、血肉を砂に変えられ崩れてしまっていたのだ。

兵士達は怯えきって戻り、赤王へ見たままを報告した。ところが赤王は顔色一つ変えず、それどころか満足そうな笑みを浮かべてこう言ったそうだ。

「それこそ禁呪。奴ら自身が用いようとしていた力なのだ」

彼はその先にも言葉が続けたそうだが、記録には残っていない。王の傍らにいた書記官の筆が、事のあまりに凍りついたためだった。

赤王が禁呪を用いて敵を一掃したという話は、その日のうちに城中に知れ渡った。すべての家臣と国民は、国王に裏切られたと感じ、王の居室へと踏み入った。彼らが見たのは、すでに冷たくなった王の亡骸と、その傍らに立つ成人した王の息子、そして涙にくれる王の妻の姿だった。詰め寄る家臣に王子は青白い顔を向け、こう言ったという。

「もはや戦どころではない。王の罪は、あがなうにはあまりに深い。だが、手を貸してくれ。まずは城にある禁呪の書をすべて破壊せねば。二度と過ちを犯さぬために」

時を同じくして、湖岸にいた本当にわずかな連合軍の生き残り達が、恐怖に鞭打たれるまま走り続けていた。そしてとうとう、赤の国の援軍に駆けつけていた白の国の軍と鉢合わせた。

白の軍ははじめ、こちらへ駆けてくるのは赤の国の使者だと思っていた。彼らの姿が赤かったからだ。しかし近づくにつれ、彼らは赤い服を身に付けているのではなく、裸で全身から血を滲

ませていることに気がついた。彼らは高位の魔法使いばかりだった。全身砂だらけで、皮膚はやすりをかけられたように傷つき、頭髪も頭皮と一緒に抜け落ちていた。裸だったのも、服が肌に当たってひどい痛みを与えるため、脱いでしまっていたのだ。

白の軍は彼らから何が起こったのかを問いただすと、きびすを返して自分の国へと急ぎ足に戻っていった。

赤の国が禁呪を使ったことは、こうして瞬く間に石人世界すべてに伝わった。赤の国は禁呪によって、味方の国々はおろか敵の国々をも裏切ったと言える。石人世界の中心である「星の神殿」の神官達、そして神殿が認める正十二国のうち、赤の国を除く十一国の王が一堂に会することとなった。

常に中立にあり石人世界の行く末を見守る神殿も、沈黙し続けることは難しくなっていた。それに禁呪を使う者を罰するのは、神殿の役目でもあった。その点では禁呪を使って人間界を支配すると言っていた国々も、神殿に対する反逆を起こしていたことになる。こういった状況もあって、神官と十一人の王との会議の雰囲気は、大変とげとげしいものだった。

会議では、赤の国は禁呪をもって罰するより他はない、という意見が出た。禁呪には禁呪でしか対抗できないのだ。十一人の王達は、赤の国の王はこのまま禁呪の強大な力に魅入られて、石人世界を支配する気になるだろうと考えていた。

王達と神官は長いこと意見を交わしていたものの、結局何かを決めることはできなかった。それどころか赤王の死が伝えられてくると、元凶は消え心配事はなくなったとばかりに、それぞれの王達は自分達の国へと帰ってしまった。そして再び戦争をはじめた。神殿だけが混迷する赤の国での調査を開始した。

ところが禁呪の使い手だった赤王はいなくなったはずなのに、同じ惨事が起きた。黄緑の国と白の国が戦っていたとき、突如黄緑の軍勢が砂になって崩れ落ちたのだ。別の戦場でも事は起こった。禁呪で人間界を支配しようとしていた国々は、ことごとく砂の禁呪のえじきと成り果てたのだ。

再び神殿によって、会議が招集される。王達の顔には、恐れがありありと浮かんでいた。前回とはその顔ぶれも、いくぶん変わっていた。何人かの王は砂になって亡くなっていたのだ。

そこへ十二人目の王、新しい赤王が現れる。彼は他の王の敵意ある視線を浴びながら、会議室の中央へと歩み寄った。静かに立ち止まり、周りを円形に囲む十三の椅子を見渡す。そのひとつに腰掛けている神官の前へ、彼は先の王の名をささげた。罪を犯した王族は、命と名前をとられるのがしきたりだった。

「なぜこのようなことが続く！」

緑王が我慢できずに叫んだ。

「術者は誰なのだ！」

残りの十人の王も立ち上がる。赤王はやつれきった顔を王達へ向けた。

「わが王族に、以前にも禁呪についての罪を犯した者がおりました。幼き頃何の計らいか、封印された書庫から禁呪を盗み出した者です。名はレイゼルト。わたくしの実弟でした。禁呪に触れるは死に値する罪。しかしまだ幼い子のしたこと。今は亡き先代の大巫女様は情けをくださり、

彼は罪人の塔に幽閉されるにとどまりました。

それから年月が流れ、この戦が起こりました。いつかは分かりません。また、手段も分かりません。わが先代は扉が塗りこめられているはずの塔から彼を引き出し、ひとつの禁呪を与えたいのです。まことに信じられませんが、彼はその禁呪を読み解きました。そして使ったのです。湖の畔で。塔に封じてから食事や衣類を小さな穴から差し入れるだけで、人との接触もありませんでした。ようやく言葉を話せるようになった程度の年の頃より塔に入ったため、まして文字など……」

赤王はその場で両膝をつき、こうべを垂れた。

「すべてはレイゼルトが手を下しております。それを指示したのは先代。今もレイゼルトは、先代の言葉通りに動いていると思われます。わが国は全力でかの者の行方を追っておりますが、いまだその影すら捕らえることかありません。一刻も早くレイゼルトを止めねば、石人の国々の半分は滅びてしましましょう」

「それは我らに対する脅しか！ 赤王！」

侵攻派の王達はそろって立ち上がる。逆に赤王は、深くひれ伏した。

「我々の力だけでは、かの者を止めるに叶いません。赤の国の禁呪はすべて捨て去りました。先代の妻が禁呪を残らず窯へ、その身と共に運び入れました。そうしてわたくし自ら火をつけ、神官長と共にすべて灰になったのを見届けたのです。少なくともレイゼルトを除き、禁呪に触れた者は赤の国より消え去りました。どうかもう戦はやめ、力をお貸しくださります。どうか」

赤王を罵っていた王達も、この言葉に口をぴたりと閉ざした。そこへ赤の軍が砂になったという、急な報告がもたらされる。

「これもまた、亡き先代が末息子に遺した指示の一つか」

騒然とする会議室で、神官は静かに問いかけ、赤王は弱々しく首を振ってそれに答えた。度重なる心労のあまり、赤王の心はこれ以上かき乱されることはなかった。

「力は、人の心を狂わせます。わたくしは命を懸けて、最後の罪人を追わねばなりません」

赤王はそうとだけ答えたという。赤王の「人の心を狂わせる」と言わしめた「人」とは、先代赤王だけでなくこの戦を始めた石人全てを暗に指したと言われている。

話には少々ややこしい所もあったが、キゲイはあきれ返ってしまった。七百年前、人間との戦以外にもこんなことが石人世界で繰り広げられていようとは。

ブレイヤールが先を続けた。

「結局、十二の国は協力してレイゼルトを探すことにした。ところが、協力したとたんどの国も関係なく、砂の禁呪に襲われ始めた。レイゼルトは、石人の約半数を砂に変えてしまったと言われている。彼のせいで二つの城が滅びた。

年齢でいえば、ちょうどキゲイくらいかな。皆が彼を恐れた。姿も幽霊みただったそうだ。骨と皮だけで、目が爛々と光ってて。それでもとにかく、レイゼルトは抵抗むなしく徐々に追い詰められていった。そしてとうとう、黄緑の国の王子によって強力な一太刀を浴び、滝の下へ落ちて死んだ。かわいそうに、黄緑の王子も道連れになったそうだ。でもこうして、石人は全滅せず

にすんだ。

今度こそ誰も彼も禁呪の恐ろしさが身に染みて、すべての国は持っていた禁呪全てを葬り去った。あらゆる野心も消えうせて、憂鬱な平和が訪れた。石人達はすべての発端は人間界への興味にあったと考え、人間との接触をひどく嫌うようになった。今は記憶が薄れて石人も緊張感をなくしているけど、許可なく境界石群を越えると罰則がきついのは、今でも変わらない」

そこでブレイヤールは深く息をつく。キゲイは尋ねた。

「もしかしてこの国、レイゼルトに滅ぼされちゃったんですか？」

ブレイヤールは首を振ったが、なぜかがっくりとうな垂れてしまう。グルザリオが代わりに答えた。

「確かにこの国は、レイゼルトを追っている時期に滅びたんだけどな。でも、レイゼルトとは直接関係ないことで滅びたんだわ。ほら、今まであちこちの石人の国と戦争してたろ？ レイゼルトが現れたからといって、いきなり皆仲良く協力するってわけにゃ、いかないじゃないか。レイゼルトを追っている間も、ああだこうだ揉め合っているうちに……。その、なんだ、当時の王様があっさり暗殺された。王には世継ぎがいなくて、王位継承にふさわしい力を持つ王族も運悪くいなかった。王のいない城は、安全が約束される場所じゃない。レイゼルトの脅威もあった時代だ。国民達は皆逃げ出し、城は空っぽに。踏んだり蹴ったりだよなあ」

そこで大臣が咳払いをして、グルザリオの話を守る。ブレイヤールも疲れた表情で顔を上げた。

「それで、今日王子が出会った魔法使いのことですがじゃ」

「彼が何者かという話はともかく、魔法使いとして年齢不相応に優れていたのは確かだった。大臣、言いたいことは分かってるよ。彼はいつでもこちらの命を奪えた。けどそれをせずに、魔力だけでの力比べに持ち込もうとしたんだ。彼が人間の味方だとすれば、この城や僕の実力を知りたがるのは当然かもしれない。あいつの素性が分かればいいんだけど」

「そういや……」

グルザリオが二人の話に口を挟む。

「あのガキ、右腕に籠手をしてましたねえ。確かレイゼルトは、右手が手首の先からないんですよ。小さい頃禁呪を右手に掴んで盗んだから、切り落とされたんだとか」

キゲイは思い出して、慌てて口を開いた。

「はじめて僕があいつと会ったとき、あいつ、自分で言ってましたよ！ 小さい頃に何か触って、右手がなくなったって」

「本当に、なかったか？」

グルザリオの追求に、キゲイは困って首をかしげた。実際に右手がないのを確かめたわけではない。大臣がグルザリオを叱る。

「馬鹿馬鹿しい。あの子どもは才能を鼻にかけて、『レイゼルト』を気取っておるだけじゃ」

「ただの子どもとも思えないけど」

「王子、あなたまでそんなことを……」

「大臣、分かってるって！ それよりキゲイ、確かあいつに、『銀の鏡を預けられた』って言っ

てなかった？ 見せてくれるかい」

キゲイはうなずいて、懐から銀の鏡を取り出す。少しばかり曇っていた鏡面を袖でちょっと磨いてから、ブレイヤールの方へ差し出した。ブレイヤールはしばらく鏡の上に手をかざし、躊躇する仕草を見せる。結局彼は手に取り、まずは裏返して背面の繊細な彫刻に目を細める。それもつかの間に、再び手の中でひっくり返して鏡面をじっと覗き込んだ。

レイゼルトはその鏡を、魔法の品だと言っていた。しかしキゲイがそれを持っている間、それは銀の鏡以上のものではなかった。裏側の彫刻が美しいために、宝物みたいではあったが。

鏡面を真剣に見つめるブレイヤールは、やがて深い溜息をついた。

「これは……。困ったな」

呟くなりすばやい動作で鏡を裏返し、キゲイに差し出した。キゲイは受け取ったが、「困ったな」と言われた物を返されても、それこそ困る。グルザリオと大臣は、ブレイヤールと銀の鏡を心配そうに見比べた。

「魔術書の類だ。強い魔法を鏡の世界に封じている。内容は……敢えて見たいとは思わない」

ブレイヤールは額に手を当てて、目をしばたく。グルザリオと大臣の表情が固まる。ブレイヤールは前髪をつかみながら、どこを見てもなく天井をあおいだ。

「大臣、七百年前、本当にすべての禁呪を破壊したんだろうか。『レイゼルト』は、砂の禁呪が書かれた魔術書を持っていたと言われてるんだが。あれは彼の死後、ちゃんと回収されたんだろうか。いや、まさか本当にあいつが『レイゼルト』だと考えてるわけじゃないけど……」

「調べてまいります」

大臣が椅子を後ろに倒して、勢いよく立ち上がった。その腕を、グルザリオがつかむ。

「待ってください、大臣殿。まさか赤の国に、直接問い合わせる気じゃないでしょうね。それに王子、あんた今、その鏡を触ったんです。まかり間違っても、本当に禁呪だったらどうする気で？

神殿にばれたら、首が飛びます。そうなったら白城は完全に終わりだ！」

「まだこれが禁呪と決まったわけじゃないよ。けど、出所を調べる価値はありそうだ。これはれっきとした石人の品物なんだ。それだけは、間違いないだろう」

鏡に触れた痕が手に残ってしまったか気にするように、ブレイヤールは右手をしげしげと眺めた。それから視線だけをキゲイに移す。

「キゲイ、やり方を教えるから、その鏡の彫刻を型取りしてくれない？」

「はい。……あの、これ、僕が持っても大丈夫なんですか」

「うん。魔法使い以外の人には、ただの鏡だよ。だけど、魔法がかけてあったね。受け取る時、解いてしまったけど。後でもう一度かけなおしとこう。もうちょっと穏便な魔法で」

「え……。どんな魔法？」

「君以外の方がその鏡に触ると、ひどく痛い思いをする。君と鏡の距離が一定以上離れても、君はひどく痛い思いをする。鏡を盗まれたり、落としたりしてもすぐ気がつく魔法だよ」

キゲイは思わず鏡をにらみつけた。レイゼルトもひどい魔法を鏡にかけてくれたものだ。

大臣とグルザリオはレイゼルトの資料を調べるために食堂から出て行き、ブレイヤールは早速型取りの準備を整える。彼に教えられるまま、キゲイは銀の鏡を沈めた木枠の中へ溶けた蠟を注

ぎ込む。後は蟻が固まるのを待てばいい。

「あの、ディクレス様達は、禁呪を探しにここに来たんでしょうか。魔法の宝を探しに行くって話だったし……」

キゲイはおずおずと、気になっていたことを尋ねる。してよい質問かどうかは分からなかったが、彼はブレイヤールのことを信頼してもよい人物だと思いはじめていた。今ひとつ頼りないものの、その性格に軽々しさやずるさは感じられない。

「どうなのかなあ」

ブレイヤールは、壁の掘り込み座敷に這い上がりながら答えた。

「石人世界に禁呪がもうないことは、タバッサでそれなりに調べれば、すぐに分かることだ。それ以前に人間が禁呪を使うには、多くの優秀な魔法使いが必要になる。多くの生贄も。それもタバッサで聞ける話だ」

彼は座卓で右腕の袖をまくり、そこにも薬を染ませた布を巻きつけた。キゲイは食卓の席に着き、ブレイヤールを見上げる。

「禁呪は力でしかない。禁呪で敵の国を滅ぼしても、その先のことがある。国を救うには、禁呪以上のものが必要なんだ。そんな奇跡みたいなものがこの世にあるんだろうか。僕にも、ディクレス殿が何を求めてこの地に来たのか、よく分からない」

彼はキゲイの様子を見つめ、それからさらに続けた。

「いずれにせよ、ディクレス殿はこの城に来るだろう。僕は金銀財宝ならば、いくらでも出すつもりだ。それで満足して人間世界に帰ってくれるなら。事実、宝物庫のいくつかは鍵をゆるめてある。城を探索していれば、必ずそこを見つけられるだろう。これは石人の国々が僕に与えた指示でもある。どの国も、人間がこの地に入ってこようとしているのは知っているけど、何を探しに来たのかは知らない。適当な魔法の宝が見つければ、帰ってくれるだろうと思っているのかもしれない。少なくとも魔法の宝があれば、魔術を使って敵と有利に戦えるようになるだろう」

「ちゃんとした魔法の宝じゃないと駄目なんだよ。適当な魔法の宝じゃ駄目なんだ」

キゲイは溜息をつき、うなだれる。そこでふと彼は思い出した。

「そういえば……ディクレス様は、『希望でなく奇跡を探しに石人の世界に行く』って話してたって、里長が言ってた。えーと、予言者様が、『サイコロの目を当てて見せる』って言ってたみたい。ん、ちょっと違ったっけ」

「奇跡。奇跡か……」

「そうだ！ 『石人の地に光あり。英雄が現る』って言ってたんだ！」

「英雄？」

ブレイヤールは少し驚いた顔をして、居ずまいをただす。

「それは初耳だな。それにしても、光？ 英雄って、誰？」

「さあ……。そこまでは聞いてないです」

「予言者様ねえ」

ブレイヤールは右腕をさすりながら、視線を宙にさまよわせる。彼の頭には、その予言が本物なのかどうか、といった疑いが浮かんでいた。もし本物であれば、その予言は石人にも関係する

のではないだろうか。

彼の視線はしばらくして、蠟の満たされた木枠へ移った。

「もう冷めてるかな。魔法をかけておいたんだけど」

キゲイはブレイヤールに言われたように慎重に木枠をはずし、銀の鏡をはがして蠟のかたまりを渡す。

「思ったよりきれいにいったね。それじゃ、これを紙に写すか……」

「あのう、この鏡、どうしたらいいんですか？」

キゲイは鏡の処理に心底困っていた。アークラントのことでも頭が一杯なのに、これ以上妙なものを抱えていたくない。そんなキゲイの心中に対し、ブレイヤールの返事はあっさりしすぎていた。

「そのまま持っていて」

「ええっ！」

「近いうちに仲間の所に帰るんだし、そのときに自称レイゼルトともまた会うだろう。なぜ彼がこんなものを君に預けたのは謎だけど、君がそれを持ってないと、まずいだよ。いっそ当人に返してしまってもいいよ」

「ううっ」

キゲイは顔をゆがめる。そうだ。皆の所に帰るということは、レイゼルトのいる陣営に戻るといことなのだ。うれしい反面、なんだかひどく気が進まない。

「でも、それ以外の人には見せちゃいけない。ディクレス様にもだ。それだけは約束して」

「はい……」

妙な鏡ともうしばらくの付き合いになることが分かり、キゲイは情けない顔つきで仕方なく返事する。ブレイヤールはそんなキゲイを置いて、腰をさすりながら食堂から出て行った。

――奇跡を探しにくるなんて、魔法の宝探しよりひどい。まるでおとぎ話じゃないか。

白王は胸の内をつぶやく。アークラントの行動は、まったくもって無謀で無益な、断末魔のあがきにしか見えなかった。現実的な思考から完全に逸脱している。それでもアークラントの人々は、ディクレスを勇気と知恵に恵まれた人物として慕っていた。そんな人が、こんな非常識な行動を起こすだろうか。予言者の言葉は、それほどまでに力あるものだったのだろうか。

――皮肉なものだな。ディクレス殿は光と英雄を求めて、この地にやって来た。味方として、石人にとっては闇であり、非英雄のレイゼルトを騙る者を連れて。

「アークラント。かつて英雄が建てた国。彼らは再び英雄を必要としているのか……」

白王は中庭を見渡し、今年は春が遅れていることを思う。それから城の奥へと足早に消えていった。



翌日の早朝。ブレイヤールは起き抜けに、暖炉の脇に開いている石壁の小さな穴の中を手で探る。指先に、城の芯である構造石がひんやりと当たる。外気の冷たさが構造石まで染み入っているのだ。石に手の平をつけ集中する。しばらくして彼は壁の穴から手を出し、暖炉の火にかざした。

「さあ来たぞ……」

――他国の偵察達は、気づいたかな。アークラントもいい隠れ場所を見つけたもんだよ。城の外だけど、城壁よりは内側か。これじゃ、こっちも動向が掴みにくいなあ。レイゼルトの助言もあったんだろうな。

遠くから雷のような音が響く。彼は部屋に開いた小さな窓から外に目をやって、ちょっと眉をひそめただけだった。また城のどこかが崩れたのだろう。彼は室内へと視線を移す。部屋の書き物机の上に、一枚の薄紙がある。それは蠟の鋳型から写し取った、あの銀の鏡の絵だった。

――あの鏡は、持っていた奴に返すのが一番だ。あいつほどの魔力を持つなら、鏡に隠された魔法を知っているはず。それにしても何者だ。どこであれを手に入れたか、聞き出せばいいんだけど。

彼は薄紙を持ち上げ、朝日でよくよく確認する。彫刻は繊細で入り組んでおり、綺麗に書き写すのは苦勞した。鋳型の蠟はすでに昨晚、溶かして無きものとしている。銀の鏡の存在は、まだ他の石人にばれてはならない。

「何の魔法が封じられているのやら……」

興味が無いといえは嘘になる。しかし下手な好奇心は身を滅ぼす元だ。彼は魔法使いとして、本能的に鏡の存在を忌んでいた。この感覚は、大切にしたいほうがいいだろう。彼は薄紙を油紙とともにそっと丸め、木製の丸筒に収める。

彼は黄緑の城へ行く必要があった。必要な資料が白城の図書館では手に入らないからだ。ここは五百年前から放置されっぱなしの場所になっていた。書棚に並ぶ本は虫や小さな妖精らに食い荒らされ、まともに読める物も少なくなっている。

――トエトリアにこの写しを渡して調査を頼めば、国中の識者を集めてあっという間に、あれが何かを突き止めてくれるだろうけど。……最後の手段にすべきだな。まずは自分で調べてみたほうがいい。もし禁呪だったら、たいへんなことになる。

ブレイヤールは神殿騎士達の厳しい立ち姿を思い浮かべ、首をさする。

「さて、今日はまず、キゲイを仲間の元に返してあげなきゃな……」

彼は織り機のタペストリーに目をやる。描いた森の姿はだいぶ薄くなっていた。境の森にかけた幻術も、太陽の光にほどけかけている。

キゲイは、はやる気持ちを抑えながら朝食に手をつけた。皆の所に帰れるのだ。それでも昨日のレイゼルトの一件があったから、手放しに喜ぶわけにもいかなかったが。

朝食は、丸い形の米パンとスープだった。パンはそのまま武器になりそうなくらい硬かった。

隣の席のおじいさんが畑仕事に節くれた強そうな指で、パンを細かく千切ってくれた。スープは色あせた緑色に濁り、ベーコンの切れっぱしと乳白色のチーズの小さな塊が、油の粒と一緒に浮いている。木さじを突っ込んですくうと、さじの端に緑色のひらひらしたものが、べろんと垂れ下がってついてきた。何かの葉っぱの成れの果てらしい。昨日の夕食といい、石人料理はどうも穀物や野菜を完膚なきまで煮潰す傾向にあるようだ。

キゲイは周りの石人達を真似て、固すぎるパンをスープにつけてふやかす。スープの味はベーコンの出汁のおかげか、すこぶるよかった。特にチーズは片栗粉の膜に覆われ、つるりとした舌触りが心地よい。淡白な味はベーコンの脂身とよく合った。昨日の夕食より断然おいしい。

ブレイヤールはというと、硬いパンを金づちで粉碎し、椀の中へ放り込んでいる。右頬の傷はまだ乾いておらず、右腕の打ち身も青黒くなっていた。見ているだけで痛々しい。頬の腫れが比較的ましなのは、塗り薬のおかげなのだろう。右腕も痛むらしいので、主に左手で食事をしてきた。どうやら彼の椀の中身は、昨日の灰色の粥をミルクでのばしたものらしい。王子たるものに、昨日の残り物を食べさせていいのだろうか。キゲイは疑問に思ったが、黙っていることにした。

食事がすむと、ブレイヤールはキゲイを呼び寄せる。いよいよ仲間の元へ帰るのだ。

「今朝もたいしたものが食べられなかったな。冬の蓄えがつきかけてるから。黄緑の城に行けば、もっと美味しいものが食べられたんだけど」

道々、ブレイヤールは言い訳がましく呟いた。王女を助けたキゲイを十分もてなしてやれなかったことが、気がかりのようだ。もっとも、キゲイはそんなこと気にもしていなかった。あの老婦人は優しく、キゲイの服を洗濯してくれたばかりか、ほつれた所も繕ってくれた。他の石人の老人達もそれぞれに皆親切だった。

ブレイヤールは城の複雑な廊下を早足に進んでいく。分かれ道で時々方向を確かめるような仕事をしたものの、それ以外はほとんど迷うことはなかった。キゲイは、この巨大な城の構造を把握しているらしいブレイヤールに驚く一方、自分でも周りの様子を記憶におさめるよう努力した。石人達のいる場所を、覚えておくためだ。皆の所へ戻っても、また傭兵達に嫌がらせをされるかもしれない。そのときの逃げ場が欲しかったのだ。

「あのさ、キゲイ」

ブレイヤールが再び口を開く。二人は、円形の広間へちょうど入るところだった。

「アークラントの他の人にばれないよう、地読み士の皆のところへ、こっそり帰らないといけない。君が戻ってこれた適当な言い訳は、向こうに着くまでに僕が考えとくよ。だから皆の所へ帰っても、僕達のことは誰にも話さないでおいて」

「え、あ、はい」

キゲイは上の空で返事する。彼は、周りの風変わりな様子に、心を奪われていた。

ここの広間はどうやら塔の底らしく、壁に沿って螺旋階段がぐるぐると、はるか頭上へ伸びている。遠い天窗から朝日が暗い塔内に滲みこんでいるが、二人のいる最下層までは届いていなかった。壁には窓らしき開口部は一切なく、代わりに所々、透明な石材が丸い小窓のようにはめこまれた部分がある。小窓の幾つかは真っ暗で、幾つかは光を通して明るく浮き上がり、塔内を淡

く照らしてしていた。二人は螺旋階段を上がり始める。

「それから例の鏡のことだけど。僕も近々、詳しく調べてみるつもりだ。もし何か分かったら、こちらからまた会いに行くかもしれない」

「えっ？ でもその前に、レイゼルトが返せって言うてくるかも……」

「その時は返してくれて構わない。鏡のその後の行方が知りたいだけなんだ」

「うん。分かった」

キゲイは、明るく光る小窓を覗こうと背伸びする。小窓の向こうは、白い光と塔の厚い外壁が、おぼろげに見えるだけだった。それにしてもこの小窓、何でできているのだろうか。水晶にしては大きくてぶ厚いし、表面も綺麗にならされている。ほぼ無色で、混じり気もほとんどない。

先を登っていたブレイヤールが振り返った。

「明るい石は、採光のために外に通じているんだ。暗い石の向こうは城内に開いているけど、往時には石の向こう側に明かりを灯していたんだ。同じ施設が黄緑の城にもあって、夜も昼もそれぞれきれいだよ。さ、急ごう」

キゲイは慌てて後を追った。二人は螺旋階段を三階分登ったところで、開きっぱなしの石扉から外へと出た。再び果てのない回廊が始まった。回廊は庭に面している。どうやら地面の高低差のために、この辺りではここが一階らしい。庭を囲う崩れかけの塀の向こうに、荒野の起伏が連なって見える。

回廊から城内へと通じる廊下へ折れる。薄暗く埃っぽい城内通路をいくらか行くと、前方から明かりが差し込んでくる。通路の先は、大きく外へ開けた大回廊となっていた。連なる円柱は中に入るための入口が設けられており、塔も兼ねている。それくらい巨大で、背の高いものだった。

ブレイヤールは大回廊へ入ると、手近の柱の影へキゲイを連れて行く。そして、明るい外を指先で示した。そこにはせり出した荒野の崖と古い城壁に隠れるようにして、幾つかのテントが張ってある。紛れもなく地読み土達のテントだ。丸屋根のそれらには、泥染めによる独特の印が、そこかしこについている。あれは地読みの里に古くから伝わる姿隠しのまじない文字……のはずだ。少なくともブレイヤールには何の効果もないことが、これで分かった。

「君の仲間達だね。間違いない？」

こんなに簡単に見つかってよいものかと、今後を不安に感じつつ、キゲイはうなずいた。ブレイヤールはキゲイに、でっち上げの言い訳を教える。その後に彼はちょっと困った顔をして、キゲイの服を繕っていた糸を、小刀で切ってほどいてしまった。石人に出会った痕跡は、消しておかなければいけなかったのだ。

「向こうの方に見張りがある。僕が魔法で目を眩ますから、その間に走って地読みのテントに飛び込むんだ。いいね。何も考えず走るんだよ」

キゲイはテントまでの距離を測る。回廊を出てからテントまでは、特に姿をさえぎる物もなく無防備だ。果たしてうまくいくのだろうか。

「さあ、行け！」

キゲイの決心がつかないまま、ブレイヤールが突然彼の背を突いた。柱の向こうに押し出され

たキゲイは、慌てて走り出す。

ブレイヤールに礼を言う暇もなかった。心にはためらいも恐怖もあった。奇妙なことに回廊を横切る彼の足音は、いっさい耳に入っていない。息遣いも、頭の中だけで響く。でも、そんなことを不思議に思う余裕は一切なかった。目は一番立派なテントに釘付けで、もうひたすらに必死だった。

そして回廊を出た砂地で、滑って転んだ。

キゲイは反射的に、向こうの見張りに目をやる。目頭を押さええて頭を振っていた見張りが、体のバランスを崩して倒れるのが見えた。ブレイヤールが、強力な立ち眩みの魔法をかけ直したのかもしれない。キゲイは立ち上がりつつ、再び走り出す。あるいは走り出しながら立ち上がる。無我夢中でテントの中へと飛び込んだ。

幸か不幸か、飛び込んだテントの中には人がいた。文字通り転がるように駆け込んできたキゲイの目に、つるりと禿げ上がった頭が映る。西の里長だ。キゲイは安堵の溜息を、思い切り吐き出した。

「誰じゃ、騒々しいの。ソウガか。んん、ちと背が低いのう？ とすると、ジリンか」

年を取って視力の弱い西の長が、キゲイへ顔を近づける。

「違うよ。東の里のキゲイだよ」

西の里長は目を丸くした。

「生きとったんか！ いやあ、いやあ……」

西の里長はしばらく、感心するばかりになった。

キゲイはテントの中を見渡す。テントの中央には折りたたみ式の机があり、上には地図らしきものが描かれた紙や布が、ごちゃごちゃと乗っていた。西の里長は仕事だったようだ。

「あの、東の里長は？」

「里の者を連れて、城の探索中じゃ。お前さん、とにかく他のもんの目に触れたら、いかんわ。色々よくない噂がたっとなあ。石人にさらわれて、蛙にされたとか、魔法にたぶらかされて間者にされたとか。お前さん、本当に大丈夫じゃろな？」

西の里長はよたよたと荷物の山へ歩み寄り、その中から朱と紺で彩色された木刀を取り出してきた。それは里境のご神木の枝から作られた、魔除けの刀だ。

「きえーい！」

里長は振り返りざまに気合一閃、木刀の切っ先をキゲイの額に振り下ろす。予想だにしなかった行動に、キゲイはその場で凍りついた。木刀はキゲイの額の上で止まる。里長は神妙な顔つきで、木刀をキゲイの額にそっと降ろし、両肩にも触れさせる。キゲイがされるがまま大人しくしていると、里長は大きくなずいた。

「なんにも、憑いとらん。大丈夫のようじゃな」

満足げに木刀をしまう里長の背で、キゲイはなんともいえない気持ちで頬を搔いた。あの刀は悪い森の精が祟りついたときに、はらうための物だ。森の精に対しては威力抜群かもしれないが、石人の魔法相手だとどうだろう。キゲイはついさっき、テントの姿隠しのまじないが何の効果もないことを知ったばかりだ。

それにしても本当に自分は、石人の魔法に操られていないのだろうか。キゲイはちょっと不安にもなる。ブレイヤールは親切だったけれども、人間と石人のこういう状況下では、完全に信用する、というわけにもいかないのかもしれない。

「このテントは、兵隊さん達も来たりするから、もっと安全なところへ連れて行くわ。ほれ」

里長は、立ち尽くすキゲイの頭にマントをかぶせる。キゲイは里長についてテントを出た。

城壁の影には、兵士や傭兵や魔法使い達のテントも並んでいた。里長は兵士達のテントを横目に気にしつつ、地読み士達のテントの中でも一番大きいテントの前で立ち止まる。テントの側には、眠たそうな男の人が座っていた。西の里の人なので、キゲイには知らない人だった。

「ここに隠れとけな」

西の里長は、テントの中へキゲイを押し込む。

「長、ここ荷物でもう一杯ですが」

男が声をかけるが、キゲイは里長の手によって、荷物の隙間に無理やり押し込まれてしまった。

「ここなら安全じゃて。ジュラン、この子が他の者の目に触れんよう、気をつけてやってくれ」

「あの……。僕、ずっとここに隠れていなきゃ、いけないの？」

「当たり前じゃ。兵隊さん達に見つかったら、申し開きができんわい。それにしても、どうやってここまで逃げて来れたんじゃ？」

「ええっと」

キゲイは嘘をつく居心地の悪さから、指を組んで視線を落とす。

「レイゼルトって人が、助けてくれたんです……。こっそりと」

「ほう？ あの石人の男の子か。そうか、そうか。若いのに、気の利く子じゃなあ。ほんに、ありがたいわい。わしらも後で、こっそりと礼を――」

「あ！ その必要は……」

「何じゃ？」

「な、なんでも、ないです……」

「とにかく、大人しくしとれよ。東の長が帰ってきたら、すぐ知らせるからの」

キゲイは溜息をついて、窮屈な隙間に腰を下ろす。テントの入口は閉じられ、周りは暗くなった。このまま旅が終わるまでずっと、荷物にまぎれて座っていることになるのだろうか。何はともあれ、こうしてキゲイは無事仲間の元へと帰ったのだった。

ブレイヤールも、ほっとしたことだろう。キゲイが無事テントの中へ駆け込んだのを確認し、帰ろうと振り向きかけたその背中に、後ろから冷たい金属の杖が突きつけられたことは、キゲイには知るすべもなかった。

昼過ぎ。ディクレスは石人の巨大すぎる城の中を、家来を従えて探索していた。いや、むしろ散策に近いものだったかもしれない。古びた城内は、崩落の危険にさえ気をつければ他の不安は無かった。この辺りはすでに、地読み士達と雇われ魔法使い達が調べた後だ。歩を進めるたびに、精緻で巧みな装飾が施された通路や広間が現れる。美しいものを見ながら警戒し続けるのは難

しいものだ。無人の城が見せるあらゆる造詣に、人々は心を許しがちになっていた。

「この城に落ちる影は、みな青いのだな」

予言者トゥリーバは、先王の言葉に「さようで」と、同意する。

「往時はさぞかし美しい城だったのでしょあ」

ディクレスについてきた側近達も唸った。

廊下の壁には、かつては絵画か何かをはめ込んでいたらしい窪みがいくつも続いていた。窪みには、接着剤の跡らしき黒っぽい汚れが残っている。同様の汚れは柱にも見られ、全体として殺風景な印象はあった。それでもどこまでも続く廊下や高い天井、巨大な柱は見ごたえがある。

人間世界にはこれほどまでに巨大な城は存在しないだろうし、これほどまでの装飾を施せるほど豊かな国もないだろう。田舎の小国から出てきた者達にとっては、まさにお伽の城だ。

一同はやがて開けた場所へと出た。誰からともなく感嘆の声が上がる。

そこは高い吹き抜けの大ホールだった。はるか頭上にある八方の窓から光が差し込み、埃に色あせながらもなおその神秘さをたたえる天井のモザイク画を浮き上がらせている。それは羽毛で覆われた羽を持つ、蝶のような鳥のような純白の幻獣の姿を描きだしていた。またディクレスの言ったとおり、光はホールの随所に青い影を投げかけている。その青さがどこから来るのかは分からない。純白の石が、空の青さに化粧をしているのかもしれない。

滅びてからの長い無人の年月は、城に重くのしかかっていた。砂埃はあらゆる物を覆い、あらゆる歪みはヒビとして無尽に現れ、盗賊達は略奪と破壊を尽くしている。ここは紛れもなく廃墟だった。しかしあたりに満ちる静寂は、侘しさよりもいっそうの荘厳さを物語る。静寂の裏には、長い時を重ねた石人の歴史が潜んでいた。

「ディクレス様、あれを」

側近の一人が、天井まで続く柱の上部を指差す。そこには柱を包む、朽ちかけた木造の透かし彫刻があった。もともとは柱全体に彫刻が貼り付けられていたのかもしれない。天井を、数匹の小鳥達が窓から窓へと飛び過ぎていく。

「ここは、どういった場所なのだろうか」

ディクレスは青味を帯びたホールに見とれながら、ついて来ていたレイゼルトに問う。レイゼルトは目深にかぶったフードの下から、小鳥たちの飛び去った窓に鋭い視線を向けていたが、すぐにディクレスに向き直る。

「送りの間です。その中央の石台に死者を吊い、魂を星々に送る儀式をするのです。この間では静寂が重んじられます。みだりに立ち入ったり口をきいたりすれば、災いが降りかかると言われています」

彼は大人しい様子で、静かに答える。しかし配慮を欠いた物言いに、側近達がレイゼルトを睨んだ。レイゼルトはそっぽを向く。質問に正しい答えを返して、何が悪いといった感じだ。レイゼルトの隣に立っていた彼の師を名乗る人間の老人が、持っていた長い杖の先でレイゼルトの頭を叩いた。レイゼルトは老人を横目に見上げ、ディクレスは一人苦笑した。

「異種族の神聖な場所を汚す前に、立ち去るとよいでしょう」

そう言ってトゥリーバも眉をひそめ、レイゼルトに射るような視線を向けた。

一同はもと来た道を帰り始める。

「ところでトゥリーバ殿。最近の夢見はいかがですか」

道中側近の一人が、少し小馬鹿にした様子で年若い予言者に問いかける。

「申し訳ありませんが、夢見は変わりませぬ」

トゥリーバは真面目くさって答える。

「光の中の人物……、英雄。ただ、この石人の地に入ってから、その者との距離が縮まったように思われます」

レイゼルトはトゥリーバの表情を盗み見る。瞳にかすかな戸惑いの色を読んだが、トゥリーバが気がついてこちらを見たので、彼は目を逸らした。

トゥリーバは話題を変えた。

「ところで昨晚も申し上げましたとおり、夜になってこの城に立ち入るのは危険です。石人の世界は魔法の力が強く、我々人間にはただでさえ危険な場所です。ことに古い遺跡ともなると、魔法の力に加え、過去の亡霊すらたち現れるやも知れませぬ」

「我々は、幽霊なぞ恐れている場合ではないぞ」

側近の一人が鼻で笑った。レイゼルトはそんな彼を戒めるかのように、再び口を開いた。

「城主の許しなく入った者は、城に滅ぼされます。この城は城主を失い滅んでいる。それでも、城は眠っても死んでもおりません。ただ沈黙しているだけ。我々をしかと見ています。それだけは、お忘れなきよう」

「しつこいぞ！ 幽霊の話は、魔術師同士か子ども同士でするんだな。大体お前は『森に幻術をかけた者を探してくる』などと言って、結局何の成果も持たずノコノコ帰ってきただけではないか」

「ああ……、まことに申し訳ありません。これ、レイゼルト！ もうお前は、質問されるまで口をきいてはならんぞ」

とうとうレイゼルトの師が、側近達に頭を下げた。

「老魔術師よ、その子どもは厳しく躰けねばならんぞ！ 魔法の才能があるかは知らんが、それを鼻にかけて尊大な態度をとるとするのは――」

「彼は幾つかね」

側近達の言葉をさえぎって、ディクレスの物静かな口調が聞こえた。側近達は見事なくらい瞬時に口を閉じてしまう。レイゼルトの師はうやうやしく答える。

「石人は、年を追うごとにゆっくりと老いていきます。この子は、人間で言えば十四、五才といったところでしょうか。実際には二十七、八年は生きています」

「そうか。私の若い頃の様子にそっくりだ。私が二十七、八の時のな。よくよく城臣達を困らせたものだ」

ディクレスが城のさらに奥へ通じる廊下へ曲がったので、レイゼルトと彼の師は「一足先にテントへ戻ります」と告げ、一行と別れた。

二人は白い柱の林立する庭園の道を進む。それぞれの柱には細工がしてあるらしく、風が吹くたびに柱が様々な音程で歌った。レイゼルトの師はこれらの柱を不思議そうに眺め、手に触れて

振動を確かめたりしていたが、やがて口を開いた。

「それにしても、あの側近連中は、愚か者ですな。人間界での考え方が通用する場所でないというのに。それすらにも気づけんとは」

「だからこそ、ディクレス様はあの者達を連れてきた。今のアークラント国内には、本当に有能な家臣しか残っていないはずだ」

レイゼルトは笑みを含んだ声で答える。それは決して、師に対する口のきき方ではない。老人は怒るでもなく、柱を見上げながらほくそ笑んだ。

「彼らは無能と？」

「それ以下だろう。居てもらおうと困る。敵国に下る機会を逃し、仕方なしに付き従っている。あるいは、ぎりぎりまで待つことで、とうとう石人の宝を手にする機会を得た悪賢い連中かもな。……トゥリーバはどうか。人間にしては、なかなかよい魔法使いだ。予言が己の運命で曇って見えていなければ」

老人は喉の奥で笑う。

「何であなた様はあの男をあんなに嫌うんですか。もうちょっと抑えてもよいと、不肖な弟子ながら、私めはそう思うのですが。おや？」

レイゼルトが、庭園の半分を覆う深いいばらの茂みへ、左手をさっと突き出した。風もなく茂みが大きく揺れ、小さな影が驚いて飛び立つ。それは高く舞い上がり、寂しげな口笛の音を残すと館の向こうへと消えた。黒い尾羽と、灰色の翼を持つ小鳥だった。

「あれは、なんという鳥でしたかな。……年をとるといけませんな」

「エギン、この世界では、小さな獣相手でも油断できない」

レイゼルトは風の中、暴れるマントの襟元を右腕の籠手で押さえた。

二人は庭を通り抜けて城内へと入る。廊下の両側にはいくつもの部屋があり、扉のなくなった入口から室内が見て取れる。どの部屋も調度はなく、窓の近くは雨ざらしになって泥が堆積し、いつのものとも知れない枯葉が散らばっていた。閑散とした眺めだ。壁面のモザイク画は盗賊達によって荒らされ、余計にうらぶれた様子となっている。

「レイゼルトの名は石人にとって不吉この上ない」

しばらく黙って歩いていたレイゼルトが、再び口を開く。

「七百年前は石人を滅ぼしかけた。今回はどうなる。別の名が不吉となるか。アークラントは人間と石人の境界を犯し、この世界に風穴を開けてしまった。しかし石人どもめ。人間ばかりに気をとられていると、痛い目を見るぞ」

それはほとんど独り言だったため、エギンは答えなかった。

廊下の先から、数人の傭兵達がどやどやと現れた。彼らも彼らなりに城の探索をしているようだった。金目の物を見つけようという下心があったのだろう。もっとも期待はあっさり裏切られ、苛ついているのがありありと見てとれる。

レイゼルトは歩調を緩め、エギンの後ろについた。

「よおよお！ 魔法使いさん達じゃないか。なんかめぼしい物は、ありましたかねえ？ こっちゃん、さっぱりだ」



「ネズミの糞すら、ありませんわな」

エギンは相手に合わせて答える。傭兵達が廊下に広がり、二人の行く手をふさぐ。二人はやむなく立ち止まった。傭兵達はレイゼルトをじろじろと眺める。

「おい、じいさん。あんたの弟子は大丈夫か？ 俺達を裏切ったりせんだろうな」

エギンは朗らかな笑みを浮かべる。

「この子は、大空白平原に捨てられていた赤ん坊でした。わしが拾って育てたのです。本人は、自分が人間に生まれなかったのを残念に思っているくらいで」

「ほほう。そりゃ、いい子に育てたな。大空白平原にはなんでもあると聞くが、石人の赤ん坊も落っこちてるのかい。俺達も平原の方が稼げるかもしれんなあ……」

傭兵達は太い指で髭をゴリゴリこすりながら、レイゼルトから視線をはずさない。タバッサの一件があるから、仕返ししたくてたまらないのだ。エギンは咳払いをして長い杖を床にトンと突き、レイゼルトの腕を引っ張って、傭兵達の間をすり抜ける。傭兵達もそれ以上に絡んではこなかった。やはり魔法の怖さは、身に染みていたらしい。

「魔物にでも食われて、くたばるといい」

傭兵達の姿が見えなくなったところで、レイゼルトが押し殺した悪態をつく。

「幻術で魔物を見せて脅してやろうか。さぞかし見物になるだろう！」

エギンはそれを聞いて、短い息をついた。

「師匠。老人になった私めから言わせていただきますと、子どもはいつまで経っても、子どものまですわい。たとえ不老不死で、何百年と生きていようと」

レイゼルトはそれを聞いて、口元をゆがめる。

「私ぐらいの年で不老になったら、それこそ地獄だ。見識は十分なはずなのに、心がそれを認めない」

「老いてしか悟ることの出来ないものもありますからな。しかしその年でも、自重は十二分に出来なさるでしょう」

レイゼルトは耳を塞ぐ仕草をし、エギンは肩で笑う。

「それで、行動はいつ起こされます。もうお発ちに？」

エギンは真顔になり、声を潜める。

「もう少し様子を見てから。この城を探索して、適当な隠し場所をみつくりおきたい」

「私は適当なところで、平原へ戻らせていただきますよ。できるだけ怪しまれず、あなたをアーケラントの者達に雇わせるという目的は、達しましたから」

「そうか。どの町で待つ」

「平原の東にあるカナリーという町で。あそこで、のんびり逗留させていただきます。さて、では、お先に失礼を」

二人は別れ、別々の方向へ去った。どちらも自分の行く先に迷いはなく、振り返りもしなかった。

荒縄の束と、木タールが塗布された木箱の狭間は、居心地のよいものではない。縄はごつごつ

として痛いし、木箱は木タール独特の焦げ臭い匂いがする。キゲイは、相変わらず地読み士達の荷物テントの中だった。

夕暮れ時に、東の里長が血相を変えてやって来た。彼女はキゲイの無事を喜んだものの、やはり、彼の存在はアークラントの兵士や傭兵達から隠しておきたいようだった。さらに彼女は、昼遅くに城内で手付かずの宝物庫が発見されたことを、興奮気味に話した。

「なかなか、込み入った場所にあった宝物庫だったわ。運び出しは明日だけど、こりゃ期待大だね。あの中に、国を救ってくれるような魔法の宝があれば、一步前進よ。予言に言われている英雄って、案外ディクレス様ご自身のことじゃないのかしらね。国を留守にして、怖い石人の世界に足を踏み入れるなんて、ご英断をされたんだもの」

キゲイは里長の言葉を、なんとも言えない気持ちで聞いた。あの宝物庫の中には、アークラントが真に望んでいるようなものはないのだ。それが分かったときには、皆さぞがっかりすることだろう。彼女は忙しげに去っていき、キゲイは再び一人取り残される。

夕食時には、テントの中にも、周りの人々の興奮した活気ある沈黙を感じ取ることができるくらいだった。日が暮れて冷え込みがきつくなると、荷物見張りの男が熱くした石をいくつかよこしてくれる。キゲイは石を布にくるんで胸に抱き、熱くてぴりぴりするスープをすすって、じっと寒さに耐えた。

今では、辺りはすっかり静かになっていた。人々の多くが眠りについたようだった。キゲイも毛布をもらってうとうとしていたが、寒さで熟睡ができない。そのうちに、おしっこまでしなくなった。いくらずっと隠れていなければならなくても、こればかりは無理な話だ。外の見張りに声をかける。

「漏れそうです……！」

見張りは飛び上がった。

「そこではするなよ！ こう暗くなれば、顔も見えんから大丈夫だろう。向こうの城壁の隅でしてこい。あとはちゃんと隠すんだぞ」

キゲイは渡されたスコップを手に、小走りにテントの群れから離れた。城壁の影に穴を掘り、用を足す。穴を埋めて砂で手を洗うと、ほっと一息ついた。

振り返って城を見上げる。城内はひっそりと静まり返り、星を浮かべる夜空と同じくらいの深い闇に満たされている。何もない闇を見つめていると、その中で瞬く小さなものがある。キゲイは目をこすった。瞬くものは見えなくなったが、不意に背筋に悪寒が走り、反射的に胸に手を当てた。手の下には、懐に収めた石人達の品がある。

ひとつは、黄緑の王女様にもらったお守り。これがあれば、悪い妖精は怖くないはずだ。ひとつは、彼女を傭兵達から助けたときにもらった硬貨。そして、最後のひとつはレイゼルトの銀の鏡。

――もしかしたら宝物庫の宝より、僕が持ってるものの方が、ずっとずっと価値があるのかも。

冷たい風が出てきたため、キゲイはテントへ帰ろうと小走りに駆ける。ところがその足はすぐに止まった。城の奥、いくつも連なる柱の影に、ひとつの人影らしきものが動くのが見えたのだ。胸が高鳴った。もしかしたら、ブレイヤールではないのだろうか。他の人に気づかれる可能性

もあるから、声を上げるわけにはいかない。キゲイは城壁の影に身を沈ませて、そっと追いつめた。

月の淡い輝きが、暗い柱廊へ斜めに差し込んでいる。人影は、月の光と柱の作る影の狭間を、音も無く滑るように進む。キゲイはできうる限り足を速めた。それでも徐々に、人影は先へ先へと小さくなっていく。最後に人影がひと揺らぎして、柱の影に入る。キゲイは一瞬駆け出し、それから立ち止まって柱廊の奥をうかがう。闇の中で何かが動く気配は、ここからでは良く分からない。キゲイは息を整え、思い切って城の方へと歩みだした。

「よせ。行くな」

背後からの声が、キゲイの足を止めた。キゲイは息を呑んだ悲鳴を上げ、振り返ると同時に腰を抜かしてしまう。崩れかけた城壁の上を、レイゼルトが歩いていたのだ。レイゼルトは城壁に腰を下ろし、そのまま崩れ落ちた石の塊を次々と、無駄の無い動作で飛び降りる。そして、キゲイの側まで詰め寄ってきた。

「この世界で得体の知れないものについて行くのは、命取りだぞ。いったい、あれを誰だと思った」

「だ……、誰なのさ……」

キゲイは相手に圧倒されたまま、どうにか問い返す。レイゼルトの顔にはたいした表情は浮かんでいなかったが、全身の様子から、どこか緊張と警戒を秘めているように感じられたのだ。レイゼルトは城の方へ顔を向ける。月明かりに浮かんだ彼の横顔は、一瞬厳しさを帯びた。

「石人の亡霊みたいなものだ。あれは目が悪いから、大きな魔法しか見ることができない」

レイゼルトはぱっとキゲイに向き直る。

「お前に渡した、その銀の鏡に引き寄せられて来たんだ。いざ近づいてみて、鏡の持ち主が私ではないことに気づき、立ち去ったんだろう」

レイゼルトの口からするすると出てきた一言一言に、キゲイは混乱する。どの言葉も、何かとんでもないことを暴露している気がした。いくつもの疑問と戸惑いが形を成さないまま、キゲイの頭の中で激しく渦を巻く。ところが次の瞬間、それらの全ては一色の怒りに変わった。

「誰なんだよ！ お前は！ 名前だって、嘘ついてるくせに！ それに、この鏡だって！」

目の前の人物が、ブレイヤールを殺しかけたことを思い出したのだ。キゲイはよろめきながらも、立ち上がる。

「嘘か。私の名の由来を聞いたのか？」

レイゼルトは横にちらりと目を逸らし、投げやりな動作で、右腕の籠手のベルトを緩めて取り外す。そしてキゲイの方へ、右腕を差し出した。その腕は手首から先がない。口をへの字に曲げてそれを見つめるキゲイに、レイゼルトは呟いた。

「『レイゼルト』には右手がない。私が名乗った名前とこの腕が、果たして何の証拠になる？」

『レイゼルト』じゃなくたって、こんな怪我は珍しくもない」

レイゼルトは再び籠手をはめ、ベルトを締める。

「それよりも、その銀の鏡は間違いなく禁呪だと言ってみせようか」

キゲイはさっと胸に手を当て、それから懐から鏡を取り出した。

「人間の味方なら、なんで先にこれをディクレス様に渡さないんだよ！ 魔法の宝なんだろう？ 人間の味方をするって、言ってたじゃないか！ これがあれば、アークラントは滅びなくてすむんだろっ」

「私は今それに触れられない。さっきの化け物に気付かれる。お前がディクレス様にそれを渡したいなら、今しかチャンスがないぞ。渡したいなら渡すがいい。それも運命だ」

澄まして答えたレイゼルトに、ますますキゲイはむかつ腹が立ってきた。

「本当に僕らの味方なのかっ！ アークラントを助ける気、あるのかよ！」

「アークラント先住民ごときが、『国を助ける気』だって？」

思いがけないレイゼルトの切り返しに、キゲイは目を点にする。彼の怒りはなぜか、冷や水を浴びせられたかのように、一瞬にしてすぼってしまった。レイゼルトの言っている意味が、よく分からなかった。

「な、なんだよ。そっちだって、石人のくせに……」

レイゼルトの瞳は、鋭さを帯びてキゲイに向けられていた。そこにあるのは怒りではない。その眼差しを、キゲイはよく見知っていた。アークラントの老兵士、タバッサで天幕の前にいた少年達、ひいてはアークラント人全てに共通する、ディクレス様への真摯な忠誠の表情だ。それに気がついたキゲイは、目の前の人物をどう解釈すればいいのか、完全に分からなくなってしまった。なぜ石人である彼が、そんな言葉を口にするのだろうか。なぜ石人である彼が、アークラント人と同じような眼差しを持てるのだろうか。

石人だの人間だの、ディクレス様だのブレイヤールだの、敵だの味方だの、もうめちゃくちゃだ。何を信じて、何を疑って、何をすべきなのか、ひとつとして分からない。キゲイはただただ負けたくなくて、レイゼルトを睨み返すだけになってしまった。

「人が来るな……」

レイゼルトが不意に視線を逸らし、キゲイはそのおかげで我にかえる。しかしすぐさまレイゼルトに首根っこをつかまれ、状況の分からないまま、城壁の下の崩れ落ちた石材の影に引っ張り込まれてしまった。レイゼルトも隣に隠れて、短い言葉とともに開いた左手を宙で握りこむ。辺りの影が、より濃くなったような気がした。

「鏡を覗いてみる」

キゲイは言われたとおり鏡を覗き込む。レイゼルトが横から手をかざすと、鏡にくっきりと一つの像が染み出してきた。キゲイは石材の影から城の方をうかがい、再び鏡に視線を戻す。鏡はすぐそこの柱廊を映し出していた。そしていつの間にかそこに現れていた、いくつもの人影も。レイゼルトが再び左手を上げ、何かを巻き取る仕草をする。風に乗って、大人の話し声がキゲイの耳に届いてきた。

「おい、誰もいないよな？ よな？」

「大丈夫だ。ここまで来れば」

「しかしまあ、こんな夜中に城に忍び込もうなんざ、よくやるよなあ。トゥ……なんたらは、夜に入るとやべえって、言ってたろ？」

「ふん。魔術師なんぞ、子ども以上に愚かで意気地無しだわ」

鏡に映し出される柱の狭間から、独特の形の鎧を身につけた汚らしい男達が姿を現した。傭兵だ。後からやや身なりのいい男達が続く。傭兵達は皆、背中に重たそうな麻袋を背負っていた。

「それにしても、本当になんか出そうだったぜ」

「ひゅーう。こんな所でとり殺されちゃあ、浮かばれないぜ。なあ？」

「俺達だって、お頭にばれてみろ。ミンチにされるか、三枚に下ろされるかの、どっちかだぞ」

「違うな。下ろされてミンチだよ」

「タバッサの方へ抜けるんですかい？」

「そこで馬車を借りて、カナリーの町へ向かう。そこからさらに北へ向かい、平原を出る。アークラントでの先の見えた小競り合いなどとは、永遠にお別れだ」

「これだけありゃあ、いい暮らしができません。でも旦那方は、髪は少ないが知識は豊富なその頭で、この金を何倍にも増やせるんでがしょう？ 分け前は頼みますぜ」

「もちろんだ。馬の用意はできているだろうな？」

「向こうで仲間が待ってるはずでさあ」

たくさんの人影は鏡から見えなくなる。会話はこの後もぼつぼつと続き、やがてそれも遠くなった。レイゼルトは鏡の像を消し、立ち上がる。

「こいつら……」

キゲイは呆れと怒りで、二の句がつけない。鏡をぎゅっと握りこんだ。

「アークラントの行く末は暗い。灯りがいるな。予言者はそれが石人世界にあるというが」

キゲイは顔を上げる。レイゼルトは皮肉な笑みを浮かべて、裏切り者達が立ち去った方向を眺めていた。

「連中のことはすぐにばれるから、お前は気にせず戻っていいぞ」

レイゼルトは偉そうに言いながら、城壁を這い登る。キゲイは慌てて立ち上がった。

「宝を取り返しに行くの？」

「その必要はない。それよりお前、早く戻った方がいいんじゃないのか？ 仲間が心配する」

「待ってよ。それじゃあ、どこに行く気なんだよ！ それにこの鏡、お前のだろ！ いらないのかよ！」

「私はその鏡を時の水面みなもに投げ入れた。鏡の描く波紋がどこに行きつくか、もう少し見させてくれ。それは七百年前も見事に動いてくれた。魔法の品は無意味には動かないものだ」

「ど、どういう意味だよ！ わけ分かんないってばっ……！」

「分からないように言ったんだ」

それ以上の答えが返ってくる気配はなく、レイゼルトの姿は城壁の向こうへと消えた。キゲイは迷ったものの、追いかけて行くわけにもいかない。暫く城壁の下でうろうろしていたが、結局、地読みのテントへ戻るしかなかった。その足取りは重い。再び懐の中に隠した鏡の存在が、あまりに重かった。

## 第六章 二人の王

---

鏡を隠した懐に手を当てながら、キゲイは皆の所へとぼとぼと歩いていく。頭の中は鏡のことで一杯だった。

ブレイヤールは、この鏡を誰にも見せるなと言った。ディクレス様にさえも。鏡には、強力な魔法の呪文が封印されているからだ。けれども。

――この魔法があったら、アークラントは助かるかもしれないのに。

アークラントを救うには、禁呪以上のものが必要だと、ブレイヤールは言っていた。でもそれはあくまで、彼自身の想像でしかないのではないか。彼がディクレス様のことを、いったいどれだけ知っているというのだろうか。アークラントのことを、どれだけ知っているというのだろうか。

大人達は口を揃えて言っていた。ディクレス様は、あらゆる知恵と勇気で困難な状況を乗り越え、アークラントをここまで守り抜いてきたと。あの方がいなければ、もっと早くに国は滅びていただろうと。

そんなディクレス様なら、この鏡を正しく使う方法を、思いつくかもしれないのだ。決して、悪いようにはしないだろう。鏡の持ち主であるレイゼルトはいとも簡単に言ったではないか。渡したいなら渡せ、と。

考えれば考えるほど、鏡をディクレス様に見せるのは良いことだと思えてくる。

キゲイは立ち止まった。地読み士達のテントは、もうすぐそこだ。その向こうに、アークラント老兵や、傭兵、魔法使いのテントが並び、ディクレス様の大きな天幕がその真ん中ほどにある。場所の関係で、テントは密に隣り合っていた。間をうまい具合にぬって行けば、見張りの目をごまかしつつ、ディクレス様の天幕に潜り込めるかもしれない。

ぎゅっと唇を噛み、両手を握りしめる。しばらくそうした後、城壁の影に身を沈めて靴を脱いだ。足音を殺すためだ。どっちにしろ、この方が走りやすい。里ではいつも裸足だった。

靴を脱ぐと、いよいよ決心がついた。深く息を吸い、ぐっと息を止める。城壁沿いを小走りに駆け、とうとう地読み士達のテントをやり過ごしてしまった。あまりにあっけない。しかし本番はこれからだ。キゲイは身を低くして、老兵らのテントの群れへと立ち入る。

兵士達のテントは、寝るためだけのもので高さが無い。いくら子どものキゲイでも、身を隠すため、ほとんど四つん這いで進まなければならなかった。おまけにテントの中では人が寝ている。兵隊達はいびきをかかないのだろうか。嫌になるくらい静かだ。これでは少しだって音を立てられない。そんな中を進むのは、思った以上に勇気が必要だった。けれども使命感が心を奮い立たせてくれる。鏡をディクレス様に届ければ、アークラントが救われるかもしれないのだ。

突然、すぐ隣のテントから、誰かの足が突き出して来て、キゲイの足首の上にドンと乗った。キゲイの心臓は、口から飛び出さんばかりに跳ね上がる。彼は息を呑み、その場でじっと固まった。あやうく悲鳴をあげるところだった。多分、寝相の悪い兵士なのだろう。下手に動かない方がいいと思った。顔から血の気が引いていくのが、自分でもよく分かる。こめかみの辺りが、痛いくらいに冷たくなった。

—ああ……。もうだめかも……。

臆病風が吹き始める。こんなところで足止めを食うなんて。しかもかなり進んだと思ったはずなのに、ディクレス様のテントはまだ遠い。かと言って、引き返そうにもこれでは動けない。キゲイは地面にうずくまり、顔を伏せる。ここでずっと止まっても、誰も助けに来てはくれない。なにより、見つかったらまず過ぎる。地読みの皆に大迷惑をかけてしまうのだ。キゲイは一か八かと目をつぶり、恐る恐る体を前へずらしていく。

ところが事は、最悪の方向に動いてしまった。足が引っ込んだと思ったら、テントのすそが持ち上がり、暗闇の中から人の顔がにゅっと出てきた。相手はキゲイの姿を見て、寝ぼけ眼から驚いた表情になる。

「なんだなんだ。地読みの子どもじゃないか。転ばせてしまったか？ 悪かったなあ」

キゲイは声も出せず、首を振ることしかできない。老兵の顔つきが、険しくなった。

「それにしても、こんな遅くにこんな所で、何をしてるんだ？ お前達のテントは、向こうの方だろうが」

テントの中から、もうひとつのしわがれ声が聞こえてきた。

「タバッサの待機組じゃなかったか？ 地読みの子ども達は。なんでこんな所にいるんだあ？」

二つの顔がテントの中からこちらに向けられる。キゲイはすっかり動転し、立ち上がってしまった。そして二、三步後ずさると、全速力で走り出す。いったんは地読み達のテントへ逃げかけたものの、すぐに気がついてディクレス様のテントへと、方向転換した。テントの老兵が異変を察知し、短い口笛を吹く。たちまち見張り達が行く手をふさぎ、キゲイはびくともしない力強い腕に捕まってしまった。

「ラダム老将軍の所へ」

「いや、まずはトゥリーバ様がいだろう。怪しい奴だ。石人が魔法で化けてるかもしれん」

無理やり引きずって連れて行かれそうになり、キゲイは両足を踏ん張る。

「違うんです！ 僕、ディクレス様にどうしても会わなきゃ……！」

キゲイの言葉は最後まで続かない。踏ん張った両足をもう一人の兵士に持ち上げられ、二人がかりで運ばれて行く。絶体絶命の窮地におちいり、キゲイはとうとう叫んだ。

「ディクレス様！ おうさまあっ！ 助けて！ 僕は正気ですっ！ 化けてなんかいません！」

「ばっか。大きな声出すなっ」

別の兵士がキゲイの口を塞ぐ。キゲイはどうにか首を曲げて、ディクレス様の天幕を見た。もう絶対にたどり着けない。途中で挫けてしまわなかったら、行き着けていたかもしれなかった。涙で天幕がゆがむ。

そのとき、奇跡が起こったように思えた。天幕の中から、鋭い動作で人影が現れたのだ。その人影は、片腕を上げた。それだけだった。それだけなのに、キゲイを抱えていた兵士達も口を塞いでいた兵士も、彼から手を離したのだ。天幕の前の人影は、挙げていた手の平を返し、そのまま中へと消える。兵士がキゲイの背中を押した。キゲイはほうけて、兵士の顔を見返す。兵士は渋い顔で言った。

「早く行け。お待たせするな。さあ」

追い立てられて、キゲイはへなへたと走り出す。あちこちのテントから、物珍しそうにキゲイを見る顔が覗いている。キゲイの邪魔をする者は、もういなかった。

ディクレス様の天幕の脇に、予言者トゥリーバと老将軍ラダムが立っていて、やって来たキゲイを見た。トゥリーバの鋭い目つきと、傷跡だらけの筋肉の塊のようなラダムの姿に、キゲイはおどおどと足を止める。トゥリーバが幕ごしに声をかける。

「魔術のかかっている形跡は、認められませぬ。しかし……」

彼はキゲイへ、苦りきった表情を向ける。

「念のため、あの石人の魔法使いに見立てさせた方が、良いかもしれません」

「ならば、呼び寄せよ」

天幕の中から答えが返る。トゥリーバは命令を後ろの兵士に伝え、自分も足早に立ち去る。キゲイはラダムの方を見る。老将軍は、兵士の一人から耳打ちをされていた。将軍は報告を聞き終えると、天幕越しにこう言った。

「少々問題が起きました故、調べてまいります。しばしお待ちを」

それから将軍は、去り際にキゲイへ目を剥いて、小さく怒鳴る。

「何をぼけっとしとるか。早く入れ！」

キゲイは大慌てで垂れ幕をくぐり、中へと飛び込んだ。

大きな天幕の中には、小さく輝くろうそくがあった。年季の入った折りたたみ机があり、毛のマントを羽織ったディクレスその人が、机に両手をついてこちらへ顔を向けている。

キゲイは、緊張で震える。ぎこちなく頭を下げたが、慌てて両膝をついて、もう一度頭を下げなおした。キゲイの知っている中では、最上級のお辞儀の仕方だった。ディクレスは、うなずいた。

「こちらに来て、座りなさい。地読みの少年が石人にさらわれたと聞いたが、もしかして君がそうか？」

「その……」

キゲイは向かい合わせになった椅子の端っこに、遠慮がちに腰掛ける。緊張のし過ぎで、ディクレスの言った言葉は、頭からすっぽり抜けてしまっていた。彼の心にあったのはただひとつ。震える手で、懐からあの銀の鏡を取り出したのだ。

「こ、これです……」

差し出された鏡を、ディクレスは黙って受け取った。机の上のろうそくを引き寄せ、鏡を照らし出して裏表を丁寧に観察し始める。

キゲイは小さく震えながら、その様子を見守った。ディクレス様をこんなに近くで見たのは、生まれて初めてだ。とにかく、大柄な人だった。年はもうずいぶんはずなのに、白髪も目立たず張りのある肌をしている。額にも口元にも深いしわが刻まれ、老王にふさわしくいかめしい。逆に目じりのしわが、非常に親しみ深い印象を与えていた。側に居るだけで、安全で安心な、温かい気持ちが湧いてくる。プレイヤーもトエトリアも王族だったが、ディクレス様とは段違いだ。足元にも及ばない。これほどの威厳を感じさせる人を、キゲイは他に知らなかった。

どれくらいの時間がたったのか、きっとそうたいした時間ではなかったのだろうが、ディクレ



ス様は落ち着いた優しい声で、キゲイに尋ねた。

「これは、なんなのだろうか。どこで見つけたのかね？」

「それは……」

キゲイの心が、ちくりと痛んだ。ブレイヤールとの約束を破ることが、心苦しかったのだ。鏡のことを話すとなると、ブレイヤールのことも話さざるを得なくなる。しかしこれほどの大人物を前にして、自分の身にはるかに余る秘密を抱えたままではいられなかった。キゲイはつかえつかえ、話し始める。その話は支離滅裂で、時系列もめちゃくちゃだった。約束を破った後ろめたさから、声が震えて泣いてしまいそうにもなる。

ディクレスはそんなキゲイの様子を見守り、うまい具合に質問を返す。そのおかげで、キゲイも少しずつ落ち着きを取り戻していった。

傭兵に追いかけて、石人に助けてもらったこと。鏡はレイゼルトから渡されたこと。この白城にいる石人達に、かくまって貰ったこと。ブレイヤールのこと。銀の鏡に封じられているかもしれない、砂の禁呪のこと。そして何より石人達は、自分達がこの世界に侵入しているのを知っていること。

これら全てを話し終わると、キゲイは今までの息苦しさがすっかり無くなったのに気がついた。そして最後の不安を抱えて、ディクレスの顔をうかがう。ディクレスは何度もうなずいた。うなずきながら何度も、そうか、そうかと呟いた。

「全て承知した。すまなかった。私が不明なばかりに、ずいぶんつらい目にあわせてしまったな」

ディクレスはそう言って、キゲイにゆっくりと頭を下げた。キゲイは驚いたものの、この言葉で最後まで心に引っかかっていたものも完全に取り払われ、安堵のあまりに涙をこぼした。それでもすぐに、鼻をすすって涙をこらえ、両目をぬぐう。泣き虫だなんて思われたくない。

ディクレスは難しい表情で、鏡を見つめていた。もしかすればこれこそが、アークラントに必要なものかもしれなかったからだ。キゲイは疲れ切り、ぼんやりと先王の複雑な表情を見つめるだけだった。

緊張の緩んだキゲイの耳に、外の物音が入ってきた。気のせいだろうか。何か騒がしい。いつからしていたのだろう。

突然テントの垂れ幕を跳ね上げて、興奮した様子のトゥリーバとラダムが現れた。キゲイの驚いたことに、ディクレスは素早く手に持った鏡を机に伏せ、大きな手のひらをその上において鏡を隠した。何も知らずラダムは、怒りもあらわな口調で先王に告げる。

「傭兵と側近の一部が姿を消しております。馬も数頭ございませぬ。しかも、傭兵どもが城に向かうのを見たと言う者がおりました。連中、もしや昼間見つけた宝を持ち逃げしたのかもしれないぞ！」

トゥリーバも、怒りに震える声で訴えた。

「あの石人の魔法使いとその師も、影も形もございませぬ。恐らく共犯かと存じます」

それを聞いたキゲイは、何か言わなければと口を開いた。それでも、怒り狂う二人に圧倒されて、声が出てこない。

「すぐに人をやって、後を追わせませう！」

ラダムがそう息巻くと、ディクレスは一言しか返さなかった。

「無用だ」

「な、なんですと！」

キゲイの頭上を、ラダムの怒声が通り過ぎていく。キゲイは頭を伏せて、背を丸めた。

「裏切り者を、捨ておくというのですか！ 宝を、せっかく見つけた石人の宝を、汚くも盗んだのですぞ！」

「彼らに先んじられてしまったな」

ディクレスの物静かな応えに、長年彼に仕えてきた老将軍は、主の言わんとするところを察する。将軍は深い溜息を吐きながら、黙って天幕を後にする。トゥリーバも、それに倣って退出の礼をした。去りかける彼を、ディクレスが止める。

「トゥリーバ、少し待ってくれ。もう一度あの夢見の話を、聞かせてはくれんか」

トゥリーバは下げていた顔を上げる。彼はキゲイの方へちらりと目をやったが、主が何も言わないのを見ると、上体を起こし、気の進まない様子で話し始めた。

「夢の中で、私は大草原の真ん中におりました。空は一面に薄明るく、辺りの景色も煙るような光に満ちておりました。光の霧は地平線の彼方から流れてきており、その霧の中にひとつの影がありました」

「その人影は、どのようなものか」

「光が強く、良くは見えませぬ。頭身から、大人かとは思われますが……」

トゥリーバは顔を曇らせる。

「それにいたしましても、石人の世界に入ってから、何度もこの夢を見るようになりました。その度ごとに、人影との距離が縮まったように思うのは事実です。そのうち私は、その人物の顔が見えるまでに、近づけるかもしれませぬ」

「そうか。引き止めてすまなかった」

「本当に、裏切り者達を追わぬのですか？ 石人の魔法使いを見逃すのは、危険かと思われませぬが」

「石人の世界で石人に危害を加えることほど、恐ろしい行為は無いようにも思える。手がかりを集めるだけに、とどめておいてはくれんか」

「承知いたしました」

トゥリーバは礼をして退出する。再びテントの中は、キゲイと先王だけになった。

「ディクレス様。あの、僕さっき、レイゼルトに会ったんです！」

キゲイは思い切って口を開く。先王ははじめて、少し驚いた顔を見せた。そしてキゲイに先を促す。キゲイは、レイゼルトが銀の鏡をディクレス様に見せてもいいと言ったこと、銀の鏡を受け取らずに、どこかへ去ったことを話した。しかし、彼がキゲイを先住民と言ったことは、話さなかった。宝を持ち去った傭兵達のことにも、触れなかった。どちらも、ディクレス様に話すのは、なんとなく気まずかった。

「レイゼルトは、その鏡は魔法の品だから、無意味には動かないとも言っていました。僕、よく

意味が分からなかったんですけど……」

「そうか」

ディクレスはしばらく鏡面を見つめた後、何も言わず銀の鏡をキゲイに渡した。

「あ……の……？」

まったく予想もしなかった展開に、キゲイは頭がぼうっとなる。口を閉じるのも忘れて、目を丸くした。

「魔法の品は、私にも分からん。トゥリーバにでも聞けば、まだましかもしれんが。……たとえこの鏡が禁呪の書であったにしろ、私がこの石人の地に求めたのは、このようなものでは無いように思う」

ディクレス様は立ち上がり、テントの中を歩き回り始めた。本当に背の高い人だ。考え事をしているようなので、キゲイは無言のままだった。そして、自分の手に戻ってきてしまった銀の鏡を、信じられない気持ちで眺める。鏡には先王の手の温もりが残っていた。ディクレス様は、これを引き取ってはくれないのだろうか。これこそが、アークラントが石人世界で手に入れようとしていた物ではなかったのか。それとも自分は、役立たずの鏡を持って来たただけだったのだろうか。

「キゲイ」

ディクレス様はようやく足を止める。

「その白王という人に、私を会わせてくれんか」

「え……」

キゲイはぼんやりと顔を上げる。少し間を置いて、キゲイはディクレス様のとんでもない言葉に気がつき、目を見開いた。その間ディクレス様は、キゲイの反応を辛抱強く待っていていた。

「会う！ い、いつですか？」

ディクレス様がすばやく口元に指を立てて見せたので、キゲイははっとして自分の口を塞いだ。ディクレス様は声を潜めた。

「今からだ。今しか時間が無い」

「で、でも、この城はものすごく広くて。元に帰る道、はっきり覚えてるか自信が無いんです……」

キゲイの声は、最後の方はほとんど消えかけていた。けれども彼も地読み士の端くれだ。大体どの辺りに石人達の住居があったかくらいは、分かる。それで仕方無く方角だけを告げると、先王はそれでも良いと返してきた。彼は、キゲイがこの天幕を目指していたのと同じくらい、必死だったのだ。夜に石人の城に入るのは危険だったが、それすらも構っていられなかったのだ。

「君はこの城の主に認められた人間だから、夜中に城に入っても大丈夫だろう。そして、ここから石人達の場所までの道を見たのは、君だけだ。おぼろげな記憶でも構わない。とにかく少しでも、彼らの場所に近づきたいのだ」

英雄王の再来とまで呼ばれたこの人は、これほどまでに無謀な人だったのだろうか。キゲイは意外だった。しかしここまで言われれば、嫌とは断れない。それにキゲイ自身も、もう一度ブレ

イヤールに会いたかった。秘密の重みに耐え切れず、約束を破ってディクレス様に鏡を見せてしまったことを、知らせた方がいいと思ったのだ。

キゲイは先王の後について、天幕から出た。

「この子を送りついでに、地読みのテントまで行ってくる」

ディクレスは見張りの兵士にそう告げる。見張りの兵士はキゲイが脱ぎ捨てた靴を持っていた。ディクレスはキゲイが靴を履くのを待つと、いったんはテントの方へ行く振りをし、途中から城の方へじわりじわりと道を逸れ始める。見張り達は裏切り者の出現に、野営地の外よりも内の方へと注意が向いていた。ましてディクレスの行動を疑う者などいるはずもない。

二人は誰にも知られることなく、今朝キゲイがブレイヤールと一緒に隠れていた、柱の連りの影にすばやく駆け込んだ。ディクレスは、ほとんど持ち上げるように連れて走ってきたキゲイの手を、離して降ろす。

「頼む」

キゲイはうなずいて、真っ暗な回廊の中、道を探し始めた。西の里長のテントの位置を確かめ、手探りでどうにか廊下の入口を探し当てる。それから用心しいしい、壁を伝って廊下の奥へと進んだ。やがて廊下はつき、星明りが見覚えのある庭を照らし出しているのが見えてきた。正しい廊下を選んだことが分かって、キゲイはほっとした。兵士達に見つかる心配がなくなったので、ディクレスは腰に下げていた小さな真鍮のランタンに、明かりを入れる。

城の中は、自分達以外に音を立てるものはいなかった。ランタンが照らす光のすぐ外は闇だ。光の対としての影ではなく、闇そのものが満ちていた。光がなくとも存在し得るもの。そんな感じだ。ランタンが移動した後を、すかさずその闇がとろりとうずめていく。ランタンの炎は、闇など露知らず、無邪気にはせていた。キゲイはこの明かりをひどく不愉快なものに感じた。明かりのせいで、自分達が危険から丸見えのように思えたからだ。それにランタンを灯した今の方が、辺りの闇が濃くなった気がした。ランタンで目がくらみ、微かな星明りを捕えられなくなったのかもしれない。足元はよく見えるようになったが、遠くは見通せなくなってしまった。

キゲイは懐のお守り、あのトエトリアの髪を編んだお守りを、服の上からぎゅっと押さえる。これがあれば、邪妖精なども怖くないはずだ。多分、魔物からも守られているだろう。すぐ後ろをついて来る、ディクレス様だって守ってくれるはずだ。ディクレス様が危険な目にあえば、キゲイだって、危険のお相伴にあずからざるを得なくなるのだから。

「やった……！」

下へ続く階段を見つけたとき、キゲイは思わず小さな歓声を上げた。おぼろげな記憶と夜の暗さの中にありながら、ここまで道を間違えずに戻ってこられたのは、ほとんど奇跡だったかもしれない。ディクレス様にランタンを廻してもらい、石扉や周りの壁の様子を調べる。間違いない。あの高い塔の螺旋階段だ。外に通じている丸い石窓が、星明りでぼんやりと紫紺を帯びた闇に染まっている。天井を見上げると、彼方に小さく切り取られた星空があった。

キゲイが階段を下ろうとすると、先王がその肩を押さえて止めた。キゲイは後ろを振り返る。ディクレス様はランタンの明かりを消し、螺旋階段の下をそっと覗き込んでいた。

「何か心配がしたが……。気のせいかな。私が先に行こう」

ディクレスはキゲイにランタンを渡す。そして剣をいつでも引き抜けるよう、柄に片手をかけ、壁面に沿って静かに下りて行く。キゲイもそれに倣った。

二人はそのまま何事も無く下まで降りる。しかしディクレスは警戒を解かず、闇に沈んだ塔の中央へ、静かに歩み寄る。キゲイは音が鳴らないようランタンを抱え、階段を下りたところで立ち尽くした。

ひとりでに、ランタンに明かりが灯った。

キゲイは驚いて仰け反り、ランタンを体から離す。右手に掲げたランタンの向こうに、ディクレス様の背中が見えた。ランタンが揺れると、壁に長く伸びたディクレス様の影も、幽霊のように大きく振れる。その塔の壁際に、何か白っぽいものがあった。ディクレス様の影の中で白っぽいものが動き、ぼんやりと人の顔が現れる。ブレイヤールはキゲイの方へ伸ばしていた腕を、ゆっくりと下ろすところだった。

「王様！」

キゲイはディクレスの隣をすり抜けて、駆け寄った。

「なんだ。君だったのか……」

ブレイヤールは長い息を吐いて、うなだれる。彼は両足を地面に投げ出して、壁にもたれかかっていた。明かりに照らされた顔は疲れきった様子で、眩しそうに閉じたまぶたを震わせている。随分長い間、この真っ暗闇にいたようだった。キゲイが声をかけようとする、ブレイヤールは額に手をかざして上を向いた。キゲイの後ろに、ディクレスが歩み寄ったのだ。

「あの、その、ごめんなさい。ディクレス様に、話しちゃいました……」

キゲイはそっと告白する。ブレイヤールはキゲイに視線を戻す。表情は薄く、ブレイヤールがどう思ったのか、キゲイには分からなかった。

「いいんだ。自然の流れに任せよう」

ブレイヤールはそう言った。ディクレスがキゲイの隣に膝をつく。

「アークラント先王ディクレスと申します。あなた様は？」

「白城の王族ブレイヤール。ディクレス殿。銀の鏡をご覧に？」

「はい。ところで、いかがされました。見たところ、ほとんど動けぬようですが」

ディクレスの言葉に、ブレイヤールは再び深く息を吐く。

「レイゼルトに……。いえ、まずは城内から出ましょう。人間達の匂いを嗅ぎつけて、先程から闇の中で色々なものが騒いでいるのです。失礼ですが、手を貸してくださいませんか」

ディクレスはブレイヤールの体を支えて、立ち上がらせる。キゲイは先に立って塔から外へと出た。

ブレイヤールは二人を近くの中庭へと案内した。ディクレスは庭に倒れている古い柱の上に、ブレイヤールを座らせる。ブレイヤールは左手で右腿をちょっとさすり、それからディクレスとキゲイの顔を見比べた。ディクレスは柱から少し下がって、立ったままブレイヤールを見下ろしていた。

「キゲイをテントの方へ走らせた後、私はレイゼルトに捕まったのです」

彼はつと視線を二人からはずし、思い起こしながらゆっくりと話し始めた。

「彼はある取引を持ちかけてきました。お互いに知りたいことを、ひとつだけ交換しよう。少なくとも害意は無いようなので、私は承知しました。私はあの鏡が何であるのかという答えを望み、レイゼルトは、石人達がアークラントにどう対処するつもりなのかを聞いてきた。彼は、あの鏡が禁呪であると答えました。裏を取りたいなら、直接鏡を調べるか、美術書から由来を探せと」

「禁呪？ やはりあれは、大きな力を持つものなのですか」

「禁呪は大きな力を持ちますが、鏡は呪文を記しているだけです。しかし魔法の品というものは、簡単にその危険性を判断できるものではありません。呪文自体が力を持つものでもありますから」

ブレイヤールはディクレスを見返す。

「それから私が彼の問いに返した言葉は、あなたにも興味深いものでしょう。申し訳ありませんが、詳しくはお話できません。ただ今のところ、あなた方に危害を加える話はありません。できうる限り早々に、この地を立ち去ったほうが良いでしょう。石人達は人間の存在を恐れて嫌っているのです。それに、これは私個人の意見ですが、これ以上石人の地に長居することは、石人全てに災いをもたらす行為となるのかもしれない」

「それは、どういうことでしょうか」

ディクレスの声が、少しこわばっていた。キゲイはなんとなく二人の側に居づらくなり、数歩下がった。

「あなたが大空白平原に作った連絡路のことです。馬が一日で駆けられる間隔で、拠点築いておられますね。少なくともあの連絡路は、オロ山脈の抜け道からここまで延びているのではありませんか？」

「……仰るとおりです。本国の様子をいち早く知るためには、連絡の手紙を一瞬たりとも止めるわけにはまいりませぬから。アークラントと大空白平原を分かち抜け道を知っているのは、我々だけです。しかし万一、ハイディーンかエカが我が国を滅ぼしたとき、私の築かせた拠点を辿って、彼らが平原に到達できる可能性は、あるかもしれません」

「七百年前に、人間と石人との戦争がありました。我々はその発端を、人間が石人の領界を犯したことにあったと考えています。ハイディーンやエカが平原に出れば、大きな兵力を持っているだけに、石人にとっては脅威です。そうなった場合、我々は人間達に対し、過剰な反応に出るかもしれません。七百年前以上の大きな戦が、石人と人間との間に生まれる気がします。これは、大げさな空想でしょうか。我々石人は暗にそれを恐れ、速やかに、アークラントをオロ山脈の向こうへ押し返したがつているのです」

「そうでしたか。このような弱小国が、そこまで石人の世界を震撼させていたとは」

ブレイヤールが見つめる前で、ディクレスはうな垂れるようにして、わずかに頭を下げる。この先のことを懸念したのか、石人に対して申し訳なさを感じたのかは分からなかった。彼はすぐに顔を上げた。

「それにしても、なぜそれほど人間界についてお詳しいのですか？ オロ山脈とは、アークラント独自の呼び方で、大空白平原では別の呼び方をされているようです」

「平原に人間が現れるようになると、石人も我が身を守るため、誓いを侵して境界を越える必要が出てきました。今では選ばれた者達が平原で常に人間の様子を探っています。大空白平原には大陸の富とうわさが西に東にと流れ、手に入らぬものはないとまで言われています。そして私の城から平原は、目と鼻の先にありますから。あの連絡路は、手紙を運ぶためだけに築かれたものなのですか」

白王の瞳が、人間の先王を鋭く見据えた。ディクレスはその視線を引き締まった表情で受け止める。先王は何も答えず、視線を先に逸らしたのはブレイヤールの方だった。ブレイヤールは沈痛な面持ちでそっと目を閉じ、うなだれる。

離れた所で二人を見るキゲイには、ブレイヤールが落ちつかなそうにしているのがよく分かった。ディクレス様が彫像よろしく微動だにせず立っているのに対して、ブレイヤールは腿をさすったり、左手をぎゅっと握りこんだりしている。話し方も少しのろのろしていて、言葉が出てこなかったりすると唇を噛んでいた。今もそうだ。キゲイはそれを見て、なぜかハラハラした。二人がそれぞれに、相手の考えを探り合っているのはなんとなく分かる。ブレイヤールの方が、ディクレス様ほどそれをうまくやれていないらしいことも。本来ならディクレス様の方を応援すべきなのに、キゲイは奇妙だと思いながらも、ブレイヤールの方も心配でならなかった。

しばらくしてブレイヤールは再び面を上げ、声の調子を変えて話題を移した。

「私は、この廃墟の主です。石人の世界には、星の神殿という最古にして第一の存在があります。そしてその下に、十二の古い国があります。十二の国の王は、同時に星の神殿の神官でもあります。そのためたとえ戦争をして相手の国を打ち負かしても、王族の血筋を絶つことは決してありません。国が滅んでも、王族だけは神殿の手によって守られます。ですから七百年前に滅んだこの国にも、私のような王族の末裔が居られるわけです。もっとも、立場は非常に弱いものです。私は他国の王達の指示に従って、この城に宝を用意し、あなた方の行動を観察するのみです。しかしこんな私でも、この城を守るくらいの力は持っているのです」

「では我々は、あなたに許されてこの城に居ると」

「そうなります。石人達はまだあなた方に危害を加える気は、ありません。しかし分からないのは、あなた方の目的です」

「アークラントは光の中にいる人物を探しに参りました。我が国の予言者が見た夢を、聞いてはくださりませんか。かの予言者も石人の世界には詳しくなく、どうも夢見を正しく解釈しきれていないようなのです」

ディクレスは、トゥリーバから聞いた夢の話を繰り返す。キゲイもブレイヤールの返事が気になって、全身を耳にした。ブレイヤールなら、予言者の言っていた英雄が誰なのか分かるかもしれない。そう思ったのだ。

ブレイヤールは予言の夢を思い浮かべるように目を閉じて話を聞いたが、すぐに瞼を開いた。

「石人の世界にそこまで広い平原があるとは、聞いたことはありません」

それから考え考え、ゆっくりと言葉を続ける。

「ただ、光の霧には心当たりがあります。『光』というものがあるのです。光の霧を発生させるものです。香を練りこんだものもあり、専用の光炉こうろで焚きますが、非常に幻想的です。我々の世

界をかつて満たしていた原初の大気を想起させるものとして、特に神聖な儀式では欠かせません。他は、ある程度の高貴な身分の人が用います。私は儀式以外の用途では使ったことはありません。とても高価なものなので」

「ではあの人影は、石人である可能性が高いのですか？ そして高貴な身分の方であると」

「神職にある可能性が高いですが、十二国の王も、神官ではありますし……。平原のどちらの方向にその人影が立っていたのか、分かりませんか」

「それは聞いておりません。平原の様子から言っても、方位を知らせるものが何もないようです。その平原は、アークラントから南にあり、ただただ石人の地であると」

「石人世界のもっと奥かもしれません。でも、なぜその人影が英雄だということになるのですか？」

「そう見なす以外にないのです。我々は」

ディクレスの顔に苦笑混じりの、穏やかな笑みが広がる。それでもすぐに、彼は真顔に戻ってこう言った。

「しかし私自身、この地に何らかの光明は感じていたのです。そこへ丁度、予言者があのような夢見を伝えてきたことが、私をこの地に駆り立てました。予言者の見たものが、私がそれと感じながらも、はっきりと捉えることができなかつたもののような気がいたしたのです」

「そうでしたか……」

ブレイヤールはディクレスから視線をはずし、どこともなく遠い目をした。

「私が今気になっているのは、『レイゼルト』を名乗る少年のことです。実は彼と情報を交わした後、彼はそのまま私の前から立ち去ろうと背を向けたので、その隙について魔法で捕らえようと試みたのです」

それを聞いて、キゲイは思った。アークラントではたぶん、卑怯と言われる行為だ。キゲイはディクレスの様子をうかがったが、先王の表情は真面目なままだった。

「私の魔術は失敗し、返り討ちにされました。目が覚めたときには辺りは夕暮れで、右半身に感覚がなく、まったく動かせませんでした」

「彼は……、腕の良い魔法使いなのではないでしょうか？」

「石人の水準から言って、年齢を問わず、相当なものです。あなた方の前では、実力を隠していましたか？ もっとも他種族の前でありのままの実力を見せるというのは、あまり賢いやり方ではありません」

「彼は深夜のうちに、我々の陣営から姿を消しました」

「えっ？」

「そもそも彼は、自分も石人の宝を探していると言って、我々の元へとやって来ました。そして彼は、この城は遠い昔にうち捨てられたものだ和我々に教えました。タバッサの遺跡荒らし達も廃墟だといひ、はぐれ者の石人が数人住んでいるとも言っていました。その石人がまさか城主であると分かっていたならば、この城に忍び込む失礼は冒さなかつたでしょう。つまり我々は、レイゼルトによって城におびき出され、あなたに許されてここに留まっているということになる。私は、彼にまんまと騙されたわけです」



「怒っていらっしゃるようには、お見受けできません。なぜあの少年を陣営に組み入れられたのです？」

「私は騙されましたが、裏切られたとは思っておりません。私が彼を雇ったのは、彼の目を見たからです。アークラントの者達と、非常に似通った真剣さがあった。彼はいったい何者なのでしょうか」

「私も同じ質問をあなたにしようと思ってました」

ブレイヤールは心からの溜息をつく。

「私は、あなた方人間よりも、あの少年の存在の方に差し迫った危険を感じます。そしてそれ以上の危険を、あの銀の鏡は秘めている……」

ブレイヤールはキゲイの方を向く。キゲイは崩れたアーチの根元にもたれ掛かって、船を漕いでいた。ブレイヤールはキゲイに視線を残したまま、ディクレスに向き直る。

「レイゼルトがああ鏡をキゲイに託した理由も不明です。ただ逆から考えれば、適切な人選ではありません。現に彼はああ鏡を、不用意には扱っていない。そうでしょう？」

「いえ、私には分かりません。ただ彼が我々から去る際、キゲイに最後に言い残した言葉から察するに……、彼は目的はあれど、自身の意のままにそれをなそうとは考えていないようです。ああいった手合いは、非常に柔軟な動きをするものです」

それを聞いたブレイヤールはうな垂れ、両手で顔を覆った。

「私にはまだ、物事の流れというものが見えません……」

「それについては、局面は違えど私も同様です。しかし幸い、彼の立ち位置のひとつだけは、はっきりしている。それは彼がアークラントに対して、我々と同じ思いを持っているということです。ならば彼とて、ひとつの布石も打たずにいることは不可能でしょう。……彼はあなた方の敵なのですか？ 恐れるに値する者だと」

ブレイヤールは両手をぱたりと下ろし、地面を見つめたまま固い口調で答えた。

「敵というより、味方ではないと言ったほうが適切かもしれません。彼の動向を見守ることが果たして、我々石人の益になるのかは、不明です。それに彼とアークラントとの関係は、伏せておくべきかどうか……。もし我々がレイゼルトを炙り出さねばならなくなった際、アークラントを攻撃すればよいことになる」

「そこまでなさいますか」

ディクレスは暗い笑みを浮かべる。ブレイヤールは慌てて首を振った。

「お許しください。考えすぎでした。今はまだ、そこまで考える時期ではありません。……私は銀の鏡に触れたことで、石人達に秘密ができてしまった。ここであなたと会った事実も、明らかになっては困るのです。文字通りであれ形式的であれ、私の首が飛べば、あなた方にもいい影響はないはずですよ」

東の空に夜明けの気配が来ていた。夜の闇が薄まり、庭園に淡く長い影が落ち始めている。

「ディクレス殿、もう一度、キゲイを私に預けてはくださりませんか」

ブレイヤールは早口に言った。時間はもうなかった。

「鏡のことが、気になって仕方がないのです。レイゼルトが鏡を彼に預けたなら、鏡と彼はもう

少し一緒にしておかなければ。それに私は、鏡に触れることは出来ません。彼の身の安全は、私が守ります。彼の運命が、私の手の内にある間は」

ディクレスは短く鼻を鳴らした。溜息と不満、両方らしかった。

「魔法使いというものは、良くも悪くも言葉がうまいようすな。分かりました。私から、彼に話してみましよう」

ディクレスはキゲイに歩み寄り、肩に触れてそっと起こす。キゲイは寝ぼけ眼で、相手の顔を見上げた。

「折り入って、頼みがある。白王の下に、しばらく残ってはくれないか？」

「え。……え？」

キゲイは耳を疑い、両目をごしごしこすった。寝ぼけていると思ったのだ。それから柱の上に座ったままのブレイヤールへ、目を向ける。ブレイヤールは何とか立ち上がろうと苦戦していた。まだ体がおかしいらしい。

「白王がおっしゃるには、君は大変特殊な立場にいるようなのだ。あの鏡のために」

「かがみ……っ！」

キゲイは胸を押さえる。それはまだ確かに、そこにある。ブレイヤールが大きくよろめいて、倒れこむように傍へ膝をついた。

「キゲイ、その鏡は僕の手元にあった方がいいと思うんだ。でも、僕はその鏡に触れることは出来ないから……」

「えーっ！」

キゲイはようやく状況を理解する。ディクレスが同情したようにこちらを見ていた。

「アークラントは、あの鏡を受け入れることはできないのだ。それは国を助けるどころか、新たな災いと混沌を人間の世界にもたらすものだろう」

キゲイはブレイヤールを見返す。ブレイヤールは真っ直ぐその視線を受け止めて、色々言うべき言葉を探しているようだった。ところが、良い言葉は思い浮かばなかったと見える。彼独特のしごく穏やかな表情でにっこり微笑み、こう言った。

「悪いね。恨むなら、レイゼルトを恨んでくれ」

はっきり言い切られて、キゲイは顔を引きつらせた。やっとの思いで仲間の元に帰ってから、まだようやく一日になるかならないかくらいだ。何をどう間違ったというのか。また状況は逆戻り。いや、本当にそうなのだろうか。

「僕、今度はいつ皆の所に帰れるんですか？」

「多分、誰かがレイゼルトをとっ捕まえて、彼の秘密を全部吐き出させるまで……かな」

先が見えないぶん、状況は前より悪くなっているようだ。

「非常につらいと思うのだが、他に代われる者もない」

「決着がついたら、君は僕が責任を持って、皆の所に帰すよ。それまで……頼む」

キゲイの前には恐れ多くもアークラント先王と白王の二人がいて、こちらの返事を待っている。「嫌だ」と言えば、「うん」と言うまで二人から延々と諭されるに違いない。キゲイはがっくりとうな垂れ、自分の運命について観念することにした。

ブレイヤールはキゲイの決心を見届けると、ディクレスにうなづく。ディクレスを元の場所まで送るため、ブレイヤールとキゲイは昨日の道を辿り始めた。ブレイヤールは右足を引きずり、壁に手をつかないと歩けない状態だったので、途中までしか案内できなかった。

最後の一本道の廊下の所で、去り際にディクレスはキゲイの肩へ手を置いた。

「ブレイヤール殿と会えて良かった。キゲイ、よく決心してくれたな」

それだけで、彼は何か特別な言葉をかけるわけでもなく、地読みのテントの方へと立ち去っていく。

その背中を見送るキゲイの耳に、レイゼルトの一言がよみがえる。

――アークラント先住民ごときが、「国を助ける気」だって？

もし今度彼に会うことがあれば、もう「アークラントのために」という言葉は使うまい。でも、「ディクレス様のために」なら、きっとレイゼルトも、そしていつか彼を怖がらせたアークラントの少年達も、まだ納得してくれるんじゃないか。キゲイはそう思った。それにキゲイ自身、今ではそちらの方がしっくり来るのも、確かだった。レイゼルトがこの鏡をエツ族である自分に預けた理由は、もしかしたらここにあるのかもしれない。アークラント人では駄目だったのだ。きっと。

キゲイが物憂げに立ち戻ると、ブレイヤールは庭園の池の側で、地面に転がっていた。彼は足音でキゲイに気がつき、不自然なくらい不動の体勢のまま、こう言った。

「ちょ、ちょっと待ってて……。やっと感覚が戻ってきたと思ったら、強烈な痺れと激痛が」

「……王様。それもレイゼルトの魔法のせい？」

ブレイヤールは返事の代わりに歯を食いしばり、苦しそうに体を丸めている。これは、相当きているらしい。キゲイは溜息をついた。この様子では、もうしばらくここを動けそうにない。眠気と空腹で、ふらふらだったのだが。

冷たい朝日が、純白の城を新しい光と影で染めていく。照らし出された回廊の柱は、その輪郭を朝霧に淡く滲ませ、石畳を珊瑚色の光彩でいろどった。この城は、光によって様々にその様相を変えるのだ。まばらな下草の上に横たわる白王の髪もまた、赤みがかった黄金色に輝いていた。

## 七章 黄緑の城

白城から大人の足で三日。そこに黄緑の城があった。城とはいえ、石人は巨大な城に国民全員が集まって暮らすので、城そのものを国とも呼ぶ。

黄緑の城は白城ほどの規模はないが、それでもやはり大きな城だ。周辺の山々に比べれば標高は低いものの、城の天辺部分には雲がかかることもある。城には町もあれば、畑や森や川もあった。生きていくのに必要なものは、全て城に揃っている。城の周りは魔物や邪妖精といった魔法の生物がうろつき、危険でとても暮らしてはいけない。人間達はこの地を石人世界と呼んでいるが、本当ならば魔物世界と呼ぶのが正しいだろう。石人は城を築くことによってこれらから身を守り、ようやく自らの生活できる場所を得ていた。

城の頂上には王の居城が建っている。昇ったばかりの朝日はまだ山々の向こうにあって、一番高い塔の屋根に飾られた水晶だけがわずかな光を捉えて輝き、残りの部分はまだ影と朝霧に霞んでいた。

トエトリアは冷気を頬に感じて目を覚ます。大きな金色の瞳を開いて、目をこすった。瞳に、ベッドの円屋根に描かれた、黄緑色の神魚の姿が映る。あくびと伸びをしながらごろんと寝返りをうつと、視線の先には白い大きな暖炉。一晩中彼女の側に付き添っていた女官が、傍らで火に当たりながら居眠りしていた。

トエトリアは起き上がって、ベッドから飛び降りる。まったく、あの傭兵達の眠り薬のせいで酷い目にあった。粗悪な薬の成分と、人間の町で吸った空気の毒気を抜くために、毎日三度、苦い薬を飲まされる。おまけに城に帰ってすぐ、ちょっと風邪をひいたものだから、風邪薬まで余分に飲まされる羽目になった。

彼女は裸足でぺたぺたと、淡い黄緑色を基調とした大理石の部屋を横切る。深い黄緑のカーテンをかき分けて、バルコニーへ出た。石床の下には暖かい湯が通されていて、裸足でも冷たくない。

トエトリアは手すりの上に立ち、両手を腰に当て、ぐるりと景色を見回す。外には霧雨の衣が漂っていて、周りの山々は薄墨色の影にしか見えなかった。城の下方は厚い霧に隠れている。空だけがじわじわと黄金色に輝きを増し、朝日が昇ったことを知らせていた。

彼女は首から下げた紐を手繰り、絹の小袋の中から小石を取り出す。

「冬の朝じゃなくなってきたみたい。雪じゃなくて雨だもん！」

うきうきと一人呟やき、手にした小石を朝日にかざした。小石は淡い黄緑色に透け、中に封じられた小さな虫も朝日に透けた。この石は、トエトリアの祖母や母親が小さかった頃に、算術の勉強で使っていたおはじきの一つだ。星の神殿が浮かぶ湖に長年沈んでいた琥珀を磨いたもので、陽炎らしき虫が封じられている。宝石というほど質の良いものではなかったが、彼女はとても気に入っていて、お母さんが病気で亡くなってから、何かにつけお付の妖精みたいに持ち歩くようになっていた。

「せっかく雨が降っていい気持ちなのに。熱が下がるまでは、外で遊ばせてくれないんだろうね」

トエトリアは小石に語りかけるようにつぶやくと、手すりから床に飛び降りた。

「姫様！」

間一髪、甲高い声が聞こえて、彼女は室内を振り返った。痩せて背の高い侍従長の女性が、大またで寝室に入ってくる所だ。危うく手すりの上にいるのを見られるところだった。侍従長はベッドの上から肩掛けを取ると、トエトリアの側まで小走りにやって来た。

「外は冷えます。また風邪をぶり返されたら、たいへんです！ 雨が降っているから、お外でお遊びになられたいとでも思われたのでしょうか。普通の者は、晴れの日こそ屋外で遊びたくなるものですが」

「私は晴れの日より、雨の日の方が遠くへ出かけたくなる」

「分かっておりますとも。王女様が城を抜けだされたのは、みぞれ混じりの日でございます」

侍従長は肩掛けをトエトリアに被せると、ベッドの所まで引き戻す。そして寝室の扉に向かって、どうぞと声をかけた。かしこまって現れたのは、トエトリアの母の代から王室付き医師をしている老人だ。彼はベッドの端に腰掛けているトエトリアの元へ近づき、うやうやしく朝の挨拶をする。彼は彼女の額に手を当て、次に舌の色を調べた。

「まだ少しお熱があるようですが、風邪が原因ではなさそうですね。体内に残っている眠り薬の毒気が、解毒薬の力でまだ燃えているようです。ご気分はどうでしょうか」

「お腹がすいたかな」

「食欲が出てきましたな。それは結構。解毒薬より良い食事の方が何よりの良薬でしょう」

医師は微笑んで、侍従長を振り返る。

「一日くらいならお姫様も耐えられましょう。少々おかわいそうな気もいたしますが」

トエトリアも侍従長へ顔を向ける。

「何？ 何のこと？」

「今日からまた少しずつ、公務に復帰していただくということです。王女殿下の今日のご予定を申し上げます」

侍従長は懐に差した筒から、さっと長い巻物を取り出した。それを見たトエトリアは鳥肌が立つのを感じる。風邪もよくなって、いつもの朝の光景が戻ってきたのだ。

「聞きたくないっ！」

しかし耳をふさいでも、侍従長の甲高い声は手のひらを突き破って脳天に響いてくる。

「朝食をとりつつ下層まで移動。城下の謁見の間にて、新しくわが城の国民となった者達の名読みの儀。再び上部二層にて王衛就任の儀。以上でございます。お昼過ぎには全て終了する予定になっております」

「……それだけ？」

トエトリアは疑い深げに、侍従長の反応をうかがう。信じられないことだった。いつもなら二度寝ができるくらい、長々と今日の予定が続くのだ。侍従長は澄ましながら頷き、巻物を元通りに収める。

「あなどってはなりません。王衛就任の儀は正装をしていただきますので、お覚悟を」

「正装……。明日に延期するとかはだめ？」

「いま何かおっしゃりましたか」

わがままは聞き入れないとばかりに、侍従長が鋭く聞き返す。

「王衛の方は、昨日から儀式の準備で剣の間に籠っています。儀式が終わるまで、日の下には出て来れません。彼にもう一日そこに居ろと、おっしゃられますか」

トエトリアは頭を振ってベッドから降りると、お召し代えに現れた女官達に体を預けた。女官達は王女の長い髪を三人がかりで梳かし始める。侍従長はそれを見届け、回れ右をして退出して行った。

「なんだかひどく機嫌が悪いね」

トエトリアは、前髪を梳かす女官の一人に話しかける。

「姫様が一人で勝手に城からお出かけになったからですよ。私どももそうですが、侍従長もそれはそれは心配していらっしたんです」

「ちゃんと『人間の国に行ってくる』って、置手紙してたのに？」

彼女は唇を尖らせる。すると、後ろ髪の上半分を梳かしつけていた女官が答えた。

「まあ！ だから皆さん、あんなに慌てていたんですね。あの森の境界を越えるのは、いくら王族でも許されないのです。姫様はまだ子どもだったから罰を受けずに済みましたが、王室長官は大変だったようですよ」

「姫様が元気になられたと知ったら、お説教に参られるかもしれませんね」

「私、もう少し病気のままでいようかな……」

後ろ髪の下半分を梳かしている女官が、首をかしげてトエトリアに尋ねる。

「でもどうして、一人で行こうなんて思われたのです？」

「大臣達が、人間が侵攻してくるかもしれないと言ってたの。もしそうなったら、ブレイヤールが真っ先に対応しなくちゃいけないらしいけど、実質的な行動を起こせるのはこの城だって、言ってた。だったら王女である私も敵を知らなきゃ、何のお手伝いも出来ないよ。で、大臣達にそう話してみたら、そんな必要ないって。仕方ないから、一人で調べに行くことにしただけなの」

「うーん。いくら王女様でも、皆さんが話し合いで決めたことを、勝手に破っちゃいけないと思います。それに人間って魔法は大してうまくありませんから、束になってきたってちっとも怖くなんてありませんわ。おまけに夜になれば、邪妖精に魂をかじられて、抜け殻になるだけです」

別の女官が水盤を前へ差し出す。トエトリアは水盤の水を両手ですくって、顔を洗った。

——だから不用意に私達の世界に入り込まないよう、気をつけてあげないといけないんじゃないかしら。

彼女は上の空で差し出された布を取り、顔を拭いた。

女官達がトエトリアの寝巻きを脱がせ、銀糸の刺繍が入った深い黄緑色の服を着せた。琥珀のおはじきは、他のおはじきを入れた小箱に大切におさめられる。今日のお勤めが終わるまで、しばしのお別れだ。

女官らは、髪を結び始める。彼女達はみな楽しそうだった。なにしろ王女様は石の肌と呼ばれる、血の気も感じられない真っ白な肌を持っている。夜空のような漆黒の肌とともに、石人達の間でこれらの肌色は最高に尊いとされていた。加えて、王女様の髪は柔らかな若葉を思わせる

みずみずしい黄緑色につやつやと輝き、踵までまっすぐに流れ落ちている。綺麗に飾り立てればそれだけいっそう、彼女は美しい王女様になってくれた。女官達にとっては、存分に腕の振るい甲斐があるというものだ。

「さあ、仕上がりましたよ」

謁見があるため、いつもより豪華な飾り付けだ。トエトリアが頭を振ると、小さな銀と真珠の髪飾りが触れ合って、しゃらしゃらと涼しげな音を奏でる。耳にくすぐったい音で、あまり好きにはなれない。腰紐に下がった銀の彫刻付き円盤飾りも、それなりに重い。歩いているうちに、腰紐ごと下に落ちてしまいそうな気がする。いずれにしても、物音を立てないで歩くなど不可能だ。

腰から下は、広げると大きな四角い袋状になるズボンで、下二つの頂点に足首を出す穴が開いている。腰飾りで足の間の布を上を吊り上げ、大きく優雅なひだが足を包むつくりだ。これをはいたとき、気をつけなければいけないのは一つだけ。決して走らないこと。走ればひだに足を引っ掛けて、転ぶ。

トエトリアは、首に鈴を付けられ、さらに紐付きの脚輪をされた鳥の気分になった。

やれやれと居室を出ると、侍従長が辛抱強く待っていた。彼女は王女の身なりを確認し、ほんの少し歪んでいた上衣の裾を引っ張って直す。

「朝食は箱舟に用意しております。私は王衛就任の儀の用意がありますから、これで失礼させていただきます。途中でご気分が悪くなられたら、無理をせずに近くの者におっしゃるのですよ。薬を持たせておりますから」

「はあい」

侍従長が去ると、トエトリアは女官達を従え、さっそうと歩き出した。緑色の石の床が真っ直ぐ伸び、淡い灰色の壁は巧みに組み合わされた竹とヒスイの彫刻、小さなモザイク画で美しく飾られている。通路を守る近衛騎士達はどうやうやしく頭を下げ、飾り柱のように控えている。皆黄緑色の髪をして、黄緑色のマントを羽織っている。近衛騎士をはじめとする王室直属の騎士は、黄緑色の髪を持つ人しかできないのだ。

トエトリアは一对の扉の前で立ち止まる。扉の前には二人の家来が、船の櫂を模した杖をささげ持っていた。彼らはトエトリアに一礼し、扉を開ける。

扉の向こうは小さな丸い部屋だ。天井は高く、神魚の形にくりぬかれた天窓から弱い日の光が差し込んでいる。窓枠に嵌まっているのは薄く剥ぎ取られた雲母の板で、日の光に黄緑色をした天然の縞模様を浮かび上がらせていた。そして、部屋の床は水である。そこに部屋よりひとまわり小さい、箱型の舟が浮かんでいた。

箱舟には二人の舟役が待っていて、トエトリアの手をとって舟に乗せてくれる。舟の上には、座り心地のよさそうなクッションと、椀に盛られた果物、穀物のビスケット、味付けした野菜のペーストに、湯気を立てる温かいお茶が用意されていた。トエトリアに続いて、三人の女官と一人の侍従が乗り込む。部屋の扉は重々しく閉じられた。

「降下良し！ 水を抜け！」

トエトリアがクッションの上に落ち着いたのを確認し、舟役の一人が声を上げる。水面に小さ

なさざなみが立ち、まもなくゆっくりと、舟は水面と一緒に下降を始めた。

「さあ、朝食にいたしましょう」

三人の女官達は果物を一口サイズに切り分け、野菜のペーストをビスケットに塗った。二人の舟役は双子で、それぞれ箱舟の縁に片足をかけ、舟が壁にぶつからないよう櫂で壁を押し、位置を正している。互いの呼吸を合わせる短い掛け声が、威勢良く楽しげだ。

巨大な石人の城では、このように水を利用した昇降塔が使われていた。五階、十階程度なら階段でもいいのだが、それ以上となるとさすがに移動も大変になる。水を注入したり抜いたりするため素早い移動には向いていないものの、多くの荷物を一度に運べるという点でも、この昇降塔と箱舟は生活の重要な移動手段だった。そしてこの箱舟がひっくり返ったり、壁に引っかかったりしないよう操るのが、舟役の仕事だ。うっかり水の中に落ちた人も助けあげたりする。

トエトリアは、女官達が切り分けてくれた果物を口に含んだ。まだ熱のある喉に、心地よい冷たさが通っていく。頭上を見上げると、少し遠くなった天窓の魚模様が見えた。四方の壁には時々モザイク画が水面から現れる。また、壁に窓のように埋め込まれた大粒の宝石を通して、外の光や壁の向こうに灯されている明かりが入ってきていた。まだ水面の下にある窓からも、透明な水を通して小さな明かりがゆらいでいる。

朝食が済んでも箱舟はまだ目的の階には着かない。ゆうに百階は下るので、時間がかかるのは仕方のないことだ。王族や貴族であれば、この長い時間を優雅に過ごせるよう様々な工夫を凝らす。たいていは詩人や楽士と一緒に乗せて、小さな宴会を開いたりするのだ。ところが王女であるトエトリアの場合は、優雅からは程遠いものだった。

「ここなら逃げられませんものね。さあ、魔法のお勉強をしましょう」

おもむろに立ち上がった侍従が、トエトリアの前に分厚い本をどしんと置く。どこに隠し持っていたのやら、不思議なものだ。トエトリアはかくんとうな垂れた。

舟が下層に着いたのは日も高くなっての頃だ。昇降塔の分厚い扉が重々しく開くと、近衛隊長の気難しそうな顔が待っていた。近衛隊長は卵型の小さな顔をした女性で、侍従長とはまた違った意味で、トエトリアは彼女が苦手だ。

「おはようございます、王女様。名読みの儀の用意はすでに整っておりますゆえ、謁見の間へご案内いたします」

近衛隊長は短い朝の挨拶をすると、それ以上無駄な言葉は一切口にせず、トエトリアを国民との謁見の間へと促した。隊長の後ろに控えていた数人の近衛兵が、王女を先導するためにさっと背を向ける。近衛兵の黄緑のマントが、窓から差し込む光に鮮やかな色彩を躍らせた。

謁見室には、生まれて間もない赤ん坊を連れた大人と、二家族くらいの新しい城民が待っていた。王座の両脇には、左右の大臣も控えている。トエトリアが王座に胡坐をかくと、部屋の一同は彼女に向かって膝を折り、深々と礼をする。

「名読みの儀を執り行います。順に王女様の前へ出て、名をお告げなさい」

左大臣が重々しく口を開き、侍従がトエトリアの前に筆記台と筆と、小さな紙束を用意する。赤ん坊を抱いた親は子の名前をトエトリアに告げ、忠誠の証として赤ん坊の小さな手をとって彼女の膝を触らせた。トエトリアは聞いた名を紙に書きとめる。



本来であれば名読みの儀は王の仕事だ。ところがトエトリアの母であった女王は若くして亡くなり、黄緑の城は王が不在の国となっている。トエトリアは王の娘であったから、いずれ王位を継ぐ者として、幾つかの重要な儀式を執り行う義務があった。名読みの儀も重要な儀式の一つだ。王は国民一人一人の名を書き留め、それを城に捧げることで、魔物や邪妖精から守るべき者を城に教えるのだ。

すべての名を書き終えると、彼女は紙束を持って謁見室の中央へと向かう。そこには床から大きな杯型の台座が生えている。石造りの台座は目立った装飾もなく、重要なものには到底見えなかったが、名読みの儀にはとても大切なものだった。トエトリアは紙束を台座に端から一枚ずつ並べ、それから台座の杯を支えるように下から手を添える。すると、ポツという軽い音とともに紙束は透明な炎に包まれて燃え出し、あっという間に燃え尽きる。台座の上には灰すら残っていない。トエトリアは台座の上をそつとなで、本当にそこに何もなかったことを確認する。台座はほんの少し暖かくなっていた。彼女は誰にも気づかれないよう安堵の息をつく。そして国民達を振り返り、古くから定められた言葉を告げる。

「我が城はそなた達を受け入れ、守り、応えるでしょう」

それまで神妙に儀式の進行を見守っていた国民達が、ようやく顔をほころばせた。もし台座の上に自分の名が書かれた紙の灰が残っていたら、城に暮らすことを許されないのだ。長い城の歴史でもそういったことがあった試しはほとんどないのだが、名を試される方はいつの時代でも気が気でないらしい。もちろんトエトリアだって、灰が残らないかどうかいつも心配だ。灰が残ったときなんと言うべきか、儀式の先生は教えてくれなかったのだから。

名読みの儀式がすむと、トエトリアは再び昇降塔の舟に乗り込む。左右の大臣達も次の王衛就任の儀を見守るため、別の昇降塔へ急いで去っていった。今度は昇りなので、昇降塔には水が注入されることになる。

塔の扉が閉まると、まもなく四方の壁を伝って薄い滝が落ちてきた。塔のずっと下の方でも、ものすごい勢いで水が流れ込んでいるはずだ。それでも登りは降りの倍くらい時間がかかる。女官達はこのときも時間を無駄にはしない。トエトリアの髪をほどいてよく梳くと、まじないの言葉を口ずさみながら正装用の髪型に編みはじめる。髪を何本もの細い束にわけ、布を織るように編みこんでいくのだ。均等な強さで編まないと、よじれて不恰好になる。トエトリアはうかつに頭も動かさず、石の像のように舟の上でじっとしていなければならない。

「お姫様も大変ですこと。お城から逃げ出したくなるのも、分かりますわ」

舟役の双子が笑った。

「名読みの儀も、なんでもないように見えて大変だしね」

トエトリアは口を尖らせて答える。

「名札を燃やして、灰が残らなければいいんですよ。私達は先代に名読みの儀をしていただきました」

「あれは私が燃やしているわけじゃないの。城が燃やしているのよ」

「城が？」

「あ、でも私と城とが一緒に燃やしているのかな。あの台座を通じて」

トエトリアは首をかしげて、膝の上の両手を見つめる。あの台座の芯は、城の構造体と一繋がりとなっている。台座の杯の下、王が手で触れる部分は化粧石で覆われることなく、この構造体がむき出しになっていた。構造体は継ぎ目のない半透明の石で、王にしか引き出せない城の魔力を秘めている。こまごまとした儀式の中にはこうして直に構造体に触れることがあり、その度ごとに彼女は城の魔力に触れていた。城の力は何度触れても底知れず、一向に理解が出来るものではなかった。

「そうだ。王衛就任の儀は、城の中枢であるんだったよね」

「その通りでございます。さ、編み目が歪みますから……」

女官が答えて、トエトリアのかしいだ首を元通りに押し戻す。

髪が編みあがり、昼食もとってそろそろ眠くなる時間。ようやく舟は上層に位置する王城に到着する。待ち受けていた侍従長がすかさず寄ってきて、トエトリアの髪型を確認した。侍従長はてきぱきと女官達に指示を出す。

「すぐにお清めを。風邪をぶり返されるといけないから、お体を冷やさないよう気をつけて。そちらに部屋を整えているから、お召し替えはそこで」

トエトリアはそのまま女官達の流れ作業に乗せられて、何がなにやら段取りがつかめないまま、急かされるままに控えの間から浴室へ、浴室から着替えの部屋へと移される。部屋の大きな机の上には正装用の衣装がずらりと並べられていた。侍従長は端から順に着せていくように指示し、自分も服を取って王女に着付けを始める。

当の王女本人はといえば、もう半分は昼寝をしていた。寝ていても周りの女官が体を支えて引っ張りまわし、うまい具合に服を着せていってくれる。それでも侍従長が古風な長衣の帯を思いっきり締めると、彼女は咳き込んで目を覚ました。

「さ、これからが本番です。寝ている場合ではございませんよ！」

城の、すなわち国の守護者である王の正装は、戦衣装だった。魔物から城を守るという意味がある。草水晶の石鱗を幾重にも重ねた鎧をつけ、腰には金銀細工のベルト、そして翡翠の剣を下げる。頭には銀細工の冠。こちらにも淡い黄緑の宝石がちりばめられている。最後に床に引きずるほどの長いマントを羽織る。それは春の大草原のような、萌え立つ若芽色だった。体の動きにあわせて、風が渡るかのように銀色の波模様が現れる。それはそれは見事な織物だった。

すべての着付けが終わると、トエトリアは重すぎて動けなくなる。体重が三倍以上に増えたぐらいの苦しさだ。そもそもこの衣装は、大人用なのだ。泣きそうな顔で侍従長に無言の訴えを投げる。

「近衛隊長殿、いらっしゃってます？」

侍従長はすぐさま隊長を呼んだ。

「両脇から支えて、姫様がお歩きになれるよう手を貸してください」

隊長は小さくうなずき、二人の近衛騎士をトエトリアの助けに立たせた。

用意が整うと一同は王女の歩調に合わせ、そろそろと儀式の間へと移動を開始した。道中、星の神殿から派遣された神官がずっと追いついて来て、王女と並ぶ。彼は儀式の段取りを伝えにきたのだ。

「まず一つ。ですがこれがすべてです。儀式の間では一切口を聞かぬこと。よろしいですか？」

トエトリアは無言で頷いた。服が重くて、口をきく余裕がない。本当ならば神官の問いかけにきちんと答えないのは、とても失礼なことなのだ。もっとも神官は彼女の様子を見て、大目に見てくれた。彼は無礼を気にすることなく、先を続ける。

「王衛はあなた様の家臣であり、また星の神殿の神官でもありますが、実際の立場は特殊です。彼らの仕事は王の命を守ることで、その使命を果たすためならば法を犯しても構わないとされます。というのも王衛となるものは儀式の間へ入ると同時に、戸籍の上では死亡とされます。死んだ者ですからこの世の法に縛られる必要がないのです。儀式の部屋となる『剣の間』は、あの世とこの世の境だとお心得ください」

「分かりました」

今度はトエトリアも、王女として何とか言葉を返す。

「結構なご返事です。それでは星の剣と杖の話は、すでにお勉強されておりますか？」

「十二国建国以来伝わる、初代国王の魔力を宿した一振りの王剣と王杖。それから、大巫女様の霊力を封じた、王剣と対になっている剣があるって聞きました」

トエトリアは早口に答える。重たい冠のために首は痛いし、鎧のおかげで肩も痛くなってくる。儀式の間まで、体力が持つかどうかあやしい。

「その通りです。黄緑の国では王剣は栄光とともに失われてしまいましたが、守護の剣が残っていることはたいへん素晴らしいのです。大巫女様の力が宿っているため、剣の持つ力は王剣よりも大きく、もっともよく王を守護するといわれているのですから」

それから神官は、黄緑の国の歴史において守護の剣が大活躍した話をいくつも話す。神官の顔に表情はないが。声だけは少し誇らしく聞こえた。

静を重んじる星の神殿は、神官達に表情を出すことを禁じている。感情がどうしても顔に表れそうになったときのため、顔を覆うお面を持ち歩かせているほどだ。トエトリアは視線を下げ、神官の胸元を見つめる。前あわせの上着の懐に、布を押し固めて作ったお面が覗いていた。

神官が式の段取りを確認しているうち、遅れて到着した左右の大臣達も合流して来た。やがて一同は、城の中枢に入る大扉の前に到着する。黒地に銀と黄緑の琥珀で装飾された扉も、今は幾重もの魔法の鍵を取り払われて、大きく口を開けていた。扉の両脇には神殿の騎士らが居並んで、中枢の入口を守っている。神殿騎士は神官と異なり、常にお面を被っている。その上物々しく武装した彼らの姿は人の気配も感じさせず、どこことなく不気味だ。入り口の中央に立つ騎士が、白い魔法の炎を揺らめかせる長い銀のトーチを床に立てて構えていた。トーチは騎士の身長の数倍もある。神官の話によると、中枢回廊に明かりを入れることは禁じられているため、この明かりを使って中に入る一同の足元を照らすという。

中枢入口の前で神官は深く一礼する。それから一同を振り返り、静粛に進むよう、唇の前に両袖をつき合せて見せた。トエトリアは頷き、この国の王族として最初に中枢への門をくぐった。神官とその他の家臣達が後ろに続く。

中枢回廊は城の根から頂上までを貫くといわれる、巨大な円柱の塔を中心とした螺旋のスロープである。この中枢部の壁面は、城の構造をなす石がむき出しのままになっていた。この石は城

の部位によって透明度がまちまちだが、中枢部の構造石はそのすべてが澄んだ水のように透き通っている。そうとはいえ、外の光が入らない場所では、石は漆黒一色にも見えた。ただスロープ外周側の壁の奥で、白く輝く面がいくつもある。トエトリアは後ろを振り返り、神殿騎士がかかっていた明かりが、壁の中にある屈折面で反射しているのを知った。彼女は壁の奥を見透かそうと目を凝らす。しかし光を反射している部分以外は星のない夜空のように真っ暗で、奥行きさえ分からなかった。

一同は立ち止まることなく螺旋道を下って行く。奥へ行くほど入口から直接差し込んでいた明かりは届かなくなり、騎士が捧げていた銀の杖の光を反射した白い輝きだけが道を知らせるものになった。光は壁の奥で砕けた鏡の破片のように輝き、回廊の床がそれを受けて暗闇の中に淡く輪郭を浮き上がらせている。

中枢を支配する暗闇に目が慣れてくると、外周の壁の中にほのかな明るい縦の線がいくつも見えてきた。トエトリアは立ち止まり、壁に顔を近づける。それは細い光の線が小さな円を描いているものだった。円はわずかに細くなったり太くなったりしながら、ゆっくりと上へ昇っている。

——水の中の泡かしら？ それとも水の粒なのかしら？

城ではどんな高所でも、水が尽きることなく湧き出していた。それはこの城に限らず、白城でも他の城でも同じだ。その仕組みについて昔から様々な議論がされていたものの、実際の所は誰にも分からなかった。水は構造石の湧き出し口から流れてくるのだが、構造石はダイヤモンドのように硬く、その奥の水路がどうなっているのか、調べようにも手が出せないのだ。

水を汲み上げる秘密があるとすれば、この中枢のどこかだろう。この壁の奥でゆっくりと立ち昇る小さな水、あるいは気泡を含んだ細い水の通り道が、その秘密なのだろうか。トエトリアは首をひねって壁から離れ、再び歩み始めた。

剣の間は塔の中にあった。扉は開け放たれ、部屋からは白く輝く煙が外へ漏れている。スロープの外周側には砕けた光の欠片がいくつもあったが、塔の外壁でもある内周側は、常に真っ暗だった。剣の間付近だけを輝く煙が照らし、透き通った基礎石を通して塔の内側を覆う化粧石の背面をあらわにしている。化粧石は黒っぽい色をして、背面には細かな蔦模様らしきものが彫り込まれている。

「少々お持ちください。儀式の用意がまだ整っていないようです」

神官が扉の前に立ち、トエトリアにそっと告げた。まだ部屋には入れないらしい。

トエトリアは神官の背中越しに室内を覗いてみる。暗い部屋の中央には、きらびやかな正装に身を包んだ老神官の姿があった。その片手に鎖のついた光炉を下げている。輝く煙はそこから立ち昇り、淡くあたりに漂っていた。煙に照らし出される室内は磨かれた暗黄緑の石が敷き詰められているだけで、調度品は一切ない。部屋の奥に、隣室へと続いているらしい二本柱のアーチがある。隣室は真っ暗だ。

やがてそのべったりと暗闇に塗りつぶされた柱の間から、三つの人影が浮き出るように現れた。真ん中の人影は知っている。彼女をタバッサから連れ帰った若い方の石人、シェドだ。両脇の二人は装束から神官だと分かる。光炉のほのかな明かりの中で、三人とも顔色が悪く見える。シ

エドは時々足元がふらついて、左右の神官に支えられることもある。

三人は老神官の前にひざまずく。左右の神官だけがすぐに立ち上がり、部屋の片隅へと身を引いた。そのうち一人が、怯えたように自分達の出たきたアーチの暗闇へ一瞬目をやったのが見えた。

老神官が腰帯から細身の銀の杖を抜き、光炉を軽く打つ。澄んだ音色が中枢に響いた。儀式を始める合図だ。トエトリアはそっと部屋へ踏み込む。何枚も着重ねているというのに、室内の冷気が肌を刺した。老神官の隣へ行き、ひざまずいたシェドと向かい合う。シェドが身に付けているのは、黒地に銀刺繍で複雑な曲線を描いた貫頭衣だ。それは石人の死装束だった。

老神官が再び光炉を打つ。隣室から剣を捧げ持った神官が、静かに歩み出てきた。剣は抜き身のままで、研ぎ澄まされた刀身には冴え冴えとした白い光が宿っているように見える。神官は顔にお面をつけていた。老神官は光炉と入れ替わりに輝く剣を受け取り、それを恭しくトエトリアの前に差し出した。

「大巫女様の無き御名において、この者は剣の影となることをお誓い申し上げます」

トエトリアの背筋を痺れるような悪寒が走る。嫌な誓いの言葉だ。剣の影なんて、まるで人ではなくなるかのような言い回しではないか。

彼女は王衛と言うものが、他の家臣達とは全く異なる立場にあることに、ようやく気が付いた。剣を捧げ持つ老神官の手は震えている。大巫女の魔力が宿る剣の尊さと、剣の鋭さを畏れているのだ。彼女も震えた。命を捨てて剣の影になろうとする王衛を迎えることは、彼女自身もまた、王の立場に一步近づくことなのだ。その責任の重さに気が付くと、彼女は怖くて仕方がなくなった。

トエトリアは助けを求めるように、視線を泳がせる。老神官は剣を捧げ持つことに全身全霊を傾けている。シェドはまるで眠っているかのように無防備にうな垂れてひざまずいたままだし、部屋の隅に控える神官達も無表情だ。部屋の入口には侍従長や大臣達の姿が見えた。彼らは目を丸くして、無言でトエトリアを急かしている。助けてくれそうな人はいない。むしろ彼女が王にならねば、この人達は助けの手を差し伸べられないのかもしれない。王に仕え、国に仕える人達なのだから。

トエトリアは口を引き結んで覚悟を決める。彼女は剣の刀身に右手を下から添え、左手で剣の柄を掴む。心配していた剣の重量は、あまりの軽さにかえって戸惑うほどだった。子どもの彼女でも、危なげなく持てる。老神官に視線を送ると、彼は両腕を真っ直ぐ下げた。剣はトエトリアの手に残る。

彼女は光炉の光に煙る銀色の刀身を見つめた。ふとある確信が芽生えて、固く目を閉じ、右手を握りこむ。刃が指の腹に当たる感触がある。再び手を開く。指には刃の痕が残っていたが、血は滲んですらいない。彼女は理解した。確かにこの剣は王を守る剣だ。自らの刃からも王を守っている。当時の大巫女様の魔力が、剣にその意思を吹き込んだのだ。

彼女は剣から顔を上げ、老神官を見返した。相手は一礼をして後ろへ下がる。儀式は、王衛の首の後ろへ剣を添えれば終わる。彼女は刀身に添えた手を離し、剣を水平に薙ぎながら王衛の方へ向きなおる。

トエトリアは目を見開き、全身で大きく息を吸った。彼女はそれで我に返った。いつの間にか、剣は足元の床に突き立っている。何が起こったのかよく分からず、じっと剣を見つめっていると、シェドのやや戸惑ったような顔が視界に入る。彼は立って、剣の柄に手をかけて引き抜いた。それから剣を脇に置き、再び服従の姿勢に戻る。トエトリアが横を向くと、老神官が部屋の入口を示した。儀式は王が王衛を伴って部屋から出ることで完結する。とすれば、もう儀式は終わったのだ。

トエトリアはわけが分からないままに、老神官の無言の指示に従った。体が冷え切っていて感覚がない。両足もきちんと動かしているか、衣の裾から覗くつま先に意識を集中させなければ歩けなかった。部屋から出ると、すぐに両脇から近衛兵達が支えてくれた。一行は足早に中枢のスロープを戻った。

「私、儀式をちゃんとやれていた？」

ようやく城の中枢から出ると、すぐにトエトリアは侍従長に尋ねた。自分が儀式の最中の、しかも一番大事なときの記憶を失っていたのは確かだ。よほど緊張していたのだろうか。あの間、自分の身に何が起り、自分は何をしたのか、不安でならなかった。

「はい。迷うことなく王衛殿の首に剣を載せ、たいへん立派でございました。最後に剣を取り落とされたのには驚きましたが。床の傷は神官様方が直してくださいますから、ご心配には及びません」

侍従長は血の気の引いた顔をしていた。けれどもそれは、単に緊張と寒さのせいなのかもしれない。彼女の口調は、いつもと変わらなかった。

「王女様には、剣が重かったのかもしれませんが。お気になさいますな。あの剣はとても鋭い刃を持ちますが、王と王衛は決して傷つけないのです」

儀式の間へ案内した神官も口を添える。トエトリアは頷いた。

周りで見えていた者達は、見た通りのことしか分かっていないようだ。彼女が目を開けたとき、心がまるでどこか遠くから帰ってきた感覚がしたことや、そのために、まるで自分の魂を体に呼び戻すように、大きく息を吸い込まなければいけなかったことは、彼女にしか分からない。これが儀式というものなのだろうか。過去の黄緑の国の王達も、そして他国の王達も、王衛就任の儀でこんな気味の悪い経験をするものなのだろうか。

トエトリアは後ろを振り向いた。王衛になったシェドが、服を着替えて中枢の扉から出てくる場所だ。身に付けていた死装束は縦に長細く折りたたまれ、肩から腰へたすき掛けにして王衛を表す帯飾りになっている。剣帯は黄緑の国の所属であることを示す黄緑色で、剣を二本吊っていた。細身で短い方があの守護の剣で、もう一本のものは近衛兵が持っている剣と同じだ。改めて守護の剣を見ると、柄には国の紋章である神魚が透かしとして彫り込まれており、全体的に華奢で、実用というよりも飾り用に見える。それでも実際には石に突き刺さるほどの、とんでもない切れ味の剣なのだ。

シェドに続いて、儀式の間にいた二人の神官達も出てくる。彼らは互いに言葉を交わしていたが、小さな声だったので彼女には何を言っているのか分からない。シェドがそれに気づいて、鋭い動作で彼らを振り返ると、神官達は揃って口を閉じた。トエトリアには、シェドが彼らをも

言で戒めたように見えた。とすれば、神官達は何かよくないことを言っていたのだろうか。

「さあ、すべて終わりました。戻りましょう。姫様も随分お体を冷やしてしまいました」

左大臣がトエトリアの様子を気遣って、皆を急かす。確かにトエトリアはくたくただった。寒い部屋で散々緊張して、冷や汗もいっぱいかいた。悪寒も止まらない。結局私室に戻った彼女は、すぐさまベッドに寝かしつけられて薬草茶を飲む羽目になってしまった。悪寒の説明が、上手く出来なかったからだ。おかげで儀式の間で体験した不気味な記憶の欠落は、風邪をぶり返したせいにされてしまった。

日が暮れると大臣達が見舞いに訪れ、最期にシェドが現れた。トエトリアは暖炉の側の長椅子で、しょんぼりと食後の水薬を飲んでいるところだった。

「お加減はいかがですか？」

彼は一礼をした後、大臣達と同じ言葉をかけた。

シェドはひと月前に、神殿から城に来ていた。王衛に選ばれるくらいだから、髪は灰色でも黄緑の貴族の血縁者なのだろう。トエトリアの前にもちよくちよく顔を出していたので、どんな人なのか大体分かっていた。他の神官に漏れず、彼は礼儀正しく、過不足ない行動というものをわきまえている。そこから真面目で善良な性格が垣間見えることもあった。表情に乏しいのは神官というそれまでの生活上、仕方がないのかもしれない。工作中的近衛兵達も同じように無表情な感じだから、さほど気にはならない。王衛の儀を終えたからといって、彼は人が変わったようには見えなかった。ただ儀式で疲れているのか、少し悲しげな様子が目元や声色ににじんでいる気はする。

「本当に、あれでよかったのかな」

トエトリアは尋ねてみた。儀式のことがどうしても気になってしょうがない。王衛ならば遠慮なく聞いていい相手だ。あの儀式が持つ秘密を共有しているのだから。

「それから、あの部屋の奥はどうなっているの？ 守護の剣が置いてあるだけ？」

「恐れながら……」

シェドは長椅子の脇にひざまずいて答えた。

「あの部屋に何があるか、口外してはならないのです。部屋に入ることが出来るのも、王衛と星の神殿の神官だけです」

「……それは、剣以外にも何かあるってこと？」

トエトリアが探りを入れると、相手は困ったように微笑んだ。

「確かに剣が安置されています。剣には代々の王衛達の記憶が残されており、それが王をお守りするために役立ちます。剣は王の身に降りかかるあらゆる危機を、はねのけてきたからです。この話をご存知でしょう」

「うん。じゃあ、私に降りかかる危機も、剣ははねのけてくれるの？」

「もちろんです。しかし幸いにして、今は穏やかな時代です」

「王の剣が失われたとき、守護の剣は王の剣の側にはなかった」

トエトリアは国の歴史の一節を口にする。黄緑の国の王剣は、七百年前に失くなったのだ。

「悪い魔法使いを倒すために、当時の王子が、姉であり王であった人の棺から、勝手に王剣を持

ち出してしまったのよね」

「はい。以来、王子のご遺体とともに行方が知れません」

シェドはトエトリアの言葉に頷いて答える。王の剣が失われたということは、守護の剣が王を守る唯一の剣になってしまったことでもあった。それだけに王衛は、いっそう重大なお役目になってくる。

トエトリアは儀式の間の隣室に、守護の剣以外に何があったのか、なんとなく分かるような気がした。シェドの沈んだ様子は、七百年前に王剣の持ち主を守れなかった、守護の剣の無念にあるのではないだろうか。ならば彼も、あの儀式で、形は違えど彼女と同じように不気味な経験をしたのではないだろうか。

「儀式の最中、私が意識を失ったのに、気がついた？ 私、あなたの首に剣を置いた記憶がないの」

トエトリアははやる気持ちを押さえつつ、口元に手をあて、小声で話す。脇の小机を隔てて、女官達がトエトリアの寝仕度の用意をしていたからだ。シェドもちらりと彼女達の方へ目を向けた。彼も他の者に聞かれるのはまずいと思ったらしい。声を落として答えた。

「神官達もそれを気にしていたのです。しかしながら私を含め彼らも、姫様が気を遠くされたのは、剣を取り落とされた一瞬だと思っておりました」

彼は腰にさした守護の剣を、ちょっとだけ引き抜いてみせる。澄み透った刀身がトエトリアの瞳を映している。シェドの答えに、トエトリアは当てをはずした気になってがっかりした。

「姫様はまだ即位をしておられませんから、お力が不十分であったのかもしれませんが。この剣を手取るだけでも、それなりの気力が必要なのです。しかし決して忘れないでください。王衛を任じられるのは、王だけです」

それから彼はわずかに覗かせた刀身へ、自分の指を押し当ててみせる。トエトリアは、あっと声を上げそうになった。シェドが再びその指を彼女の方に見せると、細いあざが出来ただけで、血は流れていない。

「私が王衛と認められた証です。姫様も剣を握られたとき、手を切ることはございませんでした」

「.....そうだね」

トエトリアには、自分の感じたことを伝えられるだけの言葉で、うまく話すことが出来なかった。剣が彼女を主だと認めているのは、間違いないようだ。けれども儀式の最中に意識を失った理由ははっきりせず、それが拭いきれない不安としてずっと心に残っている。

「あのね。剣の間は、怖い所だった？」

シェドはトエトリアを見返した。暫くした後、彼は頷いた。

「二度とあの儀式の間に入りたいとは思いません」

トエトリアは答えを聞いて、ようやくにっこりと微笑んだ。やはり王衛にとっても、儀式は恐ろしいものだったらしい。王衛の本音を引き出して、彼女は満足した。

城にはたくさんの秘密が隠されていて、それが城の力となっている。いくら王でも、城の秘密を全て知ることは出来ない。けれども知っている秘密も知らない秘密も、すべて受け入れるこ



とが、王には必要なのだ。今日あった二つの儀式にも、城の秘密はいっぱい隠されていたに違いない。もし自分が正式に王となれば、儀式を執り行う度、今日のように不可解な経験をするかもしれない。だとすれば、それをいちいち怖がっては、王は務まらないだろう。

「寝る支度ができたみたい。私、今日はもう休みます」

トエトリアが告げると、シェドは頭を下げて身を引いた。彼女は長椅子からぽんと飛び降り、寝室の扉へ歩き出す。控えていた女官達が扉を開ける。寝室の向こうのバルコニーから、色とりどりの光の粒が散るのが見えた。春迎の祭りで放つ、花火の試し打ちらしい。

「すごい！」

トエトリアは歓声を上げ、バルコニーへと駆け寄った。花火の輝きは、城の秘密がつまった暗い中枢の記憶を、彼女の頭からいっぺんに追い払ってくれた。

花火の音に耳を澄ます、ひとりの若い女性がいた。どこにでも変わり者はいるもので、アニュディもそうだ。城の中層に位置するひとつの町の、たった一人の住人だった。

石人の数が減ってから、人の住まなくなった町は他の国同様、この黄緑の国にもたくさんあった。大ざっぱに廃地とよばれるこういった無人の町は、水門が閉じられ井戸は干上がり、日に一回兵士が見回りに来るくらいの寂しい所だ。

アニュディは城に許可を取って、廃地となった町のひとつに住んでいた。下層の巨大な城内都市に住んだ方が、生活はずっと便利かもしれない。けれども変わり者の彼女は、不便で静かなこの町の方が好きだった。

町には、石造りの家々が通りに沿って綺麗に並んで建っている。どの家も中庭を四角く囲う平屋だが、中庭は通りよりも一階か二階分低く掘り込まれた位置にあり、中央に水場が設けられている。各階は階段状に重なっているために、中庭にいても広い空を見上げることが出来た。高所から町を見下ろすと、家々は塩の結晶のように見えるだろう。

彼女は大きな中庭を持つ家を自宅に選び、庭でたくさんの葉草を育てている。通りの入口を閉ざす門の鍵は彼女が管理し、夜になれば門の戸締りも忘れない。自分一人で町を独り占めする気分は最高だ。若い女性の一人暮らしを心配されたり、変人ぶりを面白がられたりもしたが、彼女は気にしなかった。泥棒を返り討ちにする魔法ならよく知っているし、自分でも自分のことをちょっと変わり者だと認めている。しかし人嫌いかと問われれば、そういうわけでもないと答える。月に二回は友人知人を集めて、近所迷惑の心配もなく、夜遅くまでパーティーを開くことから。

通りでは一軒の家だけが玄関に、ドライフラワーを巻き付けて飾った粗末な木の脚立を出している。その上には目の粗い葦の丸駕籠が置かれ、光の玉を納めた香ランプが籠の内側でぼんやりと輝いていた。日が暮れると玄関先に明かり香を灯すのが、人の住む家の習わしだ。香が尽きて明かりの消える頃が、町が眠りにつく時間だった。

アニュディはその日も日暮れの鐘を聞き、中庭に面した地下二階から一段ずつ階段を上って、明かりを灯しに行った。たとえ自分がたった一人の住人でも、彼女はこの慣わしを大切にしている。夜に城を遠くから見たとき、この灯りがとてもきれいに城を飾ると聞いたからだ。ここよ

り上の層に住む彼女の家族も、この灯りを見れば、彼女が何事もなく生活しているのを知ることができる。

「……あらあら、もう花火は終わりなんだ。試し打ちなら仕方ないわね。たまには賑やかな夜もいいものだけど」

彼女は再び作業台のスツールに腰掛け、そっと台の上を片手でなぞる。乳鉢の冷たく重い胴が、小指に触れた。

「今日中に、これだけでも終わらせなきゃ」

アニュディは呟いて、台の上の乳鉢を引き寄せる。

ごろごろと乳鉢を擦る。乳棒の先でパチパチと弾ける、乾燥した堅いつぼみの音。ほのかに立ち昇る未熟な花卉の清々しい香り。中庭に向かって大きく開いた窓は作業台の正面にあって、冷たい風で部屋を満たしている。

「今夜も冷えそうだな。よし。もうひとつまみ春の呼び手を加えて、この寒さを退治してやる。青黄金の花はどこだっけ」

彼女は手を止めて立ち上がる。片手を上に伸ばすと、梁にずらりとぶら下げた香草と薬草の束に当たる。彼女は指先で薬草束に触れ、その香りを確かめながら、梁の下をゆっくり歩く。青黄金の花はすぐに見つかった。乾いた茎を一筋抜き取り、薬草束の列を指で確かめながら作業台へ戻る。

乾いた茎からしごくように青黄金の花の芽を摘み、片手で探り寄せた乳鉢に移す。さらに腕を台の奥へ延ばし、蜂蜜の鈴付小瓶を引き寄せる。ひと匙を乳鉢へ加え、瓶を元の場所へ戻す。

やがてしばらく途絶えていたすり鉢の心地よい響きが、彼女の仕事部屋に戻ってきた。

「やっぱり冷えてきた。春呼びの香が去年より入りようなのも、納得ね」

練りあがった香を小分けに丸め、乾燥棚へ納める。それから作業台の上に身を乗り出して、窓を閉めようと片腕を前へ泳がせた。

最後の夕の風が、中庭からさっと吹き込んだ。彼女は首を傾げる。微かだが、風以外のものも通っていった気がしたのだ。むしろそれが夕の風を部屋に導いたのかもしれない。

アニュディは少し迷い、窓の扉を開けたままにしておく。それから背筋をまっすぐに伸ばした。

「どちら様？ お客さんなら玄関から入ってもらわなきゃ。風に紛れて入ってくるなんて、礼儀知らずね」

彼女は努めて明るく、はっきりとした声を出す。こういうとき、怖がっていることを相手に気取られたら駄目なのだ。暫く耳を澄ますが、何の物音も聞こえない。何か入ってきたと思ったのは気のせいだったのだろうか。

彼女が緊張を緩めかけたとき、彼女の背後、部屋の壁際辺りで、かすかな衣擦れの音がした。——やっぱり何かいる！

アニュディは振り返り、余裕を装いながら、腕を組んで作業台に軽くもたれ掛かる。本当は胸がドキドキしている。魔術の縄で進入者を縛り上げようかとも考えるが、いざとなると気が動転して呪文が思い出せない。情けないものだ。

「部屋の明かりをつけてあげましょうか？ それとも用がないなら、さっさと出ていってくださいな。それがお互いのためじゃない？」

考えた末に、もう一度呼びかけてみる。まずは相手の正体を見極めようと思ったのだ。

「明かりはいい。私は物を見るのに、明かりを必要としない」

返ってきた言葉は少年の声色で、まるで水の奥から発せられたようにくぐもって遠かった。

アニュディは思わず眉根を寄せる。強盗と思った相手が子どもだとは、予想外だ。しかし子どもならば、魔術を使わなくてもどうにかなるかもしれない。

「とりあえず窓は閉めるわ。私も明るかろうが暗かろうが、どちらでもいいの。ただ、冷えてきたから」

アニュディは言いながら窓を閉める。その背中に再び声が聞こえる。今度は先程よりしっかりした音だった。

「翼を貸してもらいたい」

「翼？」

またしても予想だにしていない言葉に、アニュディは飛び上がるようにして振り返った。それでもすぐに口元を引き結び、頭を振る。

「だめよ。用事より先に、名乗ってちょうだい。あんた、人の家に勝手に入ってきて何様だっていうのよ。いい加減にきなさい。家に帰らないと、親に言いつけるわよ」

「私は子どもじゃない。魔法使いだ」

「はいはい。そうね。そうみたいね」

アニュディは口ではいい加減に答えながらも、頭では先ほどから少年が話した言葉を反芻していた。翼を持つ自分のもう一つの姿を言い当てたということは、相手はよほどの魔法使いだ。子どもでこれほどの才能を持つ者はまずいない。普通は長年の修練が必要なのだ。

「あんた、いい目を持ってるようね。でも、おあいにく様。私も大人じゃない。ただの調香士よ。だから翼も貸さないわ。ほら、話はおしまい。家に帰りなさい」

アニュディは次の行動にあれこれ思いをめぐらせ、舌を噛む。この少年をどう扱えばいいのだろう。少々くらいなら痛い目に合わせるのもいい薬かもしれない。しかしただの不良少年と言い切れる相手でもなさそうだ。

途切れ途切れの不安定な声が、再び彼女に向けられる。

「今夜は城の中枢の扉が開いている。分かるか」

アニュディは時間稼ぎとばかりにのろのろと答える。

「知ってるわよ。王女様が王衛を迎えられる儀式をなさったはずだから。あそこの扉、巨大すぎて開けるのも閉めるのも、一日がかりなんですもの」

「あの扉が開くと、城の力は弱まる」

「ふむ。そうかもしれない。あそこは城の急所だから。だから特別なときにしか開けない」

「城の力が弱まると、その裏で力を取り戻すものがある。基礎石の内部には水の通り道がある。あれは、ただの水か。これほど静かな場所に住んでいるのだから、あのかすかな音も聞いたことがあるだろう。それともあの音を聞くために、ここに暮らしているのか」

アニュディは組んでいた腕をほどいた。

「……あなた、ただの魔法使いにしちゃ、ちょっと鋭すぎるね。本当に子どもなの？ 私をだまそうとして、魔法で声色を変えてるんじゃない？ だとしたら、こちらも手加減しないわ」

「魔術は必要。死者は息をしないから、口もきけない」

相手の声が再び揺らいで遠くなる。それとともに床板のずっと下から、何かの力が立ち昇りつつあるのを彼女は感じた。それは厚い石と土の層の下。城を支える基礎石から。

城がこの得体の知れない者から、自分を守ろうとしている。アニュディはそう感じた。この自称魔法使いが高い魔力の素質を垣間見せながらも、せいぜい粗末な魔術で少年の声色を使っているだけなのは、城の力のせいかもしれない。城の力は、城民に害をなすあらゆる存在を封じると言われているのだ。けれども、それはあくまで王が城の力を用いるときの話。黄緑の城には、王女はいても王は不在だ。何か嫌な予感が胸の奥で頭をもたげてくる。

声はくぐもり、さらに消え入りそうになった。相手は明らかに、城の力に押されつつある。

「時間がないようだ。翼を貸すか貸さないか、今すぐ決めろ。貸すならば、それに見合う代償を払う。そうでないなら、代償を払うことになるのはそちらだ」

「代償？」

「この運命を受けるかどうか、決める時間もあなたにはない。下から何か昇ってくるのが分からないか。この力は私だけを打ち倒して、あなたはそのまま無傷で残す、そんな器用な真似は出来ないぞ」

声は小さくなる。部屋に立ちこめてきた城の力は、アニュディの肌までちくちくと刺してきた。言われるように、何かもっととんでもない存在が近づいてくる予感がする。部屋に立ちこめる力は、その気配にすぎないのかもしれない。

「あんた、この城の何を呼び出したって言うの」

「何も。呼び出したのは王だ」

「嘘。今は空位のはず……」

気づけば、彼女の手のひらは冷や汗でびしょりだった。相手の言葉を信じるつもりは無いが、近づいてくる何かから、とにかく逃げ出したい。何の根拠もなく突然湧いた焦りが、彼女を支配した。

部屋の片隅で何かがはじける。強い芳香が広がった。青黄金の花の甘い香り、白星草の清々しい香り、朱妃木の香りは他のどの香の中でもすぐにそれと分かるほど華やかだ。乾燥台に乗せた香の玉が次々と、力に反応して燃え始めている。この分だと一番高価な光香も燃え出し、部屋には白い光の霧が濃く漂い始めているに違いない。

彼女の耳元を、炎の音がかすった。梁に下がった薬草も、火の粉を上げて燃え落ちている。香りの奔流の中、彼女の焦りは一瞬にして激しい恐怖と弾ける。

「分かった。翼を貸す。だから早くここを離れましょう。私を早くここから出して！」

言い終わらないうちに、部屋の隅で床板を蹴る音がした。驚く間もなく、アニュディは誰かの背に担がれる。作業台の窓が開く音がしたかと思うと、彼女は思いきり体を振り回された。

冷たい夜気が頬を打ち、髪の中を通る。室内の強い芳香は薄れ、馴染みある薬草畑の香りと、

砂利を踏みしめる音がした。どうやら中庭に飛び出したらしい。

「発て！ 風を送る！」

すぐ脇で、少年の声が聞こえた。今度はしっかりとした声だった。生身の体から発せられたものとほとんど区別がつかない。

アニュディはすぐさま姿を転じる。自分を担いでいた少年は、押しつぶされる前に彼女の首筋に飛び乗った。彼女は苛立って大きく頭を振る。しかし、しがみついた乗り手は振り落とせなかった。四肢をばねに跳躍すると、魔法で呼ばれた風が彼女の翼を打った。

——飛び立ってしまった！

上空の風を捉えたアニュディは後悔する。後戻りはできなかった。目の見えない彼女は、もう一人では地上に降りることができなかったのだ。

## 八章 魚の少女と砂の禁呪

---

キゲイは再び白城の寝室へと帰ってきた。

朝早くにディクレス様と別れ、レイゼルトの魔法と空腹と寝不足でふらふらになったブレイヤールを引きずるようにして、白城の石人達の所へ戻った。戻ったのはなんと昼もずいぶん遅い時刻だ。その頃になるとブレイヤールはレイゼルトの魔法の影響から随分よくなって、今度は逆にキゲイの方がふらふらに疲れ切っていた。

ブレイヤールの帰りがあまりに遅いので、石人達は皆ひどく心配していた。そしてキゲイが出戻ってきたことにびっくりしたり、同情してくれたりした。ルガデル口大臣はさっそくブレイヤールに何があったのか問い質し、見当違いの場所ばかりを探していた目付けのグルザリオを叱り飛ばした。

キゲイの方は、叱られて不機嫌なグルザリオに急かされるまま、味気ない昼ご飯を平らげて、すぐに寝室へ連れて行かれる。

「先のことは分からんが、とにかく今は考えるな。休め。考えるのは、王子と大臣がやってくれる」

グルザリオは仏頂面でそういう残し、部屋から出て行った。キゲイはすぐに靴を脱ぎ捨てて、ベッドに上がる。

上着を脱いで、その懐から銀の鏡を取り出した。くもりを袖で拭って、じっと見つめてみる。どんなに見つめても鏡は鏡で、なんとも情けない表情を浮かべたキゲイの顔を映し返しているだけだ。裏に刻み込まれた模様は複雑精緻。それでもよくよく見れば、ある程度の対象性や規則性のある模様で、洗練された芸術品であることはなんとなく分かる。けれどもそれ以上の意味を、この模様が持っているようには見えなかった。これのいったいどこに、魔法の言葉が書かれているのだろうか。

キゲイは深い溜息をついた。グルザリオの「考えるな」という言葉を思い出す。確かにそうかもしれない。キゲイは鏡を上着に戻し、布団にもぐりこむ。よほど疲れていたのか、気を失うように深い眠りに落ちた。

「おはよう……ございます」

翌日、キゲイは朝早くに目覚めて食堂へと顔を出した。すると意外にも食堂にはブレイヤール一人で、他には誰もいない。彼は自分の席で眠たそうな顔をして、もそもそと朝ごはんを食べていた。

「うん。おはよう」

ブレイヤールは顔を上げ、自分の側の席を指差す。キゲイがそちらにいくと、ブレイヤールは自分の食卓の鍋と籠から、シチューとパンをキゲイに取り分けて置いてくれた。

「もうしびれは取れました？」

キゲイが尋ねると、ブレイヤールは頷いた。

「ほとんどね。けど僕ら、随分寝坊したようだ。皆とうの昔に朝の仕事に出たよ」

「まだ外暗かったですよ」

「ここ城の西側だし、今日も天気は曇りがちみたいだ」

ブレイヤールはいったん黙ると、パンを力いっぱい引き千切った。

「食事を終わったら、すぐに黄緑の城へ発とうと思う。キゲイも石人の服を着て、一緒に来てくれ。例の鏡は、なるべく側に置いて見張っておかないといけないんだ」

「黄緑の城って、石人がたくさんいる所じゃ……」

キゲイは恐る恐る尋ねてみる。

「いるよ」

キゲイの気持ちを知ってか知らずか、ブレイヤールは事も無げに答えた。彼はシチューにパンの端をつけて、ぐるぐるかき混ぜる。そのままパンをふやかすことに集中するように見えたものの、少し経って、ようやくキゲイの怖気づいた顔に気づいてくれた。

「うん。石人の服を着て、少し魔法をかければ大丈夫だ。石人は、人間が自分達の城にいるなんて夢にも思っていないから、まずばれないよ。石人語が話せないのは、そうだな……。赤ん坊の頃人間にさらわれて、大空白平原で育ったってことにしよう。そういう人、時々いるし」

「はあ……」

それを聞いたキゲイは、生返事しか出来ない。ブレイヤールがそう言ってくれても、「人間だとばれたら」という、不安がなくなるわけではない。おまけにブレイヤールは、とんでもないことをさらりと言った。彼の言う石人語を話せない理由から、空白平原に暮らす人間達がどれだけ石人に酷いことをしているかが、よく分かる。キゲイは石人に対して申し訳ない気持ちになってしまった。空白平原の人間といい、宝探しに来た自分達アークラントの人達といい、人間は石人に迷惑ばかりかけている気がする。

しょんぼりしたキゲイを、ブレイヤールは誤解したようだ。

「大丈夫だよ！ 万一ばれてしまっても、僕がなんとかするから。黄緑の城では僕かグルザリオか、必ずどちらかと一緒に行動した方がいいかな。とにかく一人で動かないように」

「でももし、なんとかならなかったら？ もしかして、牢屋に入れられたりしたら……」

「いや、所持品をあらためられて、平原に放り出されるくらいだろう」

「一人で平原に放り出されたら困るなあ……」

あまりにキゲイが心配するので、ブレイヤールも少し不安になったらしい。

「君の所持品をあらためられても困るよな……」

と、小さく呟やき首を振った。それから腕を組んで考え込む姿勢になる。いつまで待っても、次の反応が返ってこない。キゲイはその間にパンを食いちぎり、シチューに浸してふやかした。こうでもしないと、硬くて食べられたものではない。そのうちにブレイヤールも黙って食事を再開した。

二人でパンをシチューに沈めていると、大臣のルガデル口が早足に部屋へ入ってきた。彼は片手にひと巻きの紙筒を持っていて、ブレイヤールにそれを手渡した。

「やれやれ。朝早くからいい運動をさせてもらいましたわい」

「ご苦労様」

ブレイヤールは簡単にねぎらって、紙筒をくるくると開く。キゲイは下から見上げてみた。薄い羊皮紙に、何か文字が書いてあるのが透けて見える。

「それ、何ですか？」

「ディクレス殿に頼んでいた、レイゼルトに関する記述だよ」

ブレイヤールはパンをくわえたまま、紙に目を通し始める。ルガデル口は、行儀が悪いとその口からパンをもぎ取った。

「食事をするか、読むか、どちらかにしてください。それでアークラントの者達のことですが、彼らはすでに城から引き払った後でした。その紙以外、彼らがあそこにいたという形跡は残されておられません」

キゲイはうつむいた。どうやら自分は、本当に置いてけぼりにされたいらしい。覚悟していたとはいえ、こうまでうら寂しい気持ちになるとは思わなかった。こうなったらもう、全面的にブレイヤールに頼るしかない。

「空白平原で雇い入れた魔法使いの中に、レイゼルトがいたわけか。育ての親で、師匠を名乗る人間の老人と一緒に。レイゼルトを赤ん坊の頃に空白平原で拾った、とある」

「それ、王様がさっき僕に言った嘘と、同じだ……」

ブレイヤールはキゲイと目を合わせる。ルガデル口が言った。

「よくある話ではありますが、逆にそれ以外ないとも言えます。さらわれでもしない限り、石人の子どもが人間世界にいるなどありえないですからな。つまり、嘘も誠も見分けがつかないということ」

「それは、限りなく胡散臭いということか」

ブレイヤールは大臣の言葉を要約し、キゲイに目配せする。

「僕、なるべく人間ってばれないようにします」

キゲイは答えた。嘘はつかないに越したことはない。胡散臭いなら、なおさらだ。

朝食をすませ、二人は早速旅支度にはいる。キゲイには石人の服が用意された。グルザリオが一式持ってやって来て、着方を教えてくれる。

「ばあやさんがこの裏に隠し袋を縫い付けてくれたから、例の物はここに入れろ。蓋が閉まるから、逆立ちしても落とさん」

黄土色の長袖の肌着に、渋茶のだぼだぼしたズボン。グルザリオが隠し袋を見せてくれたのは、くすんだ黄緑色らしき色調の膝丈の上着だ。ブレイヤールが着ているのと形が同じだ。八分丈くらいの袖は、袖口がかなり広がっている。これでは寒いのではないかと思っていると、グルザリオは紐を取り出して袖口の穴に差しこみ、ぎゅっと絞った。さらにズボンの裾は、膝下まで脚半を巻く。

最後に上着の上からお尻を包むように腰布を巻いて、幅広の帯を締めるとようやく完成だ。

「よし終わり。お前の服は、こっちで預かっておく。仲間の所に帰るとき、またいるからな。じゃ、これ羽織りな」

マントを受け取りながらキゲイは頷いた。石人の服は普段と違う所を締め付けるので、動くとき変な感じがする。特に幅広の堅い帯は、少々お腹が苦しかった。グルザリオが言うには、帯が幅



広でしっかりしているのは、悪い妖精から内臓を守るためらしい。すぐ慣れるから、我慢しろとのことだった。

ブレイヤールもキゲイとほとんど同じ出で立ちで部屋に戻ってきた。着ているものはキゲイのよりずっと上質で、綺麗な刺繍も入っていたが。

「キゲイ、これ被って。それからこれも」

彼は持ってきた布束を差し出した。まだ身に付けなければいけないらしい。受け取ってみると、三角の布帽子とマフラーだった。キゲイが慣れない手つきで帽子を被ると、グルザリオが手を出して、帽子を耳が隠れるくらいまで引っ張り、三角の頂点を頭の後ろに折り込んだ。マフラーも鼻先が隠れるように、しっかり巻きつけられる。

「石人の世界は風も違うんだ。人間は出来る限り当たらない方がいい。体調を崩しやすくなるみたいだから」

ブレイヤールが言った。それからキゲイが、銀の鏡とトエトリアの髪でできたお守りを持っていることを確認する。

「私は一緒に行けませんが、レイゼルトに関する話は、慎重に願います」

いくらかの紙束を抱えて、大臣のルガデル口が部屋に入ってくる。ブレイヤールはその紙を薄布に包んで、自分の荷物袋へ入れた。

「今朝までのアークラントの者達に関する報告も、これまでのものに付け加えておきました。道中もう一度よく目を通して、これと辻褃の合わないことは、一切おっしゃらないように。そこにはレイゼルトのことは書いておりません。必要ならばご自分で付け加えて構いませんが……」

「アークラント側に石人の魔法使いがいるくらいは、書いた方がいいかも知れない。魔法使いとして、非凡な才能を持っているのは確かだ。でもディクレス殿は、レイゼルトは姿を消したって、言ってたし。あーあ……もう！ ややこしいな」

ブレイヤールは嫌そうに顔を歪めて、中空を見上げる。何も無いところをまっすぐに見上げるのは、彼が考えるときの癖のひとつらしい。

「アークラント先王とお会いになったこと、それで知りえたことは、まかり間違っても言ってはなりませんぞ。嘘を言うくらいなら、ずっと手前で黙っておられるよう。あなた様が禁呪に触れたことがばれたら、この白城は完全に終わりです。なには無くとも、ご自分の身を守ることをお忘れなきよう」

ルガデル口が厳しく釘をさす。彼はブレイヤールが心配でならないらしい。グルザリオと代わられるものなら、彼と一緒に黄緑の城に行きたかったろう。しかし彼はもうそこまで足腰は強くなかった。

「……分かってます」

ブレイヤールは眉間に皺を寄せたまま、前に向き直った。

黄緑の城までは大人の足で三日という話だったが、キゲイは子どもだし、ブレイヤールもそう体力がある方ではない。必要最低限の荷物でも二人にはかなりの負担となるので、四、五日はかかるという算段だった。

しかしブレイヤールは焦っていた。慌しく黄緑の城への出発を決めたのは、銀の鏡の正体を確

かめたい気持ちと、レイゼルトの存在自体に危機感を強めたからだ。どちらも石人世界に大きな影響を及ぼすかもしれない一方で、下手に公言することも出来ない事柄だった。それは彼がレイゼルトの禁呪に触れたからこそ、知り得た話だからだ。

もしレイゼルトが、本当に七百年前に大暴れした「レイゼルト」であるならば、禁呪に触れた罪で死刑になろうとも、一刻も早く多くの石人に知らせなければならない。逆に偽者であるなら、その必要はひとまずなくなる。どうすべきかは、銀の鏡の正体を掴んでからでないと決められない。ブレイヤールは、黙っていることで石人世界の裏切り者になるかもしれない危険と、白城の存続との板挟みになっていた。

最初は起伏の細かい石ころだらけの荒野が続き、二日目には山がちの地形を進むことになった。水が豊富なのか植物の影が多くなり、岩の隙間から水が染み出ている。

道らしい道はない。黄緑の城と白城をつなぐ道は、七百年前を境にほとんど使われなくなっていた。キゲイは途中、道しるべの石柱を根に抱いた老木を見た。石柱は木と一緒に苔に覆われていて、ブレイヤールがそれと教えてくれなかったら、見逃していただろう。石柱は、白城がすでに石人世界で忘れ去られてしまっていることを、象徴しているようだった。あの晩、ブレイヤールがディクレス様に言った「私は無力です」の言葉も、ここから来ているのかもしれない。白城は辺境の巨大な廃墟にすぎず、その主であるブレイヤールには、石人世界に通用する実質的な力は何もないのかもしれない。キゲイには、ブレイヤールとディクレス様が、それぞれの世界で似たような立場にいるように思えた。

物思いにふけていると、キゲイは苔の上で足を滑らせ、思い切り尻餅をついた。下が岩なので、痛みでなかなか立ち上がれない。グルザリオが襟首を引っ張って、引き上げてくれた。

「あの、王様」

「何？」

先を歩くブレイヤールは、口だけで答える。彼も自分の足元に気を配るので手がいっぱいだった。

「本当にトエト……王女様は、こんな道を一人で人間の町まで行ったのかなあ」

子ども一人ではとても危険な道のりだ。キゲイなら、この道を一人っきりで歩きたいとは思わない。

「あの子は、素直でのんびりしているところがあるけど、根は恐ろしく強い子なんだ。やろうと決めたら、尖塔の屋根にも平気で登ったり、真夜中に墓地に行ったり。なんであんなことしなくちゃいけないのか、僕には分からなかったけど」

ブレイヤールが感心したように言うと、キゲイの後ろから来るグルザリオも頷いた。

「俺でも夜一人で歩く気にはならんからなあ。この辺りは気味が悪いから」

その言葉どおり、日がかげり始めると霧が谷間に溜まって視界を悪くし、立ち枯れの木々は手を広げた怪物のようにも見える。辺りはしんと静まり返り、時々出し抜けに猛禽の叫び声が岩場に反響した。いや、もしかしたらあれは魔物の叫び声だったのかもしれない。

太陽が山の影に隠れてすっかり暗くなってしまっても、ブレイヤールは足を止めようとしなかった。木の枝を魔法の杖代わりにして、先っぽに明かりを灯す。彼はキゲイの分も明かりを作

って、渡してくれた。キゲイは不安になる。日が暮れてからの旅歩きは、危険なものだ。足元も見づらく、道も間違えやすい。夜行性の獣達もうろつきだす。足場が悪く、道らしき道も見えない上に魔物がいるかもしれないここは、夜歩きに最悪の場所だろう。

キゲイは渡された木の枝を、珍しさ半分、不安半分といった気持ちで眺める。後ろから肩を突っつかれて振り返ると、グルザリオが追いついてきて小声で言った。

「王子、焦ってるみたいだな。実際急ぎだ。もうちょっと歩けるよな」

キゲイは頷いた。アークラントから大空白平原に行くときも、キゲイ達は夜遅くまで行程を稼いだことが幾度かある。暗闇で歩くのにも、少しは慣れていた。

結局夜の旅は、キゲイが思っていたより早く終わった。ブレイヤールが一番最初に音をあげたからだ。考えてみれば、彼はレイゼルトと戦い、その翌日も一睡もせずディクレス様と話をして、一晩寝ただけで旅に出発したわけだから、疲労はかなり溜まっていたはずだ。

「まいったなあ。道を間違えた。もう歩ける気がしない……」

ブレイヤールがそういいながら立ち止まって座り込んだのは、小さな湖が見えた高台だった。

「ああ、やっぱりこっちの道に入ってたか」

グルザリオも湖を見下ろして、荷物を地面に下ろした。

「しょうがないから、今日はここまでにしましょう。確かあの辺に洞穴があったはずです」

洞穴はそれほど奥深くなく、雨露がしのげる程度のものであった。三人はそこに荷物を置き、薪になりそうな枝を集める。枝はほとんどが湿っていて、乾いたのを探すだけでも一苦労だ。グルザリオはようやく集まった薪を一か所に集め、携帯炉から火を取って薪に火をつける。

「魔法を使って火をつけないの？」

キゲイが尋ねると、グルザリオは頷いた。

「魔法で火を燃やすと、邪精が寄って来る。出来るだけ使わないようにせんと」

ブレイヤールは鍋を片手に、湖の方へ降りていく所だ。それを見て、グルザリオがキゲイに言った。

「お前は王子の従者として振舞った方が、怪しまれなくていい。今から練習だ。王子には何もさせるな。あれでも一応王族なんだから」

「はい」

キゲイはブレイヤールの後を追う。道の中ほどで追いついて、鍋を受け取った。水の中に落ちないように、明かりを灯した木の枝を片手に、足元を確かめながら湖に近づく。湖面は山の影になっていて、そこだけ世界をくり貫いたように真っ暗闇だ。辺りはあまりに静かで、水音を立てるのも躊躇われるほどだった。

湖の水が打ち寄せる砂地から足を踏み入れる。水中の泥煙がおさまるのを少し待って、鍋を水の中へ静かに沈めた。黒い鍋の上を、細長い影がしゅっと横切る。魚だろうか。鍋じゃ捕まえられないだろうなと思いつつ、キゲイは水を汲み上げようとした。そのとき何が起こったのか。突然鍋が重くなって、キゲイは引きずられるように水の中へ突っ伏してしまった。

柔らかな砂地はキゲイの重みで深みへ向かって崩れてしまう。足を踏ん張ろうとするほど、砂は水の中で滑った。薄暗い水の中、キゲイは真っ白なものと、その中にある大きな二つの目玉が

こちらを向いているのを見た。キゲイの悲鳴はたくさんの泡になって視界を遮る。たっぷり水を飲んでしまったキゲイは無我夢中に両腕を動かした。動転した彼の耳に、ばしゃばしゃという水音と甲高い叫び声をごちゃ混ぜに響く。声は、まるで金属を擦り合わせたかのように高い。鼻に水が入るわ、幽霊がいるわ、周りは真っ暗だわで、キゲイはますます混乱した。どちらに向かって泳げば水の上に出られるのか、無茶苦茶にあがいていると、ものすごい力で引き上げられた。

「落ち着け！ 落ち着け！ 足がつく！」

グルザリオの怒声が聞こえて、キゲイはようやく冷静になる。言われるまま両足をまっすぐ伸ばすと、キゲイはもう水の上に立っていた。水は腰の高さまでだった。キゲイの持っていた木の枝は、魔法の明かりを灯したまま水の上に浮いている。と、その明かりに照らされて、湖の奥にブレイヤールの背中が見えた。彼は胸まで水に漬かりながら、水の上を流れて夜闇の中へ消えていく、白っぽいものへ手を伸ばしている。

「幽霊！」

キゲイは息を詰めて叫び、後ずさる。

グルザリオはブレイヤールの後を追って、腰までの深みまで進む。ブレイヤールが白いものを抱きかかえるようにして、水の中を戻ってきた。グルザリオはそれを受け取ると慎重に両腕に持ち上げて、焚き火の所へすっ飛んで行った。

「キゲイ、大丈夫？」

ブレイヤールが声を上げる。彼は足を止めることなく、グルザリオを追って湖から上がろうとした。キゲイも慌ててそちらへ泳いで行く。こんな所に一人取り残されたくはない。

「水の中に、変なものが……」

キゲイが背中に声をかけると、ブレイヤールは首を振った。

「幽霊じゃない。石人だよ」

キゲイはブレイヤールと一緒に、湖からの坂を駆け上がった。

焚き火の傍では、グルザリオが白いものを片膝の上に乗せて、水を吐かせていた。ブレイヤールの言った通り、それは石人だった。体は小さくて、七つか八つ程度の子どもみだ。緑と灰色をした、まだら模様の古ぼけた布が体を巻いている。肌は真っ白だ。首や手足は異様に細く、頭でっかちで、髪の毛も生えていない。ただならないその姿に、ブレイヤールもキゲイも何か異様なものを感じて立ち尽くす。グルザリオの方は、二人よりもずっと先にその感情を脱していたらしい。

「何ぼっとしてるんすか！」

彼はブレイヤールに怒鳴った。

「早く濡れてない服を袋から出してください！ キゲイもさっきの鍋に水を汲んで、火にかける」

結局ブレイヤールもキゲイも、グルザリオに怒鳴られるまま言われるままに動き出した。

また湖の方へ戻るのは怖かったが、今はそんなことを言っている場合ではないようだ。キゲイが水際に戻ると、まだ木の枝が水の上に浮いていた。寒さで歯の根があわない。それでも仕方なしに、水の中に入った。すでに全身冷え切っていて、かえって水の中の方が暖かなくらいだった

。木の枝の明かりを掴み、水底に沈んでいた鍋を見つけて引き上げる。鍋は見た目相応に軽かった。なぜあのとき突然重くなったのか、さっぱり分からない。あの白い子どもが関係ありそうだったが、どう関係あるのかも、やっぱり分からない。

キゲイは焚き火の側に戻って鍋を火にかける。ブレイヤールは相変わらずグルザリオの指示通り、着替えの服を取り出したり、毛布を余分に引っ張り出したりしていた。グルザリオは手際よく、ぐったりして動かない白い子どもを毛布でくるむ。

「その子、どうなってる？ 体を温める魔法はかけた？ 男の子？ 女の子？」

「お嬢ちゃんみたいです。でも、気を失っているようで。このまま目を覚まさないようだと……」

ブレイヤールとグルザリオが声を潜めて言い交わす。キゲイも他に何をしていたか分からず、二人の側に行き行って女の子を見下ろす。

生きていようだが、血の気のない白い肌のために、キゲイには人形にしか見えなかった。頭には髪の毛も眉毛もない。まつげすらないようで、閉じられた目はナイフで切れ込みを入れただけの筋のようだ。痩せているためかまぶたも薄く、眼球の丸みがやけに目立つ。キゲイは水中で見た大きな目玉のことを思い出し、女の子から目を逸らした。

「身につけていたものは？」

「藻でぬるぬるしてて、気持ちが悪いから丸めてその辺に。でも、身元が分かるものではなさそうです。後できちんと調べておきますよ」

「そうだな」

それからブレイヤールは、ようやくキゲイが隣に居るのに気がついた。

「キゲイ、いったい何があったんだ」

「鍋が突然重くなって、引きずられて水にはまったんです。そしたら、水の中でこの子と一瞬目があったような気がして」

キゲイは寒さで震えながら、胸元の隠しに入れた銀の鏡を上から押さえた。鏡はちゃんとそこにある。

「最初、幽霊だと思ったんだ。この鏡のせいかと思って……」

「鏡？ 突然、現れたの？ この子が」

「……よく分かりません」

「でも、なんで鏡のせいかと思ったの」

「レイゼルトが……」

キゲイは、地読みのテントに戻った夜、白城の柱廊を歩いていた得体の知れない人影のことをブレイヤールに話す。

「あれは石人の亡霊で、銀の鏡が亡霊を呼んだって、言ってたから。ひょっとして、また鏡が呼んだのかなって……」

なんとなくそんな気がしただけの理由なので、聞き流されるだろうとキゲイは思った。ところがブレイヤールの様子が一変して、キゲイは驚いた。

「石人の亡霊だって！ もっと早くに言ってくれなきゃ、ダメじゃないか！ それより、外廊

のどっち側を歩いていた。柱の列の外側？ 内側？」

ブレイヤールはいつになく鋭い口調で尋ねる。不意をつかれたキゲイは、慌ててそのときのことを思い出そうと首をひねった。

「ええっと、柱の向こうに見え隠れしてたから、内側だと思いますけど」

「あそこは城の端っこだから、城の内と外の境界上でもあるな。僕が気を失っていた時間帯だろうし。それにしても、得体の知れないものの侵入を許すなんて……」

「王子、相変わらず卑近なものが見えてないですね」

グルザリオがブレイヤールの言葉を遮り、口を挟んだ。

「ほらキゲイ、着替えてこい。凍え死ぬぞ。王子も自分の姿をよく見て、今のうちに着替えてください。着替える服があるだけ幸せだ。まったく」

グルザリオはそう言いながら濡れた靴を脱ぎ、ズボンの裾をたくし上げて絞る。彼自身は自分の着替えを全部女の子に巻きつけてしまったため、外套一枚で過ごさなければならない羽目になっていた。

キゲイは自分の荷物袋を開け、着替えを探る。濡れた靴は、脱いで乾かすしかない。

「おーお！」

高い声が聞こえて、キゲイはグルザリオの方を向いた。グルザリオは、女の子の方を驚いた様子で見ている。

「目が覚めたか！ ……やれやれ」

女の子の瞳は、澄み通った空色だった。彼女は横になったまま首だけ動かして、自分を見下ろす三人に、まん丸な瞳を順に向ける。あまりにまっすぐ目を向けるので、キゲイは居心地が悪くなって目を逸らしたほどだ。ブレイヤールが石人語で話しかけて名前を聞いたりしたようだが、女の子は返事をしない。顔にも瞳にも表情はなく、最初はブレイヤールの声に耳を傾けていたものの、そのうち飽きたのか、自分の手の指を見つめたり、側にあったキゲイの裸足の足に突然触ったりした。様子に気になる所はあるが、心配していたより遥かに元気そうだ。

「とりあえずは、命に別状ないみたいだな」

ブレイヤールは難しい表情のまま言った。

「グルザリオ、あとは僕が見ているから、先に休め。明日の朝一番に、この子を連れて黄緑の城へ急ぐんだ。医者に見せない」と

「同意です」

グルザリオが自分の寝支度を整えているうちに、女の子はまた目をつぶっていた。今度は気を失ったのではなく、眠くなっただけのようだ。

「お腹すいてないのかな」

キゲイがブレイヤールに尋ねたが、彼は返事の代わりに首を傾げただけだった。

「この子、本当に石人なの？」

キゲイは重ねて尋ねる。どう考えても、この子は湖から突然湧いて現れた。ブレイヤールはやはり、返事の代わりに頷いただけだった。

ところがキゲイは、突然無口になってしまったブレイヤールの態度がなんとなく気に食わない

。知っているのに、ちゃんと答えてくれていない感じがしたのだ。レイゼルトに腹を立てたとき、同じような気分だった。

レイゼルトは、キゲイにいっぱい隠し事を持っていた。ブレイヤールも同じように、キゲイに何か隠し事をしているはずだ。キゲイが人間だから、というのが隠し事をする理由だろう。実際にブレイヤールは、ディクレス様の前でも「人間には話せない石人達の考え」という隠し事をしてきたのだ。

「本当に、本当なんですか？ 絶対の絶対に、幽霊とかじゃない？」

キゲイが詰め寄ると、ブレイヤールは困った顔をした。

「この子は確かに石人だ。でも、突然湖から現れたのは普通じゃない」

搾り出すような声でそう言うと、彼は大きく息を吐いて肩をすぼめた。

「本人に聞ければいいんだけど、出来そうにもないんだ。ただ……」

ブレイヤールは横目にキゲイの懐を見た。銀の鏡を隠している所だ。

「やっぱり、これのせい？」

キゲイはうんざりした顔で、胸元を指差す。ブレイヤールは女の子に視線を戻した。

「大きな魔法を納めている物は、そこにあるだけで色々なことを引き起こす。石人の亡霊を目覚めさせたのも、そのひとつかもしれない。それでこの子だけど、彼女は多分別の姿をして、湖で暮らしていたんだと思う。魚とか、貝とかだったのかも。それなのに今日、鏡が自分の側にやって来て、それがちょっとした刺激になったのかもな。魔法が解けて、石人の姿に戻ったんだ。だけど長い間魚として暮らしていたから、自分が人だったことを忘れてるのかもしれない」

「なにそれ」

キゲイは口を尖らせて、明らかに不満そうな声を出す。魔法で魚の姿になっていた女の子が突然人の姿に戻るなど、まるでおとぎ話だ。さすがのキゲイも、そのおとぎ話を何の疑いなく信じるほど、子どもではなかった。

ブレイヤールも自分の話が、人間にはどれだけ受け入れられない現象か、すぐに気づいたようだった。キゲイの冷めた視線を遮るように片手を額に当て、口元を薄く開いた。一人で苦笑いをしていたのかもしれない。

二人の間に気まずい沈黙の幕が降りる。

「キゲイ」

しばらくして、ブレイヤールが先に口を開いた。

「一生誰にも話さないって、誓える？ 一生だ。今度ばかりは銀の鏡のときみたいに、ディクレス様にだって話しちゃだめだ。本当に誰にも、他の石人にだって言わないと、誓えるか」

キゲイはブレイヤールを見返した。ブレイヤールの顔からは、先程のあいまいな表情は消えて、真剣そのものになっていた。

「それとも、僕がこれから話すことは聞かないでおく？ そうすれば、そんな一生の誓いは持たずにすむ」

「それは、聞かなくてもいいってこと？」

ブレイヤールの挑んでくるような口調に、キゲイはあっさりと怖気づく。

「この先どんな妙な現象を目の当たりにしても、どうしてそうなったのか分からなくても、それをそのまま受け止められるなら、聞かなくていい。君は石人のことも石人世界のことも知らないから、理解できないのは仕方ない」

「分からないことだらけは、嫌かも」

キゲイは目だけを動かして、周りをぐるりと見渡した。暗い森も、そそり立つごつごつした岩場も、すべて石人世界に属するものだ。生えている木や植物の多くは、キゲイもよく見知っていた。でも人間世界に生えている杉と、石人世界に生えている杉は、同じように見えてどこか違うのかもしれない。彼にとって本当の意味で馴染みのあるのは、頭の上に広がっている空だけだ。この世界では、キゲイは完全に余所者だ。

「この子のことだけ、聞きたいです。突然現れてすごく怖かったから、どういうことか、ちゃんと知りたい」

ブレイヤールは頷いて、居ずまいをただす。キゲイも覚悟を決めて、一生守らなければならない秘密というものを、聞くことにした。

「姿かたちはほとんど同じなのに、石人と人間を全く違う存在にしている点がある。石人は人以外のものに姿を変えられるんだ。普段は人の姿をしているけど、それは二つの姿のうちの一つに過ぎない。もうひとつの姿は『真なる体』と言われて、普段は人の姿の中に隠されている。石人世界で『魔法使い』といわれている人達は、修練を経て、この『真なる体』と人の姿を自由に交換できるんだ。そんな人達でも、めったに変身なんてしないけどね」

「じゃあ、王様も、何か別の姿に変われるってこと？」

ブレイヤールは気が進まない風に頷く。

「……うん。よく見かけるような動物や虫になる人もいれば、今では伝説にしかない生き物に変身する人もいる。他人に見られたくない、気持ち悪い生き物になる人も。修練が足りなければ、自分の意志で姿を変えることはできない。なにかの拍子に姿が変わってしまったら、自力じゃ戻れない。その上、長い間姿を変えていると、自分が人だったことを忘れて、それそのものになってしまう。運よく元の姿に戻っても、前の姿の影響が残ってしまう。例えば魚は、髪の毛なんて生えてないし、水の中で泳ぐだけから、歩き方も忘れてたりする。言葉も忘れる」

「あの子がそう？」

「湖に突然現れたんだから、そうだと思う。きっと以前、湖やここに流れ込む川で行方不明になった子どもがいたんだろう。水遊びをしていて、フナカタニシに姿が変わってしまったとか。何ヶ月前なのか、何年前なのかは分からないけど、銀の鏡がきっかけにしる、何か他の理由があったにしる、元に戻れたのはよかったんだろうな」

「ふうん」

今度の話は、キゲイもまあまあ納得がいった。不思議な話には違いないが、石人世界ではあり得ることなんだというのが、ブレイヤールの口ぶりから分かったからだ。それにしても、石人のことが少し気持ち悪くなったのは確かだ。キゲイはそろそろとお尻をずらし、ブレイヤールから距離を取る。ブレイヤールはそれを咎めるように、横目でじろっとキゲイに視線を送った。

「……絶対言うなよ。石人が変身できるってこと。人間にばれたら、大変なことになる。石人



にも、何に変身できるかなんて聞かないように。すごくデリケートな質問だから。自分のもうひとつの姿は大抵の場合、人に見られたくないし、やすやすと見せるものでもないんだ。僕にも聞かないように」

「分かりました。絶対言いません」

「絶対だからな」

あの女の子は銀の鏡が呼んだ幽霊でないと分かって、キゲイはようやく安心した。それにブレイヤールの話してくれた石人の秘密は、一生守るにふさわしい気もする。なぜなら話し終わった後のブレイヤールは、まるで話したことを後悔するような、浮かない表情になっていたからだ。ブレイヤールには悪いと思いつつも、キゲイは石人の大切な秘密を、勝ち取った気分だった。

キゲイが見た通り、確かにブレイヤールは少しだけ後悔していた。銀の鏡を持つという重荷を背負ったキゲイの不安を察したからこそ、話した方がいいと思った大切な秘密だったからだ。ところがキゲイは彼が心配していたよりも、繊細ではなかった。立ち直りが早くて、ちょっとした言葉ですぐ元気を取り戻す。人間だから、銀の鏡の重大性を今ひとつ理解し切れていないのかもしれないが。彼はもう二度と、必要以上にキゲイを気の毒がったりしないと心に決める。

「キゲイも食べたら寝な。明日もたくさん歩かなきゃいけないから」

疲れた声でそう言うブレイヤールに対し、キゲイは一生ものの秘密にわくわくしながら、眠りについたのであった。

翌日、キゲイが目覚めると、グルザリオは女の子を連れて先に出発した後だった。ブレイヤールも支度を整え、キゲイを急かしてすぐさま歩き始める。湖を過ぎると、足元は随分歩きやすくなっていた。平たい石が所々残った道の残骸が姿を現す。道は進むにつれて広くなり、苔生した小道から街道と言えるくらいの立派なものにかわっていった。

四日目に、ようやく二人の目の前へ不思議な形をした綺麗な山が姿を現した。赤く燃える空を背景に、夕暮れの柔らかな影をまとったその山からは、たくさんの細い塔が生えている。影の中に滲む細く白い筋は、夕食を用意するかまどの煙だ。中腹に見える白っぽい崖は巨大な建物の側面で、レースのように穿たれた外回廊と空中庭園の木々に飾られていた。

黄緑の城にたどり着く頃には、日はとっぷり暮れていた。谷間を通過して城の裾野に達すると、数人の兵士達が道の先から現れてブレイヤールに挨拶をした。兵士達は二人の荷物を持ってくれ、先に立って城の門まで導いてくれる。彼らは杖の先に鎖を下げ、そこに光るランプを引っ掛けていた。光は靄の玉で、ランプの中でもやもやと形を定めていない。優しく輝いて、ランプが揺れるとその軌跡に短い尾を残す。

キゲイはブレイヤールの後ろを歩きながら、城の姿を見上げた。城にはあちこちに明かりが灯っていた。たくさんの窓とアーチが輝いて、人々の行き交う影が見える。風に乗って花の香りと美しい音楽が届いた。

「今夜は、春呼びのお祭りなんだ」

ブレイヤールが教えてくれる。

キゲイは神妙に頷いた。春は誰もが待ち望む季節かもしれない。しかし今年ばかりは、アーク

ラントの人々は春を歓迎しないだろう。春になって暖かくなると、冬眠していた戦線が動き出す。  
――冬を引き止めるお祭りがあってもいいのにな。

キゲイは、今はそう思うだけに留めておいた。

黄緑の兵士達はブレイヤール到着を王城に知らせ、貴賓室へ案内しようとした。けれどもブレイヤールはそれを断り、城の裾野近くに広がる町中に、宿をとった。

祭りのせいもあるのかもしれないが、街には所狭しと石人が溢れている。皆が様々な色彩の頭髪を生花や造花、薄衣等で飾り、揃って目の覚めるような黄緑色のスカーフをしている。老若男女問わず長髪の人が多く、それぞれが自分の髪色を意識して結い上げたり垂らしたりしていた。衣装も華やかだ。建物も柱も斑模様を浮かべる黄緑の石で出来ていて、石畳は霧のような鈍い灰色だ。町の構造は白城で見た廃墟の町と同じ。大通りの両脇に立つ建物は階段状の層構造で、空に向かって開いている。大通りは行き交う人と花で飾り立てられた輿でごった返し、各階に設けられた側道にも人が溢れていた。そこには大通りと異なり、小さな出店もひしめいているようだ。

キゲイはあまりの人の多さに、気分が悪くなりそうだった。目を閉じても、町の明かりや人々の華やかな衣装がまぶたの裏にちらついて、くらくらする。人ごみの中、ブレイヤールの背中を追うだけで精一杯だった。

宿は祭りの場所から外れた静かな一角にあった。ブレイヤールは馴染みらしく、二つ返事で部屋に通してもらう。白城の寂れた部屋を思わせる古い宿で、こじんまりとして清潔な部屋に入ると、キゲイはようやく一息つくことが出来た。しかしブレイヤールにはまだやることがある。「銀の鏡を調べに、図書館に行ってくる。下手したら今夜は帰ってこれないけど、グルザリオにこの宿へ来るよう、兵隊に言伝てを頼んだ。じきに現れるだろう。食事は宿の人が持ってきてくれる。石人語の挨拶とお礼の言葉だけでも教えとくよ」

キゲイを残し、ブレイヤールは銀の鏡の写しを入れた丸筒を持って街へ舞い戻った。路地裏から石段を登ると、町の広場が見渡せる丘へと出る。

広場には舞台が設けられており、「春呼びの星降り物語」という演劇が行われていた。様々な表情の面をとっかえひっかえしながら、役者達が舞台の上で飛び跳ねる。無言劇のため、広場から聞こえるのは観客達の歓声や溜息のみだ。ブレイヤールのいる丘も見物人が多い。もっとも彼は劇を見るために丘に登ったわけではなかった。広場の中央には噴水があり、背の高い水時計が建っている。時計は真夜中より二針手前を指していた。ブレイヤールはそれを確認すると、売り子の差し出す花やお菓子も素通りし、図書館へと向かう。

図書館周辺はひっそりとし、入口の大きな扉には守衛が座り込んで舟をこいでいた。それでも中に入ると、人の姿は少なくない。祭りそっちのけで勉強にのめり込む学者や学生達だ。貴重な書物の類は、利用者が少なくなる祭りの日にこそゆっくり読める。あまり人に知られたくない調べ物も、こういう日が絶好のチャンスだ。

ブレイヤールは可動式の書見台を引きずって、ひとまず七百年前の歴史を納めた書架を目指す

。書架は都合のいいことに人影がまったくない。心おきなくレイゼルトに関する記述を洗いざらい調べ、レイゼルトが使った砂の禁呪が誰のものだったのか突き止める。

――正十二国創成期頃の黄城お抱えの大魔法使い、シュラオイエン。大地に根ざす魔法を操り、また多くの禁呪を遺した。レイゼルトの禁呪もまた砂という大地に関するものであるため、シュラオイエンの禁呪であった可能性は高い。

ブレイヤールはその名前を手がかりに、美術品目録の書架へ移る。その中から大魔法使い由来の品を探し出した。もしシュラオイエンの遺品に銀の鏡があれば、これに砂の禁呪が納められていることを裏打ちする。膨大な目録を繰りながら、ブレイヤールは自分が刻々と真実に近づいているのを感じていた。行をたどる指は、自然と遅くなっていく。

――ああ、これは断首決定だな。

血の気が引く。開いたページには、彼の持つ写しと寸分違わぬ図版がある。おまけに、最後にこの鏡を持っていたのは赤城で、約五千年前に黄城から譲り受け、その後七百年前の禁呪焚書直前に行われた所蔵確認の際、紛失を確認。現在に至るまで見つかっていないという説明まであった。彼は暫く安心して、ぼんやりと図版に目を落とす。

銀の鏡は、シュラオイエンが黄城の名工に特注で作らせた、五十二組の札のひとつだったらしい。レイゼルトのは「南の8」で、銀の鏡はゲーム用の札を模した、実用性のない美術品だったと記されている。シュラオイエンは友人を招く際、招待状として皮製の一般的な札を送り、招待客は晚餐の席で自分に届いた札と同じ銀の鏡が置かれた席に座ったという。こういった経緯でその札のひとつに砂の魔法が隠されたのかは知れないが、大魔法使いにもやむを得ない事情があったのだろう。大きな力を持つ魔法が一転して禁呪として扱われるようになったのは、この大魔法使いが生きた時代の終わりのことだ。

レイゼルトと銀の鏡のことを、石人達に話さなければならなくなってしまったようだ。ブレイヤールは焦点が定まらないまま、天井を見上げる。考えはそれ以上まとまらなかった。

## 九章 禁呪の復活

何のせいかは分からなかったが、その晩キゲイはずっと落ち着かない気持ちで、寝返りばかりうっていた。寝床でじっとしていると、なんとなく自分の周りを包む雰囲気、違和感のようなものがあった。石人の町の匂いが、嗅ぎ慣れないものだったからかもしれない。

ようやくウトウトしたかと思うと、もう目が覚めた。室内は最初真っ暗だったが、目を開けているうちに物の形がかるうじて浮かび上がってくる。どうやら夜が明けてしまったらしい。キゲイはだるい体を起こし、隣のベッドに目を向ける。ベッドは空っぽだ。ブレイヤールはまだ帰っていない。もうひとつ奥のベッドからは、いびきが聞こえてくる。グルザリオはまだ寝ているようだ。

キゲイはベッドから降りて、窓際に寄る。グルザリオを起こさないよう静かに掛け金はずし、板戸を少し開けた。外には夜明け独特の、青みがかった世界が広がっている。宿の前の通りは、人影がちらほら行き来していた。キゲイは部屋に向き直る。すると、部屋の扉が開いていることに気がついた。ついでに、戸口の床に何かが転がっている。

まさかと思いながらも、キゲイは明かりを入れるために板戸を片方開け放った。はたして青い影の中に浮かび上がったのは、戸口でうつ伏せに倒れているブレイヤールの白い髪だ。頭はこちらを向いているから、外から帰って部屋に入ろうと扉を開けた直後に力尽きたと見える。キゲイは忍び足で側に寄って、ちゃんと息をしているかどうか、注意深く観察する。大丈夫だ。今度は肩を軽く叩いてみる。反応はない。

「王様、起きてよ」

もう一度、今度は少し強めに肩をゆすってみた。折よく、外から鐘の音が響いてくる。一度鳴っては音の余韻が消える頃に、次の音が鳴る。三つ目の音が鳴ったとき、部屋の奥でいびきがやんで、グルザリオが無言で体を起こした。四つ目の音で、ブレイヤールが呻きながら仰向けになる。

「朝か」

ブレイヤールは片腕を目の上に乗せたまま、呟いた。声が鼻声になっている。グルザリオが朝の寒さに両手をすり合わせながら、キゲイの後ろまで近づいて主を見下ろした。

「なんでしょうね。この体たらく」

彼は冷たい口調でそう言うと、すぐにいつものさばさばした様子になって続ける。

「今日は黄緑の王城に行って、報告をする予定です。迎えは断ってあるので、昼の鐘に遅れないよう仕度を。場所はここから三階層。昇降塔を使って昇ります。ところで大臣がまとめた文書、ちゃんと目を通してますよね」

聞いているのかいないのか、ブレイヤールはぴくりとも動かず返事もしない。グルザリオは暫く待った後、何も言わずに自分の寝床に戻り、身支度を始める。キゲイも迷いながらブレイヤールの側を離れて自分のベッドに戻り、枕の下にたたんで隠した銀の鏡入りの上着を羽織って、腰の帯をしめる。

二人がいつでも出かけられるようになると、ブレイヤールも立ち上がり、服を着替えた。彼

はベッドの端に腰を下ろし、片手で頭を支えてうつむく。

「例の鏡は本物だ。困ったことになった」

ブレイヤールはその姿勢のまま、低い声で呟く。キゲイとグルザリオは、ブレイヤールの方へ視線を戻した。思いのほかしっかりとした口調だ。ブレイヤールは顔を上げ、二人を軽く睨みつける。

「何か誤解されてるようだけど、泥酔してなんかいなかったからな！ 気付けに一口だけだ……」

「それはもうどうでもいいです。鏡が本物だとすると、どうなるんで」

グルザリオは声を潜めた。

「あの赤い髪の少年は、限りなくレイゼルトに近い存在ということになる」

「しかしその結論は、銀の鏡が本物だと分からなけりゃ、導かれません」

「だから困るんだ」

ブレイヤールは悲しげな顔で、両腕をだらりと下げた。外は大分明るくなってきて、窓からの光が部屋の奥まで届きはじめていた。彼は光に照らされた古い木の床へ、見るともなく視線を向ける。

「報告会までに、魔法使いの意見が聞きたい」

暫くの沈黙の後に呟くと、それまでと打って変わった素早さで立ち上がった。彼はキゲイを手招きする。

「ちょっと付き合ってくれ。鏡を見せたい人がいる」

「い、いいの？」

キゲイは尋ねると、ブレイヤールは頷く。グルザリオは難しい顔をして主の判断を吟味していたようだが、結局何も言わなかった。

早朝の街並みは、うっすらと霧がかかっているようだった。冷たく湿った空気が胸に気持ちいいが、鼻や耳たぶはそのうち寒さでじんじんしてきた。石人の姿も増えていて、多くがすでに今日の仕事に取り掛かっている。中央通りは荷車や兵隊の通行専用のような。荷車を黒い水牛が引き、石人は積み上げた荷台の上に腰かけている。タバッサではよく見かけた馬やロバの姿は、ここにはない。警備の交代か、鮮やかな黄緑のマントを身に着けた兵士の一団が、速足に通り過ぎていく。整然と流れる中央通りに対して、両脇の建物前に設けられた二階や三階の側道には、食べ物を売る店や、軒下に仕事道具を引っ張り出して木の皮を剥いだり、糸を紡いだりしている人達で賑やかだ。

ブレイヤールは中央通り脇の階段を上って側道に行く。彼はひとつの店の前で、二椀の朝食を買った。店には屋外用のかまどがあり、店主は先が二股に分かれた木の棒を、かまどの中に差し入れる。取り出した木の棒の先には、金椀が引っかかっていた。かまどの隣には形もばらばらなスツールが無造作に並べてあり、かまどから暖を取りながら、お客は適当な椅子に座ったり、石畳に布を敷きスツールをテーブル代わりにしたりして食べている。

ブレイヤールはキゲイに金椀を乗せた皿を差し出した。あつあつの金椀は、焼き上がった生地が中で丸く膨れている。それをスプーンで崩すと、生地はぷっと灼熱の息を吐いて縮んだ。生地

の破れ目から穀物の粥がとろりと出てくる。熱いお粥に舌を焦がし、鼻をすすりながら、二人はもくもくと食べた。味は良く、冷えた体も温まる。

「黄緑の城って、どこもこんなに人が多いの」

キゲイはブレイヤールに尋ねる。辺りの雑踏があるとはいえ、石人語を話していないのを聞き咎められたくなくて、声は自然と小さくなる。ブレイヤールは耳を澄ませてキゲイの言葉を聞き取り、首を振った。

「この城には大きな町の施設が三つあって、ほとんどの人がそこで暮らしてる。もう少し上に登った城内都市の方が、もっと人が多い」

キゲイはもっと人が多い町を想像しようとして、昨晚の祭りを思い出す。もっと人の多い町とは、毎日がお祭り騒ぎみたいに、人がひしめいているのだろうか。だとするとぞっとする。宿に辿り着くまでに会った昨晚の人ごみは、もまれていうちに気分が悪くなるほどだった。

食事が済むと、再び歩き始める。二人は人通りの多い場所を離れ、広い中庭を横切り城内都市の別棟らしき建物に入った。天井は高く、明かり採りの窓も天井近くにあるため、廊下は暗い。太い柱には蔦を模した掛け金が設えてある。そこから輝く水晶を収めた金属製の蛍籠が吊るされ、柱の足元を照らし出している。

建物は石造りだが、内部は柱も壁も、木製の透かし彫刻に覆われている。場所によっては、竹の鮮やかな黄緑で編んだものが柱に巻きつけられていた。彫刻は蔦や木の枝がモチーフにされ、所々鮮やかに彩色された鳥や虫、リスやイタチなどの生き物の姿も彫られている。明かり採りの窓で照らされる柱の上部には、翼を広げて今まさに飛び立とうとする鳥の姿まで造られている。

キゲイは見事な装飾に目を丸くし、不思議に思いながらブレイヤールの背中を追った。城の外にいくらでも本物があるのに、こんなに手を掛けて建物の中に森の風景を再現するなど、石人は変わっている。

廊下の突き当りには、大きく堅牢そうな四角い木の扉と、身長ほどの杖を持った扉番がいた。扉の表面には、細かな文様が見事な木象嵌細工で施され、文字らしき金の象嵌も刻まれている。扉番も立派な服装で、裾を床に引きずるほどの長い黄緑の上着が印象的だ。

「お久しぶりでございます。白殿下」

扉番はブレイヤールに会釈する。ブレイヤールも同じように会釈をかえした。キゲイは石人語がさっぱり分からないので、ブレイヤールの後ろで神妙にする。グルザリオに言われたよう、人前では従者の振りをしてはいけない。

「大樹の塔の老師にお会いしたく、参りました。老師のご都合はよろしいでしょうか。午後から用事があり、できればそれまでにお会いしたいのです」

「お通りください。午前中は、大樹の塔の最上階におられるはずですよ」

扉番は静かな低い声で応じる。扉がほんの少し開けられ、ブレイヤールはキゲイを連れて中へ入った。二人の後ろで、扉が閉じる。

扉の向こうは円形の広間だった。中央には石造りの大樹が、大きく身をよじりながら彼方の天井まで伸びている。天井は枝葉の細かな透かしが掘り込まれ、その隙間から朝の光が注いでいた。よく磨かれた石の床は深い黄緑色で、天井に揺れる外の光を映している。ここは石人達が魔法

を学ぶ学院だった。広間を行き交うのは、魔法を学びつつある学生達だ。

キゲイは里の森を思い出した。神木の生えている場所もこんな風に薄暗く、地面はやわらかな苔で覆われている。木漏れ日は遥か上から注いでいて、神木の根元は影で暗い。神木はその影に、様々な森の秘密を隠して守っているらしい。

この館も、たくさんの秘密を持っており、それらを影の中に隠しているようだ。広間の影と静寂を守るかのように、誰も一言も口をきかない。何人かはブレイヤールの姿に気づき、通りすがりに会釈した。ブレイヤールの方は、頷くだけでそれに応えていた。

広間にはたくさんの扉がついていた。どの扉にも大人の目の高さに、金色に光る文字が刻まれている。光は夕焼けの色に似ていた。ブレイヤールはそのうち一枚に向かって歩みだす。キゲイも周りの物珍しさをひとまずおいて、後を追った。ブレイヤールはキゲイをいったん振り返って、扉を押し開ける。

扉の向こうも、先程と同じような広間に太い柱が立っていた。しかしこちらの広間は窓が付いていて、とても明るい。数人の学生達が冷たい石の床に布を敷いて座り、陽だまりの中で熱心に本や巻物を読んでいた。広間の中央に立つ巨大な円柱は、葉っぱや枝をかたどった石と木の彫刻で飾られている。円柱をそのまま大樹に模した造りだ。円柱には入口が、石の木の根の間に彫り貫かれていた。入口は狭く、キゲイでも中腰にならないとくぐれない。

「さて、ここからが辛いぞ」

ブレイヤールはそう言って、円柱内部の狭い螺旋階段を上り始めた。階段の途中には木の洞の形の出入り口が開いていて、それぞれの階の部屋に出られるようだ。静かな階もあれば、何か熱心に言い合っている声が聞こえる階もある。階段で時々学生とすれ違うこともあったが、場所が狭いためにどちらかが壁に張り付いて道を空けなければならない。たいていは学生の方が壁に張り付いて、ブレイヤールとキゲイを先に通してくれた。学生の反応からすると、どうもブレイヤールは敬われているようだ。

キゲイは階段が何段あるのか数えていた。単純に登った高さを知るためだったのだが、百段登っても、ブレイヤールは足を止めない。二百段になる頃には、キゲイよりもブレイヤールの方がくたびれてきていた。それでも二百四十段目に、ようやく階段が尽きる。

二人は倒れこむように円柱から外へ出た。視界は一気に開け、土と草と岩の斜面が目の前一面に広がる。厚い雲の隙間から、日の光が帯になって降り注いでいる。地面の草は露をのせて、岩陰には小さな川が幾筋もきらめきながら流れている。斜面の上の方には林の暗い影が見え、さらにその上には黄緑色に苔むした石の壁が、絶壁のようにそそり立っていた。壁には彫刻と窓の穴がいくつもあり、所々の大きな窪みには庭園がある。石の壁の上もさらに森の影や草地の斜面があり、集落の存在を思わせる煮炊きの煙が、雨霧の中にうっすら溶け込んでいる。

円柱の出口は、丸屋根の祠のような建物だった。両隣にも同じ形の祠が二つずつ並んでいて、地面に突き出た巨人の指先のようにも見える。どの祠もひどく古ぼけて、茶枯れた苔と蔦に覆われていた。近くには葉を落とした大きな榆の木が、幹と枝を広げて立っている。枝の狭間から見える城を囲む山々は、霧と日の光で、灰色と金色の複雑に交じり合った色彩に霞んでいた。

ブレイヤールは、我を忘れて景色に見惚れるキゲイの背中を推した。

「ほら、あそこが僕の魔法の師匠がいる館だ。あの人なら、銀の鏡を見せても大丈夫。常識はずれな人だから」

ブレイヤールの指差した先。斜面の下の方に、煙突から煙を吐く白い平屋の家が見える。林の影に隠れるようにあって、古そうだがとても立派な建物だ。ただキゲイは、「常識はずれ」の言葉に内心首をかしげる。キゲイには石人の常識などさっぱり分からない。

門をくぐると、去年の落葉が散らかった閑散とした庭を囲んで、館はコの字型をしているのが見てとれた。庭周りの吹きさらしの回廊には、濃い褐色の木の扉がいくつも並んでいる。館はしんと静まり返って、人の姿はない。

ブレイヤールは一番大きな扉の前に立って、こぶしで扉を叩く。扉は軋んだ音を立ててひとりでに開いた。ブレイヤールは一礼をして中へ入る。キゲイもブレイヤールの真似をして礼をすると、こわごわ戸口をまたいだ。

部屋の中は、薬草の強い香りが充満していた。壁には乾燥させた薬草の束や、複雑な文様のタペストリーが所狭しと下がっている。壁には何か流れるような曲線が彫刻されているようだが、ぶら下がっているものが邪魔でまったく見えない。色タイルをはめ込んだ暖炉が目の前の壁際にあり、火には大鍋がかけてあった。暖炉の周りには、火掻き棒や杖が入った壺や、大きな木さじなどがごちゃごちゃと置いてある。室内の雑多な様子は、すっきりした造りの館とはうって違って、庶民的な雰囲気だった。

部屋の奥は床が一段高くなっており、何十もの布を積み重ねた上に、一人のおばあさんが胡座をかいて座っていた。草木染の使い古した肩掛けを羽織って、長い髪がその体のほとんどを、マントのように覆っている。白い髪は、暖炉や窓からの光に透けるときらきら透明に輝いて見えた。しわくちの口元は歯がほとんどない様子で、かなりの高齢らしい。おばあさんは二人の姿を見ると、すぼんだ口の両端をにいとあげて、愛嬌のある笑顔を浮かべて見せた。切れ長の目が、線のように細くなる。

「お気をつけ。他の者の目はごまかせても、あたしの目はごまかせないんだよ」

おばあさんはキゲイにも分かる「言の葉」でそう言った。キゲイはびっくりして立ち止まる。ブレイヤールの方を見ると、彼は首を振って溜息をついた。

「僕の師匠だからだよ。普通の石人には分からない」

ブレイヤールの師匠と言うこのおばあさんは、にこにこ笑いながら手招きした。ブレイヤールは咳払いして、老師の一段下の石床に胡座をかく。彼はキゲイを手招きして、隣に立たせた。

キゲイに向けられた老師の瞳は、変わっていた。金色の瞳を、淡い水色のラインが縁取っている。中央には深い紫の瞳孔。綺麗だが、キゲイはこんな目を今まで見たことがない。キゲイの様子を見てか、老師はパチパチとかわいらしく瞬きしてみせる。

「石人の目はね、人間とはちいと構造が違うの。なんせ、人間よりひとつ余分の世界を、この目で見るんだからね。そこの白髪の弟子の目は、色合わせが似た感じだから分かりにくいけどね。あたしも若い頃はこの瞳と雪のように白い髪で、ずいぶん声をかけられたものだよ。今じゃ髪の方は、すっかり色が抜けちまったけど。水みたいに透明だろう？」

年に似合わず茶目っ気のある老師に、キゲイの方が目を瞬く番だった。魔法の師匠と言うから



、もう少し重々しい人格だと思っていたのだ。ブレイヤールが咳払いをして、師の世間話をさえぎる。

「師匠の目はごまかせずとも、他の目をごまかせればいいんです。時間がありませんので、細かい挨拶は省かせていただきます」

彼はそう言うと、懐から銀の鏡の写しを取り出し、老師に渡した。老師は受け取った紙に目を鋭くするが、紙を近づけたり遠ざけたりする。

「細かいねえ。あたしにはまったく見えないよ。本題をお出し」

ブレイヤールはキゲイを見上げる。キゲイは銀の鏡を納めた懐に手を当てた。

「……えっ？ い、いいんですか」

「うん」

ブレイヤールは頷く。

「師匠は物事の常識から、大分外れた方だから。怖いものが何もない人なんだ」

老師はそれを聞いて肩で笑う。

キゲイには判断のしようがない。大人しく銀の鏡を懐から取り出し、手を伸ばして老師に手渡そうとする。

「いや、いくらあたしでも、弟子が触りたがらないものに触りたくはないよ。もうちょっと近くで見せてくれないかね」

キゲイは老師の乗っている布山の上に片膝をかけて、鏡を差し出す。それを見る老師の顔は、さらに皺だらけになった。特に、文様が彫刻されている面よりも、鏡の面の方をしげしげと覗き込んだ。

「砂漠が見える。これはシュラオイエンかエフェニエットの魔法だろう。禁呪だね。まさか触っちゃいないだろうね、王子」

「手遅れです。ですから、ご助言を頂きにあがったのです」

「手を見せてごらん」

ブレイヤールは右の手のひらを、老師に向ける。彼女は厳しい顔つきで鏡と弟子の手を何度か見比べた。

「際どい所だけど、触ったなんて言わなけりゃ、誰も分からないだろう。神殿の首狩騎士どもにも、分かりゃしない」

「人間達が石人世界にやって来た話はお聞きでしょう。そのとき、この鏡も持ち込まれました。あのレイゼルトが砂の禁呪を携え、人間達に混じって戻ってきたのです」

「七百八年前に死んだ者が？ 死に損なって、まだこの世を彷徨っていたとしたら、かわいそうなものだが」

「彼の身に起きた事情は与り知りませんが、私はその鏡を通じて、彼がレイゼルトに極めて近似した人物であることを知りました。彼自身は、自分の正体と思惑を明らかにしていません。しかし禁呪使いの存在は、我々を滅ぼしうるものです」

ブレイヤールは息をついて、うつむく。老師はキゲイに視線を戻した。

「坊や、この札はどうやって手に入れたんだね？ ああ、もうしまっていていいよ。そのことは、

よく分かったから」

キゲイは老師に促されて、ブレイヤールの隣に正座する。ブレイヤールはうな垂れたままで、ずっと床を見ている。

「その鏡は、レイゼルトが預かって欲しいと言ったんです。自分がこれを持っているのを、ディクレス様達に知られたくないって。あ、ディクレス様というのは」

「偉い身分の人間だろう」

老師は両手を膝の上に乗せて、姿勢を正した。

「そのレイゼルトとやらが偽者だろうが本物だろうが、魔法使いであることは確かだ。軽い気持ちで命より大切だろうその禁呪を、他人に、しかも人間の子どもの託すはずがない」

「でも、この禁呪を探してる変なお化けがいるみたいで、レイゼルトはそれに見つかりたくないから、僕に持たせたのもあるみたいです」

「ほうほう。白王子、この子にお守りを持たせた方がいいよ」

ブレイヤールは呼ばれてようやく顔を上げる。

「もう持たせています。キゲイ、あれをお見せして」

キゲイはトエトリアの髪でできたお守りを取り出し、老師に手渡す。老師はそれが王女の髪だと知ると、髪を持った両腕をいったん掲げて敬意を示す。それから三つ編みの編み目に、ふしくれた指を当てていく。

「編み目ごとに色々なまじないを織り込んだね。相変わらずいい出来だ。これなら、幽霊だろうが邪妖精だろうが、よほどのものでもない限り、この子にちょっかいは出せないだろう」

「皆に知らせるべきでしょうか。レイゼルトの出現を。今の我々は人間達を追い返すので頭がいっぱいですが、禁呪使いの出現にも気づかねばなりません」

「なんだって」

老師はお守りをキゲイに返しながらか、目を丸めてブレイヤールを見る。驚いているというよりは、呆れている様子だ。

「あんたはそれを、あたしに聞きに来たの」

「……それとも私は、迷うべきことを取り違えていますか」

「人が迷うのは、正しい答えを得られないからではなく、正しい問いかけが見つけれないからだと言うね」

老師はそう言って、杖を突きながら立ち上がった。彼女は暖炉にかけられた鍋に歩み寄り、壁にいくつもかけてある木のコップを杖の先に引っ掛けて取る。コップに鍋の中身を注いで、立ち昇る緑の奇妙な湯気に鼻を突っ込んだ。

「いい出来だ」

彼女は座ったままこちらを見る二人に、満足そうな顔つきでコップを上げてみせる。

「これが長生きの秘訣」

老師はそのまま一息に飲み干した。ブレイヤールは膝をついたまま、老師の足元に寄る。

「レイゼルトのことをどうお考えになりますか」

「魔法使いならば、何が大切かを見失ってはならん。いずれ王となる身であるなら、なおさらだ

。たとえ亡国の王だとしてもね」

老師は足元のブレイヤールに、やれやれと頭を振った。

「あたしは魔法使いだから、レイゼルト何とやらの話よりも、その禁呪が今ここにあることを信じる。禁呪が禁呪とされるようになってから、魔法使い達は禁呪から引き離されるようになった。後も禁呪を編み出す優れた魔法使いはいたが、編み出された禁呪は神殿によって破壊され、魔法使いも二度と禁呪に関わらないよう、永久に魔力を封じられる罰を受けてきた」

それまでかくしゃくとしていた老師の表情が、暗くなった。

「シュラオイエンもエフェニエットも、立派な魔法使いだった。禁呪を編み出すことは、魔術の真理に近づくことでもある。今のあたしらには、その道は閉ざされてしまった。あたしもある時点で、探求の歩みを止めた。そして後から続く弟子達が、探求の境界を見極められず先に行ってしまうのか、見張っている。才能のある者ほど、分別が育つ前に境界を越えてしまうものだ。そもそも大樹の塔は、禁呪が封じられた後に大魔法使い達が新たに作り出した学問だ。魔法を使わず魔法を学び、力を使わず魔法を使い、魔術の真理から遠ざかりながら、同時に近づくためのね。後世、この塔で学ぶ者達が、魔法を使わない魔法使いと揶揄されるようになったのはもっともな話だけど、まさかあんたが禁呪を手にするようになるなんて、嫌な巡り合わせだ」

老師はブレイヤールの上に覆いかぶさるように構え、鋭く弟子を見据えた。

「この禁呪との出会いに早まった答えを出してはならない。禁呪に関わって無事ですむのは、禁呪使いと、魔法の力をまったく持たない者だけだ。あんたは禁呪を理解するより先に、扱えるだけの魔力を持っている。その銀の札を見せて、レイゼルトが現れたことを信じ込ませる前に、皆は禁呪に触れたあんたの方を、禁呪に関わった者として恐れるだろう」

キゲイはブレイヤールの顔が赤くなったのを見た。それからすぐに、血の気が失せていったのも。ブレイヤールは呆然として、両膝で立った姿勢からゆっくりと腰を踵に下ろす。まさか自分が禁呪使いの疑いの対象になるなんて、思ってもいなかったようだ。

ブレイヤールとは対照的に、老師の機嫌はなおる。

「石人の歴史は古い。この正十二国だって、創生されたのは七千年以上も前だ。古すぎる歴史は、得体の知れないものも育む。この世の中、あたしらの理解を超えた魔法の存在が、誰も見ていない所で徘徊しているんだ。連中が歴史にその一端を表すとき、歴史は裏と表に加えて深みを得る。そこは誰にも語られず顧みられることもない場所だ。おそらく『レイゼルト』も、そういった存在のひとつだったのかもしれない。銀の札が呼び寄せたとかいう、亡霊もね」

老師は片手で鍋をかき混ぜながら、杖の先で壁にかかるコップをもうひとつ取った。

「あんたがこの大樹の塔に来たとき、あたしは言った。『王子の才能は、大昔の偉大な魔法使いに匹敵するほどだ。だから王子を本当の魔法使いとして教え導ける者はいない』って。それでいいんだ。王と魔法使いは同じようで違う。『魔法使いは夜の崖を明かりなしで歩くが、王は明かりをかざさねばならない』とも言ったことがある。この世に真の闇はない。己の目が役に立たぬなら、他の者の目を借りるものだ。己の見るものばかりを信じ、明かりを灯す者は智者とは言えぬ。闇の中で光を灯せば、光に目がくらみ闇は深まるだけ。光に照らし出された己の影こそが、真の闇として生じる。しかし導く者は、敢えて明かりを灯さねばならない。後に続く者達へ、

進むべき道、見るべきものを明らかにするために。レイゼルトは銀の札を掲げて現れた。あれはある者にとっては王の光かもしれんが、ある者にとっては魔法使いにとっての光だ。あたしが分かるのはそこまで」

老師は湯気の立つコップを、ブレイヤールの顔の前に差し出した。

「……飲むかね？ 強烈だよ」

コップからは緑色の湯気が、燐光を放ちながら立ち昇っている。受け取ったブレイヤールは無表情のままコップの中身を見つめ、ぎゅっと目を閉じたかと思うと、喉を鳴らしてぐいと飲んだ。そしてなぜかキゲイの方へコップを突き出す。コップの中にはまだ半分残っていた。ただよう強い芳香に、キゲイはのけぞった。

「おやりよ、坊や。それは精神に活力を与えるのさ。人間にも効くよ。生き物みんなに効くのさ」

老師に促され、キゲイは仕方無しに息を止めて、なるべく薬が舌に触らないよう一気に喉へ流し込んだ。

ガンと衝撃が全身を駆け抜ける。喉がかっと熱くなって、鼻の奥から激烈な薬草の香りが抜けた。薬が体の中ではっきりとした軌跡を描いて、胃に落ちるのが分かる。ブレイヤールをつと見ると、彼は瞑想でもしているかのように頬を引き締め、じっと床を注視して体の中で暴れる薬に耐えている。キゲイもそうだった。あまりのまずさに顔をゆがめる余裕もない。耐えている間、頭の中の雑念や心配事ははるか彼方へ遠ざかって、空っぽになる。まさに修行者か魔法使いでもなければ、好き好んでこんな飲み物を口にしたりしない。

ブレイヤールはやっとのことで立ち上がると、老師に礼を言う。彼はまだ衝撃から立ち直れていないキゲイを引きずるように、部屋を後にした。キゲイには、ブレイヤールが答えらしい答えを老師からもらっていないように思えた。ブレイヤールの顔つきはここに来る前と一緒に、難しいままだ。けれども、彼は何かを決意したようだった。

「ディクレス殿と話せたおかげで、アークラントは平原へ退いてくれた。アークラントのことがきちんと決着するまで、僕は鏡のことは話さないで、今後も白城に残れるようにするよ。キゲイ、悪いけどもう少し石人の世界にいてくれな」

話がまったく見えず、ともかくキゲイはブレイヤールの言葉に頷くしかない。どうやらブレイヤールがした決断は、皆の所へ戻る機会を先延ばしにしてしまうものようだった。こうなるとキゲイの方も、とことんまでブレイヤールに付き合う覚悟を決めなくてはいけないらしい。しかしキゲイは返事の代わりに、何度か頷くのが精一杯だった。薬がいまだ胃の中でめちゃくちゃに乱舞して、下手に口を開くと飛び出しかねない。

再び宿に戻ったブレイヤールはキゲイをグルザリオとともに宿に残し、単身黄緑の城の報告会へと赴く。昇降塔で三階層上へ昇った所で、彼は黄緑の左大臣に迎えられる。

「白の王子様、お久しぶりにございます」

左大臣は灰色の長い髪を結び上げた、年配過ぎの婦人だ。正しく整然と事を運ぶのをよしとする彼女は、黄緑の城の指針そのものだった。姿勢は柱よりもまっすぐに見える。その彼女が報告

会に先立って自分の目の前に現れたことに、ブレイヤールは胸騒ぎを覚える。

「少々気になる知らせが入りまして、会わせたい者がいるのです。こちらへ」

左大臣はブレイヤールを先導するため、すぐに背を向けて歩き始めた。左大臣の射るような視線が苦手な彼は、若干ほっとして後に従う。

「会わせたい者とは？」

ブレイヤールは動揺を抑えながら、何気なさを装って尋ねた。ディクレスと会ったことや、キゲイとともに銀の鏡を隠匿していることは、絶対にばれてはいけない秘密だ。これが動揺の原因とはいえ、ブレイヤールはいまさらながらその秘密の重さをひしひしと感じる。

「会えば分かります。ところで、白城に忍び込んでいた人間達は、平原へ戻ったそうですね。タバッサに潜ませていた石人達からも、彼らが町から去り始めたとの報告がありました」

「……正確には、彼らは五日前の早朝までに白城から退いています。宝物庫も発見し、中身を持ち出しています。トエトリアを助けた人間の少年も、無事仲間の元へ返しました」

「ええ。白城からの報告にも、目を通させていただきました。これで人間達も満足して、国へ引き上げてくれればよいのですが。王女様のことでも、たいへんご迷惑をおかけいたしました。誠に感謝しております」

ブレイヤールは眉をひそめる。ディクレス達がタバッサからも引き上げようとしているのは、妙だった。キゲイがまだここにいるというのに。アークラント本国に何かあったのだろうか。気になって仕方がないが、左大臣にあれこれ質問して不審に思われるのは避けたかった。

彼は気を紛らわせようと、自分の周りの見事な建造物に目を移す。滅びた白城にはないものが、ここにはたくさんあった。その際たるものは、人だ。忙しく行き交う人々が、どちらを向いても存在する。白城では忙しそうな石人の代わりに、崩れ落ちた石壁の破片か、ねずみの死骸を見つけるのが関の山だ。

二人がいる建物には、下層で王と城民がまみえるための謁見の間もあった。それだけに造りもひとときわ立派だ。大広間を支える巨大な柱は、樹木を模している。遙か頭上のドーム天井は、琥珀で造られた木の葉で埋め尽くされ、陽光を透かしていた。学院同様森を思わせる場所だ。この広間を歩く人々は多くが役人で、皆黄緑色を基調とした衣装を身に付けている。赤や黄など鮮やかな髪をしている者は、遠目に森の底に咲く花のようにも見えた。

左大臣はやがて一本の廊下に入り、飴色の木の扉の前で立ち止まった。彼女はブレイヤールを振り返る。

「白城で人間達の動向を探っていた、灰城の偵察兵です。今朝、命からがらこの城へたどり着きました」

彼女は表情を固めたまま扉を開け、ブレイヤールに入るよう促す。ブレイヤールは眉をひそめて室内へ足を踏み入れた。灰城の偵察が白城にいることは知っていたし、そのためにブレイヤール自身色々気をつけてもいた。有能な兵士を「命からがら」な状態に出来るのは、例の魔法使いしか心当たりがない。

室内は日の光が直接差し込んで明るい。小さな応接間らしかったが、椅子やテーブルは壁際に押しやられ、代わりにベッドが運び込まれていた。白城の王子を迎えるために、わざわざ灰城の

偵察兵の方を、こちらによこしたらしい。ベッドの上には、暖かみのあるやわらかな灰色をした髪、小柄な男が横になっていた。側には医師らしき石人も控えている。

「白の王子様、恐れながら彼は怪我により、体を曲げることができません。横になったままで失礼いたします」

医師はそう言って、ブレイヤールに場所を譲る。左大臣も部屋に入ってきて、ブレイヤールの隣に立った。灰城の兵士は上半身にぐるぐると包帯を巻いて、仰向けにされていた。兵士は目を動かして、ブレイヤールと左大臣に無言の挨拶をする。目の動きには、助けを求めている人の怯えと忙しなさが垣間見える。

「彼は小鳥に姿を変え、人間の様子を探っていました。そのときに魔法をかけられ、このようになってしまったのです。彼は片足を半分失い、喉も潰されておりますが、実際をご覧になる方が何があったか分かりやすいと申しております」

ベッドの向かいに回った医師は上掛けを取って、兵士の胸から腹部を覆う包帯を、少しめくって見せる。ブレイヤールは思わず顔を引きつらせた。血の滲む痛々しい肌が見えたからだ。

「火傷ですか。かなりひどいように見えますが」

ブレイヤールは尋ねる。医師の代わりに左大臣が口を開いた。

「傷口から病の精が入り込まないよう気をつければ、命に別状はありません。火傷ではないようです。まるで、やすりにかけられたよう。衣服は無傷であったのに」

「誰にやられたのですか」

ブレイヤールの再度の問いに、今度も左大臣が答えた。喉をやられたという言葉どおり、兵士は自分では口をきけないようだった。

「人間達の中に、少年ですが石人の魔法使いがいたらしいのです。しかしどのような魔術を用いて、このような傷を負わせたのかは判じかねます。そもそも白城で魔法を使えば、殿下にもそれがお分かりになるはず。何か気が付かれることはありませんでしたか？」

ブレイヤールは黙っていた。左大臣はそれをブレイヤールが何も気付かなかったと見たのか、ふっと溜息をついた。

「……もしやと思い、先に殿下にご覧になっていただきたかったのです。小鳥にとっては小さな木の枝が刺さっても、命取りになることがあります。この者も小鳥に姿を変えていた折とはいえ、油断して些細な魔法にかかっただけなのかもしれません。小鳥の足はか弱いものです。とにかくこの城に運ばれて来たとき、彼は受けた傷よりも恐怖のために取り乱し、言ったこと全てを信じるわけにはまいりません。白城で傷を負ったなら、殿下にまず知らせるべきなのに、この者は敵から遠くへ逃げることに頭になかったのです」

左大臣は判断に迷っているようだった。一方でブレイヤールは、兵士の身に何が起こったのか、すぐに確信できてしまった。やはりレイゼルトに襲われたのだ。しかもこの兵士が受けた魔法は、禁呪かもしれない。そしてレイゼルトはこの兵士を生きて逃がした。彼は自分の存在を、石人達の前に現すようなことをしでかしたのだ。

「彼は片足を失くしたといいますが、それも魔法によるのでしょうか」

ブレイヤールは医師に尋ねる。医師が答えようと口を開けたとき、突然今まで大人しく横たわ

っていた兵士が体を起こし、痛みに震える手でブレイヤールの腕をつかんだ。そしてきれぎれの細い悲鳴のような声で、必死になって叫ぶ。それは短い言葉で、「砂と崩れた」だった。ブレイヤールが兵士の顔を見返すと、彼はもう一度口だけを動かして同じ言葉を言った。

医師と左大臣が色を失って、兵士をブレイヤールから引き離す。兵士の方はベッドに押しえ付けられるように寝かし直されながらも、首だけ伸ばしてブレイヤールに何か伝えようとしていた。ブレイヤールが手を上げて制すると、相手はがくりと頭を枕に戻した。

「いつ、この傷を」

ブレイヤールは直接兵士に尋ねる。兵士が途切れがちの息でようやく伝えた日付と時間は、正確だった。それはキガイを人間達のテントに帰した朝で、ブレイヤールがレイゼルトに捕まり、魔法を受けて気を失っていた時間と一致する。ブレイヤールは唇をかむ。

「どうされましたか」

ブレイヤールの表情の変化を、左大臣が鋭く捉える。

「何か、思い出されたのですか」

「いえ」

左大臣の追及に、ブレイヤールは首を振る。頭の中を、あらゆる考えが目まぐるしく駆け巡った。もう少しこの嵐が収まるのを待っていたかったが、答えを遅らせることは左大臣の前では無理だ。

「実は私も、石人の少年に攻撃を受けました」

吐き出すように答えたブレイヤールに、左大臣は口と眉を歪めた。どこかで自制してそんな中途半端な表情になったのだろう。彼女がブレイヤールの告白に、怒りを覚えたのは確かだ。そして彼女の怒りは、正当なものだった。

「なぜそれを、もっと早くに知らせていただけなかったのです」

「彼が何者か、まったく分からなかったのです。私が受けた魔法は特別なものではありません。けれど、強力なものでした。そして、彼は城から立ち去りました」

「分かりました」

左大臣はいつもの厳しい顔つきに戻り、そこで話を打ち切った。時を告げる鐘の音が鳴っていた。

「続きは報告会で話された方がよいでしょう。そろそろ時間です。この者も後で会議場に運ばせます。どうやら我々が憂慮すべきは、人間ではなくその少年になるかもしれません」

左大臣は一礼をして、先に退出する。医師もベッドを運ばせる手はずを整えに、一度部屋を出て行った。ブレイヤールも議場に行かなければならない。その前に、彼は兵士に声をかけた。

「片足が砂に変えられたこと、私は本当に思える」

兵士はその言葉に頷き、口を動かした。禁呪使いが現れたことを信じるのは、禁呪を受けた者以外には難しい。兵士の唇は、「砂の禁呪」と読めた。彼の頭には、すでにレイゼルトの名が浮かんでいるのかもしれない。史実に名を残す砂の禁呪使いは、レイゼルトただひとりしかいないのだ。

ブレイヤールは部屋を出た。あの兵士がどれだけ孤独を感じているか、彼にはよく分かる。レ

イゼルトは禁呪が蘇った事実を、兵士の喉を潰すことで、彼ひとりの心に閉じ込めてしまった。そして真実を、彼の体へ残酷に刻んだのだ。

議場は百人近くが入れる広さのもので、王と神官が傍聴する場も一段高い所に設けられている。七百年ぶりに人間が大勢石人世界に侵入したことで、滅亡している紫の城を除いた十一国の代表が集う、十二国会議の体裁がとられていた。とはいえ、そこに集まったのは二十人にも満たない。結局人間達の侵入は脅威とまでは考えられておらず、実質的に人間に対処しているのは白城であり、主導しているのは黄緑の城だった。灰城は白城と同じ人間世界の境界に近い立地のため、同調的立場から偵察を出していただけに過ぎない。そのため、他国は使者一人だけが出席し、神官が数人、残りは全て黄緑の国の者達だ。

最後にトエトリアが現れて玉座に腰を下ろすと、星の神殿の神官が、会議の始まりを告げた。灰城の偵察が人間とともに現れた石人に攻撃を受けた知らせは、すでに伝わっていた。そのため、ブレイヤールのアークラントに関する報告は、財宝を持って平原に帰った、という要点だけで済まされ、黄緑の城側の報告も、彼の報告を裏付けるだけに終わった。

少々引っかけたのは、黄緑の城側がトエトリアのタバッサへの家出と、それに巻き込まれて散々迷惑をこうむった人間の少年について、一言も触れなかったことだ。恐らくこの話はアークラントの動向と関係がなく、黄緑の城にとっても不名誉なことだったからだろう。おかげでブレイヤールも、キゲイの話は一切しなくてもよかった。

報告会は、人間と一緒に現れた石人の少年の話に向かいつつある。平原へ去ったアークラント王国の人間達のことは、彼らの中では過去の終わった問題になってしまったようだ。

ブレイヤールは灰城の報告を聞きながら、胸のうちに薄暗いものがいや増すのを静かに感じた。人間世界に対する不安と、それに埋もれそうになりながらもはっきりと胸を刺す、小さな針のような恐れだった。

灰城の報告は、偵察兵が石人の少年に攻撃を受けたくだりに差し掛かっており、石人達の反応もますます身が入ってきている。偵察兵本人も、体を支えられながら議場に姿を現す。胸から腹までを覆う傷と、膝から無くなった右足に、議場が騒然となる。ブレイヤールは自分がどこにいるかも忘れ、ひとり物思いに沈んでいく。

誰かに肩を叩かれ、ブレイヤールは顔を上げた。左大臣の澄んだ声が耳に入ってくる。

「――石人の少年に襲われたと、おっしゃられていました。もしその少年が白の王子に匹敵する力を持つなら、これは憂慮すべきことです。彼を襲った魔法について論じる前に、王子の話を伺うべきでしょう」

話を振られて、ブレイヤールは途方にくれる。それまでの経緯をまったく聞いていなかった自分の方が悪いのだが、石人達が一様にこちらを注目しているのを見ると、どこから話せばいいのかなどと、誰に尋ねる勇氣も出ない。何かしている最中に別のことを考える癖が、どれほど間の悪い事態を引き起こすか。ブレイヤールはここで思い知る。けれどもようやく発言の機会を与えられた。そう考えて、気を持ち直す。

「人間達を探して城内を探索中に、例の少年から攻撃を受けました」



ブレイヤールは石人達の反応を伺い、的外れなことを言っていないか確認しながら話し始める。「最初は城の中で。彼は館の一部を砂に変えてしまいました。このとき、私は彼の實力の一端を見ました。彼が魔法を扱うことにかけて、非凡な才能と魔力を持っていると確信しました。二度目は、白城に忍び込んだ人間達の側まで行ったときです」

ブレイヤールの「二度目」の言葉に、多くの石人が目を丸くした。二度も襲われて、緊急の報告を黄緑の城に入れなかったことを非難する者もいる。左大臣も怒りを乗り越して呆れた顔をしていたが、周りの者を静かにさせてくれた。

「二度目はもっと早くに決着がつかしました。私は油断していて彼の魔法で意識を奪われ、朝から日暮れまで気を失っていました」

「灰城の兵が攻撃を受けたのは、あなたが気を失った後だが、なぜあなたは一度襲われながらも、人間の動向を気にし続けたのだ」

穏やかな声で尋ねたのは、星の神殿の老神官だった。ブレイヤールは畏まり、身を低くして拝聴する。

「気を付けていたならば、二度目の攻撃を許すようなことなどなかったはずだ。城はあなたの領域というに。白の王族が昔からそうであるように、あなたも祖先に恥じぬ優れた魔力を秘めておられることは、我々もよく知っている。そのあなたを手こずらせた魔法使いを、簡単に見逃してよいものではない」

声とは裏腹に厳しい追及に、ブレイヤールは神妙に頷いて応じた。

「最初に彼と会ったとき、彼は自分が人間達のために行動しているようなことを話しました。境界の森に魔術をかけた私の力を探りに来たのでしょうか。私としても、彼の素性を確かめるため、まずは白城を目指している人間達の侵入を待とうと考えていたのです」

ブレイヤールは息をついて、頭を下げる。レイゼルトと遭遇した話は、うっかり口を滑らせればキゲイと銀の鏡の存在を示唆してしまう。自分の立場を守りながらもその足場を少しずつ削るように、できる限りの事実を話さなければならない。

「翌朝、私が人間達の隠れ場所の確認へ行ったとき、二度目の攻撃を受けました。警戒していたつもりでしたが、思えばあまりに軽率な行動でした。長い時間気を失って目覚めたとき、レイゼルトが城からいなくなったのは分かりました。これが私がお話できる、精一杯です」

言ってしまうと、ブレイヤールは肺が空っぽになるまで息をはいた。口を滑らせ、「レイゼルト」の名前を出してしまったことに気がついたのだ。一息遅れて、驚きや疑いを飲み込んだ緊張が、まさに水を打ったように議場に広がるのをブレイヤールは目の当たりにする。神官達だけが、激流を砕く巖のように微動だにしない。神官の一人が口を開く。

「その名は初めて聞きました」

「……名乗ったのです。私は七百年前の『レイゼルト』を騙っていると思っていました」

レイゼルトはブレイヤールの前で一度も名乗ったことがない。キゲイからその名を聞いたただけだ。ブレイヤールは今更のように気づいた。口を滑らせた動揺と、それに続く嘘で、ブレイヤールの声はかすれた。幸い彼の些細な変化は、レイゼルトという大きな名前の影に見逃された。多くの石人が、灰城の偵察とブレイヤールの姿を交互に見比べて顔を強張らせている。ブレイヤ

ールがここぞとばかりに偵察の方を指し示すと、皆の視線はそちらへ向けられた。

「彼の言葉に耳を傾けてください。私よりも彼が、『レイゼルト』のことを身をもって知りました。片足を砂に変えられたという彼の言葉を、強い魔法にあてられたための恐怖が見せた幻覚とお考えですか。私もまた、砂の魔法を受けていてもおかしくはなかったのです」

「慎みなさい！ みだりに口にしてはならない名だ」

先程の神官が鋭く声を上げ、ブレイヤールの前に歩み寄る。彼は神官と向かい合ったが、言われたとおりに口を閉ざすしかなかった。滅びた城の王族でしかない彼は、神官に逆らうことはできない。

彼は退いて、頭を下げる。灰城の偵察が受けた傷は、銀の鏡の話を出すことなくレイゼルトの存在を石人達に知らせる、降ってわいた切り札だった。だからこそ彼も、出来る限り包み隠さず話そうとした。これで信じてもらえなければ、もう打つ手は残っていない。

「己の恐怖を他の者にまで煽るのはやめなさい。あなたまでもが、この者は禁呪で傷を負わされたと言うつもりなのか。レイゼルトは過去の罪人であり、砂の禁呪もまた、過去のものだ」

神官は退いたブレイヤールへ、さらに戒めの言葉を浴びせる。やはり銀の鏡を見せないと、誰も信じられないかもしれない。神官の言葉にブレイヤールは失望する。

そのとき、会議の行方を見守っていた老神官の前へ、自らひざまずいた者がいた。灰城の偵察だ。老神官は上体を傾げるほどにして、つぶれた喉から漏れるかすかな声を聞き取り、他の石人達も耳を澄ませた。とうとう兵士が激しく咳き込むと、老神官は医師らに引き取らせるよう合図する。全ての石人が見守る中、老神官は段を登って、王座に座るトエトリアの隣に立った。

「彼は私にこう言った。かの者の魔法は、私が今まで受けたことのある魔法の衝撃とはまったく違う。魂の底まで響き、心を粉々に砕くばかりだった、と。腕が良いだけ、魔力に優れているだけで、そこまで言わしめる魔法を放てるとは思えぬ。白の王子の申されるとおり、我々はレイゼルトを名乗る少年が何者なのか、どのような魔法を用いたのか、突き止める必要がある」

老神官はそこで言葉を切り、石人達をぐるりと見渡す。ブレイヤールも上体を起こして、老神官へ顔を向けた。

「そもそも我々が予想していたのは、人間達の侵入だけだった。故にその対処も不十分なものとなり、思わぬところで白の王子の身を危険にさらし、灰城の兵に深い傷を負わせることにつながった。レイゼルトを名乗る少年も、取り逃がしてしまったのだ。これは反省すべきことだろう。白の王子一人に負わせる責任ではない。『レイゼルト』を名乗る者のことは神殿の大巫女様にもお伝えし、ご判断を仰ぐことにする。赤城にはレイゼルトの切り落とされた右手が、王墓に残されているはずだ。神殿から高位の星読み達を遣わすことにする。残された右手を調べれば、かの少年が『レイゼルト』と関連あるかどうか、分かるだろう」

老神官の言葉は強力だった。ことに「大巫女様」の名を出したことは、石人達にとって、事態がどれだけ深刻であるかを否応無しに認識させる。一方で赤城の使者はみるみる顔色を悪くした。レイゼルトの名は他の石人以上に、赤城の者にとって悪夢よりも忌まわしい過去だったのだ。「我々も、その少年を探す手がかりをつかまなければなりません」

黄緑の城の左大臣が発言した。十一国側としても、全てを神殿に仕切らせるつもりはない。他

の国の使者達も左大臣の言葉に同意し、白城での手がかり収集に人を送ることを決める。ブレイヤールはといえば、これを素直に受け入れるしかなかった。

使者達と神官は、それぞれの役割や権限の範囲について議論をはじめていた。十一国側は出来る限り神官の関わる事柄を制限しようと苦心し、神官側も十一国側が人間相手にとった穴だらけの警備体制を批判して、レイゼルトの捕縛を主導しようとする。ブレイヤールは議論に熱を帯びてきた集団の中で、次第に外へ押しやられてしまう。文字通り、完全に蚊帳の外になっていた。

「あの、皆さん、お聞きください！ 確かに彼の足取りを追い、捕らえるのは、何よりも優先すべきことです。しかし人間達もまだ平原に退いただけで、再び我らの世界に忍び込んでくる可能性が残されています。彼らが峡谷の向こうに退くまで、警戒を解くべきではありません！」

ブレイヤールは石人達に声を上げる。ところが。

「その話はもう終わりましたぞ。仮に連中が境界石を再び越えることがあれば、今度はその場で追い返せばよろしい。境界石の守備は、白王子、引き続きあなたがやってくだされれば、人間の心配はありません。今度はもっと強い魔術を森にかけていただきたいものですな」

黄緑の城の右大臣が振り返り、諭すようにそう言う。ブレイヤールは食い下がった。

「私は境界石の向こうにも、さらなる注意を向けるべきだと言いたいのです。白城に現われた人間達が、どのような背景を持っているかが問題なのです」

「もうじき滅びる国からやって来たのでしょうか。人間達の素性は、あなたご自身が一番よく調べてくださいましたからな。彼らが滅びれば平原への抜け道も忘れ去られ、掟を忘れた人間が群れをなして我等の世界に来ることもなくなるではないですか。混乱されているようですから、もうお引取りになられて結構です」

右大臣はぴしゃりと言い切ると、背を向けて議論に戻る。赤城の使者がブレイヤールの側に来て、たしなめた。

「我々も取り急ぎ城に戻り、王墓に残された禁呪使いの右手を運び出す手続きをとらねばなりません。殿下も白城に戻られた方がよろしいのではないのでしょうか。かの少年がどこへ去ったか、城に手がかりが残されているやも知れません」

「.....それを調べるのは神殿と黄緑の国の者達になっていて、私じゃない」

ブレイヤールは押さえた口調で答えるが、その前に赤城の使者と神官達は足早に議場を去ってしまっていた。完全に身の置き場がなくなったブレイヤールは、トエトリアのいる壇上に登って壇の端に腰掛ける。老神官は話し合いに参加するために壇を降りていたので、壇上にはトエトリアと王衛、近衛兵だけが残っていた。

「何が起ころうとしているの？」

王座から飛び降り、トエトリアは心配そうに囁きながら、ブレイヤールの隣にかがみこんだ。王女という立場上臨席していたものの、彼女に報告会の内容は難しかったようだ。

「誰にも分からないよ。赤城と星読みの神官が、レイゼルトを見つけるならいいんだけど」

ブレイヤールはげんなりと呟く。石人達がレイゼルトのことを考え始めてくれたのはいいが、自分自身はこれからどうしてよいか分からなかった。人間達への対処は、ある意味自分ひとりに任されたのかもしれない。しかし手足になる家来が殆どいないようでは、いったい何が出来るの

だろうか。

「滅びた国の王族って、本当に不自由な身分だな……」

「そう？ 私は自由だと思っていた。一日中、自分の好きなことできるから」

トエトリアは無邪気だ。そのあまりの能天気さに、ブレイヤールは思わずまぶたを閉じて、涙をこらえる。何の悩みもなさそうな彼女が、今はとてつもなく羨ましい。トエトリアだって、反省しなければならぬことはたくさんあるはずなのに。

「違うの？」

トエトリアはブレイヤールの反応を見て、首をかしげる。しかし頭の回転だけは速い。彼女は、直後に手を打った。

「でも、うちの兵士達が白城に暫くいるなら、チャンスじゃないかな。その間、白城は兵士達が見張ってくれてることになるんだし」

トエトリアはうきうきと飛び跳ねるような口調でそう続ける。聞き流すつもりでいたブレイヤールだが、この言葉に初めてトエトリアを見上げた。口ぶりから想像できる通り、彼女は満面の笑みを浮かべている。「境界石の向こうが気になるなら、ちょっと見てきたら？」と、そそのかしてくれているわけで、当然それ以上の深い意味はないだろう。

「さすがだね。城を空けるチャンスを見逃さないんだな」

彼は力のない笑みを返して見せる。その表情とは裏腹に、彼はこれからどうすべきかを見出していた。トエトリアがタバッサまで行ったように、彼も行けばいいのだ。そして、そのもっと先へも――。

## 十章 紫の城

赤城は広大な湖の中央に、島のようにそびえ立っていた。城壁が水面から伸び、その上には細く尖った岩山がいくつも並んでいる。崖も岩山も赤茶けた色をしており、そこにくり貫かれた千もの窓から明かりが漏れていた。湖の下に沈む部分にも水晶をはめた窓がいくつもあり、水面の下をぼんやりと照らし出している。湖には小さな明かりを灯す、幾漕もの小舟がのんびり漂っている。

城の南東部分、町から林の向こうへと続く道に、とぼとぼと歩くひとつの人影があった。簡単な作りの裾長のワンピースに、群青色をした丈の短い刺繍入り上着。枝を落としただけの木の幹を杖代わりに持ち、栗色の髪を首元でぱつりと切りそろえた賢そうな面立ちの若い女性だ。もっともワンピースは皺だらけで、室内履きの柔らかい布靴をつま先に引っかけ、片方の手に皮袋と湯気の立つ木の皮の包みを下げているさまは、明らかに冴えない。

「おいおい。お嬢さん、随分な恰好じゃないか。祭りの夜なんだから、みんな楽しくやらなきゃいけないんだぜ」

町外れで眠そうに立っていた警備の兵が、はっと目覚めて声をかける。女性は一瞬にやりと笑っただけで歩調を速めた。

「祭りも祝わないなんて、醒めてるな。気をつけて帰れよ」

兵士はその背を心配そうに見送った。

「私、本当にバカだわ。なんだってこんな所にいるんだか。おまけに、こうしてまたあいつのいる所へ戻ろうとしているんだもの」

アニュディは、もう百回目になるかもしれない溜息をつく。風に乗って、春呼びの音楽がかすかに届いていた。今夜は春迎いの祭りの日なのだ。

「私だって、お祝いしたかったわよ。家族で集まって、ご馳走を食べる予定だったのに。皆、きっと心配してるだろうな」

再び溜息をついたアニュディは、林の道を杖で確かめつつ、半時ばかりして古い塔へと帰りつく。塔は林立する岩山の陰に隠れ、さほど高いものではない。せいぜい八階建てくらいだろうか。最上階辺りに窓が二つ、それ以外は塔の入り口があるだけだ。その入り口も石ころで隙間なく塞がれ、茶枯れた苔や木蔦がその上を覆っていた。窓も同じありさまで、酷く殺風景だ。

彼女は塔の冷たい壁を片手に触れて存在を確かめると、皮袋と木の皮の包みを杖に結わえて腰帯にさす。それから姿を変じた。彼女の影が足下から塔に沿って、長く伸びていく。壁に沿わせた彼女の腕も、見る間に鋭い鉤爪を持つ獣の腕に変わり、ぐっと力が込められたかと思うとその巨体を塔の上へと引き上げた。

それは銅色に鈍く光るトカゲの体、熊のように太い四肢、狼に似た頭を持つ生き物だった。背中に広がっていた薄い銅の羽毛を持つ翼は、体の両脇にたたまれる。腹部にはワンピースの帯だったものが手綱のように結わえてあり、そこには杖が引っかかっている。短い上着は首から胸元を包む蒼い被毛になり、刺繍はその縞模様が変わっていた。

その生き物は塔に爪を引っかけて登り、屋上まで来ると銅の翼を星明かりに閃かせ、再び小さくなってアニュディに戻った。彼女は杖を腰から引き抜いて、結わえていた荷物を解く。

「ふう、誰にも見られなかったかな。私みたいに図体の大きいのは、城で勝手に変身したら罰金ものだもの」

「罰金ですむ大きさならまだいい」

手すりに腰掛けていたレイゼルトが答える。

彼が見上げる視線の先には、王城があった。祭りを祝う明かりが、深い紅の王城全体を照らし出している。緋色の柱が並ぶ大回廊もここからよく見える。とりわけ回廊の大窓が見事だ。それは山珊瑚の細かな装飾を複雑に組みあわせ、この国の象徴である妖精竜の姿を透かし出していた。

「夕食を買ってきたんだけど。川魚の蒸し包み。あなた本当に食べなくていいの？」

「食べない」

レイゼルトはきっぱりと答え、手すりの向こう側に体を降ろした。そこには石で塞がれた窓がある。彼は左手で手すりにぶら下がりながら、籠手をはめた右手を窓に向かってかざす。窓を塞ぐ石はさらさらと砂に変わって崩れ落ち、後に残ったのはぽっかり空いた窓枠と、カーテンのようにぶら下がる枯れた木蔭だけだ。

彼は窓の枠石に足を降ろし、木蔭を掻き分けて室内に飛び降りた。砂埃が舞い上がり、窓から差し込む月明かりの筋を浮かび上がらせる。彼は窓を背にじっと動かず、まっすぐ先の室内に火色の瞳を向ける。その視覚は、昼よりも夜の方がきいた。しかし見る必要などないくらい、彼の記憶はこの部屋をよく知りつくしている。

七百年前、ここにはまぎれもなくあの「レイゼルト」が幽閉されていたのだ。「彼」は塔での一日の大部分を、この部屋で過ごした。窓から差し込む外の光に怯え、同時に強くひきつけられながら、部屋の暗がりにも身を隠していた。この塔から出れば自分は殺されることを知っていた。切り取られた右腕の先は体の成長に従って痛みを増したが、逃れるすべはなかった。塔と右腕の痛みこそが、この世に唯一与えられたものであり、「彼」を捕らえ続けるものだった。

当時、部屋には壁にも床にも、文字がびっしりと彫り込まれていた。「レイゼルト」が幽閉される以前にも、この部屋で過ごした者達がいたのだ。長い年月の間に、どれだけの囚人がいたのだろうか。刻まれた言葉は誰かを呪う文句の他にも、許し、無実の訴え、無念、諦め、そして最後の悟りを滲ませた詩もあった。「レイゼルト」自身は筆もなくナイフも持たず、文字を書いたり刻んだりできなかった。できるのは薄明かりの中、先住者達の残した文字を、たどたどしく発音して時を過ごすことだけ。幼い頃から塔に封じられたために、その発音すらも、正しいかどうか分からない。それでも完全な孤独の中、ともすれば記憶から薄れ消えてしまう言葉、人としての知性にすぎるように、「レイゼルト」はこの文字を指でたどり続けた。

これまでの囚人達が絶望の末、正気を手放し生を終えたように、「彼」もまたそうなるかと期待されていたのかもしれない。しかし「彼」の心で、絶望は十分には育たなかった。そういった感情を持つには幼すぎたのかもしれない。ただひたすらに、過去の囚人達が壁や床に刻んだ言葉が、自分と人の世界を繋ぐと信じて疑わなかった。

レイゼルトは、暗闇を透かして部屋に視線をめぐらす。

今、この部屋に文字はひとつもなくなっていた。無理もない。あれから七百年も経ったのだ。塔が貴人の牢として使われなくなったとき、何もかもきれいに造り直したのだろう。しかし囚人達の暗い思念の染みついた塔を使うのは、気味が悪かったとみえる。いつしか塔は封鎖され、このまま何百年も放置されていたようだった。

一方で、七百年前と変わらないものもある。それはこの室内に落ちる影と、水のはじけるかすかな音だ。

「彼」には、この狭い世界を観察する十分すぎる時間があった。日が暮れて真っ暗になると、風に乗って人の声が町から届くのではと、耳を澄ますことも多かった。徐々に研ぎ澄まされていった感覚がある瞬間、自分のすぐ側にあった音、塔の壁の中から聞こえる囁きを捉えたのは、当然だったのかもしれない。それが初めて聞いた城の音だった。そして「彼」が塔から引き出されたのは、それからまもなくのことだ。

古い記憶が湧き上がる泥のように心の奥底から蘇り、明らかな形を取らないまま再び意識の底へと沈んでいった。レイゼルトは薄闇の中で顎を上げる。塔から引き出され、目の当たりにした外の世界に覚えた感情は、古い記憶の深みの中でまだ荒々しく燃え続けていた。彼はもう部屋を一瞥だにせず、身を翻すと来たときのように窓から塔の天辺へ戻った。

アニュディは食事を終えて、何をすることもなくこちらに背を向けてまっすぐ立っていた。

「春呼びの歌が始まったみたいね」

彼女は町の方向に耳を傾けていたのだ。

「耳がいいな」

レイゼルトが答えると、アニュディは首だけで振り返る。

「城の音を聞いたことは？」

レイゼルトは尋ねる。アニュディはああと小さく声を漏らした。

「あんな音に気づくもんじゃないわね。自分の心臓よりも静かな音だもの」

彼女はうな垂れて、考え込むように腕を組んだ。

「私が入り離れた場所に家を持ったのは、気ままに暮らしたかっただけじゃない。ああいう所がないと、基礎石の中を通る音は聞きとれないもの。王族の人は、もっと多くの音をあそこから聞き取るものなのかしら。でも私、基礎石の中を通る音でも、きっと一番小さな音を聞いたのよ。地の底から打って、天へ送り出される流れをね」

「食事を買って行って、まさか戻ってくるとは思わなかった」

レイゼルトの言葉を聞いて、アニュディは冷たく言い返す。

「いまさら言う？ 戻らなかったら、探しに来たでしょう。あんたは私に危害を加える気はないようだから、付き合ってあげてるの。翼を持つ者には、花を持たせておきなさい。そうすりゃ少なくとも、空にいるときは振り落とさないでいてあげるから」

最後に少し笑い声を立てて、アニュディは難しい顔に戻った。レイゼルトは再び王城に目をやる。王城の天辺にはひときわ強く輝く赤い灯火が設置され、大きな水晶の結晶をルビーのように照らし出していた。あの水晶は、城の芯である中枢部の頂点にある。中枢部は城のすべての力

の源であり、その力が拡散する場所でもあった。

「城の中枢には全ての秘密の源があるそうだ」

「そう言われているね」

アニュディは頷いた。

「私は自分で見つけた秘密の側に、いたかっただけ。それなのに、あんたみたいな妙な存在に目を付けられるし、床からは妙な力が溢れてきて、三か月分の香を燃やしちゃうし」

彼女は不機嫌な様子で唇を尖らせると、自分の前髪をぷっと吹いた。

「で、あんた本当に誰？ 城の音に興味を持っている人は、私の周りにはいなかった。ある意味、あんたが初めて会った私の同類だわ。あの音のこと、皆は基礎石の中を通る水の音だっていうけど、私にはむしろ泡がはじける歌に聞こえる。うまく言えないけど、節回しがあるのよ。虫の鳴き声より、もっともっと単純な」

「なぜ基礎石の中に水の通り道があるのか、なぜそこを水が昇って行くのか、知ってるか」

「『建城記』で、初代の十二王達に仕えた魔術士が書いているわ。初代王達が、死した神の体に魔力の道を焼いた。神の体がこの城で、魔力の道が城中に張り巡らされた水の道。城の天辺の水晶で集めた星の光が中枢の根っこに届いて、それで形なき魔法の機関が動いている。つまり、初代王の魔法の言葉でできた歯車が城の地下にある巨大湖で回り、それが水を絶えず押し上げて、城の下から上までを潤しているって。魔法の機関はこの城の最大の秘密で、不安定ゆえに誰の目にも触れてはいけないし、そもそも見ることも出来ないものだって」

「水の通り道で気泡は弾けないんじゃないか」

レイゼルトの問いかけに、アニュディは口を曲げ、気を悪くしたようだった。

「そうかもしれないけど、それに近い音だったのよ。どっちにしろ私は、魔法の歯車とやらの存在を感じないの。あの城の音からは」

偉大な魔術士の記した書物を信じる気にもなれなければ、自分自身の解釈にも自信が持てない。いまいましさが感じられる口調だ。それから彼女は真顔に戻る。

「私、『あんたは誰？』って尋ねたはずだけど」

「私はずっと昔に死んだんだ。死んだら、名は星に返されてしまう。誰だとも言えない」

怪訝そうなアニュディの片手に、レイゼルトは左手で触れる。

「おお、嫌だ。ずいぶん冷たい手をしてるわね。首に乗っけて飛んでるときから、妙だと思ってた」

「半分死んでいるし、半分生きてもいる。体が当てにならないから、魔術を使って、ものを見て、声を作っている。不便もあるが、食事をしなくても腹が減らないことは、ずいぶん勝手がいいかもな」

アニュディは素早く手を引っ込め、レイゼルトから一歩身を引く。しばらく黙りこんだ後、ようやく彼女は固い口調で答えた。

「書物で読んだわ。不死不老の者ね。長生きしすぎると、体だけが若いまま老衰するの。でも私が読んだ書物ってのは、作り話よ。素晴らしいわ。子どもの頃はそんな作り話の主人公になって、生命の理を曲げた悪い魔法使いをやっつけたって、夢見てたもの」



口ではそういうものの、作り話が本当になると、大抵がろくなことにならない。アニュディはやれやれと実感する。

かつて禁呪というものが存在した石人世界では、こういう者がいてもちっともおかしくないのかもしれない。魔術の最も深い闇へと沈んだ者達は、人々の記憶や書物の狭間だけが住処ではない。この世の土を踏み、しかし誰にも姿を見せることなく、影から影へと渡り歩く者もいるはずだ。禁呪が封じられてから、このような者達が存在し得ることも、石人達はほとんど考えなくなっている。それこそ、作り話として不死不老が語られるほどに。

アニュディは姿勢を正して顔を引き締める。彼女の心に、石人らしい魔法使いとしての意志が呼び覚まされていた。

「城の音は、決して明かされてはいけない城の秘密に通じるもの。あんたが私の仕事部屋に現れたとき、地面から湧きあがってきた力も、城の秘密のひとつだったんでしょね。あの力は、とても古い匂いがした……」

城の音に魅入られたことで、こういった化け物を身近に呼んでしまったのかもしれない。

彼女は石人の城が怖くなっていた。あの晩、黄緑の城でこの少年を追うように湧き上がってきた不気味な力。あれは紛れもなく、禁呪よりも底知れない城の秘密から発せられたものだ。その力が彼女に及ぼした恐怖は、心に鋭く刺さって抜けずにいた。これを取り除くには、彼女に与えた恐怖そのものの正体を暴かねばならない。この不死不老を称する少年に従えば、それが叶う気がしていた。そしてそうしなければ、再び石人の城で、以前と同じように暮らすことなど出来はしない。

「私、城の音は好きよ。だからしばらく、あんたの用事に付き合っただけあげる。あんたのおかげで、城での日常を失ったわけだしね。失ったものに対して、私はあんたの用事から何を得る？」

「探求の糸口になるものなら、なんでも」

「じゃ、視覚。皆が言うのよ。黄緑の城はとても綺麗だって。城の秘密を明かしても、城がどういう姿をしてるか知らないのは、ちょっとしゃくだわ。あんたが今使ってる、ものを見る魔術とやらを教えてよ」

「この魔術は、生まれつき目が見えないあなたには意味がない。用事をあらかじめ済ませたら、私の片目の視力を、あなたの片目に移してやろう」

「……本当にそんなことできる？」

「できるが、後で相当苦労することになる。ものに出るかは、城の探求より苦労するかもしれない」

レイゼルトは塔の端へ立ち去りながら、小声で答える。相手が側を離れたのに気づき、アニュディは声を張り上げた。

「あんたが名乗らないなら、私も自分の名は名乗らないから！ でもね、あんたがいつの時代から生きてるか、聞いてもいいでしょ。下手な骨董品より古いんじゃない？ ぜひとも人として生きた、最後の記憶が何か聞いてみたいわ」

レイゼルトは口を引き結んで振り返る。

「そろそろ飛び立ちたい。黄緑の城のときと同じ目に会う前に」

「あ、そう。そういうつもりなんだ。好きにするといいわ。でも私への接し方を考え直した方がいいわよ。私も機嫌を損ねると、城より怖いんだから。今後一切、命令しないで」

アニュディは溜息をつく。もはや何度目の溜息か、覚えていない。

彼女は塔の上で姿を変え、銅色の翼を大きく広げた。

わずかな休息時間を挟むだけで、数日飛びっぱなしだった。獣に姿を変えたアニュディの鼻先に、風はいよいよ冷たくなっていた。獣の感覚は、自分達がより奥地へと移動したことも教えてくれる。幸いレイゼルトは飛ぶ者を操る技に長けていた。彼が指示する通りに飛行旋回していれば、崖の岩肌にも背の高い木にも衝突しないですむことを、彼女は認めざるを得なかった。特に着地する際の指示は、目の見えない彼女にとって命にも関わる重要なものだ。この手際も、レイゼルトは抜かりがなかった。あまりに上手いので、彼が飛ぶ者を操るのに慣れていているというより、彼自身も翼を持つものに姿を変えられるのでは、と怪しんだくらいだ。

「ここどこ？ 風が強い」

「紫城。水晶の山」

人の姿に戻り、アニュディは強風に乱れる髪とワンピースをそれぞれ手で押さえた。彼女は胸いっぱい、知らない土地の冷たい空気を吸う。

紫城は滅んだ城だった。南東側に巨大な縦の亀裂が入り、北西側が大きくひしゃげている。七百年前、城の中枢が傾いたときに起こった大規模な地崩れの跡だ。大きな傷を負ったこの城に人が戻ることはなく、生き残った紫の王族も去って行った。基礎石を覆う化粧石は地崩れや長年の風化により、あるいは成長する木の根に砕かれて、多くが剥落している。化粧石には深紫の石材が使われていたが、むき出しになった城の基礎石がその色を映し、紫水晶のごとく輝いていた。紫城はその有様から、いつしか水晶の山と呼ばれるようになっていた。

二人が降り立った場所は、紫城の中腹にある高台だ。上層から崩れ落ちた石材の破片が散らばり、倒れた巨柱の影には、強い風を避けるように灌木の茂みが黒々と広がっている。後ろにそそり立つ絶壁は、高層の館の壁だ。透明な基礎石がむき出しとなっており、四角い窓の幾つかから、細い滝が落ちている。館の足元には滝でできた川が流れ、さらに一筋の滝となって高台から下層へと続いていた。

「ここなら、上から石が落ちてくる心配はないだろう。落ちそうなものはあらかじめ落ちた後だ。水もあそこにある」

レイゼルトは自分の杖を取り出し、枯れ草だらけの地面に線を引く。彼は滝の下の水たまりや、風を避けられそうな石材の陰まで、杖で地面を引っかきながらひと巡りして戻ってきた。アニュディのために、魔力で印をつけた道が必要だったのだ。

彼は杖で描いた線の上に足を乗せるよう、アニュディを促す。アニュディは綱渡りをするように、見えない線の上へ両足を乗せて前後を確かめた。

「うん。分かる。これで一人でもだいたい動ける。けど、どうするつもりなの」

「私はこの城に探し物があるから、しばらくここに」

「ええっ！」

ほとんど悲鳴にも近いアニュディの驚いた声を背にして、レイゼルトは魔法の風に乗り、城の上層へと大きく飛び上がった。彼は高台を見下ろす絶壁の天辺に着地して、一度だけ振り返る。まだ日は高く、乾いた風が荒れ果てた城の埃を舞い上げ、あたりを薄紫に霞ませている。高台にはアニュディがぼつんと立って何か叫んでいたが、声は届かない。彼はその場を離れ、城の上層を目指し始める。

もしレイゼルトが生きた体を持っていたなら、城の上層を目指すのはひどく骨の折れる仕事だったに違いない。幸い、彼は半生半死だった。不老不死の魔法といえど、生き物の寿命を超えてこの世にとどまろうとすれば、どこかで術のもつれが出てくる。この世との繋がりが強い肉体は死に縛られ、あの世に行けない魂は魔法に縛られたまま残り続けている。それが少なくとも今の状況では、何よりありがたい。死んだ体は疲れないし、食べ物も必要としない。何も感じず痛みもない、人形みたいなものだ。それを魔術で操るのは、造作ない。

レイゼルトは休むことなく走り、上へと続く階段を見つけては駆け上がる。場所によっては絡み合った蔦をよじ登ったりした。もともと複雑な構造をしていた城は、七百年前の大崩壊でさらに道が分かりにくくなっていた。

「禁呪の力に魅せられて暴走を始めたと、歴史書にあったな。それ以前に、もともと正気じゃなかった気もする……」

大きな亀裂で断絶した回廊を飛び越え、レイゼルトは呟いた。白城の図書館に忍び込んだとき歴史書を漁ってみたが、当時の記憶は彼の中でも、不思議とおぼろげなものになっていた。七百年前の大崩壊で起きた悲劇は、どれほど凄まじいものだったろうか。数え切れないほどの石人達が命を落とした。紫城がレイゼルトの操る禁呪によって滅びたとき、石人達は禁呪の真の恐ろしさを知ったのだ。歴史書には「禁呪によって、初代十二王が半生をかけて建てた城は、わずか九日で滅びた」とあった。

――たかが一人の石人の力で、禁呪を用いたとはいえ、これほどのことができるものか。そもそも私にとって、この城を滅ぼすことに何の意味がある。私以外に強力な魔法の使い手がいて、その者が計り知れない恨みをこの城に抱いていたとしたら？ 地上を巡る歴史もあれば、地下でうごめく物語もある。

無人の城には、様々な調度品がそのまま残されていた。長い回廊を飾る燭台は厚い砂埃に輝きを失い、床に転がった陶器の花瓶は拾い上げる者もなく、ずっとそのままだ。木で出来ていたものは全て跡形もなく崩れ去り、土になるか風に運ばれて散っていた。

進む方向を見定めようと立ち止まったレイゼルトの視線の先、天窓から夕暮れの日が注ぐ小さなホールに、数頭のカモシカがいた。彼が近づくと、シカ達は軽やかに跳ねて石柱の森の向こうへ逃げ去ってしまう。

ホールの中央には小さな噴水跡があった。水は絶えず湧き出し、壊れた噴水の縁からシカ達が逃げた柱廊へ、小さな流れを作り出している。天窓を見上げると窓枠だけになっており、外がよく見える。傾いた塔の階段状の屋根が覗いて、縁飾りに紫城の聖獣である獅子に似た生き物のシルエットが彫りこまれていた。

――あそこから王城に入れる。

レイゼルトは塔へ向かって大きく跳び上がる。王城に入れば、中枢の入口である扉もいずれ見つかるはずだ。

日が暮れて城の影は濃くなる。王城には動物達の気配すらなかった。水晶のような基礎石を通して星明りが崩れた壁面に踊る。あらゆる物が安らかに沈黙していた。衣服らしきものもくしゃくしゃになって床に張り付いていたが、それを身に付けていた持ち主はとうの昔に死んで石となり、砂となり、吹き込む風で散っていた。

――石人は死んで石となる。やがて崩れて砂になる。人間は土人<sup>つちびと</sup>だ。死んで土に還る。

古い時代、この城を満たしたであろう悲鳴も恐怖も絶望も、その後に降り積もった長い時間と静寂が全て乾かしてしまったかのようにだった。

二日目の真夜中過ぎ。レイゼルトはようやく巨大な二枚の扉の前に辿り着いた。紫城の中枢への入口だ。本来ならば強力な魔法の鍵が幾重にもかかり、扉は一枚岩になっている。ところが七百年前に大きく傾いた城の中枢は、この扉をひとたまりも無くひしゃげさせていた。レイゼルトはひび割れた扉の隙間から、するりと入り込む。

月明かりが中枢頂点の水晶から差し込み、螺旋階段を淡く浮かび上がらせている。階段もまた中枢とともに歪み、亀裂が所々走っていた。レイゼルトは階段を慎重に降り始める。

中枢を包む基礎石の中を、小さな泡が月明かりをはじく燐光となって立ち昇る。このような状態でも、なお水は城のあらゆる場所に運ばれているのだ。

――中枢には魔法の機関がある、か。その方が、まだはるかに良かった。

中枢の芯部に設けられたいくつもの儀式の間も、レイゼルトは構わずに降りていく。中枢は城の力の源にして、その内部は力の真空地帯でもある。一切の力が働かない場で、城の秘密が守られている。

――七百年前の者がなぜ生きているか。『レイゼルト』に関する歴史的な事実から、答えは出ない。『レイゼルト』は全ての石人を呪いながら死んだと伝えられているが、恨みだけでこんな化け物になれるものか。私の石人達に対する感情も、赤城の湖畔に凄惨な砂漠を作り出した禁呪の力も、多くの歴史物が記す事実も憶測も、全て関係ない。私がああな翼を持つ石人を調香部屋で捕まえたように、彼らも私を七百年前、禁呪を使って捕え、自分達のいる闇に引きずり込んだ。

すでに彼は、水晶から差し込む明かりも届かない深部へと達していた。螺旋階段の終わり。そこが紫城の最深部と言われる所だった。魔法の光を丸籠の形に編み、自分の先にそっと漂わせる。光は白く滲みながら、辺りを弱々しく照らし出す。影と反射が空間を走った。中枢が倒れる以前は行き止まりだったはずの場所は、斜めに大きな亀裂が入り、粉々になった基礎石の破片が散らばっている。亀裂の狭間は、まるで大広間ほどの広さと高さがある凄まじいものだ。

レイゼルトは迷うことなくその亀裂の中へ上がり、先へと進む。いびつな断片を無数にもつ大広間は、垂直に建つ無傷の壁で終わっていた。壁は基礎石の一枚岩だったが、その奥に薄紫の石の影がある。中枢の崩壊に耐え、その内部にあるものを守るほどの強さを持った壁だ。レイゼルトは立ち止まり、左手をなめらかな壁に当てる。

「七百年の初めと終わりに、最も深部の扉が依代<sup>よりしろ</sup>を求めて開く。あるはずのない扉が。すでに他の八色の扉は開かれ、閉じられた。今、十番目となる赤の扉が七百年ぶりに開かれ、十一番目の

扉は初めて開かれようとしている。九番目の扉はどうか。七百年前にそれは閉じられることは無かった。扉は中枢が傾いたときに、壊れてしまった」

彼は腕を動かし、壁の左右を確かめる。透明な基礎石の壁の中を、不意に白い明かりが伝わってきた。光は彼の右側から来る。その先には、壁の中へと通じる穴があった。彼は素早く左手を引くと、入口へ歩み寄る。

室内には、光が煙るように満ちていた。壁面と床は磨き抜かれた薄紫の石が覆っているが、部屋の中央に立つ樹木を模した巨大な柱は基礎石そのままを削り出している。柱の上部は波打つ枝葉とも風の軌跡ともつかないひだ模様となって、緩やかな曲線を描く天井までを覆っている。

レイゼルトの視線は、紫色を映す基礎石の柱へと据えられた。柱の土台部分には一つの王座が彫り込まれている。そこに褐色の肌をした一人の王が、ぐったりと身を投げ出していた。絹の光沢を持つ深い紫の衣を身にまとい、透き通るような董色の波打つ長髪が、王の肩から膝まで垂れていた。

「初代紫王。名前は伝えられていない」

レイゼルトが低い呟きとともに室内に足を踏み入れても、王は死んだように目を閉じたままだった。その姿は波打つ水面に映っているかのようにゆらゆらとたなびき、ときに王座の背が透けて見える。

「歴史書にはこうある。はるか昔、この地にはひとつの神殿のみがあり、石人達を絶対的に治めていた。ところが時を重ねるごとに神殿の権力は腐敗し、石人達を苦しめるようになる。あるとき神殿に仕える十三人の神官が、石人達を権力から解放するため、神殿に逆らい十二の城を建てた。彼らは初代国王となり、多くの石人達は彼らを慕ってその国の民となった」

レイゼルトは王に向かい合って立つ。しかし決して近づきすぎはしなかった。

「十二の城は、神殿も簡単に排除できないほど巨大で強固だった。それでも神殿から完全な自由を得るために必要なものを、神殿に残してしまっていた。命名の書だ。この宇宙に存在する全ての星の名が記され、石人の名付けに欠かせない。

十二城は命名の書を求めて、神殿と争った。そこで多くの大きな魔法が用いられ、神殿の大巫女の怒りをかうことになった。それは結果として十二城を敗北せしめ、初代国王達は城の存続と引き換えに自らの命を神殿にゆだねた。十二城の、今では代々の国王達が即位式を行う台座で、それぞれ処刑が行われた。

神殿との戦で、我々は多くを失った。しかし最たる損失は、初代国王達の処刑によって、城がどのように創られたか、その創生の秘密までが分からなくなってしまったことだ。

これら一連の出来事は、十二城全ての歴史書の冒頭から記され、誰もが知る史実だ。そして、誰にも気付かれなかった事実もある。初代国王の処刑とともに、石人の世界は二つに分かれたことを。ひとつは神殿が支配し、もうひとつは暗い地下へと潜り、誰の目にも触れずあなた方の支配下にある」

レイゼルトの語りに答えるように、王の唇がわずかに動いた。ところが声は聞こえず、紡がれる言葉を唇の動きから読み取るしかなかった。それはやはり古い時代の言葉だった。

――神殿は処刑前夜、我らから創生の秘密を聞き出そうと、空しく力を用いた。

紫王はまぶたを閉じたまま、音も無く体を起こす。年齢の分からない、神々しいまでに厳しい面立ちの女性だ。

――そなたも、私を消そうと空しく足掻くか。だが、相手が違うのではないか。

「七百年前、あなたを消そうとした者に代わって、ここに来た。私はあなたを消した後に初代赤王も消すつもりでいる。死者は速やかに生者達の舞台から降りるものだ」

レイゼルトは淡々と答える。

「十二の城を建てた王達は、偉大だった。その王達が今も中枢の底で眠り続けていることなど、誰が知るだろう。いや、知ったら最後か。同じ暗闇の世界に引き込まれ、二度と光の差す世界には戻れない。不死の術をかけられ、己の生きる場所、時代すらからも遠く引き離され、七百年間さまようことになる。そして七百年の終わりに待つのは、始めのときと同じ。あなた方だ。私達は魂を引き抜かれ、体を奪われる。それから魂がどうなってしまうのか、私は知らない」

紫王のまぶたが開き、濃い紫に縁取られた淡い水色の二輪の瞳が、現れる。その瞳は焦点が合わないまま、漠然とレイゼルトの方へ向けられた。

「その瞳には覚えがある。……魂の依代たる体を失って彷徨うあなた方が、自身の子孫から依代を奪うとは。私は七百年前、その体の持ち主に会った。私が見たのは限界を超えて老いた七百歳の石人だ。人相はおろか体も崩れ、瞳だけがそのままだった。自身をそのような運命に陥れられたことを恨み、あなたを消そうと時を待ち続けていた。あれほど恐ろしい姿と執念を、私は見たことがない」

レイゼルトは声に怒りを滲ませ、紫王の虚ろな瞳を睨み返した。

「あなた方は何故、ここまでしてこの世に留まった。神殿との決着をつけねばならないのか」

――あるいは、戦いはまだ始まっていない。

答えた紫王は何の感情も見せず、ただ静かに石の柱の根元に座したままだった。その様子はまるで不動そのものを体現しているかのようだ。

――復讐のために、この世に留まり続けているわけではない。我らは戦仕度を整える前に処刑され、現身を失った。神殿は多くの秘密を持ち、それを代々の大巫女が守ってきた。全てが狂い始めたのは、その秘密の一部を九竜神官が大巫女から盗みとった故だ。

「神殿の心臓部には、この世の創生に関わった石櫃と、命名の書があると言われている。それだけしかないのだとも」

――それが全てなのだ。

王は目を閉じ、初めて深く息を吐き出した。息は白く煙り、それとともに揺らめいていた王の姿が、はっきりとした輪郭を帯びてくる。再び開いた両の目は、レイゼルトの姿をはっきりと捉えていた。レイゼルトは思わず片足を引き、左手の杖を握り締めた。

――神話の時代の最後に、神々の体は石櫃の上で砕け、破片は星となって宇宙に四散した。石櫃の側には、星の名を記した命名の書が遺され、最初の石人であり名を持たぬ最後の石人となった初代の大巫女が、長旅の末にこれらの元へたどり着いた。そして神殿は、石櫃を中心に築かれた。それが石人の知る最古の世界の記憶だと、神殿は語る。あの単調な調べに乗せて歌い継がれる詞の、全てだと。

「十三神官は、九竜神官らが大巫女様から秘密を盗んだことを知ったんだな」

「石櫃に納められしもの」

レイゼルトの言葉に、滑らかな低い女の声が答えた。

王の息が規則正しく白く吐き出され、立ち上がるとともに衣擦れの音が響く。紫王の体は今や完全な重みを持ってそこにあった。それは明らかに血の通った生きた体だ。この世から切り離されるほどに深い城の最奥の部屋で、むしろ生身の肉体は不釣り合いな存在にも思える。

「この世が生まれるとき、その代償として封じられた闇。彼らはその力に魅せられ、それを知ることが望んだ。しかし、彼らは自ら闇に近づくほど愚かでもなかった。彼らは言葉巧みに、我らを闇の近くへと誘った。闇を目の当たりにして知ったのだ。彼らが大巫女のみにはしか触れるを許されぬものを盗み取り、それをもって神殿に権力を打ち立てたのだと」

紫王の瞳は小刻みに震え、ずっと焦点を失った。

「そしてかの闇は、近づく者を飲み込む」

紫王の姿がぼやけ、一瞬透き通って暗くなる。本当に目に見えない闇に沈んだかのように、その声も姿とともにどこか遠くなった。

「闇を知るほどに我らの生气は弱まり、現の光を失い、眼は隠されたものを鋭く捉えるようになった。我らは九竜神官らの野心を見透し、その支配が全ての石人達に及ばぬよう、この魔物の地に新たなる住処を求め、十二の城を築いた。時を待ち、神殿に抗する力を育て養う必要があったのだ。神殿は我らを葬り去ったが、闇に触れた者は肉体を失っても滅びはしない。いずれこの十二城は、再び神殿に立ち向かうだろう」

「実体のない者が、この世に関わることはできない。だからこそ、魂にまとう肉を求めたのか」

レイゼルトは口の端に嫌悪の笑みを浮かべる。紫王の姿を透かして、基礎石の柱の中を立ち昇る細かな泡が、星のように輝いていた。

「その肉も、常のものではだめだ。あなた方の存在様式に耐えられる、寿命を遥かに超えてこの世に留まり続けた魂が入っていたものでなくては。七百年はそれに十分な時間だ」

レイゼルトはがらんどうの室内を見渡し、最後に王座の柱へ、紫王の立つ根元から天井まで視線を流す。

「この柱の真上には、即位式で代々の王がその姿を映す水盤がある。城の天頂にある水晶は、真の中枢の真上からは外れているわけだ。あなた方は開くはずのない扉の部屋にいて、水盤に映る王達の姿で時を数えた。闇に触れた魂は、この世の息吹に弱い。そして十二城は互いに根で、この玄室と繋がっている。扉を開くのは十二城を通して、七百年に一度ずつが精一杯だ。外気が根を伝わり他の部屋まで届いてしまうから。依代を定め、扉を開き、有無を言わずあなた方がいる同じ闇の深みに引きずり込み、不死の術をもって七百年の『放牧』に出す。私達からすれば、あなた方こそが闇だ。今、赤城の扉は開き、王は私を探して彷徨っている。もうひとつの扉も、依代を選び出すために開いているはず。それはどの城の扉だ」

「我が城の扉が崩れたとき、他の城から根を断たれてしまった。紫城では、もはや何も知るすべはない。……依代達も、わずかな機会に次代の依代を見つけ、知り得た真実を重ね継いできたとみえる」

薄まりかけていた紫王の姿が、その言葉とともに再び浮かび上がってきた。口調には、かすかだが苛立ちのような感情が入っている。レイゼルトは王に杖の先を向ける。

「私が出会ったあなたの依代は、正気を忘れ言葉を交わせる状態には無かった。あなたの呪縛を解くことを望み続け、同じように当時正気を知らなかった私の魔力を利用して、この中枢を倒した。だが遙か昔のある依代が、変わらぬ形で遺したものがある。なぜその依代が失われていた真実を知り得たのか。あなた方しか知らぬはずなのに」

レイゼルトは言葉を切り、杖を握る手に力を込めた。紫王の刻み込まれた不動の面に、ひとつの感情が浮かんでいたのだ。それは憤怒だった。

「ただ一人、神殿に残った者がいた」

紫王は両腕を横に広げながら低く唸る。瞳は爛々と、獲物を狙う獣さながらにレイゼルトを捉え、その挑戦を受けようとしていた。紫王の体を覆っていた髪が、重みを失い水草のように宙を漂う。

「我らの闇を、依代に漏らした者が！」

息詰まる押し殺した叫びが、紫王の口から放たれる。漂っていた彼女の髪が、毛先から炎に変わっていった。明るい紫に輝く光焰は部屋を隅々まで照らし出す。壁石が火の水となって流れ出した。中枢の最奥で、部屋はまるでひとつの恒星になろうとしている。

レイゼルトは自身の体を、明るい炎が包んでいくのを見た。左手に握り締めた杖の先の輝きは、紫王の光焰に飲まれる。それでも彼の魔法が紫王の体を焼き、紫王の魔法が彼の体を焼こうとしているのを、はっきりと感じていた。

紫王の姿はさらに明るさを増し、褐色の肌も髪と同じ色で輝く。顔の辺りに不意に現れた漆黒の線は、彼女の横に引き伸ばされうっすらと開いた口だった。

――城が滅ぼされ、王がその座につけなくとも、城が死ななかつたのは、我らがこの柱の根にいたからだ。それを、お前は滅ぼすのか。

レイゼルトは答えの代わりに、柱へ最後の視線を送った。柱は砕け、水晶の砂へと崩れていく。輝く紫王の姿が膨張し、視界は眩い光一色に染められる。それと同時に、彼は自分の体が消え去ったのを知った。

心音に気づいて、彼は鈍い意識を取り戻す。体を起こして辺りを見回そうとした。しかし全身が石みたいにくたく、ひどく重い。彼はしばらく倒れたまま、自分の心音に耳を傾けた。やがて呼吸が戻ってくると、胸の中が焼けるように痛む。喉からは細い音が漏れている。感覚が混乱し、自分が仰向けなのかうつ伏せなのかも分からなかった。目を開けているのか、閉じているのかも定かでない。耳だけがまともに聞こえるようだ。

紫王の魔法は、彼の体にかかった死の呪縛もきれいに焼き尽くしてしまっていた。暗闇の中で初代赤王のかけた不死の術が力を取り戻し、彼を生の状態へと引き戻したのだ。七百年前、黄緑の国の王子によって追い詰められ、滝から身を投げたとき、彼は自分の死を確信していた。その後、どことも知れない川のほとりで目覚めた夕暮れの、激しい絶望。遠い記憶の感覚を思い出しながら、彼はしばらく待っていた。これは経験的に学んだことだ。あれからも、彼は何度か死



んだことがある。

呼吸が楽になってくると、彼は動けるようになったと確信する。全身に力を込めて上体を起こそうとすると、何か強い力で阻まれた。しばらく考え、自分がどういった状態にあるの気がつく。彼は魔法で自分の周りのものを砂粒に変え、右腕の先に小さな明かりを浮かべた。

部屋は様変わりしていた。壁面を覆っていた石は高温で床に流れ出し、冷えて固まって彼の体を半分ほど埋めていたらしい。基礎石の床や壁は傷ひとつ無くなめらかで、中央の柱だけが台座部分を残して消えている。まるで溶け残りの氷のようだ。その周りには、柱の破片が水晶の砂になって散らばっていた。

柱の台座には、王座の窪みが残っていた。そこに、白く揺らめくかすかな靄がある。獣の姿かと思えば、人の姿にもなった。どちらにしても頭部だけがさらにかすかで輪郭が定まらず、ほとんど何もないかのように見える。ただ、目と思われる二つの空洞だけが真っ黒だ。目は彼の方へゆっくりと向けられたが、もう何かを話すことは無かった。まぶたを閉じたかのように二つの空洞が見えなくなると、靄は王座に吸い込まれるようにして消える。

「ずっと、そこにいるしかない」

レイゼルトは王座に向かってつぶやき、弱々しく何度か咳き込んだ。体は木の棒と粘土でできているかのように感覚が無い。それなのに油断していると、鮮烈な痛みが稲妻となって背中を走る。彼は這うように部屋を出て、中枢の階段を再び登り始めた。

中枢を登るにつれ、外の光と風の鳴る音が分かるようになる。彼はここで二日を数え、三日目ようやく両足で歩けるようになった。中枢の深部からここまで、どれだけの時間が過ぎていたのか分からなかった。

中枢から出て王城に戻ると、彼は近くの庭園を探し、その中央にあった水場へ倒れ込みながら駆け寄った。元は彫刻で周りを囲っていたかもしれない水場は、七百年たった今では水溜りのような泉に変わっていた。水は氷よりも冷たく、渴きを癒すと同時に体温を奪う。レイゼルトは二口だけ水を飲むと、悪夢から目覚めたばかりの頭にも水をかけた。

緋色の毛先からぽたぽたと雫が水面に落ち、映っている影を揺らす。水草の中に、月がある。

「夜か」

目の端に月を捉えて呟く。水を飲んだおかげか、不死の体はさらに生き物らしさを取り戻してきたらしい。骨まで凍える寒さと、差し迫った空腹を訴えていた。彼はのろのろと立ち上がる。死の余韻で寒さも空腹も疲労もどうにかごまかせるうちに、色々探ってこなくてはならない。

暖かい衣服が真っ先に必要だったが、これは比較的早く手に入った。城内にはあらゆるものが手付かずのまま残されていた。衣裳部屋を探し、服と砂埃の塊を片足で踏んづけ左手で力任せに引っ張る。絹で出来た布はぶつぶつと千切れ、魔物蜘蛛の糸で織った布だけが残る。彼は何着かの無傷の服を探し出し、自分の丈に合いそうな濃紫の寛衣を被る。さらにもう一着、大人用の外套を探し出した。アニユディの存在を思い出したのだ。

彼が高台を見下ろす崖の上に戻ってきたとき、夜は白みかけていた。見下ろすと、倒れた柱の影に銅色の翼の獣が潜んでいる。一匹のウサギが自分の隠れ家から出てきて、柱の前を横切ろうとした。獣はすかさず、大きな口を勢いに任せてぱくりと突き出した。

レイゼルトは下まで降りていく。自分まで狩られないよう気を付けながらそっと近づき、適当な場所で鋭い口笛を吹く。首周りの青い被毛がびりりと逆立ち、アニュディはそちらへ首をもたげる。ウサギを丸呑みにしながら。

「何日過ぎたか分かるか！」

レイゼルトが風に負けない声で怒鳴ると、アニュディは地面に伏せた体勢のまま、頭の上で先の丸い耳をピンと立てる。豪快な食事の現場を見られて、決まりが悪いようだった。彼女は人の姿に戻らず、代わりに前足で七回地面を引っ掻いた。

レイゼルトは暫く黙る。紫城は表向き何も変わった様子は見られなかった。しかし中枢の王座の柱が壊れた今、この城は石人のものではなくなっている。これまで城と王の力によって払われていた魔物や邪妖精達が、再びここに棲むようになるだろう。なるべく早く立ち去るのが得策だ。一方で、彼自身には休息が必要だった。たとえ、急がなければならない次の用事があったとしてもだ。

いつまで待っても反応がないため、業を煮やしたアニュディはやっと人の姿に戻った。

「いままで、ここで何を？ ああ、言いたくないなら、構わないけど。でもまさか、こんなに何日もほったらかしにされるなんて、思ってもみなかった」

「黄城に行かなければ……」

レイゼルトは答えてその場に腰を下ろす。疲労と空腹の波がどっと押し寄せてきていた。彼は何度かぜいぜいと肩で息をし、左手で額を押さえる。

「なんだか、声質が変わったみたい」

「もう魔法で声を作っていないから。私はこんな声をしていたんだな」

「……死にかけみたいな息ね」

「生き返りかけてる」

「……ふーん。人並みに弱くなったわけだ」

「城の音はまだ聞こえるか」

「風が強すぎる。昨日の晩は、風が止まったときに聞いていた。あの音だけは、黄緑の城と変わらないね」

「王がいなくても、城は変わらない」

「あら！」

アニュディは息を呑んだ。彼女は何度も頭を振る。

「王様がいなきゃ、私達の城じゃないわ。石人の暮らせる場所がなくなってしまう」

レイゼルトは答えずに、持っていた外套をアニュディに投げた。今日一日だけでも休息をとり、黄城までの飛行に耐えるだけの体力を取り戻さなければならない。彼は柱の影に身を潜め、そのまま丸くなって目を閉じる。

アニュディは受け取ったものが着物だと分かったと、それを羽織って再び獣の姿に変じる。外套のおかげで、獣になった彼女の体は青紫の豊かな被毛に包まれることになった。彼女は別の柱の影に隠れると、狩の続きに集中した。

## 十一章 石人の亡霊

白城が石人世界の北の端にあるならば、黄城はその逆、南の端にある。城の南には湖に沈んだ深い森があり、この森から石人とは異なる人々の暮らす土地が始まっているのだ。広大な森の向こうには巨大な月が半身を覗かせ、周りを囲う星々の気配を飲みながら夜空に輝いていた。黄城は中腹から二つの山に分かれた形をしており、その二つを繋ぐ巨大な大橋を持っている。橋を支えるアーチは月の弧に負けないほど大きく、夜の遠景が最も美しい城でもあった。

黄城を取り巻く環境は、その美しい城の姿から想像もできないほどに厳しい。南から吹く風は、石人には強すぎる魔法の気配を運んできた。黄城に住む石人達は、南風が吹くと魔除けの印を柱に描き、風除けの帆をはる。さらに南の湖に沈む森からは、風だけでなく、青白い肌をした人々が小船に乗ってやってくることもある。石人は彼らを青鬼人と呼んで嫌っていた。彼らはいつも飢えていて、隙あらば石人をさらい、代わりに食料を要求したり、我慢が出来なければそのままさらった石人を食べてしまったりする。時には大勢で黄城に押し寄せることもあった。そのために黄城の兵士達は、石人世界では珍しく、戦の仕方を心得ている。

レイゼルトは荒れ地の丘から、この黄城の姿を望んでいた。

すぐ隣には、青紫の毛皮に銅色の翼をたたんだアニュディの姿がある。黄緑の城から飛び立ってから、彼女は石人世界を遠回りに縦断する形でここまでやって来た。長い距離を長期間飛び続けるのは、体の大きい彼女には向いていない。体力には恵まれているとはいえ、さすがに疲労が溜まってきている。城の目前で限界を感じ、ひとまずの休憩を取るために降り立ったが、再び飛び立つほどの力はなかなか戻ってこなかった。彼女は前足を体の下にたたみ、寒風に毛並みをさらしながら眠ろうとしていた。

——彼女は休ませておこう。それに、ここからは一人で行く方がいい。

レイゼルトは考えた末にそう決める。近くの木から長い枝を折り、先を地面に引きずりながら黄城へ向かって歩き始めた。引きずった枝の先で、アニュディのために魔法の道しるべを描きながら。これならば、彼女も黄城の近くまで一人で行けるはずだ。その後は黄城の石人が彼女を助けてくれるだろう。彼女は夢うつつで、レイゼルトが側を離れたのにも気づかなかった。

夜が深まった頃、レイゼルトは黄城の門の側にたどり着く。門の屋根には吹流しが掲げられ、東風になびいていた。近くの岩場に身を隠して様子を伺うと、城門には数人の黄色いマントを羽織った兵士の姿がある。兵士達の武装は他の城の兵士よりも重い。黄城の兵士達は、魔物を追いつ追はれつと青鬼人達と戦う者として、武装も日頃の訓練も大きく異なっている。ああして鎧で体を覆う武装の重い兵士は、青鬼人向けだろう。

レイゼルトは深く息を吸う。事は一息に運ばなくてはならない。

最初に異変に気付いたのは、門の正面にいた兵士だ。風に乗って、細かい砂粒が顔に当たってきたのだ。仲間を振り返った兵士の目に、同僚が、身に付けている黄色いマントごと、細かな粒になって散っていくさまが映る。見る者も、砂に変わる者も、まるで夢の中の出来事のように、ただ眺めることしかできない。兵士の姿が風に掻き消えると、残った兵士達は互いに顔を見合わせた。消えた兵士が立っていた場所に駆け寄って、見えなくなった仲間を探そうと腕で宙をかく

者もいる。

レイゼルトは眉間に力を入れて目を閉じ、木の枝の杖に意識を集中させる。風に乗って細かな砂が杖の先に集まってくる。彼はそのまま杖を勢いよく振った。

絶叫が響いた。彼らは目の前の仲間の姿が崩れていくのを見、そして自分の体も同じようになっていくのを見た。地面が彼らの体を飲み込むように、足元から砂に沈む。

レイゼルトはその悲鳴とともに、隠れていた岩陰から飛び出した。彼の放った魔法が、黄城の門を一息に吹き飛ばす。門を走り抜けると同時に、門にいた兵士達は全て砂粒になっていた。レイゼルトの走り去った後を魔法の風が追う。風は砂を吹き上げ、空高く舞い上げていった。

城門の大音響と絶叫を聞きつけた城内の兵士達が、次々と姿を現してくる。彼らは、古風な衣装に身を包んだ少年を認める。

「何者だ！ 生まれ！」

レイゼルトは制止を無視し、通路の先から来る兵士達も砂に変えた。そして脇の通路から現れた兵士達に、その砂をたたきつける。兵士達は眼を押さえて怯む。その隙に城門から続く建物を抜けると、黄城の裾野に広がる草地に出た。側に水路がある。水の流れを目で辿っていくと、運搬用の昇降塔が林の向こうに長い影をつくっている。

——登るのに時間がかかるな。

レイゼルトは自分の背後に、巨大な火の壁を作り出す。これで暫くは追って来られないはずだ。後で良い目印にもなるだろう。彼は水路の棧橋にあった小舟に飛び乗る。そして魔法の言葉で編み上げた帆を、舟に張った。

「戻れ！」

杖をかざして一声かけると、砂を含んだ風が舞い降りてきて強風が変わる。小舟は風に乗れ、昇降塔めがけて水路を滑っていく。レイゼルトは後ろを振り返る。例の城門から水の波紋が広がるように、城壁に沿って明かりが灯されていくところだった。行く手の黄城を見上げると、城門から広がる明かりに異変を知り、そこでもまた明かりが増えていっている。しかし城内の兵士達に何が起こったのか詳しく伝わるまで、まだ少し時間があるはずだ。

——黄王が動くまでに、中層にはたどり着かねば。

七百年前、戦場で多くの石人を砂に変えたレイゼルトでも、石人の城で同じことをするのがどれほど難しいか、知っている。そもそも石人であれば、敵の城に入ろうなどとは考えもしない。王が城の力を用いれば、侵入者側にはまず勝ち目がないからだ。たとえ禁呪をもってしても、城の力の前では無力だろう。それほどまでに城の力は絶対的だ。

小舟が昇降塔まで達すると、レイゼルトは身を伏せ、帆と風の向きを変える。舟は帆いっぱい風を受け、塔の壁を垂直に滑走する。天辺までたどり着くと、舟は焦げ臭い煙を上げながら勢い余って宙にすっ飛び、石畳の上に落ちた。魔法の帆も、たくさんの言葉を飛び散らせて粉々に消えた。砂を含んだ風は小さな竜巻になって、空に昇っていく。

レイゼルトは城を見上げる。ようやく、下層の上部までたどり着いたところだった。崖に掘り込まれた館が目の前にそそり立っている。この館を登れば中層だ。館には、窓や柱廊から眩いばかりに明りが漏れている場所と、ほとんど明かりの灯っていない場所がある。明かりのない場

所は、うち捨てられた部分だ。黄城も、今ではすべての館を満たすほど、石人の数は多くなくなっている。彼は建物の暗い部分を覚え、手近の柱から蔦を足掛かりによじ登る。薄暗い二階の柱廊の手すりに手をかけて体を持ち上げると、奥から響く足音を聞きつけた。「気をつけろ」という掛け声も聞こえる。どうやら彼が下層の守りを突破した知らせは、すでに届いているようだ。

レイゼルトは魔法で足音を殺し、周りの暗闇を切り取って身にまとうと、階段を駆け上り始めた。どちらもごく簡単な魔法だったが、追っ手の兵士達は階下の通路を気づかずに通り過ぎて行った。子どもの悪戯みたいな魔法が効いて、レイゼルトはむしろ不安を感じる。しかしいくら進んでも、もう兵士達の追って来る気配はない。

暗闇がざわめいた。

レイゼルトは立ち止まって意識を集中する。どこか遠くから力が流れ込み、近づいてくるのを感じる。城の力だ。黄王が侵入者を探し出し、捕えようとしているに違いない。兵士達の姿が消えたのも、黄王の操る城の力の巻き添えを避けたからかもしれない。

——だったら、こちらもやりやすい。

レイゼルトは杖を振りかざす。その先から真っ赤な炎が水のように溢れ出し、彼の姿を丸呑みにして廊下に満ちる。あふれ出した炎は窓から噴出し、その一部が建物の壁を舐めながら這い上がる。

中層に広がる草地の斜面では、黄王が騎士達を引き連れて、侵入者を待ち受けていた。魔法使いを捕えるなら、広い場所に囲い込んで追い詰めていくものだ。黄王は自身でも青鬼人との戦いに赴く武人として知られた壮年の男で、魔法だけでなく剣の名手でもあった。彼は北西の城門に異常があったとの知らせを受け、最初は家来にその対処を任せていた。ところが次々に明らかになっていくとんでもない状況に、とうとう城の力を用いて敵の姿を見極め、騎士達を集めて中層に降りてきたのだ。斜面の下には長城があり、侵入者がそのまま建物の階段を上がっていけば辿り着くはずの場所だ。

黄王は城の力を通してレイゼルトの魔力に気付き、相手がただの魔法使いではないことを実感していた。彼は再びまぶたを閉じ、自分の手を逃れた侵入者を探すため、地面の下を流れる城の力と自分の意識を重ねる。侵入者の気配は炎の熱に溶けるように消えてしまったが、しょせん一時的な目くらましに過ぎない。城にいる限り、敵は必ず捉えられる。

「陛下、長城に魔法の火が」

騎士の声に、黄王は瞳を開ける。長城の一角が、炎を窓から噴出している。そのうちに、黄王は再び侵入者の気配を見出した。今度は肉眼でも確認できる場所に相手はいる。王は炎の明かりの中に、人影を認めた。人影はまっすぐこちらに向かって走ってくる。まるでこちらからの攻撃など考えていないかのように、まったくの無防備で。

「それがお前の姿か！」

黄王は低い声で怒鳴り、斜面の上から侵入者を見下ろす。相手はすぐそこまで来ていた。明かりを掲げた騎士達が敵を取り囲み、王を守ろうと間に立った。敵はどう見ても子どもだ。しかし少年であること、赤い髪を持つこと、そして右手がないことに、黄王は最も望ましくない名を思い浮かべる。

「城門の兵達が砂にされたと聞いた。私は何かの間違いかと考えた。だがもし真実であるならば、そのような術が使えるのは誰かとも考えていた」

「ならば、あなたは私の名前を知っているはず」

レイゼルトは叫び返す。まさか王の方から現れるとは思ってもいなかった。騎士達を引き連れてきたことも、むしろ彼には好都合だ。斜面の上には中層の町並みが並んでおり、そこからここを見ている者達もいるだろう。

「かつてレイゼルトという者が、砂の魔法を用いた」

黄王は厳しい顔をレイゼルトに向けた。

「もしお前が真にレイゼルトであるならば、人の道を踏み外しただけでは飽き足らず、あの世への道も見失ったというのか。お前をここに遣わしたのは何だ。まだ同胞を殺し足りぬのか」

黄王の言葉に、レイゼルトは湧き上がった怒りで王を一瞬睨みつけた。それでもすぐにその怒りをおさめる。

「足らぬのは確か」

レイゼルトは口の中で呟く。王に聞こえたかどうかは分からないし、聞かせる気もなかった。彼は声を張り上げる。

「聞け！ 私は思うものを砂にする。それは時経た今でも変わらない！」

その一言で、レイゼルトの左側に立つ騎士達が砂になって崩れて行く。

「そして一度終わった命が、この世で再び目覚める悪夢を知るがいい！」

レイゼルトは王に向かって一步踏み出す。その右側で、やはり騎士達が砂になる。王の側を守っていた騎士達が、剣を抜いてレイゼルトに向かってきた。しかし禁呪はあまりに強く、彼らの振りかざした剣は砂とともに空しく地面に落ちる。

王の側には、もう王衛一人しか残っていなかった。ところが王衛の引き抜いた剣は、守護の剣ではない。黄城では守護の剣は過去に失われていた。そのため黄城の王衛は、いわば形骸化した役職に過ぎない。レイゼルトは王の前に立ちはだかった王衛へ視線を向ける。

「.....守護の剣に従う者は、我々の世界に近づく。守護の剣がなければ、お前にとって私は影だ。影を斬ることはできない」

王衛の背後で、王が城の力にすべての意識を集中させるのが見えた。今度はレイゼルトが地面に崩れる番だった。彼はかろうじて両膝を付き、体を支える。目に見えない力が彼を捉え、草地の上に押し潰そうとしていた。王衛が彼に近づこうとした刹那、レイゼルトは杖を黄王に向かって投げつける。鋭く飛んだ杖は、それを打ち落とそうとした王衛を砂に変え、無防備となっていた王の額に当たる。王の体は微塵の砂になって弾けた。城の力は操り手を失い、あっという間に立ち消える。

城の力から解放されたレイゼルトは、のろのろと体を起した。まだ終わってはいない。

彼は左腕を高く上げ、空を掴んで握りこむ。砂含みの竜巻が夜空から舞い降り、草地で一反の疾風に変わった。風は斜面を駆け下りる。新たな砂を巻き上げて白く煙る砂嵐に姿を変えると、北の空へ去った。レイゼルトはそれを見届け、長城に向き直る。

長城からの音は届かない。人の持つ明かりだけが忙しく行き交っている。まだたくさん兵士

がいるはずだが、誰一人としてここまでやって来る者はいない。この斜面で何が起こったか、見た者はすべて知ってしまった。あそこは混乱のるつぼと化しているだろう。黄王も、自らレイゼルトの前に姿を現さなければ、砂にならずにすんでいた。

レイゼルトは荒い息を繰り返し、ぼんやりと建物の明かりを見つめる。緊張の糸は切れ、頭の中は空白になっていた。力は使い果たした。紫城にとどめをさし、黄城の力に抗い禁呪を用いたのだ。夜風が弱った体から容赦なく体温を奪う。寒さと疲労に歯が鳴り始めて、ようやく思考が戻ってくる。

——違う。寒さだけじゃない。

それに気づいた直後、肌があわ立った。彼は無意識のうちに、気配を感じていた。それは黄王が消えた直後から、彼に近づき始めていなのだ。あの気配はいつも無意識の向こうからやってくる。

彼は心の底から沸々と恐怖がわき上がるのを感じ、辺りに視線をめぐらせる。その人影は近くの木立の傍に、ぽつんと佇んでいた。人影は月明かりを吸って淡く白い靄に包まれ、風にあおられて揺らめき、容貌も定かでない。しかし赤い色が頭の辺りをたぎるように舞っている。

——やはり禁呪の力を追ってきた。

レイゼルトは自分の足元を見回す。騎士の持っていたらしい大弓が目に入った。彼はそっとそれを引き寄せる。あれだけ近くにいるのに、人影はレイゼルトの位置をはっきりつかむことが出来ないらしい。よろめきながらじわじわ移動している姿は、夜風に弄ばれているだけにも見える。

引き寄せた弓は握りの部分に小楯が付いていた。これを地面に置いて弓の上から片足をかけると、安定しそうだ。レイゼルトは人影の位置を確かめると、魔法で弓を湾曲させ、緩んだ弦を軸に呪文の帆を立てる。新たな魔法の風を引き起こし、帆にたたき付けながら、もう片方の足で地面を蹴った。即席の草ぞりは勢いよく斜面を滑走する。城門で燃やした火の壁が、斜面から見える空の下端をわずかに赤く染めていた。レイゼルトはそちら目指してそりを走らせ、草地から飛び出す。眼下は長城の壁が下層の草地まで垂直に落ち込んでいる。

このままもう少し、空を飛んで逃げるしかない。レイゼルトは姿を変じる。魔法の言葉とともに弓は炎に包まれ、彼の姿も火の中に溶け消えた。より強くなった風に帆は膨らみ、燃える弓を連れて天高く舞い上がる。

一人残された白い影は、風によるめきながらレイゼルトの魔法を見送った。影は腕を伸ばす。掌から小さな赤い炎の粒が立ち昇り、レイゼルトが去った方向へ飛び立っていく。白い影は、地面に吸い込まれるようにして消え去った。

「ここにいた方が情報が入りやすいとはいえ、暇すぎてどうしようもないな」

買い物から宿の部屋へ戻ってきたグルザリオが、溜息混じりに呟いた。キゲイはテーブルについて、薄紙の上の地図へ細かな書き込みを加えていたところだ。ブレイヤールが黄緑の国の兵士らとともに白城へ戻ってから、十日近くが経っている。レイゼルトの痕跡を探るのが黄緑の兵士らの役目だったようだが、彼らが何の手がかりもつかめないまま黄緑の城に帰還したのは五日

前だ。ブレイヤールは彼らと一緒に帰ってこなかった。

「ほう。前より大分あちこち細かくなったなあ」

グルザリオはキゲイの地図を覗き込んで、気のない褒め方をする。キゲイはむっとして、視線をさえぎるように地図の上に身を乗り出し、森の描き込みに集中した。そこはキゲイの里がある山間部の森だ。

この地図は、ブレイヤールに頼まれて書きはじめたものだった。報告会から帰ってきた後、ブレイヤールがすぐにアークラントの地図を書いて欲しいと、とんでもない要求をキゲイにしてきたのだ。キゲイは困って断った。地図など今までうまく書けたためしがない。それでもブレイヤールが諦めなかったので、しぶしぶ書いたものだった。

キゲイの里には、里長の家にアークラントの立派な地図が飾ってある。キゲイは小さい頃からその地図を見飽きるくらい見ていたし、ディクレス様とともに大空白平原へ行くときも、里長はこの地図の前に皆を集めて行程を示して見せた。キゲイはそれを思い出しながら、自信の無い線でどうにかこうにか薄紙の上に再現してみた。その紙は銀の鏡の模様が書いてあったもので、裏返しての再利用だ。

とにかく大雑把過ぎる地図だった。もっともアークラントは、自然の地形によって国境がはっきりした、比較的書きやすい国ではある。西から南を通過して東まで、馬蹄型のオロ山脈に包まれるようにあり、北は高い崖を隔ててエカ帝国やハイディーン王国のある丘陵地帯と森が広がっている。二国が高原にあると言うよりも、アークラントの土地が低い位置にあった。アークラント平原が「巨人の足跡」と呼ばれる由縁だ。またオロ山脈から流れるメデン川は、アークラント領内を縦断して北へ流れ出ており、その先は高原を深くえぐる谷となってエカとハイディーンの間境になっている。アークラントは切り立った崖の下にあり、メデン川も崖の近くからは急流となっていた。地形的には、エカもハイディーンも、アークラントへの進入は難しい。

書き上げてみた地図は、キゲイ自身も驚くほどみすぼらしいものだった。国境は大体あっていると思うのだが、国内の地形はうろ覚えでほとんど真っ白だ。しかしブレイヤールはこの地図を真剣に眺め、それから白城へと発っていった。後悔の念で一杯だったキゲイは、その後も思い出してはこの地図に書き込みを加え続け、なぜブレイヤールがアークラント国内にまで興味を持ったのか、不思議に感じていた。

「石人の世界には地図がないからな」

グルザリオはテーブルに手をつけて、キゲイの作業の様子を見守る。絵は下手だと思っているが、地図自体は物珍しがっているようだった。

「城を繋ぐ道が一本ありゃ、他はどうだっていいんだ。他はろくに人の住めない、危険な場所しかないんだから」

「本当に石人は、城と神殿ってところ以外にはどこにも住んでないの？」

キゲイは顔を上げて尋ねる。

「境界石付近は、分からん。魔物の影も薄いし魔法の風も弱いから、危険は少ない方だ。土地は貧しいがな。空白平原に人間界のはみ出し者が集まったみたいに、石人世界のはみ出し者も、いるかもしれん。黄緑の城もな、先の女王様がいなくなってから、そういう連中がどこからともな



く悪さをしに来ることがあるそうだ。ついこの間も、一人暮らしをしていた若い調香士が姿を消したらしい。人さらいにあったんじゃないかと」

それからグルザリオは声を少し落とした。

「トエトリア様が成人されて王座に就く日を、この城の住人は心待ちにしている。王が王座に戻れば、連中も悪さをしにくくなるからな。まだまだ先の話だが」

石人にとっても、王は国民を守ってくれる頼もしい人らしい。キゲイは白城の王が七百年前に殺されて、国民が皆逃げ出した話を思い出す。

「じゃあ、王子様が王様になったら、白城にも国民が住めるようになる？」

「安全は確保されるだろうな。んでも、滅びたまま七百年経ってるんだぞ。月日が流れるうちに、城の構造を熟知していた家来もいなくなり、今じゃ即位式の間がどこにあるかも分からん。うちの王子がその気になっても、即位式の間が見つからないうちは、一生王子のままだな。即位の間にある水盤に姿を映さないと、城の方が王を認めない」

グルザリオはテーブルから離れて、買って来た焼き菓子の包みを荷物から取り出した。

「景気の悪い話はやめだ。で、お前も来るだろ？」

彼は包みを幅広の袖の中に落とし込みながら、キゲイに尋ねる。キゲイは頷いて筆を置き、紙を内ポケットにつっこんだ。

この数日、二人は近所の小さな診療所に毎日顔を出していた。黄緑の城に行く途中、湖の中から突然現われたあの白い女の子に会いに行くためだ。彼女はいまだに親も身内も見つからず、自分の名前も知らず、見舞う人もいないまま病室で過ごしていた。

キゲイにとっても、宿にばかりいると気がめいる。かといって石人だらけの町を、いつ人間だとばれるか、ビクビクしながら歩きたくもない。小さな診療所の庭から眼下の町並みを見物する方が、ずっと気楽だった。

診療所は町外れの路地に入って、石段を登った先にある。路地の両側には間口の大きい建物が並んでいるが、それはすべて石人の家だ。石人はこの大きな建物に、数家族が集まって暮らしているらしい。日中、大人達は仕事、子どもは学校へ行き、留守番の者も建物の裏手にある中庭で生活する場合が多いということで、路地は静かで人通りはほとんどなかった。

キゲイは道の両側に迫る石造りの建物を眺める。建物の壁面を飾る柱には蔦や葉が彫刻され、花や鳥だけが木彫りで後から接着されていた。何度通っても、路地にはたくさんの秘密が隠されている気がする。グルザリオが言うには、複雑な構造の石人の城で自分の位置を確認するには、建物の窓や通路の装飾が目印になるらしい。石人の城には、こういった目印が色々刻まれているとのことだった。白城でもブレイヤール達がある程度迷わずに歩けるのは、この印のためだ。もっとも大事な場所に通じる目印は暗号のようになっており、老朽化の激しい白城では目印そのものが壊れたりして、文字通り迷宮になってしまった場所もあるというが。

診療所では、あの白い女の子が二人を待っていた。ぶかぶかした毛の肩掛けを着せられて、ぼうっとうつ向いている。生気がないというよりは、心がここにはないという感じだ。膨れっ面をした若い看護人が、女の子の手を引いてグルザリオとキゲイの元へずんずん詰め寄って来る。

「機嫌悪いな」

グルザリオが看護人の表情にひるむと、彼女はここぞとばかりに訴える。

「この子の身元がまだ分からないんです。それで近々、古都へこの子に移しては、という話が出ているんですよ。確かに神殿の側なら、この子にもっといい治療が出来ますけど、それじゃ親探しが遠のいてしまうし。ブレイヤール様が引き取ってくださったらいいんだわ。白城ならこと近いですもん。それに白城は、変身後遺症の療養地としても有名だったんですよね」

「七百年前はな。今は無理だ。とても病人を引き受けられる場所じゃない」

「……ですよ。まったく、この兵士さん達が頼りないのがいけないんだわ。うちのお姉ちゃんの情報も、まだ全然分からないって」

「心配だろう」

「お香が全部灰になってたって……。仕事を投げ出してどこかに行っちゃう人じゃないのに。そうだっ！ これもブレイヤール様に見立てていただけたら！」

「気持ちは分かるが、白城も王子も、何でも屋じゃないんだから」

「……すみません」

看護人はぺこりと頭を下げて、女の子の手をグルザリオの方へ預ける。彼女が膨れっ面のまま立ち去ると、キゲイはグルザリオのひじを引っ張った。

「あの人、何を怒ってたの？」

グルザリオは中庭へ向かいながら簡単に答える。

「この子はもうじき、治療のために神殿のある古都に行くらしい」

「いいことみただけど」

「俺はどっちがいいのか分からんが、彼女ははっきりしてるようだな」

中庭へ出たキゲイは診療所の平屋根へ伸びる階段を上り、グルザリオは適当な場所で女の子を自由に歩かせてやる。医者が往診に出ているので、この時間は診療所内の人影が薄かった。

キゲイが平屋根の上をゆっくりと歩くと、庭に落ちる彼の影も動く。女の子はその影を追いかけて、そろそろと歩く。不思議なことに、この女の子はキゲイの姿よりも影の方を気にしているのだ。動くものはどれも、先に影の方を見ようとする。

キゲイが立ち止まって初めて、女の子はこちらを見上げた。きょとんとした顔つきで、大きな目をくりくりさせている。そのうち太陽が目に入ったのか、彼女はひゅっとまぶたを細めた。丸坊主だった頭には、蜘蛛の糸のような細い髪が生え始めている。髪色は毛が細すぎて、よく分からない。髪は風の中でふわふわと浮き、日の光を透かしてきらきらしている。彼女の顔に表情はほとんどなく、かといって赤ん坊のように幼稚な様子もない。仕草がぎこちない所は小さな子みたいだが、それは単に体を動かし慣れていないせいらしい。

湖で魚として暮らし、自分が人だったことを忘れていたというのは、大変だった。医者達は彼女に鏡を見せて自分の姿を覚えさせたり、言葉を教えたりと苦心しているようだ。女の子は鏡を不思議そうに覗くだけですぐに興味を失うし、言葉についても石人の鳴き声くらいにしか認識していないらしかった。

庭から診療所の外へ目を移すと、眼下に町の屋根が幾重にも重なって見える。それぞれの家の煙突からは、夕食の支度をする煙が立ち昇り、照り返しで赤く染まっている。建物の隙間から垣

間見える通りはすっかり夕闇に沈んで、行き交う石人達の様々な髪色も見分けがつきにくい。

通りから路地に入るひとつの人影が目についた。人影は疲れた足取りで角を曲がって、見えなくなる。けれども、その背格好と歩き方にキゲイは見覚えがあった。すぐに振り返って、屋根から庭へ駆け下りる。女の子も動いた彼の影に反応して、ついてきた。

「ねえ、グルザリオ。王様が帰ってきたみたい。今、向こうの道からこっち側に歩いてたよ。宿に戻るんじゃないかな」

「そうか。じゃ、ちょっと早いけど、帰ろうか。ほら、これ皆と一緒に食べな」

グルザリオは持ってきた菓子の袋を、女の子に手渡す。いつものことなので、女の子は慣れた手つきで受け取る。言葉が通じているかどうかは怪しいが、この中においしいものが入っていると彼女は知っていた。

ブレイヤールは二人より先に宿へ戻って、ベッドで寝ていた。頬がこけるくらいに痩せている。寝顔から、体力的にも心の根っこからも消耗しきっているように見える。

白城で何があったのか。話を聞こうと思って診療所からすぐに帰ってきたのに、肩透かしを食ってしまった。寝ているのを邪魔しないよう、キゲイとグルザリオは部屋から出て、行き場もないので宿の食堂にたむろする。

「王様、大丈夫なのかな」

レイゼルトの問題で白城に戻っていただけに、キゲイは心配でならない。キゲイが知る限り、あの少年はとにかく容赦をしない性格だ。白城に再び現われて、石人達をひどい目に合わせるくらい、十分にあり得る。

「白城で何かあったら、もっと早くに帰ってきたはずだ」

グルザリオはきっぱりと言い切った。彼は眉間に深い縦皺を寄せたまま黙りこむ。そこで邪魔が入った。宿の女主人が、暇そうにしている二人に、夕飯の鞘豆をむく手伝いを頼んだからだ。グルザリオが何か言う前に、女主人は豆を一袋テーブルにどさっと置いて厨房に去った。二人は仕方なく豆をむく。手伝いをすると、夕食を少し奮発してくれるのは確かだった。

しばらくして、グルザリオは口を開く。

「石人は、人間の世界じゃ長く持たない」

「へ？」

話が唐突に飛んだ気がして、キゲイはきょとんとした。グルザリオは豆をむく手を休めることなく、横目でちらりとキゲイを見下ろす。

「土地の魔力が薄いと、石人は干物みたいに魂から乾いていくそうさ。人間の世界も場所によっては土地の魔力が強い場所もあるが、たいがいは薄いからな。石人にとって魔法は水みたいなもんだ。生きていくのに絶対必要だが、ありすぎると溺れ死ぬ。なさすぎると干からびる」

「もしかして、王様は人間の世界へ行ったってこと？ もしかしてアークラ……」

みなまで言う前に、キゲイはグルザリオに椅子ごと蹴られた。

「手が止まってるぞ」

グルザリオは白々しくキゲイを叱り飛ばす。キゲイは倒れた椅子を起こし、座りなおした。石人の町で人間世界の話をするなど、論外だ。自分では気づかなかったが、声もつい大きくなって

いたようだ。「言の葉」で話しているのを聞かれるのもまずかったのだろう。それにしても、もう少し手加減してくれてもよさそうなものを。キゲイは隣のグルザリオに恨めしい視線を投げながら、麻袋に手を突っ込み新たな鞆豆をひつつかむ。

ブレイヤールが寝起きのぼんやりした目で食堂に現われたとき、二人は芋の芽をナイフで削っているところだった。

「具合はどうですか」

グルザリオが尋ねると、ブレイヤールは二人の向かい側に座って、自分でも芋を手を取った。「石人達は白城の例の現場で、レイゼルトの魔力を思い知ったみたい。今頃神殿では、レイゼルトを探して捕らえる手段を、全力で協議している頃だろう」

グルザリオは単純にブレイヤールの体調を気遣っただけだったのだが、ブレイヤールは勘違いしたようだ。彼は声を潜めた。

「レイゼルトが黄の城を襲ったらしい。帰りがけに黄緑の城に寄って、その話を聞いた」

驚くグルザリオとキゲイを前に、ブレイヤールは懐から小刀を取り出して、芋の芽をくり貫く。

「あいつ、偽物じゃなかったってことですか！ だったらあなたも、ここでこんなことしてる場合じゃないでしょう！」

グルザリオは押し殺した声をあげ、身を乗り出す。ブレイヤールは座れと鋭く制して、周りに目をやる。幸い食堂は適度に人がいて騒がしい。ちらりところらに目をやっただけで、特に興味を示す人もいなかった。グルザリオはのろのろと姿勢を正す。

「決めるのは全て神殿だ。七百年前、レイゼルトを倒したのはこの黄緑の国の王子だった。ところが今の時代は、彼と直接対峙して打ち勝つだけの力を持った石人がいない。僕も指示があるまでは、白城かここかにいなくてはならない」

そう言って、ブレイヤールは深く息をついた。

「人間達の問題どころではなくなってしまった。レイゼルトを止めなければ、石人は滅びてしまう」

「どうして、レイゼルトが石人を滅ぼそうとするの？ 変だよ。石人同士なのに」

キゲイは尋ねた。しかし尋ねてすぐ、アークラントのことに気づく。そういえば人間も、人間同士で戦争をして、ただ勝つだけでなく相手を滅ぼそうとまでしている。ことにハイディーンは、征服した国の人々を皆殺しにするくらい徹底しているというではないか。アークラントはまさにその危機に直面している。

ブレイヤールはキゲイをまっすぐ見つめた。キゲイは自分のした質問に、ひとり落ち込んだ気分だったが、疲れ切った様子だったブレイヤールの瞳は、パッと明るくなった。

「そうだ。おかしい。本当に滅ぼそうと考えているなら、とうの昔に白城も黄緑の城も禁呪に襲われていたはずだ。あいつ、相当ひねくれては見えただけ、石人全てを滅ぼしそうな奴には見えなかった。でも——」

ブレイヤールは芽を取った芋をグルザリオの方へ投げ、首を振る。

「彼の本心は誰にも分かっていない。禁呪に襲われた石人がいるのも事実だ。僕らは彼を追うべ

きか、それとも別にやるべきことがあるのか……。本当に、人間達に対する用意を後回しにしてもいいのか」

ブレイヤールは小刀を拭いて懐におさめる。

「アークラントの状況は油断できない。ディクレス殿はまだ空白平原におられる」

「ディクレス様と会ったの？」

キゲイは驚いて聞き返したが、ブレイヤールは首を振っただけだった。ただ、ブレイヤールが何らかの手段で、アークラントの様子やディクレス達の居場所を確かめに行ったらしいことだけは、彼にもなんとなく想像できた。しかしアークラントと白城を往復するとなると、ブレイヤールが留守にしていた日数だけではとても足りない。それこそ、魔法で空でも飛んで行かなければ無理だ。

キゲイはそれも聞いてみようと思ったが、具合の悪いことに宿の女主人が再び現われる。彼女はブレイヤールを見つけて驚き、丁寧な口調で話しかける。ブレイヤールの顔つきが深刻になる。彼は立ち上がった。つられてグルザリオが立ち、彼はきょとんとしたままのキゲイの襟首を引っ張り上げる。キゲイも半分引きずられるように立ち、二人の後に続いて宿の表に出る。

ブレイヤールはすぐに二人を振り返った。そして、グルザリオとキゲイの顔を見比べながら尋ねる。

「おばさんが言ってたけど、二人とも、夕方に診療所へ行ったんだって？」

二人が頷くと、ブレイヤールは続ける。

「帰るとき、ちゃんと看護の人に女の子を返した？」

キゲイはグルザリオを見上げる。グルザリオは首を振った。

「中庭のベンチに座らせましたが、診療所を出るとき、人に声はかけました。王子が帰ってくる姿が見えたので、こちらも急いで宿に戻った方がいいと思ったんで」

「何があったの」

キゲイは言った。辺りは宿の窓の明かりだけが三人を照らし出す夕闇だ。

「彼女の姿がどこにもないらしい」

「どうしよう！ 勝手にどこかに歩いて行ったんだ……」

キゲイが慌てると、ブレイヤールはまあまあと手を上げて落ち着かせようとする。

「僕らも一緒に探そう。足がまだ弱いから、診療所から遠くには行けないはずだ。あの辺りは道も複雑だし、大通りへも簡単には出られないと思う。……困ったな。かえって見つけづらいかもしれない」

ブレイヤールがみなまで言う前に、グルザリオは腰にさした杖の先に明かりを灯して、ものすごい勢いで走り去ってしまった。ブレイヤールは横目でそれを見送りつつ、宿の入口に何本か立てかけてある棒付きランプに手を伸ばす。それは濁った石英が先についた棒切れで、ブレイヤールが棒の底についた金属の先で火花を散らすと、石の中に魔法の灯がついた。彼はそれを掲げて持つ。魔法の杖なしで夜に街中を歩くときは、この共用ランプを使うらしい。

夕方に通った坂道の石段を、二人で登って行く。日が沈んでから、辺りは急に冷え込んでいた。両脇に建ち並ぶ家の住民達は奥の部屋に引っ込んでいるらしく、人の話し声も随分遠く聞こ

える。別れ道に出るたびに二人は辺りを見回して、あの女の子の姿を探した。誰も女の子の名前を知らないから、名前を呼んで探すのも難しかった。ブレイヤールは時々「おーい」と道の向こうに呼びかけたりするが、返事はない。同じく女の子を捜す診療所の人と一度すれ違った以外、道に人影はなかった。たまにどこかから、足音が近づいて遠くなっていくだけだ。

石で覆われた狭い道の空を塞ぐように、両側に背の高い石の建物が迫っている。建物の窓はどれも暗く、一度も開いたことのないような古びた扉の前に、箒や手桶などのガラクタが積み上げてあった。時折小さな明かりを灯す間口がひっそりとある。ブレイヤールが徐々に入り込んでいった路地は、キゲイにとって汚くて狭苦しく、あまり気持ちの良いところではなかった。周りが静かなだけに、二人の靴音がよく響く。時折その足音が増えるような気がしてキゲイは度々振り返ってみたりするのだが、決まって道には誰もいない。石の壁に反響した自分達の足音か、ただの空耳なのか。それとも建物を隔てた向こうの道を、誰かが通り過ぎて行ったのか。

辺りのうらぶれた様子は、タバッサの路地によく似ていた。傭兵に追いかけられたときの嫌な思い出が、自然と脳裏に浮かぶ。キゲイはぎゅっと唇を噛み、その記憶を頭の奥に押し戻そうとする。

ふいに前を歩くブレイヤールが、素早く横に飛びのく。同時に建物の隙間から飛び出してきた黒い影が、避けきれなかったブレイヤールを巻き込んで地面に突っ込んだ。

突然のことに何が起こったのか、キゲイはきょとんと立ちほうける。ブレイヤールの上に馬乗りになった人影に気がつき、息を飲んだところで、彼もまた後ろから伸びてきた手に口を塞がれ、動きも封じられる。

ブレイヤールにぶつかったのはかなり大柄な男のようだった。男はブレイヤールをうつ伏せに押さえつけたまま、地面に転がったランプを拾い上げ、ブレイヤールの顔の近くを照らす。キゲイはどうか身じろぎしてブレイヤールの方を確認した。どうやら激しい体当たりを受けて、目を回しているようだ。男はブレイヤールの首を持ち上げ、揺さぶる。するとキゲイの後ろからもうひとつの人影がすばやく前に出て、ブレイヤールの鼻先で何かを燃やした。火はパッと燃え上がり、すぐに紫煙だけを残して消える。ブレイヤールを押さえつけていた男は、顔を背けてその紫煙を避けた。一方ブレイヤールは息を吹き返したと同時に煙を吸い、またがくりとうな垂れてしまう。キゲイがそれにおののくと、彼もその隙にさるぐつわを噛まされてしまった。

「こいつか」

キゲイを捕まえている男が低い声でささやく。それは石人語ではなく、キゲイにも分かる「言の葉」だった。ブレイヤールを押さえつけていた大男が半身ほど振り返って、「そうだ」と答えた。ランプの明かりで、大男のごつごつした四角い顔と深緑の頭髪が分かる。キゲイを捕らえていた男は、後ろにいたらしい仲間へキゲイを乱暴に押し付ける。そしてブレイヤールの隣にしゃがみこんだ。キゲイはその男の装束に見覚えがあった。石人の装束ではない。タバッサの商人達によく見る服装だ。

「貧相なガキだぜ？ 間違いじゃないだろうな」

その商人風の男は、「言の葉」で緑髪の大男に言う。大男は何か答えたが、低い声はくぐもってよく聞き取れなかった。

「こっちのどうします」

キゲイを押さえ込んでいる男が尋ねる。大男がこちらに顔を向ける。両頬と額に、奇妙な模様が描いてある。

「必要ないが、置いてくのも殺すのも後々面倒だ。連れて行く」

不思議なことに、やり取りは全て「言の葉」だった。それだけに話の内容と「殺す」の言葉をすべて聞き取ってしまったキゲイの頭は、真っ白になる。魂を抜かれたように、抵抗する気にも逃げる気にもなれず、両手両足を縛られて、ブレイヤールが袋に詰められ、自分もまた同じように袋の中に放り込まれるのを、大人しく受け入れるより他はなかった。

袋は汗臭い酸っぱい匂いがして、息苦しい。キゲイは自分の体が持ち上げられ、どこかに運ばれていくのを感じた。人攫い達の足音は、最初は殆どしなかった。枯葉を踏む音がしてはじめて、キゲイは彼らが町の外側に広がる林に入り込んだことを知る。その林も、黄緑の城にあるものだ。その先は城と外界の境となる城壁があるはずだった。キゲイは自分が持ち上げられて、別の男に手渡されるのを感じ、それから暫く後には、地面に引きずられたり、どこかから投げ落とされたりして、死ぬほど痛い思いをする。さるぐつわを噛まされていたおかげで、幸い舌を噛むことはなかった。

投げ落とされた後は再び拾い上げられ、上り坂や下り坂を運ばれているらしかった。真っ暗闇と恐怖一色に塗りつぶされた時間は、いつ終わるとも知れない。袋の中で息苦しきはいよいよ増し、恐怖し続けることにも疲れが出て気が遠くなりかけた頃、最後の衝撃が全身を打ち、キゲイは正気づいた。

袋の口が開けられて、キゲイはようやく胸いっぱい清潔な空気を吸う。木立の影と岩肌、その隙間にわずかに覗く夜空が見えた。投げ出された地面は石ころと土と砂で硬い。隣にはブレイヤールも袋から顔だけ出されて倒れていた。まだ気を失ったままらしい。側に石英のランプも、明かりがついたまま転がっている。その明かりは大分弱くなっている。

人さらい達は、森の中の崖下で休息を取るつもりらしい。焚き火の黒い跡も見えたが、彼らは火は焚かずに火鉢らしき物のまわりに集まっている。近くに彼らの荷物が見えた。四つの人影がうろうろと動き、やがてそのうちのひとつがこちらにやって来る。キゲイは慌てて目を閉じ、死んだふりを決め込む。どうせ逃げられはしないのだから、何をされようと見ないでいた方がましだ。

しかしやって来た人影は、ブレイヤールに用があったらしい。

「後ろ手か？」

「いや、前にしとけ。後ろ手にすると、こっちが世話焼くことになる。この先は自分で歩いてもらうんだからな」

他の仲間とやり取りをした後、ブレイヤールの体を引きずってるらしい音と、ガチンという重い金属音がして、足音は去っていく。

キゲイは薄目を開けてみる。ブレイヤールが上半身を袋から引き出されて仰向けにされており、腹の上で両腕に手枷をされているのが見えた。左頬は体当たりされて転んだときにできたらしい擦り傷で、一面に血がにじんでいる。分かったのはそこまでで、弱くなっていた石英ランプの

明かりが消えると、辺りは暗闇になった。月明かりは崖の影に阻まれて、ここまで差し込んでこない。

人さらい達は火鉢の側に集まって、ひそひそと何かを話している。キゲイは横たわったままのブレイヤールの影に視線を戻して、どうやって起こそうか迷っていた。何か声を上げようにも、さるぐつわを長時間きつく噛みすぎていて、顎が固まってしまっている。とりあえず人さらい達に気づかれないよう、キゲイはゆっくりと芋虫みたいに袋からにじり出ようとした。腰までどうにか出てこれたとき、ブレイヤールのうめき声が聞こえてきた。キゲイの心にパッと希望が芽生える。ブレイヤールが目を覚ましさえすれば、魔法で人さらいをやっつけて逃げることも簡単なはずだ。

「キゲイ、無事？」

やよろれつの回らない、ブレイヤールのひそひそ声が聞こえた。返事をしようにもキゲイはさるぐつわをされている。そこで頭を動かして地面の砂利で小さな物音を立ててみせる。キゲイからはブレイヤールのシルエットが星明りに薄く見えるが、ブレイヤールからはキゲイの姿は崖の影に隠れてほとんど見えないはずだ。

「石人の城で誘拐なんて」

ブレイヤールは呟いて、手枷を確かめるように両腕を少しあげる。それから胸の辺りで手をごそごとやり、キゲイの方へ寝返りを打つ。

「例の物も無事？ 連中に取りられてないか？」

キゲイは頷いた。人さらい達はこちらの持ち物をあらためたりはしなかったから、銀の鏡はまだ懐の隠しにあるはずだ。まさかキゲイのような子どもが、こんな大事なものを持っているなど、彼らは思いもしなかったらしい。

「縛られてるみたいだな。こっちに背中を向けて」

言われるとおり、キゲイは後ろ手に縛られた背中をブレイヤールの方へ向ける。ブレイヤールは手枷で不自由な腕を伸ばし、キゲイの腕に触った。しばらくするとぷつぷつという感覚とともに縄が緩み、腕の痛みが軽くなる。そしてキゲイの手に、何か硬いものが手渡された。キゲイは両腕が離れて、自由に回せるようになったことに気づく。

「刃物だから、慎重に」

ブレイヤールが言った。どうやら懐の小刀をそのまま持っていたようだ。とすると、人さらい達はブレイヤールの持ち物にも興味がなかったらしい。

キゲイは横になった姿勢のまま、膝を曲げて両足を縛る縄を手探りで切った。最後に固く結ばれていたさるぐつわも真っ二つにして、大きく深呼吸する。ずっと食い縛っていたせいか、顎の付け根がギシギシ鳴り、ひどく痛む。

「キゲイ、黄緑の城まで戻ってグルザリオを探して。それで僕を助けに来てほしい」

ブレイヤールの言葉に、キゲイは耳を疑った。キゲイはブレイヤールの体の影に隠れるようにして、相手に向き直る。

「なんで？ 一緒に逃げようよ」

「……できないみたいだ」



力のない囁きが暗闇から返ってくる。

「これは魔法封じの手枷だし、痺れ薬のおかげで、体の自由もまだ戻ってない。一、二、三で立ち上がったら、向こうの茂みまで振り返らずに走れ。あとは僕がおとりになる。キゲイは絶対に捕まるな。君は例の物を持ってるんだ。何かの拍子に連中に奪われるとまずい。これまで奪われなかっただけでも奇跡だよ」

「で、でも、怖いよ。あいつら、僕だけ殺すって言ってたもん……」

体は自由になったはずだが、あのときの人さらい達の言葉を思い出すと、キゲイの体は自然と石のように動かなくなる。

ブレイヤールはそれを知ってか知らずか、しばらく押し黙った。キゲイはブレイヤールの頭越しに恐々うかがう。人さらい達はまだ何か互いに話し合っていて、時々こちらに視線を送っていた。とても隙などない。こちらが動けば、彼らはすぐにすっ飛んでくるはずだ。

「僕は立つぞ」

ふいにブレイヤールがそう言いきった。かと思うと上半身を起こす。人さらい達が声をあげて指をさした。キゲイは震え上がった。無我夢中で立ち上がり、こちらに向かって走ってくる人さらいを目におさめながら、身をひるがえす。

「走れ！ 走れ！」

ブレイヤールが声の限りに叫ぶのが聞こえた。後ろでブレイヤールがどうなったのか、振り返る勇気も余裕もなかった。いつだったか、今と同じように突然、何の覚悟も決まらないまま走らされたことがある。けれども今度の全速力には、間違いなく命がかかっていた。

キゲイは崖の根に沿って転がるように走る。後ろから追っ手の声が聞こえ、それはやがて呪文を唱えるような朗々とした響きに変わる。しかしキゲイの身には何も起こらない。胸の辺りがちりちりするだけだ。そこは銀の鏡と三つ編みのお守りを入れているあたりだ。

ブレイヤールの言った茂みは、真っ暗だった。足を下ろす地面もどうなっているのかよく分からない。キゲイは一瞬怯み、そこではじめて後ろを振り返る。男が一人、こちらに迫ってくる。キゲイは茂みの中へ飛び込んだ。

飛び込んだ先は急な斜面だった。厚く堆積した枯葉の上で足を滑らせ、全身を叩きつけられながら転げ落ちる。足がつくたびにキゲイは何とか走ろうとあがく。暗闇の中で木にぶち当たり、根に足を取られてまた転ぶ。枝が頬をかすめて肌を裂き、キゲイは目を守るために片腕を顔の前に掲げた。追ってくる足音が聞こえるかどうかは、もう問題ではなかった。下り坂で勢いづいた体は、走ろうが転がろうが止まることができない。それでもとうとう真正面から木にぶつかり、跳ね返されて仰向けに倒れる。一瞬気を失ったが、柔らかい腐葉土の上でずり落ちた体を、ぶつかった木がとどめてくれた。

地面に叩きつけられた衝撃の痛みをこらえながら、キゲイは暫く息を潜めた。転がり落ちている最中は、随分騒がしかった気がする。悲鳴もあげたかもしれない。しかし今は静まり返って、内側から突き上げるようにどくどくと鼓動する自分の心臓の音が、耳の奥から響くだけだ。

じっと上を見つめる目に、ようやく張り巡らされた細かな枝の影と、夜空が形を現してくる。星が一面に散らばっている。キゲイは星を数えた。数えるうちに、気持ちが少し落ち着いてくる

。枝のかすった頬にそっと触れると、指がべったりと濡れた。舐めると、血と涙の味がする。怪我をした頬は痛まなかったが、鈍く痺れた感じがある。キゲイは体を起こした。あちこち打ち身だらけのようだが、動けないことはない。キゲイは四つん這いになり、慎重に斜面を下り始める。まだ逃げ切れたとは限らないのだ。

やがて地面の傾斜はゆるくなる。雲が晴れたのか夜空の明るさが増して、樹冠の影が濃くなる。月明かりの帯が枝葉の間から降り、森の地面を小さな島のように浮き上がらせる。辺りの静けさに気づき、キゲイはようやく安堵した。自分はもう完全に一人きりになったらしい。それは安全ではないが、少なくとも追われる心配はなくなったということだ。あとは黄緑の城を探せばいい。

膝の痛みに耐えながら、今度は登りの道を探して歩き出す。見晴らしのいい場所に出て、城の位置を確かめたかった。時折どこかで、地面を蹴る鋭く乾いた音がする。その度にキゲイは足を止め、耳を澄ました。夜行性の小動物が、キゲイに驚いて逃げた音らしい。

幾分か歩いたとき、その音が自分の周りでいくつも上がり、枯葉を蹴立ててすぐ隣を横切って行った。森の奥で狐らしいしなやかな影が、一瞬木々の向こうを過ぎ去る。キゲイも慌てて辺りを見回し、さっと身を伏せて近くの倒木と岩の影に隠れる。耳を澄ますと、何かが柔らかい地面を踏みしだいて歩く音がする。野生の獣にしては、ずいぶんのんびりした歩調だ。かといって、二本足で歩いている感じでもない。キゲイは魔物のことを思い出す。息をつめ、服の上から胸に隠した三つ編みのお守りを触って確かめる。

夜の淡い光の中、四つ足の姿が現われる。ほとんどシルエットでしか分からないその姿は、見たことがないものだ。もたげた頭からは牡鹿のような角が生え、胴は人に似ていたが、毛むくじゃらで背中が丸い。長い腕と短い足を交互に出して進み、立ち止まってはけだるげな動作で低い鼻面を枯葉の中に突っ込む。臭いをかいでいるようだ。

それが魔物なのか、この辺りに棲む獣なのか、キゲイに知るすべはない。その生き物の鼻が鈍かったのか、お守りが効いたのか、ともかくも奇妙な影はキゲイに気がつく様子もなく、のっぴりたりと森の暗闇へ去っていく。

キゲイは安堵する。手足は力の入れようがないほどに震えていた。震えがおさまり、木と岩の狭苦しい隠れ家から出るのに、それからまた随分時間がかかる。

得体の知れない場所を進まなければならない恐怖と体の疲労は、あの生き物を見たために、さらにキゲイの歩みを遅くした。頭は空っぽになり、城に戻って助けを呼ぶという使命だけが、方角を知らせる星として、胸の内ではぽつんと輝いている。

荒々しく削られた岩場がそそり立つ場所で、ようやく森が途切れる。見上げると岩場はあちらこちらが四角く削られて、明らかに人の手が入っている。その向こうに見えたのは、星空ではない。本来の空を圧倒して立つ、灯りをちりばめた巨大な黒い影。黄緑の城だ。

キゲイは、岩場に沿って歩き出す。登れる所を見つけなければならない。宿を出てから随分時間がたったように思うのだが、夜が明ける気配はなかった。それどころか、辺りの闇が再び濃くなっていく。見上げれば、薄い雲が月を飲み込みつつあった。

——どうしよう。城からどんどん離れてる気がする。

岩場を登ろうにも、この暗さでは足場を見つけることさえできない。いい加減歩き疲れてきて、キゲイは立ち止まってしまった。岩場は諦めて、別の方向に道を探した方がいいかも知れない。そう考え、森の方へ向き直る。すると、何か白いものが目の端にちらついた。

キゲイは目をこすって、もう一度森の奥に目を凝らす。暗闇の向こう、木の幹が幾重にも連なる奥に、淡く輝く小さな人影のようなものが見える。

あれがもし妖精ならば、時刻も不確かな真夜中に、あんなふうに光をまとって森の小道を歩いていても不思議ではない。あるいは、幽霊かもしれない。あれも真夜中に現れるものだ。

ゆっくりと森の奥へ歩き去ろうとする人影に、キゲイは不審の目を向ける。どんなに行き先に困っていても、到底あれの後をつける気にはなれなかった。

結局、岩場沿いに来た道を引き返す。息を殺し、白い人影に万が一でも気づかれないよう、足早に、音もなく。ところがそのとき、キゲイの隣で小枝と枯葉が砕ける乾いた音が立つ。間髪入れず、小さな影が目の前に躍り出てきた。内心怖くてたまらなくなっていたキゲイは、腰を抜かして地面に尻餅をつく。

森から飛び出してきた影は、一人の女の子だった。目をまん丸に見開き、尻餅をついたキゲイの前で、構えるように仁王立ちになっている。純白の肌に痩せて目ばかりが大きい彼女は、紛れもない診療所から姿を消したあの子だ。

「なんで……」

キゲイは言葉を詰まらせる。どうやって一人でここまで来たのだろうか。それよりもなぜ、この子は一人でこんな所において、自分とばったり出くわしたのだろうか。そう思った直後、キゲイははっとして森を振り返る。

先程の白い人影が、また見えた。なお悪いことに、今度はこちらに向かって近づいてきている。女の子がキゲイの腕を引っ張った。よく分からないが、逃げるべき状況のようだ。なのにキゲイは立ち上がろうとして足首をひねった。女の子も巻き込んで、地面にばたんと両手をつく。疲れきった体と頭は、もう素早い動きについて行けなくなっていた。

「ああー！」

心底怯えきった悲鳴は、女の子のものだった。キゲイは悪夢を見るように、白い人影を見上げる。人影は目の前に来ても白いままだった。霧の塊のようなそれは、ぼんやりと人の形をしていて、頭の辺りだけが淡い萌黄に色づき、炎のようにさかまいている。人影はとてつもなく長身に伸びたかと思うと、二人の真上へ頭をもたげてくる。

キゲイの手は、無意識のうちにお守りを握り締めていた。しかしキゲイ自身は、お守りよりも銀の鏡の方が頼りになるかもしれないと思っていた。禁呪の方が、目の前のこれをやっつけてくれそうな気がしたのだ。

霧の塊が形を変えて、細長い腕のようなものを伸ばしてくる。その腕はキゲイの頭上を通り過ぎ、女の子に向かう。女の子は立ち上がって走り出す。腕はすぐさま霧の中へ戻り、人影も女の子を追ってゆらゆらと、すべるようにキゲイの目の前を通り過ぎる。

キゲイの手の中で、お守りがパシッと小さな音を立てて弾けた。その音でキゲイは我に返る。焦げ臭い嫌なにおいが立ち昇った。見ると、お守りの三つ編みが途中で千切れて真っ二つになっ

ている。一方の三つ編みだけが灰色に変わっていて、握りこむとはらはらと崩れてしまった。このお守りは、キゲイも知らない間にあの影と戦っていたのだ。

キゲイはお守りの残り半分をしっかりと手に持ち、立ち上がって白い影を追いかけ始める。不思議と全身に力が戻ってきていた。体を石のように固めていた恐怖心も、お守りが振り払ってくれたかのようだ。

白い影自身が、明かりの代わりになった。影の歩いた跡は、ぼんやりと輝く軌跡が暫く残る。影の後姿は、長い衣を引きずる女の人にも見えた。風が吹けばそのまま飛んでいきそうなほどに頼りない輪郭を透かして、影から逃げる女の子の背中がちらつく。

女の子が転ぶと同時に影はその側へ流れ込むようにすべり、再び伸び上がってかがみこむ。霧の腕が伸びて女の子の顔を覆うと、女の子は悲鳴をあげた。

「離せっ！ このお化け！」

キゲイは追いつき、影の背にお守りを突きつける。影は耳を持っていたのか、キゲイの方へ上半身をねじったように見えた。揺らめく頭部がずっとキゲイの顔の側まで近づく。キゲイは眩しさに目をしかめ、お守りを突きつける。

真っ白な相手の顔の中に、深い紫の宝玉が二つ浮かんだ。キゲイはぞっとしたが、すぐにその心を押し殺し、手にしたお守りを振り上げて影の顔を打つ。お守りは煙をたたくように、なんの手ごたえもなく顔の中をすり抜けてしまう。

ところが影は音も無く仰け反った。紫の瞳が消えたかと思うと、キゲイの左腕に焼けるような冷たい痛みが走る。影から伸びたもう一本の腕が、キゲイの左腕に巻きついていて、つかまれている感覚はないのに、すさまじい力でねじり上げられたような痛みだけが、影に覆われた部分から肩まで広がる。その痛みが左肩から心臓に達する前に、キゲイはお守りを無我夢中で影の腕に叩きつける。

今度も手ごたえはなかった。それでも影の腕はするすると引っ込んだ。女の子をつかんでいた腕も、影の中に消える。お守りから火花がはじけ、三つ編みの編み目一つ一つから、小さく鋭い光が漏れた。キゲイはそのお守りを影に突き出す。影はじりじりと下がる。

「消えろ！」

キゲイは叫び、編み目のひとつに指をかけると、思い切り引きほどいた。編み目の光がぱっと夜の森に弾けた。長身の影が足元から溶けて地面にべたりと広がる。水溜りのように平たく伸びると、地面に込まれて段々と薄くなっていく。

キゲイはさらにもう二つの編み目を、水溜りの上でほどいた。再び光が弾け、それを最後に水溜りは完全に消え失せる。お守りから漏れていた光もまた、かすかになくなって消えていった。

どのくらい時間が経ったろうか。辺りが清浄な夜の闇を取り戻したのに、キゲイはようやく気づく。耳の奥ではどきどきと脈が踊っている。前に突き出したままのお守りは、もう光することもなくただの三つ編みに戻っている。キゲイの向かいには、女の子が地べたに座って、短くなった三つ編みをぼかんと見つめていた。

キゲイは息をついた。一番の危険は去った。女の子も見つかったわけだし、あとは城に戻る道を探すだけだ。彼はそう思った。しかし、まだ終わってはいなかったのだ。

影の消えた地面からはっきりと、耳をつく凄まじい叫び声が響いた。声は途切れることなく長く続き、キゲイは耳を押さえて自分も悲鳴をあげる。それと同時に木の葉交じりの強い風が、キゲイの背中を打つ。地の底からの声に答えてか、天からも引きつった絶叫が降ってきた。空を見上げると巨大な翼を広げた鳥のようなものが、今まさにこちらに向けて鉤爪を伸ばすところだった。

それから自分がどうなったのか、キゲイには記憶がない。確かなことといえば、自分はそれなりに立派に、得体の知れない光のような幽霊と戦ったということと、鷲のような鳥にさらわれたが、まだ生きて元気だということだ。でもこの状況では、それはなんの慰めにもならない。

キゲイの耳に、すぐ隣でわんわん泣いている女の子の声は、あまり届いていなかった。目覚めてすぐこの声を聞きつけたときは、骨でも折ったのかと心配したのだ。しかし単に恐怖の名残で泣いているだけらしいと分かると、放っておいた。ある意味、助かったことを喜んで泣いているようなものだ。

辺りの景色は森のままだった。けれども森の様子は、あの晩彷徨った森と似ても似つかない。木々の種類も地面の様子も森の匂いも、全然違う。おまけにくぼ地の影には白い雪が残り、霜が一部の地面を覆っているのだ。

女の子の声が枯れてきた。キゲイは視線を自分の左腕に落とす。袖をまくと、幽霊につかまれた辺りの肌が赤いあざになっている。差し込んできた朝日が腕を照らすと、あざはみるまに小さくなっていき、最後には跡形もなく消えてしまった。なんだか、見てはいけないものを見た気分だ。キゲイはおもむろに袖をなおし、立ち上がって朝日の方向を確かめる。

自分達がいる高台から北には山がそびえ、東西と南は森林しか見えない。さらにその向こうには薄青い山々の稜線が重なっている。月が山向こうに半身をのぞかせ、光に溶けながらうっすらと輪郭を保っていた。

「……なんかさ、やっぱり人間は石人の世界じゃ生きていけないと思うよ。魔物はあるし、あんな変なお化けはあるしさ。耐えられないと思うんだ。こんな世界」

言葉は通じないと分かっているけど、キゲイは女の子に愚痴らずにはいられなかった。女の子はようやく泣くのをやめて、キゲイの方を向いた。その顔には、相変わらず表情というものがほとんど現われていない。さっきまで大泣きしていたのが嘘みたいだ。言葉が通じないこともあわせて、キゲイはどうしてもこの子を不気味に思う気持ちを拭えなかった。だからといって、ここに置いていくわけにも行かない。

キゲイは森の海をもう一度見渡す。思い起こせば、アークラントの険しい山を越えて大空白平原に出たときも、地平の彼方まで続く灰色の大地に驚かされた。住み慣れた国を後にする不安も忘れて、地平線のどこかにいる英雄をまっすぐ迎えに行けるのだと心がはやった。今もそのときと似た、何かを新しく始めるような気持ちがしている。もっともそれは、わくわくでもどきどきでもない。背後では常に絶望が待ち受ける、緊張に満ちた静かな気持ちだ。あのときと違うのは、頼れるのが自分ひとりだけということ。驚くくらい冷静でいられるのは、そのせいかもしれない。最初の放心からも、すこしずつ立ち直り始めていた。

日が高くなるにつれて、青い影だった世界が色彩を取り戻し始める。

キゲイはずっと右手に握り締めていたお守りに、初めて目をやった。三つ編みのお守りは、編み目が数えるほどしか残っていない。けれども、編み目はほどけてはいなかった。調べてみると、一見ただの三つ編みに見えるこのお守りは、もっと複雑な編みこみを内に隠していた。そのおかげで簡単にはほどけないようになっているらしい。ブレイヤールが魔力を織り込んだのも、この細かな編み込みの方だったのだろう。強めに編み目を引っ張ってみるが、編みこみは崩れなかった。あのとき、よくこの編みこみを指一本で引きほどけたものだ。キゲイはお守りを丁寧にたたんで胸のポケットにしまう。そこにはあの銀の鏡も、まだちゃんと入っている。

「行こうか。歩けるよね」

キゲイは女の子に声をかけて、北の連山に視線を移す。地読みの民としての感を働かせなくとも、辺りの様子から自分達が黄緑の城からかなり南に連れて行かれたことは分かる。冬がまだ立ち去らない方角。石人世界奥深くに連れ込まれたのだ。ならば北へ向かえば、いつかは境界石の連なりに行き当たるはずだ。行き着ければの話だが。

「僕、森は歩き慣れてるんだ。里も山の森ん中であつたから。ここはトウヒが多いから、里の森に帰ってきた気がするよ」

女の子はキゲイの言うことに耳を傾けた。石人語も分からない彼女に、「言の葉」も通じてはいないだろう。身なりは診療所で会ったときのままで、暖かそうな格好をしていたことだけは救いだ。ズボンの膝が少し破れて血がにじんでいる。かわいそうだが、我慢して歩いてもらわないといけない。

キゲイは腰に巻いていた下帯をはずし、首もとに巻きつけてささやかな防寒をする。そして女の子を促しながら、北に向かって斜面を下り始めた。

## 十二章 黄金色の国

愕然とした。日が昇り、ようやく自分の両手を繋ぐものをはっきり認めたとき、驚きと怒りと絶望が一緒くたになって心を押し流し、後には虚脱感しか残さなかった。彼の両手首を封じる古ぼけた魔法封じの手枷には、白城の紋章がしっかりと刻まれていたのである。そして枷の裏側には、星の神殿の紋章も。

普通の魔法封じの手枷なら、時間をかければ外せたはずなのだ。安心してそれを眺めるブレイヤールは、この手枷の素性をおぼろげながら想像することが出来た。

七百年前白城の王が亡くなり、王の守護を失った人々は、レイゼルトを恐れて城から次々と逃げ出した。その最中、どさくさにまぎれて城から持ち出された品々は数知れない。この手枷も、白城の紋章が刻まれている以上そういった品のひとつだろう。あるいは白城が滅びた後、宝物庫やその他の倉庫から盗み出されたのかもしれない。白城は今日まで多くのものを盗まれ続けてきたが、人間が盗んだものより石人が盗んだものの方が遥かに多いのが現実だった。

いつの時代にか盗み出されたに違いないこの手枷も、何の因果か、最も皮肉な形で本来の持ち主の元に返ってきたわけだ。手枷は禁呪使いが多くいた時代、彼らの力を封じるため、当時の大巫女様が自らの魔力を封じて作らせたものだった。数十もの枷が、それぞれの城の紋章を付して十二城に配られた。

ブレイヤールは手枷を近くの岩にぶつけてみる。手枷にかけられた魔法封じの力も強力なら、手枷に使われた金属も、錆だらけにもかかわらず丈夫だった。痛んだのは自分の手首だ。

「うるせえぞ！ 静かにしな！ また痛い目にあいてえのか？」

エランと呼ばれるあの嫌な人間の男が、怒鳴りつけてきた。キゲイを逃がした後、ブレイヤールは大声で誰かに助けを呼ぼうとしたのだが、すぐさまこの男に二度も腹を蹴られて黙らされたのだ。おかげでその後は、息をするだけでも胸の下あたりが鋭く痛むようになってしまった。

エランの他には、ニッガナムと呼ばれる石人の大男と彼が連れている二人の石人がいた。三人の石人達は、それぞれ顔や腕に文様を施している。彼らはブレイヤールと極力目を合わさないようにしており、エランの行動に不快な表情を見せていた。石人にとって王族に手を出すのは、どんな悪党でも後ろめたさを感じるものだ。もっともブレイヤールの場合は、王族とはいえ城が滅びていたから微妙な身分ではあった。ニッガナムの煮え切らない態度も、ブレイヤールをまともな王族として扱うかどうか、複雑な気持ちのせめぎ合いからきていそうだ。

ルガデルロが常に彼に言い聞かせてきた言葉の一つが、「王族としての振る舞い」だった。時に煩わしくさえ思っていたこの言葉が、今の自分の威厳と身の安全を守る唯一のものとして、ふっと脳裏に蘇る。手枷に施された白城の紋章が、それを思い出させたのかもしれない。王族の振る舞いはエランには通じないかもしれないが、ニッガナム達には通じる。

——怖がったり、惨めな表情を見せたりするのは、絶対に駄目だ。

ブレイヤールはそう悟る。かと言って、手枷をされながらも威厳を持ってどっしり構えるというのは、彼には無理そうだった。こうなると、ひたすら無表情を貫くほかない。

朝食に出されたのは、塩漬けの魚の切り身に、干した林檎と水だった。ひりついた喉に冷たい

水は心地よかった。魚は塩味が濃すぎ、かえって喉の渇きを酷くしそうなので手をつけずにおいた。干した林檎は海綿のような食感で、ほのかな甘味があった。

食事がすむとブレイヤールには目隠しがされ、両脇に石人がついて彼を歩かせる。靴は逃亡を防ぐため、とうの昔に取り上げられている。おかげで地面のでこぼこが足裏に痛い。とても長い距離は歩けそうにないが、この地面の感触が、唯一自分がいる場所を教えてくれるものでもある。

辺りが肌寒くなり、日が翳ってきた気がした。随分歩いた。日暮れ時なのかもしれない。ここでようやく目隠しがはずされ、ブレイヤールは没しつつある紅の太陽に目を瞬かせる。いるのは両側が切り立った崖の小さな谷で、谷底には川が流れている。崖の下の方には小さな穴がいくつか見えて、明かりが漏れていた。

「ここからは自分の目で見て歩くんだな」

ニッガナムが背後からどすのきいた声で呟く。手下の石人二人が先に崖沿いの道を下っていき、ブレイヤールがそれに続いた。後ろから、エランの耳に絡みつくと、独特の笑い声が降ってくる。

「いーへっへっ！ 本当に想像もつかなかった拾いもんだぜ！ 黄緑の城に白髪 of 王族様がほっつき歩いてるなんてよ！ いつもなら金持ちの家に忍び込んで金目の物を失敬するだけだが、まさか人に手をだすたあな！ へっへっへえっ」

「馬鹿はいつだって幸せもんだな」

異常なほどに上機嫌なエランの言葉に、ニッガナムの苦々しい答えが続く。

「十二国の王族に手を出したら、呪い殺されるってえ話がある。迷信だと信じたいがな。だが頭目がこいつを見たら、大喜びするのは分かってるんだ」

ブレイヤールは「頭目」の単語を聞きつけ、小さく頭を振って淀んだ疲労を振り払う。そして二人の会話に耳を澄ました。再びエランの下卑た含み笑いが聞こえる。

「なんだあ？ いまさら怖気づいてるのかい。冷血のニッガナム様がよ。あの手枷で魔法を封じてんだろ。今のあいつはただの青っ白い小僧で、俺達の獲物ってわけだ。しかも、近いうちに黄金に化けるんだぜ。俺の人生で、これほど楽に冠付きの獲物が取れたことは初めてだ。人間世界で王族を捕まえたかったら、セジウム辺りのど田舎で村みてえにちっぽけな国を探して、どうにかこうにか痩せ馬並に貧相な王子とか姫を、とっ捕まえられるくらいだからなあ。んでも、血統がいいのは高く売れるんだ」

「そんなのと比べられるようじゃ、石人の王族も落ちたもんだぜ。てめえら人間が俺達に隠れて何してるか、知らないことにしてやってんだ。すこしゃ、黙っときな。第一そいつは、金になるかどうかはまだ分からねえんだ」

「じゃ、こんなガキいらねえよ」

嫌な気配が背中に迫り、ブレイヤールは突然突き飛ばされた。完全に不意を突かれ、捉えきれない速さで視界がぐるっと回る。身を守るため、反射的に広げようとした両腕は枷に阻まれた。もはやなすすべもなく、坂道を頭から転落しかける。かと思うと次の瞬間強い力で襟首が締め付けられ、再び視界が一転して崖肌に叩きつけられた。彼は目を見開き、荒く息をつきながらへな



へなと膝を曲げる。心臓が口から飛び出さんばかりに激しく打っていた。

エランの馬鹿笑いと、ニッガナムの押し殺した怒鳴り声が聞こえる。

「正気か、この野郎！ めったなことするんじゃない！ おい、お前ら、立たせろ！」

先を歩いていた二人の石人が戻って来て、放心状態のブレイヤールを両脇から抱え上げる。エランの笑い声だけが、しつこく続いていた。

崖の下には洞穴が開いており、盛んに火の粉を飛ばす松明が洞内を照らしていた。最奥に岩盤を荒く削りだした上り階段と、見張りらしき石人の姿がある。その石人も額に魔除けの刺青を施していた。エランとニッガナムは先に階段を上って行ってしまい、ブレイヤールは暫く待たされた。その間に見張りの石人が松明からランプに明かりを取り、ブレイヤールの脇を固める石人の一人に手渡す。

階段を上った奥は、坑道のような多くの脇道を持った通路が延びていた。時々通気と採光をかねた小さな穴が、左手側に現われる。しかし右手に伸びた細い道に入ると、ランプの明かりだけが頼りになった。二人の石人は、突き当りの木戸の前で立ち止まる。一人が鍵を取り出し扉を開ける。扉の向こうは奥行きも知れない闇しかない。もう一人が黙りこくったまま、ブレイヤールの背を扉の向こうまで押す。それは、ひどく遠慮がちな押し方だ。ブレイヤールは後ろを振り返る。

石人と目が合った気がした。ランプの明かりは相手の背後にあって、その瞳も額の下でわずかに照り返した二つの小さな輝きに過ぎない。輝きは妙に震えていて、落ち着きがなかった。相手が萎縮していると分かったとき、ブレイヤールは自分が白城の王族であったことを思い出す。ブレイヤールの顔はランプに照らされて、二人の石人からはこちらの表情が分かるだろう。

何か言った方がいいのだろうか。ニッガナムよりはこの二人の石人の方が、脅しやすそうではあった。ブレイヤールは考えるために一瞬まぶたを硬く閉じ、眉を寄せる。次に目を開いたときには、何も言わない方が賢明だろうと考えた。単に気のきいた言葉を思いつけなかったのもあるが、口をきくべきは目の前のつまらない二人ではなく、ニッガナムが頭目と呼んだ人物のはずだ。

彼は自分から背を向けると、暗闇の中へ足を踏み出す。するとその後ろで静かに扉が閉められ、鍵がかけられる。彼は遠ざかる足音が完全に聞こえなくなるまで、じっと動かず待った。去る足音は、ほとんど駆け出さんばかりだった。

完全に一人きりになると、ブレイヤールは真っ暗闇の中で左右の足を回し、この場所を確かめる。右側に木箱らしき物があり、軽く蹴ると中身があるのも分かる。その脇には麻袋もあった。中身は粉か砂かがぎっしり詰まっている。左側は何もないようだが、すり足で空間を確かめていくうちにすぐ岩盤に突き当たった。

——牢屋というより、ただの小さな倉庫だな。とすると、案外すぐにここから出されるのかもしれない。

鼻をひくつかせると、白城の地下食料庫と似た匂いがする。古い小麦粉や、カビかけた香草類が、木箱や麻袋に詰まっているに違いない。詰まっているだけ、白城の食料庫よりましなのだろうが。

——城を捨てた石人達の住居か。

ブレイヤールは自分をさらった者達の素性に思いをめぐらせた。

石人世界は魔法の力が強く、魔物や邪妖精の存在に溢れていて、城以外で安全に暮らせる場所はまずない。それでも城での暮らしを捨て、神殿の加護すらも避け、こういった生き方を選ぶ者達がいることは知っていた。多くの場合は、その城の王族の恨みをかっただなどで城に居づらくなった貴族が王の報復を恐れて城を去り、彼らの親族や信奉者とともに隠れ家を建設する。もしくは、何らかの理由で神殿の決まりに従わず、罰を恐れて城を出る者もいる。しかしどんなにやむない理由があったとしても、ブレイヤールをはじめ多くの石人達にとって、彼らの選択を理解することは難しかった。大巫女様のいらっしゃる神殿から離れ、王が守る城での暮らしを捨てたら、石人に何が残るといえるのか。精神の拠り所もなく、天と地に渦巻く魔法の力の真っ只中で、邪妖精に正気を奪われ、魔物に命を狙われ、影に魂を蝕まれる危険に怯え続けなければならない。

しかし大空白平原に近い土地であれば、地に宿る魔法も弱まり、危険もある程度払いのけられるものとなってくる。この崖の内部に掘り込まれた住居は、実体を持つ魔物達から身を守るのに最適だろう。けれども、空気のようにどこにでも入り込む邪妖精から身を守るには、様々な護符や魔除けの文様を身に付けるしかない。ニッガナムや他の石人達が体に文様を施していたのは、そのためだ。護符を持つより、体に直接描く方がより強力な守りになる。そもそも城が建設される以前の石人達は、皆あのような刺青や色とりどりの顔料で肌を覆うのが普通だったらしい。

ブレイヤールは暗闇を見透かそうとする。光がなくても、妖精達の影は見えるものだ。けれども手枷で魔力を封じられているせいか、彼らの姿を捉えることはできなかった。気配だけは感じられるのだが。

彼は岩壁に背を持たせかけ、まぶたを閉じた。何も見えないのだから、目を守るためにもそうしておいた方がいい。邪妖精は、瞳の中から心に潜り込むことだってできる。

——生きてここから出られるかな。ここの連中も、僕をどうするつもりか分からないし、あいつも頭目が大喜びするって言ってたし。……なんで喜ぶんだろう。僕を殺したって、白城に移り住むなんて出来るはずがない。黄緑の城がそれを許さないし、そもそも王族の命を奪えば、星の神殿からして黙っちゃいない。

肘を上げ、両腕を左右に開こうとする。手枷の鎖が強い手ごたえとともに、チャリンと高い音を立てた。この手枷に知恵があるなら、自分が白城の王を窮地に追いこんでいることを知るべきだ。白城の紋章を刻まれているというのに。

——石人と人間がぐるになって、悪事を働くなんて。ここの連中はなぜ城を捨てた？ もとはどこの城に住んでいたんだ。いつからここで暮らしてる。こんなところじゃ、魔物に命をさらし、邪妖精に魂をさらし、畑をやれる柔らかい土も安全もない。……食料を得るには、大空白平原の人間達と手を組むしかない。

ブレイヤールは深い溜息をつく。大空白平原の無法な空気は、石人世界にも確実に影響を及ぼしているのだ。七百年前の約束であの平原には誰も入ってはいけないことになっていたというのに、約束を破った人間達が恨めしい。もちろん入ってきた人間達は善人ではなくならず者で、

そういった連中に約束を守ることを期待しても無駄なのだが。

そこで彼は、石人の古い歴史を思い出した。

——神殿しかなかった時代でも、神殿の守る都市から出ていく者達はいた。……初代十二王達は、その最たるものだったのかもしれないな。正十二国創設の理由も、神殿の腐敗した権力と支配から石人達を解き放つのが目的だったはずだ。なのに今度は、その城から逃れようとする石人達がいる。白城の者達など、七百年前からずっと、いつか城を蘇らせることを夢見ていた。城を捨てる者達の存在を知りもせず。何千年も前から、城は神殿以外で石人の生きる唯一の場所だった。そう信じて疑わなかった。

そこでブレイヤールは思考を中断する。

「来るな、来るな。随分太ってるのに、まだ食べたりないのか！」

彼は息を殺して見えない相手に囁き、魔除けの呪文を呟く。獲物を嗅ぎつけた邪妖精達が暗闇から現われて、彼の体に触れようとしているのを感じたのだ。さほど力を持っている相手ではないが、手枷をはめられている今は油断できない。彼らはブレイヤールの心に恐れや疑いを見つけ、それを食べにきたのだ。けれども彼らは十分太っている。他の石人達から食べた負の感情で肥えたとしか考えられない。

「白城を蘇らせるなんて、ばかげてるのか」

暗闇の中で、なすすべもなく問いかける。それが全ての問いだという気がした。答えはたくさん必要だったが、何一つとして良い考えは浮かんでこない。

——ところで、まだここにいなきゃいけないのかな。

恐れる心を、妖精に少しばかりかじられたのかもしれない。虫食いの心はさらに脆くなるものだ。頭目の前に引き出されるのが、怖くて仕方がなかった。相手の出方が分からない上に手枷で魔力を封じられているとあっては、自由になる口だけが文字通りものをいう。しかし言葉が見つからなければ、口だって封じられたのと同じだ。

ブレイヤールが暗闇でうつうつしていると、足音が近づいてきた。声も聞こえてくる。二度と聞きたくもないあの声は、エランのものだ。あの声はもう、激しい怒りと苛立ちしか呼び覚まさない。そしてそれが今はありがたかった。この怒りをエランではなく、頭目に対してぶつければいい。彼はどうにか気を奮い立たせる。

「待たせたなあ？ この国の王様がお会いになられるぞ！ ……おお怖い怖い」

扉を開けて顔をのぞかせたエランを、ブレイヤールはすっと立って睨みつけていた。馬鹿にしたように怖がって見せるエランの後ろには、ニッガナムもいる。

「頭目か、王か、はっきりさせろ」

ブレイヤールはニッガナムに向かって言い放つ。かなりの勇気がいったが、言い切ってしまうと妙に覚悟が決まった。

「会えば分かる」

ニッガナムは無表情で、ほとんど唇を動かさないまま答えた。彼は腕を伸ばしてブレイヤールの手枷を掴み、扉の向こうから通路へ引き出した。

ブレイヤールはエランとニッガナムの二人に前後を挟まれ、岩穴の通路を延々と進んでい

った。

道が上りに転じ、行く手に明るい出口が見えてくる。視界が一気に開けた。

そこは大きな岩の広間だった。三階分もの吹き抜けになっており、各階には木の手すりがついたテラスが壁面をぐるりと囲っている。壁面の一方には窓のくり貫きがあり、夕の最後の光を取り込んでいた。木製のタイルが敷き詰められた床の上には、暖と明かりを兼ねた火桶が置かれている。天井を支えるために残された三本の岩柱は、荒く削られたままの無骨な姿だ。

広間の最奥には厚手の毛織物を天蓋にした台が設けられ、一目で王座と分かる立派な椅子が据えてあった。椅子は差し込む夕日を浴びて、黄金色の輝きに曇って見える。広間の中でそこだけが、異質の空間を醸し出していた。王座の周りには、ありとあらゆる財宝が積み上げられていた。金銀宝石の他にも、見事な陶器の壺、手の込んだ装身具、目もあやな織物、極彩色に彩られた彫像の数々。広いだけの空洞に、なぜかそこだけが無秩序に高価なもので飾られている。

ブレイヤールの踵をエランかニッガナムかが蹴って、王座の階段下にひざまずかせる。ブレイヤールは半ば呆れつつ、半ばこの仕打ちに憤慨しながら、豪華な王座を見上げた。こんな王座を作る余裕があるなら、広間をもっときれいに整えたほうがいい。

「王の御なり！」

広間にはいくつもの出入り口の穴があったが、ひとつだけ立派な木の扉が取り付けられた所がある。その両脇に整列していた十数人の石人達が、広間にとどろく大声で告げた。扉が重々しく開き、見事な体格の大女が現われる。

たっぷりとした胴回りに、日に焼けた逞しく大きな手足。顔は横に広く、目鼻の作りも大振り。左頬から顎にかけて鮮烈な紅がひいてある。魔除けの刺青というより、顔の古傷を隠しているか目立たせているかのどちらかだろう。癖のある髪は見事な黄金色で、頭の上で縛ってまとめている。広間に入ってすぐ、鮮やかな紫の瞳はブレイヤールを鋭く見据えていた。彼女の一步一步には重量感があり、その足の下でタイルがミシミシと音を立てる。彼女は悠然とブレイヤールの前を通り過ぎ、王座に腰を下ろした。彼女の後から何人かの石人の子ども達が続いて現われ、王座の周りを取り囲んで、思い思いの場所に座り込む。丸めた絨毯を椅子代わりにする者もいれば、彫像の台座の端に腰掛ける者もいる。年齢はブレイヤールと同じくらいの者から、年上の子に抱かれている幼児まで様々だ。そしてどの子も同じように見事な金髪をしている。

「これはこれはクラムアネス様。今宵もご機嫌麗しく何よりでございます」

エランが大げさな身振り手振りで、王座に向かって恭しくひれ伏す。彼はブレイヤールの髪を掴んで、一緒に頭を下げさせた。ブレイヤールも女の姿に圧倒されて、つつい抵抗も忘れて額を床に打ち付けてしまう。あの女になら、確かにあの王座も似合う。どっちも個性が強くて、品がなくて、強烈な存在感だ。

「面白いものを捕まえたと聞いてね。子ども達にも見せてやろうと思ったのさ」

クラムアネスは低いガラガラした声で答える。エランは再びブレイヤールの髪を引っ張って、顔を上げさせた。クラムアネスは目を細め、満足げにブレイヤールの顔を見やる。

「ニッガナム、この坊やには見覚えがあるけど、どこの子だったかねえ？」

「白城の王族でさ。崖の王」

クラムアネスは明らかに無駄なやり取りで、王族を辱められるこの状況を楽しんでいた。エランもまるで王に対するようにクラムアネスに接し、ニッガナムも彼女を頭目と呼ばずに王と呼んでいる。十二色の王以外、王の存在を認めない石人世界では、こんなことはただの王国ごっこにしかならない。しかしたとえ「ごっこ」だとしても、クラムアネスは大勢の手下を従えており、ブレイヤールを殺すのも生かすのも好きに出来るのは確かだった。そして王族を殺してしまえば、これはもう「ごっこ」ではなくなる。

「茶番はもう十分だろう」

頭を振ってエランの手を振りほどくと、ブレイヤールはクラムアネスに目を据えた。

「私を使って何がしたい？ いずれにしても、お前達は神殿と十二城を敵に回すことになるぞ。この崖の中だけで大人しく暮らしていればいいものを」

クラムアネスは王座から身を乗り出し、ブレイヤールの様子を楽しげに眺める。彼女は神殿や十二城の言葉にも動じなかった。一方で周りにはいる手下の石人達がわずかな不安の表情を見せたのを、ブレイヤールは見逃さなかった。そして、クラムアネスの周りに座る彼女の子ども達も、年かさの者だけが眉をひそめて母親の背を真剣な表情で見守る。つまりここにいる石人の殆どは、神殿や十二城の権威を知っていて、恐れている。

「お前がここにいることを知ってるなら、確かに十二城は黙っちゃいないだろうねえ。けど、神殿はどうだろうかね」

クラムアネスは丸太のような右足を上げて、悠々と足を組む。

「滅びた国の王族のために、わざわざ神殿が動くかね？ その昔は、紫城だって見捨てたのに。神殿はまだ、十二城から奪われた覇権をひとつに戻すことに、ご執心なのさ。恐ろしく気の長い話じゃないか。十二城建国は何千年前の話だってんだか。大巫女様と九竜神官様も、根っこは割れちゃったしね。城にもちゃっかり神官が入り込んで。星読みの神官どもが城内で力を持って、連中の名付けには王だって口出しできない」

ブレイヤールは黙っていた。「名付け」の書を得られなかったために、十二城は神殿から完全に独立することができなかった。石人にとって、宇宙の星々から与えられる名前ほど、大切なものはない。名前を得られなければ死後の魂は帰る星が分からず、永遠に虚無をさまよう。

あるいは不吉な名前を持てば、それもまた不幸だ。災いをもたらすとして神殿に連れて行かれ、生涯そこから出ることを許されず、王も彼らを城に留めることを許されない。この者達が城に不満を持っているとしたら、原因はそこにあるのだろうか。だとすれば、城を捨てた石人達の問題は根が深い。

「で、お前をどうするかだけど、もう用は済んでいるのさ。白の王族がいなけりゃ、白城はただの廃墟。あそこにはまだ財宝がたんまり埋もれてる。神殿も十二城の勢力がまたひとつ消えて、喜ぶだろうさ」

クラムアネスは片腕を上げる。その合図でエランが、ブレイヤールを立ち上がらせるために襟首を掴む。ブレイヤールは苛立ち紛れに身をかわそうとしたが、ニッガナムに突き飛ばされて階段の上につつ伏せに転んだ。歯を食い縛って痛みと屈辱に耐えながら見上げると、クラムアネ

スがにんまりとこちらを見下ろしている。

「自分が死んだら、『面』を顔に当てて大笑いする連中がいるってことは、知ってるだろう？  
悪いけど、お前はもうあそこにゃ帰れないんだよ」

「今白城を空けたらどういうことになるか、分かっているのか！」

再び襟首を掴まれて階段から引き剥がされながら、ブレイヤールは怒鳴った。

「大空白平原から人間達が入り込もうとしているんだ！ 平原の人間と取引してるのに、何も知らないのか！」

「だ、か、ら、今が時期だったんだよ。お前をとっ捕まえるね」

「……やはりお前達は、平原の人間とつながりを持ってんだな」

ブレイヤールは声を落とした。相手が突然おとなしくなったのでクラムアネスはきょとんとしたが、次の瞬間には両膝を打って嬉しそうに頷いた。

「そうそう！ さすがに少しは頭が回ってるようだ。わたしが生きていくには、確かに城や神殿なんぞよりも、平原の人間どもが頼りなんだよ。ねえ、エラン。お互い随分儲けたじゃないか」

クラムアネスは両腕を広げ、王座の周りに積み上げられている財宝を示す。しかしブレイヤールはそれを無視して、さらに問う。

「それより、『今が時期』とはどういうことだ。おまけにお前は私を捕まえて、神殿が喜ぶともいった。神殿を喜ばせることが、お前達に何か関係でもあるのか。むしろ私の姿がなくなれば、実際はどうであっても、神殿は私の行方を十二城とともに捜そうとするはず。黄緑の城は遅かれ早かれ、必ずここを探り当てるぞ。なぜ私をさらうなどという危険を冒した」

クラムアネスの顔から笑みが消え、見た者をぞっとさせる余裕の表情だけが残った。彼女は王座から立ち上がり、階段を下りて近づく。そしてブレイヤールを哀れむように、うって変わった静かな声色でゆっくりと語りかけた。

「かわいそうに。結局十二城は、神殿の助けがなければ王族一人を助けることすら出来ない。そうだよ。わたし達の国から利益を得ている者の中には、神殿のとある神官様がいらっしゃるんだ。お前はどうかのさ。あの廃墟みたいな城と、化石同然に頭の古い家臣どもと、それ以外に何を持っている？」

崖の王の問いかけに、白王は憤然と両腕を繋ぐ手枷を突き出す。そこでとうとうクラムアネスはたっぷりした胸を揺らし、カッカッカと本気で笑い出した。笑いの発作がおさまると、彼女は目に浮いた涙を指で拭いながら、エランとニッガナムに指示する。

「膝が震えているくせに、なかなか洒落た答えじゃないか！ ひとつこいつの運命を試してやろう。なに、王を直接手にかけるのが怖いわけじゃない。ただ、この崖の国の連中に見せてやる必要がある。十二王族なんて、しょせん過去の歴史に乗っかってるだけの、ただの石人だってね。こいつらは惰性で王位に居座り続けているだけなのさ。だから廃墟しか持ってなくても、恥知らずに王族を名乗ってられるんだよ」

「どういたしましょう？」

エランは不安そうに尋ねる。彼はブレイヤールを平原に売り飛ばせば、大金になると思い込ん

でいたのだ。しかしラムアネスはあっさりと言った。

「地下の牢に一晩置いておきな。明日の朝まで生きてたら、また考えるさ」

彼女はきらびやかな金糸刺繍のマントを翻し、来たときと同様子ども達を伴って、のっしのっしと広間を後にした。

その場に残されたエランは、ニッガナムに食い付く。

「どーいうことだよ！ ええっ？」

「だから言っただろ。こいつは金になるかどうか分からんってよ。今まで散々儲けさせてもらったんだ。たまにゃ、俺達の都合にも付き合いな！」

水の滴る岩穴の向こうに、腐りかけた隙間だらけの木の扉が見えてきた。蝶番も錆びてボロボロで、強い力を加えれば、簡単にばらばらになってしまいそうだ。番人らしき石人は、無駄とも思える扉の鍵を開け、ブレイヤールを促す。エランとニッガナムに引きずられるようにつれてこられた場所は、この冷え冷えとした地下だった。ひどい湿気も、崖を流れる川から染み出しているのだろう。

扉の向こうに、錆だらけの金属格子が見える。手前には見張り用と思われる、小さな机と椅子。もっともこれも腐りかけている上に、緑っぽいぬるぬるした苔か藻かで汚れている。格子の向こうは水が満たされていた。一見、水責めの監獄といったところだが、壁面に複雑に掘り込まれた四角い溝があり、すぐ下に素焼きの配管が散乱していることから、本来は坑内の排水管理の部屋だったのかもしれない。

番人は格子戸を引き上げる。ブレイヤールは戸をくぐって水の中へ片足を突っ込んだ。水の鋭い冷たさが肌を貫く。三つの石段を降りたところが水底だった。すぐ背後で格子戸が落とされる。ブレイヤールは腰まで水に浸かりながら、番人がこそこそと部屋から立ち去っていくのを見た。ぼろぼろの木の扉が閉められて、門を差す音がした。どうやら先ほどの蝶番は、さっき開けたときに壊れたらしい。

明かりを机の上に置いて行ってくれたことだけが幸いだった。蝋燭の代わりに、魔法の光を封じた石英が刺さっている燭台だ。

「……一晩もつのか？」

呟いた声は思ったよりも部屋に響き、ブレイヤールはすぐに口をつぐむ。とりあえず、一人になれてほっとした。彼は何とか体を水から上げようと、格子を掴み、足をかけて登ろうとする。けれども手枷が邪魔でうまく格子に捕まれず、結局足を滑らせて水の中に落ちてしまった。彼は場所を少しずつ変えながら、何度も格子を登ろうとした。水の中で突っ立っていれば、あっという間に凍え死んでしまう。

ようやくへばり付ける場所を見つけ、膝上までを水から上げることが出来た。欲を言えばもう少し上に登りたかったが、そこで失敗して落ちれば、もう一度格子を登る力が出てくるか分からない。すでに全身ずぶぬれで、全身の震えが止まらなかった。冷たい水に痛んでいた手足の指も、感覚がなくなり始めている。吐く息は白く、濡れた前髪から落ちる雫は頬に落ちて、口の端へ溜まる。喉が渴いていたことに気づいて舌先で舐めるものの、喉を潤すほどではなかった。

——そういやキゲイは大丈夫だろうか。無事に黄緑の城に戻れてるといいけど。

自分の置かれた境遇に絶望し、なすすべもなくなると、他のことが思い出されてくる。

——なんにしても、あそこで逃がしておいて良かった。でないと、ここの連中に何をされるか分かったものじゃない。あの銀の鏡だって……。

ブレイヤールはそこではっと気がついた。同時に、大樹の塔の老師がした話も思い出す。あの銀の鏡は、キゲイとともに自分の側を離れていったのだ。今の彼は、銀の鏡を隠していたことも、それに触れたことを黙っていなければならない後ろめたさからも、一切開放されていた。もはや銀の鏡について考える必要さえない。

気づきは火花と弾け、確信へと変わる。銀の鏡を持つキゲイに逃げろと言ったとき、自分は禁呪が照らし出す道とは別の道を選んだのだ。鏡の持つ魔力がひとつの意志のように働いたとみるならば、ブレイヤールはもう二度とレイゼルトに会うこともないだろう。鏡はブレイヤールを見限った。禁呪との関わりと、それをはらむ底知れない世界への道は閉ざされた。これからは自分の信念を掲げ、王として自身の道を歩めばいい。

ブレイヤールはキゲイのことを心配するのをやめた。キゲイはもはや彼の辿っていく道にはいないのだ。銀の鏡に関わりを持った以上、キゲイはキゲイでどうにかするしかない。そしてブレイヤールもまた、今の状況を自分でどうにかするしかない。

彼は格子を握る手に力を込める。そして魔法封じの手枷を見つめ、無駄だという考えを振り払いながら、体を温める魔法を唱え始めた。何度も何度も繰り返すと、かじかんだ足に感覚が戻ってくるような気がする。

——明日になるまで、こうしてればいいんだ。あの女になんか、負けるもんか！ 何が崖の王だ。ただの山賊の親分と変わらないじゃないか。神殿の神官も利益を得ているだと？ 嘘に決まってる。もし本当でも。もし本当だったら、どうなんだ……？

ブレイヤールは頭をたれ、ぐっと目を閉じた。そこで突然、頭の中が空っぽになってしまったのだ。何か考えて、その空っぽを埋めようとするが、どんな思考も生まれてすぐ泡のように消えてしまう。

不意に手がすべり、彼は水の中に落ちた。したたかに水を飲みながらも、立ち上がる。体の震えはいつのまにか止まっていた。腕を上げて手枷を見やる。肌は血の気が失せて真っ白だ。

「封印されてる。完全に。力が……」

切れ切れに呟くと、彼はふらついて再び水の中にずるずると崩れる。もはや震えることも出来ないくらいに、弱っていたのだ。息を止めるだけの意識はあったものの、足を踏ん張って立ち上がるまでには思い至らない。意識も体も、暫く水の中で上下もなくゆらゆらと漂う。それから彼の意識とは別のものが、彼の体を水中から引き上げた。彼は大きく息を吐き、それから吸う。すぐ隣に誰かが立っている。

「大丈夫ですか」

グルザリオだった。彼は肌着一枚のみすぼらしい姿だ。一瞬彼の姿が消えたかと思うと、小さな羽音が聞こえ、再び彼の姿が格子の向こうに現われる。彼は格子越しにブレイヤールの脇を掴んで体を支え、血を温める魔法を唱えた。そして凍えて自由の利かないブレイヤールの指を、格



子にしっかり握りつかせる。グルザリオはいったんぐると部屋を見回し、人の気配がないのを確認してから、再び主と目を合わせた。

「ひどい顔してますね。さて、来てみたのはいいんですが、俺にはここからこっそり助け出すだけの用意も実力もありません。変身に取り込める魔法の服も武器もない。まさか姿を変える必要があるとも思わなかったのが、この一枚だけです。古い魔術用マントを下着に仕立て直しといて、本当によかったです。ちょっと自分で立っててくださいよ。今、この落とし戸を開けますから。水の中にいたら、温める魔法も意味がない」

「一人か？」

「い、いえ」

グルザリオは寒さに震えながら、戸の鍵へ魔法をかける。錠前の腕が飴のように長く伸び、千切れて落ちた。

「城を出る前に、黄緑の兵達に二人を探すよう連絡を入れました。俺がここを見つけられたくらいですから、兵達もじきに来るはずですよ。助けが来るまでは、ここで籠城するしかないかもしれません」

「それより、キゲイは？」

「王子と一緒にだと思ってましたが」

グルザリオが答えながら戸を押し上げ、ブレイヤールは倒れこむように水浸しの牢から出る。手足は肉が粘土に変わってしまったかのように重く、思い通りに動かなければ感触もない。グルザリオは彼を部屋の中央へ引きずっていき、魔法をかけて濡れた衣服から水を氷の粒に変える。衣服は霜柱と細かな氷で白くなり、強くはたくと多少は乾く。濡れた服がべったりと肌にくっついてはまらした。

ブレイヤールも自分で服の霜を払おうとして、手を上げた。感覚のない手は、まるでその部分だけが死んでしまったように、力が全く入らない。

「キゲイは途中で逃がした。山の中だ。できれば黄緑の国の人達には見つけて欲しくない。悪いけど、今すぐ戻って彼を探してくれないか」

「……折角助けに来たのに。本当にいいんですか？」

手枷を調べていたグルザリオは、ブレイヤールを上目遣いに見やる。

「ちゃんと面倒見ると、ディクレス殿と約束した。それに僕ら以外、一体誰がキゲイを探せる？ 例の鏡を持っているんだ。僕は忙しくてここから動けない。……ここにいる石人どもを、どうにかしないと」

「手枷で何も出来なくなっていて、暇そうに見えます」

「これは僕の魔力を封じているだけだ。そしてここは土地自体が魔力を持つ、石人の世界だ。大樹の塔出身の魔法使いは、自分の魔法を使わない。周りの魔力を借りる。たいしたことは出来ないかもしれないが、一芝居打って脅かすくらいは出来る。大勢を一度に脅かせば、何かになるはずだ。白城を立て直す、最初で最後のチャンスになるかもしれない。さもないと、白城は人間に奪われる前に神殿に奪われる」

「この石人達は、王子を拉致した時点で全員罪人です。どう考えたら、そんなチャンスになる

ってんです。奴らは裁かなくてはならない。十二国と……神殿の、十三会議で」

「神殿には手出しさせない。十二国の中には、白城も入ってる。ここの連中が何をしでかしたか、身をもって知っている。僕には真っ先に裁定を下す権利がある。それが、生きてこの手枷をはずす唯一の方法だよ」

ブレイヤールが呟くと、グルザリオは片眉をあげて怪訝な表情を見せた。この非常事態に自分の主は、自身の安全もキゲイの安否も放って、何を考えているのかと思ったのだ。しかしこれまでの人生で一度として、ブレイヤールがこれほど大胆な物言いをするところを見たことはない。恐怖で頭がおかしくなった様子でもなさそうだ。グルザリオは短い溜息をついて首をまわし、少しの間考えるそぶりを見せる。

「ちょっと見ない間に、ずいぶん頼もしくなりましたね。誰にそんな根性を叩き込まれたんです」

グルザリオは溜息をついた。彼自身、武器も杖も持ってこれなかったために、大したことはできない。ここでぐずぐずして一緒にいるところを誰かに見られれば、二人まとめて捕まるだけだ。

「分かりました。そこまで考えがあるなら、いいでしょう。黄緑の兵達にここのことを伝えてから、キゲイを探しに行きます」

ブレイヤールはその言葉へわずかに頷いてみせる。

「やることをすませたら、すぐに医者に見てもらってください。低体温もひどいですが、顔の傷も手当てが必要です。他もどっか怪我してるでしょう」

グルザリオはそう言い残して姿を変えると、羽音とともに扉の隙間から去っていった。

ブレイヤールは再び一人きりになる。血を温める魔法は解けかけており、一方で戻ってきた感覚は、刺すような痛みへと変わりつつあった。彼は痛みをこらえながら、燭台のある机と椅子へ顔を向ける。そして腐りかけの机と椅子に、短い魔法の言葉をかけた。

二つの家具は応えてぱっと輝いた。木目から光が漏れ、陰気な小部屋を照らし出す。年輪に封じられた陽光と温もりが溶け出した光だ。しかし長い間地下にあったそれらは、太陽のことを十分には覚えていない。すぐに燃え尽きて灰になる。石英の燭台が落ちて、荒い石の床に転がった。

ブレイヤールは燭台の側へ這い寄る。机と椅子が放った熱は、石の床と壁に吸い込まれていた。燭台周辺の床が特に熱い。少なくともこれで凍えることはなくなったようだ。

「禁呪として自分の魔法を封じられた魔法使いが、大樹の塔の学問を開いたんだからなあ」

ブレイヤールは溜息まじりにつぶやく。そして、机と椅子が自分の言葉に応えてくれた幸運を思った。

——創始の魔法使いも、こうやって魔術封じの腕輪をつけられたまま、ずっと魔法について考えていたんだろうな。本番でもうまくいくといいんだが。僕が得意なのは、風と羽に関係するものだけど、洞穴の中じゃどちらも無理かもしれないな。

とても眠れるとは思えなかったが、夜は長い。翌日のことを考え、横になってまぶたを閉じる。

クラムアネスは朝早くから召使に起こされ、不機嫌そのものだった。それでもすぐにプレイヤーのことを思い出し、いそいそ身支度をする。

「生きていたとしても、きっと命乞いをするだろう。いままであの冷たい牢に一晩入れられて、溺れ死んだ者もいるし、生き延びていても、全員心は折れて泣いて命乞いをしたものだ！ もしあの小僧が命乞いの土下座すりゃ、あたしは王族に勝ったことになる。うまくすれば、白城を手に入れられるかもしれないね！」

生きていた方がずっと面白い。今さらのようにそれに気づき、彼女は上着に袖を通すのももどかしく、広間へと大股に急いだ。期待が裏切られることを、恐れながら。

広間の扉を押し開けた彼女の期待は、幸いにも叶えられた。しかし、すべてが期待通りだったというわけでもなかった。

昨日と同じ場所に、白い髪の小僧が立っている。その後ろには、彼を牢からここまで連れてきた三人の家来の姿もあった。空っぽの王座に視線を注いでいるらしい小僧に対し、家来達はクラムアネスに戸惑った顔を向ける。一人がすばやく彼女に近づいて、耳打ちした。クラムアネスは小僧に目を向けて聞き返す。

「牢の外で座ってたって？ どうやってあそこから出たんだ？」

彼女が期待していたよりも、小僧は弱っている様子はなかった。確かに肌は血の気も失せ、顔つきにも疲れた様子がみてとれる。しかし背筋は伸び、彼女が現れても動ずる気配はない。無視を決め込んでいるかのように顎を上げ、まっすぐ前を向く立ち姿には、怯えも卑屈も感じさせない。昨日、エランになすがままにされていた彼とは、似ても似つかなかった。

彼女の問いに、家来も首を振るだけだ。彼女は憤然と王座の前に進む。小僧の後ろに立つ家来達は、彼をひざまずかせるために動こうともしない。手枷をはめられ、魔法も封じられた者がどうやって牢から出たのか、気味悪がって怯えているのだ。彼女はそれに腹を立てる。

「小僧相手に、何びくびくしてるんだ！」

王座につくや否やクラムアネスが怒鳴ると、家来達は震え上がって小僧の肩に手をかけた。すると今度はプレイヤーが家来達を横目に睨む。家来達はあわてて手を引っ込める。それがさらにクラムアネスの癪にさわった。

「もういい！ 下がれ！ この臆病者どもが！」

広間を震わす彼女の咆哮に、家来達は転がるように外へ逃げ出す。クラムアネスは血走った目でそれを見届けると、浮かせていた腰を再び王座へのっしと下ろした。

「生きてたということは、運を持ってたってわけだ。悪運かもしれないがね」

怒りの覚めやらないまま、クラムアネスはプレイヤーに視線を戻す。彼の態度自体も彼女の怒りの元だった。あの一晩でこの小僧に何が起こったのか、彼女には想像もつかない。目の前に立つのは、寒さで手足の腫れた痩せっぽちの、ようやく青年といえるような年頃の石人で、負けじとこちらを睨み返して虚勢を張っている。恐れる相手ではないはずだ。彼女は足を組み替え、平静を繕いながら口を開く。

「さて、手に入れた運を無駄にしない答えが聞きたいもんだ。もう一晩あの牢で過ごすか、あた

しに白城を譲って、この国で隠居してもらおうかだ。どっちにしろ、白城に戻ることはできない」  
ブレイヤールは返事をしなかった。むっとした表情のまま、彼女を睨み返すだけだ。クラムアネスはすぐに、この沈黙が我慢ならなくなった。彼女は床を踏みつけ、大きな音とともに王座の前で仁王立ちになる。しかしこの生意気な小僧にいうことをきかせる家来達は、つい先ほど彼女自身が追い払ってしまった。

押し黙ったままこぶしを震わせる崖の王の前で、白王はようやく口を開いた。

「神殿は私が死ねば喜ぶと言っていたな。つまり私はどちらを選んでも、結局はお前達に消されるわけだろう。お前が言った、この国から利益を得ている神官のことを、ずっと考えていた。お前が私を殺すことを黙認できるだけの権力を持つ者といえ、大巫女様に次いで最高位の神官とされる九竜神官しかいないはずだ」

クラムアネスの顔は見る間に青くなる。しかしまだそれは、怒りのためだった。ブレイヤールはその顔色から、自分の予想が遠からず当たっていたことを見て取る。外れていたなら、間違いなく彼女は勝ち誇って笑っただろう。彼は王座への階段に片足をかけ、わずかに身を乗り出した。

「忘れてはならないのは、神殿は私を殺すことを黙認する一方で、王族を手にかけてた者達も生かしておけない立場にあることだ。十二王族は、神殿の十二祭司でもあるために」

風向きを変えつつあるやり取りに、クラムアネスの家来達は広間に戻ってきていた。他の武装をした家来達も、広間上階のバルコニーに身を乗り出すようにして聞き耳を立てている。ブレイヤールは視線をめぐらせ、それを確認する。クラムアネスはブレイヤールの目が自分から逸れたのを知り、腕を伸ばして王座の横に立つ真鍮の燭台をつかむ。三つ又に分かれた燭台の腕には、真鍮の大きな鈴飾りがいくつも下がっていた。

ブレイヤールはクラムアネスに視線を戻し、低い声で言い放つ。

「九竜神官達の本心がどうあれ、王族は神殿と並び、石人達を治める役目がある。私は白城の王族として今すぐ、誰の許可を得ることなくお前達を裁くことができる。少なくともクラムアネス。お前の私に対する扱いは、死に値する」

「裁くだと！」

クラムアネスの怒声とともに、燭台の鈴がガラガラとぶつかり合う。空を裂く音が続く。ブレイヤールはすんでのところまで一歩引き、横様になぎ払われた燭台をかわした。クラムアネスの方も、本気で燭台を当てるつもりはない。しかしブレイヤールに据えられた二つの瞳は怒りに燃え、かっと見開かれた。

「己の立場も分からん、小僧が何をぬかす！ 貴様をどうするかは、この王が決める！ 生かすも殺すもだ！ 神官がこの国から得ている富を、簡単に手放せると思うか？ 神殿の飼い犬としてぬくぬくと過ごしてきた若造に、人の心の何が分かるか！」

クラムアネスは怒鳴り、手にした燭台を地面に突き立てるように引き戻す。そしてもう一方の腕を大きく掲げた。上階のバルコニーに立つ家来達がいっせいに立ち位置を変え、弓を構える。ブレイヤールはそれを目に入れつつ、大股で後ろに数歩下がった。クラムアネスはブレイヤールが観念したと考える。彼女はそれまでの怒りを翻し、乾いた笑い声を上げた。

「さあ、全てが変わる瞬間だ。言ってごらん！ 今のお前に必要な言葉を！」

「お前は裁かれる！ 捕らえられているのは、お前の方だ！」

ブレイヤールは挑むように言い放ち、手枷で繋がった両手を突き出す。褐色の瞳が、火花を散らすように光った。クラムアネスの顔から笑みが消える。彼女は無表情のまま、掲げた腕を振り下ろす。

弦の唸る音が広間に満ちた。放たれた矢が空を裂く。同時にブレイヤールの一声が響いた。

「逸れよ！」

矢はブレイヤールの脇を通り過ぎ、次々と床に突き刺さる。クラムアネスの怒号が響き、矢は次から次へと放たれた。一矢打つごとに、弓手の表情が呆然としたものになっていく。最後の弓手が最後の矢を射終わったとき、ブレイヤールは矢でできた麦畑の中に毅然と立ったままだった。一本として彼に当たった矢はない。

クラムアネスの目が、零れ落ちそうなまでに見開かれる。彼女の体はわなわなと震える。

崖の王を見据えるブレイヤールの瞳は、まだ不思議な光をたたえてるように見えた。彼はゆっくりと、大きな息を吐く。それとともに、その光が吸い込まれるように瞳の奥へと消えた。瞬きをした後はもう普通の石人の瞳に戻っている。瞑想に近い極度の集中から、自分を解放した瞬間だった。

クラムアネスはもう一度燭台をつかむ。今度こそ、本当にブレイヤールを叩き潰すつもりだった。彼女は階段を一步一步踏みしめながら、獲物に向かって近づいていく。彼女の足が矢羽の畑へと立ち入ると、ブレイヤールは鋭く叫んだ。

「留めよ！」

クラムアネスの両脇で、床に突き立った矢羽が火を噴く。彼女は一瞬ひるむが、燭台を一振りして行く手の矢を薙ぎ払う。そして、薙いだ姿勢のまま動かなくなった。彼女の顔は強張り、巨体が小刻みにびくつく。浅黒い額に汗の粒を浮かべ、真っ赤な顔で自分を襲った見えない力に抗おうとしていた。

ブレイヤールは手枷を掲げ、白城の紋章をクラムアネスに向ける。次いで腕を反して神殿の紋章に向ける。

「白城の王族を、このようなもので封じたつもりだったのか。この手枷は大巫女様と白城に仕えているのだ」

これは明らかにうそだった。手枷はブレイヤールの魔力をそっくり封じてしまっている。しかし大樹の塔での知識が、放たれた矢の矢羽を操り軌道を変え、床の木板から見えない枝葉を伸ばさせ、その中にクラムアネスを絡め捕らえることを可能にさせた。

クラムアネスはとうとう、ぐわっと轟く息を吐き、騒がしい鈴の音とともに矢の海へ背中から倒れる。見届けたブレイヤールは厳しい表情のまま、腕を下ろして辺りへぐるりと頭をめぐらせる。

広間にいた者達はブレイヤールが魔術を使ったのだと信じ、度肝を抜かれてしまった。さらに間髪いれずに示された白城の紋章と、なにより神殿の大巫女の紋章に、弓手達は弓を放り出して命乞いと許しの言葉を口々に唱える。広間に彼らのすすり泣きが満ちた。クラムアネスに従って

いたとはいえ、神殿の侵しがたい威厳と王族の絶大な魔力は石人の心に深く刻まれている。それに抗うことは並大抵のことではない。

ブレイヤールは倒れたクラムアネスに近づき、その顔を見下ろした。クラムアネスは目玉だけをぎょろりと動かし、ブレイヤールを睨み返す。その目は屈辱に満ちている。もしかすると、屈辱という感情すら通り越していたかもしれない。

「あたしを殺すか」

食いしばった歯の間から、クラムアネスは言葉を引き絞る。ブレイヤールは厳しい口調で答えた。

「殺すか、だと。神殿に殺されるのか、の間違いではないのか。お前は私を利用して失敗した。私自ら手を下さなくても、じき黄緑の国の騎士達がここへ来る。そうすればこの国の者達は捕らえられ、神殿がその処罰を決めることになるだろう」

広間のあちこちで、小さな悲鳴が上がる。ブレイヤールの言葉は、クラムアネスよりもその家来達に大きなショックを与えたい。ブレイヤールはそれを制するよう、「ただし！」とすぐに声を張り上げた。

「神殿の力が及ぶのは、あくまで城の外。城の内ならば、王が判断を下す立場になる」

内心で先を急ぎすぎたと後悔しながら、ブレイヤールはクラムアネスに嫌々視線を戻した。クラムアネスの顔には彼の思惑を探る表情が浮かんでいる。

「この国を明け渡すのは、お前の方だ、クラムアネス。この国から利益を得ていた神官は、お前を生かしてはおかないだろう。その口から、神殿の者がこの国と関わったことが黄緑の騎士達に漏れると困るからな」

「.....本当に、黄緑の連中がここに向かってるんだろうね」

「信じられないなら、待つか？ 彼らの姿が見えた時点で、逃げ道はすべて封じられてしまうが」

「あたしにどうしろと」

「平原の人間達と共に石人の城で盗みを働いていたそうだが、その人間達はお前達の目を盗んで何をしていた」

「.....この国の子どもらは時々いなくなる。ここは城じゃあないから、魔物に食われるのは珍しくないし、崖の上で足を滑らせて川に落ちたかだろう。親もずっと見張ってるわけにはいかないからね」

「自分の国の石人が平原へさらわれていくのを、知らぬふりをして許していたのか」

ブレイヤールは胸のむかつきを、こみ上げる怒りとともにどうにか飲み込む。目の前にいるのはどうしようもない悪人だが、今の彼にはここで罰することもできない。自分が優位にあるという芝居を続け、相手を逃がす以外にないのだ。あまりのもどかしさにブレイヤールは眩暈を覚える。

「自分の命と引き換えに、償いをせよ。全員を調べ、連れ戻すんだ」

「それが、あたしに下された罰なのか」

ブレイヤールは自身への腹立ちをぶつけるように、クラムアネスをキッと睨んだ。

「神殿の判断は別に下されるだろう！ 私の判断はすでに下した。二度繰り返すつもりはない」

そう言ってあごをしゃくって見せる。クラムアネスは跳ね起きた。彼女はマントに引っかかった矢も構わず、振り返りもせず、広間から走り去る。ブレイヤールは崖の王が出て行った扉を背にすると、広間に残された彼女の家来達を見回した。

「城を捨て、神殿をも拒んだ罪は重い。この国はこのときをもって消えねばならない。私は白王として、この国の者達を白城に迎えるつもりだ。大空白平原の向こうでは人間達の戦があり、その戦火は白城に影響を及ぼしつつある。石人世界を保つためには、やがて境界を侵して我々の領域に入り込んでくる人間達を、彼らが友であれ敵であれ、白城で留める必要がある。白城は境界の砦の役割を果たさねばならない」

ブレイヤールは言葉を切る。

「神殿はお前達の罪を許さないだろう。しかしこれから白城で為すことは、その罪をいくらばかりかあがなう。我が子達に罪を引き継がせたくないならば、速やかに白城へ出立せよ。この国に残る汚れた財産は一切持って行ってはならない。必要なものはすべて城が与えてくれるだろう」

家来達は緊張の面持ちで、身じろぎひとつしなかった。しかし最初のひとりが広間から小走りに去ると、我に返った者達もそれに続く。そして駆け足となった最後の者達が雪崩を打って出て行く。ブレイヤールは広間にたった一人で取り残されてしまった。

「逃げたのか、それとも本当に白城へ行くつもりなのか」

ひとり呟き、手枷を見やって溜息をつく。今までのが全て一人芝居になってしまったら、なんとも締まらない話だ。

ふと顔を上げると、クラムアネスが去った扉が少し開いて、臆病そうにこちらを窺っている家来達がいる。ブレイヤールは思い切って、そちらに歩み寄った。白王が床に突き立った矢をよけながら近づいてくるのを見て、家来達は扉から姿を現し、床にひれ伏した。

「白王、どうぞお許してください。そしてどうか、我々を神殿からお守りください」

その言葉を聞き、ブレイヤールは内心ほっとした。全員が全員、逃げ出したわけではなさそうだ。彼は鷹揚に頷いて答える。

「そうしよう。そのためにも白城の家臣達にここの者達を受け入れるよう、書面を作らなければ。この手枷を解く鍵はあるか？ 神殿の印が入った物を魔法で壊すわけにもいかない」

「すぐに探してまいります」

ひとりが鍵を探しに立ち去ると、残りの家来達はブレイヤールを火の燃える執務室らしき部屋へ案内する。そして彼らもすぐに、着替えの服や食事を用意しに姿を消した。

安全な場所でようやく自分ひとりになれたブレイヤールは、強い吐き気を感じて机に腰をかけた。さっきのやり取りが、相当胃にこたえたらしい。

何十本もの矢の軌道を変え、クラムアネスの巨体を金縛りにするという荒業のために、身も心も消耗しきっていた。疲れた頭はまるで綿をつめたかのように鈍く、これ以上何も考えられない。けれども自分の想像も能力も超えたとんでもないことが、あの広間で始まったのは確かだ。

自分の人生が、この一、二日ですっかり変わってしまった。クラムアネスの前で見せた精一杯の虚勢を、これからも取り続けることができるだろうか。永遠に失うことになるこれまでの平穩

すぎた生活を思うと、先行きへの不安はいよいよ苦いものになる。

幸いにもブレイヤールには、先のことを思い煩う暇はなかった。休む時間もない。彼はあちこちの棚を探して白紙を引っ張り出すと、ルガデル口大臣宛に、崖の国の石人達を城内に入れるよう手紙を書く。あの黄色い髭の、常に王族の尊厳を説いてきた頑固な老人が、この手紙にどのような反応を示すか、間近で見られないのは幸いかもしれない。しかし手紙に従ってもらわなければ、ブレイヤールは崖の国の石人達に嘘をついたことになる。彼は強い調子の文を綴り、片耳の飾りはずして手紙に添える。手枷のせいで字が恐ろしく汚くなってしまったが、耳飾りを付ければこの手紙が本物である証になる。彼はその手紙を足の速い石人に託し、白城へ走らせる。

手枷の鍵は昼ごろになってようやく見つかった。その間にもブレイヤールは、崖の国の石人達の名簿を作らせ、坑道を回って人間世界で売りさばかれようとしていた商品の倉庫を見つけては、封印の紙を張っていった。

手枷がはずれると、ようやく着替えをすることができた。食事も運び込まれる。ブレイヤールは食べ終わるまでは誰も部屋に入れないよう外の石人達に伝えて、扉を閉める。彼は温かいスープをすすりながら、名簿に目を通した。崖の国にいた石人達が、すべて白城へ行くとは限らない。中には他所へ逃げるものもいるだろう。それを見込んでも、中規模の町ひとつが出来上がる人数になりそうだ。ブレイヤールは名簿を睨みながら腕を組む。

「どこに住んでもらおう。城内の町は上から石材が落ちてきそうで危ないし……」

クラムアネスの口ぶりから察すると、この崖の国は神殿や十二城に何らかの不満を持つ石人達が集まってできたように思える。十二城が創生された理由も、元をたどれば神殿支配からの開放だったが、初代国王達の処刑によってその効果は半減した。クラムアネスは次元としてはかなり低いが、神殿からも十二城からも決別した新しい生き方を模索しようとしていたのかもしれない。だからこそ、九竜神官に賄賂を贈ってこの国のことを見逃してもらっていた反面、同時に神官を見下し嫌ってもいた。

一方賄賂を得ていた九竜神官、つまり神殿側はどうだろうか。神官が金をもらって喜ぶとは、彼には考えられなかった。神殿は神話の時代に届くというその歴史の古さのため、非常に神聖なものである。そして同じ長さの時間、石人の世界に君臨してきたことでは、非常な俗っぽさも持っているはずだ。その神殿にとって、金などよりも欲しいものは何か。この崖の国から得られる大空白平原の人間の動向の方が、ずっと貴重なのかもしれない。ブレイヤールは頭を押さえる。——僕がこの国を白城に吸収したことで、神殿は何か言ってくるだろうか。十二国は初代国王がいたわずかな間だけだったが、神殿から解放されていた時代があった。不吉な名を持つ者も城にとどめられた。王は支配するためでなく、守るために存在する。守るといっても国民が全員神殿の罪人では、城は巨大な牢で、僕はただの看守でしかないだろうが。いやその前に、神殿はこんな状態で白城の復活を認めるだろうか。

ブレイヤールが今後のことについてあれこれ考えを巡らせていると、いつの間にやら、あのエランがへらへら笑いながら机の向こう側に立っている。ブレイヤールはあからさまに嫌な顔をして見せた。一番再会したくなかった相手だ。

「一体、どこから。部屋の扉は見張らせていたのに」



「抜け道があちこちにありましてねえ。クラムアネスは抜かりがなかったもんですから」

ブレイヤールはみなまで聞かず、外の見張りを呼びつけエランを羽交い絞めにさせる。エランは一瞬凶暴な顔を見せたが、すぐにまた卑屈な表情に戻って訴えた。

「いんえ、お待ちを！ 俺も改心したいんですよ！」

「うそだろ」

ブレイヤールがとりあえずも反応をみせると、エランは顔を輝かせて家来達の腕を振りほどき、机の上に乗出す。

「お前は人間だ。私にしたことは見逃してやるが、即刻空白平原へ立ち去れ。誘拐した石人の人身売買に関わっていたはず。クラムアネスはお前にまだ用があるだろう。私はお前に用はない」

「じゃあまさか、ニッガナムの方は死刑ってことですかい？ もう、やっちゃったとか」

「どういうことだ」

「姿が見えないんで」

ブレイヤールは思わず天井を見上げた。ニッガナムはいち早く逃げたのだろう。

エランの姿がいい加減煩わしくなり、ブレイヤールは家来達に命じて部屋から放り出させる。入れ違いに崖の国の住人が白城へ発ったという知らせが入る。

「飛脚に白城への手紙を持たせて、先に行かせた。その者達は道を急ぐだけでいい。ところで、クラムアネスはもういないのか」

「そのようです。お子様達の姿も、ありません」

「子どもをつれてじゃ、逃げ切れないんじゃないだろうか」

ブレイヤールは呟く。しかし今の彼には、ニッガナムやクラムアネスの様子を探らせるような家来はいない。彼の側に残るクラムアネスの家来達はまだ信用するわけにはいかない上、その実力にも疑問があった。彼は二人の追跡をあっさりとおきらめ、すぐに別のことへ心移す。それはアークラントのことだった。

——ディクレス殿は予言者の夢に希望を見たといった。けど、無人だった白城に石人が戻ってくれば、ディクレス殿は二度と白城には立ち入れない。アークラントは終わってしまう。予言者は本当に正しい未来を見たのだろうか。

長く考えている時間はない。再び部屋の扉が開き、クラムアネスが溜め込んでいた財宝や商品の目録が届けられる。それは机の上に溢れんばかりになった。さらに石人の魔法を練りこんだ武具が、大空白平原で出回っていることを確認する。ブレイヤールはまたしても、しばらく頭を押さえた。

戸口にはまだ残っていた崖の国の住人達が列を作り、自分達の難しい身の上と、やむを得ずクラムアネスに従っていた素性を話しに来る。中には、赤ん坊が不吉な名を待って生まれたために神殿に連れて行かれそうになり、親子ともどもこの国まで逃げてきたという者までいる。

黄緑の騎士達が到着する前に、彼は出来る限り自分自身の采配で、この崖の国を片付けてしまわなければならない。目録の山を整理し、石人達の身の上話を走り書く。これもすべて、崖の国の石人を白城に連れて行くための根拠とさせる。真の罪人はクラムアネスと一部の石人や人間だけで、他はすべて生活のため否応なしに利用させられていただけなのだ。

机の上があらかた片付いたのは、その日の深夜だった。ブレイヤールは壁にかかっていた風よけの布を床に敷くと、そこで横になる。疲れきっていたのに、彼は夢を見た。不思議なことに、それはディクレスに聞いた予言者の夢とよく似ていた。

揺らめく草原のはるか彼方から、淡い輝きが差し込んでいる。光の中にはケシ粒ほどの小さな影。歌うように両手を広げ、緩やかに動いているかに見える。あるいは、身動き一つしていないのかもしれない。空を覆う光が陽炎のように揺らいでいるのだ。そしてそのずっと手前に、背の高い人影があった。風が吹き、頭のあたりで何かがなびいている。長髪なのだろうか。人影は遠くの歌い手に心を奪われているかのように、ぴくりとも動かない。無音の世界で、光と草陰だけが揺らいでいる。

ブレイヤールは怪訝に思った。予言者の夢の中には、人影はひとつだったはずだ。近くにいる人影は、大声で呼べば声が届きそうだ。彼は息を吸い、声を出そうとする。そのとき、何かが彼の腕に触れた。驚いて振り返る。彼は自分が薄暗い部屋の中にいることに気づく。夢から戻ってきてしまった。

固い床の上に寝て、体は強張っていた。部屋のよろい戸の隙間から、弱い光が差し込んでいる。夜が明けかけているのだろう。痛む体を床から引き起こす。あまりにはっきりした夢で、十分寝た気がしなかった。頭はぼんやりして、心はまだあの夢の中にさまよっているようだ。

「大巫女様」

薄れ行く夢の余韻とともに、そんな呟きが口から漏れる。直後、くしゃみと一緒に、彼ははっきりと目を開けた。夢の中の感覚は、跡形もない。彼は夢を思い出そうと、前髪をぐっとつかんで両目を強く閉じる。

——予言者の夢が本当なら……。事は近い。

もう昼近くだろうか。木漏れ日も空しいほどに弱々しく、森は木々の影に暗く沈みこんでいた。頭上の鳥が枝葉を蹴って飛び立つ音、厚く枯葉の積もった地面を踏んで何かの獣が走り去る音。森の静寂をときに破る小さな生き物達の気配は、一人ぼっちではないという安心と、いつ危険な動物と出くわすかという不安の、両方をかきたてる。キゲイ達の足音に動物達も驚いているのならば、キゲイ達も彼らの立てる音にびくついていた。

女の子は大分遅れがちになってきていた。これまで休むことなく歩き続けただけでも、たいしたことだったかも知れない。キゲイは時々振り返って、彼女が追いつくのを待つ。

「ほら、山が近くなったろ？」

キゲイは木々の隙間から垣間見える、山の斜面を指差した。斜面を覆う針葉樹の黒々とした森は、金色の光の下で所々輝いて見える。向こうの空だけ、雲が晴れているのだ。

しかし女の子は何の反応も見せず、キゲイに追いつくとそのまま地面に座り込んでしまった。彼女のズボンは、転んだりよじ登ったりしたときに膝が擦り切れて、穴が開きかけている。両の手のひらも、擦り傷と寒さで赤い。

キゲイは溜息をついた。彼女がこうやって座り込む度に、彼は小川でもないかと辺りを見て回るのだが、いつも無駄骨だった。傷を洗う水も飲み水もなく、木の実ひとつ落ちていない。森は冬の終わりの佇まいで、食べ物は期待できそうになかった。おまけに夜のことを考えるだけで、希望も何もなくなってしまう。火無しで一晩過ごすことなど出来るのだろうか。風は日中の今でさえ、こんなにも冷たいのに。

キゲイは手に取った木の枝で、厚く堆積した枯葉の地面をほじくってみる。虫も出てこなければ、落ちた木の実も出てこない。

女の子が何か呟くのが聞こえた。それが人の言葉であったとしても、石人語ならばキゲイには分からない。けれどきっと、彼女は魚の言葉で何か言ったのかもしれない。

疲れ切った彼女を、伝わらない言葉や身振りだけで立たせるのは、至難の業だった。手を引いて立たせようとしても、彼女はがんと抵抗して腰をあげようとしなない。

「だめだったら！ 歩かないと、凍え死んじゃうかもしれないんだぞ！」

本当なら、もっと優しく接してあげないといけないはずだ。そうと分かってはいても、キゲイにはそれだけの余裕がなかった。いらいらして手加減を忘れ、強く彼女の腕を引くと、彼女の腕からぐりっと嫌な感触がキゲイの手に伝わる。次の瞬間、彼女はか細い声を上げて泣き出してしまった。

キゲイは慌てて手を離す。

「ごめん」

キゲイも泣きたいほどみじめな気持ちになる。ありがたかったのは、女の子はキゲイに対して、なにも怒っていなかったことだ。ただ腕を強く引かれたことだけを、悲しく思っているようだった。キゲイが彼女の肩や手に触っても、嫌がったりはしなかった。幸い肩の関節は外れていなかったが、変によじってしまったらしい。腕を動かそうとすると、彼女は顔を少し歪めて痛そ

うにした。

彼女が歩こうとしないなら、もう仕方がない。キゲイはその間に少し遠くまで探索することにする。待ってて、と声をかけて側を離れはじめると、それまで絶対に立とうとしなかった女の子が、大急ぎでキゲイの後をついて来た。きっと置いてけぼりにされると思ったのだ。無理矢理腕を引っ張る必要などなかったらしい。キゲイは女の子が追いつくのを待って、先に進むことにする。

木々が少しまばらになり、背の低い捻じ曲がった枝を持つ茂みが多くなった。大小様々な大きさをした青灰色の岩もごろごろしていて、歩きにくい。地面は西に向かって傾斜しており、キゲイはこの斜面を登るべきか降りるべきか迷いながらも、とりあえず横様に進んでいた。木立の影は薄くなっていても、辺りは岩や地面の起伏で見通しが悪い。太陽もすでに正午を過ぎて、夕暮れに向かって刻々と傾き始めている。

女の子はといえば、驚いたことにキゲイの足にちゃんとしてきていた。キゲイが岩の上に腰掛けると、彼女も立ち止まって同じように座る。今朝まではキゲイが彼女を引っ張って歩かなければならなかったのに、今では彼女の方が、キゲイが次に立ち上がるのを待っているようだ。――あの子、僕より寒さにもお腹が空いたのにも強いのかなあ。喉は渴かないのかな。魚だったから、喉の渴きには弱そうだけど。

キゲイは疲労でぼんやりした頭のまま、次に立ち上がるまでに斜面を登るか降りるか決めようとする。その隣で、唐突に隣の女の子が立ち上がったかと思うと、一人勝手に斜面を登りはじめた。

「えっ？ ちょっと、待って！」

今までは考えられない速さでずんずん登っていく女の子を、キゲイは慌てて追いかける。彼女はしばらく登って足を止め、岩の隙間に手を突っ込んだ。後を追っていたキゲイは、かすかな水音を聞きつける。足元の地面も、少し湿っているようだ。キゲイは岩場を調べ、斜面の上から水が流れてきているのを知る。泉か、小川があるのかもしれない。

「よし、登ろう」

キゲイは斜面の上を睨みつけ、声を出して自分を励ます。女の子は指先についた水を舐め、隣をキゲイが通り過ぎていくのを見る。キゲイがしばらく登った後に見下ろすと、彼女は湿った岩場を諦めて、のろのろと斜面を登り始めていた。

もう少しで登りきるといえるとき、上から何か小さな生き物が飛んでくる。ブンと力強い羽音が耳元をかすめ、直後にカサッと軽い音が足元に落ちた。キゲイは首をかしげる。虫にしては大きかったし、ひどく鮮やかな赤色だった。それは、夕暮れの日差しの色のせいだけではない気がする。

キゲイは最後に音のした場所を、石ころと枯枝をそっと掻き分け覗いてみる。尖った葉っぱを持つ枯れ枝の隙間から、透き通るような深紅の胴がみえた。まだ生きている証拠に、上に乗った枯れ枝が小刻みに動いてる。キゲイは枝を慎重に取りのけた。

それはキゲイの手のひらにすっぽり乗りそうな、綺麗で小さな生き物だった。柘榴を思わせる見事な赤色の細い胴、さらに濃い色をした長い尾と細い四肢。黒い鉤詰めは釣り針に似ていて、

長く湾曲している。背中にはもとは三対の見事な羽があったに違いない。七色が揺らめく透明な羽は、左側が二枚欠けてしまっていた。右の一枚も、半分が破れてしまっている。

羽と長い胴は、なんとなくトンボも思わせる。けれどもトカゲにも似ていた。もしかするとこれは、物語でよく聞く、竜の一種なのかもしれない。

華奢な胴部は、呼吸で腹の辺りが膨らんだりへこんだりしている。生きているみたいだが、動こうとしない。キゲイは拾った小枝の先で、竜の頭をそっとつついてみる。すると竜は自分をつついた枝ではなく、キゲイの方へ頭を上げて、威嚇するように口を開けた。胴の内側に明かりがともり、竜の開いた口から腹の中の光が漏れる。小さな口には小さな鋭い牙がびっしりと、綺麗に並んで生えている。竜はその口で枝に噛み付いた。枝が燃えることはなく、竜は噛み付いたまま、宝石みたいな紅蓮の瞳をきらきらさせている。

キゲイは用心して枝を持ち上げてみた。竜は食いついたまま枝にぶらりと垂れ下がった。腹の光がもっと強ければ、このまま吊り下げランプになっただろう。キゲイはこの綺麗な生き物が、すっかり気に入ってしまった。なんとかして懐かせたいと、竜を下から受けるように、こわごわもう片方でのひらを差し出す。

ところが竜は、キゲイに飼い慣らされる気はさらさらなかったようだ。キゲイの片手が自分の尻尾の下に差し出されるのに気づくと、ぱっと枝から口を離してキゲイの親指に噛み付いた。あまりの痛みに、キゲイは悲鳴をあげる瞬間も逃す。竜の食いついた手を勢いよく払うと、竜は岩場の向こうへぼーんと、オレンジの流星になって勢いよく飛んでいった。

キゲイは噛み付かれた指を確認する。突然噛まれた驚きと痛みで、腕が震えていた。傷口は竜の噛み跡だけに小さかったが、奥は深いらしく血がどんどん溢れてくる。

「うう、やっぱり無理かぁ……」

痛みをこらえながら首に巻いていた帯をはずし、その端っこを血の止まらない指にきつく巻きつける。周りを見渡すと、下から登ってきていた女の子が、竜の落ちた辺りに興味を示しているのが目に入った。

「だめ！ そいつはものすごく凶暴だから！」

片手に帯を握り締め、キゲイは岩場を降りていく。女の子が岩陰に手を伸ばそうとする前に、キゲイはすんでのところで彼女の襟首をつかんで引き止めた。岩場から先程の竜が羽をうならせて飛び上がる。腹部がまだほのかに光っていた。

竜は二人を無視し、傷ついた羽で不安定に斜面の上へ飛んでいく。キゲイはそれを目で追い、そして目を疑った。斜面の上の林に、赤やオレンジの小さな光がたくさん現われている。あの小さな竜の群れだ。もしあれが全部こちらに襲ってきたら、自分達は本当に食べられてしまうかもしれない。キゲイは血の気が引くのを感じ、女の子の肩を叩く。

「お、降りよう。早く！」

押し殺した声がかすれる。女の子は目を丸くして群れる光を見つめ、動こうとしない。

「早く！」

怖気づいたキゲイは思わず二、三步降りていた。何とか踏みとどまって、女の子の背に手招きをする。女の子の頭越しに、さっきの竜が光の群れの近くまで飛ぶのが見えた。竜は最後の瞬間

にきりもみをして、斜面の上近くに落ちる。光の群れの明かりが強くなり、キゲイ達の所まで羽音の唸りが聞こえてくる。竜達はすばやく木立の天辺近くまで舞い上がった。

次の瞬間、光が斜面に向かって急降下してくる。それと同時に黒い影が斜面に飛び出して、転がり落ちた。光はそれを追い、ある竜は取り付き、ある竜は失敗して再び上空に戻り狙いをつけなおす。光にたかられながら岩場を転がり落ちるものに、キゲイは見覚えがあった。

「レイゼルト！」

キゲイは叫んで、出来る限りの速さで岩場を降りる。竜の群れはレイゼルトを狙っていたのだ。

レイゼルトは半分走りながら、半分転がりながら、取り付いた光を払おうと両腕を振り回し、とうとう一番下まで辿り着く。体勢を整えようとして一度だけ背を伸ばしてまっすぐ立ち上がったが、再び光が体中に食いつき、地面にがばりとうつ伏せになる。何匹かの竜が、彼の体の下に消えた。

キゲイが追いつくと、レイゼルトは再び立ち上がろうとしていた。服は泥と血で汚れ、暗赤色の髪は乱れて顔にかかっている。竜が押しつぶされたはずの胸元は、潰れた竜のかわりに灰色の煙がくすぶり、焦げ臭さがキゲイの鼻につく。地面についた左手は血で濡れ、竜が二匹、手首に腕輪みたいに巻きついて光っている。彼は顎を上げ、髪の間からキゲイの顔を見たようだった。

レイゼルトが動きを止めた隙を、竜達は逃さなかった。光が彼の背中めがけて急降下する。キゲイの目の前で、レイゼルトはまるで背中から燃やし潰されるように見えた。キゲイは無我夢中になって、レイゼルトの背中にくっついた光を引きはがす。竜達は恐ろしい執念でレイゼルトの背中に食いついており、キゲイが無理やり引き離しても頭だけは噛み付いたまま残る。竜の体はキゲイの手の中で一瞬明るく輝き、かすかな煙を上げて消え去った。体内の炎で、自ら跡形もなく昇華してしまうのだった。

キゲイは首の後ろに熱い痛みを感じ、悲鳴をあげて仰け反った。首筋を叩くと、光が頭の後ろではじける。新しい傷のせい、光のせい、キゲイは頭がくらくらとなる。

レイゼルトは地面を転がり、体に取り付いた竜を潰そうとあがいた。キゲイは暗くなった視界を怪しみながら、一帯を縦横に飛びまわる光の数に絶望する。もう何匹もやっつけたというのに、数が減るところか増えている。竜の羽音で耳がおかしくなりそうだ。

「鏡を持っているか！」

うなり続ける無数の羽音にまぎれて、レイゼルトの叫び声がかろうじて聞き取れた。レイゼルトは相変わらず光を相手に、半分戦い、半分もがき苦しんでいる。キゲイは懐に手を入れる。ところが彼が迷いなく取り出したのは、あの三つ編みのお守りだ。

キゲイは飛び交う竜の光にお守りを突き出した。レイゼルトの言葉はすっかり忘れていた。かわりにあの幽霊を追い払った晩のことを思い出したのだ。レイゼルトがまた何か叫んだとしても、羽音でかき消されてしまっていただろう。それどころかキゲイは切羽詰って、お守りを使うことしか頭になかった。自分にとっては、銀の鏡よりもお守りの方が確実に信用できる魔法の品だ。キゲイはお守りの編み目に指をかけ、力いっぱい引き抜く。

編み目はキゲイの意志を汲み取り、自らゆるんだ。幾房かに分けて複雑に編みこまれた髪の

先は、まるで円陣を描く筆のように、ぐるりぐるりとほどけていく。青白い小さな稲妻が髪先ではじけ、糸巻きに巻きついていくかのように、だんだん大きな雷の玉になる。編み目がほどけきったとき、稲妻の玉が強烈な光を発して砕け散った。キゲイは片腕で両目を押さえ、光から目を守る。

レイゼルトのうめき声が聞こえ、キゲイは目を開けた。辺りはほとんど真っ暗に見えた。竜の発する光はひとつも見えず、キゲイは地面に這いつくばるようにして、レイゼルトが倒れていた場所まで辺りを探りながら進む。耳に何も聞こえなくなっていたのは、あれほどうるさかった竜の羽音が、突然消えてしまったせいだろうか。

キゲイの手がレイゼルトの体に触れた。ぜいぜいという早い息が、手のひらから感じられる。「あいつら、どうなった？ それに、もう夜になった？ あんまり、何も見えないよ」

キゲイは暗闇に向かって声を出す。その声すらも耳の奥というより厚い壁越しから聞こえてくるようで、自分の言葉だという実感がない。首筋は冷たくなっているし、竜に噛まれた左の親指は火にくべられたように熱く、痛みが心臓の鼓動にあわせて脈打っていた。

「みんな消えた。いいものを持っているな」

キゲイはそれ聞いて安心した。レイゼルトの体にかけていた手を引っ込めると、重く動かなくなってきた体を丸めて横になる。相変わらず指はずきずきして、首筋は冷たく痺れていた。横になると、まぶたも重くなってくる。そういえば、あの女の子の面倒を見るのをすっかり忘れていた。キゲイは半分朦朧としながら自分の責任を思い出す。けれども、それがその日の最後の記憶になった。あとは夢もない、真っ暗な底なしの眠りに落ちていく。

寒さに耐えながら、前後不覚に夜をやり過ごしたらしい。キゲイが目を開くと、辺りは明るかった。自分のすねの辺りで、女の子が丸まって寝息を立てている。後ろを振り返ると、昨日はレイゼルトがそこに倒れていたはずだが、今は姿はない。彼が倒れていた所の土や石ころは血で汚れたままだったから、昨日ここで彼に会って、たくさんの竜に襲われたのは夢でも幻でもない。

キゲイは何度か瞬きをし、目がおかしくないことを確める。気を失うように眠る前、突然目の前が暗くなったのはなぜだろうか。辺りの景色は暗闇に沈んで形を失っても、飛び交う竜の光だけはずっと明るかった気がする。

近くに水場があったことを思い出し、キゲイは重い体を引き起こした。渇きで喉がはれてひりひりする。斜面を細々と流れる糸のような流れを音を頼りに見つけ、狭い岩場に手を突っ込んで水をうける。何度か繰り返して水を飲み、空を見上げて太陽を探す。暖かな日差しが降り注ぐ仰角は、正午前後の時間を指していた。

ピーと、鋭く高い音が斜面の上で鳴る。音の聞こえた辺りを目で探すと、木立の影にレイゼルトが立っていた。昨日ぼさぼさになって顔を覆っていた髪は、今日は後ろにまとめて結んであった。彼は影から日の光の下に姿を現し、キゲイに手招きをする。キゲイがそちらへ登ろうとすると、レイゼルトは左手を動かして女の子も一緒に連れてくるように指示した。

「この先に水場がある」

レイゼルトはいつもの口調でキゲイに伝えた。こんなどことも知れない森の中で、キゲイに会

ったことも、見も知らない女の子がいることも、まったく驚いている素振りはない。まるでずっと一緒に行動していたかのようだ。とはいえ、レイゼルトの顔色は蒼白を乗り越して土気色をしていたし、竜に散々噛みつかれた背中が服の破れ目で毛羽立ち、目を背けたくなるひどい傷もあらわだった。キゲイも体のあちこちが痛く、疲労で頭がぼんやりして、何かに驚く元気もない。レイゼルトもキゲイと同じ状態なのかもしれない。

木立を進むとレイゼルトの言ったとおり、岩の崖の隙間から、冷たい水が湧き出して辺りをぬかるませていた。凍るほど冷たい雪解け水だ。三人で交互に水を飲んだ後、レイゼルトは汚れた穴だらけの上着を脱いで、それを水に湿らせる。そして背中中の傷口にそっと当てた。キゲイも竜に噛まれた指を洗い、帯を水で湿らせる。女の子はわずかに首をかしげながら、それぞれ自分の傷の手当てをする二人の少年を、不思議そうに見ている。

「で、なんでお前がここにいるんだ」

しばらくして、レイゼルトが背中中の痛みに顔をゆがめながら、キゲイに尋ねる。キゲイも熱を持った首筋に水を含ませた帯を当てつつ、歯を食い縛りながら答えた。

「知るもんか。僕だって好きでここに来たんじゃないのにっ」

「そうか」

レイゼルトはふっと同情するような表情を見せたが、次の瞬間に鼻から笑みを漏らす。それを見て、キゲイはますます機嫌が悪くなった。

「誰のせいでこうなったと思ってるんだよ」

「誰のせいかわかんない。私のせいだと分かったら、あやまってやる」

レイゼルトはキゲイの不機嫌もものともせず、右腕でキゲイの左胸を指し示す。キゲイはその腕を見てはっとした。破れた袖の中に先の丸まった手首が見えた。

「その胸ポケットに入っているものを出してみろ」

「いいよ。そのかわり、鏡はもうそっちに返す。鏡が色んな化け物を引き寄せて、お守りがそれを追い払ってくれてるに違いないんだ。きっと」

キゲイは懐から銀の鏡とお守りを取り出す。そして銀の鏡だけレイゼルトに突き出したが、あいにくレイゼルトは左手を後ろに回して傷口を冷やしていたので、受け取れない。すでに十分怒りを溜め込んでいたキゲイは、レイゼルトの口に銀の鏡を突き出した。仕方なしにレイゼルトは鏡を口で受け取ったが、おかげでそれ以上何も話せなくなる。彼は空を見上げ、鏡をくわえたまま傷を洗うのに集中した。キゲイもお守りを懐にしまう。

レイゼルトは首を傾けながら、口にくわえた鏡で太陽の光を捉えて反射させる。暗い木立に鏡の明るい反射が走り、キゲイは単にレイゼルトが光を反射させて遊んでいるだけだと思っていた。ところが不意にレイゼルトはその光を空に上げ、入れ替わりにその空から何かのぼとりと、蔓草の茂みに落ちる。

「今、何したの」

キゲイが尋ねるとレイゼルトは鏡をくわえたままキゲイの方を向く。キゲイは慌てて腰をかがめ、鏡の反射を避けた。レイゼルトは足元の苔に、鏡をぷっと吐き落とした。

「獵だよ。拾ってきてくれ。ついでにそっちに生えてる蔓も」



まだ腹を立てていたキゲイは不満を感じながらも、実際にはかなりの重症人であるレイゼルトの言葉には逆らえず、茂みに分け入る。茶色っぽいキジに似た鳥が落ちているのを見つけたが、両翼の羽根がきれいさっぱりなかった。どうやら鏡の魔力で羽根が砂になってしまったらしい。恐ろしいものだ。レイゼルトに鏡を返さない方がよかったかもしれない。

キゲイが鳥と葉っぱを持って戻ると、女の子が銀の鏡を拾い上げて遊んでいた。レイゼルトは石の上に腰かけ、ぼんやりというより朦朧とした目をしていたが、キゲイが戻ってくるのには鋭く気がついた。

「私はこの数日食べていない。おまえ達はどうか」

「一昨日の晩から何も食べてないよ……」

レイゼルトは頷いて、鳥を受け取る。彼はそれを平らな石の上に乗せ、魔法をかける。刃物を使わず血を抜き、火を焚かずに丸焼きを作るなど、魔法使いにしかできないだろう。レイゼルトが鳥の体に手を触れると、羽根はすべて砂になって舞い落ち、火に包まれて真っ黒焦げになる。その焦げた皮をはがすと、湯気を立てる柔らかい肉がでてきた。

「あの鏡、あの子に遊ばせておいて大丈夫？」

「魔法使いじゃないなら危険はない。鏡越しに太陽を見たら、眩しいだろうが」

鳥の匂いに釣られて、女の子も二人の側に寄ってきた。その隙にキゲイは女の子から鏡を取り上げる。女の子はすでにレイゼルトが裂き分けたキジ肉しか目に入らなくなっていた。三人はしばらくものも言わず、味付けも何もない肉をほお張る。レイゼルト自身は食欲が振るわなかったのか、少しだけ食べた後はずっと、キゲイや女の子の様子を注意深く観察していた。

あらかた食べつくしてしまうと、レイゼルトは見計らって、キゲイになぜこの森にいるのか尋ねる。空腹がとりあえず落ち着いて、キゲイも話す気になっていた。黄緑の城で人さらいに会ったことから話したが、ブレイヤールの身の上が今頃どうなっているか分からず、キゲイは肩を落とす。

「人の心配をする状況じゃない。今は私達も危険な場所にいる。私の連れもはぐれて、このどこかでさまよっているはずだ」

「連れ？ それに、ここどこなの」

「ここは石人世界の真ん中だ。星の神殿が治める山地だが、徒歩では遠すぎる。お前はそこのお守りを手放さないようにしろ。目には見えないが、この森は色々な精霊がいて、無防備な魂を常に狙ってる。人間は格好の餌食だ。お前のお守りも、随分力を使ってしまった。気をつけろ」

「精霊って？ あの白いお化けみたいな奴は、僕にも見えたんだ。あれは精霊じゃなかったってこと？」

キゲイはあの晩女の子を追いかけた、背の高い光のような影のことを思い出す。今思えばあれは幽霊のような不気味さはあまりなく、深い森の底にたつ白霧のように神秘的なものだった気がした。危険な存在なのは確かだが、どこか強く心を惹く何かがあった。美しいものは人を魅了するが、美しすぎると逆に恐れられる。そういった類のものだ。キゲイは影が触れた左腕に視線を落とした。レイゼルトもキゲイの視線の先を横目にとらえる。

「触られた跡のあざが、消えたんだ。治ったのかな。もう痛くないみたいだし」

「いや、消えたんじゃない。浸透したんだ。骨まで」

レイゼルトは低い声で答える。ぎょっとした表情に変わったキガイに、彼は少し声のトーンをあげた。

「異界に属する者に触れられた、火傷跡みたいなものだ。お守りを持っていたから、その程度ですんだ。寒い日なんかには神経痛みたいに痛むこともあるかもしれない」

キガイは半信半疑で腕をさすった。それから思い出して、銀の鏡を懐から取り出す。レイゼルトは黙ってそれを受け取った。

「ようやく戻ってきた。私が探していたものを引き連れて」

止血の布でぐるぐる巻きになった左手に鏡を握ったまま、レイゼルトは鼻で笑う。キガイはそれに顔をしかめる。

「はぁ？ ……よく言うよ。誰がそれをこっちに押し付けたんだ」

「石人に好かれやすいのかもな、お前は。白の王族、普通の石人、普通じゃない石人、人さらいの石人に、石人の亡霊。色々な石人に会っている」

「鏡さえなかったら、僕は一人で石人世界に取り残されることもなかったんだ。石人に会うのだって、なかったはずなんだ！」

まるでからかうようなレイゼルトの態度に、キガイは怒って今までずっと心に秘めながら、誰にも言えずにいた言葉を吐き捨てた。言ってしまうと、さらに新しい怒りがこみ上げてくる。その言葉で硬くしめられていた心の栓が抜けたように、怒りはキガイの胸にひたひたと注がれる。しかし怒りはどこかで歯止めがかかっていた。銀の鏡があったから、ディクレス様はブレイヤールに会えたと、ブレイヤールもアークラントのことを気にかけるようになったのだ。それは嫌でも認めなければならない。何とも気分が悪い。レイゼルトは自分を利用して、何か大きなことをしようとしていた。なのに自分は何も分からないまま、知らされないまま、相手の言いなりになって鏡を受け取り、お人好しにもここまで捨てずに持ち続けた。そんな自分自身にだって腹が立つ。消化不良の怒りは、はけ口もなく、キガイの胸で澱むしかなかった。

「石人の世界だってめちゃくちゃだよ。君が黄の城を襲ったって。もしかして砂にしたの？ アークラントも今頃どうなってるか、もう分からないっていうのに……」

キガイはレイゼルトから目を逸らし、歯を食い縛りながらつぶやく。脇を見やると、女の子は横になって寝息を立てていた。彼女だけは何の悩みもなさそうだった。レイゼルトが右腕を伸ばして、女の子の額に手首の先を当てている。

「その、本当に石人を砂にしたの。さっきの鳥みたいに」

キガイはレイゼルトにそっぽを向けたまま、よそよそしく尋ねる。もし本当なら、答えなんか聞きたくなかった。かといって聞かずにいられるほど些細なことでもなかった。

レイゼルトは長い間だまっていた。風の吹きすぎる音と、それに揺れる木々のざわめき、時折単調なそれらの音をみだす鳥の羽ばたきが、沈黙の時間を埋めていく。あまりにずっとレイゼルトが答えないので、キガイは待つことに耐え切れず、首を落として目を閉じた。二人の石人の姿が視界から消える。

耳に入る森の気配や、湿った土と木々の匂い、頬に当たる冷たい風。それらはキガイの暮らす

里の森とほとんど同じだった。多くが年経た古木で、洞が口を開け、雷や風で裂かれた古傷を持っている。若い森は東にあって、里はその森を追って百年に一度引越しをするのだ。再び目を開ければ夢も消えて、故郷の森で昼寝から目覚められるのではないかという、淡くはかない期待もかすめる。

「私は石人を砂に変えたことがある。七百十年前のことだ」

レイゼルトが口を開き、キゲイは現実に戻された。顔を上げると、片手で鏡をもてあそびながら、憂鬱な表情を浮かべるレイゼルトの横顔が見えた。彼はキゲイの視線に気がつくとも鏡を膝に置き、てのひらに蔓草の葉を一枚乗せる。見る間に葉は濃い緑色を薄め、褐色の砂と崩れる。レイゼルトはその砂を握りこみ、顔の前まで上げるとそっと手を開く。手から舞い落ちたのは砂ではなく、先程の葉っぱだ。キゲイはぽかんと口を開けた。砂からもとの形に戻るの、はじめて見た。

「これが今と昔の違いになるかもしれない」

レイゼルトは腕を下ろしながら呟く。彼はあぐらをかいたまま、両膝にそれぞれ腕をあずけて、楽な姿勢をとる。

「私にこの違いを与えたのは、アークラントが関係している。アークラントの起源を知っているか」

キゲイは首を振る。レイゼルトは別段それを責めることなく、先を続けた。

「七百八年前、トルナクという建国もない小さな国があった。今のハイディーンがある辺りだ。一方石人世界では、私は滝に落ちて死んだことになっていた。しかし私はそのまま川を流され、トルナク近くの川辺にうちあげられた。禁呪の異常な力で不死不老を得たとしておこう。私はそれから季節が二巡するまで川べりから動けず、呼吸同然に生死を交互に繰り返していた。助けたのはトルナクの初代王だ。彼は私を連れ帰り、王妃とともに養い親となってくれた。当時の人間達は、石人の存在をまだ恐怖をもって記憶していた。彼らが不死の石人に驚くことも恐れることもなく、自分の子ども達と同じ館に住ませたのは、勇敢だったと今でも感嘆する。私は生まれて初めて人としての生活をおくらせてもらい、人の心というものを教えてもらった。

彼らは賢い人達だった。魔法については無知だったが、不死不老の者がこの世を生きていくのに必要な全てを確信的に知っていた。それは人のいる所でもいない所でも、一人ぼっちであろうと、ともに暮らす仲間がいようと、生きるのに必要な知識と技を、普通の者より徹底して学ぶことだった。天候と人の心を読み、植物や鉱物の特性を知り、狩りや織物の手業を体に染み覚えさせる。魔法やその他の学問は二の次だった。なぜならそれらは、最初の学びの中で得た知識と技を、単に系統立てて整理したものだからだ。彼らが最も大切にしたい教養は、何だったと思うか？」

「狩り、かなあ」

「いいや、誰とでも仲良くやる方法だ」

「一番大事な教養を全部忘れたら」

キゲイは口を尖らす。レイゼルトはニヤッと笑って、すぐ真顔に戻る。彼は声を落とした。

「それから百年余りが経ち、トルナクは北から異民族の侵略を受けた。トルナク最後の王は人々

をアークラントの地へ導いた。そこには地読みの民、エツ族をはじめ先住の人々がいたが、王は敵が背後に迫っていたにもかかわらず、自分達を彼らの地へ受け入れてくれるかどうか、彼らに使いを送り許しを請うたという。後に彼は英雄と呼ばれるようになり、国の名をアークラントと改め初代国王となった。

その後も時代の混乱が続いたが、アークラントは戦のたびに国土を広げ、ついに有史初とも言われる広大な国へと成長した。竜骨山脈が分かつこの大陸において、アークラントこそが西の覇者かつ世界の中心と謳われ、大陸中の富が王都に集まっていた。しかし衰えというものは避けられない。新たな時代の混乱はアークラント国内から起こり、巨大な王国は姿を消した。英雄の血を継ぐ王家の誇りは始祖たるアークラントの地でささやかに取り戻されたが、全ての栄光は過去にしかなく、それも伝説と化した。今のアークラントはわざわざ攻める価値もない、貧しい小さな国だ」

「……じゃあなんで、ハイディーンやエカが狙うの。ほっといてくれたらいいじゃないか」

「連中は歴史も血統もない、辺境の蛮族だからだ。アークラントのかつての威光は、伝説として今も大陸中に残っている。アークラントの地を手に入れることで、彼らは多くの国を従わせる名を得る。かつてのアークラントの版図を掲げ、国土を広げる大儀を得る」

レイゼルトはキゲイに炎色の瞳をすえた。

「もし彼らがアークラントに大空白平原への抜け道があると知れば、アークラントの価値は跳ね上がるだろう。険しい地形と多くの国々で阻まれ、手を伸ばしても届かない西部の富を、東西を繋いで横たわる平原を通じて得られるのだ。しかしその抜け道はアークラントでさえ、最近になるまで忘れ去られていた。ハイディーンやエカが抜け道の存在を知るときがあるとすれば、アークラントに入ってからだろう。彼らには、最後まで知らぬままでいてくれた方がいい」

「まるでアークラントはもう滅びるみたいに言うね……。予言者様は、英雄が現われるって言ってたじゃないか」

レイゼルトの話しぶりに動揺を覚えたのか、自分は所詮アークラント人じゃないという一抹の後ろめたさのせいか、キゲイの抗議の声は途中から消え入りそうになる。レイゼルトはもしかしたら、ディクレス様以上にアークラントを取り巻く困難を知っているのではないだろうか。知っていてそれをディクレス様に伝えるわけでもなく、こんな森の中でキゲイ相手に話している。

「君はオロ山脈の抜け道を、最初から知ってたの」

とがめるように尋ねると、レイゼルトは首を振った。キゲイの質問は答えを聞いたところで、何か意味のあるものではない。しかしレイゼルトは、キゲイの感じていることをおぼろげながら汲み取ったらしい。

「私は石人で、しかも本来ならこの時代には生きていないはずの者だ。不死不老は生命と人の世に対する不器用で不確かな欺きだ。世に関わってはならない。何をしようと出すぎたまねだ」

レイゼルトはうつむく。彼は口の端を引きつらせて、やや陰険な笑みを浮かべた。

「なのに、その出すぎた真似をしているんだ。予言者は己にしか見えぬ、ひとつの未来を語った。ディクレス前王は予言された未来に賭け、アース現王は国に留まって目の前の未来に立ち向かおうとしている。私も予言に動かされた。アークラントが石人世界に向かうのなら、私にもできる

ことがある。トルナクの初代王は私の恩人で、アークラント王家は恩人の子孫だ。私はあの王家に恩を返したい」

「石人のことは？ 皆、七百年前のことを思い出して怖がってるみたいだ」

「滑稽だな」

レイゼルトは神妙な口調を一変させ、そっけない言葉を吐く。彼は少し姿勢を崩した。額が汗ばんで、苦しそうにも見えた。傷のために熱が出ているらしい。

「滝から落ちて以来、石人世界と関わりを持たずに来た。そして時の終わりに戻ってきた。私は私で始末をつけることがある。アークラントにかこつけてあの世から蘇ったかのように姿を現して見せたが、軽率だったかもしれないし、何かの役に立ったかもしれない。確かめる機会はないが」

レイゼルトはふっと息を吐き、左手の布を解いて傷の具合を確かめる。

「動けるなら、他にも少し薬草を集めてきてくれないか。私の傷は今夜から明日にかけてが峠だと思う。だが、明後日になったらとにかく動こう。私の連れは飛べるから、合流できればすぐに神殿の都市に向かえる。そこでなら治療も受けられる。お前は人間だから、私が傷を見たほうがいいかも知れないが。傷が膿まないよう、まじないをかけてやる。首の噛まれた所はたいしたことはない。髪の毛が当たらないように帯を巻いとけ。指の噛み傷の方が深い」

「分かった。でも、治療って？ この子も、神殿で見てもらわないとって、言われてたんだけど」

キゲイは呑気に寝ている女の子を指差す。レイゼルトは頷いた。

「神殿の治療より、別のものが必要だ」

「……僕、この子のこと、まだ何も話してないはずだよ」

半ばうんざりして、キゲイは愚痴った。どうもレイゼルトは何もかも見通しすぎる。それが彼の魔法使いとしての資質にあるのか、七百年も生きた年の功にあるのか分からない。わざわざ見せてもいないのに、キゲイの怪我の具合も知っているし、女の子がどう具合が悪いのかも察したようだ。自分自身重い怪我と熱で頭が朦朧としているはずなのに、よくそこまで人を観察できるものだ。それでも感心よりも反感を覚えてしまうのは、なぜだろう。

「この子、湖から突然現れた子なんだよ」

キゲイが探りを入れるとレイゼルトは鋭い視線を向けた。キゲイが怯むと、レイゼルトは視線はそのままに、頬を緩ませる。

「知ってるんだな。誰から聞いた」

声色はかなり厳しかった。キゲイは視線で射抜かれ、標本台の上にピンで留められた虫にでもなった気がした。絶対に認めたくないが、絶対に勝てない相手だというのが身に染みる。キゲイはこれが最後のあがきと思いながら、ささやかな抵抗のつもりでブレイヤールとの約束を厳守することにする。

「聞いたことは、誰にも、話すなって言われた。石人にも話すなって」

つかえながらもどうにか答えると、レイゼルトは少し驚いたような顔をして、鋭い視線から解放してくれた。

「石人にも話すつもりがないなら、安心だ」

そしてキゲイを手で追い払う仕草をする。勝手なものだ。キゲイは口を尖らせ、葉草摘みに出た。

レイゼルトは鏡を手に取り、ちょうど目を覚まして伸びをしている女の子に目をやった。彼女はキゲイが側に居ないのを知って、真っ白で緩やかな曲線を描く額に眉を寄せた。卵の殻みたいな額だ。しかしレイゼルトがいるのを見て取ると、彼の方に淡い空色の大きな瞳を向ける。血の匂いをぷんぷんさせて、瀕死の石人が座って何をしているのか、不思議に思っているのかもしれない。

レイゼルトはこの女の子が、人よりも魚の目で自分を観察しているように思えた。それくらい、瞳の裏にある感情が読み取りにくい。その顔つきは無垢や無知とは言い切れない、原始的で年齢不詳の知性が宿っているようにも見える。

「名前は？ 自分で記憶しておかないと、そのうちお前の名前を知る者はいなくなる。他の石人は、七百年も生きない」

無駄かもしれないと話しかけたが、やはり答えは返ってこない。レイゼルトは女の子の空色の瞳に、細かな金色の網目が浮かんでいるのに気がついた。彼は黄緑の城の神魚を思い出す。あれは空色の地に金色の鱗を持っていて、黄緑色の体に見える。

「空白平原の都市に、私の仲間を待たせている。もしこの世に行き場を失くしたなら、彼のところに行ってみる。それが紫城に。そっちには幽霊のきれっばしがいるかもしれないが、城の本来の姿を見ることができる。……紙と筆が手に入ったら、書き残しておいた方がよさそうだな」

レイゼルトはそれ以上女の子の相手をするのをやめて、鏡に目を戻す。

キゲイは妙な大鳥にさらわれてこの森に運ばれたと言っていたが、実際は鏡がこの女の子を自分の側まで導いたと考える方が正しい気がしていた。レイゼルトの方は真っ赤な竜達に追われながら黄の城からここまで逃げ切り、そこでアニュディの体力に限界が来て森に墜落した。これももしかしたら、墜落したのではなく何者かに着陸を強いられたのかもしれない。

キゲイ達をさらった大鳥が、いったい誰に操られていたかは分からない。十二城の初代国王達がそれぞれの城の最深部で今も生き続けているのなら、神殿において彼らの同僚であり、歴史上において消息がいつの間にか途絶えたもう一人の石人も、いまだ石人世界のどこかにいるかもしれないのだ。

――やはり神殿に向かうのが正しいのか。

つらつらとそんな事を考えていると、ひどい眠けに襲われる。すると女の子が立ち上がって、彼の体を強く揺さぶった。彼は目を覚ます。丁度キゲイが両腕に様々な葉や蔓、菌類の生えた木の皮に根っこつきの大葉まで持って、戻ってくる。

「アークラントの抜け道から大空白平原へ出て、ひと月くらい経っている気がする」

森を巡るうちに機嫌を直したキゲイは、レイゼルトに尋ねた。

「ひと月半になるかもしれない。神殿都市まで行ったら、すぐに白城まで戻れるよう手配する。ありがとう、キゲイ。後は私がやる」

キゲイはレイゼルトに植物の山を手渡した。レイゼルトは、明後日になるまで自分に絶対近づ

かないようキゲイに言いつけて、遠くに見える巨木の根元に横たわる。キゲイは言われたとおりにした。時々向こうの様子をうかがっても、レイゼルトは血の気の失せた顔で横になったまま動かなかった。

気味が悪いほど年を取った巨木の足元で、鮮やかな赤い髪と、紫紺の上着の色だけが木陰に浮かび上がっている。キゲイはその光景に、不思議な感じを覚えた。七百年前もレイゼルトは似たような場所で、ああして深手を負った体を休めていたのかもしれない。レイゼルトが横たわる場所と自分の立つ場所との隔たりに、七百年の時の幅たりが一瞬重なった。キゲイは胸に手を当てる。銀の鏡はもうそこにはなかったが、その方がよかった。鏡はレイゼルトのいる方へ戻り、キゲイの胸には三つ編みのお守りがあった。レイゼルトと鏡は、キゲイ達とは全く異なる世界へ戻りつつある。キゲイはくるりと背を向けて、自分達の過ごす場所を探す。

キゲイと女の子は、体力を温存するために翌日もほとんど動かなかった。レイゼルトがあらかじめ幾つかの石に火の魔法をかけてくれたおかげで、夜も凍えることはなかった。わずかな山菜を石で焼き付け、飢えをしのごう。

まだ夜も明けきらない真っ青な時間、レイゼルトは約束どおりにキゲイ達を呼びに来た。キゲイはレイゼルトが片手に何かぶら下げているのを見て、目をこする。イタチに似ているが、毛皮には黒い文字に似た縞模様がある上、尻尾は二股に分かれ、頭だけ爬虫類の鱗で覆われている。

「それ……」

「小さい魔物」

レイゼルトは二日前よりもはっきりした声で答えた。身のこなしも怪我を感じさせないほど素早く、彼は魔物を右腕に引っ掛け、苔むした平たい岩に近づく。岩の上に左手を置くとその手の下で岩は砂に変わり、砂を払うと小鳥の水飲み場のような窪みが岩の上にできていた。そのくぼみの中に魔物を横たえ、レイゼルトは手をかざす。すると魔物の体が白みを増して泡立ち、一瞬にして透明になったかと思うと、とぽんと水音を立ててくぼみに溜まる。キゲイはそっと岩の上の水溜りを覗き込む。水面は青暗い空と枝葉の影を映して震えていた。

「……砂にするだけじゃなくて、水にもできるの？」

「これは禁呪じゃない。魔法で時間を早めただけだ。岩が砂になるのは自然だし、死んだ魔物が水に変わるのも自然なことだ」

レイゼルトは女の子を招き寄せ、溜まった水を飲むよう身振りで示す。女の子は身を乗り出して、水たまりに直接口をつけた。レイゼルトはその様子を見守りながら、言葉を続ける。

「人間も獣も最後は土に帰るだろう。石人は死んだら石になって、最後は砂になる。魔物は水になる」

「……これ、飲んで大丈夫？」

「この世で最も純粋な生命の形と言われる。魔法にかかって心を失った者や、魂を失った者、あるいは今まさに死にかけている者だけに効く。普通の水と混ぜるとしばらくは溶け合わず、粒になって浮遊するが、そのうち力を放散してただの水に変わる。具合の悪い者の体の中で、力を放つのが効くんだ」

レイゼルトはキゲイに湯気の立つ葉っぱの包みを手渡した。開けてみると、半熟の小さな蒸し

卵が顔を出す。キゲイは湯気を吹いた。卵をすするキゲイの隣で、レイゼルトは話を続ける。

「魔物は自分の縄張りを持っている。それはいわば彼らの聖域だ。自分の聖域を侵す者を魔物は食う。連中は腹を空かせてものを食うことはない。己と出自の異なる生命を、自身を形作る生命の水の中へ戻すために食う。石人世界の地下深くには、生命の水でできた地底湖があるらしい。魔物が死んで水になると、大地に染みて地下水脈に落ち、生命の水は地下水に混ざる。水と溶けあわなかったものはさらに下に染み落ちて、その地底湖に還るそうだ。水は希薄なほどに澄み通り淡い光をまとって、明かりの差さない地下で湖だけが暗闇に浮いて見えるらしい。地底湖に溜まる生命の水は地下水が川として染み出すのと同様に、魔物達を再び地上に送り出す。魔物達の聖域が複雑に絡む石人世界で、我々が暮らせるのは神殿と城だけだ。神殿は魔物達を狩り続けることで魔物が持つ聖域の空白地帯を、いわば石人達の聖域を確保している。魔物狩りの儀式には生贄が必要だが、城では魔物狩りの必要はない。生贄もいらぬ。城自体が聖域だから」

「生贄って。この小さい魔物を捕まえるときに、君、何かを捧げたの？」

「血を少し。しかし、足りないだろうな」

「それは……」

「盗人は追われる」

レイゼルトは立ち上がった。

「仲間が水に戻されたのを嗅ぎつけられる前に、出発しよう。まとめる荷物はないか」

「ない。すぐに歩けるよ」

女の子が最後の一口をすすると、レイゼルトは出発の号令を出した。朝日はまだ山の下にあり、空と雲だけを照らし出して稜線と森の影を際立たせている。三人は夜の寒さが残る森を、白い息を吐き、身を縮めながら進んだ。レイゼルトは時々足を止め、瞑想するかのように立ち尽くす。魔物達の聖域の隙間を探すのだ。レイゼルトが立ち止まるたびに、キゲイは女の子を自分の隣に伏せさせ、邪魔をしないよう二人して息を潜めた。森は小鳥の姿ひとつなく、他の獣の気配もなく、朝靄を漂わせ、いつ破られるとも知れない静寂の下にあった。レイゼルトが再び歩き出し、柔らかな地面を踏みしだく音がすると、キゲイは詰めていた息を緩ませてほっとするのだった。

日が昇り木漏れ日が地面を暖める頃になると、森は物言わぬ生き物とともに目覚めていく。三人はそこでようやく足を止め、キゲイは辺りを偵察し、一休みに丁度いい陽だまりを見つける。並んで腰を下ろしそれぞれに両足を伸ばして、凍えた体を日に当てる。キゲイはレイゼルトの様子をうかがった。顔色はまだいいとはいえない。竜に噛み付かれた頬の傷は、赤黒い筋になってふさがりかけていた。左手の噛み跡も血は止まっているらしい。一番ひどい背中の傷は広げた帯で隠しているから分からない。でもおそらく前よりは良くなっているだろう。

「大丈夫だ。死なないし、気絶もしないから」

キゲイが心配そうに自分を見ていることに気づいて、レイゼルトは苦笑する。そんな二人の様子をじっと眺めていた女の子が腰を上げ、二人の前に立った。キゲイ達が不思議に思って彼女を見上げると、彼女は上着の裾下から小さな布の包みを取り出し、差し出してくる。レイゼルトが目配せし、キゲイはどこか見覚えのある包みを受け取ってそっと開いてみる。中には粉々になっ



た焼き菓子があった。

女の子が不明瞭な発音で何かを言った。レイゼルトはその言葉に耳を傾け、彼女の発音を確認するように同じ言葉を返す。もっともキゲイの方は、焼き菓子しか目に入ってなかった。

「いままでずっと持ってたの！」

キゲイが叫ぶと、レイゼルトは脇から手を出して、かけらをつまみ上げた。

「彼女は『おみやげ』だと。……水がないと、とても飲み下せそうにないな」

キゲイは丁寧に包み直し、自分の懐におさめる。これ以上女の子に持たせていたら、焼き菓子は小麦粉に戻ってしまうだろう。女の子はやや不満げな顔をして、元の場所に座り直した。

この日は正午過ぎに、沼のほとりで歩くのをやめた。沼は比較的大きく、その上には曇り空が広がっている。レイゼルトは再び魔法で狩りをして、野兎を二羽捕らえて来た。さらに彼は、銅色に輝く大きな羽根も帯にさしていた。キゲイの腕ほどの長さで、向こうが透けるほど薄い。一枚の鏡のようになめらかなのに、指で裂いたりまたくっつけたりできるところは、紛れもなく鳥の羽根だ。

「近くにいるのかもしれない。探しに出るから、ここで待っててくれ」

ささやかな昼食の後、レイゼルトは森へ姿を消す。キゲイは大きな銅の羽根を片手に、この羽根を持つ翼がどれほど巨大なのか想像しようとした。その翼を広げて飛び立つとしたら、ひらけた沼のほとりは丁度いい場所かもしれない。

キゲイの想像に反し、夕暮れ近くにレイゼルトが連れ帰ってきたのは、石人の女の人だった。ただの石人と言いたいところだったが、そうも言えないくらい猛烈に怒り狂っていた。

キゲイが最初に聞いたのは、森の奥から突っ切って届いたわめき声だ。高い声で文句を言っているらしいと思えば、今にも泣き出しそうな震え声になったり、叫び声になったりする。キゲイはそれでレイゼルトが戻ってきたのを知ったのだが、出迎える気持ちというより待ち構える気分になった。女の子はといえば、声に恐れをなして木の根っこの影に身を潜めてしまう。

やがて夕暮れの森から二つの影が現れる。一つはレイゼルトで、もう一つがその怒れる石人だった。とにかくひどく怒っているようで、ひと時も黙らない。片腕をレイゼルトに引かせていたが、もう片方の腕は宙を探るように動くときもあれば、いらいらと拳を振るうときもある。激しい怒りとは裏腹に、歩みだけは随分ゆっくりと慎重だ。その歩き方とレイゼルトの介添えの仕方、キゲイは女の人を目が不自由だと知る。

森から沼に出ると、レイゼルトはどうにも收拾がつかない連れを、乾いた場所に座らせようとした。ところが彼女の振るった拳が運悪く背中に命中し、飛びずさるようにして彼女から離れる。あっと悲鳴をあげたのはキゲイだけだ。女性は手の感触によくないものを感じてぐっと押し黙る。当のレイゼルトは痛みに顔をゆがめ、唇を噛んだままキゲイの隣を足早に通り過ぎた。通り過ぎざま彼は、

「私の名は彼女には言うな。少し、頼む」

と苦しそうにキゲイに伝える。キゲイは覚悟を決めて、女性の側に駆け寄った。

「背中に大怪我してるんだ。手を振り回したら、危ないよ」

女性はキゲイの声へ顔を向ける。耳の上で切りそろえた栗色の髪と、まぶたを閉じて瞳の色が

分からないために、彼女はほとんど人間に見えた。肌の色合いも褐色を帯びていて、アークラント人と似ているかもしれない。丸っこい鼻と唇をした愛きょうのある顔立ちは、元来人がよさそうだ。キゲイは、彼女が人間だったらよかったのにと考えた。正直石人ばかりに囲まれているのに疲れてきていたのだ。

女性は眉をひそめて難しい表情をつくり、それからしばらくして、キゲイと同じ「言の葉」で尋ね返した。

「誰？」

キゲイが言葉に詰まると、女性はレイゼルトの背に当たった手をさすり、血の匂いを嗅ぎ取る。彼女は心配そうな顔つきになり、再びたどたどしい「言の葉」で言葉を搾り出す。

「私、彼に何した？」

「そっちの手が怪我したところに当たったんです。向こうに逃げて痛がってるだけだから、大丈夫だとは思いますが……」

「そう。……悪かったわ」

先程の怒りが嘘のように、女性はしょんぼりと肩を落とす。

「ところで、君は誰？ 彼の友達？」

「キゲイです。友達かどうかは分からないけど、知り合いなのは確かだと思う」

「変わった名前ね。私はアニュディっていうの」

アニュディはキゲイを人間だと、少しも気づいていないようだった。

「もしかしてキゲイ、彼の名前、知ってる？」

キゲイは慌てて首を振り、それだけではアニュディに伝わらないことに気づいて言い直す。

「えっと、知らないです」

「うそ。さっき知り合って、言った」

「だって……。あいつ、言うなって」

言いながら、キゲイはみるみるうち、アニュディに再度怒りの炎が燃え立つのを見た。彼女はキッと顔を上げ、「ガラ！」とよく通る声で一声叫んだかと思うと、怒涛の石人語で何かをまくし立てる。キゲイは恐れをなして彼女から離れたが、彼女の境遇をうすうす感じ始めていた。キゲイ同様、彼女もレイゼルトに利用された一人なのだ。だとしたらアニュディの怒りも分かるし、自分だって同じようにレイゼルトに怒鳴り散らしてもよかったのかもしれない。レイゼルトの射抜くように鋭い目と向かい合えば、そんな大胆な真似はとてもできたものではない。しかしアニュディにはできるのだ。

「好きなあだ名で罵れ！ 私の名前なんか、知らない方があんたにはいいんだ！」

レイゼルトが遠くから「言の葉」で言い返した。アニュディはさらに石人語でわめいたが、そのうちとうとう頭を抱えてしゃがみこみ、子どもみたいにわんわん泣きはじめてしまった。

「僕だけじゃなく、この人も巻き込んだんだな」

アニュディの側へ戻ってきたレイゼルトを、キゲイは呆れ気味にとがめる。レイゼルトは明らかに不機嫌な顔つきだった。

「私も万能じゃないんだ」

レイゼルトはぼそっと呟いて、アニュディに水で湿らせた布を渡した。

「これで顔を拭いて、血のついた手も」

アニュディは大人しく言われた通りにした。これではどちらが大人か分からない。とりあえずも平静を取り戻したアニュディは、乱れた髪を指ですき、立ち上がりながらスカートを引っ張って皺を伸ばした。

「少し落ち着いたわ。この数日、口にしたものといえばキツネの生肉と生の骨が少し。人の姿に戻れば、魔物や狼の餌食になるのは分かってるし。おかげであやうく自分が人だってこと忘れそうになって。自分がどんなところにいるのかも分からないし……。ひとりぼっちで、とにかくものすごく怖かったのよ」

幾分沈んだ声で、アニュディはばつが悪そうに説明する。キゲイは懐から焼き菓子の包みを取り出し、彼女に手渡した。レイゼルトも飲み水を用意するため沼の方へ去る。アニュディは焼き菓子を指で探り、口に運んだ。そして微笑む。

「甘いわ、うれしい。これ全部もらっていいの？」

「うん」

キゲイは言葉少なに答えた。アニュディの剣幕に恐れをなし、木の根の下に隠れていた女の子も、ようやく顔だけを出してこちらをうかがっている。レイゼルトは魔法で器の形に掘り抜いた石に、水を入れて戻ってくる。アニュディは焼き菓子と水を堪能し、満足げな溜息をついた。本当に嬉しそうだ。

「子ども三人を乗せて、飛べるか。飛んでも数刻はかかる」

レイゼルトが珍しく遠慮がちに尋ねる。焼き菓子のおかげで空腹と心を癒されたアニュディは、いつもの忍耐と賢さを取り戻していた。彼女は余計な質問はせず、朗らかに答える。

「長距離は苦手って言わなかったっけ。ま、後のことを考えなくていいなら、飛んでみせる。掴まれる場所は首の後ろから背中の上までしかないから、墜落の心配をしなきゃいけないのは、あなた達の方かもね。あと一人はどこ？ 紹介してちょうだい。ちゃんと自己紹介できたら、その子ども乗せてあげていいわ」

「自己紹介できない子だ。魚の姿で、長年湖で暮らしてた。人の心を忘れて、自分の名前も知らない。あなたも危なかったようだが。私にあだ名をつけたように、彼女にも何か呼び名をつけてやってくれ。不便で仕方がない」

アニュディは眉を寄せ、唇を尖らせた。秘密だらけの三人の子ども達に辟易しているのだろう。

「……ウージュ。女の子なんでしょ」

「そっちはいい呼び名だな」

レイゼルトは答えて女の子を連れに離れる。レイゼルトの足音が遠ざかるのを聞きつけて、アニュディがキゲイに尋ねた。

「ウージュって、どういう意味か、君、分かるかな？」

「えっ……」

キゲイはレイゼルトの背を見送りながら、不安げに呟いた。アニュディはやや硬い笑みをわず

かに口の端に浮かべている。

「答えられないの？ 石人語なのに？」

キガイが黙っていると、アニュディの口から笑みも消えてしまった。それはキガイにとって、恐ろしい瞬間だった。

「正直に答えなさい。あなたは誰」

キガイは音を立てないよう細心の注意を払いながら、アニュディの側から離れようとする。一方アニュディは、そんなごまかしは効かないとばかりに、キガイの方を向いて腰に手を当てた。そこへ幸いにもレイゼルトが戻ってくる。

「キガイは人間だ。白城のあたりで起こっていることを、聞いてないのか。キガイ、ウージュは石人の古語で、『少女』という意味を持つ」

レイゼルトは足早に二人の間に割って入り、アニュディの手に女の子の手を握らせる。

「ほら、ウージュだ。彼女を怖がらせないでくれ」

「……人さらいの天才ねえ、あなたは。人間ですって？」

アニュディはこめかみを押さえ、しばらく自分の殻に引き籠もってしまう。ウージュはアニュディに手を握られたまま、困った様子でその手を見つめている。キガイとレイゼルトは、彼女の次の言葉を待った。あとは彼女の決心次第だ。

やがてアニュディは、ゆっくりと頭を起こす。彼女の決心は明快だった。不死の石人だの、なぜか石人世界にいる人間だの、変身後遺症の石人だの、ともかく今は大した問題ではない。食べ物がない以上、この森にとどまる必要は皆無だ。

「よし！」

アニュディは一声上げると、姿を変えるために両腕を広げる。キガイ達は彼女から距離をとった。キガイの隣で、レイゼルトが珍しくほっと安堵の息を吐いた。

## 十四章 英雄譚

彼は再び草原に立っていた。やわらかな輝きが大気に満ち、視界を淡く霞ませている。空は銀色の光に満たされ、純白の雲を一面に浮かべていた。まるでこの世のものとも思えないこの場所は、はかない神々しさに包まれている。

足元の草は芽吹いたばかりの若く柔らかい春の野草で、花を持つものもまだつぼみは固く未熟だ。彼方をまっすぐ見やれば、はるか地平の向こうにひとつの人影が、輝く空から浮き立っている。ほっそりとした影は動かない。大気を漂う光の粒子は、その影の向こうから湧き出しているようでもある。

――あそこにいるのは、誰だ。

草原と空だけの世界で、不思議なことに彼は自分が南を向いていることだけは、はっきりと知っていた。眠るとき、彼は南に顔を向けて横たわったのだ。草原で身じろぎすらためらう彼は、ベッドの中でも寝返りをうつのを恐れて、体をこわばらせているはずだ。

――確かめねば。

トゥリーバは思い切って足を上げ、芽吹いたばかりの草を踏みながら人影に向かって進んでいく。この世界が歩みの途中で消えてしまわないか、いつも恐れていた。そして不意にすべてが暗転し、魂がベッドに横たわる自分の体に引き戻され、寒々しい暗い部屋で目を覚ましているのに気づくのも、いつものことだった。

額をうっすらと湿らせていた汗をぬぐい、ベッドから身を起こす。寝返りを打つまいと力を入れていた両肩は、すっかり固まっている。窓に寄って雨除けの革布をあげると、きらきりと最初の朝日が部屋に差し込んだ。彼はまぶしさに目を細める。

――あの太陽とは違う。あの世界を照らすのは、太陽の影のようだった。光の影だ。

それから彼は眉をひそめた。隠された未来や過去を夢から拾い上げるのは、夢見の家系に生まれた彼には小さい頃から慣れている。湖の波打ち際に様々なものが流れ着くように、夢が未来を彼の意識に打ち上げるのだ。ところがこの夢だけは分からない。いったいどのような未来を、彼の意識に漂着させたのだろう。どんなにもっともらしい夢解きも、納得のいくものではなかった。

アークラントの先王は、あの夢に満ちる光を信じた。アークラントの人々は、自分達の心を覆う絶望から逃れようと、予言を希望そのものと受け取ってしまった。まるであの夢に現れる太陽の影を、太陽そのものだと勘違いしてしまったかのようだ。

「あの夢の中で、何が確かなものだ。あの人影だけだ」

彼はつぶやいて頭を抱えた。差し込む朝日が煩わしくなり、柱の影に身を隠す。夢の中に満ちる光も、同じくらい煩わしい。光のおかげで見るべきものが隠れてしまっているのではないか。そのとき、ふと別の考えが頭に浮かんだ。

――あの夢は、私の夢ではないのかもしれない。あの人影が見る夢に、呼び込まれただけなのかもしれない。あるいは、この石人の大地そのものが見ている夢なのかもしれない。

ここにいても、永遠に答えは出ないだろう。未来が実現する前にその形を見定められねば、予

言者ではない。いても立ってもいられなくなり、彼は旅身支度を整え、先王の部屋へと向かう。

日に日をついで、一瞬たりとも足をとどめない勢いだ。アークラント首都から一人の地読みの里出の将軍が、ディクレスの元へ様々な知らせを携えてやって来たのは。ディクレスは配下の一軍をラダム老将軍に預け、平原の町を隊商らしく転々とさせていたが、自身はタバッサの宿に潜み本国からの使者を待ち続けていた。

長旅で汚れた姿のまま、リュウガ将軍は面会に訪れた。

「これが我が国の状況です。いよいよ時間は無くなっております」

彼は単刀直入に、テーブルの上にくつもの紙束を広げ、丸まらないよう四隅に重石を載せていく。一刻も惜しい彼は宿に馬を乗り付けてから、駆け足で部屋に飛びこんできた。息を切らせたままの彼に、ディクレスは自ら水差しからコップに注いで手渡す。リュウガ将軍は簡単な作法でそれを受け取り、一息に飲み干した。その間にディクレスは並べられた紙束へざっと目を通す。好ましい情報がないのはもとより分かっていたが、予想外の最悪な情報もなかったのは、嬉しいことかもしれない。

「エカとハイディーンの様子は？」

「春は我々の所より、彼らの方に早くやってきます。彼らは再び兵を集め、鍛錬を始めていると思われま。ハイディーンが早くに軍を整えられるでしょう。エカは様々な民族の混成部隊ですから、出足を揃えるのに時間がかかります。両国とも相手の出方をうかがう姿勢を見せていますが、どちらかが痺れを切らせば、両軍とも怒涛のごとくアークラントになだれ込んで来ましょう。ハイディーンが西の山麓を越えるのが早いのか、エカが東の谷を突破するのが早いのか」

「彼らが動き出す前にこちらも動かねば、間に合わぬか……」

ディクレスはこの上なく難しい表情で首を振った。

「そこの報告にない事柄も少々ございます」

リュウガ将軍の言葉にディクレスはすぐに顔を上げる。

「奇妙なうわさに過ぎません。ただ、首都から駆けて来る道中で、行く先々の地主や厩の者が口にしておりましたのが、同じ話でしたので」

彼はそう前置いて、本人も首をかしげながら言った。

「晴れた日に、空を鳥のようなものが一直線に横切ったのを見たというのです。雲よりも高い場所を飛んでいるようなのに、その姿は決して小さくは見えなかったと。シルダ丘陵の者は竜といい、エベニサ市の者は怯えきって夕の鴉かもしれないと言いました。ティト族の者達は彼らの信奉する鳥の神だと言い張り、ネリ峠の者は蝶か蛾の夢が日の出を横切っただけと話しました。いずれにせよ空に普段見ないものを見たようで、吉兆ととる者もいれば、たくさんの魂をあの世へ運ぶために遣わされた不吉な影ととる者もいます」

「それはどこからどちらの方角へ飛んで行ったのだ」

「我が国を北から南へ。噂を集めれば、それは夜明け前に少なくともアークラントの北部に入り、日暮れまでにはシルダ丘陵に達していたようです」

「竜に、鴉に、獣神に、蝶の幻影か」

ディクレスが唸りながら本気で考え込むそぶりを見せたので、リュウガ将軍は慌てて付け加えた。

「国はこのような状況です。変わったものを目にすれば、誰もが不安に駆られ、大げさに思い込んでしまったのでしょうか」

将軍はつまらない雑談で時間を無駄にしたと後悔しながらこの話を打ち切り、本題に入った。

「かの地で、希望は見つかりましたか？ 英雄はおいででしたか？」

ディクレスは真剣な様子の将軍に、まっすぐ視線を向けた。その顔には何かしらの不敵な明るさと、忍び寄る絶望のあい混じった奇妙な表情がある。

「英雄はいまだ見出されぬ。だが、希望の卵は見つかったように思う。問題は、いかなる手段でその殻を砕くかだ」

「それはどのような意味でしょうか」

抽象的な表現を好まない将軍は、鼻白む。彼は用がすみ次第アークラントへ戻るつもりでいたため、そわそわと落ち着きがなかった。

「石人に会ったのだ」

ディクレスは短く答えた。将軍はその答えが良いものか悪いものか、判断しようがない。先王は続ける。

「私が出会った石人はまだ若く、多くの力を秘めながらも、それを現すことを禁じられた、亡国の王だった」

「……その方は、我々に力を貸してくださるのでしょうか」

「それはないだろう。彼は石人であって、人間の世界には、まして我々の存亡には何の責任も持たない」

「では私は、どのような報告を持って帰ればよいのでしょうか。予言者殿の言う希望と英雄を、国の者達は信じて待ち望んでいます」

「彼が見たのは希望ではない。未来だ。希望を見たのは、むしろ私の方だった」

ディクレスが苦笑いを浮かべる。リュウガ将軍はそれを探索の失敗と捉えるしかなかった。

「信じるべきは、やはり我ら自身の意志しかないということですね」

将軍はそう言いながらも、やや肩を落とす。ディクレスは一瞬将軍の肩越しに遠くを見たが、すぐに視線を戻して首を振った。

「予言がなければ、我々をこの地へ導く決心はなされなかったかもしれない。私はこの巡り合わせと、かの地で見つけた希望を、そのまま離すことはしない。急ぎこの町に残した兵達を、平原の各拠点へ配置する。ラダム将軍は平原で食糧を買い集めているが、呼び戻そう。将軍は次の知らせを持ち、国王へお伝えせよ。拠点を辿って大空白平原へ逃れ出る手はずが整ったと。時が来た」

「では、アークラントは……」

「民がおれば、国は再建のともし火を失わぬ。恐らく国王は、この知らせに驚かれることもないだろう」

ディクレスは低く静かな声で言う。決然とした信念と深い憂いが、その目にあった。リュウガ

将軍は一礼すると、それ以上何も尋ねることなく、無言で退出する。戸口で彼は予言者の姿を見たが、一刻も早く国へ戻るために、挨拶の暇さえ惜しんで立ち去った。

入れ違いに部屋へ現われたトゥリーバを、ディクレスは手を上げて側に招きよせる。予言者は身軽で粗末な旅姿だ。

「私の役目は終わったようです」

予言者は自分から口火を切った。部屋の外でリュウガ将軍とのやり取りを立ち聞いた彼は、先王の言葉を恐れていた。自分の予言は、ただ人々を惑わせたただけだったのか。それどころか自らの予言を見失いつつあった彼は、身の置き場も無くしていた。

「どうか、暇をください。私は石人の地へ向かい、探したい人物がいるのです」

「確かに我々はまだ、そなたが予見に見たその人物に会っていないように思う。私は幸いにして、会うべき者に会えたが」

ディクレスは安堵とも溜息ともつかない息を吐いて、予言者の言葉に答えた。

「エカ領内の一民族であったそなたが、集落を滅ぼされ、放浪の果てにアークラントへ現れたのは、この予見のためだと聞いた。そのためだけに滅び行く国へ立ち入ったそなたの予言者としての覚悟と、その予見そのものを、私は信じている。我々の時は満ちてしまったが、予見ははまだ成就の時を迎えていないようだ」

「あなた様は私以上に未来を見抜いておられるようです。それ故に私の予言を公にせず、夢見のみから得た言葉を人々に表わされた」

「私は王であったから、現状から未来を推察し、それに対して事を行うのが常だった。今の私にはごく近い未来しか見えぬが、そなたの予言はもっと先を見ているような気がしてならぬ。だからこそ滅びに瀕する国で、その予言を明らかにするのは危険だったのだ。しかしそなたの予見には近い希望がある。私は国の者達をそこへ導こうとしている」

ディクレスは脇の櫃から、一枚の地図を取り出した。それを口を引き結んで黙り込んでしまった若い予言者に渡す。

「空白平原の商人の中には、禁を犯して石人と取引をする者達もいるようだ。危険だが、彼らの力を借りれば、石人領内に詳しい者に出会えるかもしれん。彼らは常に用心棒として、魔法使いを連れて石人世界へ忍び込むらしい。そこに取り入って石人の地へ行くことも可能だろう。地読み達の地図があれば、万一のことがあっても、一人でここへ帰ることができるはずだ。それは白い城以南からわずかな範囲までしか記していないが、ここにある唯一の石人の地の地図だ」

トゥリーバは地図を受け取った。

「己で見失った夢見を、今一度探しに参ります。どのような未来であろうとそれを見届け、私の夢見を信じた方々に報いるつもりです」

予言者はその言葉を残し、部屋を立ち去った。

一人残されたディクレスは、ベッドの脇にかけられたアークラントの地図へ目を向ける。立ち去るべき者は全て去り、来るべき者達を迎え入れる時がきたのだ。

「ディクレス殿は恐ろしい方だ」



ブレイヤールは一人呟いた。これから起こるかもしれないと思うと、身が震えるようだ。

本人からそれと聞いたわけではない。しかしブレイヤールは自分の考えがさして間違っていないことを確信していた。なぜならば、もはやそれしかアークラントの人々を救う方法はなかったのだ。それは大きな犠牲を伴いながらも、国を存続させるために残された、唯一の選択だった。――空白平原は決して王も国も受け入れない。無理に住み着こうとすれば、平原の人間達全てを敵に回すことになる。

だからディクレスは石人の世界に目をつけた。そこは人間にとって得体の知れない土地ではある。それでも、石人が住めるなら人間も、という意識があったのかもしれない。アークラントの書庫に埋もれていた古文書には、石人の城の記述もあったろう。石人の地に来て、彼らは実物の城を発見した。それは遙か昔に滅び廃墟となっていたが、石人が住んでいないのは彼らにとって願ってもないことだったろう。たとえ廃墟でも、遺跡は新たな都市を築く指針と礎になる。彼らが目にした巨大な白い遺跡は、期待していた以上の希望となるはずだった。

ディクレスにとって石人の魔法の宝など、この地へ赴く方便に過ぎなかったのだ。彼は宝を探させる一方で、その実、地読みや家来達に廃墟の具合を調べさせていた。構造の痛み具合はどうか。人が住める場所はあるか。なによりそこは安全なのか。

長く廃墟であった白城の土は、荒れて貧しいものとなっていた。しかしアークラント国民の勤勉な手と背中ならば、荒野も緑の耕地に変えられるはずだ。遙か昔、異民族に追われて人々がアークラントに移ってきたときも、そうだった。

それらの希望も、白城に石人が住んでいたということで大きく揺らいでしまった。ディクレスがブレイヤールと言葉を交わした晩、つかみかけた希望は再び幻に変わった。ブレイヤールはディクレスの目論見を見抜き、これを許さなかったのだ。七百年前、石人と人間との間で取り交わされた約束は、石人にとってはまだ生きてものだった。そして、石人が人間を嫌う気持ちは、昔よりもずっと強くなっていた。空白平原の人間達を、石人がどれほど目障りに思っていることか。

滅んではいても十二国の王の一人である彼は、人間を受け入れるわけにはいかなかった。ディクレスの目論見に気づいていたからこそ、アークラントの運命についても同情せざるを得なかった。結局彼はあいまいな態度しか取れなかった。本来ならばあの場で彼らの希望を全て断ち、国へ追い戻すべきだったのだ。いや、そもそも境界の森を越えさせるべきではなかった。

「もう引き返せない」

ブレイヤールは横になり、目をかたく閉じる。

アークラントの動きを知ってから、彼は流れる時の歩みが、これまでにはなく自分の身を刻み、閉ざされていた未来を拓きながら進んで行っているような気がしていた。それはなんとなく心で感じる、あやふやな感覚だ。アークラントの運命に巻き込まれた瞬間を、無意識のうちに感じ取っていたのかもしれない。その運命はどれほどの人々を巻き込み、どこへ向かおうとしているのだろうか。多くの犠牲もまた、必要とされているのではないだろうか。

――境界石の向こうから、人間達がやって来た。石人の世界にも、深く沈んでいたものが浮かんで来た。石人達がもっとも忘れようと努めた、忌まわしい戦いの記憶。アークラントがこの地へ来

たら、石人達はどうする？ 七百年前と同じことが繰り返されるだけだ。石人も白城も、彼らを受け入れることはできない。受け入れてはいけない。境界石の誓いを守らねば。

暗闇の中、アークラントの大地がまぶたの裏に浮かぶ。

アークラントの人々は、ハイディーンにもエカにも馴染まないだろう。ハイディーンはアークラントの全てを自分達の様式で塗りつぶす。エカはアークラントを丸飲みして、王家の血筋をも消化してしまうだろう。そのどちらも、アークラントを滅ぼす。古い血を継ぐアークラント人であること、英雄の血筋を王家といただくこと、どちらもアークラントを建国当時から支えてきた人々の誇りだ。

――しかしアークラント王国は長く続きすぎた。大陸の中央で肥大した帝国が周辺の国々を圧迫し、戦火は人間世界の辺境にある我が国まで飲み込んだ。長き平和にあり、かつての強い意志と誇りを保守と頑迷に鈍化させてしまった国が、この時代にあって滅びるのは当然かもしれない。だが民がいる限り、我々に諦めるという選択肢はない。真の地獄はこの世にしかないのだ。無上の楽園もしかり。どのような形であれ生き延びることが、新たな国の萌芽に繋がることもあるだろう。たとえ石人の世界に落ち延びたとしても、帰還の日は訪れる。その日は、運命の紡ぎ手たる老いて幼き神がお決めになることだろう。

夜は白みかけ、机の上に広げられたアークラント王国の地図は、光に描線を滲ませながら再び暗闇から浮かび上がってきた。ディクレスはいまだ見えない運命の虚空を凝視する。アークラント国民のために、白城が必要だった。このままこちらだけが行動を起こせば、白城を巡って石人と戦になるだろう。

――白王を動かさねば。

それがアークラントの全てだった。そしてその最後の手立てをいかにすればよいのか、彼には最良の策を考える時間はもうなかった。

アークラントの王都アルスには、春を予感させる暖かな風がそよぎ始めていた。オロ山脈の雪解け水を運ぶトルナク川は、冷たい水面をやわらかな日差しにきらめかせ、朝方に降った雨は、見渡す限りの若い麦畑や大地の緑を鮮やかに洗っていた。街角を飾る木々は、芽吹いて間もない柔らかい葉から雨露をすべらせ、石畳の水たまりをはね散らす。

それらの美しい情景を、活気ある一日の始まりとして目に留めた者がいただろうか。少なくとも現アークラント国王の心をとらえはしなかった。春の乙女たる女神の歩みは、すぐ後ろに血まみれの戦神を連れているのだ。

王は城の見張り台からじっと、大地の彼方に目を凝らす。彼の側には、昨年徴兵されたばかりのまだ髭も生えていないような見張りの兵が、緊張の面持ちで控えていた。やがて見張り台に軍師の長が現われ、その若い兵に席を外すよう合図する。

「陛下、こちらにおいででしたか。みな会議室に集まっております」

「あの陰気な部屋で、悪い知らせを待つことほど気の滅入ることはない」

軍師長の言葉に、王は背を向けたまま答える。

「俺は驚かされるのは好かん。悪い知らせはやってくるより先にこちらから掴みたいのだ」

「ここ最近になってから、国境付近にて思わしくない報告が増えました。もはや悪い知らせなど、珍しくもございません。掴む手はいくらあっても足りないのです」

「いや」

王は腕を上げて彼方を指差す。

「一番悪い知らせは、身内から来るんだ」

軍師長は王の指先に目を細める。南へ向かって消える街道の道筋は、一人一人の姿もない。

「国境からの知らせも、あれで最後かも知れん」

王は、北へも顎をしゃくってみせる。北からの道には五つの黒い点が、こちらに向かっている

。

「ひどくやられているな」

王は呟き、指先で手すりをこつこつと叩く。五つの黒い点はやがて、五騎の傷ついた騎兵の姿になった。

「裏の城門から入れましょう。市民が動揺いたします」

「いや、市中を通らせる。南から来る最悪の知らせを掴みに行く前に、民にも覚悟を決める時間が必要だ」

「会議はいかがしますか」

「我々が取るべき行動は決した。鐘を鳴らせ。あの騎兵達を迎え入れよ」

王は手を叩き、先程追い払われた若い見張り兵を呼び戻す。入れ替わりに彼は軍師長を伴い、鐘の音を背にして会議室へと向かった。

「ディクレス様のもとへ使いに出たリュウガ將軍は、まだ戻りません。帰りを待つべきです」

会議室で王を待ち受けていたのは、彼の決断に従うことを渋る重臣達がほとんどである。しかしアークラント王は、父親譲りのすさまじいひと睨みで彼らを黙らせた。

「では將軍が指示を抱えて戻ってくるまで、敵に待ってもらおうとでもいうのか。先程の知らせを、耳を塞いで聞かなかったとでも？ エカが国境を突破した。指示を待つ猶予など、もうないのだ！」

机の上に拳をぶつけ、王は一同を見回す。

エカ帝国が先に進軍を開始したのは、誰もが予想だにしていなかったことだった。エカにとっては、ハイディーンに背後を突かれることも覚悟の上の進軍である。エカの軍勢は数こそ少ないものの、ハイディーンに追いつかれる前にアークラント深くへ進行しようという心積もりらしい。エカの兵士達もそれだけに焦っており、アークラント最後の国境の守りも、あっという間に突き崩されてしまったのだ。

「エカの進軍が呼び水となり、ハイディーンも時をおかずして軍勢を整え、攻め寄せてくるだろう。もはや我々に敵を押し戻す力はない。逃げ場を持つ先住の民は身を隠し、アークラント人は全て、国外へ逃れねばならぬ。ふれを出し、仕度をさせるのだ。さもなくば命の保障は敵方次第だ」

反応の鈍い家臣達に、王はいらいらと怒鳴った。国境から王都までの道筋には、もう殆ど兵は残っていなかった。王都を守る軍を動かし、時間稼ぎをする他はない。それは王自らが、逃げ

る国民達の背後を守ることを意味する。それほどの切迫した危機は、家臣達にも理解できるはずだった。それでありながら決断を渋るのは、先王へのあまりに強い依存心がある。トゥリーバの予言もまた、奇跡と英雄の出現を待ちたいという思いを強くさせていた。

アークラント王は額に指を当て、机から身を引いた。動かない家臣への怒りと焦りで、腕が震える。ディクレスが大空白平原に出立する際に、いよいよのときは国を挙げて逃げ出すと皆に言い残してくれていれば、家臣達も彼の言葉にすぐ従ったかもしれない。しかしディクレスは、息子である彼と、信頼できるわずかな家臣にしかこのことを話さなかった。当然だ。石人世界へ旅立つ先王へ人々の期待が集まっているときに、そのような話をすれば、人々を不安のどん底に陥れるだけだったろう。

軍師長が見かねて、他の家臣達をいさめようと口を開く。しかし王は彼を止めた。王は暫くうつむいたまま、会議机の下で拳を握る。そして、唸るように言葉を搾り出した。

「謹んで聞くのだ。峡谷を越え、大空白平原へ逃げるのは、先王が私にくだしおかれた命である。英雄の探索が間に合わねば、そうせよとお達しであった。……我々は、間に合わなかったのだ」

その言葉は、渋っていた家臣達に誰が自分達の主であるかを思い出させた。自分達が今の主にどれほど屈辱的な思いをさせてしまったかも。

彼らは自らの非礼を恥じ、王に忠誠の礼をする。そして与えられた命を果たすため、次々と会議室を後にする。軍師長はずっとうつむいていたが、彼もまた礼をして最後に去っていった。一人残された王は大きな溜息とともに、硬い木の王座に沈み込んだ。

彼は王冠を継いだ日のことを思い出す。あれからまだふた月と経っていない。あの日彼に渡された王冠がどのような意味を持っていたか、宮廷魔術師の老ザーサ以外に気付いた者がどれだけいたのだろうか。彼が自ら王位を先王に求めたのは、先王からはとても言い出し難いことだったからだ。しかし王位は彼が継がねばならなかった。それは単に彼が先王の息子だったからではない。彼が先王の代わりに大空白平原へ行っても、それは何も生み出さないからだ。彼の才量は先王と別のところにあり、国に留まることこそが彼の役目だったのである。先王が英雄王の再来と呼ばれるまでの人でなかったら、彼がそう呼ばれていたかもしれない。皮肉なのは、アークラントが必要とするものを己は持っていないと、誰よりも彼自身がよく知っていたことだ。

王はのろのろと立ち上がる。彼は父親同様体が大きく、背の高い王だった。代々使われている会議室の王座は彼には窮屈すぎ、長い間座っていると腰が痛くなる。彼は気の進まない様子で会議室から出る。これから都の国民達に、大意は国を挙げて逃げ出すということを、もっともらしく、そして名誉の退却らしく言い聞かせなければならない。

――トルナク最後の王にして、アークラント初代王となった英雄王の退却の話を引き合いに出そう。あのときも今も、敵に追い詰められた状況は同じだからな。そうすれば混乱を最小限におさえ、士気を維持したまま統率の取れた行動ができるはずだ。逃げる先では、先王が待っておられる。

途中、王は妹である王女に鉢合わせた。彼女は不安で顔色が良くなかったが、気丈に振舞っていた。今年十五になるはずの彼女と王が並ぶと、ほとんど親子に見えるくらい年が離れている。

王は立ち止まることなく大股に歩き続け、王女は小走りにそれを追いかけた。

「兄上、知らせの者達の手当てはすみません。でも、城門前に人々が大勢集まっています」

「知っている。お前は急ぎ城の者達に、ここを発つ用意を整えさせよ」

「どこへ参るのですか」

「父上のおられる場所だ。予言者が言っていただろう。南に最後の希望がある。希望とはこちらから迎えに行かねば、重い腰を上げんものだ。お前は先に立って、皆を導け」

「私に務まるでしょうか」

「そのはずだ。我々は偉大な王家の血を引いているんだ」

「兄上はどうされますか」

「兵を率いて最後に都を発つ。落伍者を拾いながら後を追い、皆の背後を守る」

「はい」

王女はそれ以上時間を無駄にしなかった。彼女は一礼をして足を止め、守りの印を宙に描いて兄の背を見送った。

古い山々に隠されるようにして横たわる、秘密めいた湖がある。その湖と一筋の谷を隔てて、石人最古の都市が広がっていた。空から一望した都市は灰色の頑丈な石造りに見えたが、市中を歩くと黄緑の城同様に木造の彫刻であちこちが飾られ、レンガ造りの場所も多い。通りの構造は石人の城と同じく、地面を荷車などが通る輸送にあて、その両脇に建ち並ぶ建物の二階、三階の側廊が歩道として使われていた。しかし建物は石人の城ほど高層ではなく、高いものも物見台を除けば五階くらいまでだ。キゲイの目にはどちらかというところタバッサの街並みを思い出させた。道行く石人達の雰囲気も城と違い、どこか優雅でのんびりとしている。顔に、色とりどりの不思議な模様を描いている人が多いのも、城と違う。

石人の都は、アニュディの活躍の場だった。普通の石人である彼女は普通の暮らしを心得ており、キゲイとレイゼルトに普通の石人の振る舞いというものを求めた。それが素性のそれぞれに怪しい二人を守る、唯一の手段でもあった。レイゼルトのような重傷人はベッドで横になっているのが普通だったし、石人語が分からないキゲイは、無口ではにかみ屋の人見知りな子を演じるのが無難だった。

翼のある巨獣の姿で都市に降り立った彼女は、迎えに出た役人に嘘の身の上と本当にあったことを上手に織り交ぜて話した。つまり、自分達は黄緑の城から神殿で治療を受けるためにやって来た一行で、ウージュは変身後遺症の治療、レイゼルトは怪我の手術、アニュディ自身は二人を引き受けた診療所の職員兼運び手で、キゲイはその見習い助手。ところが来る途中、強風で墜落して持ち物を失くし、森をさまよった挙句魔物や野獣に追いかけられ、身一つで都に辿り着いたという筋書きだ。役人は四人のぼろぼろになった姿を見て、話を信じたいらしい。さらには同情して、後払いで泊まれる宿も手配してくれた。

幸いにして、キゲイの怪我はほとんど治りかけていた。問題はレイゼルトの方だ。彼の傷はどう説明してよいものか難しい。普通なら助からない怪我だったのだ。結局アニュディは医者を呼ぶのを諦め、薬草を買い込み、調合用の道具を借りるために奔走した。物を買うためにお金がい

るといふ現実的な問題に直面した彼女だが、赤城で食べ物を買ったときの小銭がいくらかと、キゲイがトエトリアを傭兵から助けたとき、シエドから記念品としてもらった硬貨が役に立った。レイゼルトが赤城で彼女に渡したお金も、実はそのときキゲイと一緒にもらった硬貨らしい。

「君からお金を巻き上げることになるなんて、思いもしなかった。まさか持ってたとも思わなかったけど。黄緑の城に戻ったら、ちゃんと返すね。ヒスイの石貨と穴あきの銀貨を重ねてはめ込んで、綺麗なものだし」

買ったばかりの塗り薬をキゲイに分けながら、アニュディはあやまる。もっともキゲイの方はあまり気にしていない。薬皿に入れられたべっこう色の薬に鼻を近づけて匂いを嗅いでいた。薬草独特の刺激的な匂いに混じって、蜂蜜の甘い香りもする。

「僕、お金のことはよく分からないから、どっちでもいいです。でもあのお金、どれくらいの価値があったんですか」

「そこそこ。といっても薬買って、着替えの古着を買って、宿代はツケにしたとしても、食事代で何日持つことやら。あの硬貨は、王や城のために仕事をした人に払われるお給金よ。君人間なのに、なんで持ってたの。あのお金は城ごとにデザインが違ってて、その城じゃないとそのままじゃ使えない。ここで買い物する前に、両替してきたの。こっちが石人世界全てで流通している普通のお金」

片手で薬草をすり潰しつつ、アニュディはスカートのポケットからじゃらじゃら大小のコインや石貨を机の上に取り出す。それが四人の全財産だったが、キゲイには金額の大小は分からない。

「黄緑の国の王女様を助けたから、あのコインをもらったのかな」

キゲイは部屋の向こうにいるレイゼルトに尋ねた。タバッサで傭兵に追いかけられたことが、もう何年も前のことのように。

「王女？」

レイゼルトはベッドの脇から顔をのぞかせる。彼はベッドの影でボロ布同然になった衣服を、苦労して脱ぎ捨てたところだった。合点がいかない様子なので、キゲイは付け加えた。

「タバッサで僕と一緒にいた、髪の高い女の子だよ。覚えてないの？」

「何？ トエトリア王女様の話？」

アニュディも口を挟む。レイゼルトは古着を被りながらベッドの上に登った。

「あの子か。アニュディ、黄緑の王族は他に誰かいるんだろうか？」

「……多分、トエトお一人だけよ。女王様ご夫妻は早くに亡くなられたから。黄緑の王家は七百八年前に直系の血筋が途絶えて、それ以来傍系の方々が王の血筋を取り戻そうとしてる。黄緑の王家はとても厳しく血統が管理されてて、それがかえって血を絶やすことにならないか心配されているくらい。一番血が濃いのが、今は王女様だけなの。次は又従姉のルイクーム様だけど、彼女はまだ血が薄いと考えられているみたい」

これを聞いたキゲイは、レイゼルトの方を盗み見る。するとレイゼルトと視線が合った。二人はすぐに目を逸らす。黄緑の王族の血筋を絶った張本人が目の前にいるなど、アニュディは知らない方がいいのかもしれない。

二人の少年をよそに、アニュディは塗り薬にすり潰した薬草を加えて練り始める。レイゼルトの傷には、もうひと手間かけた薬が必要らしかった。今一番疲れているのは三人を乗せて飛んだ彼女のはずだったが、怪我人の世話をしないことには休むわけにはいかないと思っているようだ。

レイゼルトはベッドの上を渡って彼女の側に降りる。二人用の小さな部屋にもう二つの簡易ベッドが運び込まれ、さらに机も押し込まれたので、部屋には足の踏み場がないのだ。

「あとは自分でできる」

「そう？」

アニュディはレイゼルトの方へ顎を上げた。

「じゃ、ウージュと銭湯に行ってくださいかな。あなた達は傷が深いから、だめね。宿の人に頼んでここにお湯を運んでもらいましょ。とにかくみんな清潔にならないと。自分の匂いだけでも、鼻が曲がりそう」

レイゼルトに薬の椀を渡し、布巾で手を拭いながらアニュディは立ち上がる。そして肩からかけていた青紫の外套もレイゼルトへ差し出した。

「紫城で手に入れたものは燃やした方がいいと思うの。とりあえず肌着だけじゃ寒いから、これ羽織っという。あんたのボロになった服とまとめて、あとで処分するわ。夕食も部屋に運んでもらいましょ。下の食堂で詮索好きな連中と一緒に食べるなんて、ごめんだわ」

狭い部屋の中で居場所がなかったウージュは、机の下でうとうととしていた。アニュディはウージュを起こす。

「宿の人達、ずっと僕らを見てたね」

キゲイは少し不安になる。町に戻れたおかげで食べ物や寝る所の心配はなくなったが、人間とばれないかという心配が再燃してきたのだ。王族のプレイヤーなら、ばれてもどうにか守ってくれるかもしれないが、何の身分も権力もないアニュディでは、どうにかできそうにない。

「あいつらが見てたのは、この調香士さんと、妙に古風な青紫の外套だ」

キゲイの心を知ってか知らずか、レイゼルトがぼそっと答える。

「彼女は髪も短いし、顔に魔よけの模様を描いてないから、最先端の都会人に見えるんだ」

「都会人？」

「髪を伸ばして、魔除けの模様を体に描くのが石人古来からの風俗。城は安全だから、魔除けの模様もいらないしー」

「都会人なだけで注目集めるもんですか」

アニュディは立ち上がりながら、レイゼルトの言葉を遮る。

「私の美貌も珍しかったの。連中のヒソヒソ話が聞こえたもん」

彼女は子どもみたいに、大げさに胸を張って見せた。あまりに自信に溢れた態度なので、キゲイは呆れるどころか気後れさえ覚える。彼女は皆の注目を集める系統の美人ではない気がするものの、もしかしたら石人にとってはすごい美女なのだろうか。反対にレイゼルトは肩をすくめた。彼は呆れているようで、アニュディの言葉を冷たく突き放す。

「早く行ったら」

「どうせ、まだあんた達には分からないでしょう」

「部屋を出て右に二十二歩半。左手に手すりと階段十七段。降りて左手に進む」

「知ってる知ってる」

アニュディは勝手に自慢して勝手に機嫌をそこね、何が起きたのかさっぱり分かっていないウージュの手を引いて出て行った。彼女の気ままさにキゲイもついていけない。

「変わった人だね」

階段を踏む音が扉越しに聞こえる頃、キゲイはようやく口を開くことができた。レイゼルトは頷いただけで何も言わなかった。結局のところ、二人はアニュディにそれぞれ大きく助けられていた。キゲイにとって彼女の普通っぽさは自分と近いものがあり、茶色い髪も人間と同じで、なんとなく安心できる。レイゼルトにしても、子どもの姿では宿で休む手はずさえ満足に整えられなかったろう。

レイゼルトは薬を練り続け、キゲイはお湯が来るのを待つ以外、まったくの手持ち無沙汰になってしまった。キゲイはぐるりと部屋の中を見渡す。

石造りの宿の部屋には小さなく貫き窓がついており、夕暮れの日差しが部屋の影を濃くしている。漆喰が塗られた天井は緩やかな弧を描いて、星に見立てているのか磨かれた金属の円盤がいくつも埋め込まれていた。暗い天井でその円盤だけが夕日の光を受け、鈍く輝いている。

「休めるのはここにいる間だけだ」

レイゼルトは顔を上げずに言った。

「白城の王子がどうなったかは、いずれは都にも噂が届くはず。アニュディに調べてもらえばいい。状況が分かるまでは、お前も白城に戻らないほうがいい」

「それは、今戻っちゃいけないってこと？」

レイゼルトは頷いた。

キゲイはベッドの端に腰かけて、少しうな垂れる。もしプレイヤーの身に最悪の事態が起これば、自分は白城にさえ戻るに戻れなくなってしまうだろう。それに禁呪の鏡をレイゼルトに返した今、自分と石人世界を繋ぐものは何もなくなったという気がした。果たすべき役目は終わったのだ。そう思うと、無性にアークラントが恋しくなる。けれども、そこにもまだ帰ることはできない。アークラントは滅亡の瀬戸際にあり、滅びてしまえば、帰る場所すらなくなってしまう。

行き場のないやるせなさに、キゲイはふてくされるしか出来ない。大の字になって、ベッドの上にはたんと身を沈めた。暗い天井で、円盤が輝いている。妙な感覚が胸をよぎった。それは、まだ石人世界で自分の出来ることが残っているのかもしれないという、根拠のない予感だった。予感は不意に形を定め、夜空に張り付いて動かない方角を知らせる星となって、心の中にぴたりと留まる。とはいえ、何をどうすべきか分かったわけではない。

「君はこれからどうするつもり？」

キゲイはそわそわと体を起こして、レイゼルトの背中に問いかける。レイゼルトは背を向けたまま答える。

「白城の噂を捉えてお前達を見送ったら、神殿へ行く。後はアニュディが白城まで世話してく



れる」

「神殿には何があるの」

「大巫女様がいらっしゃる」

レイゼルトはやはり振り返ることなくそう答えた。それが全てだと言わんばかりに。

リュウガ將軍はアークラントと大空白平原を結ぶエイナ峡谷で、たくさんのアークラント人とすれ違った。集団の先頭は地読みの民と、ディクレス先王が平原へ伴っていたアークラントの若者達がい、続く者達を導いている。さらに彼は王女の輿を担いだ一団とも出会ったものの、一刻を惜しんで立ち止まることなく、峡谷からアークラントへ抜けた。

アース国王はディクレス先王の知らせに先立って、最後の行動を起こしたのだ。リュウガ將軍は峡谷近くに築かれた砦に走り込む。真新しい丸太の門に、王の旗が掲げられていた。砦は建国以前から存在していた遺跡の上へ、拠点の一つとしてディクレスが建てた急ごしらえのものだった。

「大空白平原にも、石人とやらの城にも、アークラントの行くべき場所はない。だが進まねばならんということか」

リュウガ將軍がディクレス先王の言葉をそのまま伝え、アース国王は胸のうから引き絞るように、その言葉を口にした。王は砦の一室で、右肩に受けた矢傷の手当てを一人待っていた。

「峡谷への道は人々の列が途切れることなく続いています。陛下、私に次の命をお与えください」

リュウガ將軍は王の前にひざまずく。十数日国を留守にただけで、事態は想像もつかないまでに一変していた。詳しい事情を聞き知りたい気持ちはあったが、王の姿から、もはやその時間すら危ういことは明白だ。將軍は与えられる役目にすぐさま移らねばならぬと覚悟する。

「最初に来たのはエカだが、今はハイディーンが迫っている」

疲れきった表情の中で、王の瞳と口調だけが明るく定まっていた。彼はディクレスからの知らせに、少なくとも落胆はしていなかった。

「奴らが来る前に、峡谷の道を魔術士兵を用いてふさぐ。我々も戦い、出来る限りの時間を稼ぐつもりだ。お前は地読みの民を峡谷に行き渡らせ、人々が一刻も早く平原へ抜けられるようにせよ。そして万一に備え、人々の最後尾に兵力を集中させておけ」

「承知しました。しかし峡谷の入口には、まだ大勢の国民が立往生をしています。狭い道の半分を、荷が塞いでいるのです」

「荷を捨てぬ者は命を捨てる者だ。兵に命じて、邪魔な荷は谷底に捨てよ。峡谷に配置した物資が尽きる前に道を抜けるしかない」

王は頬をゆがめ、無情な決断をした。宮廷魔術師のザーサが部屋に現われ、王の肩に包帯を当てる。医師らはいまだ兵士達の処置から離れられないのだ。リュウガ將軍は再び承知と答え、部屋を後にする。王は傍らの老魔術師に顔を向けた。

「おかしな話だ。今このアークラントではエカとハイディーンが争い、我々は国の隅に身を寄

せて、山脈の亀裂に群がっている。その向こうの希望は、まだ眠ったままだというに」

「後から来たハイディーンが、無人の王都を征したエカの軍勢ごと町に火を放ったのは、想像だにできませんでした」

部屋の戸口に軍師長が姿を見せる。彼の手には血の染みに濡れた書面があった。

「新しい知らせか」

「ハイディーン軍の精鋭がこちらへまっすぐ向かっております。その中にハイディーン王の姿を見たと申す者もいるようです。騎兵を主力とするハイディーンには考えられないほど、数多くの魔術士兵を伴っており、その中には染めたとも思えぬ、奇妙な頭髪の色をした者もいるとか。先日陛下が追撃されたハイディーン先遣隊ですが、彼らはわが軍に見向きもせず南へ突き進みました。エカは王都と陛下を狙っておりますが、ハイディーンは違います。陛下、残念ながら」

王はゆっくりと頭をもたげ、声もなく笑う。しかしすぐに真顔に戻り、歯を食い縛った。

「確かに奴らは王都もアークラントの王冠も要らんらしいな。俺の首を狙って一目散にやって来たエカの大群の方がよほどかわいく思えるわ！ 奴らの狙いは何だ。王家の血を引く娘か？ それともあの峡谷か？」

命がけで届けられたであろう最後の報告書を受け取り、王は粗末な腰掛から立ち上がる。他の将軍達も部屋に現われ、王の両脇に居並んだ。軍師長は盆を手にした小姓らを招き入れた。手当てを終えたザーサは立ち上がり、そっと部屋から立ち去る。峡谷を崩す手はずを整えなければならないのだ。

王は捧げられた盆の上から四脚の杯をとり、一口飲んで隣の将軍にまわす。彼も一口飲み、隣へ渡す。杯が一同を巡って再び王の前に戻ってくる。

「私はアークラント王として、人間世界の末端に住まう人間として、この地を去ることはしない。ハイディーンを止めるは、国を守るだけでなく、人間世界の秩序もまた守ることになる。しかしこの地を離れる決断も、国を蘇らせ、人間世界の秩序を取り戻すに必要なことだ」

王は集まった家臣達の顔を見渡す。一同は王を先頭に部屋を出て、兵士らが集まる砦の門へと歩む。門の下にはリュウガとザーサが立ち、門の外には彼らの部下が居並んでいる。王は一度杯を掲げ、残りの生酒を大地に捧げた。戦いに行く者と大地の神との間に交わされる、昔ながらの儀式だった。

「運命の神は我らに試練を与えんとされている。私は王として、いずれ戻る者達のためにこの地を守り続けよう。未知なる大地へ向かう者達に風神水神の祝福を。この地より運ばれる風と水が、そなたたちを生かすよう」

ザーサが王の前に歩み出て、杯を受け取り水を注ぐ。彼のしわがれた声が、新芽を隠す荒んだ野に響く。

「アークラントの地神が、留まる子らを隠し、去る子らを忘れんことを」

ザーサは杯をリュウガ将軍に託す。アークラントで生まれた水を一滴こぼさず平原まで運び、いつか戻る日までの仮宿となる大地へ捧げるのが役目だった。

「忘れられてしまう前に、戻ってこい」

アース国王は二人だけに聞こえる声で、苦笑した。

砦の門を隔てて、残る者と去る者が互いの幸運を祈ると、リュウガとザーサは峡谷へ向けて発つ。アース国王は他の将軍らとともに兵士らをまとめ、間近に迫るハイディーンを迎え撃つ準備を整える。

数日後。峡谷の入口にハイディーン騎兵隊が到着した。彼らはひとけのない峡谷の様子に不審を抱きながら、数騎を偵察として進ませる。彼らが両側から迫る崖下を抜けようとしたとき、轟音とともに崖が崩れ落ち、騎兵達の姿が岩と砂埃の中に消えた。それを合図に、ハイディーン軍の背後から関の音が上がる。矢が雨のごとくハイディーン軍の頭上を襲った。隊列は乱れ、ハイディーン兵らは矢から逃れようと崩れ残った崖の影へ退いていく。

峡谷の急斜面を下って、あるいは林の奥に身を潜めていた最後のアークラント軍が、次々と現われる。矢は打ち尽くした。彼らはアース国王を先頭にハイディーン軍と対峙する。アークラント軍は大地の神を信奉する証に、緋と紺の二色からなるマントと合印を身につけている。皮と銅の鎧は黒い上薬が塗られ、胸元にはアークラントの紋章がある。王は重たい兜の上に王冠を戴いていた。

彼の視線の先には、ハイディーン軍を自ら率いて現われたハイディーン王の姿がある。ハイディーン王は年の頃はディクレスとほぼ変わらない。金糸の刺繍が入った淡い空色のマントに白銀の鎖帷子を身につけている。それはハイディーンが、最高神であり雷を司る神の使いであることを表すものだ。

「アークラントの栄光は三百年前に終わっている！」

ハイディーン王の声が響き渡った。

「栄光を陥れたそなた達はいまだもってこの地に留まり、英雄の御霊を汚した。我らは英雄の眠る大地を戦で洗い、アークラント王家の血を天統べる神の血で清めにまいった。時は動き、もはや古き帝国の威光が輝くことはない。わが国をもって新たな世の暁とする」

峡谷の奥からは、地を震わす轟きが続いていた。大空白平原へ向かう人々の背後で、ザーサが魔術士兵を指揮し、随所で道を崩しているのだ。アークラント王はその音を耳にして、この戦闘でどれほどの時間が稼げるかを考える。ハイディーン軍はまだあとからいくらでもやってくるだろう。崩れた道を開通させるには膨大な労力と時間が必要だが、ハイディーンが連れてきている多くの魔術士兵は、想像されるよりも短い時間でそれをやってのけるかもしれない。

「ハイディーン王よ。そなたが求める暁は、この峻峰の向こうから来るのではないか」

アークラント王は短く答えた。

「この大地を統べる神は、侵略する者に恵みを与えることはない。アークラントを汚す者には裁きが下るだろう」

ハイディーン王の言葉は、彼らの真の目的を隠しているに違いない。その目的が何であれ、アークラント王は彼らをここで止めなければならなかった。彼は剣を掲げ、全軍に突撃の命を下す。

ついに決戦の火蓋が落とされた。黒い鎧と白い鎧が入り乱れる戦場は、地と天、百と万の戦いだっ

## 十五章 星の神殿

キガイ達を白城へ送り出した後、レイゼルトは一人歩いて古都を出た。峠からは塩辛い水で満たされた湖が見下ろせる。湖の中ほどにはいくつもの白い柱に支えられて水上に建つ、神殿の四角い巨大な屋根が見える。辺りには潮の香りが満ちていた。この湖ははるかな昔、大海から陸に取り残された小さな海だった。

神殿の周りにはたくさんの小舟が往来している。神殿もまた、船をつなぎ合わせたような構造を持っていた。湖底に建てた何千本もの石柱や石壁の間に板を渡し、それぞれの部屋を柱の支えと水の浮力でしつらえている。細い通路は板張り、大きな通路はすべて水路となっており、神殿内の移動には小舟が欠かせない。神殿の屋根も半分は石や木の板だが、それ以外は大きな帆布を張っている。巨大な正方形をした神殿は各頂点がぴったりと東西南北を指し、それぞれに高い鐘楼を設けていた。鐘楼は塩のレンガで覆われて、毎日神官達が塩水を表面に塗りつけている。

神殿の中央にある大巫女の館は、周りの帆布の屋根にすっぽりと隠されて見えない。そこだけが神殿内で唯一、大地に根を下ろした小さな島の上にあった。大巫女の館に入ることを許されるのは、大巫女に仕える巫女達だけだ。館の外は神殿騎士達が常に見張っている。騎士達は館を守るとともに、その周りを絶え間なく巡ることで、石櫃に祈りを捧げている。神殿と石人達を実質的に取り仕切る役割にある九竜神官さえ、非常時でもなければ館への立ち入りは禁じられていた。館には中庭があり、その中庭の中央に命名の書と神々の墓碑たる石櫃を納めた祠があるという。

レイゼルトはひどく疲れていた。背中の傷はだいぶ良くなったが、あの赤い竜達は、彼の背中だけでなく精神も食い荒らしていた。癒しを求める石人が最後の救いを求めて目指すのが、この星の神殿であり、大巫女の館だ。大巫女の館は、石人にとってもっとも危険に近い場所ではあるが、同時に最も安全な場所でもあったのだ。

そしてレイゼルトには、もうひとつ、大巫女の館に行くべき理由がある。  
――どうあがこうと、遅かれ早かれ初代赤王の手の中に巻き取られていく。

十二人の魔法使い達が神殿を離れ城を建てようとした動機は、歴史が伝える以上に複雑で、様々な問題が絡んでいたかもしれない。石櫃に封じられた闇や、世界創生の得体も知れない秘密は、人知れず彼らを哀れな亡霊に変えてしまった。彼らに異を唱えたもう一人の魔法使いもまた亡霊としてこの世に留まっているならば、その者の居場所は大巫女の館をおいて他にはないだろう。

レイゼルトは薄い紙の切れ端を、そっと魔法の風に乗せる。紙切れは、峠の頂上から神殿へ向かってひらりひらりと舞い流れる。彼はその紙切れを追って飛び上がる。その姿は宙で、紙に吸い込まれるようにして消えた。紙はかすかな炎に包まれながら、大巫女の館に向かって飛んでいく。

赤の王族が例外なくそうだったように、レイゼルトのもうひとつの姿は、彼の背中を食い荒らした妖精竜そのものだった。ところが彼はあまりに長く生きすぎて、「生きもの」というより「もの」に近くなってしまったのかもしれない。石人に許される寿命ぶんだけ時が経ったとき、彼

の姿は竜から炎に変わっていた。妖精竜が生まれた瞬間から体内に宿し、死ぬときには内側から体を焼き尽くす炎だ。

彼は紙を燃やしすぎないように、自由の利きにくい火の体をちぢこめ、神殿の上空を横切る。たくさんの小舟が柱の間を通り過ぎるが、誰も遥か空を漂う小さな紙切れには気付かない。太陽は紙切れの小さな炎を飲み込むほどに輝いていた。それは明らかな春の兆しだ。

帆布の屋根は天の光を受け入れるため、折りたたまれた場所がいくつかある。合間からは赤、青、緑、黄、黒や白など極彩色に彩られた石壁が覗いている。神殿の壁や柱はすべて、宇宙を表す壁画に彩られているのだ。塩湖の侵食に負けじと、常に誰かの手で塗り直され続ける壁画は、目に染みるほど鮮やかだった。描かれた紋様を目で辿っていけば宇宙を巡ったのと同じことになり、死後、魂が自分の名を持つ星に帰っていくときの道が分かると言われている。石人にとって、魂が宇宙で迷子にならないことはとても重要なことだった。そして石人が死んだとき、その人の名前は壁画のしかるべき場所に、小さな星として彫り込まれる。

神殿が石櫃とともに守る命名の書には、この世に生まれるすべての石人の名前が既に記されていると言われている。命名の神官達は命名の書の写しを持ち、生まれた子の真上や真下に輝く星を見極め、その星の名前を与える。誕生のとき、命名の神官が立ち会えなければその子は名前を持たず、死後も天に昇れず地上をさまよって、いずれは石櫃の闇に飲み込まれてしまう。命名の神官が星を読み違え、間違った名前を与えてしまった場合もそうだ。あるいは名前を持っていても、大きな罪を犯せば神殿に名前を取り上げられる。神殿の壁画に名前を刻まれることもない。だからレイゼルトの名も彼の父王の名も、壁画には刻まれていない。命名の神官にとっても、星を読み違えるのは大罪だった。

紙はとうとう燃え尽きる。レイゼルトは人の姿に戻りながら、灰とともに館の中庭へと降り立った。周りは古代遺跡と見まごうばかりのひっそりとした石の館が取り巻き、山を下ってきた風が吹き溜まって鳴っていた。庭の下草は茶枯れて、ネムノキが数本、庭の隅で寒風に枝をさらしている。庭の真ん中には崩れかけた小さな祠があったが、それはレイゼルトの身長ほどの高さもない。風雨で浸食された石肌に、白い塩の結晶が浮いている。

レイゼルトは灌木の影に身を伏して、じっと辺りをうかがった。土の湿った匂いがする。館は冷え切っており、人の気配がまったくない。耳を澄ませば、どこか遠くで神官達の演奏する楽器の音がする。風音と混じるその単調な旋律は、石人ならば必ず知っている。初代の巫女が竝琴から紡ぎ出したと言われる、水の旋律だ。

顔を背けて地面に片耳をつける。神殿の奥底に潜むという闇の音を、地中から聞き取れるかと思ったのだ。七百年前の赤城で、城の壁内に水が弾ける音を聞いたときのように。しかしそれは無理だった。もう片方の耳から風音と水の旋律が聞こえて、邪魔をする。腕を上げて耳に蓋をすれば、今度は腕から血の脈打つ音と筋肉の軋む音がする。そこで目を閉じ、鼓動の合間の静寂に集中する。

そのうちに、鼓動以外にも規則的な音が聞こえてきた。人の足音だ。枯れた草を踏み、ゆっくりとこちらへ近づいてきている。

レイゼルトは身じろぎひとつせず、その足音に意識を移した。耳に心地よい歩調で、まったく

危険を感じない。頭の前で、足音は止まった。香の匂いが一瞬、鼻先を撫でる。彼はそっと頭を持ち上げる。漆黒の裸足が見え、透けるほどに薄い衣がその足にかかっている。

レイゼルトは頭を地面に伏せたまま、両膝を腹の下におさめてひれ伏した。

「訪問の失礼をお許してください。大巫女様」

レイゼルトは呟いた。柔らかい優しい答えが頭上から返ってくる。

「待っていましたよ。そして、待ちくたびれました」

レイゼルトはその答えを不審に思い、顔を上げる。すでに大巫女は彼に背を向けて、庭の真ん中へ歩を進めるところだった。

とても背の高い人だ。薄物の布を幾重にも漆黒の細い体に巻いて、その端は風がもてあそぶままに流している。光を通す銀白色の髪には、たくさんの銀粒の飾り。歩を進めるたびに、着物の裾からしっかりとした素足が覗く。大巫女はひどく年老いていながら、まるで童女のように初々しい優しい仕草を持つ人だった。

「間に合ったようですね」

大巫女は振り返り、両腕を広げてそっと上げる。レイゼルトはその仕草に従って、同じようにそっと立ち上がった。

「あなたにはいつか会ったように思います。何百年か前、あるいは私が死した後に見続ける、夢の中で」

大巫女は灰色の目を細め、弱々しい様子で微笑んだ。

「この方は、私が来るまでを待っていてくださった。」

レイゼルトは気付いて、顔を伏せる。彼の視界から大巫女の姿は消えたが、それでも恐らく、彼女はずっと微笑み続けていた。

「石人が初めてこの地に留まったときから、大巫女はこの館に住み、石櫃の前に座して祈り続けてきました。石櫃に封じられているものは、常に外へと染み出そうとします。大巫女は、石櫃の中で静かに潜んでいただくよう、古い言葉を捧げてお願いするのです」

「大巫女様は石櫃と命名の書の原型をお守りするため、命名の書から石人の名を書き出すために、神殿にいらっしゃるものだとばかり思っておりました」

レイゼルトは不意に不安になり、庭を囲う館に目を走らせる。

「この館には今誰もおりません」

大巫女様はレイゼルトの不安を一言で打ち消した。

「私のお役目は、石人の名を命名の書より書き出し、人々に与えることです。名が闇に飲まれぬように。そして、私が書き出すに間に合わなかった名前を、さまよえる石人の魂に与えるために。なぜ石人が命名の書を手にし、神の名を得ることになったのでしょうか。正しくは神の名ではなく、砕け散ったそれぞれの神の体の、一部を指す名ですが」

大巫女はゆっくりと庭を横切り、館の脇に据え置かれた石のベンチに腰を下ろす。レイゼルトはそれを見送り、しばらくして戸惑いながら大巫女の脇に両膝をつく。大巫女は先程とは違う厳しい表情で、まっすぐにレイゼルトへ視線を注いだ。

「私はあなたの名を知っています。レイゼルト。かつて神殿は、この名をあなたから取り上げま

した。それをここで返しましょう。あなたはもう、地上でさまよってはなりません」

大巫女はそこで深い溜息をつく。表情は再び和らぎ、視線が落ちて疲れた様子になる。

「何ゆえ石人達がこの地にいざなわれ、命名の書を手にし、神殿をこの地に築いたか。初代大巫女が最初にこれらを手にし、それとともに真実彼女の喉を焼き付けました。初代大巫女は誰にも伝えられぬ真実を、その呪いとともに次代の大巫女へ託しました。それは代々の大巫女に継承され、私もまたすでに次代の大巫女へ引き渡しています。初代の大巫女が触れた大地は、すでにこの深い地層の下に。石櫃を安置した祠もその塔の先がわずかに覗くだけとなりました。この小さな島は、沈み続けているのです」

「初代十二王達は、石櫃の闇に捕らわれました。大巫女様のお役目をともに担おうとして、呪われたのでしょうか。彼らはいまだ十二城に潜んでいます。新たな者を闇に引き込みながら。私もまた言葉を焼き付けられ、彼らのことを誰にも伝えることができません。大巫女様のように次の依代にしか伝えられないのです。しかし次の依代は、人としての意識を剥ぎ取られ、肉体に命が宿っているだけです。あれではどんなにあがいても、奪われた意識は影ほどにしか取り戻せない」

「影が実体以上に真実の姿を映すときもあります。この神殿ではそのために、影を恐れる者達もいます」

「神殿とは何でしょうか。石人だけに課された、世界での役割があるのでしょうか」

「我々が考える以上に、世界は思いがけないものです。石人は世界の全ての色を、その髪に、瞳に宿しています。『もうひとつの姿』として、この世に存在した様々な生物の姿を隠し、世界を創造したといわれる神の名を継いでいるのです。一方で、石人の精神の中心であるこの島の地下深くには、世界が形作られた瞬間、その代償として封じられたと伝えられる闇が眠ります」

大巫女は硬く目を閉じ、喉を抑える。レイゼルトはその姿をしばらく見つめて言った。

「それが真実の外殻なのですか」

「ええ。その通りです。それが花の蕾のように、いつか開くものだと思っている者達もいます」

「私は闇がどんなものか知りには参りました。石櫃を覗かせてはくれませんか」

レイゼルトが無邪気に尋ねると、大巫女はまぶたを閉じたまま、小さく笑って首を振った。

「あなたは石櫃を壊しかねない。これ以上、闇の犠牲者を出すわけにはいきません。それより見てほしいものは、別にあるのですよ。それが我々の側にある真実だから」

大巫女は老いて痩せた片腕をあげ、指先で宙に線を描きはじめる。指の軌跡に銀色の光が残り、やがて神殿の見取り図が完成する。彼女は最後に、ある通路の行き止まりを指さした。

「初代大巫女は石櫃を守り、九竜神官の言葉には一切耳を貸してきませんでした。彼らは石櫃に封じられた闇がいずれ真実となって明るみに出で、それに秩序を与えるのが石人の使命と信じました。彼らは神殿の地下にうごめく闇を、彼らなりに解釈しました。闇の側にいる大巫女が知ることと、闇の外にいる彼らが知ろうとしたことは、表裏一体ですらないでしょう。大巫女の焼き付けられた喉が、九竜神官達との間に不信の溝を広げてしまいました。彼らは自ら石櫃に近づこうと、神殿の一角に、祠へ通じる穴を掘ろうとしました。それは今でも一部が残って、使われています。はるかな昔、彼らは石櫃に捧げる大巫女の言葉を、地中に潜んで盗みました。それでも

なお彼らは闇に近づくことは出来ませんでした。触れてはならぬものを得ました。彼らもまた自らの役目を、次代の神官達に伝えています。けれども――」

大巫女が指で払うと、宙の光は砂粒のように乱れて消えてしまう。彼女はレイゼルトに穏やかな視線を向けた。

「あなたが見るべきものは別にあります。この七百年、あなたは孤独であったでしょう。けれども多くに守られて、ここにあることも知っているはず。あなたを最も苦しめたものが、最もよくあなたを支えたかもしれません」

「……いまさら知って、何になるのです」

レイゼルトは大巫女を見返す。

「私があなたに勧めるのは、闇に関わる者達の話ではありません。あなたがこの七百年間ずっと携えてきた、その禁呪の本当の力を知ってもらいたいのです。それは償いにもなりましょう。慰めにもなるかもしれません」

「禁呪に慰めを見出すほど、辛い刑罰はありません」

「力も取り戻せるでしょう。あなたにはひとつ、心残りがありますね。それは私にとっても同じです」

レイゼルトの肩に手を置き、大巫女は立ち上がる。振り返って見下ろした彼女の髪に、日差しが透けた。

「私は夢の中で、館から出て外を歩きます。いえ、太古の風景の中には、館も神殿も存在しません。私は幼い頃より、夜はこの夢の中で過ごしてきました。過去に会った者も、これから会う者も、すべての人々や生き物達がそこにはいました。彼らの姿は霧で、近づかねば容姿も判別が付きません。私はすでに多くの者の姿をそこに見出しましたが、あなたが最後とっていました。しかしこの数年は奇妙なことに、遠くにはっきりとした人影が見えます。彼は人間です。どこから迷い込んだのでしょうか」

「アークラントの運命からです。アークラントの運命と石人の地との交わりから、大巫女様の大きな夢に迷い込んだのでしょうか。彼はエカという国を恨んでいる。アークラントを存続させることが、戦で失われた故郷の無念を晴らす復讐へとつながるのです」

レイゼルトはトゥリーバのことを思い出し、苛立ちを覚える。

「復讐心が、彼を正しい夢見の判断から遠ざけてしまった。彼に手を貸してやってはくれませんか。あの夢はアークラントの希望を予言しているのではなく、彼自身の戻るべき道を示していたのだと。……恨みを断ち、振り返らねばならぬことを」

一息に話しきり、レイゼルトは息を吐いて肩を落とす。恨みや復讐がどれほど空しいものか、そしてそれらを断つことがどれほど難しく、どれほどおぞましい苦しみを伴うか。なおかつそれから逃げるのがどれほど虚しいか、彼は嫌と言うほどに知っていた。

大巫女は微笑んで頷き、ゆっくりと館へ歩み出す。

「次の夜明けまで、そこでお休みなさい。鐘が鳴ったら、先程の場所に行くのです。あなたに会えたことは、私には最後の癒しとなりました。ごきげんよう。私は先に参ります」

大巫女の姿が館の影に溶け、足音が遠ざかって消える。庭に一人残されたレイゼルトは、石の



ベンチで横になる。傷で消耗していた体力は、いまだ戻っていない。七百年に渡る放浪の疲れが、最後の最後で追い討ちをかけるように彼の気力を蝕んでいた。禁呪使いとして追われた七百年前の恐怖とやり場のない恨みが、これだけの時を経ながら鮮烈に思い出せる。他の記憶はすでに形をなくし、思い出すことさえ難しくなっているというのに。

まぶたを閉じると、そのままずっと眠りに落ちたらしい。どこか遠くからいくつもの鐘の音が響き、館の中庭にこだまが残る。目を開けると辺りは薄暗く、明け方の空には星が輝いている。彼がはっきりと目を覚ます頃には、鐘の音は打ち方を変えていた。

一つの鐘が鈍く響き、その音が尾を引いて塩辛い湖に沈むと、また別の場所から鐘の音が沸きあがる。鐘の音は東西南北に設けられた鐘楼から響いているようだ。耳を澄ますと、かすかに人々のざわめきを感じられる。泣き叫ぶような取り乱した声は、あらゆる感情の吐露を禁じる神殿には、ただならない。鐘は、大巫女が亡くなられたことを知らせるものだった。

——館を出るなら今しかない。

レイゼルトは察した。起き上がると、素早く館へと入る。大巫女に示された穴へ向かうために。大巫女の館を巡回して守る神殿騎士達は歩みを止め、石像のように立ち尽くしている。多くの巫女が忙しなく行き交い、神官達は顔に面を当てて悲しみを隠している。レイゼルトは巫女達の影に紛れながら館の外に出て、入り組んだ通路の先を進んだ。

入口は古びた小さな鉄柵だった。大巫女の館の通気窓と見間違いそうなものだ。レイゼルトは扉にかかった鍵を魔法でこじ開ける。最初は這って進まねばならなかった。やがて天井が高くなる。暗闇の中で手探りをする。壁は荒々しく削られた石壁だ。館の壁を無理矢理削ったのかもしれない。神殿の物音や風の音がくぐもった不確かな響きになり、耳の奥を鳴らす。レイゼルトは先を急いだ。

道は下りになる。平らではなく階段状になっており、段の真ん中だけが磨り減っていた。レイゼルトは大人が手をつくだろう位置へ腕を伸ばす。石壁に窪みが見つかった。九竜神官達は何千年も前から暗闇の中を手探りで、階段や両脇の壁が磨り減るほど、この通路を使ってきたらしい。

深く降りるにつれて静寂が密度を増し、そのために今度は耳鳴りがするようになった。空気が澱んでくる。あまりに古い時代の地層まで来たのだろうか。時間すらも澱む重苦しさは、七百年前のあの日にいるような錯覚を覚えさせる。今上に戻れば、彼を血眼になって探す七百年前の石人達が、待ち受けているかもしれない。

レイゼルトは右腕を上げる。魔法で明かりを灯そうと思ったのだ。このまま暗闇にいると昔の記憶が蘇り、頭がおかしくなりそうだった。しかし彼はしばらくためらった。下に行くほどに、原初の闇に近づくことになる。明かりを灯すのは、ここでは危険なことなのかもしれない。迷った末、足元を照らすわずかな明かりだけに止める。彼は再び下り始める。一步一步降りるすぐその背後で、暗闇は何事もなかったかのように帳を下ろし、沈黙が吊いの土として明るい地上と侵入者の間を埋めていった。彼は黙々とひたすらに下った。わずかな明かりと、そこに照らし出された石段だけがすべての世界だった。

やがて階段が尽き、長く狭い通路が姿を見せる。薄暗い明かりの中で、通路は一本に見える。

しかし彼が進むと、ひとつだった道は二股に分かれ始めた。やはり明かりは嫌われているようだ。彼は明かりを消す。そして壁の窪みを触って確めながら、先へと進んだ。手で辿る道は再びひとつと重なり、左右に折れ曲がりながら続く下り坂になる。

指先の壁が途絶えた。狭い所にいる圧迫感は薄れ、終着点の部屋に辿り着いたことを知る。レイゼルトは大きく息をついた。暗闇に加え、それ以外の何かが部屋に満ちている。その感じは紫城の最深部と似ていた。ここにも理性を飛び越し本能に訴えかける、畏怖の源がある。自然と冷や汗が噴き出して、彼は舌打ちをした。

「いまさら、何を恐れる」

レイゼルトはかすれた声で自らを励まし、両腕を高々と掲げる。真っ白な閃光が炸裂する。光を知らない闇はことごとく払われ、巨大な部屋がその全貌を現した。レイゼルトは息を飲む。

長い間生きた彼も、その光景には戦慄さえ覚えた。恐怖でもなく畏敬でもない。立ちすくむことしかできない壮絶な感情が全身を貫き、ひととき自分自身の存在すら忘れた。

灰色の高い丸天井と壁面すべてが、何千もの石人の石棺に覆われていたのだ。ほぼ新円の形をした棺は、小さな模棺から実際の大きさのものまで様々ある。部屋の中央には樹木を模した巨大な石の柱が天井まで伸び、棺の隙間に石の枝葉が這っている。水滴によってできた石のつららが、枝から垂れる蔦のように幾本も下がっている。柱の根元には、石の天蓋つきの王座があった。棺があることを除けば、そこは紫城のあの地下の部屋と酷似している。

王座には、古くなりすぎて今まさに崩れんとする彫像が座っていた。頭部は湿って丸みを帯び、目や顎の窪みがぼんやりと残っているだけだ。しかし半眼の切れ目だけは深く刻まれていたらしく、黒々と影を落として二筋はっきりとある。体には、長い衣を巻いていたらしいひだの跡が、かろうじて残っている。

老若男女の判別がつかないその像は、心持ち王座に横座りになっていた。考え事をしているように右ひじを王座の肘掛に立てて、こぶしで頬を軽く支えている。膝頭の磨耗はひどく、そこだけ表面がつるつると磨かれて滑らかだ。

——誰だろう。

レイゼルトの心の呟きに、深く沈んだ声が答えた。

「闇に飲まれし肖像」

風が打ち捨てられた笛を鳴らすのにも似た、虚ろな響きだった。

レイゼルトは鋭く身構え、王座の人物を睨んだ。相手は先程と寸分変わらない表情で思索を続けている。レイゼルトは半眼の深い切れ目を凝視し、寒気を覚えて目を逸らした。すると視線の先に、ローブで身を覆い、神官が持つのっぺらぼうの面をつけた人影が捉えられる。人影は部屋の隅にぽつんと立っていた。

ローブ姿の者はレイゼルトの視線を受け、そっと面をはずした。フードの下は影が濃く、何も見えない。面を持つ手も、そこだけ世界が切り取られたように真っ暗だ。漆黒の肌をした石人か、そもそも姿を持たない存在なのか、分からない。

「大巫女様が見せたいと私に言ったのは、この部屋のことだったのですか」

レイゼルトが尋ねると、相手はフードをゆっくりと下げた。顔いた仕草らしい。

「ここは九竜神官達が築いた、もうひとつの石櫃の祈り場」

囁くような声色は相手との距離を感じさせないほど、彼の耳にはっきりと届く。

「彼らは時折ここへやって来て、膝をひとなでし、大巫女より盗み取った祈りの言葉を捧げる。彼らは部屋を満たす闇に敬意を表し、決して明かりは用いない」

「私は明かりを灯しました。しかし光で払えないものが満ちている。これが闇なのですか」

闇と口にしたとき、レイゼルトは体の震えを感じていた。無意識のうちに忍び寄った恐怖が、言葉によって形を得たのだろうか。じわじわ喉を締め付けるかのように、体の自由を奪いつつある。

音も無く、ローブ姿の石人はレイゼルトの方へ歩み寄る。ローブの裾が翻っても、空気が動く気配はない。

「石櫃に封じられたものの一部。ここから少し染み出している。仮にこれを『闇』と呼ぶのであれば、九竜神官達はこの『闇』を宇宙に星を浮かべる闇と同じだと思ったのだろう」

「あなたが、初代十二王達と道を違えたもう一人の魔法使いなのですか」

「かつてはそうだった。今は墓守にすぎない」

ローブ姿の魔法使いは再び面をフードの下に当てる。そのわずかな瞬間、レイゼルトは面の後ろに隠れる、まぶたを閉じた漆黒の顔を見た気がした。

「『闇』を世界に開放し、星の名を持つ石人達をその統治者とする。それは地上に星空を描くこと。世界は天の鏡となり、太古に砕け散った神々を継ぎ合わせ、蘇らせる。九竜神官はそれぞれを石人の役目と信じ、代を重ねながら時を待っている。当時の九竜神官達は『闇』の理解者を求め、古都十三の地をそれぞれに治めていた我々を招致した。この部屋で『闇』に魅入られた我々は、大巫女の背負うお役目を理解した。九竜神官の悲願もまた、理解した。だからこそ、石人達を神殿のただひとつの支配から開放せねばならぬと考えた。初代大巫女が石人に定めた理を、神殿の堕ちた力が及ばぬ地で再び明らかにするために」

魔法使いは緩やかに腕を上げ、王座の石像を指差した。

「あれが石像なのか、太古の石人の亡骸なのかは我々にも分からない。あの像は、石櫃に次ぐ『闇』の覗き口だ。あなたも今感じているはず。もうそれで十分。その像の目を覗いてはならない。あなたはまだ我々ほど深く『闇』に飲まれてはいないのだから。こちらへ」

レイゼルトは魔法使いの方へ足を向ける。傍に立つと、魔法使いの静かな息遣いに気が付いた。まるですべてが死んでいるようなこの部屋で、魔法使いが生身を持っているのは意外に思える。魔法使いのローブからは、神官が日常の祈りで使う香の匂いすら漂っている。

「なぜあなたは城を創るために、神殿を出られなかったのですか」

「レイゼルト、あなたは紫城を解放した。紫王は消えぬが、城との繋がりは断ち切られたのだ。それは城の正体を見極め、役目を終えて滅んだ無人の城が、元の姿に立ち戻ることを望んだからではないのか。七百年前、紫王の依代が試みた復讐の中で、あなたは城が何かを知った。さらなる昔私もまた、城を創ることによって隠される世界を危ぶんでいた。十二王達は決断し、私は留まり続けた。『闇』に飲まれるまで。存在の様式は反転し、私が現身を保てるのは『闇』の側のみとなった。この部屋を出れば姿をなくすのだ。以来私はこの部屋で、名のない石人、名を奪わ

れた石人の弔いをしている」

魔法使いは天井の、ある模棺を指差した。レイゼルトは棺に名が刻まれているのを見た。

「シュラオイエン。あなたの持つ銀の札に禁呪を隠した魔術師だ」

レイゼルトは銀の鏡を取り出す。彼は鏡面に棺を映した。ふいにいたたまれないほどの弱々しい気持ちが、頭をもたげてくる。

「かの人か、砂の魔術に興味を示すとは思えません。私も砂には興味がありません。この銀の鏡には、別の魔法が秘められていたのです。幼い日の私はその魔法に惹かれて、鏡を手にした」

レイゼルトはそこまで言うと、鏡を懐に戻す。力が抜けて鏡を落としてしまわないように。それをみてとった魔法使いの虚ろな口調は、やや柔らかくなる。

「そうだ。その札には土の魔法が込められていた。老魔術師は黄王に頼まれ、城に豊かな土を蓄える魔法を探していた。あの城の周りは凍りついた荒野で、乾いた砂しか得られない。彼は砂を土へ変える魔法を編み出そうとしていた。それはついに成功しなかった。その札に込められた禁呪は、失敗した魔術のひとつ。命あるものを土に戻してしまう、使い方を過てば危険なものだ」

「初めて札に込められた魔法を使ったとき、でも、これは確かに砂の禁呪だったのです」

「年の端もいかぬうち一人塔に封じられ、暗闇で生きていた子どもが、禁呪を得たとき、再び二本の足で体を支え言葉を話し、禁呪を読み解くだけの正気を取り戻した。その理由を考えたことはなかったか。その札に封じられていたのは、禁呪だけではない。魔法を生み出そうと失敗を重ねてなお衰えなかった、老魔術師の人々への思いがあった。彼は魔術に持てる力全てを捧げた。その心が銀の札を手にした哀れな子どもに、失われていた命の活力を与えた。禁呪に封じられていた強い生命の力を代償として。命をはぐくむ土の魔法は力を失い、砂の魔法へと変じた。残念ながらその後、禁呪は誤った使い方をされた」

「私は見も知らぬ、古い時代の禁呪使いに助けられたというのですか」

レイゼルトは声を震わせる。

「禁呪に込められた力は、私の命を救っただけでした。むしろそうしない方が、他の石人達にとってどんなによかったか」

彼はキッと棺を見上げた。言い尽くせない様々な感情や記憶が胸にこみ上げ、心が耐え切れずに破裂しそうになる。それらを押し殺そうとすると、喉がぎりぎり痛んだ。

「あなたはずっと口を閉ざしてきた。いずれは実を結ぶ言葉もあったはずなのに」

魔法使いは言った。レイゼルトは見上げた姿勢のまま、何度も息を飲み込む。それからようやく彼は苦しげに口を開いた。

「そうせざるを得なかった。口を開けば宿運の悪さを嘆く恨みの言葉しか出てこない。自分の本当の気持ちすら分かりませんでした。私は自分が誰なのか、分からなかった。

私は多くの石人を砂に変えました。それは父王の命があったからです。言うことを聞けば、私は二度と塔に戻らなくてもいいかもしれないと、信じていた。塔にいる間、私は幼いなりに人の心を忘れまいと努めていましたが、世を知らぬ孤独は精神を蝕み、心も歪め固めてしまいます。塔の外へ戻ることを求めながらも、いざそれが叶うと、慣れ親しんだ塔での孤独を懐かしみ、そこから己を引き離した外の世界を憎むようになるのです。塔の外で禁呪を目の前に差し出され、そ

れが意味することを察したとき、今まで守り続けていたはずの正気が、すでに壊れていたことに気付きました。大きな過ちを犯そうとしているのを知りながらも、世へ戻りたいという渴望を癒す欲に負け、同時にそのようにしてしか癒されえない渴望を憎み、孤独を永遠に失うことを恨みながら、邪精のように日の下へ躍り出たのです」

レイゼルトは両の頬を伝う涙に気付いたが、拭いもせず気にもせず、そのまま流れるに任せた。

「砂の禁呪はあまりに綺麗に人を砂に変えてしまう。私には砂遊びの延長であり、禁呪の恐ろしさもそれを使っている自身の非道さも、一切省みませんでした。多くの石人が私を捕らえようとしながらそれができなかったのは、身を守ってくれる者がいたためです。ところがその者が殺されたとき、私は初めて死というものを知り、それを恐れるようになりました。私の命を狙う石人の中には、肉親であったはずの兄王の姿もありました。兄の心の内も知らず、その裏切りを恨みました。私を倒したとされる黄緑の王子も、本当は私を助けようと考えていたのです。しかし私には疑念と復讐しかなく、それに従うことができなかった。再び禁呪を用いた私に、彼は自らの役目を果たす以外ありませんでした。彼は石人の愚かしさに深く絶望し、英雄として帰還することを拒みました。私が彼を道連れにしたのではなく、彼が私を道連れにしたのです」

レイゼルトはうな垂れる。

「くしくも私の命は滝では終わりませんでした。私のしたことは永遠に許されることはない。この罪は生涯を越えても償いきれはしません。だから初代赤王に囚われ、不死の牢獄にいた七百年間は、償いのひとつになると思えば耐えることができる。兄王や黄緑の王子、その他の数少ない石人達。あのとき私を助けようとしてくれた者達は、私により広い視野と心を遺しました。そして私は、それに見合う生き方を、半ば強いられたのです。それでもなお、今でも頭から離れない思いがあります。石人達が私にした仕打ちは、誰が償ってくれるのか。もっと早くに、救われたかったと」

頬は乾いていた。レイゼルトは樹木を模した柱へと視線を移す。

「そう思う度に私はすぐに考え直します。すでに償ってくれている。私にこのような生き方を強いた者達は、己の命を代償としてくれていたのです。そして七百年の終わりに、大巫女様は名まで返してくださった。私はこの広い世界で、自由を得た」

魔法使いは黙っていた。

「あなたがおっしゃったように、私は塔に幽閉されているときに城の音を聴き、城の正体について思いをめぐらせていました。それは私だけの体験ではありません。長い歴史の中で、城の音を聞いた者は少なくないでしょう。しかしその体験を深める機会に恵まれた者はわずかです。あの音は城の最下層に近づくほどよく聞こえます。この部屋は、その音が最も近い、城の中枢の部屋に似ている」

「私は見たことはないが、似ているのならばそうかもしれない。ここから出るとき、私は他の獣の姿を借りる。時が迫るのを見て、私はあなたをなんとしてもここに呼び、次の依代と巡り合わせたかった。私はその実、七百年間、あなたが石人世界に再び戻ってくるのを待っていた。伝えたかったことは多いが、時間はもうない」

魔法使いは悲しげに呟いた。

「あなたが塔に封じられていたように、この部屋が私の全てだ。柱と像は最初からあったが、部屋を覆う枝や棺は私が刻んだ。私は石を食う虫に姿を変えることができる。名のない者には、名の代わりとなる棺が必要だ」

「石の大樹を育てていらっしゃるようだ。この木はいずれ地上へ達するのですか」

「そうかもしれない。私がさらに『闇』に飲まれぬ限りは」

面の下の声はくぐもり、辺りが薄暗くなってくる。魔法使いは続けた。

「長きを生きてきた者を癒すのは、容易ではない。かの者を支えてきた強さそのものが、その障害となる」

「この七百年、悔恨と復讐心が、入れ替わり立ち代り私の命を支えました。私に親切にしてくれた人々の存在が、私の正気を支えました。もはや休息を欲しいなどとも思いません。けれども強さが癒しの障害となるのであれば、私はそれを捨てます。私を支えてきた全てのものを私自身として、ここに弔います。赤王はすぐ近くへ来ている。ただ、次の依代のことをあなたにお頼みしたいのです」

魔法使いは身を引いた。明かりはますます暗くなる。レイゼルトは完全に暗くなってしまう前に、部屋の入口へと歩み始めた。魔法使いはその背に、最後の言葉をかける。

「時がその方向を失う場所で、私は十二王とその依代達を、待っている」

明かりは消えうせ、辺りは再び暗闇に変わる。レイゼルトは何も見えない中で、そっと手を前に差し出した。冷たい壁に触れる。さらに探ると、指先に壁の窪みを見出した。彼は壁に沿って、もと来た道を辿りはじめる。

暗い穴から抜け出しても、神殿は押し殺したざわめきに満ちていた。レイゼルトは誰に気にされることもないまま、水路につけられた小舟で神殿から湖へ出る。そして湖の中ほどで舟を止める。

「忘れないうちに、約束を果たしておくか」

レイゼルトは空を眺めて呟く。鈍色の空とその色をそっくり映す湖に挟まれているのは、とてつもなく心地よい。ことにあの重苦しい地下の闇から出てきた身にとっては。

彼は左手で右目を隠し、ややこしい呪術の文句を唱える。唱え終わると彼はのろのろと立ち上がる。そして懐に忍ばせた紙気球を風に乗せ、火に姿を転じて飛び移った。紙気球は風に流されながら上昇していく。

湖の西に広がる林の中に、白いものが見えた。赤王だ。赤王は心なしか、以前見たときよりも体の輪郭がぼやけているようだった。動き方も苦しげに見える。闇に囚われた初代十二王達にとって、城の中枢から出るのはよほど大変なことなのだろう。すぐ上空にレイゼルトがいることさえ、気づいているようには見えない。だからといって赤王から逃げ切れるわけでもない。

彼は姿を戻した。紙気球はあえなく破れて風に散る。

「目覚めよ！」

レイゼルトはその言葉を魔法の風にのせて北へ飛ばす。

風が彼の命じた指先を離れた刹那、赤王は彼の存在に気がついた。彼は再び火に転じながら、

懐から銀の鏡を取り出した。炎の中で銀の鏡は銀のしずくとなり、火花を散らしながら赤王の立つ林の丘に注ぐ。

## 十六章 白の城

「殿下がお連れになった石人どもは、神殿と十二城の存在を否定しただけでなく、クラムアネスという大悪党に組し、大巫女様の手枷をはじめ、白城から貴重な財宝を盗んでいった盗賊でもありますぞ」

青いというよりほとんど黒ずんだ顔色で、白城の大臣ルガデル口はブレイヤールに問い直す。夕方の影が室内に満ちてきていたが、どちらも明かりを灯すまでに気が回らない。それほどまでに、ブレイヤールがもたらした知らせは重いものだった。

黄金色の国とクラムアネスが自称していた坑道から白城へ無事に戻ったのは、ほんの昼過ぎのことだ。クラムアネスと対峙して彼女の国を解体した後、ブレイヤールは助けに来た黄緑の国の騎士達を坑道で出迎え、さらには黄緑の国へ行って、左右の大臣とも話し合わなければならなかった。黄金色の国の住人達は、坑道に残っていた者はおろか白城に向かおうとしていた者達まで黄緑の騎士に捕らえられてしまっていた。

うんざりするほど長くややこしい話し合いの末、ブレイヤールは住人の多くを白城で引き取ることを黄緑の大臣達に納得させた。一方で、クラムアネスと直接ぐるになってあくどい商売をしていた石人は、全て黄緑の城で捕らえられることとなり、エランをはじめとする人間の悪徳商人達は口封じの魔法をかけられた上に重たい手枷まではめられて、空白平原に連れて行かれた。

問題は、クラムアネスとニッガナムの消息がつかめないことだった。特にクラムアネスの逃亡については、ブレイヤールにも責任の一端があると黄緑の大臣達は考えたらしい。ブレイヤールの手枷が外れた後、彼がその気になればすぐに捕まえられるかもしれないのだ。左大臣に散々お説教を食わされ、白城に戻ることは許されたものの、神殿が下す判断を待たなければならなかった。

「白城があの方達の牢屋代わりというわけですか。亡き歴代の白王様方がこれをお知りになったら、どれほど嘆かれるか。我々といたしましても、白城に民が戻ることを望み続けていたとはいえ、このような形でそれが叶えられるなど、夢にも思っておりませなんだ。あまつさえ、殿下御自身までも神殿の審判を待つ身となられようとは」

明るい黄色の髭を震わせながら、かろうじて平静を保って仁王立ちになっている大臣を前に、ブレイヤールは逃げ出したくなる。大臣の動揺は彼の予想をはるかに超えていた。しかしここで引き下がるわけにはいかない。

「クラムアネスは重罪人だ。けど僕がここに連れてきた石人達は、クラムアネスに利用されていたただだ。人間の奴隷商人に自分の子どもをさらわれてさえいた。確かに白城の財産を盗んだけど、そのために彼らを引き受けるのを拒むのか。僕が彼らにした約束を、守らせてくれないのか」

「それ以前の問題がございますぞ！」

大臣は突然大声を上げる。

「彼らの多くは神殿より送られる星の名を捨てております。名を拒むは石人であることを拒むも同然。大巫女様に対する冒瀆。このような罪人どもをご自身の命で城に入れれば、殿下もまた王



位をはく奪され、それこそただの看守にされるやもしれませぬぞ！」

「無人の城の王より、看守の方がましだ！」

忍耐の隙間を破ってついに弾けた大臣の怒りに、ブレイヤールもついカッとなる。お互いは一瞬にらみ合ったが、すぐにどちらも自分の非を認めて互い違いに視線を逸らした。

「……七百年もの間、城を守り続けてきた皆の誇りと苦勞を踏みにじる決断だとは思った。でも、手枷を外すには彼らを味方に引き込まなきゃならなかった。それに彼らをクラムアネスから救わなくちゃいけないとも思った。けど本当は、ただあの場をやり過ぎたくてなりふり構わないことをしただけなのかもしれない」

しばしの沈黙の後に、ブレイヤールはおずおずと口を開く。

「確かに殿下がご無事に帰られたことは、我々にとって何よりのことです」

ルガデル口は石のように強張ったまま、無感動にそう答えただけだ。ブレイヤールが顔を上げると、大臣のうつむいたままの姿が目に入る。ブレイヤールは次の言葉を待った。ところが大臣は突然大きな溜息をついて、後ろの椅子に背中を向けて座り込んでしまう。その後姿は溜息でしぼんだかのように、ずいぶん小さく見えた。

「本当に、よう戻られました」

大臣は疲れた様子で呟く。先程の固い口調とはうってかわり、感情が戻っていた。大臣はのろのろと立ち上がり、再びブレイヤールの前に立つ。落ち着きを取り戻したが、まだブレイヤールの決断を認めたわけではないことを、その鋭い目が示していた。

「彼らを城の住人とすることで、城の内のみならず外にも多くの問題が出てきましょう。それについてのお覚悟も、されているんでしょうな」

「それは……。まだよく分からない」

ブレイヤールは気弱に答える。クラムアネスとの対峙のときもそうだったが、覚悟を決める前に行動しなければ間に合わなかった。あの瞬間はそれでよかったのかもしれない。しかしあれ以来、事態はまるで滝となって白城の運命をどこかへ押し流し始めた。次にやるべきことは何か分かるが、早いうちにどこかでこの流れの先を見極めなくてはならない。よくない方向へ向かいつつあるなら、流れを変える決断が必要だ。実際のところ、ブレイヤールは呆然自失としていた。七百年間停滞していた白城の運命の堰を破ったのは、他でもない自分だったが、これほど怒涛の展開になるとは想像もしていなかったのだ。

ブレイヤールの怖気に、大臣はいっさい同情するつもりはないらしい。大臣はますます厳しい表情を見せた。

「ここでとどまってどうするのです。白城は再び蘇えらんとするのです。神殿がどのような采配を殿下に下すかはまだ分かりませぬが、それまでは王として振る舞っていただくなくてはなりませんぞ。しっかりしてください。ご自分の立場を忘れたわけではありませんまい」

ブレイヤールは自分の立場というものを苦々しく思った。どんなに無能でも、王という立場からは逃げられない。分かっているからこそ、魔法で喉を焼きつけられてしまったかのように、決心の言葉が出てこない。

本来であればブレイヤール自身が打ち破るべき沈黙は、突如としてどたばたと騒がしい足音で

ぶち壊されてしまった。部屋に駆け込んできたグルザリオだ。彼は手に握り締めた何枚かの紙を、ブレイヤールとルガデル口の間へねじ込むように突き出す。

「二人とも急いで内容を改めてください。先程届いた神殿からの召喚状と、こちらは大きな声ではいえませんが人間からの書簡です。白城を狩場にしてるタバッサの盗人が持ってきましたが、差出人についてはよく知らないようで」

ブレイヤールは人間からの手紙に飛びつき、大臣は神殿からの手紙を取った。それぞれが手にした手紙へ目を走らせ、ついで互いの手紙を交換して知らせを読み下す。グルザリオは部屋に明かりを入れて回り、二人が読み終わるのを待って尋ねた。

「神殿からののは、レイゼルトがらみの話です。使者が話していましたが、大巫女様はこのところ体調が思わしくなく、だいぶ前から誰にもお会いにならないそうで。赤城から送られたレイゼルトの右手も、九竜神官様方が封じておられるようです」

「神殿は十二城の王に神殿へ集まるよう求めている。九竜神官達と魔力をあわせて、レイゼルトを探し出し、あわよくば追い詰めるつもりなんだろう。黄王がレイゼルトに砂にされてしまったのは、やっぱり本当なんだ……」

ブレイヤールは手紙を脇の机に置いた。

「僕には、人間の問題は家来に任せ、神殿へ発てとある。けど無理だ。そっちの手紙の知らせが、悪すぎる」

ブレイヤールの指差した先で、大臣は手紙を手にしたまま再び青くなっていた。

「差出人の名はないけど、内容からしてディクレス殿だ。アークラントから大空白平原へ抜ける峡谷を開くとだけある。つまり、アークラントから人間が来るということだろう」

「じゃ、黄緑の城にもこの話を知らせたほうがよいのでは。人間が何を企んでいるかにもよりますが、空白平原に出るなら石人側も無視できません」

グルザリオは眉を寄せる。ブレイヤールはうな垂れ、こぶしを握った。

「……この手紙を他の石人に見せることはできない。こちらから手紙の内容を確めに、峡谷に人をやらないと。誰かいないか」

大臣もグルザリオも無言だった。峡谷の様子を見に行ける者は、この城には一人としていないのだ。ブレイヤールは顔を上げ、二人の家臣を見つめた。

「僕が行くしかないんだろうか」

「それはなりませんぞ」

素早く、大臣が断固とした口調で戒める。

「殿下がお連れになった石人達を置いて、城を留守にするなどもってのほか。今は次に何が起こるか分からぬ状況。城主が城を空けてよい時期ではございません。神殿からの手紙にも、折り返しこちらの状況を伝える返事を用意せねばなりません」

「何もできないということか」

「やるべきことはございます」

大臣はふくれっ面の主に苦々しい表情を向ける。

「城に新しい石人を迎え入れるには、彼らの名を城に知らせる儀式を執り行わなければなりません」

せぬ」

大臣の指摘に、ブレイヤールは居ずまいを正した。大臣の表情は、やや悲しげなものに変わる。

「殿下がお連れになった石人達の名が城に受け入れられれば、我々もそれを否定することはできません。他の家臣らにも私からこのことを知らせ、明日にでも儀式を行えるよう場所を整えましょう。殿下は彼らの名をご用意ください。名を持たぬ者には、殿下から仮の名を与えるより仕方ありません」

ブレイヤールは視線を床に落としたまま、その言葉を最後まで聞く。しばらくしてわずかに頷いた。そして何もいわず、部屋を足早に立ち去る。大臣は開けっ放しに残された扉を静かに閉め、人間からの手紙を蝋燭の炎にかざして燃やした。

「我々は城か王子か、いったいどちらに従ったらいいんでしょうか」

グルザリオは佇んだままの大臣を横目に、神殿の手紙を丁寧に丸め戻す。彼としては皮肉のつもりの言葉だったが、大臣はそれをそのまま受け入れて溜息混じりに呟いた。

「おぬしは誤解しとる。殿下はそのうちご自分で気づかれるじゃろうが。……王も臣下も城民も、城に従わねばならん。それが古来からのしきたりじゃ。王が力を持っているように見えるのは、王が最も城に近い立場におるからだけ。本当に力を持つてはならん。城民を迎えるか拒むかは城が決めることで、城主が決めることではない。王が力を持てば、城民は王を恐れるようになる。かつて神殿が力を持ちすぎたとき、十二城は建てられたではないか。十二城の次は、あの崖の国のような穴倉が石人の住処になるのか？ 同じ過ちを繰り返すのは愚かじゃろう」

「そうですか。俺はてっきり、この城をただの牢獄にしてしまうことを嘆いて、渋っておられるんだと」

「まだ納得はいっとらん。悪夢を見ているようじゃわい」

大臣は夢なら醒めよとばかりに、皺だらけの顔を片手で強く拭う。大臣の機嫌は最悪と見て、グルザリオはそれ以上余分な口は聞かないことにする。

「キゲイや魚の子については、黄緑の兵士達もまだ搜索中だそうで。キゲイは例の鏡とお守りを持っているから、魔物や邪妖精に関しては心配ないはずですが。女の子の方は城内で迷子になっているのか、城外に出てしまったのか、さっぱり分からんそうです。王がいれば、城内の行方不明者ならすぐに見つけられるんですが……。トエトリア様の戴冠を待ち望む黄緑の民の気持ちが分かります」

「わしらには手の施しようはない」

「ですんで、黄緑の兵士達に任せてきました。……心配はしてるんですよ。これでも」

そっけない大臣の返事に、グルザリオは顔をゆがめた。大臣は上の空で、せり出した額の眉越しに、ひび割れだらけの天井を睨み付けている。

「峡谷から人間が平原へ現れれば、平原の人間どもも気づくじゃろう。連中が利益をともにすれば、七百余年前の石人と人間の争いが再現されることになるかもしれん」

「はっ？」

「峡谷への道が開けば、タバッサは白城を狩場にするこそ泥と旅商人を相手にするただの宿場町

から、アークラントへ通ずる基幹道の都市になれるからの」

「下手をすると石人は、レイゼルトに加えて人間も相手にしなきゃならないと？」

「分からん。分からんが、とにかく陛下が今この城を離れるほどまずいことはない。それだけは間違いない。人間が束になってきたら、この城で何としても、連中を押しとどめなければならんのじゃ。神殿が何を言おうと、時間を持たせねば」

「陛下？ いつから王子は王になったんで？」

「今、家臣がそう認めねば、いつ王になれるんじゃ。あのお方は」

大臣がじろりと目玉だけを動かしてグルザリオを睨み付ける。同時に手を伸ばしてグルザリオから神殿の書簡を取り上げると、半分半分にと小さく何度も折りたたんで懐に収めた。グルザリオはにこりともせず手紙が大臣の懐に消えるのを見つめ、まじめくさった顔で答える。

「王子がクラムアネスを煙に巻けた理由がわかりました。大臣がいらっしゃるなら、白城も安泰です。俺も家臣の務めを果たしましょう」

「崖の国の石人の中から、兵士として使えそうな者と、体の頑丈そうなものを選んでくれんか。それと、王の正装を整えてくれ。成人の儀のときに身につけられたものがあつたはずじゃ。余分な装飾は取って、動きやすいよう軽くしておいたほうがいいかもしれん。普通の礼服では足らぬ相手を出迎えることになるかもしれんでな」

「承知しました」

グルザリオは一礼をして足早に立ち去った。銅板の上の灯が揺れて、大臣の影も大きく揺れる。かと思うと床の上に長衣と短剣の帯が滑り落ち、月色の羽根が数枚散らばった。大臣もまた姿を変えて、窓から夜空へと去ったのだ。

翌日、名読みの儀は天井の崩れかけた謁見の間で行われた。この場所は七百年間ずっと使われていなかったが、今や百人余りの石人達が石杯の前に並び、自分の名が書かれた紙が火花を散らして消え去るのをかたずをのんで見守っている。ブレイヤールは儀式の衣装に身を包み、厳かに次々と名札を杯にくべていく。

名前の中には、不吉な神に由来するものもあつた。本来であれば、こうした名を持って生まれた石人はその場で神殿へ引き取られる。不吉な名は石櫃に封じられた創世の闇に属すために、石櫃に返さねばならないからだ。引き取られた石人は神殿で名を取り上げられ、大巫女様に仕える神官として育てられる。彼らはもはや名を持たず、神殿において柱の影や水面の反射と同様に扱われ、他の者と口をきくことも許されない。名のない者は存在しないのと同じだからだ。

ブレイヤールは火の消えた杯の底に、そっと片手を当てる。杯は熱かったが、燃え残った名札は一つもないようだ。彼は短い安堵の息を吐く。城は名によって石人を拒んだりしない。ならばおかしいのは、不吉な名を持つ石人を神殿に封じようとする神官の方だ。その神官を止めようとしぬい王の方だ。

「我が城はそなた達を受け入れ、守り、応えるだろう」

ブレイヤールの言葉は、新しい城民達の喜びの声にすぐさま飲み込まれた。ブレイヤールは唇を結んで杯に乗せた腕をぐいと引き戻す。城があらゆる石人を受け入れる意思是、どこから来るのか。城に魂が宿っているのか、それとも魂も何もない空っぽなだけなのか。そんなことを思い

ながら。

儀式の前によく磨かれたはずの杯だが、指先に何かがざらついた。ブレイヤールは動作を止めることなく、灰で汚れた指を握りこんで白い王衣の下へと戻す。

何事も、そう易々とは行かないようだ。城が受け入れなかった名は、王が守ればよい。灰に触れた瞬間、彼はそう悟っていた。

それからの十四日間は、かつてないほど白城に活気があふれた。キゲイは依然行方が分からないままだったし、クラムアネスも捕まらない。ブレイヤールは心配に心配を重ねながらも、石人達が城に町を再建する手助けに奔走しなければならなかった。痺れを切らした神殿からの使者が、自らブレイヤールを神殿へ連れ帰ろうと白城に居座ったが、ブレイヤールは城が広いのをいいことに、何とか出会わずにやり過ごしていた。グルザリオも連日、兵士として選り出した石人達に城内を案内して回り、通路のつながりを覚えさせる。

十五日目の早朝、ブレイヤールは城の南に足を運び、塔の天辺から、地平線を縁取る境の森を眺めていた。ディクレスの手紙を受け取って、日にちが発ちすぎている。短い文面からは感じ取れなかったものの、内容はかなり逼迫した状況を伝えるものだったはずだ。毎朝こうして塔に登っては、次の便りか、あるいは何か変化の兆候が見えないかと気を揉んでいた。一方でレイゼルトに関する神殿の便りも、一向に進展はない。神殿からの使者が彼を探して城内をうろうろしているだけで、第二報が来たという話もない。

空を見上げれば、朝焼けに色づく空は薄雲に濁っている。雲は、冬の名残を思わせる冷たい風に乗って、南から北へ運ばれている。

「こんなところにいらっしゃったのですか！」

この日は悪いことが立て続けに起こったが、その最初は神殿からの使者にとうとう見つかったことだ。ブレイヤールは仕方なしに振り返って、あいまいな笑顔を見せる。散々じらされていた使者の方は、笑顔どころではなかった。

「星の神殿へお立ちくださいませ。先の書状はルガデル口大臣までは届いたようですが、いったいその後、殿下には拝見いただけたのでしょうか」

「……いや。そういえば大臣も、このところ姿を見ないな。平原の人間達のこと、忙しいんだろう」

「人間に気を取られている隙に、レイゼルトに寝首をかかれます」

使者に詰め寄られたが、ブレイヤールは口を閉ざして答えないことにする。そのとき塔の上に影が射したかと思うと、耳を打つ羽音とともに二人の間に大きな黄色いフクロウが落ちてくる。羽音が収まると同時に、それは恰幅の良い老人の姿になった。ブレイヤールと使者は目を丸くして、この老人を上から覗き込む。ルガデル口は目をしょぼつかせ、尻餅をついた格好のままブレイヤールに怒鳴った。

「ご用意くださいませ。人間と馬が群れを成して、蟻のような大群でやってまいります！」

「いつ？」

「お許しくださいませ。あと半刻もありません。あの姿で昼夜飛び続けるのは、無理がございましたわい」

ルガデル口は腕を上げて指し示す。ブレイヤールは再び森へと視線を向けた。背後で大臣が塔から駆け降りる足音が鳴った。ブレイヤールの隣に使者が並んだ。ブレイヤールはまた神殿への出立を催促されるのかと思って身を引いたが、使者の視線は森へある。その横顔を見ると、この使者もおそらく猛禽の類に姿を変えられるのだろう。どことなく鷹を思わせる鋭い目つきだ。

「もう森を抜けています！ まるで大河だ！」

やはり遠目が恐ろしく効いたらしい使者は、森に向かって指をさっと突き出した。まだ何も見えないブレイヤールは、彼の言うことが分からない。

しばらく見ているうち、絵のように静かだった森の黒い影へ、突然うごめく白いものが重なった。森と白城との間に横たわる荒野に、その白いものがざらざらと溢れ出す。丘を越えて駆け下りる、何千もの人と馬の姿だった。

初めて見る人間の大量に、ブレイヤールは目を疑うばかりで動けなかった。大都市の石人を一人残らずかき集めても、あれだけの数にはならないだろう。その間にもなお荒野には人間達があふれ、途切れることのない縦列はまっすぐにこの城を目指している。雲に濁るどんよりとした空の下、わずかに注ぐ陽光を受けて、縦列は白銀に輝いている。美しいと同時に、刻々と白城の危機を刻む光景でもある。

「あれが城を荒らした人間達なのですか！」

使者がかすれた声で叫ぶ。ブレイヤールは頭を振った。

「違う。数が多すぎる。それにあの数では、今度は荒らされる程度では済まない」

峡谷が開くというディクレスの手紙は警告であったのか、忠告であったのか、それとも脅しであったのか。荒野を近づいてくる白銀の閃きとともに、ぱっと疑念も閃いた。ブレイヤールは再び頭を振って、混乱を振り払う。今は考えている暇などない。

「とにかく黄緑の城へ知らせを！ 頼んだ！」

ブレイヤールは使者にそう言い置くと、塔の階段へ向きを変える。そのとき目の端に、さらに信じられないものが映る。荒野の起伏に見え隠れして進む、もう一つの銀の大軍隊だった。それは石人世界の奥を目指している。あのまま進めば黄緑の城に行き当たるだろう。ブレイヤールは胸の奥底が凍りつくのを感じながら、塔の階段を数段跳びに駆け降りた。

城内へ通じるアーチをくぐったところで、彼は壁に掘り込まれた小さな偽窓の前に立つ。手のひらほどの小さな窓は、浮き彫りのサンザシの花と枝葉で囲まれている。窓の奥にはなめらかな闇の面があった。

王族がひとたび王座に身を置けば、城の力を存分にふるい、城の侵入者達を撃退するなどわけではない。ところがブレイヤールはまだ戴冠の儀を行っていなかった。これでは王座はまともに使えない。儀式の間へ達する道筋も、七百年の間に忘れ去られている。王座が使えないなら、別の方法で力を引き出さなくてはならない。

呼吸を整え、窓の奥の闇に手のひらをそっとつける。石よりも固く、石ほど冷たくはない。窓の奥には城の基礎石がむき出しのままあった。手窓と呼ばれるそれは、城の各所に設けられている。王座以外で城の力を直接引き出せる、唯一の手段だった。

意識を闇の向こうへと集中する。やがて、自分の魔力が基礎石の向こうに流れる城の魔力と交

わるのを感じる。城の魔力は渦の柱をなし、外側は下から上へ、内側は上から下へと激しく逆巻いて城の中枢を貫いていた。すさまじい力の奔流は、下手に近づくと自分の魂ごと巻き込んで粉々にされそうだ。これが恐ろしくて、今までほとんど、ここまで深く基礎石の奥に集中したことはなかった。

突然目の焦点を失い、ブレイヤールはぐっと瞳を閉じた。目に映る光でとらえた世界と、基礎石を通して魔力で見たもう一つの視界が、瞳の裏で重なったのだ。いつのまにか激しい魔力の渦は消え、冷え冷えとした巨大な城のシルエットが脳裏に刻まれる。城の影にはさらに細かいいくつもの影が重なり、その色を濃くしている。ある影は四角く、ある影は尖塔の鋭い頂点を持つ。影の馬蹄にくりぬかれた部分は、光を通す窓の輪郭かもしれない。

城の中層では、まだ何も知らない石人達が、廃墟の町をせっせと片づけていた。建物の影の中を彼らが横切るたび、その気配が指先に感じられる。城の別のところへ意識を移すと、薄暗い部屋でルガデルロがグルザリオに何かを命じていた。そして、白城を目指していた大群の最初の一人が、大回廊の影落ちる石畳へ恐る恐る片足を乗せたのを知る。

――あの銀色の装備は、ハイディーンだろうか。アークラントの残党を追って、峡谷を抜けたのか。だとすれば、アークラントの残党はこの城のどこかに隠れているのだろうか。

指先に感じる気配が、徐々に濃くなる。次々と人間達が城の中に入り、城の大回廊を奥へと進んでいるのだ。ブレイヤールは他の場所へと意識を移す。アークラントの人間達が隠れているかどうか、探さねばならない。ハイディーンの者達はしばらく放っておいてもよさそうだった。城は広大だ。迷うだけで、石人達がいる場所までとてもたどり着けはしないだろう。

ふと、非常にかすかではあるものの、いつか感じたことのある魔力の気配が城のどこかで灯った。ブレイヤールは魔力の場所を定めようとしたが、まるで小さな流れ星のように、あらわれたのに気付いた時点で消えている。

――レイゼルト？ まさか。あれだけの力を持った奴でも、城の目から隠れることなんてできない。

ひどい目にあった過去が思い出され、集中が途切れる。ブレイヤールは瞳を開け、手窓から体を離れた。壁に自分の影が長く伸びている。城内に意識を沈めている間に、日が傾き始めていた。辺りは風の音が鳴るだけで、廃墟の静けさが支配している。

ブレイヤールはその場を離れ、大臣達のいる部屋へ足を運ぶ。彼が姿を現すと、不安げな顔つきの家臣達が彼を取り囲んだ。ルガデルロが口を開く。

「本隊は城外に駐屯しているようですが、城内を探索する者達もおります。あの者達は城主に『いるなら姿を見せよ』と怒鳴っておりますが、いかがされますか」

「人の城に無断で入ってきて、そのうえこちらから彼らの前に出て来いなんて、ずいぶん勝手だ。しばらく城を彷徨ってもらおう。手窓を使っていくつか石扉を落としてきたから、彼らが行ける場所は限られている。それより……」

ブレイヤールはそこで深く息を吐いた。

「他の侵入者達が城の東側から入ってきている。僕に会いに来たんだろう。服を用意してくれる？ 今から出れば、夜中には彼らのいる場所に行ける」

「やれやれ、忙しくなりそうです」

グルザリオは正装一式を用意しに走り去る。ブレイヤールは大臣に向き直った。

「あの気配は人間だと思う」

「お供しましょう。万一に備えて、弓手達も潜ませます」

「そこまで警戒しなくても」

「甘いですぞ。人間と会う際にはそれなりの形が必要なのです」

大臣はぶんと強く首を横に振って、ブレイヤールのぼやきを跳ね除けた。城の基礎石より崩すのが難しそうな頑固な返事だ。ブレイヤールはその理由を考えて、ようやく頷く。しかし突然、今まで必死に忘れようとしていた後悔の念が胸の内に蘇り、彼は頭を下げ両手で額を覆った。

「最初から、アークラントの人間達に境界の森を越えさせなければよかったんだ！ もっと強い魔法を森にかけていれば……！」

「どんな魔法がかけられていようとも、アークラントの者達は命を懸けてあの森を越えようとしたでしょう」

大臣は厳しい声で続ける。

「ブレイヤール様、あなたは、そんな恐ろしい魔法を森にかけられましようか。わしはそんな冷酷な王になるよう教育した覚えはございませんぞ。そもそも、十二会議であなたお一人に、人間の対処を押し付けたのが間違いなのです」

「いいや、残酷だからあんな軟弱な決断をしたんだ。人間の侵入をきっかけに、白城の復活ができるかもしれないと考えていた。なんて卑しい考えだ！ レイゼルトは境の森にかけた中途半端な幻術で、それを見破っていた。ディクレス殿もそうだったかもしれない。つけ入る隙を与えてしまったんだ」

「我々の期待を重荷としてそのような行動に走られたのであれば、お恥ずかしいことです。この顛末の責任は、共に取らねばなりません」

ブレイヤールは両目を拭いながら顔を起こす。

「覚悟を決めよう。白城の王として、恥じない行動をする。相手も、こちらにそれだけのものを期待しているだろうから」

大臣は難しい顔のまま無言で頷いた。

日が落ち、城内に闇が満ちた頃、ブレイヤールはグルザリオを後ろに従え、東の大柱廊へとたどり着く。ルガデル口も弓兵を従え、柱廊の上階に待機する手はずになっていた。月が落ちて星明りが射し、色のない世界に動くものは彼ら以外にない。空虚な廊下はやがて歩を進めるごとに、張りつめた生き物の気配が濃くなる。柱廊の終わりには、影よりも黒い一団が、来るともされない白城の主を当てどもなく待ち続けていた。

もし今夜城の主が現れなければ、彼らは何も言わずどこかへ去っていたかもしれない。しかし彼らを率いる老王は、ゆるぎない確信を持って先頭にまっすぐと立っていた。その確信とは、運命の重たい一撃に打たれて飛び散った火花のようなもので、本人しか理解できない類のものだ。老王は自分の感覚を信じていたし、後ろに控える長年の兵士達は彼を信じていた。

「お待ちしていた」



老王の影が動き、石人式の一礼をした。ブレイヤールはこれに対し、アークラント式のお辞儀を返す。

「以前の私の煮え切らない決心を利用して、我々白城を見事、策に落とし込んでくださいました。あの拠点あなたがアークラントの民を逃がすためにあらかじめ築いていたもの。それ以上のものだとは考えもしなかった」

ブレイヤールは頭を下げたまま静かに囁き、厳しい表情で体を起こす。老王の影が一步前に出て、星明りに顔半分をさらした。老王は、自分を打った運命が同じように目の前の若者を打ち、彼もまた同じ火花を見たのを知ったのだ。

「私とて、最初はそのつもりでした。しかしハイディーンは我が国の終焉をすら駆け抜け、この城をまっすぐに目指したのです。かつての王として冷徹な言い方だが、アークラントを貫いた雷光は、封じられた希望の殻をも打ち砕いた」

深い皺が刻む表情は、厳しい一方で穏やかだ。しかしそこには壮絶さが秘められている。

「ハイディーン王率いる第一陣はこの城に。第二陣は石人世界の奥を目指しております。第三陣は森の平原側に陣を張り、守りを固めています。仔細は存じませんが、ハイディーン王の傍には、翠銅石に似た青緑色の髪を持つ魔術師が仕えている。石人のように見受けられます」

その言葉にブレイヤールは眉をひそめる。

「……その魔術師の存在は、いつからご存じだったのですか。本当に仔細をご存じないなら、ハイディーンがアークラント獲得ではなく、初めからエイナ峡谷を狙っていたと予測できるはずがありません」

「それはあなたにも同じことが言えるでしょう。境界の森に初めて足を踏み入れたとき、私は拒まれているのではなく誘われているように感じました。私には石人の神殿や城のことは分かりかねますが、あなたは確かに人間を見くびりすぎました」

ディクレスは低い声できっぱりと言った。

「石人のことも油断されないよう」

ブレイヤールはとりあえずも言い返す。しかしすぐに視線を外し、小さくつぶやいた。

「我々はさらに大きな策の中に捕えられようとしているのかもしれない」

「ならば今しばらく捕えられておきましょう。我々を捉える網は、お思いになっているほど大きくはないかもしれません」

ディクレスはこともなげに答える。ブレイヤールは何も言えなかった。ディクレスは、自分には見えない先のことを見ている気がした。

彼が黙っているうちに、ディクレスは最後の言葉をつづける。

「我々はハイディーン王の二陣を追います。あの者達を止めるのは、我々の使命だ」

「それでは……」

ブレイヤールは重たい気持ちで口を開く。

「私はこの城に侵入した第一陣とハイディーン王に対峙し、人間に堺の森を越えさせた償いをすることいたします」

二人は再び礼を交わす。ディクレスは控える兵士らを連れて柱廊を後にしはじめる。ブレイヤ

ールは彼らをその場に佇んだまま見送り、最後の一人が柱廊から姿を消すと、踵を返した。

「あの兵士連中、ディクレス殿より年が多い者もいたかもしれません」

グルザリオが背後で呟いた。ブレイヤールは厚手の白いマントを体に巻きつける。夜気が石の城をよけいに冷やしている。

「キゲイの話だと、老人と少年しか連れてこなかったらしい。少年達は他のアークラント国民と一緒に、平原のどこかに隠したのかもしれない。地読みの民がいれば造作ないだろう」

しばらく歩くと、柱廊の上階に待機していたルガデル口達が合流してくる。

「いったいどこに本当の敵がいるのか、分からなくなってきた」

ブレイヤールは足早に帰り道を急ぎながら、弱音を漏らす。

「クラムアネスに通じていた神官は、本当に九竜神官様達なんだろうか。ハイディーン王の傍にいる魔法使いが石人なら、そいつはいったい何が目的なんだ」

「クラムアネスの話はどこまで本当なのか。そもそもあの女自体、信用できやしませんし……」

グルザリオが歯切れ悪く口ごもる。ブレイヤールが立ち止ると、グルザリオとルガデル口も立ち止り、顔を見合わせた。

「ブレイヤール様」

大臣の目が、薄闇を隔ててきらりと光る。

「悪人同士でもだまし合うことがあります。クラムアネスも騙されて、相手を神官だと思い込んでおっただけやもしれませぬ。いずれにせよ、今はこんなことに気を取られている場合ではございませんぞ」

「なるほど。大臣もディクレス殿と同意見ってわけか。それって、年の功？」

ブレイヤールは身をひるがえして再び歩きはじめる。

七百年もの時が廻り、石人達の世界に再び人間が足を踏み入れようとしている。レイゼルトが初めて白城に姿を現したときから、まるで時が鏡に跳ね返されたように、役者こそ違えど、すべてが七百年前と逆の順序で動いていた。かつてはレイゼルトが倒されてすべてが終わった。今は彼が不気味に姿を消したところから、すべてが始まりつつある。

――最後には、石人と人間の間で戦が起きるんじゃないか。そうならなきゃいいが。そうならないようにしなければ。

翌日は小雨がぱらついていた。境の森には霧が立ち、荒野は雨に色濃く染まっている。この雨は土の下で冬を耐えた草花を目覚めさせる春の呼び手だ。ハイディーンは春の歩みとともにアークラントを抜けて、白城まで駆けてきた。

彼らは魔法の宝を探しに来たアークラントの人々同様、日の出とともに城の探索を始めている。ディクレス達がそうしたように、彼らもまた未知の種族の文化に一定の敬意を払いながら、しかし容赦なく城のあらゆる扉をこじ開け、城をずいぶん風通しの良い場所にしてしまった。宝を探しているようにも見えれば、城主を挑発しておびき出そうとしているようにも見える。

ブレイヤールは手窓からそれを知ると、あとは黙々と身支度に取り掛かった。昨晩は武具らしいものを一切身に着けなかったが、今度はグルザリオから手渡された剣を腰に下げる。金糸銀糸

の見事な刺繍で飾られた白帯には、銀の短い杖をさす。

「殿下」

グルザリオがブレイヤールに人差し指を向けようとしたが、隣に立った大臣がその指をばしっ  
と下にはたく。やむなくグルザリオは自分の右頬に指を当てて示して見せる。

「陛下、右頬のあざは魔法で隠してください。左の擦り傷はもうだいぶ良くなりましたが……。  
正装しても顔がそれじゃ、決まりません」

「分かった」

ブレイヤールは頷いて言われたとおりにする。

ルガデルロとグルザリオをはじめ、年老いた昔ながらの家臣達は、ブレイヤールの身支度を不  
安げに見守っていた。どんなに心配でも、彼らは白王とともに敵の面前へ出ていくことはでき  
ない。足手まといになるからと、ブレイヤールがきっぱり断っていたからだ。

「ブレイヤール様、彼らの頭へ天井を落とせば全てが一瞬で終わります。かつてはそれが、城  
を使った石人の戦い方でした」

ルガデルロがぼつりと暗い声でもらした言葉に、ブレイヤールは首を振った。

「人間相手にそんなことはしちゃいけない。それに、ハイディーンはアークラントの敵だが、白  
城にとってはただの侵入者だ。敵じゃない。皆は大樹の広間で待っていてくれ。必ずそこにハ  
イディーン兵達を連れて行くから」

彼は食べ物が入った小さな包みを受け取り、いつもの食堂から足早に出て行く。

下層に下りたブレイヤールの目に、石壁に刻まれた見慣れない文字が留まった。摩耗の具合か  
ら文字の新旧は分かる。白城に侵入した盗賊達が道しるべとして、あるいは何かの記念として刻  
んだ落書きだ。それらを横断して描かれた真新しい文字は、まぎれもなくハイディーン兵が道に  
迷わないようにつけたものだろう。

ブレイヤールは壁に片手を添えて瞳を閉じる。壁の向こうにある基礎石に意識を飛ばすと、手  
窓ほどはっきりとした感覚は得られないまでも、付近を探索するハイディーン兵らの気配はよく  
分かる。

まもなく、白城下層の都市跡を進む騎兵達は、大通りの向こうから近づいてくる人影を認めた。  
やや癖のある白い短髪に、白い装束で身を包んだ姿は、この白い古城の主であることを示して  
いる。ところが騎兵達には、その石人は生身の王ではなく、この廃墟にかつて栄えた国の、亡霊  
の王と映った。天にも届く古すぎる建物に挟まれた大通りは、過去の幻影に満ちた水底のようだ  
った。この世のものと思えない美しい遺跡へ、何の前触れもなく現れた高貴な衣装の石人を、そ  
のまま現実と捉えてよいものか、騎兵達は迷っていた。

ブレイヤールもまた、初めて間近に見るハイディーン兵の姿に感嘆していた。白い小さな円盤  
をつないだ銀の鎧が、青い影の向こうできらきらと鏡のように輝いている。馬の額にも小さな鏡  
が飾られ、確かに彼らは天と光の申し子に見えた。騎兵の手に握られた槍や、魔術兵の長い銀  
杖は、稲妻よりも白い。昨晚見た、戦に疲れきり、傷だらけの黒い革鎧に身を包むアークラント  
兵とは、何もかも対照的だった。今更のように、ブレイヤールはディクレスがどれほどの敵を相  
手に国を守り抜いてきたかを知る。彼は騎兵らから距離を置いて立ち止まった。

「七百年前の約束をたがえ、人間達よ、なにゆえ境界石を越えた」

白王の重々しい問いは、太古の都市に反響する。すぐさま緋色の帯を肩にかけた騎兵が一群の前へと出てくる。

「我らが王は雷神の御子。天統べる雷神の名において、天と等しく地を統べんと参った。石人の世界とて例外ではない。アークラントの残党を追い、この白き城にいざなわれたのは、雷神の導きにほかならぬ」

「境界石を犯した者を罰するは我が役目。速やかに立ち去られるがいい」

ブレイヤールが答えると、騎兵達は一斉に槍や杖を構えた。緋帯の騎兵が再び声を張り上げる。

「敵をかくまえば、雷神の怒りをかうぞ！」

「この地には、そなた達の神の導きも怒りも届かない。私に傷一つつけることも叶わぬだろう」

通りに落ちる青い影を裂いて、ブレイヤールの左肩辺りを何か過ぎ去った。巧みな腕前で放たれた矢だった。矢は石畳に当たって大きく跳ねる。ブレイヤールは身をひるがえしざまに跳ねた矢を宙で受けると、騎兵らに背を向けて大股に歩み出す。

「逃げるか！」

騎兵の声が追ってくる。ブレイヤールが歩みを止めないとみると、騎兵らもまた馬を進めだした。

――アークラントは国を救うため、力を求めて白城にやって来た。ハイディーンは覇者になる力を得るためにここへ来たということだろうか。どちらも似たようなものだな。

手にした矢じりを見れば、魔法の文字が押下されている。文字は射手の思い通りの場所に、矢をいざなう力を持っていた。彼に命中しなかったのは、はじめから当てるつもりがなかったからだろう。それでもブレイヤールは肝を冷やした。弓手の姿が見えなかったから、つい油断していたのは確かだった。

騎兵達は一定の距離を置いて、ブレイヤールの後を追う。彼らは白王の歩みを止めようと矢を放ち、魔法の炎を石畳に走らせる。ところが矢は的に当たる前に矢じりから溶けて燃え、地を這う炎は見えない壁に当たり、虹色の光を放ちながら消える。ブレイヤールが守りとして張った結界のためだった。

結界を張って歩くだけのブレイヤールの姿に、騎兵達は戦意を削がれ戸惑った。この石人の王は立ち去れと言っただけで、それ以上何をするわけでもない。しかし石人がいかに魔法を得意としていても、これほど敵の数が多ければ、一網打尽とはいかないだろう。加えて騎兵達は、自らの手から放たれる鋭い槍の一突きがどれ程確実に致命的かを知っている。ハイディーン兵達は警戒こそ緩めなかったが、次第にブレイヤールを恐れなくなってきた。この石人の王が歩き疲れた頃に、決着をつけてもいいのだ。

夕暮れが来ても、ブレイヤールは一定の歩調で歩き続け、騎兵達を城の奥へと導き続ける。騎兵達はつかず離れずの距離を保っていた。彼らは決して油断をしていない印として、時折思い出したように矢や炎を投げつける。そして城内に散らばった仲間に向けて、笛を鳴らした。

ブレイヤールは立ち止まることができなくなる。体力を温存するために、走ることもできない

。背後では、馬の蹄が雨だれのごとく高らかに、休むことなく石畳を打っている。

夜が来ると、騎兵達は邪精除けの護符を槍の先に取り付け、魔法の陣を組む。ブレイヤールのすぐ後には、さらに数を増した騎兵達が困うようについていた。彼らは声を合わせ、「言の葉」で止まれ止まれと歌い始める。ブレイヤールは持ってきたパンをかじりつつ、じっと黙って先を急いだ。ここで歩調を乱すのは、すでに命取りに等しい行為になっている。さすがの彼でも、あれだけの騎兵が束になって突撃してくれば、ひとたまりもない。最初に拾った矢はまだ持っていた。最後の最後で、文字通り一矢報いるつもりだった。

杖の先に明かりを灯し、淡い輝きに包まれて進むハイディーン軍と、その明かりを背に城の暗闇に向かってとぼとぼ先に行く石人の王の姿は、まったくもって奇妙だった。王は城の力でいつでもハイディーン軍を殲滅できた。ハイディーン軍もすばやく突撃すれば、王を槍で串刺しにすることができた。互いに相手の出方を恐れながら、時を待っているのだった。

追う者も追われる者も、疲れを表に出してはいない。城内は再び穏やかな光に闇を薄め、冷たい風が柱廊を駆け抜けた。夜が明けた。そして時も来た。

「滅びた城の王よ。そろそろ休まれるがよい」

朗々とした声が背にかけられる。ブレイヤールは振り返らなかったが、その声がハイディーン王のものだと知った。真の王は、他の者とは明らかに異なる響きの声色を持っているものだ。

「口を慎まれよ。ここは私の城であり、すべてにおいて命じるのは私だ」

ブレイヤールは前を見据えたまま、背後の相手に答える。

「我らは七百年に渡り城を守り続けてきた。この城はそれだけの価値を持つ。あなたがたもとくとご覧になられたらどうだろう。私は城のもっとも美しく残る場所を歩き、案内さしあげたつもりだ」

自分の声がどれほど精彩にかけていたかは、疲労のためだけではないだろう。ブレイヤールは唇を噛む。行く先はますます金色の光が強くなる。

はるか昔に崩れたドーム天井から、陽光が降り注いでいる。天窓を飾っていた翼を持つ幻獣の彫刻は、残された半身を日に染めていた。かつて広間の床一面に敷かれていた大理石は、天へ向かって伸びる老木の根に裂かれ、草陰に散らばっている。老木の枝は広間の天井いっぱいになり、崩れたドームの代わりとなっている。風が長い年月をかけて城を崩し、土を運んで作った庭だった。

ブレイヤールは庭の中央で、ようやく足を止める。両足は鉛のように重く痺れ、体の向きを変えるのさえやっとだった。騎兵達も広間の入り口で追跡を終える。ひときわ立派な装備に身を包んだ壮年の男が、馬上から降りて彼らの先頭に立った。その隣には、白い外套で体を覆う魔法使いの姿がある。フードを深くかぶり顔は見えなかったが、鮮やかな青緑の髪が覗いていた。さらにその後ろには、思いがけず知った顔がある。緑の髪の石人、ニッガナムだ。ブレイヤールは内心総毛立つほどの怒りを覚える。

「同胞に裏切られたとお思いか」

ブレイヤールのわずかな表情の変化を、ハイディーン王は鋭くとらえた。

「新しきものが古きものを席卷するのは、世の習いだ。アークラントは滅びた。この城はすでに滅びている。なにゆえ石人はこの魔物溢れる忌まわしい世界を頑なに守り、人間を拒む。我々は

七百年前に分断された二つの世界を、天と同じく一つにする。亡国の王よ、その若さで城とともに朽ちるおつもりか」

「ここはあなた方が暮らす世とは異なる理によって存在している。そのただ中にいながら、お分かりにならないのか。それともお分かりだからこそ、多くの剣と護符をお持ちになられたのか。どちらも役には立たぬどころか、あなた方の身に災いを呼ぶぞ」

言葉を言い終えないうち、ブレイヤールの足元に矢が当たって跳ねる。矢じりは一瞬にして赤く燃えて粉々となり、石の床を転々と焦がす。ハイディーン王を守ろうと、騎兵達が王を背に隠し、二本目の矢を弓につがえていた。

ブレイヤールは居並ぶ騎兵の隙間を狙い、フードの魔術師めがけ、ずっと握りしめていた矢を投げつけた。切羽詰まった悲鳴が上がり、フードの魔術師がよろめく。矢じりが銀の蜘蛛に変わり、細く長い八本の足で頭のがっちり張りついていた。しかし魔術師の姿は、すぐに騎兵の後ろに見えなくなる。

「門を閉ざせ！」

ブレイヤールが叫ぶと同時に、広間へ続く通路が砂となって崩れる。同時に、崩れ残った天井の幻獣もまた、砂と溶けて広間に降り注ぐ。逃げ口をふさがれた騎兵達は、ブレイヤールめがけて馬を駆ろうと手綱をまわす。

踵を返した騎兵達の後ろから、一羽の小鳥が飛び立った。ブレイヤールはすっと息を吸う。

「その鳥を逃がすな！」

ところがそう叫んだのは、ブレイヤールではなくハイディーン王だった。彼は逃げ出す石人が、自分達を裏切ったと思ったのだ。ブレイヤールに向けられていたすべての弓が一斉に向きを変え、最初の一矢が見事に小鳥を射抜く。

ブレイヤールはすぐさま視線を戻した。ニッガナムの姿がない。代わりに小さな青緑のトンボが飛び立つ。同時に広間の壁が砂と崩れ、騎兵達を頭から飲み込んだ。馬も人も地面に倒れ、砂の中でもがく。あわや砂に押しつぶされようというとき、ブレイヤールは杖を掲げた。砂は水に変わり、広間に流れる。砂のように重く固い水は、騎兵達の足元を右に左にともてあそぶ。

ハイディーン王は徐々に水位を上げる水の中に立ちつくし、目の前の光景を見守るしかなかった。水はついに肩まで達し、剣を引き抜くことも弓を射ることも叶わない。

慣れた動作で大木を登り始めた白王の姿が流れ落ちる砂の向こうに薄れ、広間に影が落ちる。空を覆わんばかりに巨大な純白の翼が、船の帆のように広がっていく。広間の上階に姿を現した白城の石人達が、誇らしげな歓声を上げた。

## 十七章 石人の王座

トエトリアは私室から出ることを、今までにないほど固く禁じられてしまった。部屋の外には近衛騎士らと王衛が控えていたし、部屋の中には侍女達がいる、彼女をしっかりと見張っている。今朝起きたときは、侍従長から今日のご予定をずらずらと聞かされた。それが朝食後にはすべて取り消され、いつになく厳しい顔つきの近衛隊長に手を引かれて、部屋に閉じ込められたのだ。

「いったいどうしたの。もしかして、魔物が城の中に入り込んでしまったの？」

いくら堅牢な石人の城でも、時折大きな魔物が城壁を飛び越えたりして入ってくることはある。けれどもそういった魔物は、兵士達と神官によって、すぐに城から「お祓い」される。魔物をできる限り傷つけず、城の遠くまで追い出すのだ。

トエトリアは内心ひどく落ち込んでいた。ついこの間も、ブレイヤールが人さらいにあって、危うく死ぬところだった。もし自分が王として王座についていれば、城の中で誰かを危険にさらすことはなかっただろう。魔物だって、王のいる城には怖がって近づかないものだ。

早く大人になって王位に就きたい。そう思うたびに、彼女はじっとしてられなくなって、城を飛び出してきた。家来の話だけではなく、自分の目で人々の暮らしを見、城を取り巻く山々の峰を歩き、魔法の生き物達がどれくらい危険なのか確かめてみたかったからだ。

「王女様、何も心配はいりませんよ。またいつものように、兵士の皆さんが追い払ってくれますから」

侍女達はこう答えたが、トエトリアは納得できない。いくら魔物が来たからといって、こんなふうに関心を持って部屋に閉じ込めるなど、いつものことではない。いつもとは違う敵が城にきたのだと、彼女は考える。

「もしかして、レイゼルトが来たの？」

尋ねてみると、侍女達は震え上がった。一番年かきの侍女が前に出て、トエトリアと視線を合わせる。

「その名前をこの城で口にしてはいけません。王女様のご先祖は、あの禁呪使いを倒すために犠牲になられたのですから」

「じゃあ、なんで私はここに閉じ込められてなきゃいけないの？」

トエトリアは頬をふくらます。侍女も嘘を言うわけにはいかなかったのだろう。しゅしゅ、人間が蜂のようにたくさん来ていると言った。

「馬も人と同じくらいいて、ぶんぶん鼻を鳴らして、それはもうひどい騒ぎです」

「人間が？ どうして？」

「分かりません。きっと、白城の宝だけでは足りなくなって、この城までやって来たのでしょう」

「ブレイヤールは無事かしら」

「ご無事ですとも。白城はいくらでも隠れるところがございますし、ブレイヤール様は魔術に長けていらっしゃいます。晩までにはこの城も静かになっているでしょう。さあ、お勉強の時間ですよ」

別の侍女が横から算術の本を差し出す。トエトリアは言われた通り、机の上に計算用の半貴石のおはじきをばら撒いた。丸く平べったい石は、色とりどりの影を落として机上に散らばる。

彼女の一番のお気に入り、やはりあの小さな虫が閉じ込められた琥珀のおはじきだった。指でつまんで、テラスから注ぐ銀色の陽光にかざしてみる。四枚の透明な羽も、斑紋の浮かんだ細長い胴も長い針状の尾も、黄緑色に包まれている。針のように細い四本の脚は、凍りついた樹液の中でぴくりともしない。

——このおはじきだけ、目がある。羽根がある。脚がある。知恵もある。おばあ様もお母様も、これで勉強したんだもの。私の代わりに、人間の様子を見に行ってくれないかな。

トエトリアは小さくくしゃみをした。おはじきが指先から滑り落ちて、膝に、そして石床にこつんとあたる音がした。彼女は椅子を降りて机の下に潜り込む。小さなおはじきが侍女達の足元を縫い、大きな弧を描きながら転がっていくのが見えた。

おはじきは机の向かいにある、造り付けの本棚の下段に当たって跳ねる。そして本の間隙間に飛び込んで見えなくなってしまった。

「いいわ。私がとるから」

トエトリアは侍女達をとどめ、本棚の前にしゃがむ。下段には古い魔術の本が並んでいた。ほとんどが彼女の祖母が使っていたもので、祖母自身の注釈で埋め尽くされていることも知っている。彼女は一冊を抜き取り、棚を探る。指先に軽いものが当たったが、奥へ押し込んでしまった。さらに一冊を抜き取り、もう一度棚の奥に片腕を突っ込む。羽の唸る音が聞こえ、彼女の指先をくすぐった。

トエトリアは驚いて、棚の奥を覗きこむ。本に挟まれて向こうに見えるのは、白い粒が無数に輝く夜空のようなものだった。小さな星々はゆっくりと上に向かって立ち昇っている。すぐ手前には、地平線に顔を出した若い月のように、転がり込んだおはじきがぽつんとあった。トエトリアは本棚の向こうの星空へ腕を伸ばす。

——これ、基礎石じゃないのかな。こんなところに、むき出しのままであつたっけ。

肩まで奥に突っ込んでも、手のひらに壁の感触はない。とうとうトエトリアは頭から本棚の奥に突っ込み、奥へ行ってしまった。

慌てたのは侍女達だ。トエトリアの足首を掴んで引き戻そうとする前に、王女の体がすっと奥に消えた。侍女が本棚を覗き込むと、奥には星空のような基礎石しかない。手を伸ばせば、すぐに基礎石の独特な感触が返ってくる。

「あなた達、いったい何をしているの！」

部屋の騒ぎを聞きつけ、侍従長が駆けつける。侍女達はおろおろと振り返った。

「姫様が、この奥に落ちてしまわれたんです！」

侍従長のすぐ後ろにいた近衛隊長が、侍女の指差す本棚を覗いた。

「このような所に手窓があつたのですか」

「ありました。ありましたけど、手窓は壁です！ すり抜けて基礎石の向こうに落ちてしまわれるなんて、いままで聞いたことなどございません！」

度を失いおろおろとするばかりの侍従長達に対し、近衛隊長はずっと冷静に部下達へ指示を



出す。

「この直下にある手窓全てを調べ、奥に王女様の姿がないか確認せよ」

兵士達が部屋を去ると、近衛隊長は王衛のシェドとともに本棚の上段の棚を取り外していく。黙々と作業をする二人の前に現れたのは、本棚の枠いっぱい広がる基礎石の夜空だ。

「窓にカーテンを。部屋を暗くして」

近衛隊長の命令に、侍女達があわあわと動く。シェドはその隣で守護の剣をさやから抜き、基礎石の壁に突き立てた。

「王衛殿、無益です」

近衛隊長は言葉で制止する。しかしシェドは剣の切っ先をわずかに石に突き立てたまま、じっと動かない。

部屋が暗くなると、星を無数に浮かべる基礎石の窓が四角く浮かび上がった。剣もまた青白い輝きをほのかにまとして、基礎石の表をわずかに染める。そのおぼろな輝きは、石の表から徐々に内部へと染み込んだ。光の色は淡い草色に変わり、細く輝く線となって下りの螺旋を描きながら下へと延びていく。

「石の中に、道がある……」

近衛隊長は低い声で呟いた。シェドは頷く。

「この道を生身で通れたのは、初代の王達だけでした。まさか王女様にもそれが出来るとは」

彼は顔をゆがめ、それ以上何も言わず、剣を納めながら足早に部屋から立ち去る。近衛隊長は基礎石の前で、侍従長と顔を見合わせる。剣の光が消えた基礎石の中は、星が立ち昇る無限の夜空に戻っていた。

上階の騒ぎは、トエトリアの耳には全く届いてこなかった。石の中は恐ろしく静かで、自分自身の鼓動すら聞こえない。薄闇の中、自分が下へ下へと落ちているのは、髪や服が上になびく感覚から分かった。両腕をかけば、袖を通して肌に水の流れのような抵抗を感じる。まるで川の中で泳ぐ感覚だが、体の周りを満たしているものは水よりも頼りない。どんなに必死に泳いでも、ゆっくりと下に落ち続けるばかりだ。時折四角く切り取られた小さな明かりが下から上へ過ぎ去る。あれはきっと、城内に設けられた手窓からの明かりだ。

――どこかで外に出なきゃ。このままだと城の一番下まで落ちちゃうよ。

ところが光の方向へ泳ごうとしても体の落下に間に合わず、出口となる手窓を上へと見送ることになってしまう。悪夢の中のように、どんなにあがいても焦りが募るばかりで遅々として進まない。体は疲労でだんだん動かなくなってくる。手や足の指もジンジンと痛み出す。彼女は琥珀の中の虫を思い出した。

――あの虫は、私のお願いを聞き入れてくれたのかもね。部屋からこうして出してくれたもの。でも、方法をもう少し考えて欲しかったなあ。

幸いと、もがいているうちにだんだん泳ぐコツが見えてくる。そうになると、指の痛みも気にならなくなる。トエトリアは遥か下に見えた手窓の光にめがけ、そろえた両足で、水よりも頼りない基礎石の中身を打つ。何度も失敗しながら、ついに一つの手窓の枠に指をかけると、彼女は出

口を塞ぐ化粧石に意識を集中させた。

手窓を囲う化粧石が崩れ、彼女は基礎石の中から床の上に転がり出る。崩れた石で膝や腰を強く打ちつけながらも、彼女はすぐさま周りをうかがった。人の姿はない。遠くから、荒々しい喧噪が彼女の耳を打っていた。廊下の装飾を見れば、自分が中層下部に来たことが分かる。人間のことを思い出し、彼女はびりびりと胸の奥が緊張するのを感じる。

立ち上がろうとして、彼女はひどい眩暈に振り回された。頭を押さえ、壁越しに肩を支える。今まで基礎石の中にいたせいだろうか。自分の体と意識が、ちぐはぐになっていた。用心してゆっくり歩かないと、頭のとっぺんから水みたいに心が零れ落ちそうだ。

それから彼女は、ついさっきまで、自分がずっと息を止めていたことにも気が付いた。口を開けてすっと息を吸うと、いっぺんに体が軽くなった。眩暈もおさまる。はっきりした意識に、焦げ臭い嫌な匂いが鼻の奥をかすめた。

――火事だ。誰が火をつけたんだろう。

慌ただしい足音が頭の上を右から左へ駆け抜けていく。トエトリアは廊下の窓へにじり寄った。すぐ上階を兵士の一群が通って行ったのだ。じっと窓の外へ耳を澄ますと、一度通り過ぎた足音が、別の場所から聞こえてくる。重たい足音と一緒にガシャガシャとけたたましい金属音が鳴るのは、軽装であるはずの石人の兵士からは考えられない。トエトリアの背筋に、冷たい緊張が走る。

足音の主達が怒鳴る声を聞いた。その言葉は石人語ではない。「言の葉」でもない。おまけに足音はすぐ近くに来ていた。階段を駆け下りている。

――人間しかいない。どうしよう……。町の人や、城の兵士達は無事なのかな。

自分の体を探ってみても、武器になりそうなものは一つも見当たらない。彼女は腰飾りを外して左手に巻きつける。銀の細い棒をつなげただけの鎖だが、ないよりしました。

「誰だ！」

鋭い男の声が彼女を一瞬射すくめる。彼女の視線の先へ、廊下の角から白銀の鎧姿が八つ現れたのだ。言葉は「言の葉」だった。相手はトエトリアを見ても、油断した様子は少しも見せない。鋭い剣の先をこちらに向けて、彼らは立ち止まった。

「動くな。そこにいろ」

一人が油断なく剣を構え、トエトリアの方へ歩み寄る。

「いやよ。私、捕まりたくないの」

トエトリアは困って叫び返した。すると廊下の角で待っている七人の兵隊は、どっと笑った。彼女を捕まえようとしていた一人の兵士は、ここぞとばかりに足を速める。トエトリアは慌てて立ち上がり、銀の鎖を巻いた左腕を突き出した。

その瞬間、兵士達の笑い声はぴたりとやんだ。彼女に向かっていた兵士もすばやく足を止める。相手が石人の子どもといえど、彼らはトエトリアが魔法を使うと思い、怖がったのだ。真顔でこちらを鋭く見つめる八人の大人の姿に、トエトリアも怯えた。何か考えがあって突き出したわけではない。しかし、ここでもし腕を下してしまえば、銀色の兵士達はその隙を逃さず本気で斬りかかってくるかもしれない。彼らは魔法使いを恐れているのだ。

トエトリアはじりじりと壁際に動き、右腕を後ろ手に基礎石へ触れた。手のひらに平らで滑らかな感触が当たる。水より軽く、風より重かったはずの基礎石は、強情なまでに固い、ただの石壁に戻っていた。どうすれば再び基礎石の中へ戻れるのだろうか。

立ち止まっていた兵士達が、不意に動いた。彼女は最初の兵士の手を危うく潜り抜ける。ところが逃げ出そうと引いた片足を、兵士に捕まれてしまった。あっという間に彼女は片足でぶら下げられてしまう。自分の長い髪のが、床を掃くのが見えた。彼女の背中で兵士達の怒鳴り声が聞こえる。何を言っているのか分からない。トエトリアは鎖を巻いた左手と右手を胸の前でギュッと合わせた。魔法を使えば、彼女を捕まえている兵士にちょっとした火傷を負わせられる。しかしそんなささやかな魔法では、彼らから逃げる事など到底無理だ。

次の瞬間、彼女は乱暴に床の上へ投げ出された。兵士達の怒号が廊下にこだまする。トエトリアは痛みを堪え、床から頭を起こす。白銀の兵士達のほかに、黒い鎧の兵士の姿がいくつか見えた。いくつもの鞘走りの音が耳をくすぐった。

黒い兵士達の姿を見て、トエトリアは彼らもまた人間だと知る。ところが同じ人間同士なのに、黒い兵士達と白銀の兵士達は剣を交えていた。白銀の兵士が、最初によろめいて床に倒れる。

一流の騎士達に守られて暮らす彼女には、彼らの練度がよく分かる。黒い兵士達の方が、より熟練された身のこなしと迷いのない意志を持っていた。一方で、身につけている装備は明らかに白銀の兵士達のものの方がよい。しかし白銀の兵士達は、突然襲撃を受けた上、相手の気迫に戦意を飲まれて戸惑っていた。

トエトリアは床に倒れたまま、目の前の死闘から目を逸らせなかった。彼女もまた、黒い兵士達が発する気迫に圧倒されていた。それは怨念とっていいほどに強く心の奥底から発せられ、正義や大義の衣すら匂わせない丸裸で透明な、誇り高いものに思われた。

「怪我はないか、仲間はどこだ」

安心してたトエトリアに、低い声かけられる。彼女は稲妻に打たれたように体を震わせ、鋭く振り向いた。黒い鎧の兵士が一人、彼女の傍に屈んでいる。壮年過ぎの老兵士だ。背は高く、その顔つきには驚くほど力が溢れている。

「敵が来る。いつまでもここにいるわけにはいかん」

兵士はそう言ってトエトリアの返事も待たず、彼女をひょいと背中におぶう。かと思うと目にもとまらぬ速さで廊下の先へと走り出した。まだ味方が白銀の兵士達と戦っているというのに、彼は一度も振り返らない。

黒い鎧の兵士は階段を上りはじめる。途中、白銀の兵士達が立ちはだかった。しかし黒い兵士は剣一本で全ての攻撃を見事に流し、彼らをまとめて階段の下へ蹴り落としてしまう。

トエトリアは黒い兵士の背中に必死にへばりつきながら、不安を募らせた。白銀の兵士達が城のいたるところまで侵入している。城民はどこへ逃げているのだろうか。黄緑の城の兵士達はみんな倒されてしまったのだろうか。人間だらけで、石人の姿がどこにもないのだ。

階段を上りきると町の通りに出た。あちこちに火事が起き、濃い霧のように煙が立ち込めている。銀色の鎧姿が煙の間にいくつも行き交っていた。黒い兵士は立ち込める煙に身を隠し、近くの建物からさらに登り階段を見つけて駆け上がる。煤煙と長い階段のせいで、息はととても苦し

そうになっていた。

通りが火事になっていたのは、石人が人間を足止めしようと火をつけたのかもしれない。だとすれば、皆はもっと上の方へ避難しているのだろうか。それにこの黒い兵士は、白銀の兵士達の群れを潜り抜け、たった一人でこんなところまで来て、大丈夫なのだろうか。トエトリアは黒い兵士の肩を叩き、兜の耳元で声を上げた。

「ありがとう。私、ここから自分で歩ける。あなたはこれ以上登らないほうがいいわ」

「そうか。それは心強い」

黒い兵士はそう言って階段を登り切り、トエトリアを床に降ろす。彼女は小さく悲鳴を上げた。上階の街も火の手があり、白銀の鎧を着た兵士達がいたのだ。彼らも突然現れた黒い鎧の兵士に驚いていた。黒い兵士はトエトリアの肩に手を添えたまま、彼らに威厳のある声で問いただした。

「この石人の子に手出しをせず、後も追わぬと誓えるか」

白銀の兵士達の中から、一人、立派な鎧とマントを身に着けた騎士が答える。

「誓おう。子どもを斬るのは我らの道理ではない。それにしても、我らが打ち倒したばかりの亡国の兵と、異人の城で再会するとはな」

白銀の騎士は腕を上げて、脇の細い通りを指さした。通りの突き当りには石造りのアーチがあり、町の外に広がる褪せた緑色の斜面が覗いている。短い草地の上を冷たい風が吹きおろし、いつもと変わらない風景は、通りの惨状とは別世界だ。

「小娘は行け。ただしお前は剣を捨てなければならない。国を失ったときに、そうすべきだったのだ」

白銀の騎士が言う。黒い兵士は言われたとおり、手にした剣を床に置こうと上体を傾ける。トエトリアはすばやくその腕にすがった。そして兵士の顔を見上げ、金色の瞳を相手の瞳にしっかりと据える。

「なに、捕まるだけだ。同じ人間同士だから、心配はない」

「石人に見つかったら、どっちも危ないよ！ 皆には白銀の鎧も黒い鎧も関係ないもの！」

「そのときはお互い協力して逃げるだろう。私達はあの者達を迎えに来たのだ」

落ち着いた柔らかな物言いに、トエトリアはおずおずと腕を離した。黒い兵士は剣を置いて体を起こす。白銀の騎士がそばまで来ていた。騎士は剣を拾い上げ、怪訝な様子で黒い兵士の顔をじろじろと眺める。それから騎士はトエトリアに向かって、通りの先をぐいと指差した。

「早く行け。魔術兵達が戻れば、厄介なことになる」

黒い兵士も無言で頷いて見せる。トエトリアはとうとう駆けだした。黒い兵士の身の上で心配でたまらなく、後ろを振り返りたかったが、できなかった。彼女は石人だった。一刻も早く人間達の元を逃れ、仲間の元へ戻らなければならないのだ。

城民達の避難が遅れたのは、致命的だった。ありえないことに、人間達は石人の城をよく心得ていた。彼らは城民を脅すだけで決して捕えようとはしなかった。かわりに城民の逃げる方向から城の主要な施設を見つけ出し、そこへとんでもない数の兵力をぶつけて制圧したのだ。人間の

兵士達にとって幸いなのは、黄緑の城に王が不在だったことである。それもまた石人からすれば、最大の弱点を突かれてしまったことになる。

実際人間の侵攻は、中層下部にとどまっていた。にもかかわらず、黄緑の兵達は最初の混乱から立ち直れなかった。個々に戦いを仕掛けては人間の巧みな用兵に翻弄され、捕まったり敗走させられたりしている。それはさらなる焦りを生んでいた。黄緑の兵達は兵力を分断され、上層の指示からも完全に孤立していた。

「下層は混乱の極みだ。王座が使いぬのが、あまりに口惜しい」

城の最上層に位置する王座の間で、黄緑の騎士団長が歯ぎしりをする。下層からの情報が途絶え、城民や兵士達が無事なのかどうなのかも分からない。届く知らせは断片的で、しかも城の外周部の状況にとどまっていた。

「王女様の行方も分からないでは、この城はどうなるのか……」

右大臣もうなだれる。それから彼ははっと顔を上げた。

「王位第二継承者のルイクーム様に座っていただくのはいかがか。あのお方は優秀な魔法使いでもいらっしゃる」

その言葉に左大臣が鋭く反応し、右大臣をねめつけた。

「王座に座れるのは、王かその位を継ぐ者だけです。そのような不吉なことはできません」

「では人間どもを好きなようにのさばらせておくのですか！ 下層の外周部は完全に敵の手に落ち、中層の外周部も時間の問題となっているのですぞ」

「城の力を使わずとも、人間などどうにかかります」

「どうにもなっていないではないですか！」

「お二人とも、おやめください。言い争っている場合ではございません」

黄緑の騎士団長が、にらみ合う左右の大臣の間に割って入る。話は一向に進展がなかった。左大臣は王座を守るようにして、一同の前に立ちはだかっている。

「白城からの連絡はまだ途絶えたままか」

一向に進まない議論の間を縫って、王室騎士団長が部下に尋ねる。

「最初の一報以降、何も。こちらから使いを二人出しましたが、一人は敵に射落とされてしまいました。もう一人も捕まっていなければよいのですが」

広間は再び居心地の悪い沈黙に包まれる。誰ともなく深いため息をついたときだった。

「皆様！ 外を！ 白殿下が参られた！」

王宮騎士が中庭に面したバルコニーで怒鳴る。王座の間にいた石人達は、ひとかたまりになって庭へと飛び出した。

空中庭園から眼下に、純白の巨大な帆が揺らいだ。星の神殿の大天蓋にも匹敵しようかというそれは、帆の上に霞を乗せている。帆の正体は蝶に似た羽で、純白の柔らかく細い繊毛に覆われていた。羽を包む霞は、黄緑の城を囲む山々からさらわれた雲だ。

蛾を思わせる姿だった。横に広げた四枚の羽が、中層に広がる牧草地の斜面をすっぽりと覆っている。羽と同じく純白の羽毛に覆われた体には、胸から両の横腹に漆黒の斑点模様がある。小さな頭部は虫よりもげっ歯類を思わせる獣に似て、長い飾り毛に覆われた触覚とも耳ともつかな

いものが額の両脇に立っていた。淡褐色をした二つの瞳の両脇には、小さな赤い球が飾りのようについている。それは昆虫の複眼を思わせる、六角形の網目を淡く浮かせていた。

下層や中層間近にいた人間達には、この昆虫とも動物ともつかない恐ろしい姿がありありと見て取れた。彼らは見たこともない怪物の姿とその巨大さに怯え、狂ったように矢や魔術の炎や稲妻を射かけている。

白い蛾は細い前脚を中層の塔にかけ、上によじ登ろうとしていた。体と羽が大きすぎて、王城まで飛んでいくのが難しいのだ。魔術の炎は腹部を覆うやわらかな毛の間で消えていたが、矢は無防備な背や下腹へ針山のように次々と刺さっていく。

「危ない！ 下がれ！」

ようやく白王の前脚が王城の庭園のふちにかかる。王室騎士団長は大臣達を後ろに追い出し、部下達を呼びつける。庭園に半身を現した白王の頭から、次々と騎士達がよじ登る。彼らは白王の体に刺さった矢を抜き始めた。白王が大きすぎる体を庭園に引き上げると、傷口から落ちた灰色の体液が柔らかな下草を濡らした。

「すべて抜きました。もう大丈夫です！」

最後の騎士が白王の体から滑るように飛び降りる。その声とともに巨大な蛾の姿は薄れ、白いマントに身を包んだブレイヤールの姿が四つんばいで現れた。彼はよろよろと立ちあがり、真っ先に駆けつけた王室騎士団長に顔を向けた。

「大丈夫です。矢傷の痕がチクチクするだけ。幻獣の姿で流した灰色の血は、洗い流してください。弱いですが、毒があります」

「心配いたしました。手当ての用意をいたしましょう」

王室騎士団長と入れ違いに、左右の大臣がブレイヤールを王座の間へ迎え入れる。椅子が用意され、ひとまずも彼はそこへ腰を落ち着けた。顔色はさほど良くもなく、ひどく疲れきった様子で目の下には薄く隈ができています。矢傷の跡は赤い小さな斑点となって首筋や手の甲を覆っていた。

「白城を襲った人間達は、あらかた追い返しました。しかしあまりに数が多すぎ、我が城の者達だけではすべて追い出すことはできません。黄緑の城の力添えをいただきに、参ったのですが」

ブレイヤールは左大臣を見上げる。左大臣が答える前に、右大臣が怒った。

「追い返したですと！ なぜ殺さなかったのです。白城で人間どもに我らの恐ろしさを知らしめれば、この城もここまで荒らされることなどなかったはずだ！ このまま連中が増長すれば、さらに恐ろしいことが起こるかもしれませんぞ」

「安易な殺戮も、良くない結果を招くだけかもしれません」

ブレイヤールは頑なに答える。黄緑の城で起こった惨状は、すでに目の当たりにしていた。王のいない石人の城がどれほど脆いか、そして王がいる城はどれほど強固なのか、彼は白城で十分に学んでいる。それだけに、彼は右大臣の言葉を素直に認められなかった。

「トエトリアは部屋ですか」

「信じていただけないかもしれませんが、基礎石の中に落ちてしまわれました」

左大臣が答えた。彼女はトエトリアがいなくなった経緯を話し、城の状況を伝える。ブレイヤ

ールはその話を途中で遮ることなく、訝しがることもなく、淡々と最後まで聞き下した。左大臣の報告が終わると、彼はまっすぐに黄緑の王座を見つめ、決然と立ち上がる。

「王座を使わせていただきたい」

短い言葉に、その場にいた黄緑の城の者達は耳を疑った。他国の王を王座に座らせるなど、石人の長い歴史の中で一度もなかった。それどころか、ブレイヤールは白城でも王座に座ったことすらない。左大臣は思わず王座の前に立ちはだかる。ブレイヤールは静かな目を彼女に向けた。

「トエトリア王女を見つけるのも、この城を救うのも、城の力を王座から使わねば犠牲が増えるだけです」

「おっしゃる通りです。しかし、他城の王がこの王座より城の力に触れるは、あまりに危険でございます」

「私はまだ白城での即位式を行っておりません。一魔法使いとして、また王座に触れるに見合った身分にある者として、今はこの城に仕えさせていただきたいのです。かつてこちらに座された亡き先代の女王様の御霊もまた、実の一人娘であるトエトリアを助けるため、きっとお力を貸してくださるはずです」

左大臣は何も言い返さなかった。彼女はのろのろと道を開けた。淡緑色の石肌に、若葉の蔦と神魚の遊泳を掘り込んだ王座があらわになる。ブレイヤールは後ろの大臣らを振り返る。大臣達も他に打つ手を持たない。誰もそれ以上白王を止めることはできなかった。左大臣が無言の許可のしるしとして、王座の隣に控える。ブレイヤールは白いマントを肩から外し、床に落とす。白王は王座に向かい合う。彼は空の王座に深く一礼をした。そして王座に向かって踏み出す。

すべての廷臣達は、そっと顔を伏せた。黄緑の国の王座が、他国の王によってその色を汚されるのを見たくなかったのだ。彼らはずっと頭を垂れ、あるいは庭園の向こうにたなびく幾筋もの黒煙に横目を向けていた。ここまで煙が届くということは、中層にまで敵の手が及びつつあることを示している。

白王は一言も発さず、王座の間は張りつめた緊張で静かに満たされていた。

最初に顔を上げたのは、誰とも分らない。確かなのは、白王一人だけが最後まで、王座に向かってじっと頭を垂れていたことだ。

白王は王座に腰を下ろしてはいなかった。王座に向かいあって前かがみになり、肘掛けに両手を乗せて背もたれに頭をつけていた。彼もまた、他国の王座を乱すことはしたくなかったのだ。

ブレイヤールは魔力で呼んだ深い闇の中へ入っていった。長い間王座はただの冷たい石だった。やがて彼は、まぶたの裏にぽつんと小さな淡色の点を見る。その点を見る間に大きくなり、一人のほっそりした女王の姿になった。とはいえ、彼にはその王はとても大きく見えた。身にまとった衣装は黄緑の王族のものだ。長い黄緑色の髪が両肩を覆い、若草色の瞳には厳しい王の威厳を湛えている。漆黒の空間に彼女は立ち、純白の頬は凍りついて動かない。

――おばさ……、じゃなくて、先代女王様。

ブレイヤールは女王を見上げながら、遠い記憶を呼び起こす。小さかったトエトリアは、母親の顔を覚えていないかもしれない。彼はまだよく覚えていた。若くして病に倒れた女王は、彼の記憶の中よりもさらに若く見えた。衣装の様子からすると、この姿は王の即位式当時のものかも

しれない。

先代女王は、まったく感情の読み取れない冷たい瞳でブレイヤールを見つめていた。彼は、自分がいつの間にかひざまずいていることに気が付く。そして自分の背後には、王座に向かい合っている彼自身の気配を感じていた。まぶたの裏に見えるこの世界は、夢と現の境界にあるのかもしれない。

女王が背を向け、暗闇の奥へ歩み出す。ブレイヤールは立ち上がり、後を追った。辺りは闇一色で、踏みしめる床も靴音を返しはしない。それでもなんとなく、自分が坂を降りているのが分かる。歩いているはずなのに、両の掌にはざらついた王座の肘掛けの感触があり、王座の背につけた額は冷たい。自分の肉体が王座のすぐそばにありながら、もう一人の自分は別のところへ向かおうとしている。ちぐはぐな感覚は、集中を緩めると激しい眩暈に変わる。しかしそれはこの暗闇の世界において眩暈などではなく、心を迷い揺さぶる狂気に等しい。

先を歩く女王の両側にいくつもの人影が見えてくる。ブレイヤールは震えた。人影はすべて、かつてこの国を治めた王達の姿だった。動かない体が道の両側に、暗闇からぶら下げられたように並んでいる。皆が陰気に顔を伏せ、それぞれの色の瞳が暗闇でほのかに光を放っている。その姿はほとんどがまだ若い。すべて即位式当時の姿なのだろう。

ブレイヤールは先代の背を、すがりつくように目で追いながら、王達の回廊を歩む。進むにつれて、彼らの衣装は古い時代の装束に変わっていく。時代とともに、姿も薄れていった。古い時代の王達を、城が忘れかけているのだろうか。王達の姿はやがて暗闇に時々瞳が光るだけとなり、ついには何も見えなくなる。

王の列が途切れても、先代は歩み続けていた。古すぎて見えないだけで、実際にはまだ古代の王達が、道の両脇に立っているのかもしれない。

――白城にも王達の列があるんだろう。僕も即位式の水盤を覗けば、こうしてこの世の終わりまで、こんな列に加わることになるんだろう。

何もなかった暗闇に、細い輪郭を描く小さな泡がいくつも立ち昇りはじめた。泡は、今まで見ることのできなかつた通路の先を浮きたたせる。

――あれは、基礎石の中を通る泡だ。まさか、城の中枢塔を下っているのか。なら、この先には.....

先代の姿が闇に沈んで消えた。残された暗闇に、銀色の細い線が四角を描いている。ブレイヤールはそこまで駆け寄った。手を差し出すと、基礎石の感触が返ってくる。

――中枢の最下層は行きどまりだ。開くことのない扉がある。この銀の線が、扉の輪郭だろうか。

話にだけは聞いていたが、見るのは初めてだった。銀の線は基礎石の中に流し込まれた水銀だ。彼が指で触れると銀の線は基礎石の向こうで震える。

この描かれた扉の向こうへ行けるのは、初代の王のみだったと伝えられている。王達の回廊を歩みぬいた彼が、最後に目通りすべきは初代黄緑王のはずだ。

――ここを通り抜けなければいけないのかな。

ブレイヤールは戸惑いながら銀の線を指でたどる。突如、水銀の線から白い閃光が生まれ、扉



の奥に集まって人の形となる。光は急速に一点に集まり、辺りを闇へ戻すとともに残像を残す。それは基礎石の中に閉じ込められた初代黄緑王の姿だった。

「あっ！」

ブレイヤールは自分の悲鳴で我に返る。現に戻った瞳に、銀糸の蔦模様が縫い付けられた深い黄緑色の布が映る。王座に敷かれたクッションだと分かるまで、しばらく時間がかかった。

「白殿下、いかがなされました」

左大臣のかすれた声が背中から聞こえる。ブレイヤールは頭を上げ、差し込む日の光に目を細めた。

「大丈夫です」

彼は呟いて、再び背もたれに頭を当てて目を閉じる。次の瞬間、彼の精神が飛んだのは暗闇ではなく、城の全てだった。城内のあらゆる場所が怒涛の滝となり、彼のまぶたの裏から精神に流れ込んだ。意識は城に拡散し、耳の奥に幾千もの足音がこだました。壁を打つ人々の悲鳴や命令の怒声が内側から肌を打ち、火に巻かれ黒くよじれていく木々の軋みが骨を締め付ける。

ブレイヤールは黄緑の城の劣勢を、その体で知った。城の力は血液の流れに乗ってあらゆる感覚を乗っ取り、城内に展開する情景をめまぐるしく脳裏にたたきつけてくる。自分は確かに王座の傍に立っていたはずなのに、いまや城の全ての場所に存在している。その中で、城の一部分にだけ意識を集中させるのは、とても難しかった。トエトリアの気配を探そうにも、それ以上に城の状況の方が騒がしい。

彼は目の奥で、大樹の塔の学舎に変わらず座る老師の存在を感じた。彼女の弟子達が塔の扉を守っているのも、手に取るように分かる。下層の大橋を駆け抜ける黄緑の兵士達の一団は、血管を打つ鼓動と重なり、白銀の鎧に身を包んだハイディーン兵の足取りは、神経を響かせる。何も分からないまま、時間だけがいたずらに過ぎていく。

石人達の悲鳴が彼の耳を貫いた。ブレイヤールは歯を食いしばる。ぽたぽたと額から汗が流れ、鼻筋を伝って落ちる。鮮烈な城の感覚は、神経の痺れとまぶたを透る日の光に消えかけていた。

「下層の兵をいったん柱の広間へ集めてください。城民は魔術院と博物館の地下に大半が隠れている。人間達は廃街へ誘い出してください。城の力で追い払います」

ブレイヤールの言葉を聞き、数人の騎士がすぐさま広間から駆け去る。

「王女様は見つかりませんか」

左大臣が問いかける声がする。ブレイヤールは答えなかった。集中と意識が薄れるとともに魔力の闇は灰色と変わる。城の力は彼から離れつつあった。鈍くなった感覚の中を、黒い人影が横ぎった。身にまとった鎧の色がぱっと閃めく。閃いた色は感覚を再び闇色に染める。彼は最後の気力を呼び覚まされた。

「銀の鎧の人間と、黒い鎧の人間がいる！ 黒い鎧の人間は、銀の鎧の人間をよく知っているはず。彼らと話し、人間との戦の仕方を教わって！」

ブレイヤールは叫んで顔を起こし、体を横に傾けた。彼はそのまま王座の脇に膝をつく。体は王座から手を放した瞬間に、ひどく軽くなった。両膝を床につくと同時に、激しい疲労と痛み

が襲ってくる。誰かが彼の耳元でトエトリアのことを尋ねた。必死な声だ。ブレイヤールは無我夢中で体を起こし、王座に手をかける。まだ気を失うわけにはいかない。

――おかしい、なぜだ！ 本来この王座に座るべき王族の居場所が、こんなにも掴みづらいなんて……。

城の中層に意識を向けると、幾重にも重なった石壁が霧となって視界を遮る。耳の奥で、草を蹴って走る軽い足音が横切った。音を追おうと心をそちらに向ける。一瞬霧が晴れ、白い日差しに照らされた緑の斜面が姿を現す。草地と同じ色合いの、長い髪をした子どもの背中が遠ざかっていく。見覚えのある走り方だ。

不意に降り注ぐ日差しが濃度を持ち、柔らかなカーテンのように風にうねった。カーテンは見る間にまばゆい閃光に変わり、目の前の景色を飲み込んでいく。

――邪魔しないでくれ！

誰にともなく彼は心の中で叫んだ。無意識に口でも叫んだのかもしれない。声が耳の外からも聞こえた。声はそのまま強い衝撃となって脳を打ち、一瞬気が遠くなる。

彼は瞳を開けた。知らない男の顔が上からのぞきこんでいる。

「お気づきになりましたか」

男は囁いて、視界から外れる。西日に縁どられた王座の間の天窓が現れた。空のまぶしさに眉をひそめると、誰かが日よけを傍に寄せる。

「城の魔力にあてられたようです」

再び男の声がした。どうやら彼は医者らしい。ブレイヤールは体を起こした。辺りを見回すと、王座の間は暗い。窓に切り取られた夕暮れの空だけが明るかった。彼の傍らには医者が膝をつき、左大臣と思われるまっすぐな影が、数人の影と一緒に少し離れた柱の脇にいる。

鼻から喉の奥にかけて、何かがおどおどとひりついた。鼻血でも出たのだろう。額には布が当てられ、包帯が巻いてある。確かに眉間の上あたりが痛いような、ひどく冷たいような気がする。ブレイヤールは視線を落とす。膝の上に投げ出した手の甲は、薄闇の中でずいぶん白く見える。袖口が黒っぽく汚れているのは、血の染みか。

「王女は中層の斜面にいたのかもしれない」

切れ切れの声で、ブレイヤールは傍の医師に伝える。彼はその言葉にうなずいた。

「お倒れになる前に、そうおっしゃいました。今、兵が探しに向かっています」

「探しにって、まだ見つかっていない？ あれから時間はずいぶん経ったはず」

「城が混乱している最中ゆえ、知らせが遅れているだけかもしれません」

「そうか。まだ人間達も城内にいるんだっただろう」

ブレイヤールは呟いた。東側の窓の外は、星が見え始めている。

――中層に、何か得体のしれない大きな力があつた。あれはなんだったんだろう。

彼はふらふらと立ちあがり、再び王座に向かう。大臣の一人が駆け寄り、引き留めた。

「下層はまだ持ちこたえております。今また王座に触れれば、お体に障ります。他国の援軍を待ちましょう」

ブレイヤールは首を振った。援軍が来るにしても、数日はかかる。来たとしても、石人の兵士

と人間の兵士がぶつかれば、それは戦争だ。彼はそれを避けるために黄緑の城に駆けつけたのだし、ディクレス達もそうなのだ。それに再び王座に触れなければ、黄緑の城が受ける犠牲は大きくなる一方だ。王女と城民の安全が、待つことの出来ない危険にさらされているのだ。

もうじき夜が来る。これはチャンスだった。腐った水と月の光が交わって生まれる邪妖精達を集めれば、人間達を城から追い出せるかもしれない。目に見える石人の兵士よりも、闇にうごめき定まった姿を持たない邪妖精の方が、人間を恐怖に駆り立てるはずだ。

「下層の壁を各所で崩し、城内深くまで月明かりを導きます。昇降塔の水門も開きます。壁が崩れ、水が城から流れ出せば、邪妖精だけでなく魔物も入ってくるかもしれません。しかしそれで、人間達にはここが誰のものの世界かよく分かるはず。彼らが城から逃げ去るまで、黄緑の兵士達には崩した城壁の代わりに務めてもらわねばなりません」

王座の前でブレイヤールは左大臣の方を振り返る。左大臣は夕闇の中で頷いた。

「分かりました。そのように城の力を使うことを、許可します。我々は城民を守らねばなりません」

わずかに震える左大臣の凜とした声を受けて、ブレイヤールは王座に向かう。命令を実行に移すために走り去った騎士団長らの足音が、最後に響いた。

夜に向かう時間の中で、城の力はすべらかに彼の意識に添い、下層へと流れていく。下層を守る城壁の崩れた音や、溢れ出す水路の轟音は、ここまでは届かない。月明かりに照らされた水から、無数の邪妖精達が泡のように飛び出してくるのも、それを見た人間達が恐怖と混乱に陥るのも、すべて王座の間の静寂のうちに起った。

ブレイヤールは王座から身を起こし、庭園へと歩み出る。空には隅々まで星々が輝き、王座の間はすでに闇の中にあった。黄緑の廷臣達は、白王の姿がバルコニーから射す月明かりに照らしだされて初めて、彼が王座から離れたのを知った。

「どちらへ参られます！」

「この城で私ができることはここまでです！」

白王は左大臣に怒鳴り返す。

「私は今から、黄緑の王女を探しに行きます。しかし夜が明けたら、必ずこちらに戻ります」

彼は風の魔法を身にまとい、中層に向かって庭園から飛び降りた。

## 十八章 黙する物語

――臭うな。嫌な臭い。

何かがおかしいと最初に気が付いたのは、山の根を縫う風を捉えたアニュディだった。彼女の鋭い鼻は危険のかおりを嗅ぎ付け、本能が淀みない判断を下す。このまま黄緑の城へ降り立ってはいけない。そこで彼女は石人の理性に立ち返った。

――いやいや、待てよ。子ども二人を連れて森に降りるのも危険だ。それに何が起ころうと、城にいる方が安全なもの。

初めて黄緑の城を飛び立った晩の出来事を、彼女は忘れていない。思い出すだけで、全身の毛がぞわぞわと逆立つ。しかし自分一人がどんなに怖い経験をしていようとも、そのために城の安全を疑うのは身勝手だ。あのときは生意気な魔法使いと一緒にいたから、自分もとぼっちりを食っただけなのだ。

「アニュディ！ 城の麓あたりから、何か黒い煙が昇ってる！」

キゲイが叫んだ。アニュディは自分の鼻で嗅ぎ取った危険が、間違いではなかったと知る。彼女は返事の代わりに唸って喉を鳴らした。そして高度を徐々に下げていく。

「降りるの？ それなら、城の中腹辺りがいいと思うんだけど」

――そうそう。下の様子がおかしいんなら、上の方に降りればいいだけよ。

獣の姿で言葉を話せないアニュディは、再び唸って応えた。

キゲイは両手にしっかりと手綱を巻きつけた。次いで目を風から守っていた水晶の目覆いを外す。途端に風が目をついて、涙があふれた。飛行には便利な目覆いも、水晶板の透明度が悪くて視界が不明瞭になり、着地の際には向かない。キゲイは目の乾きに涙をこぼしながら後ろを確認する。すぐそこには、アニュディの首の背に、帯でしっかりと括りつけられたウージュの後ろ頭が見える。長時間自力で手綱を握り続ける体力も力もない彼女には、こうするより仕方なかった。その分キゲイはよほどうまく、アニュディを地面に誘導しなければならない。

古都で別れる前、丸々三日かけて、レイゼルトはこの着陸の方法をキゲイに叩き込んでいた。下手をすれば地面に激突して、アニュディは大怪我をするし、乗り手は振り落とされて死んでしまう。キゲイは空を飛ぶ感覚はさっぱりだったが、着地のタイミングはまだ何とかなった。森育ちの彼は木登りだけは得意だったから、枝からぶら下がって勢いつけて飛び降りるときの感覚が、ちょっとだけ近いと思ったのだ。はたして、この認識はどれだけあっていたのだろうか。

乗り手と飛び手の不安は、的中した。練習のときと同様、今回も彼女は地面に片足をつけそこね、勢い余って土の中へ鼻先を突っ込む。手綱をしっかりと握っていたキゲイは、跳ね飛ばされながらもアニュディの顔の脇にぶら下がるだけですんだ。かわいそうなのは自分で身動きの取れないウージュだ。もっとも彼女は、アニュディがいち早く翼で背中を覆ってくれたおかげで、木の枝に引っかかれることはなかった。もちろんそれは無事だという話にはならないだろうが。

三人が降り立ったのは、黄緑の城の中層に位置する傾斜地だった。背の低い石垣が層状に重なっていて、かつては棚田だったのかもしれない。陰りはじめる日の下、荒れ放題の草地に、もつれ合ったツタをかぶる黒々とした茂みがあちこちで長い影を伸ばしていた。下層辺りから立ち昇

る黒煙は、こちらの斜面からは見えなかった。山間の日暮れは早い。辺りが真っ暗になるのはもうすぐだ。

アニュディは人の姿に戻り、帯を緩めてウージュを下に降ろす。ウージュはそのまま地べたにへたり込んだ。

「どうも妙な空気ね。キゲイ、何が見える？」

「僕らのうんと頭の上に、大きな橋が突きだしてる。あれ、崩れたりしない？ 橋の先っぽに壁のない柱だけの小さな建物がある。えっと、ここは城の南東側で、僕らは石垣でできた段々の草地にいる」

「段々の足場に降りるから、着地に失敗するんじゃない……。手首、思いきりくじいたわ。で、上に見えるのは、多分物見台ね。分かった。斜面の上の方に、小さな建物がたくさん見えない？」

「見える。だけど真っ暗だし、なんだか遺跡みたいに寂しい感じだよ」

「遺跡とは失礼な。町跡よ。どこかに、城内に通じる道があると思う。物見台から誰かが私達のこと見てるはずだから、役人を寄越してくれるはずよ。私達、許可なしで着陸したからね。さ、行こう。ウージュ、自分で歩けるよね。私の背中は、当分こりごりでしょ」

アニュディはウージュの手を取って立たせる。ウージュは文句も言わずに従った。レイゼルトが飲ませた魔物の水が効いたのか、古都にいた数日の間に、彼女はずいぶん様子がよくなってきていた。足腰はしっかりと強くなっていて、人の話す言葉にも興味を持って耳を傾けるようになっている。そのおかげで、非常事態というものも理解してくれるようになった。無理矢理立たされたウージュは不機嫌そうだったが、少なくとも素直にいうことを聞いてくれたのだ。

キゲイはアニュディから帯を受け取り、それを自分の腰紐に括り付ける。帯の端っこはアニュディが握った。足場の悪い荒れ果てた斜面は、直接腕を組んで歩くとかえって危ない。キゲイは彼女を誘導しながら、斜面を登りだした。ウージュはその二人の後を追う。

太陽は山の峰の向こうへ沈んだ。空だけが黄昏の名残で薄紅色に輝き、黄緑の城は一足先に夜の闇に包まれている。

――上の方、上の方。戻らなきゃ。

トエトリアは宵闇の中にいた。道の窪みやでっばりに何度も足を取られそうになりながら、しんとした街角の坂道を足早に上り続ける。

火の手が上がる城内都市から春待ちの牧草地に出て、半刻経っている。彼女は城外の廃街を進んでいた。風が建物の隙間を駆け抜けびゅうびゅう鳴っている。彼女の足を包んでいた室内用の靴は、とうの昔に脱ぎ捨てられていた。長年人の手が入らない石畳は、作りのまずかった部分で石が緩んだり、割れたりしている。柔らかい靴はあっという間に破れてしまったのだ。

でこぼこの石畳を登りきったトエトリアは、小さな広場へ出た。広場の中央には、大きくて四角い石の蓋が置いてある。恐らく井戸の穴を塞いだのだろう。井戸の向こうには、さらに町の上へと続く二つの狭い路地が伸びている。

――どっちに行ったらいいのかな。

トエトリアは広場の入り口に立ったまま、疲れた表情で路地を見上げる。乱れた呼吸を整えようと息を飲んだとき、彼女は石畳を鳴らす靴音を聞いた気がした。すばやく辺りを見回し、手近の建物の中に身を隠す。扉のなくなった戸口の陰から広場をうかがい、耳をそばだてた。近くの通りのどこかから、石畳の上で砂が滑る音、小石が転がる音が聞こえてくる。家々が空っぽなせいもあるだろう。音が反響してよく響く。

魔法を使って、ちゃんと音を拾ったほうがいいかもしれない。トエトリアは戸口から頭を引っ込めると、意識を集中した。ところが彼女の集中は音でなく別のものを先に捉える。石畳のずっと下に、大きな魔法の気配があった。それは城の上から下へ、葉脈のように細かな支流を生み出しながら、すさまじい勢いで流れている。魔力の奔流に意識を攫われそうになって、彼女は思わず集中を解いた。

——誰かが城の力を操ってる！ 誰かしら。きっともうじき何かが起こる。人間達、やっつけられちゃうわ！

トエトリアはまぶたを開く。真っ暗闇だ。彼女は瞬きをして、自分がちゃんと目を開けていることを確かめる。

「しっ！ しっ！」

囁いて手を払うと、影が蜘蛛の子を散らして家の奥の暗がりへ姿を消す。窓から差し込む宵の光が、床を照らし出した。トエトリアは目をこする。最後のひとかけらの影が彼女の頬をつたい降りて、柱の裏に溶け消えた。

トエトリアは意を決して、戸口から外に飛び出す。城の力がすぐそこにあるなら、靴音の主が何者だろうと、恐れる必要はないだろう。城が守ってくれる。

家の外へ走り出て、トエトリアはあっと声を上げた。ついさっきまで誰もいなかったはずの広場に、白肌の痩せた女の子が佇んでいたのだ。トエトリアは井戸を挟んで相手と向かい合う。先ほどの靴音の主は、この女の子だったのだろうか。

「あなた誰？ ここで何をしているの？」

トエトリアは女の子に話しかける。女の子は彼女と同じくらい真っ白な肌をしていた。細く短い産毛のような髪がまるい頭を覆って、空色の大きな瞳がこちらをじっと見つめ返している。無表情な顔が、少し気味悪い。女の子が固まったまま動かないので、トエトリアは首をかしげた。——あ、そうか。あの子にしてみれば、私も突然広場に現れた、あやしい子なんだわ。

トエトリアがそう気づいた直後、城が低いうなり声をあげた。周りの建物が微かな砂埃を立てる。石畳の上の小石が、ころころと小さく震える。うなりはやがて微かな地響きの軋みに変わり、消える。しかし静寂は戻らなかった。耳には聞こえない騒がしさが、城の唸りと入れ替わるように満ちてきている。

先ほどの影の妖精といい、城の力はすでに何かを引き起こし始めているようだ。トエトリアは目を閉じ、広場のずっと地下を流れる城の力を、もう一度確かめようとする。彼女は城の力よりもずっと浅いところで、何かが勢いよく流れ込んでくるのに気がついた。

「危ない！ 下がって！」

トエトリアは女の子に叫ぶ。轟音と共に石の蓋が跳ね飛んで、井戸から勢いよく水が噴き出

した。吹き上がる水の中で、たくさんの邪妖精達が渦を巻いている。水は建物の屋根まで届き、その天辺から水しぶきと一緒に次々と邪妖精達をまき散らす。まるで邪妖精の噴水だ。彼らは水の粒と一緒にしばし宙を漂い、宵の空を背景に影絵のように浮き上がる。生まれたばかりでお腹を空かせた彼らは、格好の獲物、人間達の気配を感じ取り、風に乗って城の下層へと流れていく。

「ウージュ！ どこなの」

アニュディが手探りで石畳の道を確認めつつ、水浸しの小さな広場にたどり着いた。その後ろから数匹の邪妖精にたかられて、木の枝を振り回すキゲイが走り出てくる。トエトリアは飛び上がって驚いた。

「キゲイ！ いったいここで何をしているの！ こっちのお姉さんも、誰！」

トエトリアはキゲイに駆け寄って、短い魔法の言葉で邪妖精を霧に還す。

「王女様もここで何してたの！ 城に何があったの。僕、早く白城に帰らなきゃいけないんだ」

「私も早く上の城に戻らなきゃいけないところなの。戻ったら誰かに頼んであげる。あ、お姉さん、邪精が右目にくっついてるよ！」

アニュディは目をしばたいた。薄青い影が彼女の右のまつ毛にぶら下がっている。アニュディはそれをつまんで脇に放る。再び目をしばたかせたが、彼女は突然頭から体のバランスを失って、水浸しの地面に肩をついて倒れた。トエトリアは傍へ駆け寄る。キゲイは水しぶきの向こうに立ちすくむウージュを見つけ、そちらへ走った。

「お姉さん、その邪精は瞳の光を食べるの。本を読むときは明るくして読まないで、これが来るとして侍従長が言った」

「私には無縁の邪精だと思ってたけど。あの、今キゲイがお嬢ちゃんを王女様って……」

アニュディはしきりに右目をこすりながら、顔を上げる。トエトリアはお互いの顔がよく見えるよう、手のひらに魔法の光を浮かべる。ところがアニュディは小さく悲鳴を上げて、両手で顔を覆った。トエトリアはすぐに光を引っ込める。

「ごめんなさい。邪精に目をやられたのね。私、トエトリアよ。お姉さんはこの国の人？」

「……はい」

キゲイはウージュの所へ走り寄り、手を引っ張った。ウージュは水越しにトエトリアの背中を見つめたまま、そこから動こうとしない。またしても強情になったウージュに、キゲイは焦る。あちこちに溢れる邪妖精といい、黄緑の城は彼が予想していた以上にとんでもない事態に陥っている。安全な場所を知っているらしいトエトリアと一緒に、すぐにでもここから離れなければならないというのに。

そうこうするうちに、井戸の噴水は勢いを弱めていった。水が井戸の底に落ち着くと、邪妖精達は自力で井戸のふちまで這い上がり、路地を駆けたり跳ねたりして一目散に下って行く。

「城の力が収まってきたみたい」

トエトリアは空を見上げた。真っ暗な空はすでに満天の星で飾られている。幾重にも重なる峰の向こうには、巨大な月が頭の天辺を覗かせていた。トエトリアは網をたぐる仕草で、月の光を小さな広場に呼び込む。薄明るくなった広場は、水浸しの地面からなおも沸き立つ、邪妖精の黒

い小さな影が揺らぐ。

「キゲイ、こっちのお姉さんをお願い。その女の子は私が手を引く。私があげたお守り、持つて  
るよね。手に持ってた方がいいよ」

言われるまま、キゲイは足元の邪妖精を蹴散らせながらアニュディの傍に戻った。こうも邪妖  
精が多いと、トエトリアの髪でできたお守りは懐から出しておかないと役に立たないようだ。石  
人のアニュディでさえ、ハエを追い払うみたいにまとわりつく邪妖精を手ではたいている。

トエトリアは入れ違いに女の子の傍へ行く。近くで見ると、女の子の目鼻立ちが何となく自分  
に似ている。こんなそっくりさんが城にいたかしらと内心首をひねりつつ、トエトリアは女の子  
に手を差し出した。

「私と一緒になら、何にも怖くないよ。さ、行こ」

女の子はようやく素直に、おずおずと片手を伸ばした。女の子の指先に触れた瞬間、トエトリ  
アは意識がどこかに遠くへ連れ去られる感覚を覚える。戸惑いよめいて視線を下げた先、水面  
に一本の白い光が後ろから伸びてくる。

トエトリアの背後でアニュディが悲鳴を上げた。

「力が！ トエト！ 私達をお助けください！」

石畳の上で踊っていた邪妖精達の姿が、白い光を浴びてひとつ残らず砕け散る。名を呼ばれた  
トエトリアは、すんでのところ自分を取り戻した。振り返れば、井戸からゆらゆらとたぎる白  
い炎が噴き出している。その揺らめく炎の中から、細い腕のようなものが伸び出る。

「こいつだ！ あのときの幽霊だ！」

キゲイは震えながら、手にしたお守りを握りしめた。地面にうずくまってトエトリアに助けを  
求めるアニュディは、何の役にも立ちそうにない。キゲイは幽霊の近くに走り寄る。キゲイは金  
の留め金の付け根に指をかけた。お守りはずいぶん短くなっていた。もう全てほどいてしまっ  
た。キゲイは祈りを込め、力いっぱい指を引く。まばゆい光が編みこみから漏れ、白い幽霊  
を飲み込んだ。

幽霊はびくともしなかった。伸ばした腕をそのままトエトリアの肩に引っ掛ける。トエトリア  
はぽかんと口を開けたまま、幽霊を見上げていた。キゲイも愕然となる。最初に追いかけられた  
とき、幽霊はこのお守りをひどく恐れたはずなのだ。

突如、風を裂く音とともに白い光が閃く。それはキゲイの脇を通り過ぎ、白い幽霊をつらぬ  
いた。幽霊は長い胴体を曲げる。白くたぎる炎の中に、一瞬、腰をおった人の輪郭が浮かび上  
がる。幽霊を貫いた先には、建物の石壁に一振りの剣が突き刺さっていた。

「退け！」

厳しい男の声が響き、路地を抜けて剣を手にした石人の兵士が駆け込んでくる。王衛のシェ  
ドだった。彼は手にした剣の柄を壁に突き立った守りの剣に向け、輝く魔法を放つ。それは守り  
の剣の刀身に跳ね返り、幽霊の胴を再び貫いた。白い影が乱れ、今度こそ幽霊は苦しむそぶり  
を見せる。それでもなおトエトリアの肩を捉えた腕は伸びたまま、さらにもう一本の腕を伸ばし、  
王衛に向ける。

何かはじける音がして、王衛は近くの石壁に叩きつけられる。運の悪いことに、音はキゲイ



も襲った。キゲイはぽっかり置いた戸口から屋内まで否応なく吹き飛ばされ、暗闇の中で気を失う。

邪魔者を追い払った幽霊は、小刻みに震えながらトエトリアの頭上に体を折り曲げた。トエトリアは白くたぎる炎の中から、二つの目がこちらを見ていることに気付く。幽霊につかまれた肩は、感覚がなくなっていた。幽霊はもう片方の腕を彼女の鼻先へ上げる。その腕の先っぽから、何かがことんと彼女の足元に落ちこたえた。

――そうか。このお方だったんだ。

トエトリアは悟る。基礎石の中を泳げたのは、この美しい幽霊が自分を呼んだからだ。呼ばれたなら、ついて行かなくてはならない。あきらめに似た静かな気持ちの一方で、心の底でもう一人の自分が嫌だ嫌だと絶叫している。全身の感覚が自分の意識から遠ざかっていく中、誰かが彼女の髪を引っ張っている感覚だけが残った。多分、後ろに立っている白い女の子だ。もっと強く引っ張って、自分を引き留めてくれたらいいのに。その思考を最後に、トエトリアは眠るように意識を失う。

黄緑の王女の体は消えた。王女の長い髪を掴んでいたウージュの手に、一束の髪が残る。ウージュは幽霊を見上げる。輝く腕が、その髪に向かって伸びるところだ。ウージュは髪を投げた。髪は宙でばらけ、その一筋一筋が透き通る金色の鱗に変わる。幽霊の腕が鱗の一枚に向かって、ぐーんと伸びた。その隙にウージュは石壁に突き立った守りの剣へ駆け寄り、柄へと両手を伸ばす。剣は待っていたかのように彼女の手の中に落ち、ほとんど持ち手を引きずるようにして、幽霊の伸びた腕めがけて鋭く飛んだ。

大巫女の力が宿った剣は、幽霊の輝く腕を真っ二つにした。胴につながった腕はするすると幽霊の白い影の中に引っ込み、鱗を握った手はひらひらと濡れた石畳に落ちる。ウージュは剣を振り上げた勢いで、尻餅をついて倒れる。

白い幽霊は足元からぶるりと大きく震える。そして井戸の中へと沈み始めた。石畳に残った腕も、吸い込まれるようにして消える。腕が握っていたはずの金の鱗も消えていた。広場は沸き立つ邪妖精が動くだけになった。今夜この城で起こるべきことは全て起こり、力は役目を終えて元の場所へ還っていた。

ウージュは片手に剣を引きずり、井戸を覗いた。井戸の底は明るく輝いていたが、それは水面に映った小さな丸い月の光だった。彼女は剣を置いて、井戸のふちに腹ばいになる。

「ウージュ、どこ！ 誰か、返事して！ どうして、こんなに静かになっちゃったの」

アニユディが石畳で腹這いになったまま叫んだ。ウージュは魚の思考から覚める。顔を上げると、地面に倒れている王衛の姿が目に入る。彼女は剣を手にとって近づく。

水浸しの石畳に、血が溶けていた。王衛はどこか怪我をしているらしかった。顔をこちらに向け、目も彼女の動きを追っているから、生きてはいるらしい。しかし覚醒した意識は感じられない。ウージュは隣にしゃがんで、肩をゆすってみた。王衛の手が素早く彼女の握る剣に伸び、ウージュは驚いて後ろに飛び退く。王衛は守りの剣を引き寄せ、そっと鞘に納めた。彼はアニユディの方へ首をまわす。

「少女はここにいる」

アニュディはのろのろと上半身を起こす。濡れた髪から水が滴り、ぽたぽたと石畳に落ちた。

「王女様は。王女様はご無事？」

その問いに答える者は誰もいなかった。

シェドは悪夢から冷めやらない気持ちのまま、ウージュを見上げる。ウージュは守りの剣へ真っ白な指を向ける。指さしただけで何も言わない。すぐに背を向けると、井戸へ再び駆け寄る。ウージュが飛び込むのかと、シェドは慌てて腰を浮かせた。しかし彼女は別のものが目的だった。地面から何かを拾い上げて戻ってくる。差し出した指の先に、黄緑色の琥珀が乗っている。王女の部屋でなくなったものだ。なぜそれがここにあるのか。シェドは不審に思ったが、すぐに自分の役目を思い出した。彼は目の前の少女がこれを手にした事実を受け入れる。

「それはあなたが預かっておきなさい。トエトリア様はそれを大事にしている」

それ以上は何も考えず、彼は深く息を吐きながら、わき腹に刺さった剣の破片を引き抜いた。幽霊に吹き飛ばされたとき、持っていた剣も強い魔法で木端微塵になったのだ。幸い、破片は他の者を傷つけなかったらしい。彼は立ち上がる。

「キゲイ！ どこだ！」

ウージュが指をさす。シェドは示された建物の中に入り、すぐに目をまわしたキゲイを引きずって戻ってきた。ウージュはキゲイの前髪を引っ張った。

「起こさないように。ここであったことは、知らないほうがいいでしょう。人間には関係のないことです」

ウージュは手を放した。シェドはキゲイを背中に引き上げる。その際にウージュは懐を探り、くしゃくしゃの紙切れをシェドの腹に突き付ける。彼が空いた手にそれを掴むと、彼女はひと足先にアニュディの所へ走って行った。

水をはね散らして駆け寄る軽い足音と、落ち着いた重い足音を聞きつけ、アニュディは顔を上げる。

「どちら様？」

「この国の兵士です。あなたは？ この少女と人間の少年を連れてきたのは、あなたですか」

「私、人さらいじゃない。ただの調香士です。でも、いろいろ事情があって。その、私、捕まるんですか……」

「黄緑の王族に対する忠誠は？」

「突然なんなんです」

「この子が持ってきた書留です。あなたにも読めるように書かれています」

シェドはウージュから渡された紙をアニュディに手渡す。アニュディは広げた紙の上に、指を走らせた。魔術の輝線が指に触り、彼女はすぐ、誰が書いたものかを知る。小さな紙切れに、たった三行だけの、「言の葉」文字で綴られた短い手紙だ。

——この者が剣の共を得ることを願う。決して孤独な旅にならぬよう。

最後の行には紫城の古めかしい呼び名と、彼女の知らない固有名詞らしき言葉がある。

「書かれている内容も、なぜ『言の葉』文字で書いてあるのかも、私には分かりません」

「複数の者が見ることを想定して書かれている、ということでしょう。少なくとも私はその一人

らしい。この子が私に渡してくれましたから」

「あなた、この手紙を書いた人と会ったことあるんですか」

「誰が書いたかなど、私は知りません。しかし、共とするにふさわしい剣を持っているのです。ウージュと呼ばれる彼女がこの剣を扱えた以上、私は剣に従わなければならない。そういうお役目にありますので。そして黄緑の王族に忠誠を誓っているのです」

アニュディは答えず、眉間に力を込める。今夜ここで、トエトリア王女の身に大変なことが起こったらしい。城は王女を守らなかったということか。何一つ状況の分からない自分がもどかしかった。ごく普通の石人として、これまで彼女が信じていたはずの城の力は、彼女をことごとく裏切った。

うつむいたアニュディにシエドは続ける。

「あなたに何があったのかは存じませんが、私はこの剣をウージュのものにするため、すぐにここを発たねばなりません。人間の少年のこともあるから、まずは白城へ立ち寄ります。それから私は、そこに書かれている平原の町へ、ウージュと手紙のつながり確かめに行くつもりです。王女を取り戻す手掛かりになるかもしれない」

「……あの、ついて行っていいですか？ せめて白城まででも。とにかくここから離れられるなら」

アニュディは固い表情のまま尋ねる。何が起こって何が終わったのかは、分からないままだ。ただ、恐ろしい力の出現を感じ、それが去った後でも、いまだ体の震えが止まらないことだけがはっきりしている。理解できなくても認めなくてはならない何かが、この場所で起こったのだろう。魔法使いの少年によって無理矢理この城から旅立たされて以来、そういうことは何度もあった。

「あなた自身が望むなら、構いません」

兵士の返事は、あっけないほどに簡潔だった。時間が惜しかったのかもしれないし、アニュディが今夜あったことを他の石人に話してしまうのを恐れたのかもしれない。

アニュディはぐっと口を引き結ぶんだ。しわくちやのハンカチをポケットから引っ張り出し、目隠しに巻く。彼女の右目に宿った新しい感覚が、新しい決意を後押ししていた。最初にこの城を飛び立つとき、生意気な魔法使いの少年と交わした取引は、最悪のタイミングで果たされていた。平日はひとり香を練り、休日は家族や友人達と楽しく過ごす。そんなのんびりした生活は、もはや当分戻って来そうにない。

ブレイヤールが呼び出した邪妖精達は、城内から敵を綺麗に追い出した。逃げ遅れた者も邪妖精の餌食となって動けなくなり、黄緑の兵士に放り出された。火事は溢れた井戸や水路の水で延焼を食い止められ、黄緑の兵士達の手によって消されていった。

それでもやはり、敵は城外に追い出されたにすぎなかった。ハイディーン軍は、邪妖精に脅されただけだったことを悟ると、夜明けを待って兵士達を再び城の麓に集結させ始めていた。おまけに近くの森で昨日一日かけて組み立てたらしい、たくさんの櫓や攻城兵器まで引っ張ってくる

城は夜明け前の、もっとも薄暗い時刻にあった。

ブレイヤールはまだ王座の間へ戻っていない。黄緑の大臣達は見張り塔から麓の様子を眺め、絶望をかみしめる。城の麓に続く谷からは、途切れることなく人間達の援軍が流れ込んでいる。敵の数は計り知れない。一方で、黄緑の兵士の数は限られている。限られている故に、十分な休息時間も与えられない。麓を守る城壁全てに、兵士を配置することすらままならなかった。守りの穴を見抜かれれば、またしても人間の怒濤の侵入を許してしまう。他城からの援軍は間に合うか知れず、兵士の数も期待できないかもしれない。石人の想像を絶して、人間が多すぎるのだ。

ハイディーン軍の目的は本当に単純だった。黄緑の城にある魔法の武具を手に入れること。それだけだ。武具を求める理由も、アークラントとほぼ同じだ。ハイディーンにはエカという大きな敵がいる。石人の持つ武具がなければ、アークラントの次に滅びるのはハイディーンかもしれない。それだけにどのような犠牲を払おうとも、エカを退ける決定的な一手を得るため、彼らは石人世界に立ち入らねばならなかった。

刻々と日の出は近づき、最初の光が山の端から差し込む。それが合図だったのか、城の麓から人間達のときの声が上がる。攻城兵器から巨大な岩や火の玉が飛び、城壁に新たな亀裂が走った。大した魔術を扱えない故に、人間が生み出した知恵の力は計り知れない。黄緑の兵達は壁を守りきれず、城内へと退く。

谷間を揺るがす咆哮があがった。人間達は振り上げた剣を留め、石人達はさらに恐怖を覚えて城内深くへと足を速める。

白城へと続く谷間の道から、日の光を浴びて、一匹の竜が長い首をもたげた。黄金色に輝く鱗をぬめらせ、鼻から火の息を吹く。竜は谷底に集まる人間達に再び吠える。竜の頭には恐ろしく長い槍を持つ騎士があぐらをかいている。騎士の鎧もまた、日の光と同じ色に輝いていた。

騎士が長い槍を天へ突き上げる。それを合図に、竜の背後から様々な幻獣達が躍り上がった。影よりも黒い巨大な狼達が、金色の鎧をまとった騎士を背に乗せて、真っ先に崖下へ身をすべらせる。苔生す岩の体を持った巨人が悠々と続き、攻城兵器を拳一つで叩き潰す。

影の狼にまたがった騎士が手近のハイディーン兵を蹴散らし、岩の巨人が動きを止めると、戦場は静まり返る。ハイディーン軍は思いもかけない相手に背後をつかれ、思考停止状態に陥っていた。

「進め！」

竜にまたがった騎士が、槍に巻きつけた旗を解き放つ。旗は風になびき、白城の紋章が夜明けの空に透けた。勇ましい掛け声が上がり、竜の足元をたくさんの金色の騎士達が駆け抜けた。彼らは手に槍のような杖を持ち、谷底に滑り降りると次々とそれを掲げていく。青白い光が弾け、杖の穂先に輝く。騎士達は杖を地面へ突き立てる。間髪入れず第二列の騎士達が杖を持って前に進む。彼らもまた巨大な雷を天に放ち、輝く杖を地面に立てる。戦場の大気を、石人にとって有利な魔力を帯びたものに変えているのだ。

これを見た黄緑の兵達もすばやく動いた。彼らは倉庫の一番奥に眠っていた、結界用の杖を引き出してくる。それは七百年前の戦で使われて以来、誰からも忘れ去られていた。風のように現れた黄城の騎士達の戦い方に、彼らもようやく思いだしたのだ。

ハイディーン軍もいつまでも驚いているだけではなかった。彼らは反撃に出た。昨晩は散々邪妖精に驚かされた。今朝目の前に現れた見たこともない獣も、岩の巨人も、石人が見せる幻影かもしれないのだ。

再び影の狼にまたがった騎士達が動き出す。長い槍を天に掲げ、ハイディーン兵に突っ込んだ。槍の先に光が燃えた。

戦場のあちらこちらで、魔法の雷と炎と霧が渦を巻く。朝日がそれらと混じり合い、虹が踊った。人間達にとっては、あたかも世界創世が再び始まったかのような光景が広がった。ハイディーン兵の振るう剣が金色の騎士を捉えようとする。その切っ先で騎士の姿は弾けるように消え、ひらひらと玉虫色の蝶に変わる。緋色の狐になる。敵の姿を見失ってうろたえるハイディーン兵に、影の獣達が突っ込む。電撃は絶えず戦場を駆け巡り、あらゆる者の目を眩ませた。黄緑の城壁の向こうからも、見たこともない生き物達が飛び出して来る。石人達が輝く煙を吐く巨大な松明を数人がかりで持って駆けまわり、戦場の視界をますます眩いものにする。

黄王は騎士達に、敵を討つのではなく、生かしたまま想像の限りを尽くした幻影を見せよと指示していた。戦場を行き交う雷光が織りだした幻影に、人間達は混乱を極める。目に映るものも、どこまでが幻でどこまでが現か分からない。敵の姿をまともに捉えられないようでは、戦うこともできない。ハイディーン軍は大きく崩れ始めた。大軍勢だけにその收拾はつかない。黄城の騎士達はよく心得て、彼らを帰り道へと追い込み始める。

「走れ！ 境の森は悪夢を通さぬ。己らを守るものが何かを知るがいい」

白城への峡谷を我先に通り抜けるハイディーン兵達をかき分けながら、竜に乗った黄王は声を張り上げた。

ハイディーン兵が引き上げるのを確認した黄緑の城でも、城内の残党探しが始まっていた。谷底には黄城の騎士達が杖を打ち鳴らす勝利の音がこだまする。黄緑の兵士達はその音を耳にしながらも、あらゆる家の中、水路の奥、壊れた城壁の下までを探した。残党などよりもっと大切なもの、黄緑の王女の姿はまだどこにも見出されていなかったのだ。その搜索の最中、中層の通路で白王が見つかる。彼は駆けつけた兵に一言、「城の根で、扉の閉まる音がした」と告げ、そのまま気を失ってしまった。

黄緑の左大臣にはなすべきことが多く、黄城の騎士達が何も告げず白城へ退いていくのも、それに伴って黒い鎧の人間達が同じ方向へ去っていくのも、構っていられなかった。経緯は分からないが、白王が黄緑の王座を操ったという事実が、城民に広がっていたのだ。城民は王座が他国の王族によって汚されたことを心よく思わず、このこととトエトリアがいなくなってしまったことを結び付けて考える者も多かった。左大臣はうわさが大きくなる前にと、白王を速やかに白城へ送り届ける。城民達の誤解を解くのは、並大抵でない。左大臣自身にも王座を汚したことへの批判が噴出していた。

「王女様が見つからなくては、黄緑の血筋はまた薄まってしまう。この城もいずれは白城の二の舞だ」

黄緑の大臣達は嘆きながらそれぞれ城の後始末に向かう。人間との戦いに勝利した石人達は、深い悲しみに包まれた。

「何か、声が聞こえる。また人間達かも。近いわ」

耳の鋭いアニュディが立ち止り、キゲイもそれにつられて足を止めた。シェドとウージュも立ち止り、辺りに耳を澄ませた。

黄緑の城を出てから数日。様子のおかしいハイディーン兵の姿を何度も認めて、その都度キゲイ達は身を隠す場所を探さなければならなかった。敵の気配を察するのはシェドの方が専門なのだろうが、彼は負っている傷に難儀していて、時々聞き逃してしまう。

雨模様の薄暗い空に、昼とはいえ辺りの林は十分視界が効かない。その林が突然の閃光に、木立の影をくっきりと浮かび上がらせた。

「雷ではないな」

シェドが閃光の正体を確かめに動くと、キゲイも林の奥へと小走りに駆け出す。

七百年前の古い石畳の道が伸びている。数人のハイディーン兵が、一人の男を囲うように構えていた。男は粗末な旅装で、腕に剣を抱えている。彼はもう逃げられないと悟ると、黒く焦げた剣を左手に握りしめ、右手にした杖を掲げる。杖の先に生まれた光がハイディーン兵の兜を打つ。キゲイは男の後ろ姿にも、持っている杖にも見覚えがある。思わず驚きの声を上げそうになって、手で口を塞ぐ。

「あの人だ！」

キゲイはシェドの袖を引っ張る。

「僕はあの人を白城に連れて行かなきゃいけないんだ！」

道の先から、黄緑の兵士達まで駆けてきた。ハイディーン兵が怯み、魔法使いの男は黄緑の兵士へ杖を向ける。キゲイはもう一度、シェドの腕を引っ張る。しかしシェドは様子をうかがっているだけで、動こうしない。

「予言者様！」

とうとうキゲイは一声叫んで、木の陰から飛び出した。

シェドは素早く敵の数を数えた。ハイディーン兵が三人、黄緑の兵士が二人。ここは不本意だが、敵の数は五としなければならない。

なぜ黄城の騎士達が白城にいたのか、当の黄王でさえ説明はできなかった。レイゼルトの魔法を受けて気を失ったと思ったら、白城中層の墓所で目覚めたのだ。全ての騎士が元気とは言えず、どこを探しても姿の見当たらない者もいた。黄王は動ける騎士達を率いて白城の住人を探し、黄緑の城の危機を知ったのだ。

ブレイヤールも黄王も、この不思議な出来事をレイゼルトの仕業と疑いはしなかった。しかしどうやって、レイゼルトが砂にした騎士達を元通りにしたのかまでは分からない。黄王も騎士達も、レイゼルトの襲撃を受けた晩の記憶を思い出そうとすると頭の中に霞がかかり、再び体が砂に戻る恐怖が蘇るだけだ。

「レイゼルトの用いた禁呪は、そもそも黄城に起源がある。私は何としてもあの禁呪使いをもう一度探し出し、決着をつけたい。石人達にとってもそれは必要なことだ。七百数年前、私達はあ

の禁呪使いを、黄緑の王子とともに見殺しにしたのだから」

黄王はブレイヤールに話す。そこには神殿や他の国々のように、ただレイゼルトを恐れ憎むだけの感情はない。

「あの者は禁呪とともに、再び我々の世に戻ってきた。あの者が戻ってきた以上、石人はもう一度、七百年前の記憶に向き合わねばならん。そこには我らの祖先が置き去りにし、知ることもなかった何かが隠されているのではないだろうか」

「七百年前は黄緑の王子が、今回は、黄緑の王女が姿を消しました。そしてレイゼルトの消息も、まったく分からなくなっている。もう、すべては終わってしまったのでは」

ブレイヤールは深く頭を下げてつぶやく。

「史実と似通った事実が起きたとおっしゃられるか。確かに基礎石の中を落ちていったという王女の消え方は、ただならない。彼女が姿を消し、いまだ見つからぬこと。白王、私はそれを黄緑の王族とレイゼルトの因縁だとも、あなたの咎だとも思わぬ」

ブレイヤールは黙っていた。ただ、黄王が「白王」と呼びかけたことに、少しだけ驚いていた。彼はまだ即位をしていなかったし、崖の国の件で神殿の審判を待つ身に過ぎなかったのだ。

黄王はしばらく白城に滞在してくれた。ハイディーン軍のその後を調べるには、黄城の騎士達しか役に立つ者はいなかったからだ。

ブレイヤールは黄緑の城で力を使い果たし、心身ともに傷を負って数日寝込んでいた。彼は、トエトリアを見つけ出せなかったことを悔やんだ。それに追い打ちをかけるように、黄緑の城から、トエトリアに次ぐ王位継承者を正式に王座に据えるという知らせが届く。黄緑の王家の血筋が、変わるのだ。それは事実上、トエトリアの死を認めるものになる。知らせを受け取ったとき、疲労で抑制の利かなくなっていた彼は、珍しく大激怒した。大臣がその場に居なかったら、使者が持ってきた書状を破いていたかもしれない。

王家の血筋が変われば、他国の王もそれを承認しなくてはならない。黄緑の使者が持ってきた書面は、そのためのものだった。白城の王族として、ブレイヤールは署名をする義務がある。反対する理由はどこにもないのだから。

ところがいざ筆を手にとっても、名を書き記すことができない。何かがおかしいと思っていた。トエトリアが見つからないのなら、見つかるまで探すべきではないのか。いつまでたっても署名を渋る彼を、ルガデル口は叱りつけた。友人を心配する気持ちと王の仕事は、別にせねばならないと。新しい黄緑の王の即位を拒むのは、個人的な感傷にすぎないのだと。

ついにブレイヤールは大臣の言い分に激しく憤りながらも、歯を食いしばり涙をこぼして、書面に名をしたためた。使者が書状を受け取り大臣とともに去ると、彼は力任せに筆の鋭い先を机に突き立てる。そして顔を覆った。

――何でこんなことになった。人間達が来たからか。僕が境界の森を越えさせてしまったからなのか。

悪い夢なら覚めて欲しい。そして、決して覚めるはずがないことも思い知る。死ぬまで覚めない夢なのだ。トエトリアの消息を掴みたいなら、黄緑の城の壁全てを引きはがし、基礎石の中を覗くしかないのかもしれない。しかし基礎石の中に封じられたままだとも思いたくない。

力なく両腕をおろした彼の目に、いくつかの書類が留まる。彼が寝込んでいる間も、いくつかの事柄が白城で進行していた。彼は鈍い動作で一枚の紙切れを取り上げる。それは白城で傷の手当てしている、アークラントの生き残り兵についてだった。

ハイディーンの侵攻は、石人の人間達に対する感情を一気に激化させるものだった。特に黄緑の城では、あの混乱のさなかに王女を失っている。銀の鎧を着ていようと、黒い鎧を着ていようと、石人達にとっては憎んでも憎み足りない人間だった。黒い鎧を着ていたアークラント兵達が、黄緑の城から無事に出てこられたのは、左大臣の采配に他ならない。生きて戻ってきたのは、たった三人だった。他は皆、戦闘で命を落としていた。

黒い鎧を来た人間達は、黄緑の兵達の助けとなっていた。決して目立った働きではない。しかし運よく彼らと行動を共にした黄緑の兵達は、他の仲間の目を忍びながらそれを認め、彼らなりの筋を通した姿に、感銘すら受けていた。アークラント兵はハイディーン兵に対峙し、かといって石人に媚びるような戦い方もしなかった。黄緑の兵に斬られて命を落としたアークラント兵も多いだろう。ディクレスの消息も途絶えていた。少なくとも白城に逃れた三人は、先王は戻ってこないとはっきり口にし、それ以上は何も語らなかった。地下の暗所に横たえられた物言わぬアークラント兵の列には、あの背の高い、立派な体格の兵士の姿はなかった。

ブレイヤールは腰を上げ、部屋の四方の壁を覆い尽くす巨大なタペストリーの前に立つ。タペストリーは千年前のものらしいが、石人の色とりどりの髪で織られた色彩は褪せることなくいきいきと、往時の白城の様子を描き出している。ブレイヤールは北側の壁と向かい合う。そこには白城の北の姿が織り込まれ、城に点在するいくつかの町が、夜闇の中に白い明かりをちりばめている。

夕暮れ時、ブレイヤールはまだ執務室の机に座り、うなだれていた。気持ちは落ち着いて来ていた。そこへグルザリオが扉をノックし、誰とも告げずたくさんの石人達を部屋へ入らせた。

列をなして現れた石人達は、ブレイヤールと同じ年頃の少年を筆頭に、まだ乳離れもしていないような赤ん坊まで、総勢八人だ。彼らの見事なまでの金髪を見て、ブレイヤールは崖の国の豪華な王座を思い出す。彼らは年齢順に机の前に横並びになる。年かきの少年が、ぶっきらぼうに一枚の布きれを突き出した。

ブレイヤールは嫌々受けとり、布にびっしりと書かれた言葉を読む。それは予想通り黄金色の国王、あるいは崖の国の頭目、クラムアネスからのものだった。内容は至って簡潔かつ、彼女の狡猾さを垣間見せるものだ。彼女はどうやろうまく、大空白平原のどこかに逃げおおせたらしい。どこまでも不遜で逞しい内容に、ブレイヤールは憤りを感じるとともに、荒くれだった生気も取り戻す気がしてくる。

クラムアネスはブレイヤールに従うことを決めた。そして命じられたとおり、人間達に攫われた石人を探し出すつもりらしい。彼女は神殿の罰も恐れており、石人世界に戻ることはないとも記した。さらに大空白平原でのハイディーンの様子が、事細かに報告されていた。

ハイディーンは石人世界侵攻の足掛かりとして、タバッサの町を占領していたらしい。これが大空白平原を行き来する旅商人達の逆鱗に触れた。空白平原は、国を追われた者達の集まる場所だ。彼らは国だの王だのをノミヤシラミ並みに毛嫌いしている。彼らはこの尊大な侵入者を追



い返そうと、即席の軍隊を結成し、タバッサへ次々と乗り込んだのだ。そこには普段ならば、旅する隊商を襲う盗賊達の姿もあった。天敵に対し、ならず者商人を筆頭に、ならず者を襲うならず者まで、一致団結したらしい。ハイディーン軍は散々な目にあった。白城で溺れかけ、黄緑の城では悪夢に襲われ、ようやく境の森を抜けたところで、今度は思いもかけない人間の攻撃を受けたのだ。

そこでクラムアネスは白王へ貸しをつくることにした。平原の人間達がハイディーンを追いかければ、エイナ峡谷の位置がばれてしまう。石人達はハイディーン兵が通り過ぎれば、エイナ峡谷を崩して埋めてしまいたい。一方で平原の人間達は、人間世界への新たな道として、エイナ峡谷を掘り返してでも確保したがるだろう。クラムアネスはそれを見越し、ハイディーン兵が通り過ぎた後の泥炭地に、魔法で火を放った。熱い地面と濃い煙に、平原の人間達はそこで追撃をあきらめたようだ。問題はその後の火だ。クラムアネスは延焼を防ぐのは人間の仕事とばかりに、そこでさっさと手を引いてしまった。

ブレイヤールは軽い頭痛を感じ、眉間を揉む。

「そういうことだ」

ブレイヤールが文面を最後まで読んだとみて、金髪の少年は鷹揚に口を開いた。

「それでお袋は、俺達をお前の傍に置いて欲しいと言っている。石人にふさわしい教育は平原では無理だし、黄金の国の連中は俺達の顔を知ってる。な、どういう意味か分かるだろう？ お袋もそれを要求できるだけの働きはしたはずだ」

「……働きね。まあ、追い返すわけにもいかない。ふさわしい住居を与える。君達にはまず、身の振る舞い方から覚えてもらわないといけないな」

目の前でふんぞり返る金髪の子も達に、ブレイヤールはため息交じりに答えた。

「ところでずっと疑問に思っていたんだが」

ブレイヤールは子ども達の顔立ちに目を走らせる。

「本当に全員血のつながった兄弟なのか」

「ああ。お袋は同じだ。父親は違う。お袋は十一回結婚して、十一人ともに逃げられた。誰ひとりとして、付き合いきれなかったわけさ。俺の上にはあと四人いるんだぜ。どこにいるかは、あんたにゃ言えないがな」

「聞かなきゃよかった」

ブレイヤールはクラムアネスの子ども達をひとまず下がらせる。机をこつこつ叩くと、入れ違いにグルザリオが隣室から現れた。

「お呼びで」

「お前を目付けから侍従長に任命する」

ブレイヤールは片手で額を支えながら告げた。そして、机の上に刺さったままになっている筆を指さす。

「素晴らしい初仕事ですよ。大臣殿に似て、あなたも実はかなり短気な方かもしれません」

「平原でまた、燃える大地の面積が増えた。どこまで広がることやら」

「黄城の騎士達が確認済みです。まさか、さっきの子どもらが何か関係してるんですか」

「あいつらの話はもういいよ……。それより、僕の居室はいい加減、図書館から移した方がいいと思うんだ」

「では荷物をまとめておいてください。大臣と相談して、どこかに新しい部屋を見繕っておきます」

「庭に面した部屋がいい」

「半年後にはそうしましょう。今はまともに雨露をしのげる場所が、限られているんです」

グルザリオは先のつぶれた筆を手にして退出した。

それから数日間、ブレイヤールは北側の塔に登り、許される限り日がな一日中、外を眺めて過ごした。たとえ気持ちが落ち着いていても、どこかで正気が失われていることは、自分でも心得ているつもりだ。突然涙をこぼしたり、理由もなく怒りっぽくなったりといった取り乱した姿を、新しい国民にさらすわけにはいかない。彼はいくつかの事柄に気持ちの整理をつけながら、近づきつつあるものを待っていた。

その間にハイディーンはアークラント領内へ撤退し、エイナ峡谷の道は、石人達によってひそかに崩された。また、神殿からもたらされた大巫女の死と新しい大巫女の即位の知らせは、崖の国から白城へ移住した石人達に、特別な感情を持って受け入れられた。ルガデル口はすかさず彼ら全員へ、喪に服するための純白のスカーフを配った。十日したら、今度はそれに自分の髪で星を縫い取って、新たな大巫女様を祝福する旗にするのだ。石人達にとっては、神殿への信仰に回帰する象徴ともなる。

夕暮れ前、境の森へと続く荒野に、黒々とした影が現れる。白城の住人達は、また人間が攻めてきたと震えあがった。塔からいち早くその様子を捉えたブレイヤールは、すぐさま階段を二段跳びに駆け下りる。慌てふためく城民に、彼は相手が武器を持っていないことを伝え、城内へ下がるよう命じる。荒野からの列は途切れることなく、森から白城へと続く。列の先頭が白城の大門に達すると、ブレイヤールはそこで彼らを出迎えた。

「石人の王よ。どうか御慈悲を賜りたく……」

彼の前で両膝をつき深く頭を下げたのは、長旅で薄汚れ、疲れ果てた一人の少女だった。

「お立ちなさい。私はあなた方をお待ちしていました」

ブレイヤールは彼女の手を取って立たせる。異国のドレスはほとんど汚れがない一方で、それを身に着けている彼女はあまりにもみすぼらしくなっている。櫛も通していない褪せたハシバミ色の髪を後ろにまとめ、痩せてとがった華奢な顎と筋張った首元、目の下には隈ができ、今にも泣きだしそうな瞳をまっすぐこちらに向けて、亡国の王女は白王と向かい合った。

「人間は境の森を越えてはなりませんでした」

「はい」

「石人はいまだもって人間達を受け入れはしません。しかしあなたのお父上は、我々の感情を和らげる犠牲を払われました。石人達は、この城においてならばあなた方の滞在を許すでしょう。そうなるよう、私も努力できる状況になりました」

「私達は、この地に希望を見出そうとしました」

王女はうなだれて腰の前で両手を結んだ。

「予言者殿の夢見にいらっしゃったのは、あなた様でしょうか」

「アークラント再興の夢はないのですか」

ブレイヤールは逆に問い返す。王女は彼に栗色の瞳を上げた。瞳には涙がかかり、瞬きするたび、涙が夕日に細かくはじける。

「アークラントの命はつきました。なぜ、そのようなことをお聞きになるのですか」

王女は体を震わせる。きつく組んだ両手の指は、真っ白になるくらい力が籠められる。彼女は兄を亡くしたが、自分を出迎えたのが石人だったことから、父親もまたこの世を去ったことを悟っていたらしい。十四、五の歳でひとりぼっちになり、さらには一国の運命を引き受けなければならない身の上は、ブレイヤールには想像もつかない。彼は今までの自分の身の上を、安易に彼女と重ねることはしなかった。境遇は似ているようで、その実全く違うはずだ。

「石人の地は、人間が長く暮らすには不向きなのです。南からの風は魔力を多く含み、当たればあなた方の魂を枯らします。タバッサですら、石人世界からの風が吹くと、皆家に引きこもるのです」

ブレイヤールは白い布を取り出し、腕を伸ばして風にさらす。布はわずかになびき、南西の微風を知らせた。王女は不安げに、後ろの家臣を振り返る。ブレイヤールは布を懐に収めた。

「城であれば、私の魔力でお守りすることができます。あなたの民を、早くここまで導いてください。明日までにはこちらも、あなた方を受け入れる用意を整えます。あなたも長旅でお疲れのようです。一足先に中に入られた方がよいでしょう」

「いいえ。私も皆と一緒に、明日までここにいます」

王女は断る。ブレイヤールは言い方がまずかったことに気付く。

「その、会って欲しい者達がいるのです。あなた方の国の兵士達です」

今度はしづしづながらも、断られなかった。ブレイヤールはほっと胸をなでおろし、自ら先導して、王女と付添いの家来達を城内へと案内する。ブレイヤールと立ち替わりにルガデルロが大門に出て、アークラントの家臣らと明日の段取りを話し合う。ブレイヤールは城の中層北側に残る町を、アークラントの人々の住居と定めていた。町には貴族の屋敷も残っており、アークラント王女の居城として使うこともできるだろう。

翌日、石人の城へ次々と迎えられた人間達を、白城の城民達はあちこちの塔に登り、遠目にうかがった。そんな彼らをブレイヤールは見守る。城民の居住場所は城の南側、人間は北側だ。城内に関所を設けることで、石人と人間は互いの日常生活を、顔を合わせることなく送ることができる。誰とでも仲良く交流するのが解決にならないときもある。石人と人間は、離れて暮らすのが互いに幸せになる道だ。アークラントの人々にはいつか必ず自国へと戻り、時の流れとともに石人世界の存在を忘れてもらわなければならない。

アークラントとハイディーンの人々の石人世界への侵入は、すでに神殿と十二城を動かしつつある。大空白平原に人間が住み、人間世界で戦乱の世が続くのであれば、再び石人世界に足を踏み入れようとする人間が必ず現れるだろう。少なくとも黄緑の城は、もう二度とそんなことに巻き込まれたくないと考えている。

次の日の夕前、神殿からの使者がいくつかの知らせとともに、神殿の意向をもたらした。

「新しい大巫女様は、九竜神官様方からレイゼルトの右手を受け取り、それをかの者の名と一緒に燃やしてしまわれました。同時に、湖の林で火事が起こったそうです。神殿騎士達が火を消し止めた場所で、半身が砂と崩れた大木と、溶けた銀が見つかりました。この不思議な出来事は、まだ解き明かされてはおりません。しかし大巫女様のなされたことは、過去の悪夢から石人を開放してくださるでしょう。そして九竜神官様達は、人間達への対処に全力を注ぐときが来たとお考えです」

使者は美しい装飾のついた書簡を差し出す。そこには白城の復活を認め、白王への王杖の返還と、神殿でとり行う十二神官としての任命式について、見事な書体でしたためられている。ブレイヤールは最後の行に添えられた九竜神官の署名を見つめる。

「人間と立ち向かう決心をされながら、いまの白城をお認めになるとは」

彼はため息交じりにつぶやいた。それは神殿の懐の深さにつながるのか、白城の立場を恐ろしく難しくするものなのか。どちらにしてもこれから大変になるだろう。

ブレイヤールは黄王の言葉を思い出す。大巫女はレイゼルトの右手を灰にすることで、石人達の恐怖にあっさりと片を付けてしまった。しかし本当に片付いたのだろうか。黄緑の王女は消え、彼女を守るはずだった剣も、王衛とともに消えた。奇妙なことはもう一つある。黄緑の王座を使ったとき、彼は何者かによって強い攻撃を受けた。それが城の力を操りきれなかった反動によるものなのか、別の意志が彼に逆らい、彼を阻止しようとしたのかは分からない。いずれにしても、そこに城の存在が大きく関わっているのは確かだ。

耳の奥で、あの日聞いた扉の閉まる重々しい響きが、かすかに呼び覚まされる。王の列に立ち並ぶ、歴代の王達の陰鬱な姿が、記憶の底から立ち昇る。彼らの黄緑色の衣装は純白の衣装に変わり、ブレイヤールの意識を白城の中核へと向けさせた。彼は身震いをする。身近に存在し、時を隔てて遥か遠い城の秘密――。石人の歴史には、深みが隠されている。目に見える川の流れが、その深みでは全く異なる流れを生じているように。

外は曇りだ。昼の太陽は厚い雲の上にあり、空全体が銀色の光に包まれている。戦場で盛大に焚いた光炉の光煙が、雲になったのかもしれない。その雲の谷から、太陽は淡く色づく光の帯をいくつも暗い林に降ろしている。

ブレイヤールはおもむろに立ち上がり、部屋の外へ飛び出した。ぽかんとした顔の使者を後に残して。長い階段を駆け下り、南西の大門を目指す。その門は、黄緑の城がある方角だ。そして星の神殿もそのずっと先にある。

白王が駆けていく先に、白城の家臣とアークラントの家臣がいる。彼らは何事かと驚いて、走り去る城の主を見送った。無人だった城には、たくさんの人々がそれぞれの営みを組み立てていこうとしている。その多くが人間だったとはいえ、白城は下層から中層にかけて、七百年ぶりの賑わいを取り戻そうとしていた。彼らは全て、新しい城と新しい王の誕生を、心待ちにしている。

ブレイヤールはとうとう南西の大門へとたどり着く。

むき出しだった大地は、この十数日のうちに柔らかな草地へと変わっていた。湿り気を帯びた冷たい春風に、木々の鋭い若葉は露を結び、野花は固いつぼみをほどこかけている。

黄緑の城へと続く丘陵地帯から、小さな点が現れた。それはまっすぐこちらに近づいてくる。雲は厚みを増し、辺りは淡く陰った。近づいてくる人影は、一つではない。はやる気持ちを抑えるかのように、歩調の速い人影は長身長髪だ。濃い色の髪が、風になびいている。その人影からだいぶ遅れて、小さな影が三つ続く。そちらは疲れ切った様子で、互いに寄り添ってふらふらしている。

まっすぐと先を見つめるブレイヤールの腕に、何かが触れた。彼は息を飲んで振り返る。アーケラントの王女と目が合った。彼女はまだやつれて見えた。ブレイヤールは彼方に向き直り、眩い空に目を細める。

「彼の予見が成就します」

## 終章

---

「黄緑の城からここへ逃げてくる途中、予言者様とハイディーン兵を見つけたんだ。予言者様は、ハイディーン兵が持っていたディクレス様の剣を、取り返そうとしていて……」

キゲイは神妙な顔つきで、頭を下げる。

「先王の剣は、アークラントの人々にとっての誇りだ。彼は剣を取り戻し、自分の夢見を自分で完結させた。それを助けたのはキゲイだよ。君がいなきゃ、アニュディはどちらを助けたらいいか分からなかったろう。ハイディーン人とそれ以外の人間の区別は、石人にはつかないから。黄緑の兵士が巻き添えを食って怪我したのは、気の毒だったけど」

ブレイヤールは答える。キゲイはうつむいたまま、その気遣いをすこし後ろめたい気持ちで聞いた。実際に助けたのはシェドだが、彼は途中でキゲイ達と別れた。彼には彼なりの事情があって、キゲイ達と一緒に白城へ顔を出すわけにはいかなかったらしい。そこでアニュディは大きなため息をつき、自分が姿を変えて黄緑の兵を蹴散らし、ハイディーン兵を追い払ったことにしてくれたのだ。

当のアニュディは疲れの溜まった顔でキゲイの隣に座り、ビスケットをかじりながら暖かいお茶をふうふう飲んでいる。ビスケットはグルザリオが奮発してくれたものだ。物の少ない白城で、蜂蜜入りの甘いお菓子はかなり貴重品らしい。キゲイ達がいるのは白城の食堂で、ブレイヤールもキゲイ達の向かいの席について、白湯の器を両手に包んでいた。

キゲイは懐から、金の留め金と、その端にかろうじて残っている短い黄緑色の髪をブレイヤールに差し出す。

「それで、その、ごめんなさい。魔物をやっつけたり、変な幽霊を追い払ったりしてたら、こんなになっちゃって……」

「いいんだよ」

ブレイヤールは微笑んだ。

「お守りは持ち主を守るためにあるんだから」

微笑みながらもしかし、どこか虚ろな表情だ。キゲイは内心うろたえる。幸いすぐに、ブレイヤールの視線はウージュに移った。

ウージュは暖炉のそばに座り、燃える火に黄緑色の宝石を透かし見ていた。小さな虫を封じた琥珀のおはじきだ。

「ねえ、それは君の大事なもの？」

ブレイヤールの質問にウージュは振り返り、腕を伸ばして石を見せる。彼は黙ったまま、おはじきとウージュを交互に見つめる。アニュディが咳ばらいをした。

「話を戻して恐縮ですが、よろしいかしら、白王様」

「どうぞ」

「私を黄緑の城からさらったのは、本当にレイゼルトという名だとおっしゃるのですか」

彼女は閉じた瞼を震わせる。ブレイヤールは、そうですと答えた。

「レイゼルトとは古都で別れたとおっしゃいましたが、その後の彼の足取りは誰も掴んでいま

せん。石人達は、あなたの話を聞きたがるでしょう」

「失礼ですけど、私はたいした話はできません。言われるまま、あちこち引っ張り回されただけですもの。確かにあの子の周りでは色々と奇妙なことが起こりました。でも私、何が起こったかなんて見てません。それに――」

だんだんと腹が立ってきたのか、語気が荒くなり、アニュディは腕を組んで背筋をぴんと伸ばした。

「それを見越して私を選んだのはあいつですからね。本当に周到ですよ」

そこで彼女はまた肩を落とす。唇をとがらせて、彼女はしばらく口ごもった。白王が優れた魔法の才を持つことは聞いて知っていたが、まさか一目見ただけで見破られるとは思ってもいなかった。彼女は思い切って瞼を開ける。ブレイヤールは少し身を乗り出して、その瞳を覗き込む。瑠璃色の瞳は焦点を結ばず、小刻みに震えていた。

「その右目は、なかなか難しいですね」

「そう……なるのでしょうかね。見えているらしいものも、どう解釈していかさっぱり分かりません。眩しいところと暗いところが何となく」

「一番眩しいところが私の髪の毛に当たる部分かと。白色だから」

「まさか、本当に約束を守ってくれるなんて、思いもよませんでした。私、半分は本気だったけど、半分は無理難題のつもりだったから……」

「魔法がらみの取引は、もっと慎重にするものですよ。それにしても、難しいですね。ものを知覚するという感覚は、どう修練すれば……」

アニュディはため息をついて、まぶたを閉じる。

「私、あんまり悲観はしていません……と、敢えて言わせていただきますわ。生まれて初めて、もう一つの姿に変身したとき、背中の翼をどう動かせばいいのか、全然分かりませんでした。でも何度か練習するうちに、動かすどころか飛べるようになりました。だからこの感覚もいつかは、自分のものにできるんじゃないかなって、思うんです」

「そうか。そうなのかもしれません。僕も難しかったです。足が六本もあるし、羽もあるし。体が大きすぎるから、下手に動けば、周りに大迷惑がかかるし。目もいっぱいあって何をどう見ていいものやら、頭が爆発しそうになったし。……見た目が気持ち悪いとも散々言われたし。変身するのは一切やめようと思ったときもありますよ」

ブレイヤールはキガイに視線を移す。二人の会話をぼかんと聞いていたキガイは、口を閉じた。

「僕も変身できたらいいのってうらやましかったけど。なんだか恐ろしく大変みたいだ」

「そう。とんでもなく大変なんだよ」

ブレイヤールは白湯で喉を湿らす。彼はアニュディをどうするか困っていた。本来ならばレイゼルトに関係した者として、神殿へ引き渡さなければならない。しかしそれはアニュディを不利な立場に追い込んでしまうだろう。ブレイヤール自身、禁呪が封じられた銀の鏡に触れてしまったことを、隠している。アニュディだけを神殿につきだすのは筋が通らない。

「白王様、私は城の力に押し出されたんです」

アニュディはぽつんと呟いた。

「あの晩、黄緑の城は、レイゼルトを打ち倒そうと、自ら力を動かしていたように思うのです。城の力が怖いと言ったら、お叱りになるかもしれません。けど、私はものすごく怖かったです。それからこの前の晩のことも。あまりに底が知れない大きな力でした」

空っぽになったお茶の器を手の中で転がし、アニュディは続ける。

「私、当分城では暮らしたくありません。レイゼルトと関わってしまった以上、城の力は私を嫌うかもしれませんもの。それに城から離れて、城の力やそれにまつわる言い伝えを、自分なりに考え直してみたいんです」

「城の力は、我々王族にとっても底が知れません。その力のためにあなたが怖い目にあったのなら、私も城に戻れとは言いづらい」

ブレイヤールは難しい顔で腕を組む。彼は黄緑の城で気を失ったときのことを思い出した。あのとき自分の意識を奪ったのは、アニュディを恐れさせ、トエトリアの存在を隠した力と、同じものだったのかもしれない。しかし彼自身は城の力を恐れていいような立場になかった。どんなに怖くても、これからはあの力に何度も触れなくてはならない。

「キゲイとあなたは、それぞれの理由があってレイゼルトに選ばれた。僕は少なくともキゲイの件については、彼の人選を支持しています。彼は性格に問題ありですが、目利きは完璧だ。恐らくあなたが選ばれたのも、どこかの部分で正しかったと思うのです。もしかしたら、これからも正しいのかもしれませんが」

二人を目の前に、ブレイヤールはテーブルの下でそっと右手を握りしめる。禁呪に触れた手だ。

「私の師が言っていました。王は光を掲げ、魔法使いは闇を見ると。光を掲げる者に、闇を見渡すことはできません。石人と人間との争いと同時に、別の何かがこの石人世界の闇の奥で起こりました。私はその闇を右手で一度掴み、それから身を引いて、明かりを灯す道を選びました。私はもう二度と、闇を見ることはできません。アニュディ、もう一度尋ねます」

ブレイヤールは顔を上げ、念を押すようにゆっくりと問いかける。

「あなたは黄緑の城で前の生活に戻ってもよいのに、今はそれを拒むのですね」

アニュディははっきりと頷いた。

「そうです。私、決めتانですから。彼から贈られた代償を抱えたまま、これまであったことをすっかり忘れるなんてできません。レイゼルトを名乗る者を、紫城や黄城に運んでしまった責も感じています。そこで彼が何をしたか、私は一切知らないし知りたくもないけど、償いはしなきゃいけないと思うんです」

アニュディはまぶたを閉じ、ウージュを呼ぶ。ウージュは黙って立ち上がり、アニュディの肩にそっと触れた。彼女は相変わらず手の中で小石をもてあそんでいる。それは宝物として大切にしているというより、手のひらでその存在を確かめ、知ろうとしている感じだ。

「できればこの子と一緒に、タバッサ辺りに住む場所を探していただけないでしょうか。あそこなら白城と近いですし、黄緑の城の家族にもすぐ会いに行けます。作る物を人間向きにすれば、調香の仕事も続けられます。何よりウージュの病気を治すには、魔力の薄い土地で暮らし、人と



しての姿を定着させるのが一番ですわ」

「分かりました。信用できる人をつけて、家を探させます。とにかく僕の目の届くところにおいてくださるんなら、こちらとしても安心です」

快い返事に、アニュディは内心でもほっと胸をなでおろした。これでウージュを石人世界から離せる。

彼女はすべてをブレイヤールに話してはいなかった。守りの剣を持って姿を消した王衛のことだ。彼はレイゼルトの手紙を持って、大空白平原の町へ一足先に発っている。何か分かれば、彼はすぐウージュの所へ戻ってくるだろう。そのときのためにも、ウージュは平原にいた方がよい。守りの剣を持ち去ったとして神殿騎士に追われる彼には、石人世界へ戻るのは危険すぎた。

ウージュを守ることと、レイゼルトから渡された手紙の謎を解くことは、トエトリア王女をいつか取り戻すことにつながるかもしれない。あの王衛は剣の意志とやらのひとつで、ウージュを守ることに徹した。大巫女様の力が宿っているとはいえ、金属の塊に従うなど、どうかしている。しかし彼が持つ黄緑の王族への忠誠心は、信じてもいいだろう。

「白王様、あなたが光を掲げながら、なおも闇が気になるとおっしゃるのでしたら、私が闇を見てまいります」

アニュディはブレイヤールに微笑んだ。ブレイヤールはふっと悲しそうな顔つきになる。返答はその口元にのぼらない。アニュディも、白王の答えを求めることはしなかった。二人とも、それぞれがそれぞれの立場から、レイゼルトやウージュを捕える石人世界の秘密の傍にいてることを感じていた。

――秘密が暴かれたら、城は終わるんじゃないだろうか。王族として、それに関わるのは許されないんじゃないだろうか。

琥珀のおはじきがテーブルを横切って、彼の手元に滑り込んできた。ブレイヤールはおはじきをつまみあげ、黄緑の琥珀に封じられた小さな虫を見つめる。その向こうで、ウージュが大きな空色の瞳をこちらに向けていた。

翌日、ブレイヤールは黄緑の城へと発った。新しい黄緑王の即位式が終わり、改めて招かれたのだ。新しい王の誕生とはいえ、城は喜びに湧きたってはいない。トエトリア王女の話はまだ分からず、長きにわたって神殿を治めていた大巫女の代替わりとで、城民は心から祝う気持ちになれないでいる。王城で開かれた晩餐の席は、暖かな喜びと穏やかな悲しみ、そして不安の苦みが混ざり合っていた。

黄緑の王となったルイクームが王座からトエトリアを探索し、城内に見出すことができなかったことで、城民達のブレイヤールへの疑いは晴れていた。ルイクームは自ら広間の隅っこでぼんやりしていたブレイヤールのもとへ足を運び、改めてそれを告げる。ブレイヤールは彼女が立ち去るのを見届けると、再び席に腰を下ろした。彼は再び視線を床に落とす。白城と同じくらいに馴染み深かったこの城も、ずいぶん居心地が悪くなってしまった。

黄緑王の即位で、トエトリアは貴族の地位となっていた。新たな住居となる館も決められ、そ

こには責任を取って辞職した王室長官や騎士長、左大臣達がトエトリアの召使いとして、彼女の帰りを待っているらしい。守りの剣を持って姿を消した王衛は、神殿騎士に追われる身となっていた。しかし、守りの剣がトエトリアを見つけ出してくれるかもしれないという淡い期待が、王女の安否を気遣う人々の中にあるのも事実だ。

耳に、輝く水面を思わせる、静かな豎琴の音色が戻ってきた。バルコニーで神官達が奏でている。石人音楽の根幹をなすその旋律は、城の中を立ち昇る水を表現しているという。時々聞こえるポワンポワンという優しい太鼓の音は、城内の泉に沸き立つ水の波紋だ。

「ブレイヤール様。紫城の話は、すでにお聞きですか」

灰城の大使がブレイヤールの姿を見つけて会釈する。ブレイヤールは慌てて立ち上がった。「今晚、簡単にですが、話を聞いたところです。知らせを受けて古都の館から紫の末裔が、調べに出たとか」

「これまでにない大規模な崩壊があったそうですね。いずれ十一国の城民らに周知するにしても、あまりにショックな出来事でしょう。不滅と思われていた城の中枢が沈んだのですから」

「そのようなお話……」

神経質になっているブレイヤールは、周りを見回した。他の石人達は近くにいない。

「今夜は誰も聞きたくないでしょう。私も、城を蘇えらせたばかりです」

「灰王は、白の王族の代表として、あなた様もご覧になるべきとお考えです」

大使は微笑む。相手の物言いに違和感を覚え、ブレイヤールは少し考えた。

「あの、もしかして他の十国の王達は見に行くことになってるんですか。僕、仲間外れにされます？」

「やはりお聞きになっておられませんでしたか。あなた様には、今の白城を空けるべきではないという考えもあるのです。承知いたしました。後日、白城に正式に使いを送らせていただきます」

大使は再び会釈をして、黄緑の王のもとへ去る。

ブレイヤールは一人眉をひそめた。紫城はかつてレイゼルトに滅ぼされたが、その城がもう一度滅びたとはどういうことか。紫城の崩壊とともに失われるものは何なのだろうか。逆にそこから得られるものもあるのだろうか。不意に胸が熱くなり、ブレイヤールはぷいと踵を返してひとけのない廊下へ出た。

複雑に入り組んだ廊下でも迷うことはない。魔法の勉強のため、先代の黄緑王に招かれて、小さい頃からずっと黄緑の城で暮らしていたのだ。要所要所に立つ明かりを持った城の案内役も、ブレイヤールをわざわざ呼び止めたりしない。

広間を離れるにつれて、城の静寂は濃くなる。自分の足音だけが響く暗い回廊が続き、星明りの注ぐ渡り廊下へ出る。彼は一人にはなれなかった。囁くような豎琴の音が、柱の向こうから漏れ聞こえてくる。

回廊の床に長い影が伸びている。夜風に身を任せながら水の旋律を奏でるのは、一人の老神官だ。悲しげな旋律に心を打たれ、彼は静かに神官の下へ近づいた。老神官は白王に向いて、軽く会釈をする。

「新しい大巫女様と、黄緑王の誕生、なにより白城の復活は喜ばしいことです。しかしトエトリア様はいまだ見つからず、人間との戦闘で命を落とした者も少なからずおります」

老神官は再び吊いの旋律へ戻る。ブレイヤールはその隣に立ち、音色に耳を傾けた。広間で聞いた旋律より、さらに単調な調べだ。目を閉じると、自身の意識が旋律とともに石壁に染み、基礎石を透過して中枢に延々とかだますかのようなイメージがよぎる。

「この旋律は、初代大巫女様によって初めて奏でられたと伝えられます」

豎琴をかき鳴らしながら、老神官は呟いた。ブレイヤールはまぶたを開く。

「その由来は初めて耳にします。水の旋律は、城の中枢で聞こえる音の現れだと」

「音楽にはあまりお詳しくないようだ。いずれにしても、石人の歴史は古くなってしまいました。城を建てた最初の王達の記憶ですら、城においては薄れ、いまや神殿の奥深くにしか残されておられません。最も古い旋律をお聞かせしましょう。石人達が自らの名を求め、この地を放浪していた頃、ともにあった音を」

曲調はさらに単調なものへ変わっていく。一音の長短に過ぎない旋律は、旋律と言えるのだろうか。中枢にこだまする音色のイメージは、水が水に溶けるように消え失せた。ブレイヤールは太古の大地に思いを馳せる。心と脳裏に訪れたのは、いつか見た夢の光景だった。予言者が見た平原はすでに人影ひとつなく、光の霧が漂っている。それは石人世界の大気だ。魔力と交われれば命を持った幻影が生まれる。幻影の胎内で血液の代わりに流れるのは霧。幻影が死ねば、霧は露を結んで大地に還る。形は違えど、この地に満ちる生命の、営みの音（ね）は変わらない。

旋律が失せても、ブレイヤールはすぐには気が付かなかった。それくらい音色は微かで、世界に溶け込んでいた。老神官は微笑む。神殿では決して許されない表情がある。

「あなたはもしかして」

ブレイヤールは息を殺して尋ねる。

「九竜神官のお一人ではございませんか」

老神官は弦を弾く。白王の問いかけは弾き返された。

「あなたが王となられる日を、お待ち申し上げます。あなたの城には、光を求め闇に向かって進む者達と、闇の中、光に助けられた者達が同居している。彼らを送り出すための、あるいは導くための時間は、すでに動きはじめております。時を無駄にされないよう」

神官は背を向けて、楽の音に集中する。ブレイヤールは数歩後ずさり、静かにその場を離れた。

「神殿とは、まこと侵しがたいもの」

大分歩いた後に、彼は暗闇の廊下で呟いた。神殿は石人達を治めるだけでなく、初代大巫女から続く気の遠くなるような時間と、その中で生まれた多くの秘密もまた、含み抱える存在なのかもしれない。書物に記されることなく忘れ去られた記憶すら、神殿を満たす空気や慣習や旋律として、人知れず遺されている。うわさされる大巫女と九竜神官の確執や城を建てた初代十二王と神殿の争いなど、その存在に飲まれてしまえば些細な記憶の一つ二つだ。白王として即位すれば、彼もまたその中に飲まれてしまうのだろう。

ブレイヤールはきつく拳を握る。瞬間、胸を絞る畏敬と焦燥が駆け抜け、後には冷たい決意だ

けが残った。神殿を離れ城を建てると決めた十二王達も、似たような思いに駆られていたのかもしれない。王であると同時に魔法使いでもある者は、神殿が沈む古き時代の深みから飛翔し、今一度、この世界の姿と石人達の営みの様式を、見極め直さねばならないのかもしれない。

「白王様、お願いがあります。助けてください」

ブレイヤールが白城の大門に帰りついてすぐ、ルガデル口とグルザリオがアークラントの王女を連れて迎えに現れた。王女は今にも泣き出しそうな顔をして、おまけに真っ青になっている。「予言者様は確かに父の剣を取り戻して帰ってくださいました。それで皆は、私の夫として彼がふさわしいと考えているのです」

そんな考えには死んでも従いたくない、認めない。口にした言葉以上に、王女の本音がはっきり聞こえてくるようだ。城に帰りついてほっとするつもりでいたブレイヤールは、自室で疲れを癒す前に、この厄介な問題を片づけなければならなくなってしまう。

「こんなものですよ。一国一城の主ともなると」

グルザリオは同情しながらも、ブレイヤールを王女の方へ押し出した。

少なくともアークラントでは、国を動かすのはあくまで男でないとだめらしい。王族が王女一人なら、その夫となる人物がそれに当たる。そうでなくとも、元来大人しい性格の上に、王の娘として従順を第一とする教育を施されてきた王女は、人を率いるには物足りないと考えられているのかもしれない。

「剣を取り戻したからって英雄に祭り上げられては、予言者殿も迷惑するだろうに」

疲れて頭の動かないブレイヤールは、思ったことをそのまま漏らす。王女はそれに勇気づけられ、大きく何度もうなずいた。

「予言者殿は自室にこもられたきり、なんの音沙汰もないそうで。水は飲んでいるので、生きてはおるんでしょう」

ルガデル口も困惑気味だ。石人達の指揮だけでも大変なのに人間達にまで手を焼こうとは、彼も予想していなかったようだ。アークラントの人々は、それくらいの熱狂的興奮状態にある。王女が助けを求めてわざわざ石人のところまで来たということは、彼女の言葉に耳を貸す人間がないということだ。これはかなり可哀そうなのかもしれない。予言者の方も周りがそんな状態では、下手に姿を見せられないだろう。

「アークラントは、次に進むべき道を早く示さないといけないな……」

「えっ！ それでしたら、すでに」

ブレイヤールの呟きに、王女はすぐさま答える。驚いて彼女を見返すと、相手は下を向いておらずおずと胸の前で手を合わせた。

「地読みの者達に、エイナ峡谷以外の道を探すようお願いしてきました。峡谷は、石人の皆様が封じておしまいになったのでしょう。だったら、別の道を探さねば、私達は故郷に帰れません」

「そのことを皆に知らせてあげましたか？」

「その、魔術師のザーサ翁が、見つかるまでは伏せておいたほうがよいのではと」

「私は話したほうが良いような気がします。でないとトゥリーバ殿は部屋から出てこられないし

、あなたも落ち着かないでしょう」

「は、はい。申し訳ありません。もう一度ザーサと相談してみます」

王女は胸に手を当てて律儀にお辞儀をする。そして小走りに去った。見送ったグルザリオは腕を組み、ルガデル口はじっとブレイヤールを見つめる。

「何？」

ブレイヤールは二人の視線に怯む。グルザリオが答えた。

「もう少し、話し方を考えましょう、ってことです。萎縮させてどうするんですか。耳まで真っ赤になってたじゃないですか。可哀そうに」

「そんなに怖がらせたかな」

「人間達のことを石人が口出しするのもまずいですな。口出しするにしても、言い方を工夫したがるのかと」

「そんなにまずい言い方だったかな……」

どうにもアークラントとの付き合い方は難しい。落ち着かなくなってもうその場から逃げようとしたブレイヤールは、別の声に呼び止められた。

「王様！ お帰りなさい！」

見上げると、門の上からキゲイが身を乗り出している。ブレイヤールは、王女が地読みの民に道を探すよう頼んだことを思い出す。彼は口うるさい家臣二人を残して、階段を駆け上がった。

「僕、明日、里の皆と平原に帰るんだ。王女様が峡谷と違う帰り道を見つけて欲しいって」

息を切らせて階段に倒れこんだブレイヤールに、キゲイは屈みこんでそう告げる。

「聞いた。さっき聞いた……」

ブレイヤールは立ち上がり、手すりにぐったりともたれる。息が続かないようなので、キゲイもそれ以上は何も言わず、のんびりと日向ぼっこを続けた。思えば最初に白城へ来てから、二か月近くになる。目の前の荒野は、今では一面の草原に変わっていた。

「君は、ずいぶん色んな人を案内してくれたんじゃないかな」

ようやく口をきけるようになったブレイヤールの最初の言葉は、唐突だった。それはキゲイにもちゃんと通じて、彼は不満げに口をとがらす。

「東の長にお使いを頼まれて、歩いていただけだったんです。最初は。そうしたら、いろんな人や物が勝手に近づいてきただけなんだ。時々、変なものにも追いかけられたし」

「それでもまたここに戻ってこれたってことは、石人世界と相性いいのかもね」

「……似たようなことを、前にも誰かに言われた気がする。それより、こっちの幽霊が触った腕。魔法の火傷をしてから、普通の人には見えないものが見えるようになったんですけど。邪妖精だっけ。兄ちゃんや姉ちゃんは何にも見えないって、変人扱いされた……」

「変人というより、普通になったというべきだ。今まで見えてなかったものが、見えるようになったんだ。それだけさ」

「……石人に相談した僕がバカでした。後で長に話して、人間の魔法使いに見てもらいます……」

うなだれるキゲイの隣で、ブレイヤールは空を見上げる。来月には神殿で、即位の儀を行う予

定になっていた。それは彼自身、自分が生きている間に叶うかどうかと当てもなく夢見ていたことだ。この二か月は、彼の人生において最も貴重なものとなるだろう。そしてこれからは、それぞれがそれぞれの道を歩むことになる。

「そうだ。王様、これ返します」

キゲイは懐から地図を取り出し、ブレイヤールに手渡す。裏には銀の鏡の文様が残る、キゲイが少しずつ書き加えていったアークラントの地図だ。

「空から見たよ。ここの丘も、村も。首都は、ここだったのか」

ブレイヤールは感慨深げに地図を指でたどる。その指が、首都の文字の上で止まった。

「これキゲイの字じゃないみたいだけど……」

「古都でレイゼルトに見せたら、首都はもう少し東だって、勝手に直された」

「こだわりがあるんだな」

「あいつ、アークラント人よりアークラントに詳しいと思います。きっと」

レイゼルトは古都で別れた後、どこへ姿を消したのだろう。キゲイには、レイゼルトの石人に対する思いは分からない。しかし彼がアークラントを守ろうとしていた気持ちは、本物だと知っている。それは悲しいくらいに真摯な願いだった。恐らくとても大切な思い出だったであろう、彼とトルナクの間を、アークラント人でさえない自分に話してくれたのはなぜだろう。キゲイは何かしら、その思いに報いたかった。ならばできることは一つだ。なんとしてでも、アークラントが帰る道を探し出さねばならない。

翌日、キゲイは決意も新たに、地読み士達とともに森の境界石を超える。そのとき、彼はふと思いついて、近くの木によじ登りはじめた。姉や兄の叱りつける声が聞こえたが、そんなのはお構いなしだ。あの巨大な白城が、タバッサから全く見えなかったのを思い出したのだ。出来る限り高くまで登ったキゲイは、枝葉の隙間から南を望む。

何も無い。城があるはずの方向は、空だけだ。そして雲が流れているだけだ。下を見渡せば、境界石の頭が白く点々と、森に線を引いている。境界石の列は、ただの石の柱の列ではない。綺麗に人間の世界と石人の世界を切り分けていたのだ。

キゲイはその事実が大なる納得と一抹の寂しさを感じ、ひとしきり南の空を眺める。そして木から降りたところで、待ち受けていた東の長にたっぴりと叱られた。

地読み士達は黙々と境界の森を抜ける。その先には広大な平原が広がっていた。彼方の地平には、オロ山脈の峰が青くうっすらと横たわっている。

アークラントの物語はここで終わる。そして次の王国が、歴史に刻まれる瞬間を待っていた。新たなる国の民は、新たなる王とともに人間世界の果てを越えて帰ってくるだろう。一一東の蛇は己の毒に倒れ、西の稲妻は光に消える。英雄の地に光あり。それは人の世のものにあらず。世の外より黄昏に死に、暁に蘇る。

夢見の下に伏せられていた予言の言葉は再び継ぎ直され、人々を導くだろう。

石人達の物語は、いまだ終わりを迎えない。いつ始まったか定かでないこの物語は、全ての石人が属す物語と、闇に囚われた者達の明けない物語が、決して交わることなく続いていくのだ。



## Stone Kingdom ～石人の物語～

<http://p.booklog.jp/book/42103>

著者：いま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ima3w/profile>

著者サイト：<http://sankai.client.jp/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42103>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42103>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.